

二松學舍專門學校教授  
東洋大學教授 文學士

森本治吉編著

高等國文文學要講

日本文化振興會



語言國文學要講

森本治吉編著



## 序

森本治吉氏の編著なる本書が世に出ることを御祝ひします。この私の祝意のうちには、いろ／＼の意味がこもつてゐます。本書が、かういふ受験準備書としては類例のない權威のある良心的著述であり、たゞに中等教員や高等教員の文檢國語科受験の各位のみならず、廣く一般國語國文學の高級常諺書として、國漢科關係者の必讀必携の書であるといふことも勿論その祝意中の重要なものであります。が、それよりも一層眞實に御祝の氣持を感じしめるものは、本書の成立が師弟の情誼の結實と見られる點です。師とは本書の著者森本治吉氏で、弟とは本書の發行者たる大塚軍三君であります。著者と出版者とが師弟關係にあるといふことだけでもあまり多く例がありさうには思はれませんが、本書の成立に見られるやうな著者出版者の關係の如きは、絶えて無くしてわづかに存するものであらうと思ひます。

森本氏は二松學舍専門學校の教授をして居られ、大塚君は二松學舍専門學校夜間部の第一回卒業生であります。これだけでも御兩人の間に師弟關係が存することになるのですが、かういふありふれた關係だけではなく、昭和六年春大塚君が二松専門學校卒業の際、森本教授は大塚君を出版書肆中興館の編輯員に推薦し、當時就職難の時代に、大塚君をして一日のむだな焦慮もさせず職業生活に入らしめ

たのであります。大塚君亦よくその師の推挽にそむくことなく、その職に勵精されました。既に二松専門校在學中に文檢の國語科をパスした君は、中興館ではたきながら、文檢の漢文科をも受験合格し、國漢兩科の中等教員資格を得られたのですが、出版界に入つた初因縁を捨てず、これを以て身を立てることに決心して、この度中興館を圓滿退職し、獨立、出版業に従事することとなりました。その處女出版のプランの成果が本書なのです。六年前、大塚君の學校卒業の際就職につき斡旋せられた森本教授が、今日同君の出版業者として獨立されたその第一出版物として、またくかういふ深切な御世話をされたといふこと、これは今日の世にさうありふれた事ではありませんまい。私は、本書が學術的に立派な本であると共に、道徳的な貴い成立史を藏してゐることをしみじみ感じて、本書の世に出ることを心から悦ぶものです。

どうか森本教授が末長く大塚君を指導せられ、大塚君はその指導を空しくせず業務に勉勵されて、將來は、有益な書物を續々出版せられる大出版業者となられるやう切に祝福申す次第です。

昭和十二年十月某日

## 序

どうした因縁があるのか、私は、無試験検定のとれてない専門学校の三校に國語を講じ、その或るものは六年がかりで目的を達し、或るものは目下奮闘中である。かう云ふ學校の準備に當り、何う云ふ問題が出題されるかに就いて、文部省の教員検定試験は一つの有力な目やすとなる。故に、私は、過去十數年間の検定問題は自分が受験する氣になつて、幾回となく繰返して調査した。

又、此の種の學校の學生たちは、萬一うまくゆかなかつた時の爲に、自分で検定試験を受験する人も、なかなか多い。さうした場合には直接間接の檢討指導にあづかつた。

斯ういふ生活が、十年ほど續いてゐる。その間、個人的に言へば、某受験雜誌に依頼を受けて文學史の連載物等を執筆したり、肉身に受験する者が出たりした爲、一層、文檢及び文檢の問題は身に親しい心地に堪へない。

大塚軍三君は、不知火筑紫の島の南端鹿兒島の出身である。上記の専門學校がまだ檢定のとれない内に入學卒業した一人だが、在學中國語の檢定に合格し、卒業後、中興館編輯部に勤務中、漢文の檢定をも得た。此の春、六年間勤務した書肆から獨立するに當り、文檢の参考書を出す案を携へて、私

の助力を求められた。種々事情を聴くにつれて、此の書を出す事は同君の現在にとり絶對に必要である事が分つた。人一人仆れるか、生きるか、の境であれば止むを得ないと思つて、前約の仕事をしなくつて、出版を引き受けた。

もとより、短時日——初の豫定では三箇月——で、私一人の執筆で、間にあふ筈もない。で、先輩知友の方數氏、又、知友の方の私の直接存知しない二、三氏にも加つて頂いて、各専門とされる事項を執筆して頂き、その原稿を拜見して、所要の箇所に削除加筆させて頂き、私自身は、國文國語兩部の各時代に亘つて二百數十枚の筆を執つて成つたのが、本書である。唯、全體の統一上、又御執筆の方々のうち或は御勤務の都合上或は御一身の事情から氏名を明かにされ難い方があつたりする爲、私自身の名に於て出版し、責任を私が負ふ事に、させて頂いたのである。本書の内容が複雑に各種の問題にわたつてゐるにかかはらず問題の解説が實にゆきとどいてゐるのは、各専門の方々の執筆にかかるとして、此の點、大いなる本書の特色であり、各位に篤く御禮申す次第である。

此の話が起つてからすぐの事、二三の知人から、「さう云ふ受験ものなど書くのは、あなたの將來の爲、よくないのではないか」と、忠告を受けた。これは、受験參考書に對する從來一般の觀念をよく現した言葉である。併しながら私は、檢定試験といふものは、根本的に言つてもつと重大視すべきも



の、と考へる。國家試験の權威、といった理論めいた立場からもさうだし、それより、之を受ける人の氣持や態度が、實に眞剣で、その境遇は大方さし迫つた立場にある、何としてもこの人達の事をもつと重大に考へる要がある。然るに、之に對する國語國文の所謂「學界」「學者」の態度は、一般的に言つて冷淡である。従つて、参考書の如きも一流の一流といった人達は、此の種の用書を書く事を、避けてゐるといふのが、實狀である。良き種が無くて、どうして良き實が結べよう。狭くは中等國語教育の爲に、廣くは國文國語學の全國的水準を高める爲に、此の弊風は是非とも打破して、眞に勝れた學者が喜んで筆を執る風習を是非とも樹立す可きである。筆者もとより不敏である。が、若し此の風潮を作るに些少の捨石ともなり得ば、無理解な非難の如き、敢て恐るべきではない。——これが、知人の忠告に答へた私の趣旨である。

さうして、受験準備に當つて、私の經驗上最も困難だつたのは、設問的事項(國文學史、國文法、國語學史、國語學史の一部分)であつた。一體、試験檢定にしる、無試験檢定にしる、又一般の高等及び専門學校の國語の問題にしる、その範圍は、(一) 解釋と、(二) 設問的事項の二種類きり無い。この内、(一) は、受験用でない註釋書が、極めて優秀な形で出てゐて、決して参考書に苦心しない。之に反し、(二) は、ほとほと困却する。何が良い参考書は無いかと、學生や受験者から尋ねられると、言句につまつた。受験者各位も年々最も苦しまれるのは、この點であらうと、考へる。これはよほど以前から、氣がついてゐた所である。だ

から、今度の話が起るや、少くとも著者自身自信の持てるものを自ら著して、薦むるよりほかに無いといふ平素の持論を實行する好機だと考へた。さうしてこれは、前述の如く決して等閑視さるべき事業でも、片手間にやれるやうな仕事でもない。さう考へるのは考へる方の誤であつて、これらの受験者即ち讀者の人々が、全國に廣がつて次代の中堅國民を作る事を思へば、書齋裡に新研究を開拓するのに劣らぬ重大事だと思ふ。

私は、凡そ斯う云ふ考へから、此の仕事に乗出し、爾來約六箇月、十數年ぶりの大暑の中をも、執筆に、整理に、校正に、瘦身を鞭うつて努めに努めた。最後にたうとう腸を壊し、神経痛を再發させて寢こんでしまつた。幸に、この事業の重大さを理解し、共鳴して下さつた先輩、知友の廣大なる御後援によつて、思ひがけなく早く此の複雑な書籍が完成した。歡喜譬ふるものもない。さうして校了になんなんとして、その實物を見るに、國文部も國語部も説の斬新なる事、所説が巧妙に中心を擲んでゐる事は、筆者が問題をあり餘る力を以て理解し盡して書かれてゐるせゐであつて、所謂「受験物」に一頭地を抜くものがある。のみならず、その所題の廣範でよく、國語國文學界の主要問題を網羅してゐる點よりして、ひとり檢定のみならず、専門學校在學の學生諸君が國語國文の參考書として用ゐて充分なるの感を覺える。これは、全く勘定にいらてなかつた結果であつた。さうして、この方面に新たな進路を見出して、學生各位を通して、亦、學界の常識（これは高い意味での國語常識にほかなら

ぬのだが）を押し進め得たならば、文字どほり望外のしあはせである。

此の本の原稿執筆中途に勃發した日支事變は、暗澹として歸結を計り難い。而して、國文學徒としては斯うした著述に精勵する事も即ち、國を憂ひ社會に報いる所以であるにちがひない。唯今、山東省德州城陷落の勝報を大歡喜を以て聞きつつ、序文の筆を擱くものである。

末筆ながら、序文を賜つた橋純一先生、題簽を染筆された阪口玄章氏の厚恩を深謝致し度い。

昭和十二年十月三日

森 本 治 吉

## 凡例

一、本書は、從來提出された高等教員・中等教員・高等文官・高等神職等の國家試験、それから、帝國大學・文理科大學の入學試験——これ等の問題中、所謂「設問」の部を詳密に解説したものであります。即ち、文學概論・國文學史・國文法・國語學概論・國語學史・言語學の諸問題が、説かれてゐます。

一、併し、右の問題に無い未提出問題で必要と思はれるものを若干補充しました。一方、既出問題の中、書名・人名・事項名等で参考書を使へば、容易に探せるものだけは除去しました。それらは、日本文學大辭典（藤村作博士）、日本文學書誌（石山徹郎氏）、國書解題（佐村八郎氏）、國學者傳記集成、其の他國文學史・國語學史關係の参考書によつてお求め願ひます。將來機を見て此等は補充する覺悟でゐます。

一、解説の最後に挙げた「文献」は、原則として單行本に限り、雜誌及び季刊出版物の論文は、實際上手に入りにくいので大體省く方針をとりました。

# 高等國文學要講 目次

## 第一編 文學概論

- 一 文學の發生に就いて論ぜよ (高等教員 昭和八年) …… 二
- 二 文學上の自然主義・象徴主義の意義如何 (高等教員 大正十年) …… 四
- 三 文學と道德との關係を説け (高等教員 昭和二年) …… 七
- 四 鑑賞作用と創作作用に就いて述べよ (高等教員 昭和二年) …… 一〇
- 五 校本(校合本)と定本との關係を述べよ (高等教員 昭和八年) …… 三二
- 六 韻文の價値を判斷すべき標準に就いて述べよ (中等教員 大正六年豫備試験) …… 三五
- 七 詩歌のリズムに就いて述べよ (高等教員 大正十四年) …… 三七
- 八 支那文學に於ける韻、西洋文學に於けるライムとは何ぞ (高等教員 大正十年) …… 三八
- 九 叙事詩・抒情詩・劇詩の區別並に其の關係を説明せよ (中等教員 大正七年木試験) …… 三二
- 一〇 抒情詩・叙事詩・戯曲詩の區別如何 (中等教員 明治三十九年豫) …… 三二
- 一一 叙事詩の起原・發達・種類に就いて述べよ (高等教員 大正十四年) …… 三三

## 第二編 國文學史

### 一 總説

- 三 文學史の時代區分法に關する諸説を擧げて之を批評せよ(高等教員 昭和八年)……………二六
  - 三 國文學史の時代區分法に就いて述べよ……………二六
  - 四 明治以前の文學論に用ゐられたる主要なる術語五つを擧げて其の意味を説明せよ(高等教員 昭和四年)……………三三
  - 五 文學と民族性と  
右、文學史の立場より論ぜよ(神職學正試 驗 昭和八年)……………三六
  - 六 尊皇精神を内容とせる我が國の文學に就いて記せ(中等教員 大正七年木)……………四〇
- 
- 七 各時代の文學に現れたる神及び神國の意識に就いて述べよ(高等教員 昭和六年)……………四五
  - 八 紀行文學に就いて略述せよ(中等教員 昭和七年豫)……………四八
  - 九 國文學に於ける韻文の形式を説明せよ(中等教員 大正元年豫)……………五一
  - 一〇 本邦律語詩(韻文)の中特殊なる詩形を有するもの七種を擧げてその詩形を示せ(東京帝大 昭和六年)……………五四
  - 一一 道行文の發達に就いて記せ……………五七
  - 一二 道行文の特色を擧げよ(中等教員 昭和六年豫)……………五七
  - 一三 浦島傳説・羽衣傳説・義經傳説を取扱ひたる文學的作品を擧げ、その作者並びに成

立時代に就いて記せ(中等教員 昭和五年豫)……………	六
曾我傳説に取材せる文學作品を擧げ、その作者及び成立時代に就いて記せ……………	六
古典研究の意義(中等教員 昭和十年豫、作文)……………	六
明治末年以前に於ける外國人の日本文學研究に就いて述べよ(高文外文科 昭和八年)……………	六
國語國文に關する年表・解題・索引の書名を擧げて説明せよ(中等教員 昭和六年本)……………	六
我國に於ける甲冑・裝束及び官職に就きて参考書を示せ(中等教員 大正九年豫)……………	七
官職・服飾・武器に關する参考書を擧げよ(中等教員 大正十二年本)……………	七
<b>二 上古(大和時代)</b>	
上古文學の特色に就いて述べよ……………	七
大和時代文獻中の神話傳説並びに同時代	

目次(國文學史 上古)

文學に現れたる國民性の諸相に就いて述べよ(高文行政科 昭和五年)……………	七
古事記の文學性に就いて述べよ(高文五十 二號科 昭和九年)……………	八
古事記に現れたる國家統一の精神に就いて述べよ(高文行政科 昭和四年)……………	八
古事記は中世及び近世に於ていかに研究されたか……………	八
古事記及び日本書紀に就いて左の間に答へよ……………	八
(イ)文體の比較 (ロ)編纂態度の相違 (ハ)内容を貫く精神 (ニ)各の代表的研究書とその著者(中等教員 昭和十一年本)……………	九
我が神代傳説中日本書紀と古事記との所傳の異なるもの二三を説け(神職學正試驗 昭和四・八・九年)……………	九

七	本居宣長は何故に日本書紀よりも古事記に重きを置きしか(中等教員 昭和四年本)……………	九七
八	祝詞の (1)性質 (2)文體 (3)主なる文獻に就いて述べよ(高文行政科 昭和十二年)……………	九九
九	祝詞に表れたる精神を説明せよ(中等教員 大正十五年本)……………	101
10	祝詞の性質を説明し且其の思想に就いて述べよ(高文行政科 昭和六年本)……………	101
11	祈年祭祝詞の精神に就いて述べよ(高文行政科 昭和八年)……………	103
12	祝詞と宣命とを比較評論せよ(中等教員 大正元年本 高等神職 昭和六年)……………	105
13	風土記に關し左の三項に就いて述べよ (甲)性質特に其の文學性 (乙)現存するもの及それらの撰進時代 (丙)主なる文獻(高文司法科 昭和十一年)……………	108
14	萬葉集の文學的特色に就いて記せ……………	111
15	萬葉集の歌に現れたる主なる精神に就いて述べよ(高文司法科 昭和六年)……………	115
16	萬葉集に現れた國家意識に就いて述べよ(高文行政科 昭和四年)……………	118
17	萬葉集に於ける異國的精神に就いて述べよ(高文司法科 昭和八年)……………	121
18	天皇御遊雷岳之時柿本朝臣人麿作歌 大君は神にしませば天雲の雷の上に いほりせるかも(萬葉集) 右の歌に現れたる精神に就いて述べよ(高文五十二號科 昭和四年)……………	123
19	萬葉集中の防人の歌に就いて述べよ(高文外交科 昭和七年)……………	125
20	三 中 古(平安時代)	



香 平安朝文學の特質を述べよ(中等教員 明治二十八年)……………二九

三 平安朝文學と漢文學との關係に就きて記せ(中等教員 大正四年木)……………二三

三 平安時代文學に現れたる「物のあはれ」に就いて述べよ(高文外文科 昭和十年)……………二五

三 「物のあはれ」に就きて記せ(東京文理大 昭和八年)……………二五

三 平安時代文學の主なる精神に就いて述べよ(高文外文科 昭和十一年)……………二五

三 平安時代に於ける散丈文學の發達を概説せよ(中等教員 昭和十一年木)……………二九

三 土佐日記と古今集の序とを比較評論せよ(中等教員 明治三十年木)……………二四

三 源氏物語の構想を述べよ(高等教員 昭和四年)……………二四

三 源氏物語の後世の文學に及ぼしたる影響

目次(國文學史 中古)

如何(中等教員 明治三十三年豫)……………二八

三 源氏物語と枕草子とに就いて比較評論せよ(中等教員 大正八年木・大正十一年木)……………二五

三 源氏物語の文章の特色を述べよ(中等教員 大正十四年木)……………二四

三 源氏物語と枕草子との文章の特質につきて述べよ(高等神職 昭和九年)……………二四

三 平安時代の日記文學を概説せよ(東京文理大 昭和十一年)……………二五

三 平安朝の女流日記文學四種を擧げて簡明に解説せよ(中等教員 昭和三年木)……………二五

三 大鏡の精神に就いて述べよ(高文五十二號科 昭和八年)……………二六

三 大鏡著述の主なる動機に就いて記せ……………二六

三 大鏡に現れたる貴族の生活を概説せよ(中等教員 大正六年木)……………二六

一三

カ	大鏡と榮華物語とを比較論評せよ……………	一六七
ク	古今集の歌風の特徴に就いて述べよ……………	一七〇
ク	八代集の書名を撰集の年代順に列記せよ (中等教員 大正九年木)……………	一七〇
カ	古今集より新古今集までの和歌の展開を 略述せよ(中等教員 大正十五年木)……………	一七〇
ク	古今集と新古今集とを比較論評せよ (高等教員 大正十年)……………	一七四
ク	萬葉集・古今集・新古今集の特徴如何……………	一七四
ク	古今集・新古今集の諸本を擧げて簡単に 説明せよ(高等教員 昭和六年)……………	一七七
ク	歌合の起原及び性質を説明せよ(高等教員 昭和六年)……………	一八二
ク	歌合に就いて略述せよ(中等教員 昭和八年)……………	一八二
ク	今様歌の發達に就いて記せ(高等教員 大正 十一年)……………	一八五

#### 四 中世(鎌倉・室町時代)

カ	鎌倉時代文學の特質に就いて述べよ……………	一九九
ク	中世文學に於ける佛教思想に就いて述べ よ(高等教員 昭和八年)……………	一九一
ク	軍記物語の特質に就いて述べよ(高等神職 昭和四年)……………	一九四
ク	軍記物語に就きて知れる所を記せ(東京文 理大 昭和九年)……………	一九六
ク	軍記物語の發達に就いて述べよ……………	一九六
ク	歴史物語と軍記物語とを比較論評せよ (中等教員 昭和九年徳)……………	一九九
ク	歴史物語と軍記物語との文學としての特 徴を記せ(東京帝大 昭和九年)……………	二〇一
ク	文學上より平家物語を評論せよ(中等教員 大正十年木)……………	二〇三

全	平家物語と太平記とを比較評論せよ(中等教員 大正十四年本) .....	三〇八
全	鎌倉時代文學に表れたる武士的精神に就いて述べよ(高文行政科 昭和七年) .....	三〇八
全	軍記物語に表れたる武士精神に就いて述べよ(高文五十二課科 昭和五年) .....	三〇八
全	平家物語に現れたる武士の精神に就きて述べよ(中等教員 昭和二年本) .....	三〇八
全	室町時代の文學を種類によりて分類し、其の各の特質を述べよ(中等教員 昭和十年豫) .....	三二二
全	室町時代の文學の特質を記せ(中等教員 大正十一年本) .....	三二二
全	徒然草の思想に就いて述べよ(高文司法科 昭和十年) .....	三二六
全	左の文の意義を實例を擧げ敷衍して説明せよ	

全	徒然草はつれづれなるまゝにの第一段から八歳になつた時佛に就いて父と問答した最後の段に至るまで、その説く所多方面に涉つてゐる。その間に戀愛を説き解脱を説いて、平安時代の情趣主義と室町時代の主情主義否定との間に一見矛盾があるやうであるが、思ふに彼は長明や西行などと違つて解脱の境地から再び人間生活に立歸つて人生を見てゐるものゝやうである。さうして短い隨筆の連續する中に統一した作者の個性を眺める事は難くなく、哲人としての兼好の面目の躍動してゐるのを覺える(中等教員 昭和三年豫) .....	三二九
---	---	-----

目次(國文學史 中世)

べきか(中等教員 大正七年豫) .....	三三	一〇〇 お伽草子の性質を説明せよ(中等教員 昭和七年木) .....	三三六
兼好の文藝觀を評論せよ(中等教員 昭和十一年木、作文) .....	三四	一〇一 藤原定家の文學史的地位に就きて記せ(中等教員 昭和六年木) .....	三四〇
天皇正統記の文學性を論ぜよ(高文五十二號 科 昭和十年) .....	三七	一〇二 和歌と連歌との關係に就いて述べよ(中等教員 昭和四年豫) .....	三四三
天皇正統記に「大日本は神國なり」と云へる意義を述べよ(高文司法科 昭和四年) .....	三九	一〇三 南北朝時代の和歌に就いて述べよ(中等教員 昭和八年豫) .....	三四五
大日本は神國なり。天祖始めて基を開き日神永く統を傳へ給ふ。我國のみ此事あり。異朝には其類なし。此故に神國といふなり。(神皇正統記)		一〇四 能樂の藝術としての性質に就いて述べよ(中等教員 大正十五年木) .....	三五一
右の文を解釋し、更に敷衍して著者の思想を説明せよ(高文行政科 昭和九年) .....	三〇	一〇五 謠曲を其の資料によりて分類せよ(高等教員 大正十一年) .....	三五四
源義經を主材とせる文學的作物に就きて述べよ(高等教員 大正十年) .....	三三	一〇六 謠曲の神道的要素に就いて述べよ(高等教員 大正十四年) .....	三五五
義經記と曾我物語とを比較評論せよ			

## 五 近世（江戸時代）

- 一〇七 江戸時代文學の特質を述べよ（中等教員 明治二十八年）……………二五九
- 一〇八 徳川時代に於ける小説の沿革を説き且重要なる書籍と作者とを示せ（中等教員 明治三十五年本）……………二六一
- 一〇九 江戸時代文學の主なる文學精神に就いて述べよ（高文行政科 昭和十年）……………二六五
- 一一〇 近松門左衛門の藝の説と、本居宣長の物語の説とに就いて述べよ（中等教員 大正十二年本）……………二六八
- 一一一 徳川文學に表れたる武家精神に就いて述べよ（中等教員 大正十四年本）……………二七〇
- 一一二 近世文學に見ゆる義理人情の葛藤とは何ぞや、例を擧げて説明せよ（高文司法科 昭和八年本）……………二七〇

目次（國文學史 近世）

和五年）……………二七三

一一三 近世文學中の町人生活に就いて述べよ

（高文五十二號科 昭和六年）……………二七四

三 徳川時代の主要なる歌論に就いて述べよ

(高等教員 大正十一年) ..... 二九七

三三 江戸時代に於ける歌論の中著しき數説を

擧げよ(中等教員 昭和四年木) ..... 二九七

三四 江戸時代の歌論とその時代の歌との關係

を述べよ(中等教員 大正十三年木) ..... 二九七

三五 縣居派と桂園派との歌論を比較評論せよ

(中等教員 昭和九年木) ..... 三〇五

三六 俳諧の附合の變遷を述べよ(高等教員 昭和

二年) ..... 三二一

三七 貞門・談林・蕉風の特色如何(高等教員 大正

十一年) ..... 三三四

三八 芭蕉と蕪村とを比較評論せよ ..... 三三八

三九 左に表れたる連句の法式を述べ、特に各

句の附合を説明せよ

春日晩望

日は落ちて増かとぞ見ゆる春の水 几童

梅おぼろなる野はづれの家 萬客

田螺賣ル童が翁焼火して 白砧

小瓶の酒の雫つれなき 龜郷

北風に秋を催す夜半の月 九湖

蚯蚓音を鳴く門のせゝらぎ 竹裡

(續明鳥集)

(高等教員 昭和四年) ..... 三三〇

三〇 左に就きて「さび」の意義を説明せよ

野明曰 句のさびはいかなる物にや。

去來曰 さびは句の色也。閑寂なる句を

いふにあらず。たとへば老人の

甲冑を帶し戰場に働き、錦繡を

かざり御宴に侍りても、老の姿

あるが如し。賑なる句にも、靜

なる句にもあるものなり。たと

へば、

花守や白きかしらをつきあはせ

先師曰 さび色よくあらはれたり

(去來抄)

(中等教員 昭和四年豫) …………… 三三四

二三 不易・流行の説に就いて述べよ…………… 三三四

二三 俳論に於ける虚實に就いて述べ、且左の

句によりてその意義を説明せよ

糸切れて雲より落つる紙鳶

糸切れて雲となりけり紙鳶

糸切れて雲ともならず紙鳶

(高等教員 昭和六年) …………… 三三六

二三 左の發句の修辭上の技巧を説明せよ

舟となり帆となる風の芭蕉かな

木枯に二日の月の吹き散るか

行く秋や手を擲げたる栗のいが

目次(國文學史 近世)

(中等教員 大正五年本) …………… 三三〇

二四 俳句と川柳との區別如何(中等教員 明治四

十一年本) …………… 三三一

二五 和歌と俳諧との表現上の相違に就いて述

べよ(高等教員 大正十四年) …………… 三三五

二六 誹諧歌と俳諧との別如何(中等教員 明治三

十二年豫) …………… 三三五

二七 淨瑠璃詞章の變遷に就いて述べよ(高等教

員 昭和八年) …………… 三三七

## 六 最近世 明治・大正・現代)

二八 明治文學の特質を述べよ…………… 三四二

二九 明治初年より二十年迄の文學と當時の思

想との交渉に就いて述べべし(高文五十二

號科 昭和七年) …………… 三四三

三〇 小説神髓の明治文學界に及ぼせる影響に

就いて述べよ(高等教員 昭和十年)……………三五六

二四 明治文學に現れたる浪漫精神(高等教員 昭

和六年、作文)……………三四七

二五 明治時代小説に於ける寫實主義の展開

(高等教員 昭和八年、作文)……………三五〇

二六 明治文學に於ける自然主義作品の特質を

述べよ……………三五〇

二七 「五重塔」を評論せよ(高等教員 昭和二年)……………三五三

二八 「たけくらべ」を評論せよ(高等教員 昭和二年)……………三五五

二九 「多情多恨」を評論せよ(高等教員 昭和二年)……………三五八

三〇 「虞美人草」を評論せよ(高等教員 昭和六年)……………三六〇

三一 「行人」を評論せよ(高等教員 昭和六年)……………三六二

三二 「三四郎」を評論せよ(高等教員 昭和六年)……………三六五

三三 明治文學に表れたる愛國精神に就いて述

べよ(高文行政科 昭和四年)……………三六六

三四 明治文學に於ける西洋文學の影響に就い

て述べよ(高文外交科 昭和六年)……………三七二

三五 明治時代の口語文の發達に就きて述べよ

(中等教員 昭和二年木)……………三七三

三六 大正時代文學の特質を述べよ……………三七八

三七 大正時代に於ける口語文の展開に就いて

述べよ……………三八〇

三八 現代口語文の特質に就きて述べよ……………三八〇

三九 現代文(日露戰爭以後)の特徵に就いて述

べよ(中等教員 大正十五年豫)……………三八〇

四〇 口語文の將來に就いて述べよ(高等教員 大

正十四年)……………三八四

四一 現代創作作家(劇・小説)の一作物に就いて

評論せよ(高等教員 大正十一年)……………三九二

四二 現代の主なる作家の文學觀を述べよ……………三九一

四三 最近の文學思潮(高等教員 昭和二年、作文)……………三九三

四四 我が國現代の文學に現れたる思想上の傾



向に就いて述べよ(中等教員 大正九年本)……………三九三

二五 現今國文學界の新傾向に就いて述べよ……………三九六

二六 日本文藝學の提唱を論ず(高等教員 昭和十年、作文)……………三九九

二七 明治・大正時代に於ける新詩の變遷を略

### 第三編 國文法

#### 一 總說

二八 奈良時代と平安時代との語法を比較せよ

(高等教員 大正十四年)……………四一四

二九 萬葉集に現れたる文法と古今集に現れたる文法とに於ける主なる差異に就いて述べよ(中等教員 昭和四年本)……………四二四

三〇 中古文法と現代文法との間に於ける重なる

#### 目次(國文法總說)

述せよ(中等教員 昭和十年本)……………四〇三

三一 アララギ派の寫生の說に就いて述べよ(高等教員 昭和六年、口述)……………四〇五

三二 現代口語歌の成立及び將來に就いて意見を述べよ(高等教員 昭和四年)……………四〇九

る差異に就いて略述せよ(東京文理大 昭和四年)……………四一三

三三 口語の文法と文語の文法との間に存する主なる差異に就いて述べよ(中等教員 昭和三年)……………四二五

三四 西洋文典の日本文法に及ぼしたる影響を略述せよ(中等教員 大正十五年本)……………四三〇

三五 國語の文法と英語の文法との間における

重なる差異につきて説明せよ(東京文理大

昭和五年本)……………四三三

一五 文典と辭書とに於ける單語の取扱法の相

違を述べよ(高等教員 昭和八年)……………四三五

一六 臨時國語調査會假名遺案に伴ふ口語法の

整理に就いて所見を述べよ(高等教員 昭和

二年)……………四三六

一七 發音的假名遣と歴史的假名遣とによりて

口語の動詞の活用に及ぼす異同について

説明せよ(中等教員 昭和五年本)……………四三六

一八 敬語の種類及び用法を古今の國語につきて

説明せよ(高等教員 大正十年)……………四三三

一九 國語に於ける敬語法を説明せよ(中等教員

昭和十一年本)……………四三三

二〇 音便の性質と其の種類とに就いて述べよ

(神學學正試験 昭和五年)……………四三〇

## 二 單語法・文章法

二一 「靜かに」「明かに」「つくづく」と「しみじ

みと」「等の「に」「と」は語尾と見るべきか

助詞と見るべきかに就いて論ぜよ

(高等教員 昭和二年)……………四五三

二二 文法上「靜かに」「釋然と」などの「に」を形

容動詞の活用語尾と觀る說並に「咲きて」「

「見て」などの「て」を完了助動詞「つ」の活用形

と觀る說の可否を論ぜよ(高等教員 昭和四年)……………四五三

二三 酒がすぎだ 書物がほしい

創作がして見たい

右例文中の酒が、書物が、創作がは客語

と見るべきかにつきて論ぜよ

(高等教員 昭和六年)……………四五九

二四 左の諸例によりて「滿つ」といふ語が如何

……………四五九

に活用するかを推定し、且推定の理由を述べよ

潮満てば野島が崎の小百合葉に浪こす

風の吹かぬ日ぞなき

古へを更にかけて思へどもあやく

目にも満つ涙かな

磯の浪耳に満てり

年ごろの願ひの満つ心地して

(東京帝大 昭和三年)……………四六三

一三 過去の助動詞「き」は動詞に如何に結びつ

くか(中等教員 昭和六年豫)……………四六五

一四 左の諸例に於ける「な」の意義と文法上の性質とを説明せよ

質とを説明せよ

(イ)五十七代末の世まで書き置き給ひ

けむおそろしきものなりかしな

(ロ)いざ櫻我も散りなむ一さかりあり

目次(國文法 單語法・文章法)

なば人にうきめ見えなむ

(ハ)夏山になくほととぎす心あらば物

思ふ我に聲なきかせそ

(ニ)これいたづらになし給ふな

(東京帝大 昭和六年)……………四六六

一五 左の場合に於ける品詞轉成の例を示せ

(イ)名詞より動詞に

(ロ)動詞より副詞に

(ハ)名詞より形容詞に

(中等教員 大正元年木)……………四六八

一六 左の品詞轉成の實例、合せて五個を擧げ

よ

(a)動詞の形容詞に轉成したるもの

(b)動詞の名詞に轉成したるもの

(c)形容詞の名詞に轉成したるもの

(東京帝大 昭和九年)……………四六九

一七 次の文中より活用する語を摘出して其の活用を表にて示せ

明るい静かな部屋に坐つて讀書してい

らつしやいます(中等教員 昭和十一年豫)……………四七〇

一八 文語動詞「教ふ」「申す」「論ず」「有り」

の下にそれぞれ助動詞「べし」「る」「さ

す」「まじ」を附けたる正しき語形を列記

せよ(中等教員 昭和十一年豫)……………四七三

一九 左の文章を品詞に區分し、用言の活用表

をつくれ

なんとも言へぬ美しいきれいな花が野

原一面に咲いて居りました(中等教員 昭

和六年豫)……………四七五

二〇 文語及び口語の動詞・形容詞の對照活用

表を作り、文語と口語の活用形に於ける

異同を説明せよ(中等教員 昭和十年豫)……………四七六

二一 文章解剖に就きて意見を述べよ……………四七九

二二 左の文章に就き單文及び複文を指摘し、

且その構造を説明せよ

野分の又の日こそいみじう哀に覺ゆれ

立部透垣などの亂れたるに前栽ども心

苦しげなり大なる木ども倒れ枝など吹

き折られたるが萩女郎花などの上によ

ろぼひはひ伏せるいと思はずなり

(中等教員 昭和二年豫)……………四八三

二三 左の歌につきて文の構成を説明し、歌中

に於ける用言につきて文語・口語兩様の

活用表を作れ

かたちこそみ山がくれのくちきなれ心

は花になさばなりなむ

ひさかたの月の桂も折るばかり家の風

をも吹かせてしがな

〔中等教員 昭和二年豫〕……………四六六

一四 左の歌の係結の關係を説明し、歌中に於

ける用言の活用表を作れ

淡路島通ふ千鳥のなく聲にいくよねぞ

めぬ須磨の關守

ふる雪のみのしろごろもうちきつゝ春

來にけりと驚かれぬる

〔中等教員 昭和三年豫〕……………四六八

一五 左の文中より主語を抽出してその性質を

説明し、又動詞・形容詞及び助動詞の活用

表を作れ

萬のことは月見るにこそ慰むものなれ

或人の月ばかり面白きものはあらじと

言ひしに又一人露こそ哀なれと争ひし

こそをかしけれ〔中等教員 昭和五年豫〕……………四六九

一六 左の文章に於ける主語と述語との成分を

目次〔國文法 單語法・文章法〕

説明し、文中の用言を抽出して活用表を

作れ

文ことばなめき人こそいとどにくけれ

世をなのために書きなしたる詞のにくき

こそさるまじき人のもとにあまりかし

こまりたるもげにわろきことぞ

〔中等教員 昭和七年豫〕……………四九二

一七 左の文章につき主語・述語及び補足語の

成分を説明し、動詞・形容詞・助動詞の

活用表を作れ

秋の月はかぎりなくめでたきものなり

いつとても月はかくこそあれとて思ひ

わかざらん人は無下に心うかるべきこ

となり〔中等教員 昭和九年豫〕……………四九三

一八 君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香

をも知る人ぞ知る

二五

古池やかはづとび込む水の音

右文章法上より解剖せよ(京都帝大 昭和八年)……四九五

二五九 左の文を文章法上より解剖せよ

此比あけくれ御らんずる長恨歌の御繪

亭子院のかゝせ給ひて伊勢貫之によま

せ給へるやまと言の葉をももろこしの

うたをもただそのすぢをぞ枕ごとにせ

させ給ふ(高等教員 昭和八年)……四九七

二六〇 左の文を文章法上より解剖せよ

五月雨の短夜に寢さめをしていかで人

よりさきに聞かんと待たれて夜深くう

ちいでたる時鳥の聲のらうくじうあ

いぎやうづきたるいみじう心あくがれ

せんかたなし(高等教員 昭和十年)……四九六

二六一 左の文章につき主語と述語との成分を説

明し、動詞・形容詞・助動詞の文語・口

語活用對照表を作れ

イ、この人々の深きころざしはこの

海にもおとらざるべし

ロ、牛のたくさんのつてゐる車がいつか

とほりました(中等教員 昭和八年豫)……五〇〇

二〇三 左の文章に就きて文の構成を説明し且つ

用言の活用表(口語のみの)を作れ

呉服屋の手代が大きなふろしぎつつみ

を石地藏の前におろして休みましたが

よほど疲れてゐたものと見えていつの

間にかくつすり寢込んでしまひました

(中等教員 昭和四年豫)……五〇三

二〇四 左の二題を文法上(品詞法・文章法)より

解剖せよ

舟となり帆となる風の芭蕉かな

上も御涙の隙なく流れおはします

(京都帝大 昭和十年)……………五〇五

105 神もうけよ酒過ぎとせし御祓

前出の俳句につき、文法上左の各項に答

へよ

(イ)名詞を抽出し、文に於けるそれら

名詞の格ケイヌを説明せよ

## 第四編 國語學

### 一 國語學概論

106 國語學の近狀に就きて述べよ(東京文理大

昭和十一年)……………五〇八

107 我が國語學上最も進みたる部分と最も遅

れたる部分とに就きて述べよ(東京文理大

昭和八年)……………五〇八

目次(國語學概論)

(ロ)文としての構成上注意すべき點を

記せ(九州帝大 昭和九年)……………五〇六

108 文章法によつて解剖せよ

春の雨高野の山におん兒の得度の日か

や鐘おほく鳴る(京都帝大 昭和七年)……………五〇六

### 學

109 國語學上今後研究すべき重要な問題に

就いて説明せよ(東京文理大 昭和六年)……………五〇九

110 假名遣法の起りたる所以を問ふ

(中等教員 明治三十二年穂)……………五〇九

111 契沖の假名遣意見について論評せよ

(中等教員 昭和八年木)……………五二三

112 釋契沖の假名遣に關する意見を述べよ

二七

(中等教員 大正元年豫) ..... 五三三

三三 假名遣の標準に就いて述べよ(中等教員) ..... 五三三  
大正十五年木)

三三 今日迄に表れたる假名遣を論評せんとするに諸子は如何なる標準を以てせんとするか(高等教員 昭和四年) ..... 五三三

三四 片假名の發達に就いて述べよ(中等教員) ..... 五三〇  
昭和六年木)

三五 平假名の發達に就いて記せ ..... 五三〇

三六 假名國字論とローマ字國字論との得失に就いて論ぜよ(東京文理大 昭和十年) ..... 五二四

三七 我が國に於ける漢字の用法を分類し且説明せよ(高等教員 昭和六年) ..... 五二七

三八 左の四種の文は如何なる文献に用ゐられたるものなるかを示し且漢字使用の異同について述べよ

(イ) 御門能御巫能稱辭竟奉、皇神等能前爾白久、櫛磐間門命、豐磐間門命登、御名者白兵、辭竟奉者、四方能御門爾湯都磐村能如塞坐兵、朝者御門開奉、夕者御門閉奉兵疎夫留物能自下往者下乎守、自上往者上乎守、夜能守日乃守爾守奉故、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久宣

(ロ) 天皇大命爾坐西奏賜久、掛母畏俊飛鳥淨御原宮爾大八洲所知志聖乃天皇命、天下乎治賜比平賜比所思坐久、上下乎齊信和氣先動久靜爾合有爾、禮等樂等一部並且志平久長久可有登隨神母所思坐且、此乃舞乎始賜比造賜比伎、聞食且與天地共爾絕事無久彌繼爾受賜和等

行牟物等之皇太子斯王爾學志、頂令荷且我皇天皇大前爾貢事乎奏

(ハ) 沼名河之底奈流玉求而得之玉可毛



拾而得之玉可毛安多良志吉君之老落惜毛

(二) 四日壬子武衛著常陸國府給佐竹者

權威及境外郎從滿國中然者莫楚忽之義懇

有計策可被加誅罰之由常胤廣常義澄實平

已下宿老之類凝群議先爲度彼輩之存案以

緣者遣上總權介廣常被案内之處太郎義政

者申即可參之由(中等教員 昭和三年本)……………五三一

三九 國語のアクセントに就いて知る所を述べ

よ(中等教員 大正十四年本)……………五三四

三〇 方言の性質を略述せよ(中等教員 明治三十

二年豫)……………五三七

三一 方言研究の必要に就いて述べよ(東京文理

大 昭和七年)……………五三九

三二 方言研究の目的と方法とに就きて述べよ

(中等教員 昭和九年本)……………五四三

三三 日本帝國の領土内に存する各種の言語を

目次(國語學史)

列舉せよ(東京文理大 昭和四年)……………五四四

三四 關東方言と關西方言との相違點を述べよ……………五四六

三五 國語史は何期に分つべきかを示し、且つ

その理由を述べよ(高等教員 昭和四年)……………五四九

三六 江戸時代における國語辭書の重なるもの

に就いて述べよ(中等教員 昭和七年本)……………五五三

三七 徳川時代に現れたる國語上の辭書を擧げ

よ(中等教員 明治三十三年豫)……………五五三

## 二 國語學史

三八 國語學は如何にして發達したか(高等教員

昭和二年)……………五五七

三九 新井白石・富士谷成章・本居春庭の國語學

に寄與したる功績に就いて述べよ

(中等教員 昭和十年本)……………五六〇

四〇 富士谷成章・本居宣長・本居春庭の國語研

二九

究上に於ける事蹟を擧げよ(高等教員 大正

十一年)……………五〇

三三 本居春庭の國語學に就きて論評せよ

(東京文理大 昭和九年)……………五五

三三 富士谷成章と鈴木服との品詞分類を比較

論評せよ(高等教員 昭和十年)……………五六

### 第五編 言語學

三三 東條義門の國語研究上の事蹟を述べよ

(高等教員 大正十年)……………五七

三三 言靈派とは如何。又其の學術上の價值如

何(高等教員 大正十一年)……………五八

三三 通略・延約の説を述べて、其の價值を評

論せよ(高等教員 大正十年)……………五七

三三 言語學上、調節作用とは如何なる意味か……………五六

三三 言語學上、人の言語と鳥獸の聲との相違

點を述べよ(高等教員 昭和六年、口述)……………五六

三三 言語と文字との關係を説明せよ(中等教員

三三 形象文字と音標文字とに就いて説明せよ

(中等教員 大正十二年)……………五六

大正十一年木 神職學正試驗 昭和六年)……………五六

第一編 文學概論

## 一 文學の發生に就いて論ぜよ

文學の發生に就ては、問題は、いかなる理由から、文學といふ文化財は發生したか、といふ點と、いかなる形式でその始は存在したか、といふ二點に結着する。

先づ、文學發生の原因に就ては、諸説紛々今日猶歸一する所を知らない。が、大體二種に分れる。一つは、文學は、人類に藝術を好む美的本能があり、それから發生したと見る説である。而して、美を好むといふのは、廣い意味に於ては、快樂を愛する事の一部である。故に之は快樂説と考へられる。又、之は遊戯的本能にその源を持つとも見られるものである。

而して此の見解は、大體心理學的見地に立つものである。之に對して別な立場は、文學及びその創作は、原始時代に於て一つの實用物又は實用行爲であつた。繪畫・彫刻は、藝術である爲に作られたのではなく、宗教的必要或は日常生活の欲求から作られた。同時に文學は、音楽や舞踏と共にあり、生理的的日常的必要の爲に存在した。又は神話や日本に於ける祝詞の如く宗教的必要から存在するか、傳説話の如く團體の歴史を傳へる爲に存在したものがあつた。故に、文學は、それ自身の制作衝動をもつたなどと考へるのは夢想家すぎる。

之は、社會學的研究や、人類學的考察の説く所である。

而して此の後の立場は、甚だ廣い問題を含む。即ち藝術がその起原を藝術自身に持たないとすれば、それはどこに源を求めるかによつて、幾つにも分裂するからである。斯くて藝術の起原は、異性を誘引する性慾衝動にある、といふ見解が生れる。或は、敵を威嚇する際の誇示的表情や身振がその起原だと見られる。或は自然物や人事に就いて、他の事物の状態や他の行爲を眞似る模倣の本能、それが藝術の起原だといふ説も現れる。或は、他に向つて自己を擴大し自己を表現せんとする自我的本能がその源だとする説が現れる。

斯く、廣くは藝術、狭くは文學の起原は、文學それ自身に源を持つとする見解と、外部的原因に促された結果と見る立場とあり、後者は幾つにも分れるのであるが、此の起原の源の問題と共に、その起原的時代には、如何なる文學形式が在り得たか、といふ問題がある。

之に就ても、源の問題が關聯して來る。その源即ち文學發生の理由が、文學自身にあるか、又は性慾的欲求にあるかであれば、文學の始源形態は、抒情詩的なものと思はれる。それは一つの單純な叫び聲に似たものであつたと思はれる。それが次第に表現に綾を帯び内容が豊かとなつて、文學的な抒情詩へと發達して行つたと見られる。

次に、社會的原因が源だつたとすれば、それは舞踊や音樂と伴ひ合唱の形で存在したであらう。此の時は、叫び聲に似た状態もあらうと同時に、別に社會的存在として一つの民謡的なものとなり、意

味ある詩を成してゐた場合が多いであらう。

又、此等と別に、宗教的又は歴史的必要から文學が発生し、文學はそれらと結びついた形で存在したとすれば、文學は、英雄を中心とする叙事詩の長い複雑な存在であつた筈である。而して、抒情詩は、その叙事詩の一部分が脱落したか、傳承の中に小さな形に縮小して了つた墮落形と看做される。斯くて、こゝでも幾つかの學説が對立して定説を知らない状態である。唯、韻文的な形で存在し、散文文學はあり得なかつた、と云ふ見解だけは完全に一致してゐる。

### 文献

文學序説(土居光知)

文學概論(本間久雄)

古代研究(折口信夫)

國文學の哲學的研究(土田

杏村)

文學總論(竹友藻風)

民俗學概説(バーン)

藝術の始源(グローゼ)

## 二 文學上の自然主義・象徴主義の意義如何

### 一、自然主義

#### イ、名義

文學上の自然主義はもと佛蘭西から起つた言葉で、Le Naturalismeが

その原語である。之は歐羅巴文學に於ては、浪漫主義のあとを受けて、十九世紀の後半より二十世紀の初頭に亘つて、佛蘭西より始めて、獨逸・英國・露西亞に遍ねく行き亘り、我國に於ては明治四十年代から大正初期に流行した文學運動をさう呼んでゐる。

#### ロ、意義

自然主義の代表者としては、普通佛蘭西のエミール・ゾラ(Emile Zola)が推されてゐ

る。彼は自然主義の作品を創作する一方、その理論を構成した。彼によれば、自然主義とは、自然科学の方法を文學に應用して、人間の生活を觀察するばかりでなく、化學者が試験管の中で、化學反應を檢査するやうに、實驗を加へんとするものである。即ち特殊な遺傳質のある人間を、或る特殊な社會状態・環境に置くことによつて、そこに起された結果を調査しようとするのである。彼は此の主張に従つて、ルウゴン・マッカアル叢書 (*Les Rougon Macquart*) 二十卷を書いた。即ち一面に於て人間を生理學者・病理學者の立場から見ると、社會學的觀察を下さうとするものである。人間は意志や感情よりも、性慾の如き動物的本能の方面から多く眺められる特色があるとす。併し、此のやうなゾラに先立つ、フロオベール (*Gustave Flaubert*) やゴンクウル兄弟 (*Edmond Goncourt, Jules Goncourt*) 等の自然主義——現實主義とも呼ぶ論者があるが——は、美醜・愛憎の感情をまじへずあるがまゝの人間生活を其の儘に寫し出さうとするものであつて、此のやうな現實的な文學精神や手法は、それ以前の浪漫主義文學に對して、一つの革命を將來したのである。

日本に於ては、明治二十年代の小杉天外・小栗風葉らは主としてゾラの影響を受けたが、徹底したものではなく、田山花袋・島崎藤村以下の四十年代自然主義は、ゾラよりもゴンクウル、フロオベール及びモオ・パッサン (*Guy de Maupassant*) の影響を多く受けたものである。それらが、赤裸々に現實の眞を見ようとし、傳統を破壊し、偶像を打倒した事は、文學に對する近代的自覺を與へた點と、

自我を赤裸々に直視しようとする個人意識を徹底させた點に於て、精神的・社會的意義を持つ。

二、象徴主義 **イ、名義** Le Symbolisme とし、佛蘭西語を原據とする。佛蘭西文學に於ける十九世紀前半に出たボオドレヘル (Charles Baudelaire) に始まり、ヴェルレエヌ (Paul Verlaine)、マラルメ (Stephan Mallarmé)、ランボオ (Rimbaud) 等によつて十九世紀後半に完成された文學運動であつて、主として詩の方面に於て提唱され、成功した。のち獨逸・英國の文學にも影響し、又我國に於ても、明治三十年代以後に此の派の影響を受けた詩人及び文學運動がある。

**ロ、意義** 現實生活には無い、日常生活の奥に隠れた深奥の意識の世界、それはもはや通常の言語では十分表現出來ず、象徴によつてしか目的を達し得ない世界であるが、そのやうな奥の世界を直接に表現せんとするものが象徴主義文學の意義である。従つてそれは情調や感情の模糊として捉へ難き幽默を把握する點に於て、他の文藝形式に無い特色を有するが、それだけ、現實的或は浪漫的表現に對して個人的であり、難解なものになり易い事は争はれぬ。イブセンやアンドレエフの如き北歐の作家の戯曲にも象徴主義作品は見られるが、それは主として、短い言語で豊富な感情内容を暗示せんとする詩歌の世界に採用されることは自然である。そして詩歌の上にあつては、歐羅巴に於ては、嘗てない複雑・豊富な詩境を展開し得た。

日本に於ける象徴詩移入の業を果したものは上田敏の「海潮音」(三軒)であり、最大の象徴詩人は蒲



原有明であつて、「有明集」一卷は、此の種のものの最初の完成を示したものである。有明に次いで明治末期から大正初期の詩人に北原白秋・三木露風があり、又象徴主義の影響を多く受けた詩派に、與謝野寛・晶子等を盟主とする「明星」派の文學運動がある。猶、象徴主義は尖鋭な近代感覺の刺戟綜合の上に展開されるものであるから、その結果、頽廢的・官能的な一面を強く提示することもある。

文 献 象徴詩釋義(上田 敏)

象徴主義の文學運動(アアサア・シモンズ)

實驗小説論(エミール・ゾラ)

邦譯なし)

平林初之輔遺稿集(平林初之輔)

### 三 文學と道德との關係を説け

文學も道德も、人類の文化財の一種である。而も此の二つは、相反し相通ずる性質を持つ。文學は常に社會の物質的・精神的實相を寫すを常とする。それに現實的傾向の作と浪漫的・主觀的な作との差別はあらうが、總じて他の宗教哲學、又道德に比べて、現實の人生に接觸し、それを直接の素材とする點を特色とする。

然るに、道德は現實の人生とは離反するのを本質とする。何故かなら、道德は現實に對して高く模範を掲げ、指標を與へるのを目的とする。それは現實の世の缺陷を是正するが爲である。

従つて、文學は、在る社會をそのままに是認し、そのなりに寫すを本質とするに反し、道德は、在

るべき世界を示すといふ對比がある。勿論、文學にも、ユーゴーやトルストイの様な道徳的作家の外はあるが、それは文學としては他の分子を取入れたものであつて、他の文化圏と對しての特色としては猶右の如く考ふべきである。

斯く兩者の特質を見定める時、次いで兩者の特長缺點を想起せざるを得ない。

先づ文學にあつては、それがあがまゝに蔽ふことなく現實を寫す爲に、人間の罪惡的な暗黒面が文學によつて露呈されるので、屢々社會の非難を蒙る。特に寫實的文學、例へば自然主義の如きさうである。又、それは享樂的傾向を助長し、人間の意志を麻痺せしめて、感情や感覺の満足に耽らしめるといふ非難を浴びせられる。此等は確に文學のもつ反文化的性質を道破したものである。

併し、此の反面に、文學はよき教養を與へ、比較的高尙な享樂として人類を樂ましめるのみならず、こゝに特に強調すべきは、社會の忘れてゐる眞理を文學が指示する場合が屢々ある事である。十九世紀に「レ・ミゼラブル」が人の惡徳は個人の性格に基くにあらず社會惡の所産であり、之を救ふ爲に基督的精神の切要を社會に誨へて大反響を與へた如き、トルストイの晩年の「戦争と平和」「復活」の如きが、基督精神の罪惡や社會的權力への勝利を語つて全世界を感激せしめた如きは、共に世の忘却してゐたものを指示した例である。又、イブセンが「人形の家」其の他によつて、婦人の位置の向上といふ新しい問題を提供し、社會をして婦人問題に就ての新しい觀念を遂に認めしめた如き之である。最

近の日本文學では、芥川龍之介・菊池寛氏の作品が新なる人生の觀察法や道德觀を次々と提示してゐる例であり、特に山本有三氏では初期の「生命の冠」から最近の「女の一生」「眞實一路」に至るまでかういふ傾向で貫かれてゐる。斯くて此等の文學の爲に從來無かつた生活法が展開されて來る事は、例へば近年の日本に於て、封建社會で嚴禁してゐた戀愛が、現在では結婚の前提としてあるならば、公然と認めらるゝに至つた事は、他にも原因があるが、その主なるものとして、文藝による戀愛尊重の氣風が之を認めしめた點を忘れてはならない。

斯かる忘却されたもの、又、新なる人生觀・道德觀を提示する事は實に文學の積極的特長である。而して、かういふものを廣く社會に訴へる場合、文藝は、その傳播力の廣さに於て人心に感情的にしみ通る深さに於て、到底道德や哲學の及び難い威力を發揮するものである。

翻つて、道德を見るに、それが世を導き、人類を墮落から救つて向上發展せしめる有能的作用に至つては、周知の通りである。併し、一般は此の方面の餘りの輝しさにその缺點を忘れ勝であるが、實は道德にも、それ固有の缺陷が存するのである。

それは、道德は、在るべき姿を示すが故に、屢々抽象に陥りすぎて、世相の實際と離れて了ふ。而も道德家はその離反に氣づかず、それを無理に強ひて却つて道德を嫌惡せしめることが起らぬでもない。又それは、一定の模範を示す。凡そ規範は、一つのものとして固定するものである。それが活潑

に動いてゆく現實社會が、動きすぎて危険な境へまで踏み込むことを防止する特長的側面となる。と同時に動く社會から取り残されて、その社會へ働きかける今日の意義を失つて了ふ、といふ缺陷ともなるのである。

之を要するに文學も道德も共に、文化財としての特長と缺點とを具へてゐる。吾人としてはその特長を極力生かし、その缺點を防止しつゝ之を利用し行くべきである。

文獻 藝術と道德(西田幾太郎)

#### 四 鑑賞作用と創作作用に就いて述べよ

一、鑑賞作用 鑑賞作用を學的に説明するには、大體リップスの説明によるのが便利である。彼は「美は感情移入によつて生じた物象の價值である」と説いてゐる。此のやうな美に對する心的態度が即ち鑑賞といふ美的態度である。鑑賞をなす場合の心的態度は、まづ次のやうでなくてはならぬ。

(1) 私達の注意を他に導くやうな一切の關係を遮斷し去つて、對象そのものの中に生き、心的活動の一切を傾けて對象に聽かねばならぬ。その爲には對象をその性質のみに従つて觀照することによりあらゆる意味の現實から遮斷した純粹な獨立の世界を構成せねばならぬ。

(2) 次に單に對象を觀照し、靜止した自己を以て生き動く對象の世界に對するばかりでなく、自己

も亦對象と共に動かねばならない。

即ち、先づ私達が對象に感情移入する時は、(イ)美的對象を觀念化し(美的觀念性)、次に(ロ)美的對象は、現實ばかりでなく、觀念的存在、認識からも區別されるに至る(美的偏在性)。斯くして(ハ)美は主觀的存在ではあるが、認識的判断を超越した一種の客觀性をもつに至る(美的客觀性)。以上は消極的な感情移入であるが、次には積極的に、客觀から主觀へではなく、主觀から客觀への移入の方向が見られる。即ち(ニ)美的内容さへも單なる表象ではなくなり、現實的感情に於て實在化される(美的實在性)。更に(ホ)その對象に没頭して内容が深まり、美の内容の源泉たる人格性の深奥に徹するやうになる(美的深さ)。茲に至つて、美の底に人格的價値が認識されるのである。

かうなると鑑賞作用の内に、美的觀照から美的表現に進まうとする傾向が見られるのである。事實美的本質としての鑑賞と創作との間には甚だしい相違があるのではない。普通は作家の觀照のあとから創作が來、もしくは創作が終つて觀照が來るといふ説が立てられてゐるが、併し、美學者の間には(一)創作と觀照とは相類似し、たゞ強さと働く方向が違ふ。(二)觀照は不完全な創作作用である。

(三)創作作用と觀照作用には共通な核がある。といふやうな説が立てられてゐる。

二、創作作用 創作の作用はその心理的階次を、普通次のやうに説明されてゐる。

(1) 素材に對して起る感動。詩感。

(2) 此の感動をもととして起される内面的形成。想像。

(3) 此の想像、内面的形成を客觀化し、外面化する作用。表現。(2)から(3)に移る過程に、いはゆるインスピレーションが起り得るのである。

創作作用は全く純美的活動といふことは出来ないかも知れぬ。周囲の條件や、個人的事情に左右されることも多いが、それは(1)の素材に關係する場合が主で、そのあとの活動は、専ら美的効果を目的とし、全身的作用が参加する點で、藝術家の個性的内的活動である。之に對して鑑賞作用は、結局斯くの如き藝術家の活動を、作家に導かれて追體驗する作用であるといひ得るのである。

文献 美學(阿部次郎) 藝術哲學(植田壽藏)

### 五 校本(校合本)と定本との關係を述べよ

校本は定本の前に來るものである。校本が編纂せられて後に定本が編纂せられる。校本の過程を経ない定本は、定本としての價値がなく、そも／＼定本と云はれるべきものでもない。定本の前提として、必ず校本を必要とする。

もし著者が定本として指定したものを残してゐたなら、後代の研究者は、定本を作る必要はない。併しこの場合でも、校本の方は必ずしも必要がないといふ事が出來ず、又、校本を作る可能性は存す

る。即ち、著者が幾つもの稿本を残しておき、或は稿本と刊本とに字句の相違があるやうな場合、或は刊本毎に著者の訂正があつたやうな場合、概ね、その最後の形が定本として決定せられるべきものであるが（但し、さうではない場合、即ち、最後の形が残つた後、更に著者の意志で、或はその他の事情で、それ以前の古い形を、むしろ定本として指定される場合もある）、それにも拘らず、それらの相異を一見して判然たらしめる校本の作製を、研究者には必要とする場合がある。併し大概は、校本は定本を作る上の準備作業・豫備行動として作られるものであるから、既に定本の存する以上、校本の作製は不要であるか、又は作つても大して重要な意義を持たないやうな場合が多い。但し上述の如く、例へば研究者が、定本に至るまでの著者の推敲の過程などを研究する必要のある場合など、校本の作製は必ずしも無意義ではない。

此所で、定本の意義について考へておかなければならぬが、後の研究者が、定本作製の必要を感じるのは、著者の決定した定本が存しない場合に起るのである。所が、此の定本を作る爲に、先づ校本を作製し、さて、その校本の中の或る一種の辭句だけを用ゐて、定本の辭句として決定し、定本を作るやうな場合、其の作り出だされた定本が、果して著者の意に叶ふものであるかどうか、著者の定本として残した筈の本文と同一であるかどうかといふと、之は疑問である。のみならず、かゝる意味の定本の作製は、著者の原本が発見せられない以上永久に不可能であらう。従つて、右の様な定本は、結

局著者の原本又は著者の意志に添ふ定本ではなくして、定本の作製者の意志する定本であり、そこに後人の主觀の加はつた定本が出来上ることになるのである。斯くて、研究者の研究の態度・方法の異なるに從つて(或は、同一の研究の態度、方法であつても、研究者が異なれば)、同一の校本からも、別個の定本が出来上る筈である。別言すれば、異なる人の手によつて、全然同一の結論に達した定本が成り立つ事は、まづあり得ないと云つてよい。校本の作製についても同様な事が云はれるが、併し、これは、新しい資料の發見がなくて、同一資料により、同一方法、同一態度で作製せられた校本は、異つた結果を來たす筈がない。相違のある別種の校本が出来上つたやうな場合は、その一が正確で、他が誤謬であるといふやうな事を、一々の箇所について客觀的に確實に判定する事が可能である。之に反し、定本の場合は、別種の定本のどれが正しいかといふ判定は不可能に近い場合が多い。

斯くして、校本は定本に比して、より客觀的である。故に定本の作製が著者の原本に近付く爲のより客觀性を持つた本文を必要とする立場から要求せられるのであるなら、寧ろ校本そのものが定本的性質を持つてゐるとせられるべきであつて、別に、校本から、定本を作る必要はないといふ事も云はれる。校本こそは最も客觀性を帯びた定本である。併し、研究者の解釋といふ事を重んじるなら、やはり、校本より定本が導かれるべきであつて、此の場合の定本といふのは、研究者の判斷を通して見た定本である。即ち、それによつて、研究者の學識・蘊蓄・力量の發揮せられる定本なのであつて、



學力の低い人の定めた定本は價值がなく、學力の深奥なる人の作れる定本において、始めて價值が生ずる。併しそれは必ずしも、著者の原本に近い客觀性のある定本といふ意味とは同一ではない。校本より導かれた定本は、客觀性の純粹度から見れば、主觀の濃淡に五十歩百歩の差があるのみで、何れも不純な定本と云はれるべきである。

文 獻 古文書學概論(勝峯月溪) 本居宣長(村岡典嗣) 契沖傳(久松潜一) 解釋學と意義學(興水 實)

## 六 韻文の價值を判斷すべき標準に就いて述べよ

韻文とは、律動的なる言葉を以て、新しき美の世界を表現したものをいふ。韻文(詩歌)の生命は言葉の意味と、その律動とを以て、詩的なるものをどのやうに表現したかを見るにかゝつてゐる。從來、外形的な韻律を重視した時代は、詩歌を以て「韻律の方則による形式をもつ文學」といふ風に規定した。従つて、その當時の韻文の價值を判斷すべき標準は、音性律・音位律・音數律・句數律・句位律の如き、形式的韻律に充分適つてゐるかどうか、といふ事に重點があつた。併し、今日は斯くの如き形式的なる規律よりは、寧ろ詩的内容の意味と内在的なる韻律——内在律・印象律——等を認め、之を重視する傾向が強い。自由詩や Blank verse・散文詩などが存在してゐる所以である。

併しさうはいふものの、外面的・形式的な律格を無視してよいといふのではない。詩歌の詩歌たる

所以は、言語の意味と律格との渾融調和してゐる所に存する。たとひ口語を用ゐ、無韻の詩を作るとも、内面的に何等の律格を感じ得ない詩は、もはや詩でなくて散文である。律動的言語を以て、どの程度に迄新しい美・情趣・象徴の世界を浮き彫りにしてゐるかにより、韻文の價値が決定されるのである。従つて或る種の形式的束縛の下に於てのみ、美たり得る韻文の種類も無いことはないであらう。少くとも、それによつて一個のぬきさしならぬ美の新しき意味、新しき生命が律動化されてゐるならば、それはそれとして完全なもの、絶對なものであつて、形式の新古を問ふべきではない。傳統的藝術たる和歌・俳句にあつては、まゝ斯かる例が存在する。たゞ此のやうな形式的拘束の下にあつては自由に分の詩的感情を現し得ないとする者が、今日に於てはより多いことは認めねばならない。それらの人々は、専ら詩を詩たらしめる要因を、内在律・印象律の如き、内容的なるものに置かうとするのである。それも要するに、その種の詩に於てのみ、律格と意味との渾融を見るからであるとする點に於ては、形式的な韻律偏重論者と變らないのである。

要するに韻律あれども意味空疎なる韻文と、意味には詩的美あれども韻律を缺く韻文とは、共に完全なものといふ事は出来ない。此の兩者の融和の程度が、その融和によつて生ずる詩的形象の象徴性と具體性の完全さが、韻文の價値を判斷すべき標準でなければならぬ。

文獻 明治大正詩史(日夏耿之介)

詩學雜考(矢野峰人)

詩の原理(萩原朔太郎)

上田敏全集第八卷

## 七 詩歌のリズムに就いて述べてよ

詩歌のリズムに就いての問題は我國では古くから存在し、殊に明治初期新體詩が移入され、その創作が盛になつてからは、山田美妙・森鷗外・高山樗牛・島村抱月等により交々論ぜられるに至つた。今日では詩歌のリズムの種類をほゞ次の様に分けてゐる。

一、形式的韻律　イ、音性律　音聲の長短もしくは抑揚の性質に基く韻律。漢詩の平仄の如し。日本のものには著しからず。

ロ、音位律　一定の位置に同一又は類似の音を反覆して生ずる韻律。脚韻・頭韻の如し。押韻ともいふ。此の種のものは日本の和歌、及び新體詩に多く見られる。

ハ、音數律　一句中の音數の規律によつて生ずる韻律的效果。漢詩の五言・七言。和歌・俳句の五言・七言の如し。

ニ、句數律　一定の句數より成る形式のもつ韻律。漢詩の古詩・絶句、佛蘭西アレクサンドランの十三行、短歌の五句、俳句の三句等の如し。

ホ、句位律　句調ともいふ。一定の長さの句の位置が産み出す形式の與へる韻律。俳句・和歌の五・七調、新體詩の七・五、七・六、七・七、八・六、五・七、五・五調の如し。

二、内容的韻律 **イ、内在律** 以上の外在的な韻律に對し、對象を處理する内的感情から自然に生ずる韻律を内在律と稱する。それは詩的内容の自然に結果する韻律である。

**ロ、印象律** 詩歌の心理的對象が與へる印象の内に生ずる一種の韻律。同種類の印象を與へる對象を並べるとき、一種の脈絡ある韻律が生ずる。象徴詩や詩的象徴に、よく見受ける例である。

近代詩に於ては、先の外在律を輕んじ、後の内在律を重んずる傾向が強い。所謂自由詩とは、外形的な韻律に捉はれないものの謂である。今日の日本の詩の殆ど總ては、此の意味の自由詩である。和歌や俳句に於ても定型律を破壊する運動が起つてゐるが、此の方はまだ傳統の牢固たるものがあり、まだ定型律の方が優勢である。併し内容的な韻律を含めて廣い意味の韻律は、實に散文と詩(韻文)とを區別する標準となるものであり、詩が詩である限り、到底缺くを得ないものである。

韻律の細説に就いては、次項の解答を参照せられたい。

**文獻** 前項のものにほと同じ

へ **支那文學に於ける韻、西洋文學に於けるライムとは何ぞ**

韻、或はライムとは、律格、もしくは詩形ともいふ。詩歌の素材である言葉の語音を、音樂的に利用したものである。之に次の種類がある。

一、音性律 音聲の抑揚・長短によつて生ずる韻律。漢詩の平仄法が之に當り、洋詩の長短の音格が之に相當する。そして、漢詩にては平仄を或は音の開閉、もしくは音の長短に基くといひ、洋詩では、近世の英詩の韻の如きは多く音の抑揚に立脚してゐる。

雲。想。衣。裳。花。想。容。 春。風。拂。檻。露。華。濃。 若。非。群。玉。山。頭。見。 會。向。瑤。臺。月。下。逢。  
 名。花。傾。國。兩。相。觀。 常。得。君。王。帶。笑。看。 解。釋。春。風。無。限。恨。 沈。香。亭。北。倚。欄。干。  
 江。碧。鳥。逾。白。 山。青。花。欲。然。 今。春。看。又。過。 何。日。是。歸。年。  
 (李白) 平聲、仄聲 (李白) (李白)

即ち漢詩の平仄法は、二字目又は四字目・六字目に平仄の中心を定め、之を一句中平仄交互ならしめる。所謂「二四不同二六對」の法である。一句の絶句中に於て、猶平仄・仄平・平平・仄々の歩法を混用してゐる。

之に對して英詩の方の韻は、

Hónór ánd sháme fróm nō cōnditíon ríse 名譽と恥とは如何なる條件からも生じない

或は、

Hónór's bút án empty búbbie 名譽は空しき泡に過ぎない

(直線は揚聲、彎線は抑聲)

の如く、抑揚・揚抑・抑々・揚々の何れかにきめて徹底させる。『(—)(—)(—)(—)』の如く、漢詩よりも規律的である。此の二綴音シラブルを單位とするものに、抑揚格 (Iambus)・揚抑格 (Trochee)・揚々格 (Spondee) 等。三綴音シラブルを單位とするものに Anapest, Dactyl 等がある。

二、音位律 一定の位置に同音を反覆することによつて生ずる音律。頭韻・脚韻等がある。

朝辭白帝彩雲間 千里江陵一日還 兩岸猿聲啼不住 輕舟已過萬重山。

の間・還・山は脚韻をなす。又英詩では、

Yet some maintain that to this day しかも 或る人々は 今日に至るまで

She is a living child; 彼女が 生ける子供であること

That you may see sweet Lucy Gray 可愛いルーシー・グレイの姿が 寂しい荒野に

Upon the lonesome wild 見られることを主張してゐる

の「デー」と「グレー」、「チャイルド」と「ワイルド」が之に當る。洋詩に於ては隔句に諸韻するものと、續けて諸韻するもの等の區別があるが、漢詩では、律・絶・古詩みな押韻の法を異にし、律・絶は全篇一韻である。

三、音數律 音の數を以て律格の基礎とするもの。漢詩の五音・七音の如し。洋詩に於てはそれほど嚴重な定めがあるわけではなく、音數に定格はないが、普通十音は四音と六音に、十二音は六音

づつによみ切る。或は全く無定期のものもある。

Two principles in human nature reign;

人性には二つの原則が支配してゐる

Self-love to urge and reason to restrain;

慾望する自己愛と抑制する理性と

は十音を、四・六に分けた例である。我國の七・五音、五・七音なども之に屬する。

尙、句數律・句位律の如きもあるが、廣義の韻律に屬するので省く。それらに就いては前項の解答を参照せられたし。

文 獻 新美辭學(島村抱月)

詩學概論(外山卯三郎)

詩學雜考(矢野峰人)

日本詩歌形式論(渡邊

吉治)

上田敏全集第八卷

詩學及詩論(現代詩講座)

詩の形態學的研究(外山卯三郎)

九 敘事詩・抒情詩・劇詩の區別並に其の關係を説明せよ

一〇 抒情詩・敘事詩・戲曲詩の區別如何

一、抒情詩(Lyric) Lyricとは、もとLyraに合せて唱ふ歌の義である。抒情詩は、即ち現在の純粹感情を、直接に、現在のまゝに、音樂的に表現した詩であつて、事柄を述べるよりも、事柄によつて起された自分の感情を表白するものである。詩としてはもつとも純粹なものであり、多くは吟詠し得る韻律を伴ふものである。

11、叙事詩(Epic) EpicはStoryを意味し、吟誦する物語詩の意味である。抒情詩が現在を取扱つて主觀的であるのに反し、之は過去に起つた事柄を秩序ある形式に敘述した客觀的のものであつて、平家物語の如き、その代表的なものである。多くは口誦すべき韻律をもつ。

敘事詩はその題材の性質からして、傳誦的と記載的、民族的と個人的に分つ事が出来る。民族的敘事詩は、例へばホーマー詩や古事記の如く、古代傳説や民謡の一大集成と見做されるもので、之には英雄がその主人公となることが多い。それに對して後者は或る一人の天才の手によつて創作されたもので、此の種の敘事詩は近代の如く個人意識の發達した社會に於ては一般的に衰へざるを得ず、マアテルリンクの如き、敘事詩は詩に非ずとまで稱してゐる。曾て敘事詩に作つた素材は、今日では寧ろ小説に於て格好な表現形式を見出すのである。

三、劇 詩(Drama) 或る意味で敘事詩と抒情詩との綜合とも見られる。過去の時を現在に於て見ようとする性質を持ち、主觀と客觀とを兼ねた詩である。動作と吟誦(科白)がその契機となる。劇詩には喜劇・悲劇・悲喜劇の別が存する。シェイクスピアの作、或はゲーテのファウストの如き、何れも劇詩である。希臘戲曲詩に於ては、三一致の法則、即ち、行爲・時間・空間の三條件を一致さすべき事が、嚴重に約束として守られてゐた。



## 二 叙事詩の起原・發達・種類に就いて述べよ

一、起原 一般に詩歌の起原は、原始民族の宗教上の祭式に於て歌ふ合唱であると信ぜられる。合唱の中には歌詞と音楽と舞踏とが混じて居り、原始民族は踊りながら歌謡を歌つたと考へる。その際祖先の功業・物語等、全會衆に關係あるものが歌詞の上に唱はれ、それが叙事詩の起原をなしたと思はれる。(尙、その時の歌詞に附隨した囃し詞や、繰返しの句が抒情詩の起原をなしたのではないかと説く學者もゐる。)

二、發達 此の合唱の中に、特に全會衆に關係ある物語的な部分を歌ふところから、自然英雄中心の叙事詩がその體裁を調へる。更にそれが傳誦され、物語の世界を意識的に展開して行く處にその發達が見られる。古事記の或る部分の如きは、現存最古の叙事詩であると見ることも可能である。元來は斯くの如き民族詩であるのが、次第に個人によつて藝術的意識のもとに、民族的英雄を題材にした作品が作られるに至る。萬葉集中の人麿作高市皇子の挽歌や竹取の翁の歌は、譚歌(物語歌)といはれるものに近いが、叙事詩の中に包含せしめることも出来る。

併し一般に叙事詩の盛んに創作されるのは古代から中世までであつて、佛蘭西トルザンの吟遊詩人の作や、獨逸のニイベルンゲン・リイド、英國のアーサー王物語詩などがその代表的なものである。日本に於

て此等に相當すべきは、盲目法師によつて語られた平曲即ち平家物語であらう。

個人意識が發達し、英雄崇拜の念が失せて來る近世になると、民族・民衆を寫すよりは、個人・個性の描寫に力が注がれ、敘事詩へ注ぐ熱情は小説・戯曲・隨筆・抒情詩等に分たれるに至る。併し稀にミルトンの失樂園（パラダイス・ロスト）や、ずつと下つて、トマス・ハアデイのダイナスティ（ナポレオンを歌った詩）の如き作品はあるが、例外に屬する。日本に於ても、明治中期の浪漫主義全盛の時代、與謝野鐵幹や土井晚翠らによつて古代傳説或は諸葛孔明・ナポレオンらを題材とした長篇敘事詩の作があつたが、一時的の現象で、後繼を得なかつたのは止むを得ない。

三、種類 敘事詩は抒情詩に對して、いはゞ客觀詩といふことが出来るが、之を作者及び題材から、傳誦的敘事詩と記載的敘事詩、民族的敘事詩と個人的敘事詩に分けることが出来る。民族的・傳誦的敘事詩は、我國の平家物語やアイヌのユーカラ、希臘のホメロスの詩篇の如きもので、古代傳説や民謡の集成であり、傳誦の間、次第に内容が増補されて行くもの。個人的・記載的敘事詩は或る個人により傳説・物語等を取捨按排してなされた創作で、ミルトンの失樂園の如き之に屬する。

文獻 詩の起源（竹友藻風）

上代民族文學とその學史（久松潜一）

第二編 國文學史

## 一 總 說

一三 文學史の時代區分法に關する諸説を擧げて之を批評せよ

一三 國文學史の時代區分法に就いて述べよ

一、文學史一般の時代區分法 文學作品は歴史の流れの中にあつて、而も此の中に溶解されることを拒む超歴史の性質を持つ。従つて文學史は歴史の時代區分法と一致し、或は之に影響される一面と共に、美的理念の形象史として、その自律性を主張する一面を持たざるを得ない。さて、文學史の時代區分は、具體的には大體次の様な歴史の時代區分法の原理に據つてゐる。

(1) 政治史中心の時代區分法 政治主權の所在を中心として、文學史の時代區分をなさうとするものである。人類の團體的生活史に於て一貫して中心をなすものは政治であるから、之の文化一般或は文學の性質・種類に及ぼす影響は大きい。茲に政治中心の文學史區分法の成立根據がある。希臘文學・羅馬文學、或はルキ王朝時代の文學、鎌倉時代・室町時代の文學といふが如きは、此の區分法に従つた稱呼である。併し政治の歴史そのものが必ずしも直ちに文學の歴史ではない。文學は屢々政治の變化

に先んじ、或は遅れる。又文學の發展が政權の移動に比較的沒交渉なことも尠くない。従つて此の區分法は大體を得るには良いが、細部に於ては完全なものではあり得ない。

(2) **文化史中心の時代區分法** 文學は政治の反映であるよりも、より直接にその時代文化の反映である。否その時代文化の一種屬、一環として文學があるのである。文化中心に眺める時、文學はより廣き展望の下に見られ、より深き理解を獲得して来る。古代・中古・中世・近世・近代と云ふのも、或意味で文化史中心の區分法である。たゞ此の區分法に於ける一つの非難は、文學自體に關して云へばその中心たる文化概念の意味が曖昧多岐である爲に、その結果が具體的であるべくして、屢々抽象的であることである。その上、文化の所在、性質の變化・發展は急激でなく、徐々に行はれることが多いから、之を以て文學史の時代區分をなす場合には、別に一つの價值原理を指定せざるを得ない。

(3) **經濟史的時代區分法** 所謂唯物史觀と稱せられるもの。文化や思想は上部概念であつて、その底には生産力及び生産關係の問題が下部構造として横はつてゐる。總ての社會上の問題、文學の研究も、此の基礎から理解して始めて徹底的になし得るといふのである。

此の主張による區分は、従つて貴族階級の文學、武士階級の文學、町人階級の文學、ブルジョア級の文學といふやうな體裁をとる。或は封建社會の文學、資本主義社會の文學と云つた區分をとる。此の方法はまだ發展中のものであり、種々の検討を必要とする。

(4) 一定期間による時代區分法 以上のやうな特殊な何等かの對象の解釋法に立脚する區分法と違つて、機械的・外面的に、たとへば百年を單位として文學を截る、十六世紀の文學、十七世紀の文學といふやうな分け方がある。之は西洋に於ては、相當一世紀といふものによつて文化の意味が變る傾向があるもので、妥當な區分法であり得るが、日本や支那に於ては適用されない。又二十五年單位の區分の仕方、十年單位、或は五年單位の小時代區分法もある。五年乃至十年で、何等かの變化が起るといふのであるが、之は或る特殊の時代の短い期間に限れば、通用し得る區分法である。

(5) 文學自體の發展に即せる時代區分法 以上はほゞ文學作品に關して云へば外在的な時代區分法であるが、更に内面的に、文學の意味・内容の變化發展に即しての時代區分法が立てられる。或る時代の美的理念を中心とし、之を(1)精神史的立脚地から觀察するか、(2)様式的變化を中心として眺めるかの大體二様の態度がとられる。此の二様の態度によれば、あく迄も文學自體の變化發展が中樞に來て、政治・社會・文化・經濟その他は、之を理解解釋する上の補助的位置を占める。文學はその變化・發展に即して、政治史・文化史などと平行するが、必ずしも一致しない時代區分法をとるに至る。

併し此の文學自體の因果律に即して文學史を展開する場合にも、その考察の立脚點が、心理主義である場合と、理論主義である場合とでは、具體的な實績に於ては、幾分の相違を生ずるのはいふ迄もな。

## 二、國文學史上の時代區分に於ける問題 國文學史の上に於ても、以上のやうな各種の立場に立脚

して、時代區分法に關する幾つかの異説が立てられてゐる。それを具體的に概観すれば、

(1) 最も普通の方法として、古代・中古・中世・近古・近世・近代といふ區別が立てられてゐる。之に對して、

(2) 中古（平安朝）・中世（鎌倉）・近古（室町）を合して中世と概観しようとする見方が、齋藤清衛氏の主張に見られる。之は主として文學理念の上から立てられた主張であるが、之に對して、

(3) 古代をほど寛平（宇多帝）頃迄とし、奈良朝と平安前期とを一緒にし、中世を平安中期以後鎌倉・室町の半ば迄を含め、以後を近世とする區分法が、風巻景次郎氏によつてとられてゐる。之は、平安貴族も、鎌倉武士も、共に封建貴族といふ點では變りがないとする經濟史的觀點に立脚せる主張である。

(4) 猶、外に、南北朝時代といふ一時代を、中世（鎌倉）・近古（室町）の間に設けようとする説もある。之は日本の社會・歴史を分つ分岐點となつて居る重要な時期であるとするのである。文化史的觀點から立てられた説である。

(5) 此等とは全く別に、貴族階級の文學（奈良朝・平安朝・鎌倉初期）、武士階級の文學（承久以後・江戸初期）、町人階級の文學（寛永以後）、と分ける階級別の區分法が、津田左右吉博士によつてとられてゐる。

文献 國文學に現れたる國民思想の研究(津田左右吉) 中世日本文學(齋藤清衛)

參考 尙、右の問題に就いては、久松博士の考察があるので(岩波講座、國語教、略述する)。

文學の構成要素として形象・形成・精神の三つが見られる。文學の時代區分法も此の三つの立場から分け得る。

(1) 文學形象による區分法としては、文學形態による詩歌史・小説史・戯曲史の如き區分法がある。之は横の分類法で展開的な分類法ではないが、日本文學史の場合には、文學形態による分類を展開的に考察して、敘事文學・抒情文學・物語文學・劇文學の時代といふやうに、各時代の主流をなす文學形態をとりあげて、夫々の形態が展開して行くと考へれば、やはり文學史展開に於ける區分法と見ることが出来る。之は更に高次な分類として様式史的分類に迄高められる。

(2) 文學形成による區分法としては、作家史的區分法・流派史的區分法・政治史的區分法、或は地理的區分法・發生史的區分法がある。此の内作家史的及び流派史的區分法は直接に文學を創作する創作者による區分であり、政治史的・地理的區分法は間接に文學を形成する區分法である。發生史的といふのは、生活史的區分法ともいふべきもの、例へば民族學的方法の如きをさす。作家的區分法は列傳體文學史となり、流派史的區分法は、例へば俳諧史を、貞門・談林・蕉門といふ様に分けて、その展開を跡づけるから、作家史的區分法よりも特殊になる。又政治史的區分法は、平安時代・徳川時代・明治時代といふやうな區別の仕方と、貴族文學・武士文學・平民文學といふやうな區別の仕方とある。地理的區分法は、土地を中心としたものだが、自然政治史的區分法に近



いものとなる。即ち足利時代は都市的には室町時代文學であり、徳川文學は江戸時代文學である。更に地理的區分からは都市的文學と田園文學、或は山間文學と水邊文學といふ自然の上の相違から分類することも出来るが、之は時間的な展開としては、政治的區分と一致する。

(3) 文學精神による區分法は、素材史的區分法と思潮史的區分法に分れる。文學の史的展開の上に於て、神祇文學・戰爭文學・戀愛文學・佛教文學に分ち得、之が時代的に消長もしくは變遷して、上代に於ては神祇文學が中心になり、中世には佛教文學が中心をなすといふ様に、素材の展開に於てその中心となる所を以て區分すれば、一つの文學史的區分がなし得る。又文學精神の方からは、浪漫主義・寫實主義或は象徴主義といふ區分が出来る。又日本文學思潮の上から、中世を幽玄思潮・平安を「ものあはれ」思潮を中心とするといふ區分法も可能である。併し此の方法はまだ十分に行はれてゐない。

(4) 此の形態・形成・精神各方面を含み得る方法として、上古・中古・近古・近世・現代といふやうな名稱がある。最近は近古を中世、上古を上代ともいひ、その内容も亦少し異なる。

之は要するに、古代と現代とを分ち、古代を上中近に三分し、現代を近世と現代に分つたやうに見える。日本文學史上からは、近世を江戸時代とし、又現代の外に明治といふ時代を設けてゐる。

又最近に於ては上代を鎌倉迄延長する立場もあれば、中世を廣めて平安文學をも中世の中に含めようとする立場もある。平安時代と大和時代とは主情主義・貴族的といふ點では共通點があるが、併し相違點も多いから、平安文學を中古に入れる方が妥當である。又平安文學と鎌倉・室町の文學とは少からぬ相違點があるから、之

を一つにするのもやゝ穩當ではない。

## 二 明治以前の文學論に用ゐられたる主要なる術語

### 五つを擧げて其の意味を説明せよ

五つの代表的なものを選ぶとして、何を選ぶかゞ先づ問題である。茲には上代文學を現すものとして「まこと」。平安時代を現すものとして「もののはれ」。中世を現すものとして「幽玄」。「有心」。近世を現すものとして「勸善懲惡」を擧げる。(尙、近世のものとしては、第一三〇項の「まじび」(第一三一項の「不易・流行」を擧げてもよい。)

一、まこと 此の理念は、上代に於てさう云ふ標語で文學論が行はれてゐたわけではない。近世初頭に上代意識が勃興し、所謂古道が興つた時、その一翼として賀茂眞淵が文學論の中で用ゐ、現在久松博士によつて繼承されて廣く影響を與へてゐる見解である。之によつて眞淵の意味したものは、上代は人の心直く強く、従つて文學も人麿の作品に見るやうな雄々しく且すなほな姿が内容にも聲調にも満ち／＼た作品が生れた。こゝでは支那の影響による粉飾や、後世風の女々しく綾ある弱さ所謂「手弱女ぶり」の如きは含まなかつたとする。此の眞淵の見解は、事實に於て上代文學の全部がさう云ふ強さと素朴性のみを含むものでなく、懷風藻の如き、萬葉中期以後の作品の如き、之に合致しないものであるが、大體に於てよく古代文學の特質を道破してゐる。

二、ものあはれ 平安朝から中世にかけて實際に用ゐられた言葉で、當時の生活及び文學の代表的標語であつた。詳しくは五二項(一七三)及び二六九頁に譲るが、要するに、感情的な情趣的な美を尙ぶ、即ち或る唯美的な理想を樹てたのである。さうしてそれを自然に對しても人事的素材に對しても適用して理想的な調和のとれた美感を現したものである。之は、近世の宣長に至つて、獨立した文學論となり、儒教的な道義觀や勸善懲惡式の功利的な文學觀を斥け、文學は「ものあはれ」を現す、即ち人性の女々しく感情的な點を描く、之が文學の本質である。従つて文學は文學自體が目的で、他の目的に奉仕するものではない。とする見解に發展した。道德的に物語を非難する如きは、文學の此の本質に盲目なものである。とした。

三、幽玄 之も別項(一七三)に説くが、支那傳來の標語で、我國では古今集の眞名序に見えるのを初見とする。それが、藤原基俊によつて歌合の判詞として使はれ、其の弟子藤原俊成によつて廣く歌の理念として使はれた。従つて新古今の本質も幽玄だと屢々説かれる。次いで能の理念として使はれ、近世に入つては俳諧に影響を與へ、蕉門の「さび」の論の如きも根本に於て幽玄の論である。斯く生命の極めて長い理念であるため、時々其の内容を變じてゐる。併し其の根本に於ては、現實の美に對する非現實なものを持つ美しさである。花やかな表面的に鮮かな美に反する、奥深い物さびた靜的な状態を尊ぶのである。それが變化して、新古今當時には、奥深く寂しいながら、そこに一脈

の華やかさを交へた幽玄を尊ばれた。それが室町期に至ると、又變化して、例へば禪竹の如きでは、冷えびえと冴えた趣を幽玄と見た。——斯かる變化にも拘らず、上記の特色は一貫して居り、而してそれは現實の現象を描く意欲を失ひ、現實の迫力に堪へかねた人々の求めたものである。之が没落期の貴族や、世捨人の階級によつて支持されたのは、當然の事であつた。

**四、有心** 定家が和歌の理念として毎月抄の中に説く所である。それがやがて連歌の名目として使はれた。而して其の源は、古今集の序、更に溯つては奈良朝の歌經標式に出づるものである。此の二書に、やまと歌の本質は心にある。それが種々の表現を得て歌となる、と説く。即ち、外象よりも主觀を歌ふのを歌の本質と見る觀念、派的見地である。此の見解は藤原公任に受繼がれたほか、色々な考へ方に分化しつゝ、廣く平安朝の和歌の社會に根を張つた。定家はそれを取上げたものである。併し、彼の所説は甚だ簡單であり、且曖昧で捕捉し難い。のみならず、彼は和歌は十種類ありとして、和歌の十體を説き、其の中の一部として、有心體を擧げたが、それと同時に、有心體は十體の上に立つ絶對價値的なものだと説いてゐて、益々不明瞭である。故に、人によつて如何様にも解釋が可能であるが、今、久松博士の解釋に従へば、十體の一部概念としての有心は、定家及び新古今の妖艶の美と通ずる氣分を指す。故に、時には巧智の勝つた整つた姿をいふ事にもなる。而して全體的な有心とは、深い心のある歌、氣分情趣の湛へられた作である。之は平安中期から下期へかけて分裂した「心の歌」

の概念を古今集の昔へ戻すことであつた。又、内容からいへば、俊成の幽玄を柔かにも、あはれ化したものと考へられる。

定家に於ては、斯く考へられたが、鎌倉期一般としては、平安時代と異つて、歌の表現論として、「有心の序」と使はれるによつても明かな様に、心を基とし、意味ある表現法をさしたと見られる。連歌に於ても之と同様で、眞面目な作風で意味ある連歌は、有心の連歌と云ひ、滑稽で無意味なナンセンス的なものは無心と區別した。尙、斯かる、心の文學論が、貴族社會から生れ、其の社會の没落と共に亡びたことは注目すべきで、觀念主義文學論が、暖い貴族社會の温室に咲く花の一つであつたことを物語つてゐる。

**五、勸善懲惡** 江戸の中期以後現れたもので、道德的色彩を帶び、儒教全盛の武家社會の産物なること云ふまでもない。文學は善を勧め惡を懲す所に其の本質や價值があるとす此の論は、滑稽本・洒落本・人情本等にも極めて廣く現れたものであるが、其の最も明瞭に發現したのは讀本に於てであり、就中瀧澤馬琴に於てである。而して前者が、幕府の文藝壓迫に對するカモフラージュとして使はれたり、又は讀者に道義的な印象を與へつゝ實は其の蔭に隠れて淫靡な情趣を説く手段として利用してゐるに對し、後者では、眞にさう云ふ意識に燃え、文學によつて世道人心に裨益せんと期してゐる所に大きな相違がある。而して讀本の此の傾向は、一面儒教道德に基くと同時に、當時の心學から直接の刺戟

を得て成つたものである。斯くて此の立場は、之を大觀する時、藝術に對する道德の優位を認めるものである。又藝術論の内部として云へば、美の藝術に對して、善の藝術を高唱するものである。或は寫實的傾向に對して、理想主義的立場の勝利とも云へるであらう。

文 獻 和歌史の研究(佐佐木信綱) 國文學の哲學的研究(土田杏村) 日本精神史研究(和辻哲郎)

(續日本精神研究(同上) 上代日本文學の研究(久松潜一) 日本文學評論史(同上) 契沖傳(同上)

本居宣長(村岡典嗣) 國文學に現れたる國民思想の研究(津田左右吉)

### 一三 文學と民族性と。右、文學史の立場より論ぜよ

文學を扱ふ態度に於て、常に、二つの立場が對立してゐる。一つは、文學を文學そのものとして、文學の獨立性を強く見て批評鑑賞する立場。他は、文藝はそれ自身の獨立性はなく、時代・先行藝術・氣候風土、又作者の遺傳的要素——此等の綜合が文學の性質を決定する、といふ立場である。今、文學と民族性の如きが問題になり得るとすれば、それは飽くまで第二の立場に立つての事である。

さて、日本文學に於て、その民族性との關係を取上げるとすれば、ひとり民族の點だけでなく、その民族をして然あらしめた氣候風土の如きも視野に入れねばならぬ。又、之を問題に要求せるが如く文學史の立場から扱ふとすれば、各時代の時勢相が、文學と常に平行して考慮されねばならぬ。

右の様な立場を綜合して日本文學及び日本文學史を見るに、先づ時代別に、次に全體の綜合的大觀といふ順序で述べる事が出来る。

先づ古代に於ては、他の民族に於けると等しく、文學は神話や歴史や傳説說話や、扱は宗教・政治などと混合してゐる。それらを通觀して感ぜらるゝ特色といへば、汚れに對する意識が敏感だつた事を挙げられる。彼等によれば、汚れは不正と不幸とを意味し、反對に、潔白は誠實又は高貴を意味し、それは幸福を齎すものであつた。故に褻とか被とかの習慣が發達して、前者の状態を極力後者へと移すことに努力した。

次に又、そこに見える現實的な人生觀は、印度に於ける來世的觀念、支那に於ける神仙思想と相對立する特性である。又、そこにある朗かな笑は、固有日本人のもつた明るい特色だと云はれてゐる。此等は共に、欽明朝以後輸入され廣布されて行つた佛教の爲に、漸次崩壞して行つたものである。

又、そこに見える活潑な外國文物文化の攝取は、現代にまで續いて日本民族を世界の一等國民とした一大特長である。而して之は、悪しく走る時は單なる表面的模倣に墮するものである。此の外物消化の風は、古代文學に於ては、素材の上に、表現方法の點に、文學觀の上に、大影響を及ぼし、古代の文學と奈良朝末期の文學との間の相違の一原因を作つてゐる。

次に、平安朝では所謂「ものゝあはれ」が主たる生活標目であり、文學指標でもあつた。それは既

に宣長によつて明かにされた様に、本能的なまでに自由な人間性の發揮を意味した。感情を道徳的理性で縛る支那儒教と正に對立的である。又それは屢々情趣あり、洗煉された生活の様式を意味する場合がある。粗野で露骨なものを嫌ふポライトな文化であつた。而してかういふ一面が日本人の内部に潛み、それは此の國人が、理論的に思索し、大いなる組織に物を組立てる性格の缺如を暗示してゐる。

中世期に於ては、各種の傾向が各種の文學形態を通じて現れた。先づ軍記物の一類に於て吾等は、所謂武士道の結成を見る。武家社會に於て忠義・名節・廉潔等が、祖先や家の觀念と、宗教的に固く結びつき、次いでは、その君や家の爲には生命を鴻毛視するに至り、そこに、なる生活規範を樹立したのである。之は武家社會の終る江戸末期まで、社會の綱紀として守られ、維新以後は、日本國民性の最も顯著なるものとして海外にまで知られたものである。

次に、此の期の純文學、特に和歌の世界を見るに、平安末期から鎌倉初頭にかけて、幽玄なる文學理念が唱へられ、大體に於て支配的傾向を維持した。此の非現實的・靜止的・象徴的な美意識の中に、現實の政治家社會的勢力を奪はれた中世公卿の聲を聞くのである。

更に、和歌の世界には、傳統尊重の風が著しい。それは、公卿が武家から己を守る爲に特に強調した爲もあり、武家の尊祖觀念のせぬもあつて、社會の各方面に現れたが、之も日本民族性の一特質と見られる。而して中世文學では、和歌に最も著しく、本歌取とか古今傳授とか各種の姿で現れる。



更に室町期の能に於て、象徴的特質を見る。特にそれが、直觀的方法・暗示的方法・理論的方法で、思惟を交へず象徴する手段を會得してゐる所に日本民族の特質がある。能は、宗教的な深さを湛へた點でも特色的であるが、表現を主にする時、かういふ論が成り立つのである。

近世に於ける特色あるものとして、俳諧に於ける寂さびの境地、風雅の論等は、その大本に於て中世の幽玄の流で、此の傳來の長さは、斯かるわびしい寂莫の世界への國民の求心を表すものである。又、人形淨瑠璃のうちに見る義理と人情との相刻、そこにも國民性の一表現を認められてゐる。

更に、近世中期以後に著しい滑稽と洒落とがある。滑稽は、上代にもあり、平安朝では散文・韻文に到る所に見え、室町期には狂言に結集してゐて確かに國民性の一特質たる事を示してゐるが、近世ではそれが、狂歌・狂詩・川柳となり、十返舎一九や式亭三馬の滑稽本の作品となつて現れた。それが町人の樂觀的・現實的生活の表現なる所に此の期の滑稽文學の特色がある。次に、洒落は通や粹とも似たもので、皆花柳の世界に發達し、野蠻や間拔と對立した概念である。之は、遊びの世界から發生し、幕末社會のデカタンの空氣の産物たる點で彼の浮世繪と根を同じうするものである。

此等と並んで現れた、國學の運動は、文化文物の各方面に互る現象であるが、その國家意識と、皇室尊崇とは、古事記の神話以來の長い傳統を追ふものであつて、いふまでもなく、國家意識の熾烈な我が國民性の大特色である。

以上を要するに、各時代に應じて現れた國民性は、甚だ多種多様である。此の多様さに綜合的特色がある。而して、斯く複雑な要素をもつ上に、一度發生したものは、飽くまで消えずして、和歌の如く二千年の傳統を負ふものまでが、最新様式の文學と共に創作されてゐる、といふ二重性格的、複雑さに亦國民性の根幹的特色が存するのである。

文 獻 國民性十論(芳賀矢一)

國文學と日本精神(藤村博士功績記念會)

其の他前項所掲參照

## 一六 尊皇精神を内容とせる我が國の文學に就いて記せ

文學は、之を狹義に取れば、純藝術的作品に限られるわけであるが、今は問題の性質からいつて、廣義に國文學文献の意と解して史書・傳記・哲學書等を含ませて、時代順に記述する。

奈良時代 (1) 古事記。三卷。語部や古記録によつて傳へられた神話・傳説・説話・歌謡等を巧みに連鎖結集して編纂されてゐるが、それによつて、わが建國の由來を語り、それが、未來永遠に皇室を中心にして統一さるべき所以を明かにした。次いで、人皇の時代に於て、吾が國が、皇室を中心として如何に國力を伸長していつたかを述べてゐる。

(2) 日本書紀。三十卷。古事記と相並んで我が古史の原據であり、その建國神話に於ける皇室を中心とする國家の誕生期の記述は、漢文的粉飾はあるにせよ、神皇正統記をはじめ後世の尊皇思想の展開

に甚大な影響を及ぼしてゐる。

(3) 萬葉集。二十卷。總數大約四千五百首の内、天皇を、神——現人神あらひとと歌ふ諸人の作、柿本人麿の神や皇室を讃へた作、大伴家持の氏族的名譽と盡忠を歌つた作、皇命に感泣して西邊防備に赴く防人の歌等に、純眞烈々たる尊皇精神の發露が見える。尙、詳しくは四六項(八頁)参照。

**平安時代** (4) 菅家後草。一卷。菅原道眞の詩集。主として太宰府左遷後の詩を集めてある。詩才は白氏に迫ると言はれたが、不遇の中にあつて至誠純忠の念を詩に託してゐる所に、永く人を感動せしむるものがある。更に彼の撰した類聚國史に、神祇部・帝王部を最初に掲げて民族精神を明かにしてゐる所を合せ考へても、その尊皇の精神は明かである。

**鎌倉時代** (5) 平家物語。十二卷。(6) 源平盛衰記。四十卷。軍記物では、相争ふ二派の勢力が常に皇室の身方として勅命を奉じて動かうとしてゐる所に尊皇精神を汲みとる事が出来るが、その彩は平家物語に於て特に著しい。有名な重盛の諫言の條や、平家が三種神器を奉じ、幼帝を奉じて常に朝敵となるを怖れる態度、朝敵義仲の敗死等の大事件を始め、隨所に尊王忠君の意識が強く現れてゐる。此の點は、源平盛衰記も同様である。

(6) 元亨釋書げんかうしやくしょ。三十卷。佛教上の傳記集であるが、卷十七にある國體論が注意せられる。即ち日本國體は人情の自然に根ざせるもので、その自然は三種神器によつて象徴されるとし、萬國に比類なき

所以を證明した極めて純正な解釋であつて、神皇正統記に先だち之と同性質の卓見が提示されてゐる。此の外、實朝の歌集である金槐集には皇室に忠誠を表した有名な作があり、又日蓮の著作に見える護國の壯烈な精神から、間接に尊皇の念を見出す事が出来る。

**吉野・室町時代** (8) 神皇正統記。六卷。北畠親房の著した歴史書。尊皇精神を内容とせる古今の代表的な著作で、有名な「大日本は神國なり。云々」の冒頭の句は、別項(三三)にも説明したが、全篇の精神を端的に表すもので、天地開闢より第九十六代後村上天皇に至る歴世の御治世を説き、皇嗣の正閏を歴史的に考察して、以て南朝の正統なる事を立證せんとしてゐる。此の書が後世の尊皇精神に絶大な影響を及ぼした事は、改めていふまでもあるまい。

(9) 増鏡。十卷。後鳥羽天皇より後醍醐天皇隱岐より京都に還幸ましますまでの歴史を述べる。その觀察の主點が、朝廷と幕府との關係に置かれてゐる事を注目すべきである。従つて、承久の亂を詳記する反面、元寇襲來の國難は極めて略記してある事實や、後醍醐天皇の御運の開け給うた事を喜んで筆を擱いてゐる如きは、本書述作の動機を窺ふに足る。従つて武家の跋扈を憤つて、頼朝が總追捕使となつたのを「日本國の衰ふる始」と、慨いてゐるなどに注意を惹かれる。

(10) 太平記。四十卷。元弘の亂、南北朝の争亂を中心にした歴史文學。吉野朝君臣の永年の苦闘や、個人的には楠正成や新田義貞等の忠臣の活躍を描いて、同情の涙を注いでゐる。従つて南朝の立場を

極めて有利にしたのみでなく、嚴たる尊皇の精神が到る所に流露し、後世の尊皇論の發展に甚大な影響を及ぼした。維新の志士にして本書を読み感奮した例は尠くない。

(11) 新葉和歌集。二十卷。弘和元年、宗良親王の撰。吉野朝三代の君臣の和歌を集めた集。その作、世を嘆き憤る内容が多くて切々と讀む人の胸に迫る。そこに自ら吉野朝の悲運に同情を誘起せられる點、他の歌集や撰集と全く趣を異にする。

右の外、部分的に尊皇精神を示してゐるものに、吉野拾遺・徒然草・謡曲などがある。

江戸時代 (12) 創學校啓。一卷。荷田春滿が幕府に上申して國學の學校を設立する事を要請した書

で、短文であるが、初めての國學樹立の聲明書であり、尊皇精神の發展に重大な意味をもつてゐる。

(13) 國意考。一卷。賀茂真淵の五意考の一。わが民族精神を明かにし、國家の倫理道德の本質を説述したもので、國學に理論的根據を與へ、國粹思想の發展に齎した功績が大きい。

(14) 直毘靈なほびのたまま。一卷。本居宣長の著で、皇國精神を簡明に叙し、神明の道を論じて、國學の大精神を闡明した書である。宣長は又古事記傳全體によつて實質的に國體の淵源を一般に知らしめた。古事記傳が尊皇運動に與へた刺戟は計り知られず大きい。

(15) 古道大意。二卷。平田篤胤の講述を門人が筆記したもの。平易に日本思想のあらゆる問題に就て述べたもので、篤胤學派の社會的實踐的方向を示唆したものととして重要である。彼には尙、古史通

其の他國學關係の著述が多い。尙、篤胤の態度は、彼以前の國學者の書齋的なものと異つて行動的な言行が少くないので、その門から維新の實行運動に投じた人が多い。

(16) 中朝事實。二卷。山鹿素行の著。儒教的國家精神に基いて、上代の歴史を論じ、國體の本義、倫理道德の大本を説いたもので、その尊皇精神の強烈な事は神皇正統記に匹敵するといはれる。徳川時代の儒者の國體論・尊皇論は多數あるが、本書がそれらを代表する著述である。

(17) 大日本史。本紀七十三卷、列傳二百四十三卷、外に志・表がある。徳川光圀の絶大な尊皇精神によつて企圖編纂され、明治に入つて全部完成した尨大な史書であり、又水戸學の結晶でもある。神功皇后を后妃傳に列し、弘文天皇を本紀に入れ、南朝を正統と認めた本書が、尊皇精神の涵養に與へた功績は贅言を要しない。

尙、水戸學派の儒者に多くの尊皇論者を出した事は有名であるが、就中、藤田東湖の回天詩史、會澤正志齋の新論は代表的な述作である。

(18) 日本外史。二十二卷。頼山陽の著。武家興亡の歴史で、序論や論贊の部に示された著者獨特の史眼には見るべきもの多く、その情熱意氣の籠つた名文の中に、著者の烈々たる尊皇精神が看取される。

(19) 幕末志士の尊皇精神を代表する著述として蒲生君平の山陵志、高山彦九郎の京都日記、吉田松陰の述作等が擧げられる。そこに熱烈な尊皇精神と共に時代の先驅者たる情熱が見られる。

(20) 徳川時代の文學として、國學者の和歌、勤王儒者の詩文、志士の和歌詩文等が多數あり、尊皇と殉難の壯烈な精神は萬古不易の光彩を放つてゐる。

吾が胸の燃ゆる思ひに比ぶれば煙は薄し櫻島山 (平野國臣)

文 獻 日本文學の本質と國語教育(國語教育學會) 上代文學に現れた日本精神(野村八良) 武家時代

文學に現れた日本精神(同上) 萬葉集に現れた日本精神(久松潜一) 列聖全集(列聖全集編纂會)

國文學と日本精神(藤村博士功績記念會) 日本精神文化大系(藤田徳太郎・森本治吉)

## 一七 各時代の文學に<sup>現れ</sup>たる<sup>たる</sup>神及び神國の意識に就て述べよ

文學といふ言葉を文藝の書だけでなく、廣く國文學全般と看做して此の問題を考へて見るに、先づ大和時代の文學で「神」に關係深いのは、古事記・日本書紀の神話と祝詞を主要なものとする。次いで萬葉集・風土記の類がある。

神話に見えるものは、神話の全體系に現れたものと個々の神々の性質に現れたるものとに分ける事が出来る。全體系としては、宇宙は高天原と葦原中ヶ國と黄泉國と三段に分れ、別に海の國、常世の國があるが、此の中、高天原は神の國であり、此の神の國の統治者たる天照大御神の勅命によつて天孫が降臨されて、地上に於ける皇室の御營みが始まる。此の皇室の歴史を説く事が、我が神話の根幹

である。斯く神話の種類が、主権者の發展を説き、民族・國家の展開を説く事にある、といふ神話をもつ國民は、ローマに若干の類似を見出すは、全然世界に類型のない日本神話の大特色である。

次に古代の神々の個々の性質を見るに、物素神・自然神・人格神に分れるが、就中、自然神に於て農業其の他の産業に關した神、人格神に於て國家經營の神が多くて、その反面に動物神や文化神の極く少い事を日本の神々の特色とする。尙、後世の神觀念に比べて素朴な物素神や自然神が多く、之を恐れて町重に祭つた事に注意される。

此の時代に特筆すべきは、次の皇室に關する神格信仰である——最古代日本は發政一致であつて、天皇は所謂現人神あひとであり、日本は祭と政との兩者が此の現人神を中心として行はれた。且つ現人神は御代々繼承せられて天地と絶ゆる事なしと信じられてゐた。而してその不滅の繼承の象徴として三種神器が代々承け繼がれてゆく。之が記紀萬葉等に現れた古代の信念であつた。

次に祝詞に現れたものでは、祭が政治の中心であり、皇室・國民・國家の安寧は偏へに神の意志によるとして、之に寄り繼つてゐる事が注意される。天照大御神が特に町重に祭られてゐるのも此の意味である。と同時に神の威光を迎へんとして神を怖れて多數の供物を捧げて祈つてゐる事が注意される。又穢は惡であり不幸であるとして心身を祓ひ清めん事を神に祈つてゐる事も注意すべきである。

平安朝に入るや、實生活に於ける神の意識は甚だ微弱になり、寧ろ佛敎に壓倒された。それと同時



に神佛習合の思想が起り、神に權現の名を附して、神は佛の權の姿を現したものであるといふ本地垂迹説へ到達した。文德實錄の貞觀八年の條にある僧惠亮の表文に始めてその思想が見え、大江匡房の續本朝往生傳には石清水八幡の生身の佛は八幡大菩薩であるといひ、同じくその著江談抄の中には、民部卿俊明の言葉として、伊勢神宮の本地佛は盧舍那佛即ち大日如來である、と書かれてゐる如きが、その例である。

鎌倉・室町時代に至つて神佛習合の風習は益々強く、所謂本地垂迹とか和光同塵などの考へは、神道五部書等の神道關係の書に見ゆるのみならず、軍記物及び新古今の神祇部の如き國文學書にも見え、古代及び近世以後に比し著しい對照を見せてゐる。併し純粹な神への信仰はもとより衰へず、軍記物及び水鏡・増鏡等の歴史物語、徒然草等の隨筆、お伽草子・舞の本・謡曲(一〇六項參照)等に之を見る。

特に中世時代の特色として、神の觀念が、家及び國と結びついてゐる事に注意される。源氏と八幡菩薩、平家と嚴島明神との關係はもとより、武士はその家々に固有の神を信仰した。それは祖先神である場合、在住の土地の神である場合、及び特殊の事情によつて或る神に結びついた場合と分れるのであるが、何れにしても生死を圖られぬ武士が神を信じ、その守護を祈念する深さは公卿階級の比ではなかつた。

次に神と國家思想との聯關は、軍記物就中太平記に著しく見える。又、増鏡にも承久の亂・元弘の

亂の記事に強く現れ、神皇正統記では全篇に此の色彩が窺はれる。此の時、三種神器の信仰が強く、その所在如何によつて皇位の正閏を定めんとしたのは、亂世の出來事として興味を惹かれる。

徳川時代は總じて文學から神意識は消滅して了つた。唯、契沖・春滿以下の國學者の間に古道が究明されるにつれて、「我國は神國なり」との意識が強調され、眞淵を経て宣長及び富士谷御杖・橋守部等に至つて、夫々独自の形で古代の神に對する研究をその著作に投影してゐる。それ等が平田篤胤に至つて、最も明瞭な形で古代神道の體系的の研究を樹立し、それが明治維新の原動力とまでなるに至つたのである。

文 獻 比較神話學(高木敏雄) 古代詩歌に於ける神の概念(久松潜一・志田延義) 中世に於ける精神

生活(平泉 澄) 神道史(清原貞雄) 日本神道史の研究(小林健三) 其の他前項參照

## 一へ 紀行文文學に就いて略述せよ

紀行文文學とは、旅行をした時の狀況を文學的に表現したものをいふ。それは日順を追うて自己の行動・感想を記したものが多い點から、日記文學の一種として取扱ふ事も出来るのであつて、平安時代の日記文學なる土佐日記は、内容の性質上からは紀行文文學といふ事が出來、又、更級日記の前半なども、紀行文の性質を帯びてゐる。鎌倉時代の十六夜日記も、内容は紀行文文學に屬するものである。

旅先では、見るもの聞くものが珍しく、又、旅愁を覺えたりして、種々の深い感慨が催されるものであるから、自然、歌を詠ずるやうな場合も多い。さうして、旅行をするからとて、必ずしも日記的に日月やその旅行地の行爲などを明細に記述するものばかりでなく、此の點、日記文學の性質を喪失して、その代り、旅先の詠歌ばかりを集め、之に、その作品の作られた土地とか、そこに旅をした時の様子などを、詞書風に説明して書きかへ、和歌を主とする場合もある。早く萬葉集の卷十五の前半、遣新羅使の一行の旅行に關する歌を集録した部分に之を見る事が出来る。平安時代の庵主といふ書なども、歌集の一種として取扱はれ、又日記文學として考へるべきであるといふやうな説もあるが、上述のやうな意味での紀行文學として、取扱ふ事の出来る部分がある。

右のやうな歌集的性質を持つ紀行文學に於て歌の代りに俳句をもつてしたもの、江戸時代の俳文の一種たる紀行文である。奥の細道の如きは、その代表的作品である。之は又、日記文學としても取扱はれ得るものであるが、普通は日記として考へず、同じ著者の、のざらし紀行・鹿島紀行・更科紀行・笈の小文などと共に、紀行文學と見られてをり、又特殊の紀行文學として、俳文の一種としても取扱はれてゐるのである。俳文の中には、斯かる日記文學や紀行文學に屬する作品が甚だ多い。

日記には、旅行者自身を主とせず、行幸のお供をしたりして、その行幸の御模様などを記述するを主としたものがある。之は自己の經驗を主としてゐる點では、他の日記・紀行の類と同一の性質を有し

てゐる所もあるが、記述の目的・主體となるものは、他の日記・紀行類と異なるのであつて、別種の性質の紀行文學に屬する。平安時代の高倉院嚴島行幸記などは、此の種類に屬するものである。

純粹の意味の紀行文學は、日附や地名の備忘・記録に過ぎないやうな純然たる日録に走らず、而もやはり、日々の様子に主要を置く點では、自叙傳的な日記文學の類とも性質が異なり、又歌集の性質も濃厚ではなく、而もあくまでも旅行者自身を主とした記述で、記述の目的・對象も旅行そのものであり、旅行地の様子の報告にとどまらずして、作者の心の動き、感情・體驗等を交へて、之を文學的に表現したものでなければならぬ。さういふ意味での紀行文學としての、特殊の性質が明かになつたのは、鎌倉時代に入つてからで、以上述べたやうな日記・歌集などの何れの性質からも離れ、又その何れの性質をも混融したやうな性質のもので、海道記や東關紀行の如きは、此の意味の紀行文學の完成せられた性質を有する作品であり、阿佛尼の十六夜日記も、寧ろ日記文學に屬する性質のものではなく、鎌倉時代に完成せられた紀行文學の代表的作品といふべく、同じ著者のうたゝねの記等と共に、やはり此の時代の特種の文學類型を持つものとして、紀行文學の部類に入れるべき作品である。

明治時代以後では、大町桂月・田山花袋などが紀行文學として、獨特の文學を多く出してゐるが、此等は舊來の紀行文とは違つて、新時代の氣息いぶきの多分に吹込まれてゐる、新しい紀行文學である。即ち旅行地の氣分や事物に對する著者獨特の觀察や經驗を叙述して、地方的特色が躍動してをり、風物の

如き自然描寫も的確で、舊來の紀行文學の如く、作者の主觀的な心持や表面的な經過の地の表出にとどまつて、地方的特異性の分明でないやうな作品とは甚だ異なり、近代文學の一部として、新しい文學的價値を持つやうになつた。

文獻 日本文學講座第五卷隨筆日記篇(改造社版)

日記・紀行・隨筆(玉井幸助 岩波講座國語教育)

## 一九 國文學に於ける韻文の形式を説明せよ

わが國の古來の韻文文學としては、和歌・俳諧の様に傳統の長いものを始め、各種の形式があるが、それを發生年代の順に従つて概説してみる。

先づ古事記・日本書紀の時代は、未定期期ともいふべきで、一句の音數が三音、四音、五、六、七、八音等から成り、長さも長短不揃のものが混在してゐた。それが次第に五音及び七音に統一された。その結果、五・七・七音の片歌(かたうた)(次項)、五七七七七の短歌(たんか)、五七七七七の旋頭歌(せづつか)(次項)が發生した。次いで萬葉時代に入るや、長詩形も統一せられて、五七・五七・五七……と重ねて行つて、最後を五七七で結ぶ長歌(ちやうか)(次項)に歸一した。此の長歌の次に短歌の形を添へて反歌(はんか)と稱する事が持統天皇の頃から流行した。一方奈良の薬師寺の境内に佛足跡歌碑(次項)が建てられ、それに短歌形式に七音の一句を加へた六句歌體の歌が刻まれた。之は當時一部で流行した謠ひ物であつたらしい。

次に、平安時代に入ると、古今集の眞名序に混平歌の名が見える。之に就いては次項を参照された。又、此の平安初期に、神樂・催馬樂・東遊・風俗などの歌謡が行はれた。此等は短歌體のものが多いが、一定した形式といふものは求められない。而して平安朝を通じて純粹の文學詩としては、ひとり三十一字の和歌が榮えた。長歌・旋頭歌其の他は實質上、此の期に皆滅亡した。

併し、謠ひ物の方は、平安朝中期に朗詠が流行して、漢詩の佳句や和歌に節をつけて歌つた。又、佛の徳を稱へた和讃、當時の人情風俗を歌つた今様の類が平安末期から鎌倉にかけて流行した。之は七五調を基礎とし、長さは長短様々である。

次に、和歌を上下の二句に分けて二人で作る連歌の形式は、其の發生は萬葉時代に始まるが、平安朝に次第に一般化され、その末期に、三句以上を連ねる所謂鎖連歌の形が發生し、之が鎌倉・室町を通じて盛行し、吉野朝の後は遂に和歌を壓倒するに至つた。

さて、鎌倉時代に入るや、平家物語を琵琶に合せて歌つた所謂平曲、及び宴席で歌ふ七五の美句を連ねた長い詩形の宴曲が又流行した。此等の謠ひ物は、室町期に至つて衰へ、代つて謠曲が能なる劇の詞曲として行はれ、また隆達を始め小詩形の小唄の類が行はれた。

一方、文學的な詩として、俳諧が生じた。之は室町期に、連歌の中の滑稽的な一派が獨立したものであるが、やがて眞面目な分子も加はり、遂に連歌に取つて代つて和歌と相並ぶ文學詩として、江戸

期に榮えた。又、室町の頃から連歌の第一句即ち發句（五七五音）は獨立して俳諧とは別に作られる習はしとなつた。

江戸時代には、各種の韻文が發生した。和歌からは、滑稽的な狂歌を生み、又、和歌を上下に二分して、下の句を出して上の句をつける遊戯傾向即ち「前句附」が甚だ流行し、その前句だけが獨立して遂に川柳（又は柳條ともいふ）が發生した。別に冠附（次項參照）等の所謂雜俳も行はれた。

此等と並んで謡ひ物は、近世初頭に三味線が輸入されると共に、それに合せる爲に、形式に大變化を生じた。即ち、平曲から發生した淨瑠璃が、三味線に合せて大に行はれる事となり、それは、人形劇に結びついて人形淨瑠璃となり、獨立した謡ひ物としては、文彌節・一中節・河東節・大薩摩及び、豊後節・常磐津節・富本節等を派生した。それらから更に清元・新内などが派出して行つた。

最後に、明治期に入つて、純粹文學詩の新種として明治十五年外山正一・矢田部良吉・井上哲次郎三氏により「新體詩抄」が生れた事から、七五の詩句を長く連ねた新體詩なる新詩形が生れた。之は明治末期、七五の定音を撤廢した所謂自由詩が發生したが、兩者並んで、現在に及んでゐる。

和歌も明治末期に、口語歌の運動が起り、俳句も新傾向俳句なる自由形式のものが現れたが、何れも在來のものと相並んで現在に至つてゐる。

文 献 日本歌謡史（高野辰之）

古代歌謡の研究（藤田徳太郎）

日本詩歌形式論（渡邊吉治） 日本詩歌

の體系(見山信一) 新講和歌史(同上) 明治大正詩史(日夏耿之介)

## 二〇 本邦律語詩(韻文)の中特殊なる詩形を有するも

### の七種を擧げてその詩形を示せ

此の問題の「特殊なる」といふ言葉の解釋如何で、答が異なるのであるが、普通の三十一音の和歌、十七音の俳句、七五調の新體詩を通常の詩形と見、それ以外のもの七種を選んでみる。

先づ古代に榮えた形式に、長歌・片歌、佛足石歌體歌・旋頭歌があり、平安朝に見えるものに混本歌があり、平安朝・中世にかけて連歌があり、近世のものとして冠附がある。(或は、冠附の代りに平安末期の今様の如きを擧げ得るかも知れない。)

一、長歌 記紀歌謠時代は歌形が一定しない。故に長歌の實際作品は此の期に見えてゐるが、長歌といふ一定の考へは、萬葉に三十一音詩を短歌と呼ぶに至つて、その對照として考へられたものである。而してその實際も記紀時代は一句の音數も、三音・四音又は五音や八音などと一定せず、句の長さも不定であつた。それが一句は次第に五音と七音に統一され、遂に萬葉の持統天皇頃から、五音と七音とを、五七・五七と重ねて行つて最後を五七七の形で結ぶことに略一定した。併し、此の詩形は萬葉末期には既に短歌に壓倒され、平安朝には殆ど衰滅して了つた。但し、擬古的な意味では近世



及び明治や現代までも作られてゐる。又、平安朝から中世にかけて、「短歌」といふ名で長歌をさす習慣が存在した。

二、片歌 記紀の歌謡に見えるものである。次の如き五七七の三句の歌形をさす。

はしけやし 吾家わがの方よ 雲居ぐも起ち來も (古事記中卷 倭建命の御歌)

之をなげ片歌と云ふかは、五七七五七七の六句形の半分——片方といふ意味であるらしい。而してその「片方」に就いては、詩の分量から見た片方とする説と、歌ひ方から見て片方だといふ音楽的な見方とあつて、まだ定説が立たない。

三、佛足石歌體歌 天平勝寶四年、印度から傳はつた釋迦の足跡といふのを石に彫り、その石の上に二十一首の歌を彫つた別の石を建てた。二十一首は、佛道及び此の歌碑を讚美した十七首と、「呵な嘖な生死なと題した四首とである。それを佛足石歌碑といふ。歌碑の作者は文屋真人智努ふぢやのまひとらぬといはれる。

石は奈良の薬師寺に建てられ、中途亡佚し、後復活し現在に至つてゐる。而してその歌形が、  
よき人の まさ目に見けむ みあとすらを 我はえ見ずて 石いしにゑりつく 玉たまにゑりつく

の如く、短歌形式に七音の一句を附加した特殊な六句形であつた爲注目されてゐる。之は萬葉卷十六越中歌民謡に一首見える外は殆ど類例が無いが、節を付けて歌つた歌謡の形であつたらしい。

四、旋頭歌 實質は記紀時代に存するが、此の名稱を實際使つて流行したのは萬葉時代である。

君がため 手力疲れ 織りたる衣ぞ 春さらば いかなる色に 摺りてば好けむ (萬葉卷七)

の如く形は五七七五七七の六句形であるが、元來は初の三句と後の三句とは別人が作つて、掛合的に應答したものであつたらしい。それが萬葉では一人で作るものとなつて了つた。平安朝に入るや、その實質は殆ど亡びたが、古今集の眞名序にその名が見え、又、右の歌形と異つた單なる六句の歌を指して旋頭歌といふ習慣が平安末期まで殘存した。名の意味は審かでないが、大體頭句(第一句)にかへるといふ意義らしい。而してそれが歌形から見て、第四句は五音だから、第四句で頭句と同形に戻ると見る説と、高野博士の様に、歌ひ方の上から第四句で第一句の節せうに戻るからだといふ説とあつて一定しない。

**五、混本歌** 古今集の眞名序に長歌・短歌・旋頭歌と並んで記す歌形であるが、その實體は審かでない。従來の見解を挙げると、第一は、奥儀抄・八雲御抄の様に、

あさがほの 夕かけ待たず 散りやすき 花の世ぞかし

の如き四句歌體を指すといふ説。第二は、六句歌體で旋頭歌の別名と見る説、即ち喜撰式、近世の學者宣長・守部・近藤芳樹の唱へる説である。第三は、混本とは、歌の根本要素を混へ含むと見る説で、片歌若しくは五七音連續の長歌で結句のない偶數歌形のもの指す、と見るので、五十嵐力氏の説である。此の三説何れも確實な根據に乏しく、決し難い。

六、連歌 一〇二項(三四)に説くので諒承せられたい。

七、冠附 「笠附」「烏帽子附」とも云ひ、元祿頃から江戸中期に行はれた滑稽的詩歌の一つである。

點者が五音の題を出し、之に各人が七・五の二句を附けて俳句と同じく十七音の句になす遊戯的な試みである。例へば、「よりあうて」に對して「笠にある名で呼び生かし」と附ける如きである。

此等の外に、前に記した様に、七五七七五七七五の詩形なる今様歌(參照)の如きがあるが、之は純粹な謡ひ物であり、純然たる謡ひ物には尙各種の形式があり得るから、こゝに省いた。又、江戸時代には、狂歌・川柳があるが、之は形式としては夫々短歌と俳句と同じであるから、今擧げない。

文献 國歌の胎生及び發達(五十嵐 力) 其の他前項のものと同じ)

## 二 道行文の發達に就いて記せ

### 三 道行文の特色を擧げよ

道行文とは、古代の歌謡に於いて發達したものである。即ち、記紀の歌謡に發し、萬葉集の長歌にも亦之を見る事が出来、平安時代末の今様に於いて、道行としての意識が明確となり、鎌倉時代に入つて、長足の進歩を遂げ、宴曲の長篇の道行の歌謡となり、戦記物に至つて、道行文の完成を見たのである。それ以後、江戸時代の戯曲等にも、道行文が見えるが、何れも戦記物の道行文の模倣にとど

まつてゐる。

上古の伎樂、平安時代の舞樂に於ては、舞人が舞臺に登場する際に奏せられる音樂を道行(みちゆき)と稱してゐた。その名稱を襲うて、猿樂の能に於いても、能の初め方に、道行と稱する歌詞の存するものが多く、江戸時代に入つて、淨瑠璃に於いては、節事として、道行の挿入は、觀衆の興味を引く重要な要素となつてゐた。又、歌舞伎でも、道行の所作事が多い。

此の道行文の氣分は、明治時代となつて紀行文の中に稍々搖曳してゐるものがあるが、純粹の意味の道行文は、江戸時代までで、明治以後、舊文學の没落と共に全く亡んでしまつたと云つてよい。

道行文の特色は、一、表現が大體において韻律文の形式を持つてゐる事が挙げられる。之は、前述の如く、道行文が音樂・歌謡と密接な關係があり、寧ろ歌謡的表現として、道行文の發達して來た事を考へれば、當然の現象であると思はれる。平家物語卷十の「海道下りの事」の

相坂山をうち越えて、瀬田の唐橋駒もどりと踏み鳴らし、雲雀(つばき)上れる野路の里、志賀の浦浪春かけて、霞に曇る鏡山、比良の高根を北にして、伊吹の嶽も近附きぬ。

太平紀卷二の「俊基朝臣再關東下向の事」の

憂きをばとめぬ逢坂の、關の清水に袖濡れて、末は山路を打出の濱、沖を遙かに見渡せば、鹽ならぬ海にこがれ行く、身を浮船の浮き沈み、胸もどりと踏み鳴らす、瀬田の長橋打渡り、行きかふ人に近江路や、云々。

といふやうな、道行文の代表的な文章を見ても、他の箇所の記事と異なり、之が七五調の韻律を基礎とした文章なる事は明かであらう。

二、従つて又、それは他の歌謡と共通の特色ある表現を有してゐる。例へば、掛詞や縁語を用ゐるといふ事や、有名な古歌を多く引用するといふやうな特色が認められる。

三、道行文は、或る土地を出發して、或る土地に到着するまでの、経過する種々の土地を示す事が目的である。併しそれは多分に美文的文章であり、歌謡的であつて、實際に、それらの経過する土地の景色などを描寫しようとするのではなく、又、旅行者の旅行の状態や経験を忠實に記録しようとするのでもなく、ただ、土地の名稱が美化された修飾の詞で概念的に表現せられてゐるのみである。その間に多少、人物の有してゐる心情・感慨といふやうなものの披瀝せられてゐる所もあるけれど、概ね概念的な表現に過ぎず、さういふ點では道行文としての表現の類型が完成せられてゐるのである。その點において、道行文は、紀行文とは全く異なるものである。

四、道行文の發達に關しては、物盡し、揃物の發達と密接な關係があり、兩者は同一の動機、同一の欲求より出でた、等類の表現である。従つて、地名の列記といふ事は、道行文の重要な要素であり、此の骨組の上に、美しい修飾をもつて肉付けをしたものが道行文である。

文 献 日本歌謡史(高野辰之) 道行と詞(加藤順三 近松詞章の研究) 古代歌謡の研究(藤田徳太郎)

日本文學素描(志田延義)

二三 浦島傳説・羽衣傳説・義經傳説を取扱ひたる文學的

作品を擧げ、その作者竝に成立時代に就いて記せ

二四 曾我傳説に取材せる文學作品を擧げ、その作者及

び成立時代に就いて記せ

浦島傳説

釋日本紀卷十二に引いた丹後風土記に見えるものが、詳細な記載として最も古い。之は

古風土記の一部と信じられるが、作者・成立年代共に不明である。次に、萬葉集卷九に出てゐる水江浦島子を詠んだ歌は、高橋連蟲麿歌集に出てゐるもので、高橋蟲麿の作と思はれる。大寶律令の撰定に携つた伊與部馬養にも浦島子傳の著があつたが、現存の浦島子傳はその後の人が作つたものであらうといふ。之に續いて、延喜二十年に成つた續浦島子傳が現れてゐる。室町時代では謡曲の浦島、お伽草子の浦島太郎がある。江戸時代の作品には、浦島傳説を取扱つたものは甚だ多いが、近松門左衛門の浦島年代記が名高い。明治以後では、幸田露伴の新浦島、森鷗外の玉筐たまぐし兩浦島、坪内逍遙の新曲浦島等がある。

羽衣傳説

上代では、帝王編年紀に出てゐる近江の伊香いかの小江をえの傳説が古いものである。之は古風

土記の一部であるといふ説もあるが、明證はない。又、類聚神祇本源・元々集・古事記裏書等に引いた丹後風土記の比治ひぢの眞井まゐの傳説も、羽衣傳説の一種と思はれる。本朝神社考卷五に引いた駿河風土記の三保松原説話は、羽衣傳説の直接の祖であらう。併し此の傳説が有名になつたのは、室町時代の謡曲羽衣が出てからである。又、竹取物語のかぐや姫も羽衣傳説の天女から出たものかと思はれる。

義經傳説 之に就いては、二三二頁に説くので承知せられたい。

會我兄弟の傳説 義經傳説と相並んで、後代の文學に多くの影響を與へてゐるが、之を取扱つた最初の作品は、室町時代の會我物語である。謡曲の會我物としては、調伏會我・元服會我・小袖會我・夜討會我・禪師會我・十番切等があり、幸若舞曲には、切兼會我・元服會我・和田酒盛・小袖會我・劔讚敷・夜討會我・十番切等がある。

江戸時代になると、近松門左衛門の淨瑠璃に、世繼會我・根元會我・會我七以呂波・百日會我・會我五人兄弟・加増會我・本領會我・會我扇八景・會我虎が磨いしらす・會我會稽山等が作られ、その他戯作類に之を取扱つたものは無數にある。歌舞伎では、會我對面の方が有名で、江戸においては、正月狂言に必ず之を出し、又正月には會我狂言を上演する習慣になつてゐた(京坂では盆狂言に會我狂言を出したが、後廢れた)。かの歌舞伎十八番の助六の如きも、やはり會我狂言の一で、助六實は五郎、白酒賣實は十郎である。

文獻 萬葉傳説歌考(川村悅磨) 浦島と羽衣(中田千畝) 上代の國語國文學(橋 純一) 傳説歌謠

(西村眞次) 日本神話傳説の研究(高木敏雄) 仇討文學としての曾我物語(山岸德平 日本文學聯講中

世篇) 曾我傳説と國文學(國語と國文學 昭和八年四月特輯號)

## 二五 古典研究の意義に就いて述べよ

之に就いては、先づ、「古典」とは何か、と云ふ事を考へて問題の對象を限定し、次に、何の爲に古典は研究されるか、と云ふ目的の點を明かにし、最後に研究の手段方法を就いて考察したならば、大體與へられた事柄への解答となり得よう。

「古典」とは何ぞや、と云ふ事に就いては、二つの答がある。一つは、現代の作品でない過去の時代の典籍が古典だ、と云ふ唯時間的・時代的標準だけによるもので、甚だ廣義の見解である。

之に對する別の立場は、古典の決定を、性質的な、或は價值批判的な標準によらうとするものである。即ち、古典とは、何等かの意味に於て——或は道義的・或は宗教的・或は政治的・或は文學的意味等——吾等に模範となり、吾等の生活を指導する指標的性質を有する書籍を云ふ、と見るのである。

すると、その數は勿論少く限定されてしまふ。さうして、その残つた少數は、上記の各種の意味から見た代表的作物と云ふ事になる。此の場合注意すべきは、斯かる決定の際、その限定のとり方に一定不變の標準と云ふものは無いと云ふ事實である。第一、意味のとり方が、道義的な意味からする事も



あらうし、藝術的意味からする事もある。兩者は勿論異なる。従つて一つの作品が、前の意味からは古典であり得、後の意味からは古典であり得ない場合が起る。甚しきは、甲の意味と乙の意味と全然相反し、源氏物語は文藝的には古典だが、國民道德上からは古典でない、と云つた論争が起る(之は數年前の事柄である)。之は、意味のとり方から起る。違であるが、その他の原因からも相違は起る。即ち、同じ「文學的意味」からの古典と云つても、時代により場所により人によつて、「文學」は違ふ。或は「何う云ふのが良き文學か」が違ふ。すると當然、文學的古典とか、古典的な文學、と云つたものも變化せねばならなくなる。他の道義的・宗教的等の場合も、それ／＼の内部に同様の問題は起り得る。

斯くて、第一の立場からは「古典」とは一定不變であるが、第二の立場では「古典」は常に動搖する。否、動搖してゆく姿にこそ人類や國民の進歩の段階を見出せる、とさへ言へる。

次に、人は何故古典を求めめるのか、と云ふ問題である。ひと口に言へば、現代に無い分子を其處に求めてゐるのである。それは、エキゾチックなものを慰の爲に求めると同様、好奇や刺戟の欲求からである。

併しその片方に、より有意義な、言はばより積極的な求め方がある。それは、生活なり、文學なり、將來の進路を其處から探し當てようと、望む場合である。此の時、古典に觸れる事によつて、その時代なり、文學相なりが新しい生命を吹込まれる時は、所謂、ルネッサンスである。中世の伊太利

が、希臘を再認識し希臘の古典に觸れる事によつて所謂文藝復興が起つたが、日本で云へば、契沖・春滿・眞淵等が古事記・萬葉に新たな態度を以て接觸して古學——國學の運動を喚發した如き、小にしては、實朝や子規が萬葉と云ふ古典に觸れて、深刻・活潑な文學的復興を成就した如きである。此等は、古典の享受し方の中、最も意義ある價值高き受取り方である。而して、此の場合は勿論、上記の「古典」の意義の内、第二の、性質的・評價的意義の古典である。意義の認められぬやうな典籍を指標に撰む筈もなく、撰んで所期の目的を果せる筈も無い。

最後に、古典を研究し又は享受する上の、方法的注意を考へる。

「古典」には上記の二種の意義があるが、その何れの場合にしる、「古典」と名のつく以上、時間的に現代との距りを持つてゐる書籍に違ひはない、すると、その年月の距離の爲に、先づ、記載してある文字、又は文字の用法の異つて讀めない場合がある(萬葉假名)。次に、言語が其の發音や法則やの現代と相違する場合が起る(日本古代の發音が六十數音だと推定せられ、各時代毎に語法を異にする如き)。更に、文學の素材や、表現やが違ひ、文學觀も自然相違する。従つて、卒然として無準備のまま之に接する時は、古典は讀み難く理解し難いのが普通である。所謂、印象批評や文藝直觀を尊重する側からは、豫備準備無き享受の可能や必要やの説かれる事が少くないが、凡そ古典と名のつく程のものには、それは不可能である。桶口一葉をすら、現代の二十歳代の人には完全には理解出來ぬ事實を想起してみるといふ。

而して、斯う云ふ自國の古典を、現代の理解へ持ち來たす爲に、國語學・國文學は存在する。是、國語國文の作業中、解釋的性質のものが甚だ多量であり、各學校の授業の大半以上が、此の解釋に捧げらるる現象の起つた所以である。

斯くて、文學や言語の障礙を征服し、表現を理解し、素材への認識を深め、次いではその文學の背景ともなり、成立の要素ともなつた時代や環境への知識を獲得して、古典のありし姿を、吾が腦中に再現する事を必要とする。直觀的享受の態度とは凡そ反對であるが(それは亦それで、有意義であるが)、いやしくも「研究」の名に値する學的作業は、此の方角に進む事を本道と見ねばならぬ。而して、斯かる享受の結果、吾が文學創作に、吾が世界觀に寄與すべき有意義なる收穫を掴む事が、望ましい。

文献 古典批評號(文學 昭和十二年四月特輯)

## 三六 明治末年以前に於ける外國人の日本文學研究に

就いて述べよ

明治維新による海外との正式の交通の行はれる迄は、外國人の我國文學研究の手だてと云ふものが無かつたが、それでも既に弘化四年フイツマイヤー(August Pfizmaier)による浮世形六枚屏風の翻譯、嘉永二年には *Beitrag zur Kenntniss der japanischen Poesie* なる研究報告が同氏により發表

される等、次第に外國人による我國文學の研究が緒に就き始めた。殊に帝國大學が開設され、講師として各國文學者の招聘につれて、我國文學の組織的研究も次第に行はれるに至つた、それ等は一冊の書籍として發行せられることもあつたが、主として各國の東洋研究學術團體の定期報告の形をとり、或は新聞雜誌等に紹介せられた。その成果は――

文學史的にはアストン(W. G. Aston)の日本文學史(A History of Japanese Literature)、フロンマン(Karl Florenz)のGeschichte d. Japanischen Literatur、マースター(Cl. E. Maistre)のLa Littérature historique du Japon des origines aux Ashikaga等が、英・獨・佛各本國で發刊又は發表された。此等文學史の發表年代は大體前記三者に於ては明治三十年代の事である。此等の文學史は我國文學研究として決して充分とは云へないまでも、外國人にとつて我國文學研究の漸く目鼻立ちのついた事を意味して居る。

明治初年以來此等の文學史を用意する爲の如く、致々として各種の翻譯が行はれて居た。併しその間自から各時代の特色があり、詩歌の領域に於いて、初期以來主として萬葉・古今の研究であつたが、明治末期に至ると困難なる俳諧の翻譯が試みられ、その研究も行はれるに至つて居る。

又物語・小説等は、古事記を初め各時代に亘り、かなり細部に就いて翻譯紹介が試みられて居る。

就中チャムバン(B. H. Chamberlain)の英譯古事記、アストン、フロンマンツ各氏のNihongi

ヂッキンス (F. V. Dickins) の竹取物語、又同じくチャムブレンの大和物語等、注目に價するもの  
が多々ある。たゞ源氏物語の翻譯が、我國人末松謙澄によつて僅に行はれて居る程度で、明治末年に  
至り初めて獨逸人の試みたものがある程度であつた。尙、最近には英人ウェーリー (Waley) による  
完譯が出たのは著名な事である。

又、祝詞はサトウ (Ernest Mason Sato) 、フロレンツ等により夙くから翻譯せられ、隨筆・日  
記類は平安朝より鎌倉時代まで一應行はれて居る。戯曲、關しては菅原傳授手習鑑・假名手本忠臣藏  
等僅少なから試みられて居る。

此等は我國人の手によるものと相俟つて、海外に於ける我國文學の鑑賞の素地を作り、更に此等の  
基礎の上に諸外國人による各時代に亘つてのかなり大膽な時代研究・作品研究・作者研究が行はれて居  
る。時代研究として、ホハイト (C. A. White) 、ファウンデス (C. Pfouder) 、アストン、ボームガー  
トナー (A. Baumgartner) 等による上代文學研究、類別研究としてツェンケル (E. V. Zenker) 、フロ  
レンツの上代歌謠研究、ロイズ (Arthur Lloyd) 、サンソン (G. B. Sanson) 、ヤンソン (A. von  
Janson) 等の謡曲・狂言研究、チャムブレンの Basho and Japanese Poetical Epigram を始めロイ  
ドやフィツマイヤーの俳諧研究、各作品別には明治末年ブリアン (J. Ingram Bryan) の源氏物語を  
初め、枕草子・伊勢物語、クンツェ (R. Kunze) の淨瑠璃十二段草子より太平記に至る迄研究せられ、

作者研究としても、ホーラ (Karel Jan Hora) の Notes on Kamo Chomei's Life and Work 等があり、又現代文學として、デニング (Walter Dering)・グラマッキー (A. Gramatzky) 等の研究が發表されて居る。又小泉八雲 (Lafcadio Hearn) の中世期文學や現代文學に貢献せる所など、特記に價するものであらう。要するに、明治末年以前に於ける此等の研究中、文學史或は特殊研究に優れたものもあつたが、概して不充分粗笨の譏を免れない。併し、その後に来る外國人の我國文學研究及び我國文學界への貢献に於てよき端緒をなしたことは疑ふべくもなし。

文 獻 日本文學史表覽(沼澤龍雄) 西歐に於ける日本文學(久松潜一) 國際文化振興會事業報告

### ニ七 國語國文に關する年表・解題・索引の書名を擧

げて説明せよ

#### 一、年表

日本文學者年表 赤堀又次郎氏著。明治三十五年に出で、昭和二年に増補版が出た。之には悉曇井聲明等目錄が附いてゐる。此の書は、中古(文治元年)までなので、

日本文學者年表續編 が出でた。之は、森洽藏著、今園國貞氏補で、大正八年刊。近古以後明治時代までである。何れも、文學者を年代順に擧げ、略傳・著作物を表記した書である。

新修日本小説年表 朝倉無聲著。明治三十九年版を大正十五年に増補刊行したものの。近代日本文學大系第二十五卷の山崎麓氏編日本小説年表は、此の書を土臺として、若干の補訂を加へたもの。

但し、此の兩書とも、江戸時代までであるから、明治時代以後については、

明治初期戲作年表 石川嚴氏著によつて、明治二十年頃までの小説年表が備はり(昭和三年刊)、更に、現代日本文學大年表 齋藤昌三氏著によつて、大正末年までの作品の年表が備はつたのである。

俳諧の年表の書も若干出てゐて、

俳諧年代記 牧野望東著、明治四十二年刊。

新撰俳諧年表 平林鳳二・大西一外共著、大正十二年刊、等があり、

歌舞伎に關しては、

花江都歌舞伎年代記 立川焉馬編。文化元年まで。

續歌舞伎年代記 石塚豊芥子編。安政六年まで。

續々歌舞伎年代記 田村成義編。明治三十七年まで、があり、更に

江戸芝居年代記 等の書が多くある。以上は江戸歌舞伎であるが、京阪の歌舞伎に關しても、

大歌舞伎外題年鑑 の如き書が出てゐる。淨瑠瑠に關しては、

近世邦樂年表 義太夫之部 があり、これには解題も具はつてゐる。

日本文學史表覽 二冊。沼澤龍雄氏著。昭和九年刊。大體、年表體を基礎として、風俗その他の關係種目まで、廣く一覽表式に網羅して掲げた便利、懇切な書である。

右の様な長年月の文學現象でなく、一書籍を對象としたものでは、

萬葉集年表 土屋文明氏著。昭和七年刊。

源氏物語年立 一條兼良(湖月抄附録)等がある。

## 二、解題

國書解題 佐村八郎著。併し、之は尾崎雅嘉の群書一覽、西村兼文の續群書一覽等と共に、國語・

國文以外の書も甚だ多い。國語・國文に關する解題書としては、

日本文學大辭典 四冊、藤村作博士編が、最も完全な書である。

又、國文學に關しては、

日本文學書誌 石山徹郎氏著、昭和九年刊が、最も詳細で、かつ信憑すべき書であるが、江戸時代

以後は未刊である。次に、室町時代の小説に關しては

近古小説解題 平出鏗二郎著、明治四十二年刊の如き書が出で、

和歌には、

大日本歌書綜覽 三冊、福井久藏博士著の如き尤大な書が出でて最も備はつてをり、更に之を補ふ



べき書としては、

明治大正歌書解題 本美鐵三氏著、昭和五年刊の如きも出てゐる。

俳書に關しては、

俳書解題 角田竹冷氏著や、

俳書解説篇・俳諧書誌篇（改造社の俳句講座・續俳句講座）中に諸家の執筆がある。

歌舞伎に關しては、

歌舞伎細見 飯塚友一郎著、大正十五年刊が最も詳細である。

謡曲に關しては、

古今謡曲解題 丸岡桂著、大正八年刊の如き詳細な書も出てゐる。

新體詩に關しては、

明治大正詩書綜覽 二冊、山宮允著、昭和九年刊の如き書がある。

國語學に關しては、

國語學書目解題 赤堀又次郎著、明治三十五年刊。終に國語學著者名目録や國語學年表がある。

註釋書の解題には、

國文註釋書解題 永井一孝著、明治三十五年刊があり、之を増補訂正したものが、同氏の著の國文

學書史である。

又、萬葉集の關係書に關しては、

萬葉集書目提要 木村正辭博士著、明治二十一年刊があり、

萬葉集研究書目解題(萬葉集選釋の附録) 佐佐木信綱博士著、大正五年刊。

萬葉集年報 萬葉三水會編、昭和五年以來毎年、その前年の萬葉關係の著書・論文・講演・各大學講

義・卒業論文迄も收録解説する。現在第七輯迄發行された。

源氏物語に關しては、

源氏物語研究書目要覽 藤田徳太郎著、昭和七年刊。等がある。

### 三、索引

萬葉集類句 同名の二書があり、共に萬葉の類句の索引書。一は長野美波留著、寛政十一年成立。

一は賀茂季鷹著、文化三年刊。

萬葉集類林 海北若沖著 最も早く出た萬葉語の索引書

萬葉集總索引 四冊、正宗敦夫氏編。二冊は本文篇で、萬葉古寫本の異同を校定し、一冊は單語篇

(之が部)、もう一冊は漢字篇・丁數篇・諸訓説篇である。精密有用な索引で、解釋及び國語學に廣く

利用されてゐる。

國歌大觀 松下大三郎・渡邊文雄共編。明治三十六年刊。二冊。歌集部(初撰集・准勅撰集及び歴史)と索引部より成る。索引は五十音順で、之によつて書名と番號を知り、歌集部に檢索する。

續國歌大觀 松下大三郎編。大正十五年刊。二冊。歌集部(主に家集・歌合及び古今和歌六帖の歌)と索引部。

日本隨筆索引 太田爲三郎氏編。大正十四年刊。明治三十四年刊行の書の増訂であるが、更に、續日本隨筆索引 が昭和七年に出た。此の兩書とも、國語・國文研究上益を受ける事が多いが、寧ろ一般文化に關するものである。

江戸時代小説 脚本 浮瑠璃 隨筆 髷刻物索引 尾崎久彌氏編、昭和二年刊。

國語國文雜誌 研究論文索引 京大國文學會の雜誌「國語國文の研究」及び「國語・國文」の増刊として三冊に分つて刊行せられ、市川寛氏が主となつて編纂したものである。

ニハ 我國に於ける甲冑・裝束及び官職に就きて參考書を二示せ

ニニ 官職・服飾・武器に關する參考書を擧げよ

## 一、官職

官職秘抄二卷(平基親) 職原抄二卷(北畠親房) 官職備考七卷(三刀帶刀) 官職知要(里見安直)

職官志六卷(蒲生秀實) 官職制度沿革史(小中村清矩) 官職要解(和田英松)

## 二、甲冑

甲冑圖式(栗原信充) 中古甲冑製作辨(柳原長俊) 尙古鎧色一覽(本間百里) 鎧着用次第(伊勢貞丈)

甲冑着用圖(松岡明義) 日本甲冑の新研究(山上八郎) 日本上代の甲冑(末永雅雄)

## 三、武器

武器要説・兵具雜記(高坂昌信) 本朝軍器考(新井白石) 軍用記・武器考證(伊勢貞丈) 平義器

談・五武器談(伊勢貞丈)(軍記物語の武器に就いて論證す) 武器袖鏡・刀劔圖考(栗原信充) 武家名目抄(塙保己一)(武家は

の官職・甲冑・武器・服飾一般に通ずる參考書) 日本古代武器説(黒川眞頼)

## 四、服飾裝束

歷世服飾考(田中尙房) 服色圖解(二册 本間游清) 裝束要領抄(壺井義知) 裝束圖式・冠帽圖

會・裝束織文圖會・織文圖會・禮服用圖・裝束着用圖・女官裝束着用次第・近代女房裝束抄・裝束集成

(著者未詳) 服飾管見・服飾漫語(田安宗武) 服色部類(大塚嘉樹) 裝束圖解・服制の研究(關根正

直) 日本服飾史(櫻井 秀) 日本服飾史論・日本服飾圖説(高橋健自) 日本風俗史綱容儀服飾

篇・歷代風俗寫眞大觀(江馬 務)

## 二 上古(大和時代)

### 三〇 上古文學の特色に就いて述べよ

奈良朝以前の文學を、「上古文學」と云ふ名で概括して、こゝにその特色を考へてみる。

第一に、その「在り方」を考へてみるに、平安朝や明治時代の文學が、文學として獨立して居り、創作の目的は文學美を目指してゐたのと違つて、最古代(神代)では、文學は、神話や歴史傳説說話や祝詞の如き祭祀の詞などと共に(或は、それらの内に含まれて)存在した。歌謡の如きは、舞踏や音樂と共に存在した。之を要するに、宗教・政治・日常生活等の功利的對象物の一部として存在し、文學自體として認められてゐなかつた。而して、大化改新後になつて、懷風藻・萬葉集所載の専門歌人の作品の如きが現れ、奈良朝中期には歌經標式の如き歌論書まで著述されたのは、之を文學の「在り方」から云へば、文學が獨自の性質と價值とを認められたものと解される。斯くて、獨立性の確立と前後して、専門的歌人が現れて、從來の民謡的・衆人的文學のほかに、個人的作品を生むに到つた。又、それら作家による、文壇の如きも現れ、流派や文學的傳統の意識も出現した。

尙、之も「在り方」の一要素として、最古代に於ては、文學はすべて、口から耳へ傳はり保存された。所謂、口誦文學の時代である。それが持統帝の藤原京時代——人麿の頃から、漸く文字に依存する記載文學の時代と變つた。前者は、流傳に際して變化し易く、在り方に於て節まはし・音樂・舞蹈等と伴ひがちで、又すべて衆の文學的色彩に富む。後者は、不變的で、目のみに訴へる文獻として存在し、個人の文學——純文學的色彩を帯びる。

次に、素材の上から見るに、宗教の勢力が強く、政治は祭政一致、日常生活は萬事を宗教や卜占に依存して決する慣習であつたから、「神的」な素材が夥しい。神話・祝詞又は各種の呪術や迷信を材とした文學の氾濫が之である。空想的な説話や、山や動物が人間の如く言行する説話の類も之に屬する。

人事的素材は如何と云ふに、記・紀に見える、國家の創生發展、皇室の由來等の國民的・民族的素材を最大の特色とする。又、戰爭・狩獵・文字どほりの酒もり等は、奈良朝以後の純文學傾向時代には早くも極減した原始的素材である。更に、自然的素材に就いて言へば、記紀時代には、自然は美的衝動の目標となるを得なかつた。當時は自然は、大方は神の一種として尊崇されるか打勝ち難いものとして怖れられてゐた。それが、文化の進歩は、自然を産業的に利用する事を覚えさせ、その利用の技術が進むにつれて自然(或はその若干部分)は人界と平等になり、こゝに始めて美の對象、文學の材料として登場する事となつた。之は、大化改新以後で、萬葉集卷一額田王の春秋の美的特質を決する長歌の如き

は、その殆ど最初の記録として注目される。而して、聖武帝の頃——赤人の以後頃から、自然は生活又は文學の裝飾的用途にさへ使はれ始めた。之は、平安朝に入つて愈々激しくなる傾向である。

次に、表現の點を見るに、上古文學を文學形態の上から考へる時、神話や祝詞の如き、後世のどの文學形態にもはまり得ないものゝ存在が特色的である(尤も、神話祝詞をそのまゝ文學と認め得るか。否かには疑問があるが、今普通の説に従ふ)。それから、歴史傳説は、之を文學と認むるとすれば、榮華・大鏡以下の「歴史物語」、又「軍記物」と同質である。

之と、常陸風土記の富士と筑波との話、播磨風土記の鹿が夢を見る話、などの、所謂「説話」とは、前者は、時と所とが確定してをり、後者はそれに縛られぬと云ふ點で大きな相違があるが、此の説話形態が多い事を、古代の一特色に數へていゝ。古代文學中風土記には特に多い。更に歌謡及び文學詩がある。此の内、歌の形式が多様で、後世亡びた長歌・旋頭歌・佛足石歌體歌・片歌等の見える事は、注目すべきである。その上、記紀歌謡時代は未定形時代、萬葉期は定形時代と分けられるが、前者で一句の音數の不定だつたのが、次第に、五音と七音とに統一されていつた。而して、奈良朝に五七音に完成されたが、その組合せに於いて、此の期の末迄、「五七音——五七調」であつた。それが、平安朝に移つて、「七五音——七五調」の排列に變つてしまつた。

次に、古代文學の内容(作品の理す氣分・雰囲気、餘情一切を含めたもの)、及び文學に現れた理念の如きを取上げてみる。

先づ、古代特有の野性や生れたまゝの人間の氣魄が強壯な氣分となつて充滿してゐる事が第一であ

る。賀茂眞淵の所謂「ますらをぶり」である。次に人間性の全部が露呈されてゐる——と云ふのは、古代特に記紀時代は、人間が知と情、徳性と慾望と云つた、相反する性質によつて二元的に分裂すると云ふ傾向が少かつた。従つて、文學にも、その、一切の混合した姿がそのまま寫されたのである。之は、上記のやうに、文學が生活と共に在り、美意識が實生活から分離してゐなかつた、と云ふ事情と、相伴ひ相援けたのである。

次に、文學理念と云つた上から見れば、「聖」「悲壯」「素樸」「まこと」と云つた特色を持つ。「聖」は清らかに・け高きもの、祝詞や神話(特に天照大神關係の部分)、又皇室を材とする文學に著しい性質で、江戸期や明治の文學に特に乏しいものである。「悲壯」は、神話・歴史傳説に於て、國家や或る團體全體の運命の寫されてゐる場合、或はその代表者たる英雄の持つ性格である。「素樸」は云ふ迄もなく、ありのまま、で粉飾偽態の無い事、説話や記紀歌謡・民謡に顯著である。而して之は、「まこと」と相通ふ。唯、後者は、内的性質として、誠實とか徳性とかをも、包含する廣さがある。而して「素樸」と「まこと」とは、之を表現と關聯させる時、寫實的傾向と關係して來る。古今集の主觀的表現(或る美的理想を豫定してそれを基とした主觀的表現)、及び新古今集の象徴的表現と、相對するものである。



### 三 大和時代文獻中の神話傳説並びに同時代文學に

現れたる國民性の諸相に就いて述べてよ

大和時代の文獻には、古事記・日本書紀等の歴史書、懷風藻・萬葉集・歌經標式等の文學書、風土記  
其の他の地理書、此等に合せて平安朝に文書化された古語拾遺・日本靈異記及び祝詞・宣命の類があ  
る。

此等に見える國民性は種々の姿をとつて現れてはゐるが、その著しい諸項は(一)尊皇思想、(二)  
國家思想、(三)清淨愛好、(四)言靈信仰、(五)直觀的把握、(六)光明樂觀、(七)攝取同化力、(八)農  
業的生活及び思想などが考へられる。

(一) 尊皇の念は上下二千年を通じて普遍なる國民性であるが、わが古代に於てはその尊皇の根源た  
る皇室の御起原が語られてをり、世界造化の神たる伊邪那岐・伊邪那美の男女神及びその御子なる天  
照大御神からわが皇室は由來し給へる由を語り、古事記・書紀の神話時代の最後に於て高天原より瓊  
瓊杵尊の降臨の大業遂行と共に皇孫は人の世界に出で給ふ經過を語つてゐる。併し、大和時代を通じて  
天皇は人ならぬ神——所謂現人神あらひとがみにあらせ給ひ、人麿其の他の「天皇は神にしませば」の國民思想  
となつた。かゝる信仰上の事實に加へて政治上に於ても政まつりごとは祭であり、祭政は一途に出で、その中心

として天皇は立たせ給ふといふ信念が確信せられてゐた。此等は實に古代特有の尊王の形態である。

(二) 我が國の神話を諸民族のそれと比較するに、羅馬神話と共に其の國家的色彩著しく、神話の發展經過が其の儘國家の發展を語つてゐる點に於いて他民族に比類を見出し難い。これ今日もわが國民が生活思想の根柢を國家に置いて個人に置かぬ傾向の遠い淵源を示すものである。更に又人皇の代に入るや、神武・景行・應神・齊明諸朝の領土擴大・民族發展の歴史及び之に伴ふ傳説は、わが國民性の國家的性質の表現と見る事が出来る。

(三) 清淨愛好は「はらへ」「みそぎ」の習慣に於て特に著しく窺はれる。「はらへ」は須佐之男命の罪の解除に關して古事記及び書紀の一書にその起原を語つてゐるが、我が古代人は汚れたものは惡であり不幸を齎す、反對に清きものは善であり幸福を齎すと考へた。故に心身の汚れた場合、或は誤つて罪に落ちた場合、それらが齎す不幸を免れる爲に祓へを行ふ習慣を生じた。祝詞の六月・十二月の大祓はその代表的なものである。其の他個人的に不斷にとり行はれた。又「みそぎ」は伊邪那岐命が日向阿波岐原あはぎで身を水に清められた事を起原と傳へてゐるが、之も水に身を清める事によつて罪や不幸から逃れんとしたもので、古事記・書紀・萬葉等にその例が見える。

(四) 言靈信仰とは、言語は偉力を持つて居り、人から發せられた言語は、その内容が必ず實現されると古代人が信じてゐた事をさすのである。古事記・書紀・萬葉等に此の言語の偉力の實例を示してゐ

るが、就中、祝詞は「告」事によつてその祈の實現される事を成立の根本としてゐるものである。

(五) 我が國民が組織的な思考力よりも、直覺的な把握に優れてゐることは古今を通じた事實であるが、古代に於ても此の事は顯著である。之を藝術上に求むれば、萬葉其の他の古代短歌はその人生・自然、特に後者の捉へ方に於て鋭敏な直觀の現れであるし、之を歴史書に求むれば、古事記の世界觀・歴史觀は他の民族のそれに比して著しく直接的であり、非論理的である。萬葉集は之を漢詩集懷風藻及び漢文學を基とした歌經標式と比較する事に依つてそれが明白であるし、古事記では支那史書を眞似た日本書紀の編纂並に叙述の態度と比べて此の事が明瞭に判る。

(六) 我國平安朝以後の人生觀に於て厭世的傾向はかなり力強い色彩であるが、それは佛敎の影響と見られてゐる。此の點から古代固有日本人の性格は非哲學的で現實的であり、日常は明るく朗かであり、太陽を信仰し、高産靈神以下の生産の神を崇拜し、不幸を幸福に轉ずる大直日神を信じて暮した。而して、生成の反對たる物の衰滅に關する思想無く、世界の終末を説く神話傳説を持たない。

(七) わが國民が外來のものを攝取し或は模倣しつゝ最後に之を同化して獨特の生活法、獨特の文化を築いてゆく事は、國民性の大特色と見られてゐる。その包容力の幅の廣さ、攝取の速度の早さは、古代に於いても著しく現れ、特に推古朝以後奈良朝の中期まで各種の文物・學術・工藝或は思想・宗教の類を著しい熱度をもつて巧に取入れた事は國史にも類稀なる所で、大化の政治的改新及び飛鳥・奈

良の文化は、此の擷取あつて始めて成功したものである。

(八) 農業的傾向とは、わが國の氣候・風土が遊牧に適せず、氣温及び濕度の關係上、農業に適し、特に米の栽培に適した爲、國民の生活及び思想のあらゆる方面に農業的特色を見る。古代の神話、古代の法律・自然觀等に著しく之が現れてゐる。こゝには單に項目を擧げるに止めねばならぬ。

文 獻

宣長其の他國學者の著書(一三一項參照)

古代純日本思想(大西貞治)

日本神話傳説の研究(高

木敏雄)

日本上代史研究(津田左右吉)

神代史の研究(同上)

其の他前項に同じ

### 三三 古事記の文學性に就いて述べよ

古事記に現れた時代は、宗教も哲學も文學も未だ分離してゐなかつた時代であるから、古事記にはそれらが統一され或は不統一なまゝの形で取入れられてゐる。而してその中の文學的性質も亦後世の純粹文學が一作品一文學美といふ關係にあるのと異つて、各種の文學形態及び文學美が並存してゐる。今、それらを數箇條に分つて考へてみる。

第一は、悲壯美の文學——力感の文學、とでもいふべき性質である。古事記はその編纂の主目的を國家・民族の發展を物語り、それが萬世一系の皇室によつて尊くも統治されて變りなき事を示すことに置いてゐる。従つて古事記の本質が何であるかに拘らず、全體を通讀して得る所の感銘は一つの大

いなる流れが或る運命を負うて一定の方向へ走つてゆく雄大な眺めである。この廣大にして力に充ち満ちた感じは、之を文學でいへば悲壯の美といはれるものに當る。古事記はその大本に於てかういふ性質を負うてゐる事を何人も否定出来ない。而して此の運動は時をおいて出現する英雄によつて最も効果的に行はれ、最も具體的に發現してゐる。神代に於ける大國主命、人皇の代に於ける神武天皇・倭建命などの行動や運命は、古事記のもつ使命、その表す力感の突端として考へられねばならぬ。

第二に、素樸な原始文學の匂を數へる事が出来る。男女二神の交りによる國土の誕生、神々の發生にそれを見る。稻羽の白兔、大國主命の求婚試験受難、秋山下氷壯夫・春山之霞壯夫、此等の遊離説話にそれを見る。伊邪那岐命が一つ火をともして女神を見られた事から、一つ火をともす事を今に戒めるといふ習慣起原の神話。桃の實・一尋鰐を神と祭る動植物神信仰の信仰起原説話、倭建命に關する燒津・吾妻・當藝・三重などの地名起原説明傳説等と同じ色彩を發見する。——こゝに現れた古代人の原始的な世界觀、事物の直觀的な掴み方、此等は後世にない素樸な力、素直で生々した生命力となつて、吾等に迫る。又古事記の到る所に見える古代人の旺盛な生活力、思索でなく行動的に動く現實性等が、後世の文學・歴史・思想の書に見難い原始的な寮圍氣を形作つてゐる。此のものと上記の傳説・説話に現れた特殊性とが相俟つて築くものを古事記の第二の文學性と數へていゝ。

第三に、純粹文學に近い美の文學的な要素を擧げる事が出来る。各書に見える歌謡はその第一であ

り、歌をめぐる歌物語は第二であり、上にも挙げた遊離説話はその第三である。海の宮の説話、秋山下水壯夫・春山之霞壯夫の説話等の傳説説話に見えるロマチックな美感は、それらが通常の傳説説話から離れて純文學に近づきかけてゐる事を示してゐるが、此等は量に於て少く、大勢的なものとしては猶歌謡を擧ぐべきである。歌謡はもと古事記の散文の部分と獨立して生れ、又傳承されてゐたものが編纂に際して古事記に取入れられたのが大部分であるらしい。それは殆ど皆或る神話や歴史と結びつけてそれらの主人公の作品として記されてゐる。又は或る歴史事實やその主人公の性質や運命を時の人が歌つたものとして載せられてゐる。こゝに後世の純文學的歌謡との相違がある。が、それは古事記の中にあつては、やはり最も美の文學に近しいものである。そこに見える美意識はまだ素樸なものであるが、素樸なだけ力強い生の息に充ち満ちてゐる。又、枕詞・序詞・比喻・對句・反覆等の表現技巧は充分美的に現れてゐる。此の歌謡が大國主命や倭建命や允恭天皇の場合は歌と傳説とが有機的からみ合つて、演劇或は歌物語として扱はれてゐた事を思はせるものがある。

文 献 古事記の文學性(久松潜一 奈良文化一二・一四號) 古事記新講(次田 潤) 古事記の新研究

(倉野憲司) 其他三〇項に同じ

### 三三 古事記に現れたる國家統一の精神に就いて述べよ

古事記の國家統一とは、伊邪那岐・伊邪那美二神によつて國土が造られ、それが天孫によつて統一され、やがて發展してゆく過程を指す。而して、其の神代・人皇の代を含む永い過程を一貫する「精神」とは何か？

一體、古事記の作られた目的は何か、を考へるに、之を編者自身に聽けば、序文に、帝紀及び本辭は、唯今誤が多いが、之は「邦家之經緯、王化之鴻基」である。故に今「削<sub>レ</sub>僞、定<sub>レ</sub>實」以て後代に傳へんと欲したのである。——とある。が、之では帝紀・本辭の誤謬を正す事きりが目的の様に見える。従つて、之が、古事記を貫く「精神」でありさうに思へる。

併し、さうした記録の誤を正す、と云ふ意圖のみならば、それは過去のな意義を持つだけで、天武朝の今日の必要を含まない。併し、今日の必要の無いものが編纂される理由はない。故に、吾々は直接古事記そのものの内容を検討してみよう。

一體、古事記の全體の組織と云ふものは、遊離説話や附屬的な出雲關係の傳説等を除けば、その根幹に於ては、割合簡單である。即ち、二神の國生み、神生みから、天照大神御姉弟の御出世となり、天神と出雲系神との衝突・和解を経て、天孫降臨が始まり、次いで人皇の世となる。第一代神武天皇の大和征服國土統一から、代々を経ての國土の擴大、外來の人及び文化の包攝、國力の伸長となつて推古朝に終つてゐる。

之を通覽すれば、何人も、古事記自身の語る所は、日本國家の誕生と發展の過程とを示すにある事を知らう。而して、此の過程を叙するうちに、自らにして漲つてゐるものは、「此の國家は永遠に伸びてゆく」との信念である。そこに、時間的に過去の事實を内容としつゝ、而も、未來的意義(従つて今日的意義)を包藏する所以がある。國家の運命を語るに、一度も蹉跎無く進み來つた經歷が、未來も亦然あらむ事を暗示するのである。

次に、此の國家の主體となり、國家の含む諸種の要素の統合者となる者は誰か、と云ふ問題がある。云はゞ、國家の支柱は何か、と云ふ命題である。

之は、言はずして明かな「皇室」にまします。具體的には、天祖天照大神と御歷代の天皇とである。唯、古事記は、此の事實を如何なる形で現してゐるか、と云ふに、一つの過去の——従つて最早動かす可からず確定したる——史的事實として、現してゐる。こゝに歴史書古事記の特色がある。

天照大神は、造物神たる父神から、御首玉を授けられて高天原の支配者と任命させられ給ふ。天照大神は邇邇藝命に、日本國の永遠の支配を指命し給ふ。斯くて、皇室——天皇の御統治は、造國土神に迄溯る遠い・嚴しい淵源に根ざす事を、明白に各人の記憶に沁み込ませる。

従つて、皇室、及び皇室の統治は、國土と不可分離の關係にある事を諒知させる。斯くて、統治は未來永遠に亘つて不變不動なり、との國民的信念が醸成される。これ、古事記の持つ使命であり、古



事記を貫く精神である。此の使命・精神のあるところにのみ、國家の統一とその永遠の發展とは約束される。

文獻 國家的精神の考察(久松潜一 國語と國文學四卷一〇號) 其の他前各項参照

### 三四 古事記は中世及び近世に於ていかに研究されたか

古事記の研究は、殆ど中世に開始されたと見るべく、平安朝に書紀の研究が着々と進められてゐたに比べて、大變な相違である。

今日残るものでは、卜部兼文の古事記裏書を最初の文獻とする。紙數十枚の極めて簡單なものであるが、古事記の序並に上卷・中卷の語句を選んで解釋したものである。次いで古事記上卷抄(著者不明 藤福寺藏)が鎌倉末期頃に作られた。之は上卷神代卷の少部分の解釋である。

室町期には若干の學者や僧侶の間に、筆寫や校合などが行はれたらしいが、注目すべきものはなかつたらしく、現存のものを見出せない。

斯くて、眞の研究は近世に始つた。故に之は、近世の實證主義的生活傾向と、國學の勃興と、此の二つの事情に促進されて興つたものと見得るわけである。

先づ度會延佳の鼈頭古事記がある。異本を校合して古事記の原文を定め、その鼈頭に校異を記し、

簡単な語釋を施したものである。之によつて本文及び訓法の上に大なる進歩を齎した。

次に、荷田春滿がある。彼の甥信章が筆記した古事記割記がある。難語を取出し解釋したもので、甚だすぐれたものとはいひ難い。新井白石がある。彼は從來の春滿迄の研究が訓法や語釋に留つてゐたのと異つて、古事記の内容そのものを研究對象とし、且之に批判を加へてゐる。白石の研究は、古史通及び古史通或問(正徳六年)に見ることが出来る。彼はこゝで訓釋的研究を見せてゐる外、その歴史學者としての本領を發揮して、古事記・書紀・舊事記の三書を折衷して別に古代史の基礎となる本文を定め、之を基として古代神話及び歴史に獨特の批判を加へた。それは神話の如きも之を一個の歴史と見て、極力理性的に合理的に解釋するもので、今日に至るまで歴史派の代表をなしてゐる。

此の歴史的立場を取る人に、尙、田安宗武がある。彼には古事記詳説・古事記詳説別記の著がある。彼も白石と同じく神話の如きも歴史事實として合理的に見る立場に立つ。

次に、眞淵の研究を見よう。彼には古事記頭書(古事記校本)・古事記上卷眞淵訓(假名世古事記)の如きがある。彼は古道を究める爲に古事記の研究を一生の目的としたが、それを果さなかつた事は、宣長に漏らしたその意見を宣長が玉勝間に記せるによつて明かである。従つてその業績も彼の名聲の割に甚だ乏しい。古事記頭書は、本文を鰐頭古事記に據り、欄外に語句の訓釋を記したもので、簡単な書である。次の眞淵訓は、上卷を假名書にしたもので、中下卷も存在したらしいが、今日定かに見るを得ない。

併し、古事記傳編纂に當つては宣長は此の書及び此の書の中下卷の未定稿を借用して自己の訓を定め  
た。此の點で歴史的價値が多い。總じて眞淵は、古事記に關しては宣長の先行者としての意義を占め  
る。右記の諸事實を始め、宣長が古事記を極度に尊重し、書紀を卑めた如きも眞淵の影響である。

斯くて、各種の遺産を負うて宣長は古事記研究にスタートした。宣長の古事記傳に就いては改めて  
説くまでもあるまい。唯前後三十五年を費して寛政十年に完結した本書は、何を特色とせるものであら  
うか。第一はその訓及び解釋が殆どあらゆる古代の典籍を取り用ゐて極く正確なものなる點である。  
又、その説く所は深く文字の底にはひつて古事記の本質を掴まうとするのみならず、古事記を説く事  
によつて古代の生活及び古代人の信仰は、如何なるものだつたかを知らしめんとしてゐる。又、支那・  
印度等に對する日本獨特の特色は何處にあつたかを、到る所に力説してゐる。唯餘りに國粹的で却つ  
て最眞の引き倒しの感がある。而して、彼が神話を解して之は尊い古代の眞實を傳へたものだから  
と、記載のまゝ信じようとしたのは、彼として當然の態度で、これ亦神話解釋の一方向である。

彼の後には多くその影響を受けた書のみであつたが、富士谷御杖と橘守部とは共に古事記傳に對し  
て明白な反撃を加へてゐる。前者に古事記燈（序文と上巻の註釋稿本のみ現存）があり、後者に難古事記傳（天保十三年）と記紀歌  
謡の註釋稜威言別（弘化三年）とがある。御杖の立場は言靈の立場に立ち、又言靈の道を援くる照應と字律と  
がある、と説くなど甚だ神祕的である。又、守部は、宣長の眞淵以來の古事記尊重を攻撃して、書紀

の特色、殊にその異説を聚集した點を力説した。書紀尊重の點契沖・春滿御杖に似てゐる。又、古事記には、稚言や談辭のやうな本來の「舊辭」や「本紀」が崩れて出來た部分があり、表現には省略的或は附加的な書方のある事を實例を擧げて説明した。

幕末の平田篤胤は、宣長の説を受けて、宣長以上に痛烈に古道を力説した。且、宣長の如く記載をそのまま信ずる態度に出でたが、又、當時輸入された泰西の科學知識を應用して神話を解くなどの新味を見せてゐる。彼に古史成文・古史徴・古史傳があるが、白石と同じく自ら古代史の本文を作つてゐる所に特色がある。

文献 古事記の新研究(倉野憲司)

國文學研究史(野村八良)

記紀文學號(早稻田文學二六三號)

### 三三 古事記及び日本書紀に就いて左の問に答へよ

- (イ) 文體の比較 (ロ) 編纂態度の相違 (ハ) 内容を貫く精神 (ニ) 各の代表的研究書とその著者

記と紀との比較は、早くから試みられ、眞淵・宣長・守部に到つては、最も明瞭に説明された。要請された四點は、何れも、江戸時代から論攷的となつてゐるものである。従つて此の項は、次の三六・

三七項を参照しつつ讀んでいただきたい。

(イ) 文體の比較 に就いては、何人にも明らかな様に、紀が純粹な漢文であるに對して、記の方は、和漢文を混用した一種獨特の文體である。紀が漢文體であるのは、それが支那の史書を直接的に模倣した爲でもあるし、紀の編纂當時既に一般知識階級の用文となつてゐた漢文を、其の儘用ゐたも云へるが、その何れにしても、支那の影響によるもので、此の點は、眞淵らが極力非難した所である。特に、漢文を用ゐた結果、漢文的な修飾表現が多くなり、それに惹かれて當然、内容も粉飾的になつて、古代の素朴な生活や精神を寫し誤つた傾向がある事は、最も惜むべきである。

之に反し、記は太安膺が序文に述べた所では、純漢文では日本文としての意を害して充分な表現が出来かねるし、一音一字式に書けば意味は充分通ずるが餘りに長文となつて困る。その爲混合的文體を採用した、と云ふのである。此の用意は、成功したと認められてゐる。大體が混用的特殊文體で、ごく稀に純漢文的部分があり、又、反對に一音一字的の個所がある。

尙、兩書とも、特殊の難訓難語や習慣的特殊語は、訓釋を施し、又、歌謡だけは兩書とも一音一字式記載法である。

(ロ) 編纂態度の相違 二書ともに、國家建國の由來を明かにし、皇祖神の起原を語り、兩者が結合して、吾が國家は永遠に皇祖神の御末を以て統治さるべき由を説く點は同一であり、宣長などが、此

の點でまで紀の方をおとしまして論じてゐるのは偏し過ぎた見解である。但、紀の方は、國內的必要と同時に、支那その他に對する代表的歴史書と云ふ意味を多分に含めて編まれた。その爲に、歴史的意识が基礎となり、分量も多く内容を詳しくする方針を採られた。記の方は之に比べると、歴史書ではあるが、より物語的色彩・神話的色彩が強い。之は、神代の卷(記の上卷)で、神々の誕生や由來を説く事が甚だ夥多であるのに、紀には殆どその事がない對比によつて明らかである。紀を歴史的と呼ぶなら、之は宗教的と云へよう。又、記では、その多くの神々と現存の諸氏との關聯——何神が何氏の祖神に當る——を附けるのに懸命になつてゐる。之は、記が國內の現實的必要——諸氏の系統を正すと言ふ實際上の必要から切迫つまつて作られた事を暗示して、書紀の編纂欲求との相違を感じしめる。

次に、紀は、歴史書として記事の詳細を望んだ結果、幾つもの異傳がある場合は、それを總て併記した。之に反し、記では、異説のうち一を採つて他を捨てる選擇態度に出でた。此の點後者の態度は、非理性的であり、ロマンチックだと云へる。御杖や守部などは此の點を捉へて、紀の史書としての優秀性を頻りに説く。

(ハ)内容を貫く精神 歴史書を編む爲には、理智的でなくてはならぬ。故に「内容を貫く精神」を一言で言ふならば、純歴史書たる紀は理智的精神で貫かれてゐた、と評される。之に比して、記は、宗教的とも文學的とも感情的とも云へる。「理智的」に對して「直觀的」などとも云ひ得ようか？

それから、記が上述の様に、神代の記事に詳しいのは、皇室の由來・皇室の歴史に力を注いだと見得るに對し、書紀は、人代の記事が甚だ多く、「神と人との歴史書」同時に「皇室と國民との歴史書」と云へよう。又、紀では、單に、政治史的記事のみでなく、殖産工藝の事柄や、文化學藝の側面をも洩すなく擧げてゐるのは、これ亦、「國民の歴史書」的精神によらう。

(二) 代表的研究書と著者 記の研究書は、第三四項(頁七)に擧げた。紀の方は、左の通りである。弘仁私記・延喜私記等の平安時代の斷片的研究書。釋日本紀(卜部懷賢)。日本書紀纂疏(一條兼良)。日本書紀通證(谷川士清)。日本書紀集解(河村秀根)。日本書紀傳(鈴木重胤)。日本書紀標註(敷田年治)。日本書紀通釋(飯田武郷)。

文 獻 古事記及日本書紀の研究(津田左右吉) 春陽堂上代日本文學講座(古事記、書紀の部) 日本文

學書誌(石山徹郎) 上中古文學論攷(倉野憲司) 日本文學評論史古代中世篇(久松潜一)

### 三六 我が神代傳説中日本書紀と古事記との所傳の異なるもの二三を説け

日本書紀と古事記との内容の相違は、人皇時代にも著しいが、神代にもかなりの相違點がある。その實例を擧ぐれば、

(二) 開卷第一の天地開闢說話に於て、記は、「天地初發の時高天原になりませる神の御名は」として、直ちに五獨神の神名を挙げ、それだけにとどまつて何ら說話の叙述を試みない。云はば、開闢說話としては無内容である。之に反し、紀には「古天地未<sub>レ</sub>剖。陰陽<sub>レ</sub>分。渾沌如<sub>ニ</sub>雞子。溟滓而含<sub>レ</sub>牙。及<sub>ニ</sub>其清陽者薄靡而爲<sub>レ</sub>天。重濁者淹滯而爲<sub>レ</sub>地。精妙之合<sub>レ</sub>搏易。重濁之凝<sub>レ</sub>竭難。故天先成而地後定。然後神聖生<sub>ニ</sub>其中<sub>ニ</sub>焉。」として、天地の様相と、その轉化發展とを物語つてゐて、記と大きな相違がある。而して、此の書紀の記事は、淮南子の開闢說話をそのまま借りたものである。故に記が日本固有の要素が多く、書紀には外國の影響が著しい、と云ふ二書の根本的相違の現れた一例證と見得る。

(三) 記では、伊邪那岐・伊邪那美の男女神から、山・野・海・川・風等の自然神、岩・土・火・家屋等の物素神(物質の神)等が生れ、それ等から更に子神・孫神が生れ、その數約七十餘柱に及ぶ。且此の數十神が皆岐・美二神と血統的關係にある様に組織づけてある。之に反し、書紀には、四柱の山川草木の神の生誕を擧げるだけであり、血統關係の如きは全然記さない。これ、古事記は、此等の神々が、實生活上、又諸氏の家系の源を正す上に、その性質を明かにしておく事が必要だ、と云ふ要求に應じたものである。書紀は、その目的が歴史書——特に人間の歴史の書として理智的に編纂されたが故に、神々の記事は却つて省筆したもので、兩書の編纂精神の相違が明白である。

(三) 出雲民族は、天孫民族にとつて奈良朝に到つても、猶一敵國をなすほどに強力な競争者であつ



た。此の民族の歴史を記す點に於て、古事記は詳細であり、特に主神大國主神の記事が豊富多彩に描かれてゐるが、書紀の本文では之を捨ててゐる。此の事は、溯つて觀察すれば、紀では、伊邪那美神が黄泉國に赴かれ男神が後を追うて赴かれる経緯が詳説してあるに對し、紀では之を一切記さないのと關聯してゐる。即ち、黄泉國——出雲國と云ふ地理的系列は、伊邪那美神——須佐之男命——大國主命と云ふ神的系列と相應するものであるが、此の系列の全部を、書紀本文では抹殺した、と見るべきである。之は、記よりも紀の方が政治意識が強かつた、と言へるやうである。天孫民族一本槍の構成法で異民族の側の歴史は抹殺したと見える。古事記の方は、出雲關係の事件に關してだけは政治色の薄い、單なる傳説話の傳承と云ふ氣分の方が強くて此の相違を生じたものであらうか。

(四) 右は、概觀的な大問題であるが、も少し、小さな具體的個別的な相違はもとより多い。即ち、前記開闢神話に於て、初生の神は記では天之御中主神、書紀本文では國常立尊であり、又岐・美二神が淤能碁呂嶋に降つて大八洲の國生みをされる條に於ては、國土の生成順序及び數に相違がある。

又、記では伊邪那岐命が黄泉の穢を被へ禊ぎして多くの自然神・物素神を生まれた後に、偶然に天照大神・月讀命・須佐之男命の三貴神が生れ給ふのであるが、書紀では、諸冊二神が大八洲國・山川草木の神を生まれた後に、意欲的に日神(天照大神)・月神(月夜見尊)・蛭兒・素盞鳴尊の四神を出生される。

更に、その一つとして、須佐之男命の記事を對比するに、記では、父君が、天照大神が高天原、月

讀命が夜の國を治められるに對して、此の神が海原を支配される事に定められるが、海原の支配とは、それが何に基くのか記の記事だけでは此の神と海原との關係が釋然としない。次いで、記では、此の神が海原の支配を拒否されて母の國根の國に行き度いと泣かれたので、父君が現世から追放された。それで姉君(天照)に別を告げるとて、昇天されると、昇天される。然るに昇天後は、別れに來たと云ふ目的は忘れて亂暴を働いたり、何時迄も滞在したりしてゐる。而して天岩戸事件の後、今度は諸神によつて高天原から追放されてゐる。ところが、その後には、豐受神殺害や大蛇退治などあつて、母の國行きはどこへか飛んでしまつてゐる。以上を通じて、此の神に關する記の記事は、不合理不統一を極めてゐる。然るに紀の本文では、天照大神は天上を支配され、此の神は地上を支配されると云ふ配分で、對立が妥當である。又此の神は、その配分された現世の支配を嫌はれた爲、父君から根の國へ追放されたが、その別離の爲昇天し、それを天照大神が恐怖される狀、此の神の亂暴、下界への追放から、最後に根の國へ愈々赴く、と云ふ明記があつて、如何にも一柱の神の行動として筋をとほして説かれてある。記はその幼稚な不統一に生命があり、紀はその理智的統一に特色ありとすべきであらう。

(五) 此のほか、歌謠に就いて、その本文及び作者に兩者相違があるが、今省略する。

文 献 日本上代文學史(武田祐吉) 古代文學研究(倉野憲司) 古事記の研究(上代日本文學講座所收、

武田祐吉) 日本書紀(上代日本文學講座所收、次田 潤) 國文學史新講上卷(次田 潤) 紀記創世

三七 本居宣長は何故に日本書紀よりも古事記に重きを置きしか

宣長の此の態度は、彼自身の好みのほかに、その師、眞淵の影響が多分にある。眞淵の延喜式祝詞解の中に、書紀は漢文に泥んだ爲上古の事實に違ふものが多く、之に反し、古事記は、質實の上古史で、國語を専らとするから、以て上古の眞實を知り上古の言葉を知る用に立つ、と述べてゐるのは、宣長がそのまま繼承した所の態度である。

宣長の意見は、諸書に見えるが、古事記傳の卷一、總論の部の中、「古こ記き典てん等とう總そう論ろん」（こきてんとうそうろん）「書紀しよきの論ろんひ」（しよきのろんひ）の二項に最も明白に、且組織的に述べられてゐる。此の要旨は左の如くである。

從來、紀の研究は多く且精しく、記の方は放棄されてゐるのは、紀が支那の國史の體裁だから誤つて尊重し、記の質樸で上古の眞實を傳へるのを却つて輕蔑するによるものである。——と先づ説き、此の記に就いて、世人の疑つてゐる箇條を辯難してゐる。

即ち、記の制作された後幾何もなく紀が編纂されたのは、前者に誤があつた爲であらう、と云ふ疑問に對し、之は、兩者の編纂態度が全然相違するに基く。記は質樸で飾がない故、之を見榮え無しと

して、内容を複雑に廣くし、年紀を立てたり文飾に腐心したりして、漢史に比肩すべきもの、即ち紀を新に編まれたのだとする。次に、紀の編纂は續日本紀に見えるのに、記の方が見えないのは、記の編制が、重き公事おほやけごとでなく内々の書だつた爲であらう。従つて、紀の方がより完備してゐるのは當然だ、と云ふ意見に對しては、之は、天武天皇の大御心に發し、元明天皇の勅による撰だから、決して内々の書の類ではない、と論ずる。又、記の特長として考ふべきは、此の書が古の言葉を支那を失はぬ事を主としてゐる點である。一體、意と、事と、言とは、相稱かなつてゐるべきもので、この點記は能く調和を保ち、従つて上代の眞實を得てゐる。然るに紀では、漢國の言語で皇國みくにの意を記す。ここに言語と内容とが離反する。と反駁してゐる。

斯くて「書紀の論ひ」の項では、逆に、紀を攻撃する。世人の記紀比較評價を論難した後、一體、日本書紀と、ことさら「日本」を掲げたのは、漢國を意識し之に對むかへたもので、彼に諂へるものとすべきである。而してその言語や表現を支那から借りて漢風からの飾を事としたから、その内容迄漢風になつて、日本の眞實、殊に古代の實情に反するものとなつてしまつた。その實例として天地開闢の部分  
は支那人の開闢觀で日本人のものでない事を指摘し、開闢説話及び伊邪那岐・伊邪那美命を陽神・陰神と記す場合などに見える易の理、陰陽五行思想の侵害を説き、その他、神名を漢風に改めてしまひ「天道」「皇天之威」「牛酒」「神龜」「斧鉞」などの文字及びその内容は支那にあつて日本に全然無い

ものである事等を擧げる。又、紀が漢文である爲、それを古代語でどう讀むべきかが分らない、と訓法の點からも紀を非難し、紀の辯難に熱中してゐる。

之を要するに、師匠以來の國粹的見解を下地とし、之に、實證的な發見を附加した攻撃である。中には、あまりなる國粹色が、事實を外れた非難となつてゐる部分もあり、又、書紀の特色を殆ど見ようと、ないと云ふ缺陷もあるが、從來埋もれてゐた古事記の特長は、此の師弟によつて極めて明瞭に發掘されたと云ふべきである。之が、二書の學的評價に於て、或は國學その他の實際運動に對して、後世に與へた影響は頗る重大であつた。

文獻 三五・三六項所掲參照

### 三八 祝詞の (1)性質 (2)文體 (3)主なる文獻に就いて述べよ

祝詞は、古代に神々を祭る時、その祭の趣旨や祈願の内容等を神に申した言葉である。故に公私あらゆる場合に、團體により個人により行はれたと思はれるが、今日見得るものは延喜式第八卷に載るもの二十七篇を主とし、台記の別記に載せる康治元年十一月の大嘗會に用ゐた中なか臣おみ壽詞よじが、他にあつて、何れも公の場合のもののみである。

(1)性質 祝詞の内容は、大本に於て神への祈願である。その祈願は、祈年祭・大嘗祭の様に收穫

の豊かさを願ふものもあるが、その大部分は生活の安寧を祈るものである。大祓詞はそれを一般的に願ふ祝詞であるが、その他大殿祭・御門祭・鎮火祭・道饗祭、及び伊勢の内外宮に關する諸祭の如き、皆さうである。之は、古代人の考へでは、國民又は個人の生活は總て神が支配し、従つてその幸不幸は神の意志に委ねられてゐた。その爲に食糧及び日常生活の保證を得んとして、誠實の限を盡して祈つたものが祝詞の内容を成してゐる。而して之が宮中に於て國家の大事業として執行される所に古代祝詞の本質がある。古代即ち祭政一致の時代には、神に祈り神を祭る事は即ち國家の政治そのものであつた。故に祭祀は國家の事業であり、之が天皇を中心として執り行はれる必要が存したのである。

而して此の祝詞は、全國の社々から集めた神主・祝部及び諸王らを宮中に集め、之に向つて天皇が祭の趣旨を述べられるのである。祝詞に「諸聞しめせと告る」とあるのは、即ち此等に告り聞かせ、といふ意である。併し、形はさうであらうと、其の本旨は、神主たちを通じてその向うの神々に呼びかけて祈り願ふといふのである。斯くて天皇→神主等→神といふ三段の關係が成り立つてゐたのである。

(2) 文體　こゝにある「文體」とは、廣く表現といふ意味であらうと解釋して、それに就いて考察すると、先づ極めて頻繁に見えるものとして、反復といふ事が擧げられる。之は一に、神を動かさうとする動機から發した。繰返すことによつて印象を強くし、感動を深め得るが爲である。又、間接的

にいへば、一度で意味だけは通じる事を、幾度も繰返すことによつてこちらの叮嚀な意志を分つて貰はうとするものである。何れにしても神を念頭に置いての事である。

次に、祝詞には對句が實に多い。而もその形長く、對の姿が複雑で、意味を喪失しかけるまでになつてゐる。之も斯く文を修飾し、趣を深めることによつて、神を感動せしめんと望む爲である。

最後に、各祝詞を通して、抽象的な表現が好まれたといふ事が指摘されてゐる。即ち、一々具體的な言ひ表しを避け、漠然と崇敬の氣分を漂はせる事によつて、莊重の感を狙つてゐる。此の爲祝詞は、大まかな、樸實な氣分をも添へる事となつたのである。併し此の爲にまた一々の具象性を失つて了つて、その上叙述は類型的になつて了ふ、といふ缺點に陥つてゐる。吾々が祝詞の二十數篇を通讀して、その各祝詞の特色や個性を感じる以上に、普遍性・定型性を覺えるのは、此の爲である。

(3)主なる文献 祝詞そのものの文献は頭初に述べた。此處には祝詞に關する研究書の主なるものを擧げて置く。延喜式祝詞解(眞淵)、祝詞考(同上)、大祓詞後釋(宣長)、出雲國造神壽詞後釋(同上)、大祓詞天津菅麻(六人部是香)、祝詞講義(鈴木重胤)、祝詞略解(久保季茲)、祝詞辨蒙(敷田年治)、祝詞新講(次田潤)等である。就中、眞淵・重胤・年治・次田氏のものには注目すべきである。

#### 文 献

神と神を祭る者との文學(武田祐吉)

上代日本文學史(同上)

上代日本文學の研究(久松潜一)

古代研究國文學篇(折口信夫)

祝詞と神と政治(日本文學聯講上世篇所收)

小山龍之輔)

## 三九 祝詞に表れたる精神を説明せよ

## 四〇 祝詞の性質を説明し且其の思想に就いて述べよ

此の二題の中、「祝詞の性質」は、前項を参照されたい。「祝詞に表れたる精神」と「祝詞の思想」とを今一括して述べる。

祝詞は、古代人の神へ對する祈願を表してゐる。併し、今日我等の見得るもの、延喜式第八卷及び台記の別記に載るものは、皆宮中に於て、各國の社から集めた神主・祝部はふり等に向つて、天皇がその祭の性質を説かれるといふ形になつてゐる。此の點に注目して考へる時、古代の各個人や小團體で用ゐたらう祝詞は別として、現存のものは天皇を主體として發動したものと見得るのである。

此の事は、古代祝詞の精神に取つて重要な意義を含むものである。それは、古代の「祭まつり」は、即ち「政まつりごと(祭事)」であり、祭は正に國家の統治事業の一種であつた。これ、穀物の豊凶や人民の日常生活の安全を、國民が直接神に祈る以前に、統治者たる天皇が神に祈り給ふ所以である。此の天皇を主とする國家的色彩に古代精神の特色を先づ見る。

次に、祝詞に於て古代の神觀念を觀察できる。祝詞の神々は記・紀・風土記の様に、傳説話話の主人公ではない。それが日常生活の安危に直接に甚だ具體的に結びついてゐる所に、その特色がある。古



代人は此の穀物の神、風の神、火の神、家屋の神等に向つて、己の生活の根本を抑へてゐる威力ある存在として對してゐた。従つて彼等の神に對する態度は、今日我等が純哲學的に純宗教的な憧れで高尚な神佛を考へるのは甚だ異つてゐた。いはば、極く具體的、實際の利害に即した考へ方だつたと見るべきである。祝詞にあれ程莫大な御供物を捧げてゐるのも、神がかういふものに動かされる具體的非抽象的存在と見られてゐた故である。故に、彼等の神觀念は表裏二體に複雑であつた。神の保護に對して熱烈な感謝を捧げる氣持もあるし、一方神を恐れる、特に神が惡意に傾いて、大風・洪水・火災・疫病等を與へるかの不安に常に戰いてゐた。又、一段くゞつて考へれば、出来る事なら神々の力を人類に好都合に發動せさせられたいとの功利的欲求も動いてゐた。祝詞の莫大な供物は、從來の様に單に感謝の爲と一色に解するより、斯く複雑な意欲の發動と見たが妥當であらう。

文献 前項所掲と同じ

#### 四一 祈年祭祝詞の精神に就いて述べよ

「祈年祭」は、キネンサイと音讀する事もあるが、トシゴヒノマツリと訓讀するのが本來の正しい稱呼である。此の「年」<sup>とし</sup>は、廣くは穀物をさし、狭く使ふ時は稻を表す。コヒは、祈り願ふ意である。即ち、その年の穀物、就中稻の豐作を毎年二月四日の卯刻(午前六時に當る)に祈る祭である。

さて、此の祭の祭神を見るに、御年神・大御巫の祭る神・座摩の御巫の祭る神・御門の御巫の祭る神、生島の御巫の祭る神・天照大御神・六の御縣の神・六の山口の神・四の水分みづかたの神の九種の神々である。此の中、第一の御年神は、直接に穀物の豊凶に關與される神格だから第一に擧げ、言葉を盡して祭つたのは、この祝詞の性質として當然である。が、第二の神々から先は、皇室に關係の深い神々で、直接に穀物とは關係がない。然るに、それを特に連ねて擧げてゐる點に、我國獨特の事情が存する。即ち收穫の問題は國民の問題であるが、我國にありては、國民と皇室とは一體である。こゝに、此の國民的大祭に八種類まで皇室の神が擧げられた理由がある。故に、此の祝詞をよく檢すれば、穀物を國民が自分の意志から作るとはどこにも述べてゐない。御年の皇神が天皇に穀物栽培の事を「依よさし」給ひ——御依託遊ばされ——その結果、稻が作られるとしてゐる。之は御年神を敬つた事にもなるが、同時に、國民の主食物栽培が神に發しはするが、その間に皇室を仲介として執り行はれることを明示してゐるのである。又、皇室關係の八種の神々の中、天照大御神に對しては、祭の言葉は特に長く美々しく連ねられ、捧げる供物は特に豊富に盛り上げてあるのは、之も我國の國民性の發露である。

次に、此の祝詞に現れた古代精神として神への崇敬の町重さを見る。それはどの祝詞にも見えるものであるが、特に祈年祭の如きには著しい。先づ此の祭の前に當つては、齋戒あらいひ(荒忌三日、眞忌一日)が行はれ、祭に先立つ十五日前に、忌部八人及び鍛工・木工等に命じて御供物の用具を作らせる。又、

その御供物は畿内から白い鶏一羽、近江國から白い猪一匹、左右馬寮から馬十一匹宛を奉るの外、他の祝詞以上に多數の海山の御供物を奉つた。で、かういふ、祝詞の背景をなす祭の仕度そのものが極めて大掛りであつて、いかに收穫が重大視されてゐたかを語つてゐる。従つて祝詞の内容に於ても、同じ精神は明かに看取出來る。即ち、修辭の町重を極めてゐる點はもとよりであるが、内容そのものと同じ色彩が見える。一體我が古代人の考へによれば、穀物の栽培は神の意志及び依託によつて行はれるものである。又、その收穫の多少は、一に神々の御意志の如何に基くのであつて、氣象その他を自然現象と見て自然現象によるとはしない。こゝに、宗教が生活の表裏に沁み込み、人々の精神が神に満たされてゐた時代の姿を發見できる。

従つて、此の神々の意を迎へんが爲に、御供物は極力その種類と量の多からむことに努力した。之は勿論、神への町重さを表す。かうした感謝のまことを御供物によつて表したものである。此の純な撲實さに古代人の心境を見るべきであらう。

文 獻 祝詞講義(鈴木重胤)

祝詞新講(次田 潤)

及び三八項所掲參照

#### 四二 祝詞と宣命とを比較評論せよ

祝詞と宣命とは、共に古代に行はれ、古代日本人の人間性や文化の表現である點で一致してゐる。

併しそれ以外に、その成立の根本に於いて、深い關聯がある。

先づその用ゐられる目的から云へば、祝詞はいはゞ宗教的な必要に出づるものである。神に向つて訴へるのである。之に反し、宣命は、政治的目的による。人民に向つて天皇や政府の意向を傳へる役目のものである。

併し、古代にあつては、まつりごと 政は祭事である。まつりごと 之は、言葉の偶然的な一致では決してない。國家は、皇祖神の御依託を受けて統治されるもの。政治は、神の御依託に發して天皇之を執り行はせらるゝと信じてゐた。故に、宣命が政治の爲に喚發せられるのは、その源は神に發し神に通じてゐるのである。その一方祝詞にあつては、祭に當つて一々の祭事を執行するのは神主・祝部たちであるが、彼等に向つて、何月何日に何の祭を施行せよと發命される(それが祝詞の表面上の目的であるのだが) その主宰者は、天皇である。故に、その直接の發動者が天皇である點に於て、之は宣命と甚だ相近い。天皇→人民の形(或は、神→天皇→人民の形)が、宣命であり、天皇→神主等(或は、天皇→神主等→神)の形が、祝詞であると思得るのである。

次に、兩者の相違點を數へてみよう。

祝詞がその大部分は、毎年毎祭に殆ど同一のものを繰返して使ふといふ恒久的な使用法であるに對し、宣命はその場その時の用途を滿たす爲だけに使はれる一時的な性質を持つ。

又、その表現をみるに、祝詞はどれもその構成に一定の型がある。即ち、初めに、かういふ目的で祝詞を讀むといふ事を述べて、祭の性質や、その祭神の性格を明かにする部分がある(祝詞の文學的特色は、主として此處に在る、と云はれ。)次に第二段でその神へ祈を捧げ、或ることを乞ひ願ふ。而して、此の部分で神へ莫大な供物を捧げて神の御機嫌を取結ぶ。かういふ二段の形式が必ず取られてゐる。然るに、宣命は初めに宣命の目的や事件の性質を述べ、後にその事件に對する國民の注意や、政府の處置、意向を説くといふ傾向があるが、此の兩段の境は甚だ臚であつて、宣命の方には寧ろ一定の型の様なものはないと見る方が事實に近い。之は、前者の恒久的性質、後者の一時的性質の差に基くものである。

なほ、部分的修辭に於ても、祝詞の方は屢々習慣的表現が繰返され、幾篇も連続して讀む時は倦怠を感じる程であるが、宣命は分量も長短さまざまであり、さういふ表現上の習慣性が割合に少い。

次に兩者の内容上の特色を比較してみよう。祝詞は神への祈を目的とする。さうして其處に表れてゐる心理は、古代人の神への怖である。又神への崇敬が表れてゐるが、それは怖に發した畏敬である。威力ある神を怖れ、その靈力の優秀さを認めるから、之に縋つて、幸福や生活の安寧やを得ようと思ふのである。

之に對して宣命は政府の政治的關心の方向が表れてゐるのもとよりであるが、特に注意されるのは、歴代の天皇の民草に對する仁愛である。之は、忠良な民に慈心を注がれるのもとよりであるが、

時に逆心を抱く者に對しても、出來る限り反省を求める處置を取り、而も如何にするもその甲斐の無い時に初めて之に處罰を加へられるといふ態度である。こゝに日本の君臣關係の麗しさをあり／＼と看取出來る。

最後に、宣命は宣長の歷朝詔詞解が殆ど唯一の註釋書であるが、祝詞は甚だ後世の研究書が多い。それに就いては、第三八項(一〇)に擧げた祝詞の研究書を参照せられ度い。

文獻 上代日本文學講座(春陽堂)

國文學史新講上卷(次田 潤)

其の他三八項に同じ

### 四三 風土記に關し左の三項に就いて述べよ

(甲) 性質特に其の文學性 (乙) 現存するもの及び  
それらの撰進時代 (丙) 主なる文獻

(甲) 古代の風土記は、元明帝の和銅年間に、諸國に命じて奉らしめた地理書である。續日本紀の和銅六年五月の條に次の記載が見える。a・b・c等の符號を入れて説明すれば、「幾内、七道諸國、郡郷著ニ好字。」(a)其郡内所生、銀銅彩色草木禽獸魚蟲等物、具錄ニ色目、(b)及土地沃瘠、(c)山川原野名號所由、(d)又古老相傳、舊聞異事、載于史籍、言上」とある。aは產物、bは土地の狀況、cは地名の由來、dはその土地の傳説である。之を、幾内の諸國(大和・山城等)・七道の諸國(東海道、東山道以下)の諸國(下の諸道の諸國)以

に向つて、その國の a・b・c・d を書いて差出せ、と命じたのである。之を更に總括すれば、a・b は地理的事情、c・d はその土地の言ひ傳へ(傳説)、即ち歴史に關する記録である。要するに、「古代日本の地理・歴史に關する記録」、之が風土記である。

次に其の文學的性質を見れば、風土記全部が一つの文學書に非ざる事はいふまでもない。従つて此の中に「文學的」の名に價するものを求むれば、上記の c・d の部分及び諸所に見える歌謡である。

風土記の傳説・説話の文學性は、一つはその素材に、一つはその表現に求められる。風土記傳説の特色として、地名の由來を説明したものゝ多い事は何人も指す所であるが、此等は土地に執着した未開人の心理を語り、物の名に深い意味を認めた古代社會を物語る。此等の説話の多くは、短い記事で文學の名に値しないが、その少數のものは相當の内容を持つ。例へば出雲風土記の猪麻呂が娘の仇を討つ説話、常陸風土記の處女松原の説話、肥前風土記の弟日姫子の領布振山の説話、丹後風土記の浦島の傳説、攝津風土記の鹿の夢の話の如きは、内容豊かで、文學的情趣の掬すべきものがある。

次に、神と神・神と人・人と人との間に土地を争つた説話があつて、記紀にない色彩を表してをり、或は常陸・肥前・豊後風土記には、天孫民族が異民族を征服してゆく説話が多數にあつて、そゞろに亡びゆく民への同情をそゝるものがある。更に、山や坂や海岸の難所に蟠居して、往き來の人を取殺した邪神の記事が頗る多く、之に戦く古代人の姿が實に哀れに描かれてゐる。記紀と違つて風土記の神

神はその性質が荒く邪惡で、聊かの理由で、或は全くの無理由で、人を殺傷したり、安寧を脅したりしてゐる。こゝに他の書に見られない古代生活の眞實の姿を發見する。

更に、表現上の特色としては、之は全部漢文で書かれてゐる爲に、部分的に漢文的修飾の麗しく交へられてゐるのを見る。殊に常陸風土記は全面的に此の特色に溢れてゐる。

此等の散文に對し、歌謡があり、その數が學者によつて計算を異にするが、約二十數首と見得る。此の大部分は戀歌である。此等は、皆當時歌はれた民謡であるが、之は文學詩として見るには、その内容が一般的類型的であり、表現の緊縮さを缺く爲に、到底高い價値を附し難い。

(乙) 現存五風土記の中、常陸・播磨は古く、出雲之に次ぎ、肥前・豊後は尙後れるらしい。常陸風土記は、卷頭に和銅の詔(上)に應じて「常陸國司解。中ニ古老相傳舊聞事。問ニ國郡舊事。古老答曰。」の記事がある。又、郡と村との中間の地域はサトであるが、之に里の字を用ゐてゐる。之は靈龜元年里の字を郷の字に改めよ、との命が下つてゐるから、此の書が靈龜元年以前なることを現してゐる。尙、今日傳ふる所は、當時の全文でなく、一部分を省略したものである。

播磨風土記も里の字を用ゐる事及び揖保郡越部里狹野村の記事に「別君玉手等遠祖本居ニ川内國泉郡」とあるのは、靈龜二年和泉郡を和泉監の支配に置いたから、こゝに川内國泉郡とあるのは、靈龜二年以前に此の書の成つた證據である。尙、今日見る書はその或部分を省略したものである。



次に、出雲風土記はその成立の明記された唯一のもので、天平五年二月三日神宅臣金太理の撰したもの。但し、各郡に蒐集者が居り、それを金太理が編纂したものである。

最後に、豊後風土記は、甚だ疑はしい。篤胤は古代のものと説くが、狩谷披齋・田能村竹田によつて後世の偽書と看做されてゐる。肥前風土記も確實に古代のものか、折口博士の疑問説などが提出されてゐる。二書共に成立の時期・事情不明である。

(丙) 標註古風土記(栗田 寛)。纂訂古風土記逸文(同上)。古風土記逸文考證(同上)。常陸風土記鈔本(菅政友)。常陸風土記年代考(歴史地理二二ノ一所載、喜田貞吉)。常陸風土記物語(松岡靜雄)。常陸風土記新考(井上通泰)。常陸風土記新講(井上雄一朗)。標註播磨風土記(敷田年治)。播磨風土記(藤本政治)。播磨風土記物語(松岡靜雄)。播磨風土記新考(井上通泰)。出雲風土記考(荷田春滿)。出雲風土記解(内山眞龍)。出雲風土記考證(後藤藏四郎)。肥前風土記纂注(糸山貞幹)。肥前風土記考(同上)。肥前風土記新考(井上通泰)。箋釋豊後風土記(唐橋世濟)。豊後風土記新考(井上通泰)。

文 獻 上代日本文學史(武田祐吉) 上中古文學論攷(倉野憲司) 國文學史新講上卷(次田 潤)

#### 四 萬葉集の文學的特色に就いて記せ

萬葉集は、精撰された歌集でない。それだけに各種の方面に複雑な色彩が雜り合つてをり、それが

此の書の特徴をなしてゐるが、その文學的性質の點でも多種多様な要素の並立が、大いなる特色と見られる。而してその各々がどういふ性質と意義とを有するかを考へて見たい。

第一に、此の書の持つ原始的性格が擧げられる。それは眞淵の「ますらをぶり」と名づけた雄健な分子を含む。又、原始文學のどれもが持つ、素朴・單純・無技巧の特色を含む。所謂「まこと」の文學としての特色を含む。而して此等と同時に、文學的により重大な特色として、全人間の壓力の包藏がある。齋藤茂吉博士の柿本人麿評に説かれた「混沌(カーオス)」がある。知とか情とか意欲とかの分裂が未だなく、それ等が混沌とした一體を成し、原始特有の雄大な迫力で我等に迫る、それは後世のあらゆる文學に無い人間の生の根本を抑揺がす熱力に満ちてゐる。それは、單なる雄健やまことや素樸やでなく、文學の根本第一義的なものである。「ものものふの八十うぢ川の網代木にいさよふ浪の行くへ知らずも」その他の人麿の藝術や、「夕されば小倉の山に鳴く鹿は今宵は鳴かず寝ねにけらしも(雄略天皇)」が、崇嚴の氣を帯びる理由は實に此處にある。而して、此の原始性は、その源は記紀の歌謡にあり、萬葉も、初期の作品に色濃く發現してここで絶滅した大なる特色である。

萬葉が元明・元正帝の奈良初期に入つて表れた大きな變化は、素材的に見て、思想歌の誕生と寫實歌の出現とである。思想歌は同伴旅人・山上憶良等に見える。それは旅人の讃酒歌(三)、憶良の令反(感情二歌(五卷)や貧窮問答歌(五卷)に見る様に、外來思想の影響によつた。と同時に彼等の知性がさういふ

ものを受入れ羽ぐくむだけの高さに達してゐた點で二重の意義を持つ。此の種の歌は後世の勅撰集に稀で、特に憶良の思想歌は絶類の特色である。それは、人麿の「詠嘆」、赤人の「寫實」に對し、「意慾」の文學として人間の魅力に溢れ未來的意義に充ち満ちてゐる點で、別に一風を開拓したものである。

寫實歌は、高市黑人・山部赤人以下の叙景歌に明瞭に見える。それは、記紀時代正體の知り得ない存在として畏怖された「自然」が、人間と同水準に下つて、自然が美の對象となり得た事によつて生れた。つまり、それだけの國民の文化の進歩を前提として生れた。而して此の種の作品の最大の特徴として、對象を捉へる態度が客觀的であり、表現と内容との均等した事が注目される。上記の原始的或は思想的作物で、内容が表現を壓してゐるのと對照的である。「ぬばたまの夜の更けぬればひさ木生ふる清き川原に千鳥しば鳴く(三卷)」の赤人はその代表である。之は其の表現態度からすれば、寫實的・自然主義的傾向と呼ぶべく、現實を承認し之をありのままの姿に於て寫したものである。憶良が動的・文學ならば、之は靜觀の文學である。——と共に、その結果から見る時は、表現と内容との釣合つた所謂古典的クラシックの美といふべきである。島木赤彦が、萬葉の特色を、表現が作者の思ひと隙がなく表現の直接性を表すと説いて讚美したのは、此の種の作品に最も適合する。此の嚴肅な寫實精神は、獨り叙景歌だけではなく、奈良朝初期の作品に一貫して表れた側面であるが、叙景歌に於て最も明瞭に發現した。而して萬葉末期には既に此の特色は失せ、平安朝には愈々衰退した。而して、和歌史的に

見れば、古今集の主觀主義、新古今集の象徴主義に對比する萬葉歌風の特長である。

かういふ中期までの特色は、聖武帝の天平年間頃から漸く衰へた。之は、長歌が衰へて短歌が獨り榮えた事と相伴つてゐる。特色ある思想歌や、緊密な寫實傾向は衰へ、それに代つて觀念的な作物、優雅な柔かみ、家持の末期の作に見える幽玄ともいふべき疲れた文學相へ移行した。家持を中心とする大伴一族及び彼等を圍む貴族官吏に此の風が著しい。さうして之が古今集へ繋り、その萌芽を早くも表してゐる點で文學史的に注目される。

萬葉には以上の様な、個人的色彩、専門歌人的流れの時代に添うた發展の他に、民謡的一面がある。それは卷十一・十二・十三・十四・十六の如きに著しく表れた。ここには、年月的發展が殆どない。素朴で純で野性的な特長と、間のびした内容表現の類型化と云ふ缺點を同時に併せ有し、善惡兩方の意味で後の撰集に無い特色を示してゐる。

上記の諸特色は、夫々國家社會の様相と相應じてゐる。人麿時代の「原始的」色彩が、大化改新後の國家統一的時代と應じ、旅人・憶良の色調が、國民知性の擴大と外物攝取の世相に根ざし、知性の分離をも示唆してゐる。寫實傾向は、知情の愈々の分裂を現して新貴族階級(國家統一の理想と相反するグループ)の擡頭と應ずるものであり、家持の觀念的はた疲勞的傾向は、此の階級の純眞な抒情詩精神に不適なる事實を明示してゐる。最後の民謡は、以上の移りに比較的關係薄い庶民階級の不變的な生活の表現である。

尙、以上の個別的な？特色の他に、萬葉全體として、素材が各方面にわたり、作者が社會のあらゆる部門に及んでゐるといふ「廣さ」がある。之は、萬葉時代（特にその初期及び、民謡の世界に於て）、文學がまだ實生活から獨立せず、現實のあらゆる部門が無雜作に作品へ取入れられたと云ふ事、従つて、特定の純文藝作家を要せず社會人即詩人であり得た、と云ふ事情に基く。その上、萬葉が、専門歌人的な「眼」で整頓された選集でなかつた事が、事情を強化してゐる。

文献 次項に同じ

#### 四五 萬葉集の歌に現れたる主なる精神に就いて述べよ

文學は、藝術的衝動の所産であると同時に、その作られた當時の、時勢とか國民性とか作者の世界觀とかを反映してゐる點で、精神的使命を負ふものである。文學は何れの作品でも常に此の兩面性を具へてゐる。

萬葉集も、文藝的側面と同時に、之を精神的側面の文化財として扱ふ事が可能である。而して、さう云ふ見地から見、且、之を發展的に捉へる——年代に従つて展開していつた姿に於て捉へるとすれば、大凡次の様な見方が出來上る。

先づ、神又は神的なものに對する思想がある。即ち、萬葉よりも以前の、宗教が政治や實生活の上

にあつて之を支配してゐた時代の面影を傳へるものである。そこでは、山嶽や動物を神と歌ふ素朴な自然神的な觀念から、風の神、海の神を靈的に見る稍高等な神觀、更に天照大御神・大國靈神の如き高尚な絶對神(國家神的絶對神)をまで認めた。而して最後の神には尊敬と信賴とを以てよりかゝつて行つたが、それ以下の神は寧ろ、好意を得れば幸が與へられるが、然らずば多くは人を害する可能性を常に貯へるものとして、畏怖の對象としてゐた。こゝに古代宗教觀の特殊性がある。

次に、此等の神のうち、天皇は又特殊の神として考へた。所謂、現あきつ神(現人神)とも申すの思想である。之に就いては第一七項(四六)に説明した。尙一二〇頁・一二四頁をも參照せられたい。

此等の宗教觀が日常生活に於ける各種の呪術的世界觀や生活となつて現れた。即ち言語に靈性を認めた言靈ことまの信仰や、魂が浮れ出づる事から不幸が起るそれを防ぐ爲の鎮魂の習慣、各種の卜占、夢や噓などに關する迷信、此等はその量の多さ、その影響の深刻さ、その信仰の眞劔さが何れも後世とは比較にならぬもので、彼等の精神生活を深く捕へてゐた。而もそれが記紀時代よりも薄らいでゐる所に文化の進展を認めるのである。

次に、現實生活の反映で、團體精神と個人精神との問題は最も大きな命題である。團體の最も大なるものは國家である。次は社會や或る居住部落やがあり、又、階級の問題がある。此等の中、最も明瞭に見えるのは國家的精神である。それが多く日本固有の、皇祖神すめみことや、皇室と關聯して考へられてゐ

る所に古代日本の特色がある。之に就いては次項に詳説する。

次に、量に於いて多いのは、漠然とした世の中といふ考へで、之は戀の歌の場合人眼や噂を怖れる場合に、甚だ多量に現れてゐるが、「精神」と名づける程に、その内容も形式も昇上してゐない。唯此の中で山上憶良の貧窮問答歌其の他の社會や貧富を扱つた作品だけが、思想としても藝術としても、飛び抜けて目立つてゐる。

次に、個人的精神としては、大化改新以後我が國にも、自然的に又外來文化の影響の爲に、個人的思想が發達した。さうして萬葉集にも、個人の意識、吾の意識をはつきり擱んだ作家が數多い。のみならず、萬葉の藤原京や奈良京の初期以後の明白に美的藝術的衝動によつて作られた諸作品は、個人的意識の確立なくしては存在しないもので、大伴旅人・山上憶良・山部赤人等の傑作は皆此の意識や此の個的生活から生れたものである。

かうした個性の目覺めといふものは、必ず知性の覺醒と相伴ふものである。従つて、奈良京以後の専門歌人の作品の如きでは、素朴な自然神崇拜の如きは影をひそめる。宗教のみならず自然に對しても、萬葉初期では自然を畏敬的に、或る場合には神的に見たものが、此の期では自然と人生と對等に立つ世界と見、客觀的にだけ扱つてゐる。かうして始めて叙景歌が萬葉中期に出現した理由が分る。以後、自然は専ら美的觀察の對象となる。此の意味に於て、個人意識の發生と、悟性の目覺めとは萬

葉の藝術性を思ふ時に逸すべからざるものである。

最後に、外來の思想として、佛敎・儒敎・神仙思想の如きがある。が、之は第四七項(二)に説く所を参照されたい。

文獻 萬葉集の新研究(久松潛一) 上代日本文學の研究(同上) 萬葉集考説(同上) 萬葉集に現れ

たる日本精神(同上) 上代日本文學史(武田祐吉) 萬葉集講座(春陽堂) 上代文學に現れたる日本精神

(野村八良) 現代日本に於ける萬葉集の意義(「日本文學の本質と國語教育」所收 森本治吉)

#### 四六 萬葉集に現れた國家意識に就いて述べよ

日本の古代史に於て、完全な國家統一が實現し、國家統一的政治が行はれたのは、大化改新以後である。従つて、萬葉集の國家的意識といふものも齊明・天智の朝以後のものが著しい。それはその内容から見る時、國家の國家としての特色を擧げるものと、國家と皇室との關係を歌ふものと、二種類に分けられる。

日本の國家としての特色は、古代に於いても、又現代に於いても、色々に説かれてゐるが、その中日本を神の國と意識したこと、それから日本は言靈ことだまの働きの著しい國と見たことなどは、當時日本の特色と考へたものらしい。



日本を神の國と見た事も事實である。山上憶良の遣唐使を送る歌(五九四卷)の中に「そらみつ、日本の國は、皇神すみかみの、嚴いづくしき國、言靈ことたまの、幸さきはふ國と、語り繼ぎ、言ひ繼がひけり」とある如きである。又、孝謙天皇の、遣唐使出發に際しての御製には「そらみつ、日本の國は、水の上は、地行つちく如く、船上は、床に居ること、大神の、いはへる國ぞ」とあり、此等によつて、日本國は神が護つて居られる國だ、といふ事を特色として意識してゐた、と分る。

又、言語の靈性を認めるといふ事は、未開の民族に多い事實であるが、我古代に於いても、言葉は或る幸福を齎す、と信ぜられてゐた。上にも擧げた様に「言靈の幸はふ國」と歌つたので明かである。で、さういふ言語は無暗に用ふべきでなく、慎重に扱はねばならぬから、「葦原の瑞穂國は、神ながら、言擧ことたませぬ國(三三五卷)」と考へたのである。

以上の諸特色は、ひとり日本に限られたとは、今日から見ても考へられぬ。然るに、此の國家がその中心として、皇室がましまして之に統一さるべきものだ、といふ信念と結合する時、日本獨特の國家觀となる。即ち、萬葉では、天皇は普通人と異つて神にましまし、その神によつて統治が遂行される。「やすみし、わが大玉おほたまの、高敷たかぢかす、日本の國は、皇祖神すめみかみの、神の御代より、敷きませる、國にしあれば、生あれまさむ、御子のつぎつき、天の下、知ろしいませと、八百萬、千年を兼ねて、定めけむ……」(六〇四七卷)とあるのは、御支配が神の御代から始つて居り、將來の御後繼が次々と天下の事

に當られる事に既に決定して了つてゐる、といふ信念である。斯くて、國土の如何なる隅々に到るまでも、此の御支配にはづれる箇所は一としてない、といふ信念となつて「地ならば、大君います、この照らす、日月の下は、天雲の、向伏す極、谷蟻の、さ渡る極、聞しをす、國のまほらぞ、かにかくに、欲しき隨意、然にはあらじか(八〇〇卷)」といふ作品となる。さうして、天皇は、人間ならぬ神として、認めてゐた。所謂「現つ神、吾が大王の、天の下、八島の中に(六〇五〇卷)」の「現つ神」で、神が假に人間の姿で現れられたと、見なしてゐた。(四六一・二六六、二四頁参照)

従つて、臣下たるものは、此の皇室に忠誠を勵むことが、他から強ひられずとも、自然の責任として思念された。「み民われ生ける驗あり天地の榮ゆる時にあへらく思へば(九九六卷)」の「ものゝふの臣の壯士は大君の任のまにまに聞くといふものぞ(三六九卷)」の「けふよりはかへりみなくて大君の醜の御楯と出で立つわれは(四三七三卷)」の感動が自ら湧いたのである。而してそれがひとり現在だけでなく、遠い祖宗の時代からの忠誠であることは、大伴家持の著名な噺族歌中の「大伴の、遠つ神祖の、その名をば、大來目主と、負ひ持ちて、仕へし官、海行かば、水漬く屍、山行かば、草生す屍、大皇の、邊にこそ死なめ、顧みは、爲じと言立て、丈夫の、清きその名を、古よ、今の現に、流さへる、祖の子等ぞ」(四〇九四卷)によつて明白である。

かういふ皇室への忠誠や奉仕が即ち國家への奉公で、その間二にして即ち一、といふ關係にあつた

ことに特色がある。

文献 萬葉集の-new研究(久松潜一) 萬葉集に現れたる日本精神(同上) 上代文學に現れたる日本精神(野

村八良) 現代日本に於ける萬葉集の意義(「日本文學の本質と國語教育」所收 森本治吉)

#### 四七 萬葉集に於ける異國的精神に就いて述べよ

萬葉集に於ける異國的精神は、萬葉集の歌の内容の上からと形式の上からとの二つの觀點に立つて考察出来るが、今は主として内容の上から論ずる事にする。

内容に就いて異國的精神と看做されるものは、思想・宗教が主であつて、大體(1)佛教思想、(2)儒教思想、(3)老莊思想、(4)神仙思想の四つを擧げることができる。

(1)佛教思想 宗教史上固有の神道に對抗して推古朝頃から活潑に浸潤した異國的精神であつて、大化改新當時蘇我氏の滅亡と共に一時衰へたかに見えたが、改新そのものゝ指導理論や政治的體制が元來異國的なものであつた上に、當時の佛教は、個人の救よりも、國家の安寧の爲に求められ、金光明經の如き國家鎮護の教理が採用されてゐたからして、大化改新後佛教は新たな目的——國家の政治を滑かにする一方法として奨励されて盛に流布し、聖武帝の御代には神道を壓迫する程であつた。此等の爲、萬葉集にも佛教關係の作は多い。その影響は、大觀するに前期ではそれ程顯著でなかつたが、奈

良中期の天平年間に入ると、露骨な佛教精神が文學の上に現れる様になつた。殊に山上憶良・大伴旅人等は最もその洗禮を受けた人々で、旅人の「凶問に報たまふる歌」や、憶良の「子等を思ふ歌」「世間の住り難きを哀める歌」(何れも萬葉卷五)では序文に佛教の知識を並べて、歌で佛教的感懐を述べてゐる。

世の中は空しきものと知る時しいよゝますます悲しかりけり (旅人)

世の中を何に譬へむ朝開き漕ぎにし船の跡無き如し (滿誓沙彌)

の如きは、その代表的作物である。又、さう云ふ深い精神的な受容のほかに、表面的な佛教色のもあり、「餓鬼」「布施」「法師」「檀越」等の佛語も使はれてゐる。

(2) 儒教思想 憶良の作品に最も顯著に現れてゐる。彼の「感情を反さしむる歌」では、父母を棄てて異端の術に熱中する人を儒教的倫理觀の上から戒め、又「沈疴自哀文」其の他では、盛に佛教と共に儒教の知識を以て現實の生命の苦難多きを説いてゐる。之を眞似て家持にも儒教的歌作が見える。が、全體としては、少數である。

(3) 老莊思想 之の現れたものとして常に挙げられるものに、旅人の讚酒歌十三首がある。竹林の七賢人を讚へたり、道徳的行持を嘲弄して飲酒を奨めたり、老莊虚無の人生觀がよく作品上に具現されてゐる。その子の家持にも「山河の清けき見つつ道を尋ねな(二十卷四六八)」の如き作が幾つかあり、ここにも外來思想の影を宿してゐる。

(4) 神仙思想 支那戰國時代に現れた思想で、蓬萊・方丈などの神山を想像し、そこに不老不死の生活があるとして憧れる享樂的逃避主義である。之も旅人に最も顯著である。即ち梧桐の日本琴に添へて藤原房前に贈つた書簡及び想歌(五二〇)では、琴の精なる娘子と會話する傳奇的形勢の中に神仙思想が見られ、「松浦河に遊ぶ序」では、鮎釣る少女等を仙女と見立て、神仙的聯想を逞しうしてゐる。其の他、柘枝の歌(三八五)や仙人の人形を歌つた作(九三二)等あつて、一般貴族階級の間にかゝる個人的享樂に根をさして神仙思想が瀰漫してゐた事を知る。之は當時の社會的情勢が文學に現れたのである。

この外、七夕を歌つた多くの作も神仙趣味の現れであるが、又、題詠として花鳥風月を詠む傾向が卷七・卷八などに著しく現れたり、置酒宴飲して歌作する(旅人の筑紫に於ける觀梅の宴などは代表的なもの)なども、支那の消極的な影響である。

文 獻 萬葉集の新研究(久松潜一) 上代日本文學史(武田祐吉) 萬葉集外來文學考(林 古溪)

#### 四八 左の歌に現れたる精神に就いて述べてよ

天皇御遊雷岳之時柿本朝臣人麿作歌

大君は神にしませば天雲の雷の上にいほりせるかも(萬葉集)

此の歌に現れた精神を述べる前に、先づ此の歌の題意と歌の意味を解いて置かう。題意は「持統天

皇が雷岳いかづちのむかに行幸遊ばされた時、柿本朝臣人麿が作つた歌」といふので、天皇の御威光を讚美し奉つた歌である。歌の意は「天皇陛下は、神様でいらつしやいますから、雷いかづちといふ名をもつた此の雷岳の上に、行宮を營んでお宿り遊ばされることであるよ(第三句は雷に懸る枕詞)」といふのである。

扱て、此の歌を「大君は神にしませば」といふ前句と「天雲の雷の上にいほりせるかも」といふ後句とに分けて考へると、前句は作者の大きな思想乃至主觀を表したものであり、後句は、雲の上の雷といふ超人間界を象徴する雷岳に行宮を營んで御宿り遊ばされる、といふ事實を感動的に表したものである。而して前句は後句に對して、その事實の原因となる條件を示してゐるから、此の歌の重要な精神は前句にあるわけである。即ち、前句の思想があつて始めて後句の事實がより一層感動すべき事として成立するのである。

然らば「大君は神にしませば」といふ思想乃至主觀は何を示してゐるかといふに、それは古代氏族制度時代の祭政一致的世相を表す。古代社會に於ては、神宮と皇居は同所にあり、政まつりごとは即ち祭事まつりごとであつて、政官は祭官と一體であつた。故に、政まつりごとの中心である「大君」は、祭まつりの中心なる神と同質であり、大君は各種の神の中の一柱であらせたまふ。斯くて、冥界にあるべき神でありつゝ、人界に現れ給ふ故に、「現あきつ神」とも「現人神あひひとがみ」とも、天皇を申し上げた。(四六・一一六、一二〇頁參照)

人麿の生存した飛鳥朝時代に、祭政一致の思想は猶傳統的根強さを持つて嚴存してゐた事は、人麿

の歌に於て最も多く看取される。人麿の長歌及び短歌に皇室の御神聖を強調讃仰したものは極めて多數に上り、優に萬葉集の一特色をなしてゐる。而して「大君は神にしませば」といふ語を使つた歌は、人麿の作以外にも多數見出され、その外天皇を人格神乃至神聖人格として崇拜した例は無數であつて、それらが何れも天皇を氏族社會の中心と仰ぎ、その絶對的神聖を信ずるといふ點に於て變りがない。従つて人麿の「大君は神にしませば」といふ思想は、人麿一個人の思想ではなくて、永年にわたる萬葉人の民族的な普遍的思想であり、信仰であつた、と見ることが出来る。それが人麿に於て、最もすぐれた形で發現したのである。

#### 文 献

萬葉集の新研究(久松潜一)

萬葉集講義(山田孝雄)

柿本人麿(齋藤茂吉)

柿本人麿評釋篇

(同上)

古代詩歌に於ける神の概念(久松潜一・志田延義)

### 四九 萬葉集中の防人の歌に就いて述べよ

防人とは、國語的には崎守、即ち國のはし(邊土)を守る人といふ意味であつて、朝鮮・支那に隣接した九州地方の防備に當つた兵士の事である。此の種の兵士は早くからあつたと思はれるが、記録では大化二年に置かれたとあつて、大化改新後の國家の發展に伴つて九州防備の任は益々重大となつたのである。而してこの防人に徴せられる者は殆ど東國地方(今の關東及び信濃・駿河等を含む)の人民に限られて居り、それ

は一見不公平な事ではあるが、國人中最も勇猛果敢で邊地を守護するに堪へたといふ理由があつたらである。

防人の作つた歌は萬葉集中に卷二十の九十餘首と卷十四の數首とがあるほか諸卷に散見するが、防人の家族關係の作を防人歌に入れる場合もある。

卷二十の防人歌は、天平勝寶六年徵發されて難波の港に集つた者に一人一首位づつ提出させ、その中から當時兵部少輔であつた大伴家持が採擇したものであつて、採用されたものと殆ど同數の作が「拙劣歌」として捨て去られて了つた。

防人歌は此の様な東國民衆の作であるから、作られた時代は奈良朝中期であつても、その性質や特色は自ら卷十四の民謡東歌と共通するものを持つてゐる。即ち東歌の一般的性質乃至特色たる率直とか野性的とかいふ素樸性は、防人歌に於ても同一であり、用語に於ても、採録者によつて改められた形跡はあるが、大體東國方言を多く含んでゐる、といふ様な點に大きな價值がある。

併し防人歌として一般東歌とは異つた獨特の内容價值が、此の際問題とされねばならぬ。それは即ち作歌の事情が、故郷を離れて遠く九州の邊境に赴くといふ特殊な條件下に置かれた事によるものである。即ち別離の哀傷と防人としての覺悟を痛切に歌つた點である。當時にあつては斯かる邊境防備に赴く事は、病氣・飢餓等の事情も加はつて、死をかけた出征と少しも異なるものでなかつた。従つて彼



等は親子・夫婦の愛別離苦の情をむき出しに沈痛に歌つてゐる。

父母が頭かき撫で幸く在れて言ひし言葉ぞ忘れかねつる

我が妻も晝に描きとらむ暇もが旅行く我は見つゝしぬばむ

松の木の並みたる見れば家人の吾を見送ると立たりし如

此等は夫々に個人としての眞情を歌つてゐる。而してそれが、皇命を畏み公に殉ずる所謂滅私奉公の精神と結びつく時、尙一層沈痛悲壯な感情とならざるを得ない。

大君の命かしこみ磯に觸り海原渡る父母を置きて

大君の命かしこみ出で來れば我ぬ取り著きて言ひし子なはも

皇命を畏むことを詠み込んだ作は他にも多數あつて、此の絶對的な服従奉仕の精神は、人麿等によつて歌はれた天皇尊崇の精神と全く共通するものであり、こゝに防人及び一般東國の民衆に行互つてゐた純眞なる忠愛の念を見出すことが出来るのである。

更に、個人的な別離の感情や出征の苦難を克服して、純然たる國家的感情に燃え立つた丈夫振の作を見出すことも出来る。

今日よりは顧みなくて大君の醜の御楯と出で立つ吾は

天地の神を祈りて幸矢貫き筑紫の島をさして行く吾は

防人の歌は、此等の作に至つて最も高い精神にまで到達したといへる。

文 献 東歌と防人歌(松岡靜雄) 萬葉集の新研究(久松潜一)

### 三 中古(平安時代)

#### 三〇 平安朝文學の特質を述べよ

一、作者 平安朝文學の作者は、宮廷に屬した貴族階級の人々が大多數である。さういふ意味で、此の時代の文學を貴族文學といふ事が出来る。

次に、有力なる女性の作家が多數を占め、殊に散文文學の方面では、女性の作品に不朽の傑作がある。かやうに、多くの傑れた閨秀作家を輩出した時代は他にない。

二、文字 此の時代には假名文字が發達して、特に女性が假名文字を使用し、男性でも、國文で文章を綴る時は、殆ど漢字を使用せず、假名文字のみで表記する習慣が、此の時代の後半期では行はれてゐた。斯くて草假名の卓越した藝術的表現を完成し、和歌・國文、總て此の草假名で書かれたが、これ又、文學に密接な關係を有してゐて、當代文學の特質を考へる上に逸する事が出来ぬ。

三、作品 物語といふ小説形態の一様式を完成せしめた。當代以後にも、此の様式によつた作品が出てゐるが、それは模倣にとどまり、當代の物語におけるほど、現代的意義と、潑瀾たる活氣と充

實した精神と、美しい魅力とを持つてゐない。物語こそは、當代文學の特質とすべき文學様式である。次に、當代の日記文學と稱するものは、後代の日記と異なつて、物語と共通の特色を有し、やはり此の時代の文學に獨特の文學の一樣式とする事が出来る。又、隨筆といふ様式も、此の時代に初めて見られ、而も、すぐれた作品として現れてゐる。

**四、文章** 文章は、物語文ともいふべき、獨特のスタイルを完成せしめ、柔軟で陰翳に富んだ表現を持つてゐる。即ち、

1、主格、或は目的格などに表現せられるべき人物を、省略して、述格の表現の仕方により、自然に、讀者の腦中に、その人物を了解せしめるやうな表現方法を多くとつた。

2、諸種の助動詞を巧みに連ねて、作者の表現せんと欲する感情の動きを精緻に叙し、且句切りが少く、綿々と長く鎖り連ねる表現をとつた。即ち簡勁な表現とは反對の特色を有し、呼吸の長い文章を持つてゐる。

以上の二點よりして、文章は稍々難解に陥り、却つて表現の明確を缺くものも出來てゐる。併し、平安朝の生活や精神の表現としては、此等の特色が、内容にしつくりと合つた文學を形作つてゐるのである。

斯かる文章上の特色の生じた原因としては、作者が女性である事、草假名が發達して綿々とした假

名の美しい續け書の行はれてゐる事などが擧げられるが、更に、社會的には、支那に使を派遣する事が止められてより、鎖國状態となり、外來の文物に接する事が少くして、日本的な表現を醸成すると共に、文學が、女性の手に落ちて、それらの女性は、男性ほど、外國文學の桎梏に捉はれる事なく、それより解放せられてゐたが爲に、獨特の文章を發達せしめるに至つたのである。

**五、内容** 當代の生活の根本精神たる「物のあはれ」が、文學の内容の上にも汪溢してゐる。

〔「物のあはれ」につ  
いては五二項参照〕さうして此の事は又、一方において情趣的な當代文學の内容とも關聯を持つものである。即ち、

1、深淵なる思想を湛へてゐるものではない。

2、赤裸々なる現實生活の描破でもない。

さういふ意味では、大體において、浪漫主義文學に屬するものといふ事が出来るが、併し、決して強烈奔放なる空想的熱情、積極的意慾の表現ではなくて、あくまでも調和的・情感的な、所謂「物のあはれ」の精神の上に立つてゐる。又、必ずしも現實から離れたものではなくて、對象はやはり現實を土臺としてゐると共に、主情的傾向の他に、理智的傾向の根強く存する事も、此の時代の文學精神の特質として、逸する事が出来ない。但し、意志的な所は少しも見られない。

取材としては、戀愛を取扱つたものが大多數で、且悲哀の情趣を湛へたものが多い。さうして物怪

を恐れ、物忌ものいみや方違かたがへを嚴重に行ひ、而も晝よりも夜を好んでゐた、當代の貴族の神經衰弱的な不健康な生活が、到る所に曝露せられてゐる。

之をとりすべて云へば、貴族生活と、溫雅な京都といふ土地・自然の反映が、當代文學の特質を形作つてゐる。

文 獻 國文學全史平安朝篇(藤岡作太郎) 國文學に現れたる國民思想の研究(津田左右吉) 宮廷女流

日記文學(池田龜鑑) 日本精神史研究(和辻哲郎) 上代日本文學の研究(久松潜一) 日本文藝學(岡

崎義惠) 平安朝文學史(五十嵐 力)

### 五二 平安朝文學と漢文學との關係に就きて記せ

第一に、平安文學の一部に漢詩文の含まれてゐる事が擧げられる。平安時代初の勅撰三集を始め、漢詩文の撰集・家集があつて、之も當代の文學として取扱はれるべきものである。又、小野篁・菅原道真以下、漢詩と和歌の兩方に長じた者もあつて、それらの作家は、歌人であると共に詩人でもあつた。此等の作家は、當代作家の中でも、殊に、漢文學に密接な關係を有する人々である。

第二に、支那文學の影響が擧げられる。就中、白氏文集・文選の類が、種々の影響を與へてゐる。源氏物語の桐壺の卷に長恨歌の引用が多いのみならず、その雰圍氣も、これによつて高められてゐる。

所が濃厚である。枕草子にも「文は、文集・文選・博士の申文」などと見えてゐる。

之に就いては、朗詠の流行といふ事も注意すべきである。此の時代の後半期に大いに朗詠が流行したが、之は主として漢詩・漢文の佳句を一節種々のふしで歌つたものである。それらの朗詠の文句を集めた書では、和漢朗詠集・新撰朗詠集の如きが代表的な書となつてゐるが、此の兩書に出てゐる佳句には、邦人の作も甚だ多いが、又支那人の作も多く、就中、白樂天の作が群を抜いてゐる。又、史記・漢書・後漢書・文選・遊仙窟等の史書・文學書からも出てゐる。此等の佳句を朗詠してゐたので、當代の人々は自然、その影響を受けて、朗詠句がわが國の文學作品に引用せられてゐる事は甚だ頻繁となつてゐるのである。

以上は直接の影響であるが、又間接に次の如く種々の影響を與へてゐる。

第一に、和歌の方面で、その内容上に、漢詩の影響が見られる。即ち平安時代の和歌が、花鳥風月の類を詠む事が多く、詠物の對象が大體一定の物に定まつて來たのは、漢詩の題材の影響を受ける所が多いのであつて、漢詩で詠じられるやうな題材を、和歌の方でも取入れたのである。

第二に、和歌の形式の方面で、古代の五七調が七五調となつたのは、種々の原因が錯綜してゐて、單純な原因に之を歸一させる事は出來ないが、漢詩の影響も、その原因の一つと考へられる。即ち古代には五言詩が多く行はれたのに、此の時代となつて七言詩が行はれ、七言詩の上長下短の傾向から

七五調が馴致せられて來たといふ事が云はれる。(第七六項「今藤歌の發達に就いて記す」參照)

第三に、平安時代の文學の發達の過程に、漢文の影響が見られる。大體わが國の文章は、古代に於ては、漢字のみで書き現はされたのであるから、自然、漢字の訓讀式の讀み方が發達して、口語と文語とは乖離したと思はれる。平安時代に假名が發達してからも、その文章は、やはり漢學の訓讀式の文語文章をとつてゐた。竹取物語の文章などには、さういふ點が明瞭で、例へば「かぐや姫のいはく……といふ」といふやうな表現が多く見えるのも、その一例である。土佐日記に於ても、やはり同様の特色が見られる。従つて、之は句切りが多く、簡明な表現である。此の事は、古今集の序に、同じ内容の文章が漢文と和文と兩方で書かれてゐる事と考へ合はすべきで、假名序だけで獨立し得ず、別に眞字序の存在を必要とした如く(一面、之は支那の書を眞似て序文をつけたから、漢文序をも必要としたと考へられ、此の序跋の附け方にも、支那の書の影響が見られるが)、當時の和文には、漢文脈の影響が甚だ多かつたのである。此の事は、又、漢文が男性によつて書かれたといふ事とも關連し、上記の漢文脈の影響を受ける事多き文學作品は恐らく男性の作品と思はれるが、やがて、女性が多く文學に携はるに至つて、以上の如き漢文脈は薄れ、次第に獨特の物語文といふ和文を發達させるに至つたのである。

次に、日本的漢文の發達といふ事も、兩者の關係の一として擧げるべきである。即ち、純粹の漢文



は、表現が困難なので、次第に和臭を帯びた變體の漢文となり、當代の記錄文には、此の日本的漢文が用ひられる事が多かつた。之は特に鎌倉時代以後に發達したが、當代に、既にその形式の發生が認められる。

なほ、唐物語を當代の作品とする説もある。若し、然らば、之は現存する漢文學の最古の翻譯文學として注意すべきである。かやうに一書を成さなくとも、俊賴口傳に出てゐる王昭君の説話等、斷片的に支那の名高い説話文學を取扱つたものは種々散見し、就中、今昔物語の震旦の部に多く之を見ることが出来る。

文 献 日本漢文學史(芳賀矢一) 日本漢文學史(岡田正之) 日本漢文學史(山岸徳平) 漢文學講座)

五二 平安時代文學に現れたる「物のあはれ」に就いて述べよ

五三 「物のあはれ」に就きて記せ

五四 平安時代文學の主なる精神に就いて述べよ

平安時代の文學精神として、その中心となるものは、物のあはれの精神であり、又之は、平安時代の貴族生活の基調ともなつてゐるのである。物のあはれを解さぬ人々、物のあはれにはづれた行爲を

する人々は、毀られ輕蔑せられてゐるのであるが、之に反し、物のあはれに叶ふ人々は、心ある人々の尊敬を集めてゐるのである。

物のあはれとは、様々の外界の事物にふれて、あはれと心に感動せしめられる事である。此のあはれとは、必ずしも、悲哀の意味ではなくて、寧ろ感動そのものをいふのである。あゝと嘆じる溜息が即ちあはれであり、それは精神の感動が直接に單的に外界に表出されたものに他ならない。心に感動を受ける筈の事物に接しても、何らの感動をも受けないやうな無神經な人は、輕蔑せられる。併し又つまらぬ事、賤しむべき事にも、すぐに感動して泣いたり笑つたり大袈裟な表情を見せる慎みの無さも、却つて物のあはれを知らぬ事となつて、やはり、輕蔑すべき人間といふべきである。

此所において、感動すべきものと、感動すべからざるものとを分別する事の出来る教養が必要となつて来る。又、感動の表出についても、やはり、粗暴・不作法に陥らないだけのデリカシーが必要なのである。

かやうに、物のあはれといふのは、根柢には、種々の事物に感じ易い、感傷的な心持が存するのであるが、斯かる情感を教養によつて統御抑制する事が必要である。さうして感情と斯かる修練とが平行するに至つて、始めて物のあはれに叶ふ人物となるのである。

右のやうな意味において、物のあはれは、情感と抑制との平行した人、乃至は先天的な感性が、後

天的な教育によつて歪められる事なく正しく成長した人、或は智情意の圓滿に融合した人にして、始めて解する事が出来る精神であり、又斯かる人の心意行爲の中に存する精神である、といふ事が出来る。

斯くして醸し出されるものは、圓滿なる情趣生活であり、高い教養のもとに營まれる文化的生活でもある。物のあはれといふ精神の外界に現れたものが、當代の貴族達の理想的な生活なのである。

次に、物のあはれには、理想追求の精神がある。しかし又、同時に現實の體驗を常に基礎としてをり、どうかすれば、過去の經驗を追懷する感傷性をも忘れないものである。斯かる現實と理想との、烈しい相刻といふよりも、寧ろ兩者の調和のもとに圓滿な平和な精神生活の營まれる心が、即ち物のあはれである。理想には烈しい情熱が必要である。併し又、一方では、冷靜水の如き反省の心をも持つてゐる。此の熱情に身を焼き亡ぼすに至らず、而も冷淡に墮さない調和的な心が、即ち物のあはれである。此所に圓融無礙なる情趣を味ふ事が出来る。

#### 拾遺集卷九の歌に、

春はたゞ花のひとつへに咲くばかり物のあはれは秋ぞまされる

とある如く、物のあはれは秋において多く感じられる。それは春の熱情よりも靜なる感傷がそこに味はれるからである。かやうに、時季では秋、時刻では夕方が、最も物のあはれの感じられる時であつ

た。又、生活では戀が人に最も物のあはれを教へるものである。長秋詠藻卷中に、

戀せずば人は心もなからまし物のあはれもこれよりぞ知る

といふのは、その心を詠んだ歌である。

戀愛は、人間の本能的な熱情の現れであるが、併し、それと共に、人目を憚り、思ふに任せぬ種々の障碍が起り、此の本能的な熱情に反省が促され、種々の陶冶の加へられる機會が與へられる。そこに多くの心の苦しみ悩みが經驗せられるのであるが、此の經驗こそ物のあはれの素地となるものである。斯くて戀愛によつて、眞に物のあはれを解する人間が作り上げられる。情趣の極致が此所に顯現する。源氏物語に描かれた源氏君の戀愛の種々相は、かやうな意味における、物のあはれの表現であり、源氏君といふ、最も物のあはれを解し、物のあはれに叶うた理想的人物の人間性の完成の過程が描かれてゐるわけである。

源氏物語などで、法師とか儒者とかは物のあはれを知らぬ者として、輕蔑して描かれた所があるのは、右のやうな意味における人間性を喪失した缺陷があるからである。又、さういふ意味では、清少納言の如き人物は、物のあはれを解してゐる人とは云ひ難い所がある。故に、紫式部日記では、清少納言の悪口を云つて貶した評言を記してゐるのである。枕草子に、あはれといふ語よりも、寧ろ、をかしといふ語を頻繁に用ゐてゐるやうな點も、かういふ意味で理解する事が出来る。

文 獻 源氏物語玉の小櫛(本居宣長)

日本精神史研究(和辻哲郎)

日本文學評論史(久松潜一)

日本文藝學(岡崎義惠)

尙、五〇項の文獻參照

### 五五 平安時代に於ける散文文學の發達を概説せよ。

平安時代の文學は、假名文字の成立によつて、非常な發達を見たが、就中、散文文學の發達は、假名文字の使用の恩恵による所が甚だ大きい。

それで、從來漢文で書いてゐた日記のやうなものも和文で書き現はすやうになり、又萬葉集卷十六に見られるやうな漢文の説話體を、やはり假名で和文的に表現するやうになつて、物語文學が發達するに至つた。竹取物語の「かぐや姫の曰く……と云ふ」といふやうな文章、土佐日記の「あるわらはの詠める……とぞ詠める」といふやうな文章は、何れも漢文訓讀式の文章であるが、それより次第に發達して、源氏物語などの如き物語文が完成したのである。さうして此等の文章も、初めは漢文訓讀の影響によつて、句切りが多く、簡潔な云ひ廻しをしてゐたのが、次第に修飾の多い、助詞・助動詞を重ね續けて、作者の傳へんと欲する氣分を出来るだけ精細に表現せんとしたが、併しその爲に稍々晦澁な、却つて不鮮明な度合の増した、特殊の云ひ廻しを持つ物語文となつた。その原因としては、此等の文章は、初め男性によつて書かれてゐたのが、やがて女性の文章として專用的に用ひられるに至

り、女性特有の柔軟な表現を取るやうになつた事、文章の表現に修練が出來、又美意識が發達して、言語表現の上にも簡明・素朴な表現だけでは飽き足らぬものがあり、次第に繊細の度合を加へて行つた事、草假名の續け書きが發達して、長く連ねて優美な草假名で文章を續け書く風が行はれた爲、自然、文章の方もそれに應じて綿々として長く續けて表現し、句切りの少い文章が行はれるに至つた事、平安朝初めの外來文學心酔の時代から、鎖國状態となつて、次第に特有の國粹文化を醗釀發揮せしめるに至り、獨特の巧緻な文章・表現法を發達せしめた事等、種々な原因が考へられる。

次に、散文文學の内容的方面について考へると、日記は可成り實用的な意味を持ち、日常の記録・備忘録に過ぎないので、寫實的・現實的な性質を持つてゐた。然るに、さういふ實用的な日記の性質から離れて、女性が、多分に感傷的な情感を交へて、自己の過去の歴史なり、自己の生涯の中における或る經驗なりに對して、之を懐しく回想するといふやうな、自叙傳的性質を持つに至つて、未だ現實的性質を多分に存してはゐるが、稍々物語小説的な浪漫的性質に近づく事となつた。又一方、上古の民衆的な傳説・説話の類は、貴族の間に取上げられて、素朴な物語小説を胎生せしめるやうになり、竹取物語の如き作品が出た。此の作品には、多分に傳説的・説話的性質が存して、架空な、浪漫的分子に富んでゐるのであるが、その構想の空想的な點が、此の後の物語では、次第に現實的な方面に變化して來た。斯くて、日記は寧ろ寫實的から浪漫的分子を増して行つたが、而もその基調はあ

くまでも現實的性質に根ざし、物語の方では、反對に、浪漫的な性質から寫實的性質を多分に包有する傾向に發展し、此の兩者の性質を、一つに統合するに至つたもの、即ち源氏物語である。これは理想と現實、浪漫的と寫實的との、最もすぐれた融合である。

又、物語の文章は、和歌の詞書から發達して來たものとも考へられ、即ち、萬葉集卷十六の歌物語の形から、平安時代の伊勢物語の如き和文の歌物語へと發展し、更に、此の歌物語の詞書の部分が、甚だ長くなれば、それは最早完全な物語と考へられる。さうして、當代の現實の生活においては、社交の必要上、和歌は最も大切な教養とせられ、頻繁に用ひられてゐたから、従つて、その生活の記録たる日記には和歌が多く挿入せられた。日記が歌集と類似の性質を有し、更に、それが物語の性質を有するとも考へられてゐた事は、小野篁集を篁日記とも篁物語とも稱し、在原業平の中將の集を在中將日記、辨内侍家集を辨内侍日記、平仲物語を平仲日記とも稱した例があるので知られる。斯くの如くして、日記は物語の性質とも融合するに至つたから、此等の種々の理由よりして、物語には、甚だ多くの和歌が挿入せられてゐるのである。

かやうにして、日記も物語も同様の性質を有するに至ると、一方では、社會を、自己を、客觀的に觀たり描いたりするのではなく、その感じたまゝを、主觀的に表現し、自らの心を、露はに表出しよふと欲する作家も出た。それが隨筆といふ文學形式で、作品を出だすやうになり、又、紫式部日記

の一部の如く、消息文の形でも、表現せられてゐる。

源氏物語において統合せられた浪漫的性質と、寫實的性質とは、それ以後更に分裂するに至り、物語小説では、頽廢的な末期的な浪漫的性質を多分に有する作品が出で、一方歴史物語が現れ、之は現實的性質を有すると共に、過去の黄金時代を懐しむ情も見られるのであり、さういふ點では、やはり末期的な感情を持つてゐる所がある。斯くて源氏物語以後の散文文學は、峠を越えて、次第に衰へ、次の時代の新文學(戰記物等)を迎へるに至つた。併し物語にはやはり多分に浪漫的な詩的な性質があり、寧ろ現實的な散文精神を持つてゐる文學としては、物語の發達に遅れて出でた隨筆文學や、歴史物語等に、之を見る事が出来る。殊に大鏡の如きは、對話形式の新しい戯曲的スタイルを創造し、自後の作品に多大の影響を與へた。

### 文獻

國文學概説(藤田徳太郎)

日本文學評論史(久松潜一)

及び五〇項參照

### 五六 土佐日記と古今集の序とを比較評論せよ

此の二作品は、その性質も創作の動機も甚だ違つてゐて、之を比較することは、此の二つが共に紀貫之といふ同一作者の手で書かれたといふ一點につながるのみである。

古今集の序は、山田孝雄博士によつて紀貫之の執筆でない由が論ぜられた(雜誌「文學」昭和十一年正月號)。だが之に



對し西下經一氏の反駁が現れた(國語と國文學 昭和十一年三月)まゝ、まだ決定が下されないでゐるが、こゝでは舊說通り貫之の作として論ずれば、之は醍醐天皇の延喜五年(一五五)古今集の編纂された折の執筆であらう。之に對し、土佐日記は朱雀天皇の承平五年(一五九)の作で、此の間三十年の経過がある。若し土佐日記を香川景樹の説の様に、七十二歳で書かれたとすれば、前者は四十歳程で執筆されたと見られる。此の壯年と老年との差異が、後に説く様に文體の違ひの基礎をなしたものと思はれる。

以上は、作者を中心としての差異であるが、次に、之を素材・内容の點から見れば、序は所謂議論文であり、日記は紀行文である。序は歌の本質論に始まり、和歌史から歌の種類に言及し、歌人批判から古今集編纂事情に終つてゐる。之を貫くものは、抽象的な論理である。之に反し、日記は承平四年十二月から翌年二月に至る一旅行の忠實な記録である。故にどこまでも事實に添うて記事が展開してゆく。特にそれが旅行記であり紀行文である爲に、その事實は場所と時間とに制約される。故に著しく具象的である。こゝに兩者の根本的な相違がある。

次に、双方の表現を見くらべると、序は對句を用ひる比喻を使ひ、論理を次々と重ねあげて行く複雑にして華麗な文體である。之に反し、日記は一センテンスの長さが甚だ短く、ポツリ／＼と切れる呼吸である。又、日記は漢詩・漢文等を含めた修辭を交へてはゐるが、記述そのものは、古淡なものである。達意の文を自由にほしいまゝにやる所に、此の日記の特色がある。此の兩者の相違は、一つは議

論文と紀行文、上表の文と私の慰みといふ差異によるだらうが、又一つには、前者は壯年、後者は年老いて文筆枯れ盡した頃の作だからであらう。

斯くて、全體の與へる印象に於て、壯重と輕妙、複雑と淡泊といふ對比があるが、特にそれは日記に多い滑稽諧謔によつて一層著しくされてゐる。土佐日記の滑稽は、地口・洒落言の様な言語の末節から内容の方面にも及んでゐて、此の作品の大特色をなすものであるが、之は森嚴な上表文には到底求められぬものである。

兩者は共に、平安初期未だ假名文學の未發達時代に現れて、その先驅をなした點で、文章史上にも大なる價值を遺すほか、一は國語の文學論の殆ど最初のものであり、一は國語紀行文の嚆矢として文學史上不朽の位置を占める點で一致してゐる。

文 獻 國文學全史平安朝篇(藤岡作太郎)

### 三七 源氏物語の構想を述べよ

源氏物語五十四帖は、初の四十一帖と終の十三帖との二部から成つてゐる。初の四十一帖は、光源氏君を主人公とし、後の十三帖は、表面源氏君の子であり、實は、その若い北方（にやまんのみや）の女三宮と、源氏君の親友、頭中將の子の柏木との間に生れた薰君を主人公としてゐる。尤も、此の十三帖の中、初の三

帖は前の源氏君の時代から、薫君の時代に移る橋渡しの役で、實際の物語の展開は、次の十帖に於いて行はれる。此の十帖を宇治十帖といふ。

源氏君の時代を正篇として、此の四十一帖も、源氏君の前半生と、後半生との二つに分ける事が出来る。前半生は、桐壺の巻から少女の巻まで二十一帖で、源氏君一歳から三十五歳の時までで當る。此の間、源氏君は二條院に住んでゐたが、少女の巻の終で、六條院が出来たので、爾後、源氏君は此の六條院に移り住んだのである。斯くて、源氏君の後半生に移り、之は、玉鬘の巻から幻の巻まで二十帖、源氏君、三十五歳から五十二歳の時までを含む。

かやうにして、作者は、此所に源氏君の一生涯を物語るることによつて、人生の種々相を示さうとした。源氏君の前半生の中、桐壺の巻から葵の巻まで九帖は、源氏君の誕生から二十三歳の時までで、若き日の源氏君の、女から女へと移る、戀愛の生活を描いて、青春の幸福に満ちた、その姿を映し出した。桐壺の巻は、源氏君の生立ちを記した前置のやうなもので、次の帚木の巻は、序論の位置に當り、雨夜の品定で、女性の論評をし、中流社會の女性をもつて、最も理想に叶ふものとした。此所に品定をせられた種々の女性の性格が、以下の各巻に現れる、青年時代の源氏君の戀の対象となる女性に反影して、その具體化として描き出されてゐるのである。

幸福であつた源氏君の生活は、その奔放な戀愛生活の爲に、遂に深い陷穽に陥り、須磨・明石に流

寓する失意の生活が始まる。此の不幸な生活は、榊の巻に始まつて、明石の巻まで四帖の間続き、二十三歳から二十八歳まで六年間である。ついで、歸京後の源氏君は、再び幸福な榮花の生活を迎へるやうになつたが、最早女から女へと浮れ歩くやうな事はせず、若い時の戀人達に、幸福を與へる事もつて喜とした。落標の巻から少女の巻まで八帖、二十八歳から三十五歳の時までである。

ついで後半生に移り、頭中將と夕顔との間に出來た女で、源氏君の所に引き取られてゐる玉壺を中心とした物語が長く続き、その間に六條院の豪華な生活が描かれてゐる。之が、玉壺の巻から藤裏葉の巻まで十二帖で、三十四五歳から三十九歳までの事である。

併し、此の幸福であつた源氏君の生活も、晩年に入つて不幸に襲はれる。即ち、源氏君の若い北方、女三宮の不義の事件で、その爲に、源氏君の最愛の夫人、紫上との間にも溝を生じ、あまつさへ、罪の子なる薫君までも、自分の子として育てなければならぬ責任を負はされる。併し、源氏君は若い時の自己の行狀を考へ、殊に父君の思ひ人なる藤壺との間に不倫の關係が結ばれた事によつて冷泉院の生れ出た事を思ひ、因果應報の目に見えざる働きも恐ろしく、自責の念に驅られるのであつた。斯くて、紫上も病死し、源氏君も己の行く末の長からざるべきを覺る。若菜上の巻から幻の巻まで八帖、三十九歳から五十二歳までである。

源氏君の時代は以上の如く、二部五期に分れる。その間に、種々なる女性の性格が描き分けられ、

又、因果の理を示し、物のあはれの情趣を具象的に寫したのである。

源氏君の物語を正篇とすれば、薫君の時代は續篇である。その初の三帖において、薫君と、そのワキ役なる匂宮の少年時代を描き、次いで、本文に入つて、此の二人の青年と、宇治の姫君との交渉を描いたのが、宇治十帖の前半で、橋姫の巻から早蕨の巻まで四帖、薫君が二十歳から二十二歳の時までの話である。併し、之は女主人公浮舟を登場せしめる爲の前置のやうなもので、次の六帖で、浮舟と二人の青年との戀愛の三角關係を描き、その愛慾の生活を越えて、浮舟が眞實の悟を得、救を得る所までを描いた。薫君二十四歳から二十八歳までの物語である。

尙、部分的には、人物の點出に主人公には、ワキ役を配して、兩々相俟つて、人物の關係や事件の進行を面白くしてゐる事、源氏君に對して頭中將があり、薫君に對して匂宮があるやうな例の見える事や、或は、内容の上でも、複雑多岐な叙述の中に、脈絡ある事件が隱顯起伏し、初の何でもないやうな話が、案外、後の重要な事件の伏線となつてゐたりすること、若紫の巻の北山における明石入道の噂話が、後に源氏君と明石上との關係の生じる伏線であり、又、雨夜の品定における頭中將の話が、後に夕顔を出す前提となり、更にそれより、玉鬘を中心とする長い物語が開けて來るといふやうな、巧妙な話術の進展等についても注意すべきである。

文獻 上代日本文學の研究(久松潛一) 對譯源氏物語講話(島津久基) 源氏物語新考(同上)

## 五八 源氏物語の後世の文學に及ぼしたる影響如何

源氏物語以後に出た物語作品は、多かれ少かれその影響を受けてゐる。人物の方面でいふと、狹衣物語の狹衣大將は、源氏物語の夕霧大將や薰君の性格に、飛鳥井の姫君は、夕顔上の境遇に倣つたものと思はれる。全體の組織からいふと、榮華物語が前半・後半に分れ、上編三十帖に下編十帖を繼いだ如く思はれるのや、夜半の寢覺が、兩親の戀物語の後に、その男の子の戀物語を繼いでゐる所などは、何れも源氏物語の宇治十帖に倣つたものであらう。

鎌倉・室町時代では、山路の露とか、雲隱六帖とかいふやうな此の物語の續篇の物語が現れ、宴曲の源氏戀・源氏・源氏紫明兩榮花は、此の物語を詠んだもの、謠曲では、此の物語に取材したものに玉葛・浮舟・朝顔・夕顔・源氏供養・野宮・葵上・住吉詣・半部・須磨源氏・陀羅尼落葉・京落葉・空蟬・紅葉賀・總角・嵯天狗・落葉・柏木・碁・鶴林・花供養・明石上・滯標・右衛門櫻ニギ・木靈浮舟等、數多くの作品が現れ、お伽草子では、猿源氏草子・花鳥風月・紫式部の卷、源氏供養草子・小式部等がある。その他、斷片的なものが多いが、例へば、十訓抄には近江君の事が見え、又、鳥羽院の時に、源氏物語に倣つて雨夜の品定が催され、女の文の品評が行はれたといふやうな事が記されてゐる。

連歌の賦物アズモノには、源氏の卷名を詠み込む事が古く行はれてゐた。又、連歌の中には、多く源氏物語

の事がらが詠み込まれてゐて、連歌師は甚だ此の物語を尊重した。それで、室町時代の此の物語の研究も連歌師の手によつて進められた所が多い。源氏小鏡の如き源氏物語の梗概書も、連歌の参考書として珍重せられたのである。

江戸時代には、西鶴の好色一代男に、此の物語の影響が多く、その他、浮世草子には、風流源氏物語、若草源氏、雛鶴源氏、紅白源氏、俗解源氏等の、此の物語を譯解した書が種々出てゐる。近松門左衛門の作品の中にも、源氏物語が屢々引かれてゐるが、穂積以貫の難波土産によると、近松は若い時に、此の物語を読み、之を手本として、淨瑠璃の精神を入れるべき事を悟つたのであるといふ。その他の淨瑠璃にも、此の物語に取材したものが多く、例へば、宇治加賀掾の正本には葵の上・源氏供養・源氏六十帖等がある。但し此の物語の影響は間接で、直接には、此の物語より出てゐる謡曲の影響を受けたものが多い。

此の物語を翻案した作品には、建部涼岱の俳諧源氏があるが、就中、柳亭種彦の合巻物、謔紫田舎源氏は、最も代表的なものである。此の合巻物の影響によつて、一時、源氏熱の勃興した事があり、田舎源氏は藤裏葉で中絶してゐるので、その後を受繼いで眞木柱から書いたものに其由縁鄙廼倅があり、此の鄙廼倅の後を繼いで若菜上以下、宇治十帖の前に至つてゐるものに、足利絹手染の紫があり、又宇治十帖の翻案としては、薄紫宇治の曙が出てゐる。別に根元實紫といふ紫式部の傳記を合巻

物に仕組んだものもある。歌舞伎の所作事としては、常盤津の内裡（こしよもやうげんじのなとどめ）模様源氏紫、清元の田舎源氏露東雲等が作られてゐる。

俳句には、齋藤徳元の獨吟千句の中の源氏之俳諧を始め、此の物語を詠んだものがあり、歌謡にも之を取扱つたものがあるが、多くは、卷名を詠み込んだ程度のもので、影響といふほどのものではない。併し、箏歌には此の物語の影響を受けた作が多い。川柳にも、

光君軒端で蟬を取りはぐり

祭の喧嘩まで書いた物語

などといふやうな句がある。女三宮の猫の事は、就中、有名で種々引かれる場合が多かつた。又、螢の卷に關しても、當世小歌揃に出た加賀節の歌詞に、

光る源氏の思の螢、つゝむともなき契かな

その玉かづらたまさかに、包むともなき契かな

といふやうな歌があり、山東京傳作の洒落本、傾城買四十八手には「評に曰、右のおいらんがたばこの火でむすこの顔を見しは源氏螢の卷の意味ありておくゆかし」といふやうに、部分的に影響を與へてゐる所は、甚だ多いのである。

文 献 源氏物語綱要(藤田徳太郎)

源氏物語新考(島津久基)

國語と國文學源氏物語號



五九 源氏物語と枕草子とに就いて比較評論せよ

一、兩者は、文學の種別を異にしてゐる。源氏物語は物語小説であるが、枕草子は、普通隨筆文學と云はれてゐるものに屬する。即ち、前者は、人生・社會等に對する作者の思想を直接に述べるのではなく、或る事柄を物語るうちに、自然に作者の思想を現はさうとしてゐるのであつて、その意味では客觀的であるのに對し、後者に於いては之を直接に縱談横議する事が出來て、即ち主觀的である。前者は實在せぬ人物を點出し、その假空の人物の生活・態度・言語等の中に、作者の考へてゐる所が自然に寓されるのであるが、後者では、實在の人物の名を擧げ、その人物の様子を描き、而してその人物に對する著者の好惡を直接に表現し、不遠慮にこれを論評してゐるのである。此の客觀的傾向と主觀的傾向は、二つの作品の大いなる相違點である。

二、そこに含められてゐる思想について見ると、源氏物語の方は、大きい宿命觀が寓されてゐて、そこに、作者の佛敎的信仰が、心の底まで溶け込んでゐるやうに思はれるに反し、枕草子では、佛敎的信仰を趣味的に觀、批評的に考へて、必ずしも自己の精神生活の基調としてまで之を包容してゐるのではないやうに思はれる。すべて、源氏物語では、作者の思想が客觀的に作者の人物を通して表現せられてはゐるが、而もその思想は、確乎たる根柢の上に立つ理論をもつてゐて、讀者を首肯せしめ

るものがある。例へば、帚木の卷の婦人觀、螢の卷の物語論などがそれで、その他、人生・社會に對する作者の感想的なものは、隨所に之を見出す事が出来るに反し、枕草子の方では、主觀的な、自己表現の度合の多い隨筆の形態を取つてゐるに拘らず、そこに表現せられてゐるものは、作者の思想ではなくて、寧ろ直觀的な刹那的な作者の情感、洗煉せられた作者の趣味なのである。此所に、枕草子が思想的な省察に乏しいといふ缺點を擧げる事が出来る。併し枕草子の長所も此所から生じる。即ち、作者の鋭敏なる官覺、繊細な神経が表出せられてゐるのであつて、源氏物語においては、作者の姿といふものが、作品の奥に隠されて、明瞭ではないのに對し、枕草子では、作者の姿が脈々として躍動してゐる。

三、源氏物語には思想があり、従つて、そこに一種の文明批評も見られる。さうして、表面的な美のみではなくて、宮廷・貴族の醜惡なる裏面の生活をも、容赦なく暴露してゐる。枕草子においては、さういふ批判的な態度は見られなくて、寧ろ美に耽溺し、情趣に陶醉してゐるやうな所がある。宮廷の貴族の生活に對しては、多くの讚仰的態度を示してをり、これを美しく表現する事を忘れないが、自己より、能力の下の者に對しては、嘲笑侮蔑の態度を取つてゐる。併し、それは批判的態度とは違つて、作者は、自己の優越感・勝利感に陶醉してゐるのであり、自己反省の念には乏しいのである。

四、兩者とも、種々の引用の詩歌によつて、學識が内外古今に涉り豊富な事が認められるが、源氏

物語では、それは極めて自然に、或る場面或る人物の描寫の必要上、詩歌や故事等を出してゐるのであり、そこに溫雅な愼ましやかな態度が認められるが、枕草子では、寧ろ、學識を誇らんが爲に、自己の優越を示すやうな場合に多く之が見られるのである。

五、此等を通じて、源氏物語の方は、散文文學における典型的な物のあはれの表現であり、完全に物のあはれの思想が作者と同化融合してゐるのに對し、枕草子の方は、寧ろ物のあはれには反する態度であり、却つて物に「をかし」を感じずる特色がある。さうして、稍々偏寄した耽美的傾向が認められるのである。

六、源氏物語は、部分的には、短篇小説風の所もあるが、全體として、一貫した内容情趣を持ち、類例の少い長篇小説を完成したのであつて、その點、偉大なる作者の意力・構成力が認められるが、枕草子は、片々たる文章の集成であり、斷片的な作者の感想の集積である。即ち、作者は構成力を缺いてゐるが、その個々の文章には、美に陶醉し乍らも、冷靜な自己を忘れない、透徹した理性があり、巧緻な機智を認めることが出来る。此の機智に富んでゐる所は枕草子の特色で、此の隨筆を趣味豊にしてゐる所以である。

### 七、文章については、次項參照。

文献 紫式部と清少納言(梅澤和軒)

國文學全史平安朝篇(藤岡作太郎)

源氏物語新考(島津久基)

六〇 源氏物語の文章の特色を述べよ

六一 源氏物語と枕草子との文章の特質につきて述べよ

源氏物語の文章の特色は、

一、表現の精細な事に存する。殊に、助詞・助動詞の巧妙なる使用によつて、作者の表現せんと欲する心意を、適確かつ微細に表現してゐる。併し、此の點は、此の後の物語に至つては一層甚だしくなつて、寧ろ煩雜の感があるが、源氏物語に於いては、それほど激しくなくて、適度である。

二、人物に關する語を省略する事が多いが、敬語やパッシヴの使用法の適確、又、動詞の自他の別の明瞭なる表出等によつて、誤まる所なく、その人物を讀者に傳へる事が出来る。かくて、主語・客語・補語等の省略せられる事が多いのであるが、人物に關する名詞の省略は、動詞・助動詞の精細なる表現によつて補はれ、諒解を誤まらしめない。併し此の間の記述に馴れないものは、難解な點があるかも知れぬが、斯かる文體に馴れば、理會は必ずしも困難ではない。斯かる人物に關する名詞の省略は、その人物に敬意を表する爲に、わざと明かに之を表出しないやうな場合が多く、一般に優美感を損はぬ必要上から、かういふ表現法を取つたものである。

三、右の如き結果、現代の文章に馴れた人々には、理會の困難な點があり、此の物語の文章が、一

寸雲を掴むやうな、ぼんやりして便りない感じを起させる。確かに、當時の人々にとつても、露骨に人物を明かに記した文章に比すると、諒解は困難であつたと思はれるが、併し、その代りに、臚化せられてはつきりとは正體のつかめないやうな所に生じる餘情・餘韻、底深い優美感、しみんとした情趣を湛へてゐて、獨特の香氣・雰圍氣を發散せしめるのである。尤も、之は必ずしも此の物語だけの特色ではなくて、寧ろ此の物語によつて代表せられる物語文全體の特色である。

**四、**綿々として文章が連続し、句切りが少い。併し、此の點も、此の後の物語ほど甚だしくはなくて、適度を保つてゐる。かやうに、文章を切らずに、長く連結せしめるのは、やはり、優美感を表出せしめる爲の有効な手段であり、又、女性的な情緒の自然的な表出でもある。

**五、**描寫が詳細で、適確、且つ煩雜に墮さない。自然描寫・心理描寫ともに、甚だ傑れてゐる。殊に、此の物語では、自然物描寫と心理描寫と相連關して表現し、自然の淋しき描寫はおのづから人物の淋しき心理の描寫となり、兩者映發して、主觀・客觀の融合した情趣を讀者に味はしめる。須磨の卷の須磨における情景などは、その代表的な名文である。

**六、**歌を數多く入れて、歌と文章との連結についても注意が拂はれ、兩者相俟つて、詩的情緒を強調する事に成功してゐる。

**七、**之を要するに、優美なる情趣をしみんと心の底までしみとほらせるのが、此の物語の文章

で、それはあくまでも、氣分を重んじ情趣的であり、而も堂々たる正格の文章として、重厚なる味を持つてゐる所、ダイナミックな感じがあり、複雑なさまじの味を混有してゐる所、ディオニソス的な特色を有するものである。

### 枕草子 の文章の特色は、

一、表現の簡潔な所にある。表現せんと欲する主要な點だけを、端的に又鋭敏に云ひ放つて、それ以上に餘計な説明を多く加へようとはしない。

二、源氏物語と同様物語文の特色を持つ所もあるが、此の作品では、寧ろ、動詞・助詞動などの説明語を省略した所が多く、それが爲に、一層表現が簡明にして、讀者の印象を集中せしめる事に成功してゐる。即ち此の作品では、語の省略が源氏物語よりも一層甚だしいのである。源氏物語では、省略の半面に、又、甚だ詳細な所がある。

三、物語文以外に、獨特の列記的な文章を創成してゐる。即ち、必要な事物の名、自己の心情に最も深く刻まれた事柄・情趣などを名詞だけを列記して表現する方法で、之が唐の李義山の雜纂の影響か獨創か問題のある所であるが、多分著者の獨創であると思はれ、そこに清少納言の天才的な才能を観ることが出来る。

四、句切りの數が甚だ多い。殊に名詞止や、連體形止の語句を並べたやうな所が多く、その點、男

性的な雄勁な表現をもつてゐる。

五、自然描寫には傑れた所がある。殊に野分の朝の描寫など、その一例であるが、心理描寫は少い。尤も、自己の心情・印象を或る主題々々で區切つて述べた箇所は甚だ多いが、他人の心情の複雑な描寫は稀で、あつても粗くて拙である。此の點は、此の作品の著者が甚だ主我的で、源氏物語の作者の如き他に對する同情とか包容力とかいふやうなもの少く思はれる點に原因してゐるであらう。

六、歌が少い。清少納言は歌が拙く、知的で情味に乏しい歌を残してゐる。従つて、此の作品も歌の挿入は少くて、全體の感じは、寧ろ散文的である。

七、要するに、枕草子の文章は、直感的・印象的である。表現には雄勁な男性的な所もあるが、併し、文章が切れぐで短く、全體の構成も亦簡明で、ダイナミックな感じに缺けてゐる。此の點、此の作品は寧ろアポロ的な特色を有してゐるといふ事が出来る。

文獻 新國文學史(五十嵐 力) 平安朝文學史(同上) 及び五九項文獻參照

### 六二 平安時代の日記文學を概説せよ

### 六三 平安朝の女流日記文學四種を舉げて解説せよ

一、土佐日記 紀貫之の作で、朱雀天皇の承平四年十二月二十一日に土佐國を出發してから、翌五

年二月十六日歸京するまでの旅行記である。大體假名文の日記は、女性が記すもので、男性は漢文の日記を記すものとなつてゐたから、此の日記も、女性が記したといふ體裁になつてゐるが、文章が簡潔で、且つ何月何日と日を明記し、天氣よしといふやうな事まで記してゐる所は、普通の日記の體裁と同一で、當代の女流日記としては寧ろ珍しい様式を持つ。かやうに此の日記は、男子の漢文の日記の體裁をそのままに襲つて、假名文で書いた跡の著しいのが特色で、當代の日記文學の未だ發達しない、原始的な様式を持つものである。内容は、土佐國で死んだ愛子を悲しむ情、海賊を恐れる恐怖の情、及び人々を慰める爲の滑稽諧謔が交へてあり、此のユーモアに富んでゐる點は、他の日記に見えない特色である。

**二、蜻蛉日記** 作者は右大將道綱の母。村上天皇の天曆八年から圓融天皇の天延二年まで、二十一年間の自叙傳で、前書に遅るる約四十年の作。之に至つては、完全に日記體を脱却した物語風の日記文學が出来上つてゐるのであつて、寧ろ寫實的な自叙傳小説とでも云つた方が適當してゐる。著者は、極めて生真面目でおとなしやかな、併し、どこか我慢強くねばり強い底力をもつた女性であつたらしく、所謂しんねりむつつりした性格のやうで、夫の兼家の愉快な性格とは合はなかつた。斯くて夫の愛が離れ、一子道綱の成長を樂しみとしながらも、日蔭者と成り果てた身のはかなさを歎じ、それを外面に出して、人に當り散らすやうな事の出来ない人だけに、一層心の惱みは深刻である。本書は、



斯かる當代の女性にありがちの重苦しく沈鬱な苦惱の生活と、せめて母性愛に生きる事によつてそれを慰めようとする苦しい努力とを、極めて心理的に、生々しく描き出してゐる點で、一個のすぐれた人生記録とする事が出来る。ただ文章が難解で、全體が長大である爲、古來讀まれる事が少かつたが、當代日記文學第一の傑作として、その代表作品とする事が出来る。

三、和泉式部日記 一條天皇の長保五年四月十日過ぎから翌寛弘元年一月までの自叙傳で、一に和泉式部物語と云はれる如く、物語體をなし、前著より三十年後の作。愛人敦道親王と贈答した歌が多く出で、作者の奔放な情熱的性格がよく現れてゐる。他を顧みる事なく、火のやうな熱情の赴くまゝに戀愛に殉ずる作者の態度が、挿入せられてゐる數多くの短歌と、割合に簡明な文章との間に、力強くにじみ出てゐる。

四、紫式部日記 寛弘五年七月の頃から同七年正月までの日記で、前著に遅れる七年の作。此の日記は、一條天皇の第二皇子(後一條天皇)・第三皇子(後朱雀天皇)の御生誕前後の宮中の御模様を描くことが主となつてゐるから、従つて、有職故實の事、儀式の模様、その他、文學的題材としては距離のある對象が多く取扱はれてゐる。それにも拘らず、著者の才筆は、それを文學的に生かし、殊に自然描寫の美くしさは、他の日記類には餘り見られない。又、さういふ、記録的叙述の間に、著者が他の人に遣つた消息文が混入してゐるらしく、その部分においては、此の作者の貞淑な氣質に似ず、誰憚らず、他の女

房の批評や惡口を云つてゐる所は、やはり、女性に共通の短所も持つてゐる所があるやうに思はれ、甚だ興味深き點である。

とにかく、和泉式部の無反省な態度と對蹠的に、此の作者の、自己の心の内奥に沈潜しようとする反省的・批判的な態度を見る事が出来る。

**五、更級日記** 菅原孝標女の作。後一條天皇の寛仁四年の頃から、康平二年の頃まで四十年間の思ひ出の記を記したもの。紫式部日記に遅れる五十年の作である。初の方は東海道の旅行記となつて居り、歸京して後、夢多き若き日、物語を好み、作中の人物に憧れた文學少女時代から、次第に實際の人生に目覺めて行き、平凡な家庭の婦人として老いるまで、作者の心理を詳細に叙し、蜻蛉日記に次ぐ傑作とする事が出来る。「昔より、よしなき物語、歌の事をのみ心にしめて、夜晝思ひて行ひをせましかば、いとかゝる夢の世を見ずもやあらまし」と告白してゐるやうな所に、作者の心境の變化を見る事が出来るが、それでも、やはり優しくロマンティックな作者の性情は、終まで一貫してゐて變ることがない。

**六、讚岐典侍日記** 堀河天皇の嘉承二年六月から、その翌年の鳥羽天皇の天仁元年八月の頃までの事を記し、更級日記よりも約五十年後の作。天皇の崩御、及び新帝御即位の前後の宮中の御模様を記し、紫式部日記同様、有職故實に關する叙述が多いが、表現はそれよりも簡明で、且つ文學的色彩に

乏しい。併し流石に作者の悲哀の情、先帝に對し奉る追慕の情を記したやうな所には、しみじみとした情感が溢れ、文學的な香氣があるが、やはり、女流日記の中では最も劣るといふべきであらう。

以上の他、庵主その他、當代の日記文學に入れるべき作品も若干あるが、普通文學史では、之を日記文學としては取扱つてゐない。又、平仲日記・箕日記等はむしろ純粹の物語として取扱はれ、成尋阿闍梨母日記は、歌集として取扱はれる。之を日記文學に入れるならば、伊勢集の前半なども日記として取扱はれ、その他日記文學に入れるべき作品もつと増加する事であらう。六三問の「女流日記文學四種」を選出するとならば、蜻蛉日記・和泉式部日記・紫式部日記・更級日記を擧ぐべきであらう。

文 獻 宮廷女流日記文學(池田龜鑑) 平安朝日記の研究(今井卓爾) 紫式部日記の研究(今小路覺瑞)

更級日記錯簡考(玉井幸助) 日記・紀行・隨筆(同上) 岩波講座國語教育)

#### 六四 大鏡の精神に就いて述べよ

#### 六五 大鏡著述の主なる動機に就いて記せ

大鏡著述の動機に就いては從來二つの見方がある。一は、道長の榮花の由來を明かにし、道長の偉大さを讃歎しようとする動機から書かれたものであるとする説。之は大鏡の序に言つてある所を、すなほに受取つた説である。その二は、道長の榮花の讃歎を表に立てて、實は道長(又は藤原氏)の政治上の功

罪を嚴正に批判しようとする史論的欲求が、その動機であると説である。此の説は、かの小一條院東宮御辭退に關する一條(又は、花山院御退位に關する批判的記述)などから考へられて來る説である。

此の二説は必ずしも相對立して調和しがたい説ではない。もつとも、藤原氏一般、又道長その人に對する批判に、勤王的慷慨の精神が伴ふものと見れば、此等は學的批判の域を脱して道德的罪難となるわけであり、従つて、藤氏榮花の讚歎とは所謂調和せぬこととなる。併し、大鏡に現れた批判には勤王的慷慨は甚だ稀薄で、道長の行動に關する限り、いざとなれば、小さな情や障得をぐんぐ踏み越して目的に邁進するその線の太い性格を讚歎せんがために、その間の事情を明かにしたとも見得る餘地は十分にある。それといふのも、神聖なる皇室の君臨し給ふ我が國の政情においては、兼家や道長の行つた皇位繼承に關する策動は、必ずしも私意私情に出づるものではなく、自己の親近し奉る皇子の御即位を早め奉らんとする誠忠より發した行動であると解することが出来るからである。恐らく、當時にあつては、道長の如き寛慈の天賦を以て、陰謀的策動を敢てしたのも、皆此の至情の發動として、その正面の政敵にあらざる限り、之を容認したものであらうと思ふ。もしそれ、栗田殿道兼が、花山院をすかしまゐらせた如きに至つては、もとより當代天皇に對する大不忠であり、その手段があまりに陰險陋劣なるため、大鏡の著者も多大の嫌惡を以て、道兼歿後その子孫の零落を叙し、惡因惡果の應報を明かにして筆誅に代へてゐるのである。もし、著者が道長に對しても同様の意圖を抱

いてゐたものとすれば、その全盛の頂點たる萬壽二年を以て時期を劃することなく、その後相次いで起つた寛子(道長女で小)や嬉子(道長女で後朱雀帝東宮時代の妃)の薨去の如き、父道長に對する不幸な打撃を述べ得るまで、その時期を繰下げさうなものだと思はれる。以上のやうな見方からすると、上に挙げた二つの動機は相齟縁して、大鏡の精神を成すものと言ひ得るであらう。

然らば、大鏡の成果は、此の二大動機によく副ふものであらうか。道長の榮花を極筆し、その天の寵兒たる面目を寫し出した點においてはまづ遺憾がないと言つてよからう。殊に、道長が、自己に對する競争者たる資格を失つた劣敗者に對して、溫情を以て之を遇したといふやうな、性格上の美點は相當によく描き出されてゐて、道長のえらさ・大きさはかなり鮮明に讀者に印象される。

次に、史論としての嚴正な批判は如何。之も前述した如き意味で、非難を交へぬ史的批判として、小一條院の東宮御辭退、政敵伊周に對する報復等の史實は、相當はつきりと記述され、その批判の態度も純正であると言ひ得る。併し、歴史的記述として一つの缺點は、隨所に巷間所傳の說話を持ちこんで、記事を多彩ならしめんとしたことである。かの肝腎の道長傳の如きは、師尹傳等において道長に關する史的資料を記述し盡した結果でもあらうか、相人の話・闇夜單身大極殿に行つた話・南院における伊周との競射の話等を綴り合はせ、その他古來太政大臣たりし人、又は天皇の外舅・外祖父たりし人などの列傳を書きこんで引延ばしを試みてゐる形跡があるのは、著者の史的資料が必ずしも豊富

でなかつたことを證するものである。

大鏡は、歴史物語には相違ないが、説話文學としての要素が甚だ多量に混在してゐることを見逃してはならない。これ今昔物語や往生傳等の説話文學流行の時代思潮と相關するものであり、此の方面から考察するならば、大鏡の精神は、從來とは別なものとして見直される時があるかも知れない。今は通説に従つて、大鏡著述の主要動機について概説したのである。

文 獻 大鏡に關する考察(藤村作 國語と國文學大正十三年五・六月號) 大鏡と道長時代(島津久基 日

本文學聯講上世篇)

## 六六 大鏡に現れたる貴族の生活を概説せよ

大鏡を讀んで印象に残つてゐる貴族生活の片影を、想ひ浮ぶまゝに書いて見る。

一品宮禎子内親王が、御幼少の頃御父三條院に參内拜謁せられた際、三條院の券をお土産に賜つて歸邸せられた事が出てゐる。券とは不動産の所有權を確保する書類である。此の記事によつて、多くの御子様のうち特に御鍾愛の御方に對し、父たる御方が、隨時不動産の贈與等をなさることのあることが知られる。之は皇室における例であるが、貴族社會においても同様で、父の愛子は長幼の序にかゝらず、多分の遺贈を受け、豊かな生活をする事が出来るが、不幸にして父の愛の薄かつた子は、

十分な生活の保障が得られない。官位の昇進なども、やはり父の偏愛から、ひどい幸不幸があつたらしい。道長の子の顯信は、たしか教通より一つ二つ年長であつたと思ふが、官位の昇進は遙に教通よりおくれてゐた。之は教通が鷹司殿（倫子）の出、顯信は高松殿（明子）の出で、前者が第一夫人、後者は第二夫人の地位であつたがためであらうが、顯信の出家もこんな所にその動機が潜んでゐるのではなからうか。とにかく同じ貴族階級の中でも、貧富の懸隔があり、又富める者の經濟的に没落するものも勿論あつたので、左大將濟時の中の君（三條院皇弟の妹）が、領地を押領せられ零落して、夜徒歩で御堂に赴いて道長に直訴した話の如きその例である。小野宮實資を「こもり徳人」と言つてあるのも、御内證有福の義であらう。堀川關白兼通の次男の朝光が、華美な生活を好んで、女王である北の方を離別して、金持の後家さんを妻にしたなどの話も面白い。たゞ、かういふ財力の有無が、政治的地位にどんな作用を與へたか、その邊の消息がはつきり書いてないのは遺憾である。かの濟時の御系統なる成子皇后、又その御腹なる小一條院の、經濟的に不如意の御生活であらせられたことは、仄かに知られるやうに書いてある。東宮御辭退の消息も、此の邊に眞因が伏在してゐたのであらうか。

道長が不動の勢力を獲た後は、その子孫が政治的の最高地位に就くことに定つたが、それまでは、その權力の所在に多少の流動性があつたから、従つて之を獲得せんとする策動が盛んで、貴族社會全般として活氣に富んでゐたらしい。中でも師輔・兼家・道長などの記事には、きびくした豪快な性格が

躍動してゐる。貴族たちが寺を建立して互にその豪壯を誇るといふ流行も、貴族全盛時の現象としてうなづかれ、竣功の供養などの豪華な様を偲ぶことが出来る。

その女を宮中にいれて、寵を争ふ事は、政權獲得の手段として最も露骨に行はれた。道隆が父兼家の病篤きにもかゝはらず、女定子の入内に没頭したことが非難してある。之は史實をまけて、道長を引立てるための作者の手法であるらしいが、事實、親子兄弟の間でも、此の種の競争が行はれたことが想像される。

以上は、貴族生活を述べよといふ題意に對し、適切な答でないが、大鏡は、榮花物語や、又その後、の今鏡などのやうに、わりあひ貴族の日常生活を精寫してゐない。宴飲の記事なども、道長が、俊賢や公信と宴して、隆家を招いた際、隆家が公信の無禮を詰つたといふやうな條だけしか思ひ出せない。皇子御誕生のうぶやしなひとか、歌會とか、五節の夜の様とか、さういつた事には、此の著者は殆ど興味を感じてゐないらしい。人物を描き出すとか、家々の勢力の消長を明かにするとか、史論的動機から書かれたものだからであらうか。そのため、大鏡は、貴族社會の實生活を知る資料として、案外貧弱なものだと言つてよいであらう。



## 六七 大鏡と榮華物語とを比較論評せよ

大鏡は、第五十五代文徳天皇の嘉祥三年から第六十八代後一條天皇の萬壽二年まで、十四代百七十六年間の事が記してあり、榮華物語は、第六十代醍醐天皇の寛平九年から第七十三代堀河天皇の寛治六年まで、十四代百九十六年間の事を記したものである。従つて、此の兩書においては、第六十代醍醐天皇の寛平九年から第六十八代後一條天皇の萬壽二年まで、百三十三年間の事は、兩書で重出するのである。此の點は、兩書の具體的な比較においては、特に興味の深い所であるが、その他、概括的に兩書の特徴・態度等について述べる事にする。

**第一**に、全體の長さであるが、大鏡の方は僅かに三卷であるに對し、榮華物語は四十卷あり老大なる大著である。此の容量の相違が著しい。

**第二**に、史書の體裁について、紀傳體と編年體との二種が顯著であるが、大鏡は紀傳體であり、榮華物語は編年體の體裁を持つものである。即ち、大鏡の方は、帝紀と列傳とに分れ、人物が主となつて、その傳記的方面・人物・行狀等の記されてゐる所が多いが、榮華物語では、寧ろ事件が主で、宮廷の内外の出來事を、年代的に叙述して行つたやうな體裁である。

**第三**に、歴史を述べる形式において、大鏡は對話體であるに對し、榮華物語は物語體となつてゐる。

る。前者は、主となる話者があり、それに他の二人の者がワキ役として、問答をするといふやうな形で歴史が語られて行く。その間に地の文も入るといふやうに、戯曲的な傾向さへもつてゐるが、後者は、全く、從來の物語の形式を襲ひ、優美な卷名までも付けられてゐるのである。ただ實在の人名を現し、年時を示す事は、純粹の物語と異なるが、文章も全く典型的な物語文であり、すべてが、源氏物語などの踏襲である。

**第四**に、以上の如くして、大鏡の形式は全く作者の獨創に出でたものであるが、榮華物語の方は、舊來の文學形式の模倣であるといふ事が出来る。大鏡の創始した文學の形式は、此の後、歴史文學などで模倣せられた所があり、所謂鏡物の系統を作つたが、併し、今鏡・増鏡などでは、寧ろ大鏡と榮華物語と、兩者の形式を融合せしめたやうな所があり、榮華物語の如き歴史物語の形式も、やはり從來著しい影響を及ぼしてゐるのである。

題名も、大鏡の方は、獨創的な新しい名稱であるが、榮華物語は、從來の何々物語といふ云ひ方を其の儘襲つたもので、模倣的である。(但し、之は兩書とも、書名を作者が附したものと定めての論である。)

**第五**に、大鏡の方は、文章も内容も男性的であるに對し、榮華物語は女性的である。即ち、大鏡の方は、簡潔で力強い文章であり、内容も、それにふさはしく、餘計な事件・場面はカットして、必要

な事柄だけを、可成り印象的に、或は生々した描寫的筆致で描き出してゐる。それに對し、榮華物語は、いたづらに同じやうな事柄を繰返し述べて見たり、精細であるよりも、寧ろ冗長になつてゐる所がある。此の點の相違は、第一の卷數の相違に相應じるものである。

此の榮華物語が女性的であるといふ事に關し、その中には、女房の日記を多く材料として使用するが、少くとも、參照したらしい所が認められる。殊に、初花の卷で紫式部日記を用ゐる所などは、顯著な實例であるが、その他現存しない種々の材料を用ゐたらしい。而も、可成り、原文に即して書いてゐる所などを見ると、此の作品が模倣的であるといふ一面が、更に一層強調せられるやうである。

此の點から、大鏡の作者を藤原爲業作とか、その他種々の男性の作家に擬してゐるのはよいが、大鏡を爲業作といふのは疑はしく、赤染衛門の作といふのは信ぜられないとしても、さういふ女性の作らしいといふ事は、古來考へられてゐた所で、肯定に價する。

**第六に、**大鏡は、人物・事件等の對象に對して、之を批判的に見てゐて、否定したり、遺憾の意を表したり、或は、少くとも、それらの人物の性行等に關し、可成り裏面的な事を暴露したりしてゐる。併し、その爲に、登場人物が潑瀾たる人間性を備へ、事件の叙述に面白味を加へ、而して、作品の文學的價值をも増してゐるのであるが、榮華物語の方は、多く、事件・人物に對して讚美的な感情を示し、殊に、道長に對しては、讚仰の念を以て描かれてゐる。總て、ものを表面的に受取り、外形

的な美に眩惑せられてゐるやうな所があつて、必ずしも文學としてすぐれた作品とは云ひがたい。

文 獻 國文學全史平安朝篇(藤岡作太郎)

日本文獻學・文法論・歴史物語(芳賀矢一)

及び六六項参照

六八 古今集の歌風の特色に就いて述べよ

六九 八代集の書名を撰集の年代順に列記せよ

七〇 古今集より新古今集までの和歌の展開を略述せよ

萬葉集をもつて代表せられる和歌の全盛時代の後、漢詩の隆盛と和歌の沈滞の時代を経て、徐々に和歌は勃興し來り、六歌仙時代について、古今集時代を迎へるに至り、完全に和歌は復興し、前代の盛時を取返す事が出來たのである。併し、古今集時代の和歌は、萬葉集時代の和歌と作品の特色を異にしてゐた。ここには次第に理智的な要素が入り來り、情熱は沈潜して、寧ろ調和構成の美を尊び、平靜な情趣を喜んだ。此所に、物のあはれの精神が和歌の世界にも起つて來て、遂に之が當代の藝術精神の中心的思想として、支配的な力を持つに至つた。古今集・後撰集・拾遺集の三代集は、此の古今調をもつて統一せられた歌風の時代である。

古今集の歌風の特徴としては、一、理智的な傾向のある事、二、機智を弄した歌の多い事、三、音調

	〔八代集書名〕	〔卷數〕	〔撰集年代〕	〔勅宣〕	〔撰者〕
古今和歌集	二〇	延喜年間	醍醐帝	紀貫之・友則等	
後撰和歌集	二〇	天曆年間	村上帝	清原元輔等梨壺五人	
拾遺和歌集	二〇	長徳年間	花山院？	花山院説？公任説？	
後拾遺和歌集	二〇	應徳年間	白河帝	藤原通俊	
金葉和歌集	一〇	天治年間	白河院	源俊賴	
詞花和歌集	一〇	仁平年間	崇徳院	藤原顯輔	
千載和歌集	二〇	文治年間	後白河院	藤原俊成	
新古今和歌集	二〇	元久年間	後鳥羽院	藤原定家・家隆等	

に、音調の音楽的な美しさは、表現上の重要な特色で、此のしらべを重んじたことが、後代の歌論に種々の影響を與へた點である。併し、その爲に、上代の歌のやうな素朴な情熱は稀薄となり、平弱の感の多い事は、否定出來ぬ缺點であつた。

此の缺點は漸く、歌人の間に認識せられて來た。即ち、永い間支配的勢力を持つてゐた古今風の歌風は、漸く飽かれて來たのである。古今風の歌には深みがない。表面的である。もつと深い情趣を欲する。しらべが千遍一律であつて變化がない。斯くて、後拾遺集に至り、漸く、その歌風は一轉する機運を見せ始めた。

の流麗にして美しい事、四、優美典雅な情趣を尊んだ事、五、空想的浪漫的でなく、寧ろ現實的な事、六、素朴な力強さ、雄大悲壯な趣を缺いで、反對に感傷的な詠歎に富んでゐる事、七、表現に技巧をこらす風を生じた事、しかも、歌意は平明にして分りよい事、等が擧げられる。殊

即ち、後拾遺集に至つて、從來の理智的な、寧ろ理窟に墮したやうな、平明な歌風に反し、もつと情趣を深めようとする傾向が現れて來たのである。拾遺集は、一條天皇時代に成つたものであるが、その作品には、寧ろ前代の歌人の作が多い。然るに、平安時代の文學の黄金時代たる一條天皇時代の、すぐれた作家の作品は、寧ろ後拾遺集に多く掲載せられてゐるのであり、物のあはれの精神も亦、此の時代に至つて、最も昂揚醇化せられ、支配的な時代精神となり、生活態度として深透するに至つたのである。故に、三代集の平明な歌風は、此所に、より深い情趣を探索しようとし、より高く精神を昂揚せしめる歌風に變じた。

此の深い情趣を求める傾向は、同時に、心を尊ぶ傾向をも馴致した。從來の可成り概念的な表面的な歌風は、更に、感情を尊び、感動に重きを置く傾向に變じて來た。但し、上古の素朴な感動の生々しい表現ではなくて、感動を反省し、感情を深潜せしめて、複雑な精神を歌ふのである。従つてその表現も、從來の如く單に流れる如き音樂的な感覺美ではなくて、屈折抑揚に富んだ、複雑な表現を取るに至り、體言止の如き表現も増加して、流麗なしらべではなく、やゝ佶屈たる聲調も生じたのである。此の傾向の至り極まつて、一つの完成した歌風を示したものが新古今集であつた。

斯くの如くして、表面的な優雅な趣味から、沈潜した幽玄の歌風へと移つて行き、又、作品の表面だけの意味や感覺のみではなくて、作品の裏に含められ、一首を歌ひ終つた後に、しみじみと味はさ

れる餘韻餘情を尊ぶ歌風が馴致せられ、此の傾向は後拾遺集に萌芽を示し、金葉集・詞花集を経て次第に深まり、遂に藤原俊成の撰になる千載集において著しい昂揚を見た。それが即ち幽玄の情調である。而して、幽玄の精神の完成は新古今集において見られ、更にその意義は、鎌倉室町時代に種々變化したが、その萌芽は平安時代の早い時期にあり、殊に、俊成の如きは、幽玄の歌風において、一つの完成の域に達してゐるものとさへ考へられる。

新しい傾向に對しては、常に古きものを尊ぶ反對派がある。新派と保守派とがいつも對立する。一條天皇時代までは、藤原公任の如き人によつて、大體三代集の歌風に統一せられてゐたが、既に此の時代に新しい歌風は醞釀せられつゝあつた。斯くて、次の時代に至り、後拾遺集の撰者藤原通俊の保守的傾向に對し、稍新しい傾向のある源經信が出で、ついで、公任を敬重した保守派の藤原基俊と、清新自由な歌風を庶幾する金葉集の撰者源俊賴の對立となつた。然るに、俊成の幽玄は、此の相對立する兩者を融合し止揚して、その上に出でた理念である。古典的な典雅優美の趣致と清新かつ沈潜した感情の融合したものが幽玄の精神であつて、それは象徴美にさへ到らうとしてゐる。

併し、此の俊成にも反對の一派があつた。六條家がそれで、詞花集の撰者顯輔はその祖であるが、俊成の子定家に至り、六條家をも克服して、歌壇の權威を獨占し、幽玄の理念は、更に俊成より發展して、全き完成を見るに至つた。此等の變化起伏にも拘らず、後拾遺集以後、順次、金葉集・詞花集

と展開して、遂に千載集・新古今集における新歌風の樹立となつたのである。

文獻 國文學全史平安朝篇(藤岡作太郎) 新講和歌史(兒山信一) 八代集選釋(久松潜一)

### 七一 古今集と新古今集とを比較評論せよ

### 七二 萬葉集・古今集・新古今集の特色如何

新古今集は、その名稱からだけでも明かな様に、古今集を理想とする空氣の中から作られた。故に古今集の代表的作家——例へば定家の如き——によつて、古今集の、心を歌の中心とするといふ和歌觀が大本に於て繼承されるといつた現象まで表れてゐる。故に兩者は、萬葉集を素樸野性の文學と見れば、之に對して、衝動を制御した洗練の文學と見られる。又、表現を主にして、萬葉の表現を現實的・寫實的作風と見れば、古今・新古今は共に主觀的だと云ふ點で一つの相近い歌相を帯びてゐる。或は、萬葉を(就中、赤人の作品の如きを)、表現と内容との調和した文藝、所謂古典的クラシックの文藝と見る時は、古今・新古今は藝術表現が内容に勝ち過ぎた文藝と見得る。(尚、萬葉集に就いては四四項、古今集に就いては六八項を参照)

併し、その一面に二歌集は、各獨立した特色を把持してゐる。さうして此の相違點を擧げる事が、目下の問題の要請する所であらう。

二歌集の素材は、萬葉集に比べると、共に甚だ制限された狭さを感じさせる。共に或る美的な情趣



を表すに適當と考へたものに限定されたのであるが、古今ではその狹隘が一層著しい。之は古今集の所收歌は、その時代が短く、且つその時代色は一色であるに反し、新古今は三代集を除いてもかくも萬葉から鎌倉までの時期を含むといふ多様性によるものでもあらうが、本質的には古今時代がその和歌觀に於て或る狭い統一を保つてゐたといふ事情によるものであらう。即ち古今集の撰者達は、現實そのものから——現實世界の多樣複雑な様相から——歌材を採るといふ事を好まなかつた。梅とか鶯とか鹿とか紅葉とか、或る美的情緒に適合した素材といふものが一般美的概念として豫め規定されてをり、作歌に當つてはさうした定まつた範圍のものを扱ふことによつて、定まつた美感を表す、それが最上の作歌法だと見た。従つて現實そのものを避けることから生れる歌境の狹隘さ等は頭から問題にならなかつた。さうして此の固定した美感を描く事が最上の創作法だといふ見方は、その後平安朝末期に新風の興るまで長く歌壇を支配した。

之に對し新古今では、一種の素材の擴大を表してゐる。特に、自然素材の作品では、詞花集・千載集の頃から興つた敍景歌が此の集にも數多く、此等の自然をあるがまゝの相に於て捉へようとする歌風は、素材論としては、古今集に比して素材の擴大だと認めざるを得ない。その他、神佛を材とした宗教色彩の作品の如きも、古今になくて新古今に擴張された分野である。

併し、此の素材關係に比べて、より以上の相違は、寧ろ表現の側にある。何時の場合でもである

が、こゝでも表現は、作者達の世界觀・文學觀といふ根本問題と關聯してゐる。

古今集では、外物に對する心(主觀)が文學觀の中心であつた。現實の現象に對立する抽象的な主觀が、美の根本であつた。従つてさうした觀念的な美しさを表すに——現實の醜さまゝな状態の内から、優雅なものだけをえり抜いてそのえり抜いた麗しさを表すに——有効な方法が採用された。之に反し、新古今では、現象の奥にある深い寂しみ、現實に得られない微妙な幽暗を掴む事が作歌の根本義であつた。従つて表現もさういふ方向に有力な様に協力した。即ち、言葉を多數に重ね、表現をこみいらせて現實感を脱却させた。萬葉・古今でごく稀な初句切を増大し、又、結句の名詞止の如きが盛に用ゐられた。此等の技巧を重用して、言葉の綾を飾つて、現實にない美の世界象牙の塔を、築き上げようとしたのである。だから、此の點では、古今集は非現實といつても、觀念的といつても、その觀念は、なほ現實世界の中の觀念であつた。然るに新古今は、さういふ現實の世の客觀・主觀を超越したより高い所を目指したといへる。従つて、新古今の表現は、常に象徴的だとも見られる。何故かなら、其處に如何なる材料が並べられ、どんな言葉が使はれてゐようと、それ等は最後の高次の抽象的世界を歌に表す爲の道具に過ぎなかつた、といへるからである。

斯くて、萬葉を寫實的或は古典的。古今・新古今を主觀的或は浪漫的——斯かる對立を作り得るが、その「浪漫的」なものの中で、更に、古今は現實的主觀性、新古今は超現實的象徴性を本質とする、

と云ふ對立がある。

尙、編纂事情に於て、古今集は、四人の撰者達が、名實共に編纂し、假名序もその内の一人貫之が書いたとされてゐる。之に反し、新古今では、勅命を拜した六人の撰者は、事實は編纂の材料を撰み、編纂に意見を述べただけで、最後の決定は、後鳥羽院が遊ばされた。その序文も院がしたためられた。名實共に院の撰で、定家らは名だけの撰者に過ぎなかつた。又、古今集は編纂の決着が略一度で決着した。數首墨滅の歌があるだけであるが、新古今では、編纂前後に内容が増減し、所謂切繼が盛に行はれた。その結果、隱岐本新古今の如きまで生れた、といふ相違がある。さうして、編纂の最後の決着した時の本といふのは、今日傳はつてゐない。

文献 古今集時代の研究(安田喜代門)

新古今時代(風巻景次郎)

及び前項に同じ

### 七三 古今集・新古今集の諸本を舉げて説明せよ

一、古今集 之に就いては、定家を境として、其の以前と以後とに分つを可とする。

定家以前平安時代のものとしては、由緒正しい古本として三本があつたと云ふ。貫之自筆と傳へる陽明院御本(別名、延喜帝御本とも、讚岐入道本とも)、小野宮皇太后宮御本。貫之妹の筆と云ふ花園左府御本(別名、女本・崇徳院御本・新院御本とも)。——此等は何れも今日佚亡してしまつたらしい。

現存のものとして、平安朝期のが三本ある。元永本は、其の最も古いもので、元永三年の書寫にかかり、俊頼筆と傳へる。粘葉本は三井家に完藏され、卷子本は散佚して諸家に分藏される。漢文の序がなく、流布本に比して歌數少く、其の他古寫本の面目を保つてゐる。

次に清輔本がある。上に貫之自筆と擧げたうち、第二の物を若狭守通宗が手寫し、其の孫隆縁がそれを清輔に傳へて清輔之を轉寫したものである。其の上に、清輔は陽明院御本及び崇徳院御本との異同を校勘して書入れ、又當時の流布本とも對校して、こゝに一種の校合本を完成した。此の本は今日前田家に其の代表的なものが傳り、其の他、土肥博士・靜嘉堂文庫・竹柏園に此の種の系統本がある。

次に俊成本は、其の源は上記貫之の妹の書寫本である。それが閑院實季から公實に傳はり、補仁親王・花園左大臣有仁を経て崇徳上皇に奉られた。その崇徳院本を拜寫したものを永曆二年七月十一日また筆寫し、之に別に寫して所藏してゐた基俊本(公實の所有當時に基俊が轉寫した本)を以て校合したものである。故に兩者の混合本であつて、其の爲、崇徳院御本は假名序だけであるのを、基俊本に倣つて眞名序を初めに、次に假名序を置くといふ體裁に改めた。一方、崇徳院御本の墨滅歌が本文の中にあると云ふ形は、其の儘保存した。斯くて此の本は今日宮内省圖書寮と靜嘉堂文庫に藏され、又別に御物本がある。

次に、定家の書寫本に就いては、最近新しい發見が報告されて、彼の筆寫が十數度に及んだことを松田武夫氏が報告して居られる。即ち筆寫年代の明かなものは、伊達伯爵家藏(年月不明)のもの。貞

應元年六月十日書寫本。貞應元年九月二十二日書寫本。貞應元年十一月二日書寫本。貞應二年七月二十二日書寫本。嘉祿二年三月十五日書寫本。嘉祿二年四月九日書寫本。嘉祿三年正月二十三日書寫本。嘉祿三年八月十五日書寫本。嘉祿三年十月十三日書寫本。以上十種類ある。其の他に、拾遺愚草・明月記・古今集註・圖書寮本奥書等に據れば、尙四度の書寫が行はれたと見られる。即ち承元の頃ほひ。建保二年秋。建保五年二月十日。安貞元年閏三月十二日。以上。

此等は、俊成本に出づるものである。墨滅歌を本文の最後に纏めた事を特色とし、眞名序のある本と無い本とあり、ある本は之を卷末に置く。此の少くも十四度の書寫本の内、最も行はれてゐて、後世流布本となつたのが、貞應二年の書寫本である。故に古今集の流布本は、貫之妹筆に發し、俊成・定家を経て廣まつたのである。之が徳川時代に入つて、筆寫又は印刷によつて廣がつて行つた。

## 二、新古今集 家長本と隱岐本系統の本とに分れる。

**家長本**は、その純粹な系統の完本は今日見ることを得ないが、建保四年十二月源家長が書寫したものである。一體新古今集は、勅撰集の内、其の編纂に當つて、最も歌の増減の著しかつた歌集である爲、事情は甚だ複雑であるが、元久二年三月二十七日編纂が終つて、其の後も所謂切繼が盛に行はれ、それがいつまで繼續したか不明である。故に新古今はどの本を以てどの年の本を以て正本とすべきかと言ひ切れない。而して今日知れる限りでは、承元四年九月(元久二年より六年目)の切繼が最も新しい。家長

本といふのは、その承元四年から六年目の建保四年十二月書寫したものである。而して、元久二年九月實朝が入手した本。承元三年五月定家の書寫した本等の存在が知られてゐるが、此等は今日直接に見るを得ず、家長本のみ傳はつた。

家長本としては今日、徳本正俊氏藏本(普通に徳本本と云はるゝもの)がある。之は空町初期に書寫し、之に家隆本・定家本・親行本・家長本を以て次第に校合して行つた寫本である。之に正應五年閏六月中旬源政信の名があり、家長本の奥書を記す。所謂切繼によつて除かれた歌を一首も載せてゐない事は、家長本の面目を示すものと見られる。

之と同系統の零本が高野辰之博士に所藏されてゐる。之は親行自筆本で、奥に朝請大夫源親行の署名がある。たゞ二百五十首程約十分の二を缺いでゐるが、奥書によれば、親行が一本を書寫し貞應二年夷則(註、七月)九日定家に送つて校合を依頼したため、定家が所藏の本を以て校合し直したそれを親行が清書したものである。而して此の親行本と定家本とは本質的な相違が見當らない。又、徳本本と定家本とも根本的な相違がない。隨つて家長書寫の本が今日亡佚した定家本や今日見る徳本氏本や高野博士本(親行清書本)やに分れて傳はつて行つたと見るべきである。

而して中世以後行はれた流布本は、西下經一氏の説によれば、切出しの歌十六首の中、十五首まで流布本に無い點が、切出し歌の全然無い家長本に類似してゐるから、家長系統の本の何れかから傳は

り廣がつたと見るべきである。

隱岐本は、後鳥羽院が隱岐島で加點された御本を言ふのである。即ち、新古今集の別抄本を作り給ふ御趣旨から、嘉禎年間？に恐らくは家長本と同筆の本を底本とし、之に除き去るべき歌約四百首の上に點を加へられたのである。此の爲千六百餘首に減少した本が隱岐本であるが、此の完全なものは今日傳はらない。

現存の隱岐本としては、大島雅太郎氏藏の袋綴ぢ二冊本が最も純粹である。除く歌に朱で合點があり、終に院の御跋文がある。

今一つの隱岐本系統の本に、柳瀬福市氏藏の胡蝶装二冊本がある。享祿五年九月頃、泰昭なる僧が、承元三年書寫の定家本を底本とし、之に隱岐本を以て校合したものである。此の本は除く歌に朱の圈點があること、院の御跋文のあることは、隱岐本の面目を示すのであるが、歌の上に、其の歌を撰んだ撰者の名を記す點や切繼の歌が七首もある點は、底本の性質をあらはす。随つて之は、隱岐本と定家本との混合的寫本である。

尙、最後に、圖書寮御藏の所謂烏丸本がある。享保十七年初冬烏丸光榮が承元三年の定家本を寫し、之に漸次他本の校合の加はつたものである。圖書寮には此の外に、所謂合點本がある。以上二本は何れも隱岐本系統の本である。

## 文 獻

王朝和歌集の研究(松田武夫)

古今集傳本の系統論(西下經一 國語と國文學六ノ一)

家長本新

古今和歌集の形態(徳本正俊 岩波講座日本文學)

新古今和歌集の諸本(西下經一 解釋と鑑賞十三號)

## 七四 歌合の起原及び性質を説明せよ

## 七五 歌合に就いて略述せよ

歌合の起原は物合にある。物合といふのは、種々の事物を出して優劣を争ふのであるが、就中、古くより草合が行はれてゐた。草合は又、鬪草とも云ひ、支那でも古くから行はれてゐた事は、荊楚歳時記や白氏文集などにも見えてゐるので明かであり、之が、わが國にも輸入せられた。文華秀麗集や經國集に見えるが、恐らく奈良時代にも行はれてゐたのであらう。

草合の他には、根合(菖蒲)・菊合・瞿麥合・女郎花合等、色々なものがあつて、此等は何れも、その植物を出して、或は菖蒲の根の長さ比べあつたり、菊の美しさ・大きさなどを比べあつたりしたものである。併しただそれらの植物を出しただけでは、何の風情もないので、後には、之に歌を附けて出す事が行はれるやうになつた。尤も歌は、夫々の植物の情趣を歌つて、風情を添へるだけで、別に歌の優劣を比べるといふやうな事はなかつた。然るに、次第に植物を比べる事よりも、それに付け添へられた歌の方に興味が移つて、歌の優劣を比べる事が主とせられるやうになつた。それでも初はや



はり、歌合は物合に附隨してゐたのであり、植物を比べるやうな事はなく、歌の優劣を比べ合ふやうな場合にも、形式的に、やはり植物を付け添へたりしたもので、此所に至つては、物と歌とが、全く主客顛倒して、その位置を代へるに至つたが、遂には、さういふ附屬物化した植物の類をも、全く廢止して、純粹に歌だけを出し、その優劣を争ふに至つて、完全な歌合が成立した。斯くて、

一、物合の時代（物の優劣）

二、物合に歌の附屬した時代（物の優劣）

三、物合と歌合の時代（物と歌との優劣）

四、歌合に物の附屬した時代（歌の優劣）

五、歌合の時代（歌の優劣）

といふ五階段になつて歌合は成長發展したものである。歌合の意義の中には、四以下を入れる説、三以下を入れる説等に分れるが、廣義の歌合としては前者、狹義の歌合としては後者を意味すべきであらう。

歌合を形成する要件としては、次の四點が擧げられる。

一、多くの歌人が集合すること。

二、同じ題材のもとに、それらの歌人が歌作すること。

三、左右の兩方に分れて直にその歌の優劣を競争し勝負の決定を求めること。

四、互に相手方の歌を批評論判しあふこと。

此の四點を兼ね備へた歌會が、即ち、歌合の特質となるのであるが、更にその勝負を決定する爲に別に判者と云つて審判官が存在し、判者は一人の場合もあれば二人の場合もあり、又、特別に判者を置かないで、一座の人々の相談で勝負を決定することもある。之を衆議判といふ。勝負が決定出来ない場合には持ちといふ。又、判者の決定に對して異議を申し立てる事も可能である。それらの點は後代の角力と同じで、當時の歌合にも角力立歌合と云ひ、角力の形式にしたものがある。

歌合は、早く文徳帝・陽成帝の朝に行はれた事が文献に見えるが、現存のものでは、光孝朝の在民部卿歌合、宇多朝の寛平菊合、寛平御時后宮歌合の如きが古く、醍醐朝の亭子院歌合は、その規模及び組織に於て後世に範を垂れた。斯くて、村上朝の天徳四年の内裏歌合(天徳歌合とも云ふ)の如きを経て愈々盛となり、組織も擴大され、後鳥羽朝の建久四年の六百番歌合、土御門朝の建仁元年の千五百番歌合の如きに迄發展した。

平安・鎌倉時代の人々は歌合に實に熱心で、天徳歌合に負けた爲に煩惱して死んだ壬生忠見の話さへ傳へられてゐる。それ程、歌を貴ぶと共に、歌合に熱意を持つてゐた。斯くて歌合は、徒に論難の爲の論難に陥り、歌病の如き末梢的修辭にのみ關心する弊を生んだが、他方、批評意識を盛にし、歌

學の發達に貢獻する所が多かつた。

文獻 新講和歌史(兒山信一) 王朝和歌集の研究(松田武夫) 傳宗尊親王筆歌合卷研究(久曾神昇)

六百番歌合並顯昭陳狀(能勢朝次) 又、群書類從・續群書類從・續々群書類從の歌合の部

## 七六 今様歌の發達に就いて記せ

今様歌は普通略して今様といふ。當世流行の歌謠といふ意味で、新様ともいふ。

今様の發達に就いては、形式の上で、上古の五七調の歌謠形態が七五調になつたといふ事を、重要な原因の一とする。さうして、五七調が七五調に化したといふ理由に就いては、外來文化の影響と見る説と、國內で自然に變化したものと見る説とがある。

此の後者の説について見ると、

一、上代の基本的な歌謠形態なる短歌形式においては、五七、五七、七と切れてゐたのが、次第に五七五、七七と上下の二句に分たれるやうになり、且初句も分離する傾向があつて、此所に五、七五、七七といふ句切りが設けられる。斯くて、七五といふ句が獨立した基本の句たる傾向を示すやうになつた。萬葉集の歌にも、さういふ傾向が現れてをり、神樂・催馬樂等平安朝初期の歌謠に至つて、此の傾向が大いに増大してゐる。

二、上代の原始的な音楽が次第に洗煉せられて來るに及び、その曲調に附けられる歌謡の形式も自然に五七調から七七五調になる。

三、大和と山城との自然の差、即ち、男性的と女性的な風土・氣候の差が、歌謡調の上にも影響して五七調から七七五調になつた。

又、前者に屬する説では、

一、佛教歌謡の影響で、梵讚が漢讚となり、漢讚が和讚に變つたが、此等の佛教歌謡には七七五調が多い。

二、唐樂の越天樂の曲節につけられた歌詞は今様形であるから、此の樂曲が平安朝初に盛行した爲に七七五調が行はれるやうになつた。

三、舞樂の詠<sup>えい</sup>又は轉<sup>まげり</sup>には七七五調のものがあり、此等の外來樂に附隨した歌謡の影響による。

四、わが國では、奈良時代に五言詩が行はれてゐたが、平安時代になつて、七言詩が盛行した。

七言詩は、四言三言に分れ、上長下短の詞形を持つ。且漢字の一字は二音に發音せられるものが多く、四言三言は八音六音となり七七五調に近い。此の漢詩の影響があり、殊に奈良時代から平安時代にかけて行はれた踏歌<sup>どうか</sup>の歌詞は七言の詩句を用ひて音讀したものであるから、それらの影響によつて七七五調となつた。

かやうにして、平安時代の歌謡形態は一般に七五調となつたが、殊に、和讃の形態は、七五調から更に、七五、四句の今様式に近附いて行き、平安時代初には既に存してゐたらしい舞樂の按摩の二の舞の詠は、

日は晚景に、なりにたり。我がゆくさきは、はるかなり。

といふ七五、二句から成り、今様形式の半を形成してゐる。

今様歌は、和讃から變化したもので、就中、恵心僧都(寛仁元)によつて、今様形式が確立した。今様形式の歌の最古のものは、いろは歌であるが、之を弘法大師の作に擬するのは信じがたい。併し恵心僧都が説教の中でいろは歌の事を語つてゐるのによると、既にその時代には世に知られてゐたものである。今様といふ言葉も、その頃から用ゐられ始めた。斯くて、今様歌は一條天皇時代頃に勃興し、後朱雀天皇時代に至つて世に行はれ、名人も輩出するに至つた。

七五、四句を一節として長く連ねる事を原則とする和讃の、一節を獨立せしめたものが、即ち今様形式であり、今様形式の歌を廣く、今様歌といふ。和讃の一節が獨立し、且之に類似した歌を作つたのが法文歌であり、法文歌の一種に沙羅林といふ歌もあり、又、法文歌と神樂歌と合して、法文歌の内容が神樂化したものを四句神歌(しよくかみうた)と云ひ、かやうに、初は宗教的内容を持つてゐたものが、全く世俗化して、世俗的な内容を持つと共に、形式も、七五調を嚴格に守らずに甚だ崩れた形を持つやうにな

つたもの、之を今様といひ、廣義の今様に對して、此の特殊の歌謡を狹義の今様とする。此の今様から、又更に、片下かたおろし・早歌さうかといふやうな、別種の謡ひ方の歌も發生してゐる。

此等の歌は、後白河院御撰の「梁塵秘抄」に多く收載せられ、その他、嘉應二年寂眞書寫の今様歌十三首、寂念の家集「唯心房集」所載の今様、顯眞の古今目錄抄、稿本紙背の今様等があるが、鎌倉時代以後では、主として、五節間淵醉の際に行はれるくらゐで、甚だ衰微した。

なほ、上來、今様形式として七五、四句といふ事を云つたが、和讀系統のものでは一句が四四五調をとるものが多く、之が世俗化して今様(狹義)となるに及び、外來の四四五調よりも、寧ろわが詩歌に固有の七五調の方が多くなつた。

文獻 和歌史の研究(佐佐木信綱) 梁塵秘抄(同上) 日本詩歌の體系(兒山信一) 日本歌謡史(高

野辰之) 古代歌謡の研究(藤田徳太郎)

#### 四 中世（鎌倉・室町時代）

##### 七 鎌倉時代文學の特質に就いて述べよ

王朝文化に憧れる氣持と、新しい時代の文化を創造しようとする氣持、此の二つが並立してゐたのが鎌倉時代であつた。従つて一面に於ては情趣的・抒情的・貴族的であると共に、他面には内面的・思索的・意志的・武士的・叙事的であつた。鎌倉時代の文學も、従つて此の新舊二つの傾向とその中間を歩むものゝ存在した事は、自然の成行であらう。

和歌や物語の世界はその舊派の惰性であり、軍記物や法語の類は新地を開拓したものであり、隨筆や紀行はその中間を歩むものといふことが出来る。

新古今集出現の如きは鎌倉初頭に於ける華々しいものであつたが、之も見様によつては千載集の傾向があそこで結末をつけたものとして、王朝歌壇の掉尾の花を飾るものと見ることも出来る。西行や實朝に於けるそれ／＼の創造の苦悶は、確かに内的なうづきの盛りあがつて來た結果であらう。

説話物は大體之を二つに考へることが出来る。一つは平安朝の今昔物語の系統を引いた古今著聞

集・古事談・宇治拾遺物語等であり、今一つは發心集・撰集抄・雜談集などの佛教説話集である。鎌倉の新時代の背景を考へるならば、此の佛教説話集の隆盛に一顧を與へる必要があらう。又京・鎌倉の交通が頻りとなるに及んで、茲に海道記とか東關紀行・十六夜日記などいふ所謂海道文學が新らしく生れたといふ事も注意に値しよう。

或は又親鸞・道元・日蓮・一遍上人などの法語・消息・遺文の類が、その眞摯にして深い内省と強い信念の横溢せる、正に鎌倉時代初期の新らしい精神界を如實に示してくれるのを忘れてはなるまい。

ともあれ、個々の此等の作品には夫々の特色もあるが、鎌倉時代全體を通して概言するならば、

**第一**に鎌倉時代の文學は先づ武士的精神に基いてゐるといふことがいへる。そこには意志的な豪宕雄健な精神が觀られる。

**第二**には佛教思想の浸潤である。王朝時代には情趣的乃至は氣分的・功利的に受入れられてゐた佛教が、中世へ來ると人々の骨髓にまでしみこんだ許りでなく、之が文學内容にまで咀嚼されて來たのである。平家物語の如きは蓋しその代表的なものであらう。のみならず、佛教の文學化といふ事も弘通の上から漸く盛になつた。歎異鈔や安心決定鈔は勿論、日蓮の遺文などにもよく見られるし、更に淨土教系には眞宗や時宗に和讃が多く作られた。

**第三**には鎌倉時代より室町時代へかけて、益々啓蒙的・教訓的要素が多くなつて來たといふことであ



る。説話における十訓抄のみならず、何れの作品にも多少とも之が附加されてゐる。

斯くして、鎌倉時代から室町時代へと推移してゆくものは、より高次の傳統の精神、集團的差別より普遍へ、といふ過程を辿つたものといふことが出来るであらう。

傳統的精神は一面に尙古的となり、類型の文學を生ずるに至り、茲に又和歌に於ける家柄が生れ、歌論が發生するに至つた。そして、此の傳統の精神と結びついた理念が文學の上に「幽玄」となり、漸次「さび」へと歩みを進めてゆくこととなる。集團的なるものは漸次民衆的な素材を多からしめ、作品そのものも國民文學ともいふべきものとなり、讀者層も擴大されてゆくこととなる。差別より普遍へは、平安朝より鎌倉・室町へと時代の下るに隨つてわが思想史の辿つた徑路であり、文學にあつてもそれが見られるのである。

#### 文 献

鎌倉室町時代文學史(藤岡作太郎)

鎌倉時代文學新論(野村八良)

鎌倉時代文學概説(沼澤龍雄)

新潮社日本文學講座)

近古文學の概論(久松潜一 日本文學聯誼會中世篇)

鎌倉室町時代文學史(齋藤清)

衛 岩波講座日本文學)

思想を中心としたる中世國文學の研究(阪口玄章)

中世日本文學(齋藤清衛)

### 七六 中世文學に於ける佛教思想に就いて述べてよ

前期鎌倉時代に於ける代表的佛教思想は、感情的に受入れられた無常觀と末法思想及び欣求淨土の

思想であるし、後期室町時代にあつては意志的にして諦觀的な禪宗味を加味した佛教思想であると概言することができる。併し、之を細かに考察すれば、時代によつても作品によつても、多少の移動のあることは勿論である。こゝには先づ、中世全般に亘る思潮と深い關係をもつ所の無常觀と因果思想を吟味し、次には中世期に於て特に擴大された神佛習合思想と並に祈禱に伴ふ民間信仰とを眺め、最後に民衆の間に弘まつた信仰と武家の間に多く採用された佛教とについて、之を文學との關係の上に辿つてみたいと思ふ。

一、諸行無常は平家物語を貫く精神であり、方丈記の感傷を統一する理念であり、徒然草全篇に漲る人生觀であつた。

此の無常觀は末法末代の觀念と結びついて、愈々體驗的なものとして認められたのが中世の初めである。従つてこゝには厭世的・消極的にして、彼土の往生を願ふといふ來世欣求の思想と結びつかざるを得なかつたのである。

此の無常觀と欣求思想が詠歎的に感情的に美化されると、平家物語の女院御往生といふ劇的場面が展開されるし、死の餘儀ない諦めとなる時、先帝御入水に見られる二位尼の言葉となるであらう。もし更に之が「修行」といふやうな分子を含んで來ると、「口業をおさめつべし」といひ「觀念のたよりになきにしもあらず」といふ長明の隱遁生活となる。更に「死をにくまば生を愛すべし」とて存命の

よろこびに却つて求道の念を勵まし、寡欲知足の生活に入れば、徒然草の求めようとする境地に至る。更に太平記へくると「古來一句、無死無生」といひ、謡曲の放下僧は「生死に住せば斷見の科」といふ。斯くして「面白の花の都や」、變化流動の中に執著を捨て、淡々と遊ぶ連歌のつけ合は又不即不離。飛花落葉の觀念に住して「さのみ執心なき(眞渡 問答)」當座の逸興を樂しむのである。

二、「欲知過去因、見其現在果」といふ因果思想は、保元物語や平治・平家物語等にも出てくる。保元・平治の物語は、此の因果觀の上に作者は批判の重點を置いてゐるといへる。

因果因縁の思想は古く「日本靈異記」を生み、平安朝の物語には「宿世」としてあまねく擴がつたものであるが、それは中世文學にあつても夫婦の契、主従の縁として感情的に温い人生觀をもたせ、又宿業・果報として、倫理的な生活を要求するに至つてゐる。「積善の家に餘慶あり」とは平家物語のみならず、中世の作品には「一樹の蔭に宿り」といふのと同じ程度に屢々出てくるのである。

三、神佛習合思想は平安朝の頃からあつた。併し文學作品の中にはつきり、而も頻々と出てくるのは中世からである。殊に謡曲やお伽草子に至つては、和光同塵・本地垂迹の言葉は、もうお定りの文句になつてゐる。神佛の靈驗談と共に、本地物の勃興も亦所以ある哉であらう。

四、祈禱佛教も亦民間信仰と結びついて非常な勢力を占めるのであるが、之は軍記物にあつては戰捷祈願の意味を含むこと多く、謡曲にあつては有情非情の成佛得脱としての廻向乃至祈願が中心とな

つてゐる。此等の信仰は、多くの場合密教的な要素に佛教以外のあらゆる雜信仰が混入されてきた民間信仰であつた。

五、武家にあつてはその武士道的精神と結託し易かつた爲か、禪宗の影響が大であつたが、民間にあつては淨土教的色彩の方が濃厚であつたといへる。併し之とても文學に直接あらはれてゐる限りに於ては、法然以前の淨土教であつて、親鸞の淨土教は出て來ない。謡曲には日蓮の法華や遊行上人の時宗などがちらほら見える。

尙その他、中世の歌論・能樂論・連歌論などいふ評論の方にも、佛教思想が多分に影響してゐるが、こゝには省略しよう。

文 獻 思想を中心としたる中世國文學の研究(阪口玄章) 日本佛教文學序説(同上)

### 七九 軍記物語の特質に就いて述べよ

軍記物は武家の戦争を素材の主眼として、之に物語風な抒情的挿話を織り交ぜた一種の歴史的文學である。歴史的な素材を取扱ひつゝも、之を文學的構想によつて纏め、且つ文學的な情緒によつて色彩づけたが故に、軍記物の内容は必ずしも史實に合するや否やは問ふ所ではない。否寧ろそこに出てくる鎮西八郎爲朝でも、清盛・重盛でも、木曾義仲でも、それらは作者の希望する所に従つて自由に

正邪・勇怯の人物として描かれてゐる。

作者といつても、それは決して特定固定せる單一作者ではない。軍記物が何れも作者不明であるといふこと、幾人もの作者が擧げられるといふこと、作品に異本多く、それには進展の段階がみられる(特に平家物語の如き)といふことよりしても、軍記物は一人の作者といふよりも、民衆といふか大衆といふか兎も角多數の集團の中に徐々に取捨増補されつゝ成立して來たものと考へ得られる。従つて軍記物語は大衆の嗜好が、理想が、民衆的判斷が、此の中の人物價值を決定し、且つ全體の構想を發展せしめたものと考へることが出来る。

軍記物は右の如く衆團が作者であり、徐々に改變・取捨・増補もされて來たといふ事は、軍記物自身の形態が左様あらしめるに都合よく出來てゐるのにも基因する。即ち軍記物は全體を扱ふ上に形態上は統一がなく、「何々の事」といふ短篇的なものを結合し、羅列してゆく場合が多いのである。のみならず、主要事件の連絡といふよりは、その中間に幾多のわき路へそれる挿入説話が多い。曾我物語などは特に之が目立つのである。此の挿入的説話の附加によつて、作品全體はいか程にでも擴大し得る様な性質をもつた作品なのである。

而も此等の説話以外に、部分的に古今の故事を比較せしめる爲に、故事・古句・古歌の引用等が極めて多い。そして此等の故事の引用は、或る意味で中世文學全體に通ずるとみられる一種の啓蒙的役割

を演じてゐる。源平盛衰記とか曾我物語などは殊に之が濃厚で、説話的・故事的の要素の集成といふ感をすら與へる程である。

軍記物の描寫は戰の有様にしろ服飾にしろ何にしろ、何れも非個人的で類型的であるといへる。

最後に軍記物の精神はといふに、全篇を統べる所のもの、いふ迄もなく叙事詩的精神であると云へる。同時にその中には王朝風の「ものあはれ」と武家風の力、情と理、文と武、戰鬪と愛慾とが互に交錯してゐるのを認める。此の事は、平家物語や曾我物語・義經記等に於て特に著しく感じられる。而も此の交錯する人生を統一づけるものが、佛教思想を中心としてゐると概言し得るのである。無常觀と欣求淨土思想の如きは、就中最も大きいものであらう。(次項参照)

### 文獻

軍記物語の本質(高木市之助 國語と國文學軍記物語號)

戰記物語研究(高木武 新潮社日本文學

講座)

軍記物語の性質(久松潜一 日本文學聯講中世卷)

軍記物語研究(五十嵐 力)

戰記物語の

研究(後藤丹治)

## へ〇 軍記物に就きて知れる所を記せ

## へ一 軍記物語の發達に就いて述べよ

軍記物語とは戰爭を主として取扱つた歴史的文學であり、叙事詩的文學である作品を總稱する。但

し或る時代の戦争を叙述したものには、將門記・陸奥活記・奥州後三年記・純友記などが平安朝時代に出たが、此等は何れも漢文であるか、さうでなくても極めて叙述が簡單である爲に、戦記文學の先驅といふ程度の作品として取扱はれてゐるに過ぎない。又鎌倉時代の承久記・承久軍物語、或は室町時代の梅松論や應仁記などは、部分的には描寫表現にみるべき箇所もあるけれど、これ亦普通には雜史類の中に入れる人が多いやうである。或は又、室町時代に出た義經記や曾我物語などは個人の經歷を中心として、時代の動きを加味してゐないといふ意味で、戦記物語から削除して考へる人もある。斯くして、極めて狹義の軍記物（戦記物）といへば、保元物語・平治物語・平家物語・源平盛衰記・太平記の五種に限られる。但し廣義に解するならば、以上掲げた全てを含めてもよいと思はれる。

軍記物語の發生は、之を古典の戦争記事の描寫にまで溯行せしめれば古事記にまでゆくのであるが、寧ろ軍記物直接の系統は、今昔物語とか合戦繪卷などの書物に出てくる戦争譚をば、歴史物語の一つの特殊の形態として發展せしめたものであり、之を作り出す直接動機は、やはり將門記あたりの様な戦争に強い關心をもつた人の手によつて先づ作られ、之が更に保元亂・平治亂の如き當時の天下を震撼せしめた事件を目睹した感動から、茲に軍記物といふ獨立の様式が完成されるに至つた、と觀るのが至當であらう。

斯くして、將門記あたりから漸次發展して來た戦記物は、平家物語に於て一先づ大成し、源平盛衰

記や太平記に於て増大したのであるが、太平記のあとになると之が二分して、一方は實録風の戰爭譚となつて文學的價値を失ひ、一方は中心人物の個人的傳記小説の形態をとるに至つたのである。

兎も角かうした戰亂の目撃、それに將門記あたりの簡勁な漢文脈が、こゝに戰記物語の剛健な表現をなさしめたのであるが、又一面には王朝時代の歌謡・歴史物語・物語などの面影をも含めて、こゝに優雅な和文脈と情緒的な素材とを附加せしめるに至つたのである。従つて軍記物語は、その文體に於て和漢混淆・雅俗融和となり、素材に於ても氣分に於ても、貴族文化と新興武家文化との調和の上に特色をみせてゐるといへるのである。

戰記物語の性質を概言すると、高木武氏は次の簡條を擧げてをられる。(1)成長的、(2)歴史的、(3)叙事的、(4)國民的、(5)悲劇的、(6)謠誦的、(7)客觀的、(8)外面的、(9)類型的、(10)尙古的・尙外的、(11)尙形的であると。

之を要するに、軍記物語は叙事的精神と抒情的精神、武家文化と貴族文化、意志と感情とを適當に調和し、新舊思潮の特色を併せ有して居り、且つ國民的叙事文學として完成した所に、その最大の價値を見出して然るべきものであらう。同時に後代の小説・劇曲・實録・兒童文學などに及ぼした文學的影響並に後代に及ぼした民衆の武士道精神の培養なども忘れてはならぬ。(前項参照)



### へ三 歴史物語と軍記物語とを比較評論せよ

歴史物語(主として鑑物)に於ける年代的叙述即ち歴史性は、軍記物語(主として保元以下太  
平記迄の狭義のもの)のもつ歴史性なる性質とその軌を一にするもので、見方によつては軍記物語は歴史物語の一變形として特に戦争を中心としたものに過ぎないと考へられる。少くとも間接には、歴史物語は軍記物語の發生に對して誘導的役割を演じたとはいひ得るのである。併し總括的に之を概言するならば、歴史物語は史實に比較的忠實である事、即ち歴史的事實をば文學的に表現しようとしたといふ意味に於て、形は文學的であつてもその實は歴史であると稱すべきである。之に對して軍記物語は戦争なる歴史的事件を題材としてはゐるけれど、必ずしも史實に忠實であるといふ事が主眼點でなくして、時には想像を逞しうし、時には作者の嗜好に従つて自由且つ大膽に史實を歪曲する事も許されてゐるのであるから、その意味で文學的創作の感情の方が主體となつてゐる。従つて、歴史物語をば文學的な歴史といふならば、軍記物語は歴史的な材料を取扱つた文學、即ち歴史的文學と稱すべきである。そこに兩者の態度に根本的な相違があるといふべきであらう。

その構想・形態に於て兩者を比較するならば、歴史物語は編年體にしる列傳體にしる、何れにしても時代的に順序を辿り、事件に統一連絡をもつてゐるが、軍記物は元來説話的なるものゝ結合といふ形

をとり、一齣づつ獨立し得る性質のものなるが故に、その各齣の位置は必ずしも一定せず、その順序は前後自由に置換へられるといふ體裁をとつてゐる。

之といふのは、軍記物は又、概して「語り物」といふ性質をもつ事に一因するからであらう。即ち平家物語が平曲として琵琶に合せて語られた事は勿論であるが、保元物語や平治物語も亦琵琶に合せて語られて居り、太平記や義經記・曾我物語も曲節を以て語られたものである。従つて軍記物には韻文的要素が比較的濃厚なのに比して、歴史物語は全くの散文的要素で終始してゐる。たゞ兩者ともに、和歌の挿入などを多からしめて文學的修飾を加へようとした點は相似てゐる。

更に形態の方からいへば、歴史物語の大部分は所謂大鏡式の序文といふものを存し、章節の名稱は榮華物語風の雅名を用ひてゐるが、之は軍記物語には見られない點である。

兩者の精神よりいへば、軍記物語は新興武家を中心とする英雄的叙事詩的精神を以て貫かれてゐるに對し、歴史物語は回顧的な貴族的抒情詩的精神を以て貫かれてゐるといふ所に相違が認められる。

歴史性を捨てない以上、共に客觀的たるは同様であるが、此の客觀性をして主觀の中に入れる態度には、自から歴史物語と軍記物語とに相違のある事も勿論である。大鏡における道長觀の主觀性と、平家物語全體を貫く人生的な主觀性とは兩者の相違をよく物語つてゐるといへるであらう。

而して此の歴史物と軍記物との、後代への展開をあとづけてみる時、歴史物は歴史的記録といふ方

へ走り(水鏡や今鏡は例に文學、性の缺乏を示してゐる)、軍記物の方は實録的な傳説物へと移行してゆく傾向が見られるのである(例へば個  
人を中心とした義經記の如きものは繪本太閤記へ。戰爭譚は難波戦記の類へ)。そこにも傳奇的なるものと歴史的なるものとの本質的な相違がやはり見られると思ふ。(尙、本項に就いては次項解説をも参照せられたい。)

文 献 歴史物語の本質(沼澤龍雄 國語と國文學本質號) 歴史物語(芳賀矢一) 及び七九項参照

### ハ三 歴史物語と軍記物語との文學としての特徴を記せ

此の二種の文學は、歴史を材料とする文學なる點に共通の特色がある。二種共に平安朝の末期から鎌倉時代にかけて發生した。之を社會史的に見るならば、貴族社會が崩壞の兆を現し始めた時期から、その没落が實現して武家階級へ勢力が移動し終つたまでの時期である。而して歴史物語は貴族支配時代を材料とし、又はその崩壞後も貴族の側の立場から執筆されてゐる。之に反し軍記物は時代的に稍後れる上に、武士の動きを材料とし、その立場から書かれてゐる所に特色を見出す。

従來、歴史物語といはれてゐるものは、平安朝期の榮華物語・大鏡、鎌倉以後の今鏡・水鏡・増鏡である。又軍記物とは、平安朝の將門記・純友記に始り、鎌倉以後の保元物語・平治物語・平家物語・義經記・曾我物語・太平記等である。

さて兩者を、その組織・表現・素材・文學美などの點から分けて觀察して見よう。

組織の上からいへば、歴史物語は、先づ榮華物語にあつては、優美な名をつけた卷々によつて、年代順に區切られて、此の點源氏物語の影響を明かに受けてゐて、歴史物語が物語(文學)と記録歴史との中間的存在である事を語つてゐる。次に、大鏡以後は、各個別の特色はあるが、全體に通ずるものとして、或る寺院の籠堂の如き處で、百數十歳の老人に遭ひその談話を書きとめたといふ形式をとる。之に比べて、軍記物語はその或る卷名に若干の顧慮を拂つてゐる外は、全體の組織上の特色は見られない。

次に、表現の上から見れば、歴史物語は平安朝の物語文學の流を汲んだだけに、全體として流麗な言葉を驅使して、優美な雰圍氣を描き出すことに努める。大鏡だけは別であるが、他は傑作といはれる部分は皆さういふ表現で、鎌倉以後の制作でも、猶擬古的に平安朝の言葉と語法とで書かれてゐる。之に反し、軍記物語は大體和漢混淆文を基礎とし、力強い單語や撥音便・促音便の挿入を交へて、實に力強い表現となつてゐる。こゝに優麗と健強との明白な對峙がある。

次に、素材の點から眺むれば、前に記した様に、歴史物語は公卿の社會又は社會觀を描き、軍記物語は武士のそれを扱ふのである。而して前者が平和の時代の日常生活や社會の動きやを寫すに對し、後者は戰國兵戰の動亂を材とする。又、前者が主として道長の如き個人の性格や生活を中心として寫すに對し、後者は幾萬幾千の大氏族の動きを扱ふ。そこに現れる清盛・義經等の個人は、個人ではあ

るが實は各團體を代表する英雄である。此の點で、前者は個の文學、後者は衆の文學である。尙、前者にも個人的に又部分的に見えてゐる佛教の色彩は、後者の代表作平家物語では極めて濃厚で、此の作品の主流をなし、兵亂時代の世相をよく反映してゐる。

斯くて、素材及び表現の綜合として、そこに集積される文學美は、前者に於て平和な優美な情緒であり、そこには「もののはれ」の世界が猶物語文學の影響として尾を引いてゐる。併し、後者にあつては、さういふ優麗な情緒が平家の或る部分に見えるが、全體としては強く荒い色彩である。いはゞ悲壯美ともいふべきもので蔽はれてゐる。そこに戰亂そのものから來る悲惨さ、無常さ、及び佛教的世界觀が與へる同じ色彩が加はつて來て、深い宗教美の漂つてゐる事が看取できる。

文獻 前項を參照せられたし

#### 八四 文學上より平家物語を評論せよ

平家物語は前半六卷に平家一門の榮華を叙し、後半六卷にはその没落を描いてゐる。全篇の眼目はその没落に對する哀愁にあるのであつて、本書冒頭の「祇園精舎の鐘の聲……」が、やがて全篇を貫く創作動機の標榜である。従つて全體の中心は平家自身の没落にあるとはいへ、その中に挿入されてゐる幾多の人物、例へば成親・俊寛・頼政・義仲・伎王・伎女・義経らも何れも華やかに時めいて、

はかなく滅びてゆく悲響を湛へてゐるのである。流布本に従ふ時は、女院の御一生こそ誠に此の縮圖であり、「六道の沙汰」は、此の物語のいづこにもあてはまる作者の人生觀なのである。平家物語の戲曲的哀詩は、此の無常觀によつて統一され玉成されてゐるといへる。

而もそこには武士的な力への禮讚と並んで愛の強調、優雅の讚美があり、殺伐陰慘な鬭争と、それを和らげる優しく明るい君臣・親子・夫婦の愛情と義理が描かれてゐるのである。愛別離苦の悲哀は沈淪の底から未來の安養淨刹へと導いてくれる翹望となつてよみがへる。

平家の人々は、あく迄武人であると同時に、あくまで貴族であり、詩人であり、音樂人であつた。

平家物語の特色は、豪華絢爛、優雅哀絶、力と愛、貴族と武家、文と武、舊思潮と新思潮とが互に錯綜し混淆し、又調和してゐる所に、文藝的な美が認められるにある。

平家物語が最初から此の形で作られたものでなくして、成長の文學であるといふ事、従つて又國民の文學であるといふ事も、平家物語の文學的意義としては忘るべからざる點である。

平家物語は前に述べた様な種々の要素を取入れてゐるが爲に、その文章も亦時に絢爛、時に剛健、時に簡勁、時に優美、斯くして和漢混淆・雅俗折衷の麗はしい文體を形成してゐるといふ事も、他の戰記物に比して最もすぐれた點であるが、同時に「道行文」なる一新文體を完成してゐるといふ事も注意すべき點であらう。

平家物語が平曲として語られたといふ事は、同時に平家物語の諸異本を生じた一つの理由であつて、流派による齟齬の位置の異同の如きは、平家物語の本文批評とは別の立場において、それ／＼文學的に見ても興味のあることゝ考へる。即ち灌頂卷を別立した如きは、之によつて、別立しないものとは異つた味はひが生ずるものである。

平家物語は他の軍記物と同様に表現の手法には類型的な所も多く(例へば戰場の服裝を叙するあたり、名乗を擧げるあたり)、又事件の秘奥を抉り出すといふよりは寧ろ外面的な描出に止まつてゐるとはいへるのであるが、併し此の缺點を補ふに餘りある程に詩的・劇的な内容を盛り、極度の形象美を發揮してゐるといへよう。

のみならず、描かれる人物についても、清盛・西光・俊寛・佛・伎王・重盛・義仲・小宰相など、時には對照的な立場において、その性格の一面を描く事にも意を配つてゐる。たゞ餘りに作者の詠歎が勝ち過ぎ、事件の推移に壓へられ過ぎて、十分に性格描寫や心理描寫が深まつてゐないといふ缺點は認めてよからう。が然し、何れにしろ、戦記物語のみならず、中世文學を通じて第一等の作品とする事には何人も異存はない。

文 献 國民的叙事詩としての平家物語(生田弘治 帝國文學一二卷三一五號) 叙事詩としての平家物語

(岩野泡鳴 文章世界五卷一四號) 軍記物語の新研究(五十嵐 力) 平家物語と時代精神(沼澤龍雄)

日本文學聯講中世篇)

## 八三 平家物語と太平記とを比較評論せよ

太平記は平家物語に比して事件が複雑な上に局面が一層擴大し、戦闘も頻繁激烈であり、戦期も遙かに長い。従つて平家物語の様に纏まりもなく餘裕もなく、記事は紛糾錯雜して叙事の中心點も屢々動搖するを免れなかつた。

平家物語は前半が平氏の榮華で、後半はその没落を叙してゐるが、此の場合、前半の榮華は後半の没落を導き出す爲の序曲に過ぎないのであるが、太平記にあつては十二卷迄が建武中興迄、十九卷迄が足利幕府の基礎確立迄、而して終り迄が足利氏骨肉の争、諸將士間の内訌軋轢、それにつけ入つて吉野方の牽制策といふ紛争を續けて、將軍義滿の時代に入り、漸く平和が來るといふ所で終つてゐる。従つて、太平記の此の三部組織は、平家物語における様な筋の纏まりがなく、前期はよく筋道も立つてゐるけれど、後になる程混亂して到底之を纏め切れなかつたといふ弱點を暴露してゐるのである。之は一面に於て、事件の複雑さに起因するのであるが、併し他面には又、制作の主動精神が、太平記にあつては確立せず、又一貫してゐなかつた結果とも云へる。

つまり太平記は全面的に功利的・末法的で統制を失つた人心の惡魔的慾望が漲つてをり、そこには無解決の絶望が漲つてゐる。にも拘らず、此の時代的な陰慘な苦悶を直接に捉へようとはせずして、寧



ろ之を救はうとする指導精神によつて作品を構成しようとしたが故である。こゝに無意識的に横溢する時代の眞の姿と、意識的に破邪顯正しようとする精神とのもつれ合ひが生じたのである。即ち道德的・教訓的・宗教的の傾向、治世の大道、人倫の本義、勤王の大義といふ指導精神が全篇を一貫してゐる。此の指導精神は極めて意志的であり理智的であるが故に、平家物語にみる様な情緒的な戀愛の如きは寧ろ罪惡視せられるのである。

斯くして、太平記には、平家物語にみられるやうな優美な風流譚や可憐な戀物語は閑却されてしまつた。

平家物語が浪漫的であるならば、太平記はどこまでも現實的であると云へる。これまた時代相の必然的な結果である。平家物語に於ける亡びゆく者への挽歌には、嘗ての華やかなりし頃の夢がつき纏うてゐる。そして之が哀調を帯びた諸行無常の合唱に送られて天上高く紫雲に昇りゆく憧れとなるのであつた。然るに太平記は、餘りにも廣漠たる原野が、全てこれ魑魅魍魎の棲家である。そこには何等統一の微光をも認め得ない。彼等はたゞ宿命として諦めるか、然らずんば死生を度外において乾坤一擲、自力更生の意志を奮ひたてずにはゐられまい。太平記のもつ道義的指導精神はこゝに根ざして居るのであり、それは武士道と儒教と佛教との三者が一體となつて、期せずして現れて來たものである。太平記の特色は此の時代精神の上に呼吸してゐる所に存し、且つ太平記の後世に及ぼした精神的

影響も蓋しこゝにあつたといへるであらう。

以上述べ來つた如く、太平記は平家物語の様に統一渾成の妙味は味はふべくもなく、優雅な詩味は求め難いが、その代りに深刻な人生の相、男性的・意志的な「力」の發揮は、思ふ存分に味ふことが出来る。

平家のもつ個々の挿話美は、太平記にあつては大きい衆團の中に消え隠れてしまつてゐる。それだけに繊細さはないけれども、豪宕さはある。太平記の文章が誇張に過ぎるとはいへ、時には絢爛、時には豪快に、而も漢文脈の多いといふ事も亦自然のなりゆきであらう。

### 文 献

太平記概説(野村八良 國語と國文學軍記物語號)

平家物語と太平記との關係(高木武 わか竹八

卷二一八號)

太平記研究(魚澄物五郎 新潮社日本文學講座)

太平記の主旨(尾上八郎 日本文學論叢)

太平記(龜田純一郎 岩波講座日本文學)

太平記と吉野朝時代の武士(高木武 日本文學聯講中世篇)

太平記を貫く精神(阪口玄章 國語と國文學一二二號)

ハ六 鎌倉時代文學に表れたる武士的精神に就いて述べよ

ハ七 軍記物語に表れたる武士精神に就いて述べよ

ハ八 平家物語に現れたる武士の精神に就きて述べよ

保元・平治の争亂を直接楔機として、公卿貴族の政治的・社會的地位を奪つた武家は、全く武力といふ専門の武器を擁してゐたが故に他ならぬ。

故に彼等武人は何といつても「武」の道に徹することが第一の生命であるに相違ない。敵に後を見せない。親の屍をも踏越えくして前進する。一人當千の強者である、日本一の剛の者であるといふ事は、何よりも武人にとつての名譽であつた。

斯くて、此の武力によつて天下を取つた時、彼等武人は自己の力を自覺した。保元の爲朝は、藏人たる空名を喜ばずして、「たゞの鎮西八郎にて候はん」と豪語し、平治の義朝は戰場の思出にとて殿上へ駈昇つた。彼等には既に公卿殿上人は眼中に無かつたのである。

此の力への自覺は、彼等に「名を重んずる」といふ精神を植ゑつけた。名の爲には生命を度外に置く。戰場の一騎打、名乗、華々しい服裝、此等は何れも卑怯を忌み、名を重んずる所から來たものである。

武士の重んずる所は又「義」であつた。光頼卿の君臣の大義を説き、爲義が院宣に従つて長子義朝を敵とした如き、或は重盛の忠諫といひ、何れも君臣の大義に立脚するものであるが、更に武人の間に於ける「義」は主従關係の上に確立されてゐる。「源氏には二人の主もつべき理なし」と廣言を吐いたのもその故である。

主従の義は冷やかな義務ではなくして、そこには温い情が通つてゐた。かの源義仲と今井兼平は互に身を案じ合つて京と瀬田から落ち合ひ、共に一所で討死したし、平治物語では義朝の子息等が討たれる時に、その乳母らは共に殉死してゐる。

武將たる者は、唯單に剛勇なるに止まらず、そこには武略がなくてはならぬ。武略は個人的競争の場合は佐々木・梶原の宇治河先陣争の如き詐謀ともなるが、之は卑怯とは考へられなかつたやうである。又、澁柿などによると、北條泰時の如きは公明な善政を施すことに、武將としての使命を感じてゐたやうである。

武人は又單に武勇に秀でてゐるのみではいけない。源義仲の失脚は餘りに粗野であつたことに起因する、と平家物語は述べてゐる。之に反して景季が箴の梅花、敦盛が笛、それらは優美な武士の嗜みとして賞讃されたのであつた。

かうした優美な反面には、北條時頼のやうに残りの味噌で客を饗應するといふ、質素な一面も存したのである。

之を要するに、鎌倉時代の武士的精神は、君臣の大義、敬神崇佛、孝行、主従の義、志の專一、名譽、武勇、質素、優美、さうした様々の徳を養ふことにあつたやうである。つまり文武兩道といふことに歸著するわけであるが、軍記物語にあらはれた程度では、未だ此等が十分に徳目として數へ上げ

られるまでには整理されてはゐなかつたやうである。

高木武氏は戦記物語の研究(新編社 日本文學講座)の中で次のやうに観て居られる(抜)。

保元物語・平治物語——勇武を最とし、名譽(家名)・忠義・死生結託等が著しいけれど、その他はいふに足りない。

平家物語——平家の武士には風流が目だつ。戦捷祈願に關係して神佛崇敬が著しい。

勇武・名譽・死生結託は平家方よりも源氏方に多い。

なさけ・節操・學識・廉潔・容儀神妙等も多少見えるが、その他は注目すべきものなし。

尙、鎌倉時代文學といふ中には吾妻鏡をも含むべく、軍記物といふ中には太平記をも含めねばならぬが、それらとても、以上述べたこと以外には取立てて注意すべき程の事もない。

文献 七九・八四項を参照せられたし

### 八九 室町時代の文學を種類によりて分類し、其の各

の特質を述べよ

### 九〇 室町時代の文學の特質を記せ

一、和歌 勅撰集乃至家集に於て特別に取上げる程の物は概して存在しない。此の間にあつて吉

野朝君臣の和歌を集めた新葉集のみが、僅かに時勢の悲痛な述懐を吐露してゐる點に注目すべきであらう。(南北朝時代の和歌に就いては、一〇三項に解説したので諒承せられたい)併し、何れにしる當時の歌壇に於ける風潮は作歌の方面になくして、鎌倉時代以後引續いて述作された歌論の方に、より多くの注意を拂うて然るべしと思ふ。(井蛙抄・愚問賢註・落書露顯・正徹物語など)

二、連歌 鎌倉初期から流行した長連歌は、吉野朝・室町時代に至つて最も隆昌を極め、菟玖波集(教濟・良基撰)・新菟玖波集(宗祇撰)・新撰犬筑波集(宗祇撰)・園座(兼盛撰)・壁草(宗長撰)及び連歌式目に關する筑波問答(良基撰)・吾妻問答(宗祇撰)・さぐめごと(敬心撰)などが輩出した。室町時代の連歌界は、それ以前に比して、花の下の連歌といはれる程に地下の者に連歌師が多くなつたこと、及び連歌の附け合ひが不即不離の「心つけ」にまで進んで來たこと、平安朝以來の遊戯的な分子から文藝的な方向へ發展して來たこと、等にその特色を認められる。又、菟玖波集の如き勅撰に准ぜられる様な連歌書が世に出たこと、連歌の式目が完成されたことなども注意すべきである。室町時代の連歌は、連歌としての最隆昌期であり、同時に連歌から近世の俳諧へと移動してゆきつゝあつた時代ともいへる。

三、謠曲・狂言・幸若舞 猿樂能は室町時代の初め阿彌・世阿彌父子の出現によつて大成された舞曲で、武士階級を觀衆として發展して來たのである。その詞章謠曲は、題材を古物語・軍記物・説話傳説などにとり、その文章に古歌を挿入し優婉華麗な一種特別の文體を形成したものであつた。その多

くは佛敎的な靈驗成佛などに結びつけてゐる所に時代の姿が見られるが、それでゐて古典的・貴族的な要素を多分にもつてゐる。

之に對して能狂言は寧ろ現實的であり、猿樂能よりも更に劇的である。その詞章は表現に於て口語脈であり、その主材に於て、當時の巷間に見られる世相を諷刺した如きものをも見うけるのである。謡曲が貴族的で嚴肅を旨とすれば、狂言は平民的で滑稽を主とする。

此の猿樂能や能狂言に對して別に幸若舞があつた。之も武門の間にもてはやされたもので、劇的要素は極めて原始的なものに過ぎないけれど、その題材は義經記や平家物語の如き武家的なものを取つてゐる所に、武家時代の所産として一瞥の要があらう。

**四、隨筆** 南北朝の頃、兼好法師によつて物された徒然草は、隨筆文學中でも有數の地位を占める作品である。徒然草にみられる特色は、極めて自由な寛大な態度で人間心理のあらゆる點を揚決してゐる所にあり、又時代人として或は尙古的なる、或は貴族的なる、或は佛敎的なる趣味・處世・求道の種々な斷面を流暢に描き出してゐる所にあるといへよう。

**五、小説** 室町時代の小説は、中には擬古物語もあれば兒物語もあるけれど、之をお伽草子なる名目のもとに包括して考へてよからう。その中には戀愛物・英雄譚・織子憎み・遁世物・復讐物・孝行談・祝儀物などがあり、何れも短篇であること、荒唐無稽の作多く、童話的な要素を多く含んでゐること、

平民文學への曙光を見せてゐること、佛教的な説法によく見られる啓蒙的なこと等を、その特色とすることが出来る。童幼婦女子を相手とするものが大部分である。

**六、歴史物語** 四鏡(大鏡・今鏡・本鏡・増鏡)の最後なる増鏡が文學的歴史物として光を放つたのは此の期に屬する。此の作の中心は、承久・元弘の前後兩役に重點が置かれてゐるといふ所に、大鏡とは異つた意義が存するのである。而もその中間を結びつける連鎖的事件は、寧ろ王朝風の心持によつて描かれてゐるし、又文章も源氏物語などの影響が極めて多い。史論的な述作として神皇正統記があるが、之は時勢の混亂に慨然として筆をとつたもの。そこに作者のもつ信念と熱情とがほとばしり出てゐる。

**七、軍記物** 集團的な戦亂を華麗の筆をもつて記した雄篇は太平記である。之を鎌倉期の平家物語に比すれば、統一に於て難なるを認めざるを得ないけれど、應仁記などに比すれば遙かに文學的であるといへる。太平記は政道論に於て理世安民、佛教に於て禪の死生一如、全體の氣分に於て力の推移といふやうな所にその主眼點をおいてみる事が出来よう。太平記の様な集團的な、長年月に亘る戦史でなくて、個人的英雄を取上げたものに義經記と曾我物語とがある。共にお伽草子を導き出す橋がけとも見られる大衆的な所を多分にもつた作品である。

**八、小歌** 當時の民衆の聲として見られるものに小歌がある。閑吟集及びそれに載つてゐないもので笹野堅氏の編まれた室町時代小歌集、此等は何れも近世小唄の先驅をなすものである。



九、法語其の他 禪僧の物した法語や、淨土眞宗の蓮如の御文(御文)など、何れも一般民衆に訴へるべく平易に啓蒙的に假名文で記されてゐる。これ亦室町時代になつて多く出るやうになつたもの一つである。かうした假名文のやさしいものの外に、漢詩文の方では所謂五山文學が全盛を極めたのも亦此の時代である。之は法語に於けるやうな向下門的な所産でなく、寧ろ支那風への憧憬に動かされてゐると考へてよからう。

之を要するに、室町時代の文學の特質を概括するならば、それは或る意味で鎌倉時代の文學の繼承から江戸時代の近世文學への橋がけをする使命をもつてゐるといへる。そしてそこには一面に王朝貴族文化への憧憬、而もそれは漸次貴族的なる心の上に新興文化の衣を纏うた連歌の如きものから、民衆化せる躰の上に王朝の衣を纏うたお伽草子の如きものへと動きつゝあつたといふことが出来る。又一方からいへば、鎌倉期の軍記物などにみえる武人をして民衆の心の中に生きる童話的國民的英雄に化生せしめる役割を果した時代であり、こゝに民衆文學の流布を齎らしたと考へることが出来る。又一面からいへば、神皇正統記と徒然草とにみられる様な二つの生き方が、此の室町時代なる世相の生き方として當然存在すべきであつた事を知らしめたともいへる。而して室町時代の文學の底に流れるものはやはり佛教的なものではあつたが、それは王朝末期から鎌倉初期に見られるそれとは異つたものになり、より深く人間生活の中へくひ込むと共に、他面にはより多く教誡的・靈驗的要素を含んで

來たといへる。若し又室町時代の文學に於て歴史的な意味からいつても、時代的價值からいつても、特筆すべきものを唯一つ求めるならば、謡曲・狂言！と言はざるを得ないだらう。その意味で謡曲・狂言の特質を考察する事が、室町時代文學の特質を解く鍵であるといつてもよからうと思ふ。

文 獻 鎌倉室町時代文學史(藤岡作太郎)

日本文學聯講中世篇(藤村 作)

室町文學概説(笹川種郎)

新潮社日本文學講座)

室町文學史(吉澤義則)

## 九一 徒然草の思想に就いて述べよ

徒然草には種々の系統の思想が見られる。試に之を列舉して見ると、

一、佛教思想 二、老莊思想 三、儒教思想 四、平安朝傳統の情趣尊重の思想等である。今此等の思想全般に亘つて述べることは時間が許さないが、中につき最も特色あるものについて概評を加へるにとゞめようと思ふ。

徒然草中において、佛教的無常觀・老莊的虛無觀、又、平安朝式の情趣禮讃は、量的に見て重要な地位を占めて居るが、必ずしも兼好ならではの感じたり言つたりすることの出來ぬといふ程のものではない。殊に人生の無常を強調した點などは、當時の出家者流の常套言で、さまで傾聴に値するものではない。兼好は「道」といふ語を屢々用ひてをるが、それには、佛道を意味する場合と、然らざるも

のとがある。此の後者、即ち佛道以外の「道」についての言説が、兼好の思想として最も獨得なものであると信ずる。而して此の「道」の思想は、儒教に基づき更に兼好自身の思索によつて深めたものであると思ふのである。

此の種の「道」を説いた記事で、今想ひ浮ぶ二—三の梗概を述べて見る。

龜山離宮の御池に大井川の水を汲入れんが爲に、その土地の民に水車を作らせられた。相當の經費をかけ幾日ばかりで土民等は大骨折つて立派な水車を作り出した。ところが之を取つて見ると一向廻轉しない。様々修繕を加へたが、どうしても廻らなかつた。そこで、今度は水車の名所である宇治の里人に命じて作らせられた。宇治の里人は費用も日數もかけず、無造作にこしらへてさし上げたところ、之は實によく廻つてどん／＼水を汲み上げ汲み入れた。之は、宇治の里人は、水車を作る「道」を知つて居るからである。

右の段は、最も卑近な例をかりて「道」の神祕をたたへてゐるのである。精密な計畫から作られた水車がまはらず、易々と結びあげた水車がよくまはる、此の事實は、水車を作るについての「體得」の有無に原因するのであつて、その體得こそ即ち「道」であり「悟道」である。「道」は決して、單なる推理や計算の結果ではない。之が、此の小話の示さんとする精神であらうと思はれる。

又、こんな話がある。

琵琶の名手菊亭の大臣が、或神聖な御儀式の際、琵琶を弹奏された。その際座について、まづそこに置かれた

琵琶の柱をさぐつて見られたところが、一つボロリと落ちた。そこで懐中してゐた、そ、く、ひで、それを付けて、何の故障もなく役目を果された。

話は之だけで別に説明はしてないのであるが、之も「道」の話に相違ない。蓋し、かういふ公式の彈奏に當る場合には、そ、く、ひを用意してその席に臨むべしといふのが、琵琶道の教則なのである。併し、實際において、萬一を慮つて此の用意を實行する人は少い中に、菊亭の大臣は、常に之を實行してゐた。此の極めて平凡な教則を、敬虔な態度で遵法實行するのが「道」に入る方法であり、その實行が身について來たところが即ち「道」を得た境地である。といふ意味に、此の話は理會せらるべきだと思ふ。此の心境が、宗教的信仰の上にはあらはれたものが、世にいふ三昧境なるものであらう。筑紫の押領使某が大根をいみじき藥と信じて毎日之を食つてゐたところ、身の危急の際大根の精が出現して之を救つたとか、書寫の性空上人が法華三昧の結果、六根淨を得て豆と豆殻との對話を聽き取るに至つたといふやうな話も、たゞ奇聞として書いたのではなく、何事にも専念三昧の結果は、神秘崇高な奇蹟的成果を將來することの例話として擧げたものだと思はれる。要するに、苟も「道」と稱すべきものは、その大小高下を論ぜず、平凡順當の理法と、之が敬虔著實なる實行と相俟つて始めて體驗證得せらるべきものであるといふのが、兼好の言はんと欲する所であると思はれる。

此の思想は、一技一能の「骨」と、道德的もしくは宗教的悟入との間に、共通なる精神過程を認識

したもので、その關係を暗示せんがために擧げた多くの例話のそれ／＼適切なる點、兼好の叡智の時代にぬきこんだことを見得るのである。此の種の「道」を語る際における彼の態度は最も眞摯で、些かの誇張もないのが、却つて讀者を撃つものがある。これ私が此の思想を以て徒然草中最も特色ある思想とする所以である。

### 文 献

兼好が趣味論(内海弘藏 徒然草評釋)

徒然草詳解「序説」(内海弘藏)

徒然草の内容、及び之

を通して觀た兼好(佐野保太郎

徒然草講義下卷末「兼好及び徒然草」の四)

思想を中心としたる中世國

文學の研究(阪口玄章)

徒然草とその思想(佐藤幹二 國語と國文學一二二號)

徒然草概説(橋 純一

解釋と鑑賞 昭和十二年二月號)

### 九二 左の文の意義を實例を擧げ敷衍して説明せよ

徒然草はつれ／＼なるまゝにの第一段から八歳になつた時佛に就いて父と問答した最後の段に至るまで、その説く所多方面に涉つてゐる。その間に戀愛を説き解脱を説いて、平安時代の情趣主義と室町時代の主情主義否定との間に一見矛盾があるやうであるが、思ふに彼は長明や西行などと違つて解脱の境地から再

び人間生活に立歸つて人生を見てゐるものゝやうである。さうして短い隨筆の連續する中に統一した作者の個性を眺める事は難くなく、哲人としての兼好の面目の躍動してゐるのを覺える。

徒然草は、かの「つれづれなるまゝに日ぐらし硯にむかひて……」といふ序段から、八歳になつた時、父に對つて、佛とはどんなものかと質問したところ、父が、人が佛の教によつて佛になつたのだと答へたのに對し、その教へた佛には何が教へたのかと、だん／＼問ひつめて、父をして答に窮するに至らしめたことを叙してある最後の段に至るまで、その説く所は頗る多方面である。試に今想ひ起し得る項目を擧げて見ると、

- (1) 物事の變遷流轉についての感懷——(イ)四季風物の變遷。(ロ)榮枯盛衰を語る廢址に對する感傷。(ハ)男女間情火冷却の跡を顧みての感傷。(ニ)人の死後、時の流の拂拭作用によつて、その面影だに止めずなりゆく事のはかなさ。(ホ)言語・風俗の時代的推移についての感傷。
- (2) 佛教的無常觀の高調。
- (3) 戀愛情調の讚美。

(4) 「道」の唱道(之は佛道ではなく、高名の木のぼりの言、碁の名人の一手でもおそく負けるやうにと打つといふ語を記したりする條に見える兼好獨得の道である。前項参照)

(5) 有職趣味の逸話や考證。

(6) 平安朝式情趣生活の推奨と、さういふ情趣に富んだ情景の描寫。

(7) 老莊風の虚無的的人生觀。

等々である。それらのうちでも、殊に讀者の心を惹くのは、彼の戀愛情調の讚美と、佛敎的無常觀の上から、死が常に吾等の背後に肉薄せることを知り、人生第一の大事として出離解脱を求めよ、解脱を求めするには俗縁を一掃して靜寂なる環境に居れと言つて居る事である。斯く彼は、感情生活の方面では、平安朝傳統の情趣尊重主義を奉じてゐるに拘らず、根本的的人生觀の上では、佛敎的叡智によつて情界を脱しなければならぬと説くのである。此の如き彼の思想には一見矛盾があるやうであるが、思ふに彼は鴨長明や西行法師が、最後まで人生を否定して、自然に歸一するを以て最高理念として過したのに反し、彼は、個人としての解脱の境地に到達した後、一般人間社會に對する博大な慈愛同情から、再び人間の社會生活に立歸つて、人生を觀察し、そこに一般人に適應する高尚優雅な人間生活を説いてゐるものゝやうに思はれる。さうして斷片的短章の連續と見える中にも、頗る高級な聯想關係が存するのである。たとへば、斷えず流れてやまぬ水、遠くより來つて遠くに去る風に、限無き感傷を訴へてゐる段と、人が老い、死に、全く地上から忘れ去られる過程についての感傷を叙してゐる段などは、その間多くの關係もなささうであるが、兼好自身にとつては、それは「流轉」の各々の形相として、一事の兩面として緊密に統一せられた現象と觀ぜられてゐるのであつて、兼好の統一した個性は、二百數十の章段を綴り貫いて居り、博大寛宏な哲人兼好の眞面目を、歴々と讀者に感じ

させるものがある。

文献 前項所掲のものと同じ

九三 徒然草の所説に矛盾ありといふは如何なる點な

るか。又其の矛盾は如何に解釋すべきか

徒然草の所説の矛盾として屢々指摘されるのは、一方に戀愛美を讚美してをるかと思ふと、一方では青年血氣の時代における感情の奔放を戒め、色慾の危険を力説してをる事、飲酒の害惡を極筆した後に、併し、思ひの外に友が訪ね來た際の淺酌は又格別であるなどと、酒をほめてをる事、羅の表紙は破れ易くて困ると言つた人を、趣味を解さない者と貶してをりながら、物はあまり費用がかゝらないで、生地かぢのしつかりしたものがよいといふやうな事を言つて居る事などである。

此等のいはゆる矛盾を如何に解釋するかについては、大體二つの態度がある。即ち、その矛盾を矛盾としてそのまゝに受取るのが、その一である。兼好ほどの多面多角な思想家にあつては、その所説に矛盾の存するのは、當然であるとする考へ方は、極めて自然な解釋ではあるが、それでは兼好の思想に破綻の存することを是認することになり、徒然草全篇の文學作品としての價値を低下せしめることにもなる。それは勿論やむを得ぬこととしても、戀愛讚美の章と色情警戒の段、飲酒の害と飲酒の



趣味とが、相近接して執筆せられ、筆者兼好は何等その間に矛盾ありとも感ぜず、すゞしい顔をしてゐるといふ事實に對し、むざ／＼之を矛盾と判断してしまふ事は、筆者兼好を低能扱にする所以であり、どうしても正常な解釋とは言ひ得ぬ氣持がする。

ここに於て、一見矛盾と見える此等の所説も、そこに何等かの統一點があるのではないかとの見方が起つて來る。之が解釋態度の第二である。此の態度に立つて見ると、上に擧げた事例は必ずしも矛盾と見るべきものではないことに心づく。即ち、兼好が戀愛を讚美するのは、すべての種類の戀愛その物の讚美ではなく、或る種の戀愛が醸し出す情調の讚美であり、色慾・性慾といふものとは全く異なつたものとして取扱つてゐるのである。全く性質の異なつた二つのものを取上げ、その一を謳歌しその一を否定したからとて、そこに何の矛盾があらう。之を矛盾と見る者は、戀愛情調と性慾とを混同してゐるのであつて、その解釋の粗雑さを愧づべきであるといふやうな考へ方が可能である。此の種のいはゆる矛盾は、かういふ見方によつて、最も容易に解消される。

酒の否定と推獎、之は、兼好のとつた立場の轉換から生じたもので、酒を否定するのは、たゞに酒のみに限らず人間生活全體を醜とする佛敎的立場からであり、之を推獎するのは、人間生活を肯定する趣味的立場からである。批判の態度が全然對蹠的な關係にあるのだから、その結論が相反するのは當然である。大きい思想家は、一つの事實を批判するのに、幾多の異なつた立場から觀るだけの餘裕

を有するもので、而もその異なつた結論は、結局その思想家の人格によつて統一せられるのであり、兼好の場合は、まさにそれに當るといふ解釋である。之は一應もつともらしい解釋であるが、兼好の人生を否定する側の佛教思想と、人生を肯定する側の趣味論とが、どこでどう統一せられてをるかといふ點に徹底を缺く。その點が明快にされぬ限り、それは統一ではなくて妥協ではないかと言ひ得る。兼好自身としては、立場の轉換を意識し、そこに矛盾はないとして居つたかに見えるが、蓋し彼としては、「眞理は常に中間に在り」といふ本音<sup>ほんね</sup>を胸中に藏し、その發言は、主として物の兩端を言つてをるが故に、此の矛盾が目立つのであらう。又、思へば、此の妥協こそ思想的の分裂を統一する人格活動であつて、苟合として之を輕蔑すべきものでないのかも知れぬ。要するに徒然草所説の矛盾は、立場の轉換といふ事によつて一應の解釋が出来、且その解釋は正しいのであるが、それ以上の徹底した解釋を求めるとなると、鎌倉時代の時代的性格から批判してかゝらねばならぬといふことになる。

文獻

徒然草の論理構造(永積安明)

文學昭和十二年四月號)

及び九一項所掲參照

## 九四 兼好の文藝觀を評論せよ

徒然草中、兼好が直接文藝についての感想を述べた章は甚だ少い。今思ひ浮ぶのは、徒然草の初の方で、讀書の樂を言つたなかに、漢籍では、文選のあはれなる卷々や白氏文集、又老子・莊子などが

面白いと言ひ、我が國の詩文でも、昔のにはいいのもあるが、近頃のはだめだと附け添へてゐる段である。それから、たしかその次の段に、「和歌こそなほをかしきものなれ」と書きおこして、古今集あつたりの古い歌をほめ、新古今頃から以後の歌は、言ひまはしの技巧の點で、ひと節面白いものはあるが、一首としての風調が低くていけないといふやうなことを言つてゐる。此等が、兼好の文藝觀の直接的表白と見るべきものであらう。

なほまた、かの四季風物の變遷を叙した章に、此等は既に源氏物語や枕草子等にことふりてをるがと言つて、自分の試みてをる自然描寫が、とうてい古人の筆に及ばないといふやうな謙遜の意を洩してゐることなども思ひ出される。

要するに、兼好の文藝觀は尙古的であつて、平安朝を以て理想的の時代とし、其の以後、漸次頽廢して來たものと見てをるのである。漢詩・漢文に對して、文選や白氏文集を愛讀書として擧げたのは當時一般の流行に従つたまでであらうが、先進文化國崇拜の傾向を見るべく、これ亦尙古思想の現れと見られる。

此の兼好の尙古的傾向は、文藝の上に限られたことではなく、言語・風俗・政治等々、すべて「いにしへ」を以て理想的なものと感じてゐたらしい。而して此の傾向は、兼好獨得のものではなく、鎌倉・室町時代の貴族社會全般を通じての思潮であつたのだから、兼好の文藝觀には、何等彼としての獨得

なものとはなかつたと言ひ得る。

併し、彼の尙古的文藝觀は、たゞわけもなく、一般思潮に附和したものに過ぎぬかといふと、さうでもない。さすがに彼には、相當しつかりした主張があつたやうである。それは、和歌について、古きをよしとした理據として、用語が安くすなほで、格調が清高であるといふ點を擧げて居る。又、之は直接文藝について言つたのではないが、寺社その他のものに命名するにも、今の人は何かひとかど世人の注意をひくやうな名をつけようといふ衝氣があるが、昔の人は、たゞありのまゝに安らかに、極めて自然な態度で命名するといふやうなことを言つてをる。此の「安くすなほ」な自然の趣を具へてゐるといふことが、彼の趣味生活における價值を決定する標準を成して居り、文藝觀の上でも亦此の標準をそのまゝ適用してをるのである。但し、彼の唱道した自然さすなほさといふものは、明治時代の自然主義の如き、技巧の排斥ではなく、渾然たる技巧に對する要望であつたことは、平安朝盛時の文藝を、殆ど無條件で禮讚してゐるに徴しても看取出来る。

なほ、彼の文藝觀として特筆してよいと思ふことは、當時の歌人等が、文學を佛教と關係づけて、その神聖を主張せんとした間にあつて、彼には些かもその臭氣が感ぜられず、あくまで文藝としての文藝、物のあはれを生命とした文藝を主張したらしいその純正な態度である。

九五 神皇正統記の文學性を論ぜよ

神皇正統記は、神代以來後村上天皇に至る日本の歴史を綴つたものである。故に、普通の分類では歴史書であるべきであり、又現に國史學の一文獻となつてゐる。併し、同時に國文學中の一書に數へられてゐる。之は何によるものであらうか。惟ふに、我が國の現代の國文學は、その傳統を徳川期以來の國學に負うてゐる。同時に宣長の「ものあはれ論」や西歐の文學觀の如きに基く文藝性の要素を含む。記紀や正統記が取入れられてゐるのは前者の系統を帶び、源氏や西鶴や近松がは入るのは後者の爲である。故に岡崎義惠氏等の日本文藝學といつた主張から國文學の文藝性を強調する時は、正統記の如きは國文學からはみ出さねばならぬ。それ程純藝術的色彩の乏しい書だといへる。で、正統記を國文學書とし、特にその文學性を考へるなどいふ時は、全く別個の立場から爲されねばならぬ。

普通に文學について美學的立場から云はれる事には、文學は、現實的利害から離れ純美を追求する所に本質があると。又、文藝家は己の方則に従ふ新しい世界を造り上げる造物者であると。此等は、文學の美的見解として文學の根本を言ひ盡してゐる。だから、之と別個の立場に立つものは、文學の美的見解を否定する發足點から出發しなくてはならぬ。即ち、文學の外的條件を主にする民族的文學觀・風土的文學觀・社會的文學觀の如きである。

正統記の場合には、當然、民族的文學觀に立つ事となる。たとへば久松博士の、國文學は日本民族精神の現れであり、文學史は精神史の一翼であるとの見解の如きに據る事となる。

此の見地から正統記を眺むれば、どう見らるべきであらうか。

それは既に云はれてゐる様に、我が國家の成立發展の由來を説き、それが常に正系の皇室を中心として進展して來た事を語つてゐる。著名な「大日本は神國なり」の「神」は、抽象的な神、或は宗教的な神を意味するのではなく、具體的な皇祖神又はその御子孫を意味した。此の意味に於て、正統記は日本國民の内部生命を現したものとといへる。内部生命が時間的に發現して來た過程を現したといへる。こゝに此の書が民族精神の文獻たる意義がある。

之は從來の國民精神的文學觀に立つ見解である。併し正統記の文學性といふ時は、これ以外にも見方があり得よう。筆者の試論を述べてみるならば、親房個人の心理からしても文學書たり得るのではないかといふのである。

凡そ、文學には「寫實の文學」「抒情の文學」の他に「意欲の文學」があり得る。ユーゴーやトルストイの後年の作品の如きである。日本現代の作家では、武者小路實篤氏や倉田百三氏の如きである。正統記は歴史書である。併し、單に過去の出來事を集積したものではない。個々の過去事實を貫いてゐるものは寧ろ未來的な意欲である。吉野朝を盛大に建立せんとする希望が、歴史事實を借り

て力説されてゐるといへる。之は吉野朝の悲運といふ現實に對する挑戦である。此の未來的意味に於て正統記は、文學の持つ一面に觸れてゐる。此の書が後世の讀書子を感憤せしめる所以も、實に此の未來的暗示が人の心を搔立てるからである。

併し文學書としては、或る限界を持つものなる事も同時に認むべきである。トルストイの「戰爭と平和」、島崎藤村の「夜明け前」は、それ／＼ナポレオン來寇と明治維新といふ歴史事實を材とし、其處に著者の未來的欲求を含ませてゐる點で、理論的にいへば正統記と同一なるに拘らず、事實は彼は文藝であり、之は歴史書である。之は文藝家と歴史家の眼が異り、従つてその把握の仕方が相違する故である。

神皇正統記が單なる歴史書でなく、それが國民精神史的意義を帯びる事は認識してゐる。又、新しい意味から之を歴史文學と見る事も許されるかもしれない。併しそれには、必ず制限が附纏ふものなる事を忘れてはならない。

文獻 上代民族文學とその學史(久松潜一) 神皇正統記の表現性(西尾實) 國語と國文學(一二二號)

## 九六 神皇正統記に「大日本は神國なり」と云へる意義

を述べてよ

九七 左の文を解釋し、更に敷衍して著者の思想を説明せよ

大日本は神國なり。天祖始めて基を開き、日神永く統を傳へ

給ふ。我國のみ此事あり。異朝には其類なし。此故に神國と

いふなり。(神皇正統記)

語釋 ○大日本 オホヤマトと訓む。「大」は美稱。ヤマトの語原については諸説があるが、山背(山城)に對

する山外の義であるとす説が稍有力である。元來は今の奈良縣地方の名であるが、古代久しく皇都があり、政治の中心地であつた爲、此の一地方の名がやがて日本全國の汎稱となつたものである。○神國 カミノクニ。此

の語の次に著者が説明してゐる様に、神が創造し給ひ、その神孫が萬世まで統治し給ふなど、一切が天神の御意志によつて成立し、又永久に存続する所の、絶對的神聖を保有する國土の意である。但し此の語は親房の創始したものではなく、本書以前にも屢々用ゐられた言葉である。○天祖 アマツミオヤ。高天原にまします皇祖の義。

古事記では天之御中主神を云ひ、日本書紀では國常立尊をさしてゐる。親房は後者に據つてゐる。○日神 ヒノカミ。天照大御神を申す。萬物生成の根源で、最も實在的な太陽を象徴した神である。○統を傳へ 統は神統又は皇統。萬世の統治者である天皇の御系統を長く傳へて、の意。○異朝 外國の朝廷。よその國家。○類なし 比較するものがない。同じ例がない。



通釋 大日本は神國である。天祖國常立尊が始めて國の基を開き給ひ、天照大御神が永遠にその御皇統をお傳へ遊ばされて、此の國の統治者となし給うた。之は我が日本の國にだけある事で、よその國にはかうした類例が無いのである。此の故に我が國を神國と呼ぶのである。

思想 神皇正統記の全精神は、最初の「大日本は神國なり」てふ一句に凝結してゐると見る事が出来る。又逆に、神皇正統記の全文は、此の冒頭の一句を説明したものであるといつてもいい。それ程此の句は簡潔で要を得たもので、著者の國體觀を最も端的に表現したばかりでなく、實に又我が國體の本質をも明確に示した卓説である。

抑、大和島根を一切神に關係せしめて考へる、といふ思想は、太古から傳統的に嚴存した事實であつて、古事記は既にそれを歴史的・文學的に表現したものである事は、改めて言ふまでもなからう。

又、神國といふ言葉も日本書紀以來屢々使はれてゐる。併し親房以前の神國に對する概念は極めて漠然たるもので、單に神明の擁護し給ふ國乃至は神のおはします國といふに過ぎなかつた。併しそれだけならば、我が國獨特のものとは言へない。こゝに於て親房は、神國の意義を説明するに、「天祖始めて基を開き、日神永く統を傳へ給ふ」といふ歴史的事實を以てした事は、實に劃期的な見解であるといはねばならぬ。即ち、此の「神國」の「神」は、通常の神でなく、皇祖神を指し奉つたと解すべきである。而も「我國のみ此事あり。異朝には其類なし」とて、我が國の特殊性を強調し、更に後段に

於て外國の實例を擧げてゐるのは、論證の正確を期したものに外ならない。尤も本書以前、虎關禪師の元亨釋書は、我が國體の自然に根ざし神命に基く事を述べ、萬國に比類なき所以を外國の例と比較して論證してゐるが、猶、親房の如く、神國の意義に就いて明確に説明したものである。

斯くて吾々は、「大日本は神國なり」といふ一句こそ、決して著者の獨善的斷案ではなく、歴史に對する深い全體的な認識と合理的な論證に立つて得られた結論である事を知るのである。

文獻

神皇正統記評釋(大町桂月)

神皇正統記述義(山田孝雄)

北畠親房(中村直勝)

### 九八 源義經を主材とせる文學的作物に就きて述べよ

源義經の事柄は、吾妻鏡・平家物語などに出てくるのであるが、之が室町時代に於ける義經記及び舞の本・謡曲などによつて愈々一般化せられ傳説化せられて、民衆の中に所謂判官最負を生ずるに至つたのである。華々しい英雄の末路の悲惨、そこに同情を寄せる大衆の感情は、義經ならざる他の傳説をも義經に附加するに躊躇しない。そして此の傾向は今日なほ「成吉思汗は源義經なり」とか然らずとかゞ問題にされる程なのである。就中義經と辨慶との關係にあつては、五條橋、安宅の勸進帳をその尤なるものとし、義經と靜にあつては吉野の別れ、鶴岡社前の靜の舞が人口に膾炙してゐる。その他幼時の鞍馬山修行、熊坂退治、中年の美男子としての種々な戀物語、長じての八艘飛び、没落後

の蝦夷渡りなどが最も親しまれてゐる傳説であらう。

これ程に義經は有名な傳說的英雄となりおほせたのであるが、併し彼を題材とする文學的作品としては、大して立派なものはないのである。義經記と謡曲の安宅と、歌舞伎の勸進帳とを除けば、あとは量の多さを——従つていかに義經自身の民心へのひびきの大きかつたかを、誇るに過ぎないものである。次にそれらの作品の一端を記さう。

舞の本——笛卷、鞍馬出、烏帽子折、腰越、靜、笈さがし、八島、高館、その他十數番。

謡曲——鞍馬天狗、熊坂、湛海、橋辨慶、八島、忠信、外十數番。

お伽草子——鬼一法眼、辨慶物語、秀衡入、外數篇。

淨瑠璃——淨瑠璃十二段草子(小野)、癡靜胎内拵(お通)、源氏烏帽子折、義經將基經(以上)、御所櫻堀川夜

討、鬼一法眼三略卷(以上)、義經千本櫻(竹田)等。

假名草子——判官都話、十二段草子。

浮世草子——殊(殊)に八文字屋本、義經風流鑑、義經倭軍談、鬼一法眼三略の卷、等。

此外、江戸時代には數多く、義經を取扱つた戯作が出てゐる。

ともあれ、我々は義經傳説を中心とする作物にあつては、その文藝的價値を云々するよりも、もつと別の立場から之を眺むべきであると思ふ。そこには民衆のもつ理想・嗜好・想像力といふものが、時

代により社會により讀者層によつて如何に移動し、又如何に反映してゐるか、といふ點に存する。

文獻 義經傳説の淵源としての義經記(島津久基 國語と國文學軍記物語號) 義經記と義經傳説の展開

(島津久基 日本文學聯講中世篇) 義經傳説と文學(島津久基)

### 九九 義經記と曾我物語とを比較評論せよ

義經記と曾我物語とは、共に室町時代に出た軍記物の一種である。而も此の兩作品ともに他の軍記物とは趣を異にして、集團的な大きい事件を取扱つたものでなく、義經とか曾我兄弟とかいふ一二の主人公を中心とした傳記小説・歴史小説ともいふべき特殊な存在である。従つて、普通考へられる平家物語・太平記といふ様な軍記物を正系のものとすれば、義經記・曾我物語は共に軍記物語の傍系的なものといふべきである。

それにも拘らず、此の兩作品は幾十百の義經最負としての判官物、仇討傳説としての曾我物と直接間接に深い關係をもち、室町・江戸の時代を通じて最も廣く一般社會に行き亘つた民衆傳説の主人公となつた人物を描いてゐるといふ事に於て、その文學的價值を別として特に注目に値するものである。而して此の二つの作品の主人公は、正しく時代人の理想的武人としてあらはれてゐるといふ事も忘るべからざる點であらう。

右の如く、此の二つの作品は相互に似通うた所をもつてゐるのであるが、若し兩作品の異なる點を擧げるならば、

**第一に**、義經記はその組織に於て、卷四の前半迄を義經の幼少年時代とし、卷四の腰越の申狀の事以下はその失意時代を叙したもので、中間の全盛時代を省略してゐるといふ事である。之は平家物語や源平盛衰記の方にその全盛時代の描寫を讓つて、故意に省略したのであらうけれど、それが爲に此の義經記は失意の英雄に同情するといふ中心主題が却つてよく生かされてゐると考へられるのである。のみならず、義經記は曾我物語に比して傍路にそれる挿話が少く、故事來歴の引用並列が殆どなく、全體としての統一がよくとれてゐる。之に比して曾我物語は仇討を主題としつゝも、なほ且つ卷十一・卷十二の如きは虎と少將といふ附隨的人物のみを描きたるが如き、或は又隨所に傍路へそれて斑足王の事とか王昭君の事とか、筋の上に獨立無援の挿話を煩はしい程に附加した爲に全體に統一が薄らぎ、求心的な力が缺乏してゐるといへる。

**第二に**、義經記は或る點に於て英雄としての義經といふよりは美目秀麗の美少年であり、又悲境時代には辨慶といふ後見役を引き立たせる爲のワキ役の如きものとなり、又彼をめぐる女性との關係に於ても、その何れの場合にも武人的剛強さよりは、寧ろ貴族的な抒情的な點に中心が置かれてゐるかに見えるのであるが、曾我物語に於ては、彼等兄弟の戀の相手たる女性も、勿論當人達も強い男性と

して描かれてゐる。それでゐて、後の仇討の様子に苦心慘愴して最後の目的を達するといふ様な意志的な所が、戀愛事件によつてすつかりぼかされてゐるといふ所など、そこには江戸時代の武士道觀との相違をみせてゐるのが明らかに看取されるのである。

第三に、義經記に含まれた思想は、儒教的な仁義五常の方が佛教的な思想よりは多いのに比して、會我物語は臭味を感じる程に佛教思想が露骨に出てゐるといふ事が出来る。

文獻 會我物語と義經記(佐成謙太郎 國語と國文學軍記物語號) 仇討文學としての會我物語(山岸徳平

日本文學聯講中世篇) 會我傳説と國文學(國語と國文學 昭和八年四月特輯號)

## 100 お伽草子の性質を説明せよ

江戸時代の初頃、大坂の書肆澁川清右衛門が、從來世に行はれてゐた奈良繪本の中から人氣のありさうなもの二十三種を揃へて、形式も奈良繪本に模して刊行し、一纏めの箱入として之を御伽草子とか御伽文庫とか稱して賣り出した。二十三篇といふのは

文正さうし、はちかつき、小町草昏、御曹子しま渡、からいとさうし、こわたきつね、なまこ、さ草紙、さる源氏艸紙、ものくさ太郎、さゝれいし、蛤の艸紙、こあつもり、二十四孝、ほんてん國、のせさるさうし、ねこのさうし、濱出草紙、いつみしきふ、一寸法師、さかき、浦島太郎、よこ笛草昏、しゆてん童子。

である。明治二十四年に畠山健・今泉定助二氏が、文正さうし以下二十三篇を翻刻されて、御伽草子と題せられ、同三十四年に萩野由之博士は福富草子以下二十種を集めて新編御伽草子として刊行された。その後平出鏗二郎氏が室町時代小説集を、ついで島津久基氏が近古小説新纂を出され、笹野堅氏が室町時代短篇集を出されたので、以上の諸書によつて室町時代の小説の大部分は便利に手にすることが出来るやうになつた。所で、お伽草子といふ名稱ほどの程度の作品に冠せしむべきかといふことになれば、諸家に色々の意見があるやうで、必ずしも一定してゐない。或は男色物を除外する人もあるし、中には最も狭義に、二十三種のみ限定しようとする人もある。或は極めて廣く近古小説全體をこゝに含めて、舞の本や淨瑠璃なども一緒に取扱つてゐる人もある。尤も濱出草紙は二十三編中にも既に存在し、幸若の方にもあるし、十二段草子や梵天國の淨瑠璃は御伽草子を借用してゐるのであるから、一概に嚴密な區別が立てられないのも當然のことゝ思ふ。

従つてこゝでは舞の本・淨瑠璃といふ風に、別の名稱のもとに從來區別されて來たものを除いて、その他の全ての近古小説を一應御伽草子といふ中に含めて考へることにしたい。従つてその種類には次の様なものがある。

- 一、稚兒物(鳥部山物語・秋の夜の長物語 など)
- 二、遁世物(三人法師・朽木櫻 など)
- 三、糺子物(鉢かづき・美人くらべ など)
- 四、祝儀物(文正草子・物くき太郎)

五、復讐物(あきみち・はもち中將)

六、戀愛物(横笛草子・今宵少將)

七、異類物(精進魚類物語・鴉鷲物語)

八、孝行物(なゝくさ草紙・二十四孝)

九、英雄物(御曹子島渡り・天若彦)

一〇、法談物(さゞれ石・寶滿長者)

二、本地物(熊野の本地・毘沙門の本地)

三、物争ひ(四十二の物あらそひ・十番の物あらそひ)

三、其の他(酒頭童子・辨慶物語)

以上によつて、或は説話集より採り、或は軍記物より、或は平安朝風の物語より、或は縁起類繪巻物どより、それ／＼材料をとつて來、或は之を焼き直したものと云ふことがわからう。或は又、時代の風潮から生じたものも此の中には存在する。

此等のうち一の稚兒物は、或は僧侶の社會に行はれ、且つ讀まれたものらしく、二や三は擬古物語風の題材であるといへる。従つて嚴密にいへば御伽草子の中へ含ましめない方がよいと思はれる。

何れにしろ、御伽草子は右の様に内容も種々雑多であるが、趣向も文章も共に幼稚で、作者の個性も、それ／＼の種類も一定の型にはまつて新機軸を出したものは無いのであるが、當時の民間に傳承された御伽話であつて、その價值は中世思潮の一部を傳へると共に、近世文化の胎芽となつた點にあるといはねばならぬ。

さてお伽草子の性質として重視すべき點は、



第一に、神佛の靈驗功德を讚歎した宗教的色彩が濃厚であること。従つてそこには本地物の流行を來たした所以もよく肯けるのである。

第二には、神佛の靈驗に結びついてそこに訓蒙的・説教的口吻が多いといふ事である。例へば一後日とても此の草子を見給うて親孝行に候はゞ、かくの如くに富み榮えて現當二世の願ひたちどころに叶ふべし(蛤草子)」といふ風な記述は到る所に見られる。等しく訓蒙教訓的といつても、江戸時代の假名草子には案外難解な熟語成句も多く、理窟つぼくて少年文學と呼ぶには不適當であるけれど、御伽草子は極めて通俗的で、時には童話的分子も多い。例へば、頭にのせてみた鉢の中から色々の寶物が出たり(鉢かづき)、蛤の中から美人が出たり(蛤草子)、或は話の結末がいつも無邪氣な「めでたし〜」で終つたりするのである。

従つて、御伽草子は、どこまでも童幼婦女子の娛樂的な讀物といふことがその主眼であつたといへる。元來、奈良繪本といふものが嫁入りの一つの道具であつたり、寝ころんで讀む娛樂的なものであつたし、靈驗譚の繪卷物なども目を娛けしめるものであつたやうであるから、もと〜さうした通俗的なところを狙つた御伽草子は、かうした「慰み」の中に蒙童的な教訓(それも極めて幼稚な)を附加へたものといへるのである。

要するに御伽草子は童幼の爲の啓蒙的・通俗的なるを目的とし、そこに儒佛思想の教訓を多く含め

てゐること。説話や物語・傳説などの童話化された短篇であること。それらの種類に於て類型的であり、表現も亦固定してそこに自由性がないこと。そこには佛敎的な要素が強制的にまで多いけれど、その間に又民衆の生活や考へ方がよく織り込まれてゐること。そして近世小説の動きを己にその胎内に宿してゐること。以上をもつてお伽草子の大觀として誤なからうと考へる。

## 文 献

お伽草子研究(佐成謙太郎 新潮社日本文學講座)

御伽・假名・舞の草子(島津久基 國語と國文學)

本質號)

御伽草子論考(島津久基 國語と國文學中世文學號)

御伽草子(藤井乙男 岩波講座日本文學)

## 101 藤原定家の文學史的地位に就きて記せ

定家の活躍は、三つの方面に別れてゐる。第一は、和歌作家として。第二は、歌の理論的方面即ち歌論家として。第三は、國文の古典の保存者として。

第一の定家は、彼自身としては最も身を入れて本質的活動を示した部分である。こゝで彼は父俊成の築いた歌壇の覇者としての地位を繼承し、その上に自己獨特の歌風を開いて行つた。作品は新古今・新勅撰等の撰集に載るほか、私家集として拾遺愚草・拾遺愚草員外がある。その歌風は、所謂新古今時代の代表的なものである。現實の現象を輕視し、現實以上の美に憧れる。それを表す爲にはその表現は複雑に緻密に組立てられ、其處に現實と全く異つた美の世界を建築してしまふといふ形式をと

る。故に出来上つた結果は、所謂「藝術の爲の藝術」「美の藝術」となる。かういふ諸傾向は、ひとり彼だけでなく、新古今時代通有のものであるが、彼はその代表者として、自らも自覺し、他からも推獎される程の高さにあつたのである。

次に歌論家としての彼は、近代秀歌・詠歌大概、毎月抄等の著作に明瞭に窺はれる。彼の歌に對する抱負や信念、どういふ種類の作品を理想とするかといつた點が、はつきり表れてゐる。

彼の立場は根本に於て、古今集序文以來の、心を中心とする立場である。彼は、毎月抄の中で歌の姿に十體のある事を説く。即ち(1)幽玄様。(2)事可然様。(3)麗様。(4)有心體。(5)長高様。(6)見様。(7)面白様。(8)有二節様。(9)濃様。(10)拉鬼體。がこれである。之は奈良朝以來の十體區分法になつたもので、その分類標目に新しきがあるとはいへ、全體としての獨創味には乏しい。然に彼に於ては、十體の中の有心體だけは、他と同列でなく、他の上に立つ高次的範疇であつた點に新しきがあり、つまり、他と並べては同列に取扱はれ、之を本質的に掘下げて行けば、歌の根本處に達し得るものが、即ち彼の有心である(三四頁 參照)。之によつて、俊成が、幽玄を理想としたのに對して新理論を樹立したものとといへる。斯く、定家は心を中心とするが、作歌の實際に當つては、「言葉は古きをしたひ、心は新しきを求め」る事を理想とした。此の「心」は、一首の素材又は内容であるが、新材古形をよろしとするのである。

又彼は、歌の歴史的評價に於て、平安朝の初期の歌を理想としてゐる。所謂「寛平以前の歌にならば、をのづからよろしき事もなかなかからざらむ」と説いてゐる。その反面、萬葉集は寧ろ一般の人には害があり、高い程度に到りついて始めて見るものとしてゐるのは興味が深い。

最後に、古典の保存者としての位置は、一つは、貫之自筆の土佐日記を書寫した場合の如く、いゝ古寫本に見當るや自發的に之を筆寫して置いた爲である。同時に又、人から依頼されて受動的に報酬を得たりして書いてもゐる。古今集を幾度も寫した如きは即ち此の例である(頁參照)。斯くて内外兩面の理由から、彼は極めて多くの古典の善本を筆寫したらしい。今日彼の筆寫本によつて始めて永年の疑問や誤謬が氷解したものが極めて多い。土佐日記・更級日記・金槐集等はその代表的なものである。その他に三代集・伊勢物語・源氏物語等があり、此等のなかには彼の書寫本が流布本となつた程に行はれたものがある。

従つて、彼に對する後世の尊敬は極めて著しかつた。遂に室町時代の正徹の如き「そもく歌道において定家を難ぜん輩は、冥加もあるべからず、罰を蒙るべきことなり」とまで唱へ、之が一般の風潮となつてゐた。所謂「定家假名遣」や百人一首が、彼一人の手によつて、創案、完成されたかの様に傳へられる如きも、此の尊敬に基くのである。而して特に、彼の子孫は徳川時代初まで歌壇の代表者として君臨したのである。併し、やがて歌壇に反中世的傾向が興り、現實的・寫實的歌風が唱へら

れ、萬葉集が尊重される如き形勢が築かれ、彼への認識が變化して、價値は俄に低く見られて現在に至つてゐる。

文獻 日本歌學史(佐佐木信綱) 藤原定家(谷 鼎 岩波講座日本文學) 新古今時代(風卷景次郎)

日本文學評論史(久松潜一)

### 103 和歌と連歌との關係に就いて述へよ

連歌の起原に就いては諸説があるが、萬葉卷第八秋相聞の歌に、或る尼が「佐保河の水せきあげて植ゑし田を」と作り、家持にその後を求めたから、「刈る早飯は獨りなるべし」と答へたといふのが、確實な起原である。尤も、中世に連歌の起原を神秘化しようとして各種の説を唱へた。例へば、伊邪那岐・伊邪那美の男女神の「あなにやし愛をとめを」「あなにやし愛をとこを」といふ唱和から始まつたとする説、又、日本武尊が、東征の歸途、酒折の宮で「にひはり筑波をすぎて幾夜か寝つる」と歌はれた所、側の御火燒の翁が「日日並べて夜には九夜日には十日を」とお答へしたのを起原と見る説の如きであつて、何れも甚だ著名である。併し、二神の唱和は未だ歌と稱すべきものでなく、日本武尊のは、夫々獨立した歌であつて、連歌とは異なる。故に、連歌の起原は萬葉に始まる。

斯く萬葉集の尼と家持との唱和が現存の最古の例だとすれば、連歌は和歌にその起原を發するもの

で、和歌の初三句を甲の人が、下二句を乙の人が作る事に始まつた、と分る。

平安朝に入るや、此の二人で唱和する連歌は次第に盛となり、遂に金葉集では「連歌部」といふ一部が立てられた。これで見ても、連歌が和歌の一種と見られてゐたことが確かである。その作者達も當時の歌人であつて、夫等の人々が遊戯的な氣持で弄んでゐたのである。

然るに、平安朝の末期から、三句以上の連歌、即ち鎖連歌が世に流行した。さうして三人以上の作者によつて、數十句・數百句の長連歌が鎌倉の初期に現れた。かうなると、連歌は獨特の内容と文學美とを持つに至り、遂に和歌から獨立した。

而して、その作者達も鎌倉中期以後は、從來の餘技的に作つた歌人達と別に獨立の連歌作者を生じた。而して、鎌倉末期から連歌の中に、「有心の連歌」「無心の連歌」の二種、即ち眞面目な内容のもの、滑稽的内容のものとの別が生じた。前者の作者を柿本衆、後者を栗本衆と稱した。而して前者は努めて和歌の氣分や、和歌の法則によらんことを努めて、室町時代に入つた。之は、連歌が猶和歌に影響され、寧ろその下にあることを喜んだものと言ひ得る。

同じ事柄は、別にも見える。連歌の最初の集なる菟玖波集(卷二)は、二條良基と救濟とによつて編まれたが、之は勅撰和歌集に准ずべき由の勅を賜つた。之も連歌に比しての和歌尊重の一例證である。

併し、實質に於ては、鎌倉中期以後、和歌は漸次衰微し、吉野朝以後は寧ろ連歌の方が優勢となつ

た。かくて室町時代に入るや、連歌は漸く和歌を壓迫するに至つた。その連歌から室町中期に俳諧が出た。江戸時代に入るや、連歌は却つて衰へ、和歌と俳諧とが並んで江戸時代の代表的韻文詩形となつたのである。

文 献 日本詩歌の體系(見山信一) 新講和歌史(同上) 和歌連歌叢考(福井久藏) 連歌の史的研究

(同上) 連歌と時代(志田義秀) 日本文學聯講中世篇) 連歌概説(山田孝雄)

### 103 南北朝時代の和歌に就いて述べよ

「南北朝」といふ言葉は、宜しくないと思ふが、こゝに使はれてゐるからそのまゝ用ゐる事として、之に相當する期間は、元弘元年(皇統一九九一年)光嚴天皇の即位から、元中九年閏十月(北朝の明德三年、皇統二〇五二年)對立が終るまでの六十二年間である。此の間の歌壇の狀勢は、次頁の「歌壇總表」に表示する通りであるが、此の六十二年間を、假に(一)風雅集中心時代。(二)新千載・新拾遺時代。(三)南北朝歌人對立時代と三分して見る。

(一)風雅集時代 後醍醐天皇の元弘二年(一九三二年)花園天皇宸記が出来た。此の書に於て、花園院は、京極爲兼の薄運を憐れまれて、その仇敵二條爲世の爲に惡名を着せられたのを辯護して居られる。之は天皇の御在位中、二條派と京極派とは激しく争ひ、京極派の天皇は、玉葉集勅撰の勅を爲兼に下し

南北朝歌壇總表(作者名の下の括弧は享年を示す)

御代	年號	皇紀	勅撰集	私家集その他	歌論・歌學	作者
〔南朝〕〔北朝〕	〔南朝〕〔北朝〕	〔南朝〕〔北朝〕				
後醍醐 光嚴	元弘二 正慶元	一九九二			花圓天皇宸記	京極爲兼歿(七九)
後醍醐 光明	延元二 無し	一九九七			勅撰作者部類	花山院帥賢歿(三二)
後醍醐 同	延元三 曆應元	一九九八				二條爲世歿(八九)
後村上 同	興國三 康永元	二〇〇一				永福門院薨(七二)
後村上 同	正平元 貞和二	二〇〇六	17 風雅和歌集 (花園院)			兼好寂(六九)
後村上 崇光	正平五 觀應元	二〇一〇		藤葉和歌集 (藤原實教)		淨辨寂
後村上 同	正平六 同二	二〇一一				洞院公賢歿(七〇)
後村上 後光嚴	正平二 延文元	二〇一六	18 新千載和歌集 (藤原爲定)			二條爲定歿(七三)
後村上 同	正平四 同四	二〇一九				二條爲明歿(七〇)
後村上 同	正平五 同五	二〇二〇			愚問賢註 (二條良基・頼阿)	花山院家賢歿(三七)
後村上 同	正平六 貞治二	二〇二三				慶運(正平末期頃歿、七十歳前後)
後村上 同	正平九 同三	二〇二四	19 新拾遺和歌集 (藤原爲明死亡の爲、頼阿完成)			
後村上 同	正平二 同五	二〇二六		宗良親王百首		
後村上 同	正平三 同六	二〇二七		新玉津島歌合		



長慶 同 後圓融	正平 同 應安 二 三〇二九		安撰和歌集(興雅)		頓阿寂(八四)
長慶 同 文 中元	同 五 三〇三三		南朝五百番歌合		
長慶 同 天授元	永和元 三〇三五		長慶院御百首		
長慶 同 天授二	同 二 三〇三六		南朝内裏千首		
長慶 同 天授三	同 三 三〇三七				
長慶 同 弘和元	永徳元 三〇四一	准勅撰 新葉和歌集 (宗良親王)			二條爲遠歿(五〇)
長慶 後小松 弘和三	同 三 三〇四三	20 新後拾遺和歌集 (委實(藤原爲重) 新後拾遺和歌集 〔御返納〕			宗良親王薨(七三) 藤原爲重歿
後龜山 同 元中元	至徳元 三〇四四				二條良基歿(六九)
後龜山 同 元中二	同 二 三〇四五				
後龜山 同 元中五	嘉慶二 三〇四八				

著作年代未詳

續現葉和歌集  
(後醍醐帝の御代)  
臨永和歌集(同右)  
梨花集(弘和元―元中  
六年の間、宗良親王)  
花園院御集  
草庵集・續草庵集  
(頓阿)  
兼好法師家集

井蛙抄(頓阿)  
水蛙眼目(頓阿)

給うたのを、二條派では口を極めて非難した。その抗争の名残である。

此の憤懣は、花園院が貞和二年編纂された風雅和歌集二十卷(二十一代集の十七番目)にも見える。此の集では巻頭

に爲兼の作を置き、集中の作者で歌數の多いのは専ら京極派である。永福門院七一首。伏見院六八首。爲兼五二首。花園院四九首である。従つて、二條派が此の集に惡口を放つたのは當然で、未來記の如き僞書まで作つて嘲罵した。併し今日から見れば、玉葉・風雅の二集は、中世和歌としては感覺が鋭敏で、個性に富む作が少くなく、特に對自然の作・叙景の作に佳首が在る。新古今以後の歌集では最も藝術價值高き集と稱すべきである。

此の期の勅撰以外の歌集として藤葉和歌集があり、又古今集から續後拾遺に至る作者の歌數・傳記を記した勅撰作者部類(元盛の著)の如き特色ある述作がある。

(二) **新千載・新拾遺時代** 次いで、北朝の後光嚴天皇の御代に入つて、新千載と新拾遺とが編まれた。共に二十卷である。

元來、皇室と和歌の家との關係に於て、大覺寺統(後の南朝) ||| 二條家。持明院統(後の北朝) ||| 京極家。といふ對立が、鎌倉末期以來存在した。然るに、二條爲世・爲定は舊縁を捨て、北朝に仕へた。故に以後、南北朝の歌壇は共に二條派的色彩で覆はれて、他の歌派は一時閉息した。

新千載は延文元年、尊氏の奏請によつて、爲定に勅撰の命が下り、同四年奏覽した。之は風雅集とは眞反對に二條派全盛で爲世四二首、爲定三六首、伏見院二七首、爲氏二五首の如くである。内容の特色は殆ど無く、溫順な氣分と類型的な表現の作二三四首を集めただけである。

新拾遺は、足利義詮の奏請により、貞治二年爲明に勅命されたが、翌年爲明病歿し、頼阿が之を完成した。歌數一九二〇首、内容的價值は新千載と共に殆ど言ふに足りない。

この時代に、兼好・淨辨・慶運の三者、頼阿と共に四天王と稱された。兼好には「兼好法師家集」がある。今日からは三人とも當時の歌壇で達者な歌よみといふだけで、獨特の價值の如きは見出し難い。

(三) 南北朝歌人對立時代 以上は寧ろ前時代の歌人が此の期まで残つて最後の活躍を示したものと見られる。眞・南北朝時代はその後に來た。即ち、北朝に頼阿・良基があり、反對に南朝には、長慶天皇・宗良親王、南朝の忠臣花山院家賢・長親(法名 緜雲)の如きがある。

頼阿は爲世に師事し、良基と親交あり、上下の尊信を集めた。西行を慕ひ、德行厚く、歌風は二條派の平明溫雅な風趣をよく表し、二條派中興の祖と稱される。併し、平滑に過ぎて内に蓄へるものに乏しい。勅撰集に入るほか、歌集に「草庵集」「續草庵集」「頼阿詠五十首和歌」「頼阿法師詠」等があり、歌學書に「井蛙抄」「水蛙眼目」「愚問賢註(良基問ひ、頼阿答ふの形の共著)」がある。此の中、「草庵集」は後世甚だ尊崇されて註釋書が多い。

次に良基は關白左大臣是平の子。政治的には初、後醍醐帝に仕へ、轉じて北朝の光明・崇光・光嚴・後圓融の四代に奉仕し、關白太政大臣に上り、北朝の政治的中心をなした。而して文學的には、連歌作者として五十餘萬句を残し、「菟玖波集」「知連抄」その他を著し、連歌は彼によつて一大躍進を遂

げた。同時に歌人としては頼阿と共に北朝歌壇を代表し、歌學書として、上記の「愚問賢註」及び、彼一人の「近來風體抄」がある。その歌風は、今日から見れば二條派の平明な歌風を保つのみで、獨特の個性の如きは殆ど窺ひ難い。

轉じて、南朝の作者は、前期の歌人として、後醍醐帝・後村上帝・花山院師賢(家賢の父)があるが、此の期に長慶天皇・宗良親王がある。長慶天皇は、源氏物語の研究者として、「仙源抄」の名著があるが、歌人として宗良親王と共に南朝の中心を形づくられ、所謂、南朝五百番歌合を行はせられ、御歌は准勅撰集新葉集に入るほか、長慶院御千首(田舎今)があつた。

次に宗良親王は後醍醐帝の第八皇子。若年、南朝の爲に劍をとつて、各地に奮戦あそばされたが、歌人としても注目すべきで、家集に梨花集があり、その南朝の人々のみの詠作を親王が集められた新葉集は、後龜山天皇から准勅撰の勅があつた。

總じて、新葉集始め、南朝の歌人の作には、その悲運の中に生きた實生活が色濃く出て居り、其處に北朝派の歌人が、文學の爲の文學(それも事實は文學價値の少いもの)に遊んでゐたのとは大きな相違がある。共に、根本としては二條派の格調であるが、内容の相違があり、こゝに見える悲痛な内容は、我が全和歌史中の類稀(たぐひ)なる異色である。

文 献 日本歌學史(佐佐木信綱)

國書解題(佐村八郎)

大日本歌書綜覽(福井久藏)

新講和歌史(兒)

一〇四 能樂の藝術としての性質に就いて述べよ

世阿彌は或る意味で能の寫實的意味を徹底せしめた。その寫實主義なるものは外形に於てなく、心に於てその者になるといふことであつた。心を中心にして外形を無視するかに見える能は、そこに能樂としての一元主義が確立されてくる所以であつて、此の點が普通の戲曲とも違ひ、又歌謡とも異なる特色をもつてゐるのである。能は美ならば美といふ單一の理念を表現するもので、戲曲の様に二つ以上の理念の對立を原則とするものではない。それは寧ろ例外なのである。従つて、能の主役はシテ一人であつて、ワキは單に誘導の役目を果たすに過ぎないものである。演能の頂點たる舞になると、結局シテの一人舞臺になることを以ても領かれる。

能樂はもとゞ謡物の發達したものとといふ印象を起させるもので、その對話の處も節のついてゐない所でさへ、散文といふよりはやはり一種の吟詠の心持で續いてゐるものである。一曲の全部が謡物であつて、その謡ふリズムの中に或る情景が浮び出されて主役を生かせる、そして夢幻的な雰圍氣にまで觀衆を引き込む、といふ所に、その特色があるといへる。

能は一番の中にも序破急がある如く、此の序破急の原理の適用が、やがて演能に五番立が標準とさ

れてくるのである。大體に於て脇能は神が舞うて祝福を與へ、そこで神のいはれを語るもの、そこに神韻縹渺として雄大崇高な美に浸らせるものである。二番物は脇能たる神事物を受繼いで、三番目の鬘物へ連続させるものなるが故に、武人の修羅物であつても、平清經とか忠度とかいふ風な幽玄の情趣を添へた公達を主とする。第三の鬘物は幽玄な抒情詩的なもので、女が主人公であつて、舞を中心とするものである。四番物は前の鬘物の幽玄の名残をにほはせつゝ、切能の戲曲的傾向も現れ始める。狂女物や樂物、或は夜討會我や安宅の様な切組物がこゝに含まれる。最後の切能は海人の様な早舞物或は天狗物・妖怪物の荒々しい働をするものといふことになる。

能樂は爲手と囃方と地方との三つから成り立つてゐる。時には之に狂言方が加はる。囃子方は笛と大鼓・小鼓であるが、之は或る意味で謡曲の音取役(笛)をも勤めれば、舞や謡の拍子にもなれば、空間のつなぎ役をもする。地方は地謡を謡ふものであるが、此の存在は歌舞伎とも異なるもので、一種特別な存在である。爲手(役者)は主人公シテと添役なるワキとを中心とし、それに子方やツレが加はる事もあるが、之とて前に述べた様にシテ一人が主であつて、ワキは僅かにシテを引出す役割をするに止まり、シテの活動する間は單なる見物人の一人たるに過ぎない。前にも述べた様に、能樂はシテ一人によつて統括されるもので、他の全ての要素は結局シテを生かして演能全能を所期の雰圍氣に導き入れる役割をなすに止まる。

能の種類は之を別けて單式能と複式能とする。前者は中入のない一幕物であり、後者は中入があつて、シテが前後二役（例へば前シテに於て漁翁であつたものが、後シテでは義經の亡靈となつて現れるといふ風に、を演ずるものをいふ。

世阿彌は「物真似」といふ事を述べてゐる。之が能に於ける所謂寫實であるが、それはどこまでも外形を似せるといふよりは、老・女・軍體何れにも心の中でそれになりきる事を主眼とし、形の上には寧ろ暗示的に出て來るのである。

世阿彌は又「幽玄」といふことを云つてゐる。即ち「幽玄の風體のこと、諸道諸事に於て、幽玄なるをもつて上果とせり。殊更當藝に於て幽玄の風體第一とせり」と論じた。幽玄は音曲・聲・かゝり・風體・舞總てに通ずる基本精神であつて、能樂の藝術美は此の幽玄といふ點にある。世阿彌は此の幽玄を、時には花やかに珍しい所のあるのをさし、時には冷えた能といふ様な事も云つてゐる。

要するに能樂はそれ以前の田樂其の他あらゆる雜藝を取入れ、更に神樂・舞樂までも取入れて猿樂能を大成したものであつて、その一番の中心は舞にある。同時に之は武家の中にその支持者を得てゐた關係もあらうが、とも角嚴肅な貴族味を帯びた、過去の傳統を生かして新しい様式を作り上げた一種の舞劇だといへるであらう。

## 文獻

校註世阿彌十六部集(野々村戒三)

謡曲大觀首卷(佐成謙太郎)

謡曲(佐成謙太郎 岩波講座日

本文學) 能の舞臺的特質(野上豊一郎 岩波講座日本文學) 能樂の藝術的性質(佐成謙太郎 日本文學

聯講中世篇) 能—研究と發見(野上豊一郎)

105 謡曲を其の資料によりて分類せよ

謡曲は演能の類別に従つて之を神事物(高砂)・修羅物(田村)・鼈物(八島)・現在物(安宅)・鬼畜物(大江山)と分けることも可能であり、又説話傳説形態に従つて靈驗説話(老松・蟻道)・文藝説話(雲林院・東北)・武人傳説(度・鹿渡)・世話巷説(高野物狂)・異類説話(羽衣・一角仙人・車)・支那傳説(頭羽)といふ分け方も可能であるが、若し「資料」といふことを「出典」といふ所に重點を置いて解釋するならば、謡曲の文章や素材が、それ以前の和歌・物語・軍記物語・縁起物の類から、直接間接に引いた所の甚だ多いものたるに注意しなければなるまい。一例を挙げれば、

記紀の歌謡(逆矛・淡路・和布刈) 萬葉集(三山・船橋) 古今集(高砂・難波)

後撰集(檜垣) 拾遺集(芦刈・安達原) 貫之集(蟻通)

遍照集(墨染櫻) 山家集(西行櫻) 伊勢物語(杜若・井筒)

和物語(采女・姨捨) 源氏物語(夕顔・半部・葵上・野宮) 今昔物語(國栖)

古今著聞集(春日・龍神・養老) 撰集抄(雨月・江口・松山天狗) 袖中抄(木賊・錦木)



唐 物語(西王母・東方朔) 平家物語(蟬丸・八島・正尊・祇王・小督) 平治物語(朝長)

太平 記(楠露・檀風) 曾我物語(小袖曾我・夜討曾我) 義經 記(鞍馬天狗・熊坂・橋辨慶)

社寺縁起(賀茂・大社・誓願寺) 支那傳説(長恨歌の楊貴妃、史記の張良)

などがあり、其の他世話巷説の中に題材をとつたものには、弱法師・百萬・放下僧・隅田川などがある。

但し此等の出典も部分的に和歌のみを採つたものもあれば、脚色構想の大體までを先行文學の中に仰いだものもあつて、之を一々全曲に亘つて記載し盡す事は煩雜である。よつて此の問題に對しては大體左の様な分類を試みる事を最も妥當であらうと考へる。

- (1) 詞章中に和歌・歌謡を引用せるもの(殆ど大(部分))。
- (2) 物語によつて脚色を施せるもの。
- (3) 説話集によつて脚色を施せるもの。
- (4) 軍記物語によつて脚色せるもの。
- (5) 其の他の典籍によつて脚色せるもの。
- (6) 口碑・傳説等によれるもの。

文 献 謠曲大觀(佐成謙太郎)

## 103 謠曲の神道的要素に就いて述べよ

謠曲に現れた神道思想は、要するに神佛習合の思想に外ならぬ。例へば、

抑これは、富士山に住んで代をまもる、日の御子とは我が事なり。和光同塵現はれて、く、結縁の衆生擁護

の恵み、實に有り難や頼もしや。(富士山)

されば御嶽は金剛界の曼荼羅、華藏世界、熊野は胎藏界、密嚴淨土有り難や。(卷 絹)

といふ風な本地垂迹思想は到る所に見えてゐるのみならず、神といふ觀念も極めて低調なるもので、神佛・自然現象・異國神など何れも明確な區別なく取扱はれてゐるといへる。

純粹に神徳を讚美する「賀茂」の如きにあつてさへ、

我はこれ王城を守る君臣の神、別雷の神なり。或は諸天善神となつて、虛空に飛行し、又は國土を垂跡の方便、和光同塵結縁の姿、あら有り難の御事やな。

とあつて、本地垂迹思想は、鳴神をまでやはり神と認める古代信仰をそのままに受入れてゐる。そこには謡曲作者の獨創とか個人的解釋とかは存在しないで、たゞ從來の思想信仰をそのまま取入れてゐるとみるべきであらう。而してかうした神祇觀は「蟻通」以下の藝道と神との關係にあつても、依然として和歌と神の靈驗といふ歌徳譚をそのまま取入れてゐるといふ以外には、別に記すべき特殊のものはない。

謡曲に於て特に注意せらるべきものは、日本國に對する「神國」といふ信仰、及びそれが天皇と結びつき、且つ國家の平安といふことに結びついて離れないといふ一事、これであると思ふ。

土も木も、わが大君の國なれば、いづくか鬼のやどりなる……汝王地に住みながら、君を惱ますその天罰の、

(土蜘蛛Ⅱ土車にも)

の如きはその現れ乍ら、「白樂天」に於て唐船を追ひ散らす所など、實に雄大な描寫である。即ち、

「山影の、映るか水の青き海の、」波の鼓の海青樂、「西の海、あなまき檣が原の波間より、「現れ出でし住吉の神、住吉の神住吉の、「現れ出でし住吉の」「住吉の神の力のあらんほどは、よも日本をば從へさせたまはじ。速かに浦の波、立ち歸り給へ樂天。

「住吉現じ給へば、く、伊勢石清水賀茂春日、鹿島三島諏訪熱田、安藝の嚴島の明神は、娑羯羅龍王の第三の姫宮にて、海上に浮んで、海青樂を舞ひ給へば、八大龍王は八りんの曲を奏し、空海に翔りつゝ、舞ひ遊ぶ小忌衣の手風神風に、吹きもどされて唐船は、こゝより漢土に歸りけり。げに有り難や神と君、實に有り難や神と君が代の、動かぬ國ぞ久しき、く。

かうした神國即ち大君の國の萬歳を壽ぐのは、祝言能や脇能に特に多く、外國説話をとつた鶴龜・東方朔・西王母なども、それが日本化された祝言の心持として描かれてゐるのである。

又「淡路」の如きは、その中に五行思想も和光同塵の思想も入り込んでゐるけれど、曲の中心は諸冊二神の國土生成神話を中心にして、「國富民も豊かに、萬歳をうたふ松の聲、千秋の秋津島治まる國ぞ久しき。く」といふ祝言を述べることに重點が存するのである。謡曲の詞章のみならず、神樂其の他の舞を取入れた能樂そのものにも、神道的要素を認める事が出来るので、金春禪竹なども明

かに猿樂の起原を神代に置かうとしてゐるのである。その當否は別として猿樂能乃至謡曲 中に含まれた神道的なるものは、常に太古の神代に發して、現在の君の御國の御榮をことほぐといふ精神によつて統一されてゐるとみてよからう。

文獻 前項に同じ

## 五 近世（江戸時代）

### 一〇七 江戸時代文學の特質を述べよ

江戸時代文學は通常前期と後期とに分つ、前期は所謂上方文學で、その作品の背景世界が主として京阪地方であり、他地方を描いたとしてもその作者の多くは京阪人なのである。後期は所謂江戸文學であり、前者と異なり江戸を背景とし、作者も亦江戸で生活せる者なのである。

であるから、江戸時代文學の特質も少しく詳細に涉らうとすれば、兩者に截然たる區別が生ずる。茲には兩者を分離せず江戸時代文學を一團とし、他の時代文學と比較してその特質を擧げて見よう。

一、江戸時代文學は貴族、地位高き武家を主題とせず、地位低き武士・町人を描寫せる文學と云ふことが出来る。武家階級も大名を描けるものは尠い。更に武家を描けるものも量に依つては遙に尠い。即ち町人階級を描けるものが最も多量なのは、その特質の一として擧げる事ができよう。從來の文學に於いて、庶民階級の現れて居るのは、萬葉集・今昔物語・宇治拾遺・古今著聞集・狂言、等實に數ふるに足るだけしか存しない。然るに江戸時代文學に於いて斯く多量なるは、此の階級の勃興であると共

に、太平の極此の階級までも文學を樂む餘裕が生じた故とも考へられる。俳諧・狂歌・川柳の如きは實に町人自身が作者なのである。

二、遊里を背景とせる文學の多量なる事である。即ち遊里文學・遊蕩文學などと稱せらるる主として町人の享樂世界を描いたものが多い事で、之に伴ふ悲劇なども主題として取扱はれてゐる。西鶴の好色物、近松の世話淨瑠璃、八文字屋本中の三味線本、下つては洒落本等皆これである。

三、町人描寫より量は尠いといつても、やはり多いのは武家描寫であり、その武家描寫に多いのは武士道の讚美、同等に復讐説話、更に御家騒動である。最後のものは武士の階級制度が完備して正嫡相續の順が定つて居るから、却つて起るものである。

四、義理人情の衝突を描いた悲劇の多い事である。義理は武士・町人共にあり、一種の不文律的道德観であるが、之を實行せんとする理性と、奔放ならんとする人間慾・愛慾より生ずる人情との衝突が多く題材となり、近松世話悲劇に之と遊里描寫とが結びついて居る事は人の知る所であらう。

五、町人の經濟生活の描寫が、作品の對象となつてゐる事である。中には何等の詩味を含まざる作品もあるに拘らず、西鶴の町人物以下此の種の作品の頻出せしを見れば、如何に町人間に斯かる作品が喜ばれたか推測し得る。將來は知らず、今日迄斯かる題材の作品は他の時代に發見し易からざるものである。

六、西鶴・近松其の他二三の作家のものを除き、人世を強く省察し、人間生活を深く掘り下げて表現せんと試みた作品が乏しい。多くは常識的な教訓意識、淺薄な享樂主義、頓才的滑稽等に終始して居る。過去の平安朝文學中に存する都會趣味が宮中趣味・貴族趣味であるとするならば、江戸時代文學の都會趣味は町人趣味・市井趣味とでも言ふ可きであらう。その代りに此の時代の文學ほど、言語の遊戯の發達して居る時代はない。之は單に作品中、机上の洒落諧謔に止まるものではなく、都會人のもつ一種の享樂で、實生活中に多く存し、それが文學に反映して居るのである。

尙、詳細に挙げれば特質として挙げ得るものはあらうが、先づ主要なものは以上の如くであらう。

文 獻 近世國文學史(佐々政一) 江戸文學叢說(藤井乙男) 日本文學聯誼近世上下(藤村 作) 上方

文學と江戸文學(同上) 近世文學序說(同上) 近世文藝志(笹川種郎) 爛熟期・廢期の江戸文學(高

須芳次郎) 江戸文學研究(山口 剛) 近世文藝史研究(森 銑三) 俳諧史の研究(須原退藏)

## 一〇八 徳川時代に於ける小説の沿革を説き且重要なる

### 書籍と作者とを示せ

一、假名草子 徳川時代に於ける小説は先づ假名草子に始まつてゐる。室町時代の御伽草子の文脈を引き、平易な假名交り文であるから、此の名稱が起つた。大衆的な啓蒙教訓又興味本位の作品で、而

も内容は所謂徳川文學(江戸文學)の曙光時代であるから多様多種であるが、主なる作者とその作品を示せば次の如くであらう。

鈴木正三しろうさん 因果物語(寛文元年) 「二人比丘尼(寛文四年)

山岡元隣 誰が身の上(明暦三年) 「小さかづき(萬治年間)

浅井了意 伽婢子(寛文六年) 「浮世物語(寛寶九年) 「東海道名所記(萬治元年)

其の他作者不明の「恨之介」「薄雲物語」「竹齋」等が注目すべき作品であらう。

二、浮世草子 井原西鶴が「好色一代男(天和三年)」を發表して以來、此等の作品を浮世草子と稱し、安永頃まで上方を中心として行はれた。浮世は好色の意味であるが、轉じて市井の意味にも用ひられ、廣く當代の世相を描寫した作品をさす語で、文體は俳諧の影響を受け、更に俗語・口語をも混じ、より寫實的になつた。

井原西鶴 好色一代男(天和二年) 「好色一代女(貞享三年) 「好色五人女(同) 「日本永代藏(元祿元年)

「世間胸算用(元祿五年) 「武道傳來記(貞享四年) 「武家義理物語(元祿元年)

西澤一風 傾城武道櫻(寶永二年) 「後室色縮緬(享保三年)

錦 文流(から文) 棠(から文) 大門屋敷(寶永二年) 「熊谷女編笠(寶永三年)

北條團水 日本新永代藏(正徳三年) 「晝夜用心記(寶永四年)



江島屋其積（正徳）「世間子息氣質（享保）」「世間娘容氣（同五）」「浮世親仁形氣（同五）」

三、讀本 然るに、浮世草子の晩年は全く形式化に墮し、何等清新な描寫もなく、讀書界に倦きられて漸く衰微した。寶曆・明和頃に至り、之に代つて上方に勃興したのが讀本である。之は繪本に對し文を讀む本の義、而も内容は既に浮世草子時代より行はれた支那小説の翻譯の更に再び流行し始めたものであつて、而も多く直譯體を混じた和漢混淆文であり、漸次上方より江戸に中心が推移し、内容は多く怪異説話・復讐説話・英雄説話の錯綜せしものより成つてゐる。

近路行者（寛延）「英草紙（二年）」「繁々野話（三年）」

建部綾足（明和）「西山物語（五年）」「本朝水滸傳（十年）」

上田秋成（安永）「雨月物語（五年）」「春雨物語（本）」

山東京傳（文化）「櫻姫全傳曙草紙（二年）」「昔語稻妻表紙（三年）」「本朝醉菩提（六年）」「雙蝶記（十年）」

曲亭馬琴（文化）「三七全傳南柯夢（五年）」「椿説弓張月（七年）」「南總里見八犬傳（文化十一年）」「朝夷

巡島記（文化十一年）「近世説美少年錄（文化十四年）」

四、洒落本 讀本と相竝んで上方に萌芽を發し江戸で隆盛を來したものに洒落本がある。浮世草子の好色物の一轉換せしものと稱し得る。遊里の描寫であり、全體を寫實的な對話で筋を進めてゐる點に特色がある。

田螺金魚——「契情買虎之卷」(安永) 「妓者呼子鳥」(安永) 「傾城買指南所」(安永)

蓬萊山人歸橋——「婦美車紫廚」(安永) 「美地之蠟殼」(安永) 「龍虎問答」(上) 「遊婦里會談」(同九)

大田蜀山人——「甲驛新話」(安永) 「南客先生文集」(安永) 「深川新話」(安永) 「變通輕井茶話」(安永)

「世說新語茶」(上)

山東京傳——「通言總籙」(天明) 「古契三娼」(上) 「志羅川夜舟」(寛政) 「繁千話」(同二) 「錦の裏」(同三)

**五、滑稽本** 洒落本と同じ描寫法を用ひ、對話を主とし、江戸町人生活の滑稽方面のみを描寫したものに滑稽本がある。

式亭三馬——「浮世風呂」(文化六) 「浮世床」(文化八) 「四十八辯」(文化八) 「古今百馬鹿」(文化十)

十返舎一九——「道中膝栗毛」(享和二年) 「六阿彌陀詣」(文化十) 「堀の内詣」(文化十)

瀧亭鯉才——「花曆八笑人」(文政三) 「滑稽和合人」(文政六)

**六、黄表紙** 延享・寶曆頃より江戸に兒童用の繪本が行はれ、表紙により赤本・黒本と稱せられたが、安永四年戀川春町の「金々先生榮花夢」が出で洒落本的情調と洒落を入れ、大人用の繪本を提供した。之が黄表紙である。

戀川春町——「高慢齋行脚日記」(安永) 「無益委記」(同八)

明誠堂喜三三——「親敵討腹靴」(安永) 「文武二道萬石通」(天明)

七、合巻本 一方には讀本の内容を有し之を假名交りの文に和け、黄表紙の體裁を踏襲し、每丁繪を入れし小説に合巻本（草雙紙）がある。

柳亭種彦（一七八七—一八五七）「正本製（天保十二年）」（天保十二年）「邯鄲諸國物語（天保五年）」（天保五年）「修（にせむらひ）紫田（むらた）含源氏（天保十三年）」（天保十三年）

八、人情本 人情本は洒落本の戀愛描寫と、合巻本の傳奇的物語とを採り入れて生ぜしもので、江戸町人の戀愛生活を主題とせる作品である。

爲永春水（一八〇一—一八七〇）「春色梅曆（天保四年）」（天保四年）「春告鳥（天保八年）」（天保八年）

文獻 草雙紙と讀本の研究（水谷不倒） 江戸小説研究（尾崎久彌） 及び前項参照

## 一〇九 江戸時代文學の主なる文學精神に就いて述べよ

一、江戸時代文學中、主要なる地位を占むる浮世草子は、その創始者たる井原西鶴の文學精神を述べれば、ほぼその要を盡す事ができるのであらう。井原西鶴はその作品に於いて表現せんとしたものは人間の實生活であつた。人生の赤裸々な表現であつた。

明治の後期から日本に興起した自然主義の作品ほど、科學的な研究を意識的になしたものであるけれども、人生の偽なき現實を凝視し、之を描寫せんとした點に、一脉の相通する所あるを認められる。忌憚なき性慾生活、遊蕩享樂の世界、金錢のみを尊重する町人の經濟生活、そのために生ずる町人

の階級的意識、道徳義理のみに生きんとする武家生活、はては變態的な同性愛の讚美等々、皆此の立脚地點より發足せる觀察描寫に外ならぬ。彼は如何に人生が實生活に支配せらるるかを見、同時にその醜惡なものの中にも掬す可き詩味あるを認識してゐたのであり、唯醜惡さを爬羅剔抉して喜ぶ皮肉諷刺に墮したのではない。

二、次に擧ぐ可きは、戯曲の代表作家近松門左衛門の文學精神である。彼は世話淨瑠璃の作品に於いて遺憾なくその精神を發揮してゐる。人生が自己の思ふままに動くものでない事は、佛敎家ならずとも誰も深く體驗し煩悶する所である。その中で最も深刻なのは、理性と感情の衝突である。具體的に云へば義理と人情との衝突である。

理性は兩親尊長の恩に報い、妻子と平和な併し散文的な生活を續けるやうに強ひる。けれども、感情は戀愛の花と咲いて、一家の人の許さぬ愛人と永久の戀の殿堂を築く可く奔放ならんとしてゐる。現代の青年中には平然として此の自由な感情の激流に身を投ずる人が多いが、封建時代には義理を尊重する念が深かつた。而して遂には死によつて之を解決せんとしたのである。近松は此の思ふに任せぬ人生を是認し、一面かかる悲劇中の人物を賣めつつも無限の同情と愛憐とを垂れるに吝でなかつた。抱擁力の偉大な詩人的思想、それが彼の作品に横溢してゐるのである。

三、江戸文學(上方文學に對する)には、實に多量に通の精神が漲つてゐる。通とは都會人の特産で、文化的設

備の最高層、複雑な人事交渉、それ等に對し雜駁な知識を有する事の誇りをいふのである。あらゆる社會現象に通じ、あらゆる人情の機微に精通する、之が都會人中の通人の代表的精神であり、之を其の儘表現した作品が洒落本・黄表紙であり、その他の江戸に起つた創作にも、此の影響の無いものはない有様である。換言すれば、當時の文化人のもつ優越感を其の儘作品に反映せしめてゐるのだと言ひ得よう。

四、一方には又、大衆の道德觀を其の儘代表せる作品がある。讀本・合卷本(一に雙紙)である。人世は善人榮え惡人滅ぶ、善因には善果あり、惡因には惡果ありといふ、所謂勸善懲惡因果應報の儒佛思想を其の儘表現せる作品である。之は當時の常識的な大衆の道德觀であり、彼等は之が物質的に短時間中に必ず實現せらるるものと信じてゐる(實際的には必ずしもさうでないに拘らず)。であるから、作品に於いても適確にそれが實證せられる事になつて居り、大衆亦之に満足してゐる。此の方面の代表作家には曲亭馬琴がある。

五 更に人生の笑ひの方面のみを表現せんとしてゐる作品がある。所謂滑稽本・落語本である。前期には軽い諧謔も描かれてゐるが、後期になる程、滑稽は單に惡戯・冗談・洒落などにのみ存すると考へ、嚴肅な人生に笑ひある事を感じず、所謂惡ふざけの笑止味をのみ描いてある。滑稽としては野卑と言はざるを得ないが、それは作者の多くが中流以下の生活をなし、下層町人の生活のみを對象としたためであらうと思はれる。

尙、和歌・俳諧等の文學精神に就いては、夫々別項を参照せられたい。

文獻 一〇七項所掲参照

## 110 近松門左衛門の藝の説と、本居宣長の物語の説

とに就いて述べよ

近松門左衛門の藝の説とは、穗積以貫の「難波土産」(元年)に近松自身の言として掲げてある次の如き説を云ふのである。

藝といふものは實と虚との皮膜の間にあるもの也、成程今の世實事によくうつすをこのむ故、家老は眞の家老の身ぶり口上をうつすとはいへども、さらばとて眞の大名の家老などが立役のごとく顔に紅べ粉こをぬる事ありや、又眞の家老は顔をかざらぬとて立役がむしやむしやと髭は生なり、あたまは剃なりに舞臺へ出て藝をせば、慰になるべきや、皮膜の間といふが此也、虚にして虚にあらず實にして實にあらず、この間に慰が有つたもの也

即ち彼の意見は動かすべからざる眞理を有する一藝術觀であり、彼の描寫表現の手法態度を弄明したものと云ふべきである。

あらゆる藝術は美的表現である以上、客觀描寫、純客觀的觀察と稱しても、實は箇人箇人の美的感

情・審美的主観により、意識的無意識的に取捨選擇をなしつつあるのである。

繪畫に於て自然物の寫生といつても、同一の物に對する各人の寫生に差異あるのは此の故であるし、機械的な寫生は寫眞であり、而も見る者が看れば寫眞以上に繪畫が感激を與へ、美的満足を與へるのは、畫家の取捨選擇が行はれてゐるからである。

近松は描寫表現に於て、意識的に純寫實と藝術的表現の皮膜一紙の隔てある點を道破してゐるのである。

本居宣長の物語の説といふのは、「源氏物語玉の小櫛」(寛政八年)に出て居る彼の文學論である。即ち「源氏物語」は儒佛思想を假託せるものと、他に目的あつて作れるものとかいふ諸説を排撃し、本物語は實に「物のあはれ」を表現せんとせる作品に外ならずと論斷した説を云ふのである。

之は宣長の偉大なる識見である。從來の國文學者は純文學の藝術價値を認めず、或は儒佛思想とか教訓を含めるものとかの功利的思想を純文學に結び付けて僅に文學的作品の價値を認めんとしたのであるが、宣長は「物のあはれ」即ちあらゆるものの情趣を表現する事が物語(今日の小説、創作をさす)の本質であると論じ、藝術至上主義の見解を示したのである。更に物語と戀愛とを論じ、戀愛の至純至高を述べ、不倫の戀愛をも作品として否定せざる事が論じてある。

尙、「物のあはれ」に就いては、三三三頁及び一三五頁を参照せられたい。

兩人の議論は、西歐の文學論が輸入せられ、藝術論・文學論の標準の略ぼ定まれる今日に於いては、既に常識となり了れるものであるが、江戸時代に於いては實に卓越せる見識であつたのである。

文 獻 近松之研究(坪内雄藏) 近松門左衛門傳(黒木勘藏) 近松の生涯と藝術(飯野哲二) 近世戯曲

研究(守隨憲治) 源氏物語論の考察(久松潜一) 國語と國文學二卷一〇號) 宣長のものあはれと神な

がらの道(久松潜一) 上代日本文學の研究) 日本文學評論史(久松潜一)

## 二 徳川文學に表れたる武家精神に就いて述べよ

徳川文學に描かれた武家生活は町人生活ほど多くはないが、やはり多量の文献が存する。而して武家生活中には當然武家精神が描かれて居る。今それに就いて作品を挙げつつ説明しよう。

徳川初期に於いては武家生活が安定せず、武士も俸祿の多少、主人の人物に依つて隨意去就を決定したものの如く、恰も現代の俸給者が待遇の如何に依り任意去就した如き現象が見出し得る。その著しい實例は如偶子の「可笑記」(寛永十一年)に見えて居る。

即ち武士は主君が貪慾で恩賞を惜み仁義をかけざるを歎き、大名は諸侍を優遇する時は、恩寵に狎れ増長して遣ひにくい。だから冷遇して適度に恩賞を與へよと云つて居る。即ち武家の主従も雇主傭人の關係に過ぎなかつたのである。



然るに漸次封建制度が確立し、主君は家來とその家族の生活を永遠に保證支持し、それが永續するにつれ、臣下は主君に對し報恩感謝の念厚く、主君は臣下に對し愛憐撫育の情に富み、そこに服従犠牲の徳も生ずるに至つたのである。

武士道は實に此の精神的・物質的基礎の上に樹立せられ、犠牲・忠勇・質素・克己・尙武・廉潔・秩序等の諸徳を綜合渾然たらしめたものに外ならぬ。

而も徳川の政治は武家本位であり、武家階級保護主義であり、根本道徳は武士道の實踐であつた。隨つて作品に於ても武士を題材とするものには、此の理想の流露を描寫せるものが多いのである。井原西鶴の「武道傳來記」(四享)は主として斯かる武士を描いて居るし、後世になるほど武士道の權化の如き人物を敘述してある。果して實在の人物なるか否かを疑はせるが、尠くとも之が當時の理想的な武家精神の表現に違ひない。

その代表的なものには「文武君が代され碇石」(正徳二年)、「國花諸士鑑」(正徳四年)を擧げる事ができる。

武家精神は、敬神・崇祖・任俠の如き國民精神に、更に儒佛兩教の報恩・感謝・制慾の如き諸徳が加はりしものと見得るが、斯かる精神も餘り極端に走ると、意氣を尙び剛健を喜ぶの餘り、些細なる事に刃傷沙汰に及ぶ事もあり、又都會の武士は町人の豪華享樂を眞似て、物質欲を満足せしめんとし逸樂に耽つた傾向も認められ、それが作品に反映して居るのである。

而も武人は常に戰時を豫想して生活状態を規約統整して居るのに、長期に亘つての太平は、此の武家精神に弛緩が生じ、單純質素な生活を自嘲し、心身共に懦弱ならざるを得なかつた。随つて武家精神は都會に同化せざる田舎武士の間に比較的長く保持せられ、而も彼等の純朴な都會慣れぬ風俗態度は、常に都會文學にては嘲笑の的になつたものである。

文献 一〇七項所掲参照

一二 近世文學に見ゆる義理人情の葛藤とは何ぞや、

例を擧げて説明せよ

江戸時代の義理といへば、町人間に行はれた重大なる道德であつた。町人生活には武士生活の如く上下關係即ち主従關係が儼然として存せず、云はば雇主傭人關係であり、武士に強ひられる忠義の道德、絶對の服従、犠牲の精神は、町人道德には嚴格ではなかつた。

併し、町人には義理の二字が最も固い道德であり、他に對して踏み行ふ可き人道であり、義務でもあつた。

義理は理性により冷靜な判斷の下に行はるべき倫理でもあつた。決して本能的な衝動から起るものでもなく、盲目的な愛でもない。思慮熟考により生ずる智的行爲の現れである、所が人間は如何なる

君子と雖神でない以上、二六時中の行爲が必ずしも倫理に適應せる行動たり得ない。

理性の判斷では右へ行けと命じても、感情・趣味・憎惡などは左へ行けと命ずる場合がある。其處に義理と人情の衝突があり、人生の悲劇が生ずるのである。

此の人生の悲劇を多く題材とし、又最もよく描寫表現せるものは、近松巢林子の世話淨瑠璃であらう。今その作品の二三をとつて實例を示さう。

「曾根崎心中」(元禄十  
六年)の主人公公平野屋の手代徳兵衛は、主家に忠實に奉公してゐた。その主人は實は叔父甥の間柄であるから、幼時から可なり懇切に養はれて來て恩義があるうへ、内儀の姪に持參金をつけて夫婦にしようとの相談があつた。二重三重に纏綿たる恩誼から考へれば、當然有難く妻に貰はねばならぬのである。然るに、彼は曾根崎新地の遊女天満屋お初と深い戀愛に陥り、末は夫婦と固い約束をして居るのである。

主人であり叔父であり又恩人である人の命令に背いてまでお初と夫婦となる可きか、最愛の情人を捨て、主家の姪と同棲す可きか、義理と人情とは兩立しないのである。兩全を期しがたいのである。斯くて徳兵衛とお初は心中するに至つたのである。

有名なる「心中天の網島」(享保  
五年)の主人公紙屋治兵衛は、貞淑な妻おさんと二子とがありながら、紀の國屋小春と深い戀に陥ちて家業も忘れがちである。小春に冷遇せられ、兄孫右衛門に諫められ、

初めて覺醒した彼は、歸宅して窮狀にある家政をよく處理する妻に懺悔し慚愧し、家業を勵むべく決心した。然るに小春の冷遇はおさんの依頼により小春の義理だけとわかり、小春が他に身請されんとして死を決心せるを知り、妻兄の心遣ひに感謝しつつも、遂に小春と心中をするのである。

吾々は心中を謳歌するものでもなく、自殺を讚美するものでもないが、義理を尊重する純情を、現代の如く義理を踏み破つて顧みぬ人心よりは尊いと見るものである。

文獻 上方文學と江戸文學(藤村 作) 近世文學序説(同上) 近世生活と國文學(麻生磯次) 近松研

究の序篇(前島春三)

### 二三 近世文學中の町人生活に就いて述べよ

近世文學に於いて最も早く町人生活を主題として描けるは、浮世草紙中の所謂町人物であらう。併し後期に於いては洒落本・滑稽本・人情本等が多く此の町人生活を取扱つて居り、又一面戯曲演劇に於いて、前期は世話淨瑠璃、後期は世話狂言として町人生活を描寫してある。今此等に依つて町人生活を説明して見よう。

戦亂が平定し天下が太平になると、經濟生活が最も主要な地位を占むるに至るは當然であり、大阪町人が武家に優遇せられ、ひいては一般上方町人の社會的地位の向上は明確な事實であつた。

されば階級意識に目醒めた町人は、自己の持つ經濟力の偉大さを知ると共に、富の力にのみ依らねばならぬ社會的地位の低さをも自覺してゐたのである。されば刻苦勉勵して理財に努力し一意富豪たらんと志した。

併し一躍長者になつたからとて、大理想・大精神があつた譯ではない。自己のみは大名以上の豪華な生活をなしても、公的地位は依然として向上しないのである。そこに封建時代町人の煩悶懊惱があり、不平不満があつた。

彼等はその富力を人道方面に向ける程の高い理想はない。常識的な凡人主義で、享樂的物質的快樂が彼等の富を散ずる窮極の目的となつた例が多い。

當時の享樂地は遊里と劇場とが主なるものであり、彼等はそこだけでは階級意識から解放せられ、自由な天地、唯金錢のみが幅を利かす世界を發見したのである。彼等が多く遊蕩に耽るに至つたのは自然の傾向であつた。

富豪は金錢が多くあるからよいが、中流以下の町人は直に遊興費に窮し、そこに幾多の悲劇が生じた。所謂心中物の大部分は義理と人情の衝突であると共に、それを促進せしむるに金錢の窮乏が存する事を看過してはならぬ。富豪と雖、二代・三代に至ると不生産的な若者が多く、茲に破産零落し、而も猶昔時の榮華のみを夢みて暮らす如き悲劇が多かつた事は、作品の證明する所である。

町人勃興時代にはまだ町人に活動力があり、烈々たる意氣に燃えてゐたが、封建制度の完備と共に階級制度も牢乎として固いものがあり、町人は僧侶・學者・醫者などの方面に進まねば社會的地位の上は望まれぬ事情にあつた。されば意氣あり野心ある若い町人には、その點で可なり煩悶があつたと考へられる。

所謂氣質本かたぎと稱する作品は、よく這般の消息を寫してあると思はれる。氣質本の主人公は多く世襲的家業を守らず、他に志望をもつか、町人に不似合な道樂に凝るかしてゐる青年男女などを描いてある。作者の主觀では、此等を不心得とし町人の分を守るべきを教へたもので、その間に醸し出される悲喜劇を誇張し、幾多の諷刺教訓を示さんとしたもののやうであるが、今日より見れば簡性没却の階級制度が如何に悲惨なるかを認識せしめる事になつてゐると思はれる。

隨つて町人の教養は、算盤・手習の外は茶道・花道、歌・俳諧・雜俳、圍碁・將碁・蹴鞠などであつて、更に三味線・俗謡・舞踊などが修む可き紳士の修養と考へられてゐた。所謂人情本の主人公は、斯かる人物である。

稍中流以下の町人に至つては、多く教養なく、文字の上で失敗する滑稽が、所謂滑稽本に現れる人物により描かれて居るのも真相に近かつたであらう。

彼等は全く醉生夢死の遊民で、四季の行樂と自己の知れる遊藝とを調和せしめ、茶番氣分で生活し

てみたやうに見られる。此等は町人生活の單なる一面が作品に表現せられたものであるが、階級制度の桎梏に依る真相であるとも考へられよう。

文 献 上方文學と江戸文學(藤村 作) 近世生活と國文學(藤生磯次) 滑稽本の本質(同上) 國語と國

文學本質號) 八文字屋本の研究(水谷不倒) 新潮社日本文學講座) 社會の進歩と滑稽文學(高橋義雄

滑稽文學一卷一號) 滑稽本集解説(山口剛) 日本名著全集)

## 二四 裁判事件を題材としたる江戸時代の文學に就いて述べて

江戸時代の初期に元の桂萬榮編の「棠陰比事」が舶來し、林羅山が之を翻譯し「棠陰比事加鈔」を發表し、續いて「棠陰比事物語」(四年)が刊行せられた事は、所謂裁判小説に多大な影響を與へしものと見られる。即ち「本朝櫻陰比事」(二年)、「鎌倉比事」(五年)、「日本桃陰比事」(六年)は、名稱に於ても既に「棠陰比事」に擬して居る書なることを知り得る。皆、名判官があつて幾多の疑獄を明快に裁判し終る事が記してある。

一方に喃本即ち落語集があつて、最も代表的の書と見る可き「醒睡笑」(年間)卷之四に板倉勝重の裁判物八話、同重宗の一話あるは注目す可きであらう。即ち名所司代として名聲ありし板倉侯を主人公

とせるもの。前記「櫻陰比事」は背景を京都とし、名判官を御前と呼べるは明かに所司代をさして居ると見られる點から考へ、「櫻陰比事」と「醒睡笑」の似通へる點を見出し得る。

續いて「青砥藤綱模稜案」(文化八)がある。馬琴作で、鎌倉時代の賢臣青砥藤綱を主人公とし、彼が明察流るるが如く幾多の疑獄を裁斷するといふ構想である。之の續編に擬したものに馬琴門人樗亭琴魚作「刀筆青砥石文」(文政三年)がある。

以上の外、最も大衆に歡迎せられたのは「大岡政談」であらう。江戸時代に於いては寫本として多く貸本屋にあり、廣く讀まれ、更に一方では講釋・演劇に依り知られたものである。刊本では松亭金水の「大川仁政錄」(文政元年)あり、寫本としては「板岡實錄」「大岡板倉二君政要錄」「大岡政要實錄」「大岡十八政談」等がある。日本の名判官を板倉父子・大岡越前守忠相によつて代表せしめ、後には大岡忠相一人に代表せしむるに至つたのである。

「大岡政談」中有名なのは、天一坊・村井長庵・烟草屋喜八・越後傳吉・畔倉重四郎・小間屋彦兵衛・白子屋お熊・後藤半四郎・直助權兵衛・雲切仁左衛門・水呑村九助・小西屋騷動等である。

その多くは、悪人の姦惡な計略にかかり善人が冤罪に泣き牢囚の苦艱に悶えて居るのを、大岡忠相がよく明察、正邪を快刀亂麻を斷つ如くさばく構想となつてゐる。

斯かる裁判物が大衆に喜ばれ歡迎せられし理由は(一)人類に本能的な探偵趣味を満足せしめ、秘



密をあばく點に一種の快感を味ひ得る事、(二)善人が多く無力の弱者であり、悪人は兇力と權力を有し横暴であるため、弱者を扶け強者を挫く點に國民的義侠心の満足が存する事、(三)結局に於て善人榮え悪人亡び、大衆道德の基礎をなして居る勸善懲惡の正義感が、此の裁判物に最も顯著適確に取扱はれて居る事等によるものであらう。

### 文獻

犯罪文學の研究(小酒井不木全集)

大岡政談解題(尾佐竹猛)

新帝國文庫

浮世草子(山崎 麓)

岩波講座日本文學)

## 二五 江戸時代文學に見ゆる勘當・敵討・切腹・身替の意

### 義に就いて述べよ

江戸時代に於ける制裁は、一犯罪者・過失者があると、その罪の輕重により制裁が當人のみに止まらず、その一家族・親戚縁者に及び、町人の場合には、家族のみならずその住める一町内の名主五人組の如き町役人にまで取締不行届の罪が及んだ。

そのため家に素行修まらず訓戒を受けて改悛の念なき子弟があらば、親子の縁を切りその一家より放逐し、その旨を公表し除籍した。之を勘當と稱した。當時の縁座法が親などに及ぼすのを避けるためである。役人に出願し御用帳に記録して貰ふのが公表の形式で、俗に之を「久離きる」と稱する(舊離、舊里と)

く書。即ち久離により全く縁類を斷ち、帳外と稱し人別帳より除く(即ち除籍)のを以て完全なる處置とする。然らざるは、町内勘當・村勘當・内證勘當の如き小範圍の勘當である。

敵討は武士道奨励のため非常に發達したもので、本來は武士の習俗であり、藩によつては士分以下の敵討を認めぬ所もあつた。武士は治者階級であつたため、報復に公私を混濫し、公權を私行したのであり、武門の面目、名譽問題とされ、且つ國家風教のために勵行せられて風習となつたのである。

自己の主君や父等の尊族が他に害された時、その加害者に對し、被害者の卑族至親の者が、刑罰の公權を私用して制裁を加へるのが敵討である。されば猥りに許されないのであつて公許を要する。つまり公儀の帳簿に記入して貰ひ、特定の地域(禁裏、江戸城附、近、名山靈地等)以外の場所で行はねばならない。又復讐者に對し被復讐者の遺族遺黨などが更に報復する事は不文律で禁じてあつた。

自己の妻が姦通せし場合、その姦夫を討つのを妻敵討(むすまたき)ちと稱して許された。以上は皆、公權を私用して制裁を加へる現象に外ならぬ。

切腹は自身で腹を切り自殺するもので、江戸時代に武士の刑名の一つとして用ひらるるに至つた。即ち武士を死刑に處する場合、罪の輕重により、多少武士の面目を立てて死せしむるために加へた刑である。その犯罪が武士の本分を辱めず、名譽を毀損しないものであれば、切腹を命じたのである。

武士の死刑には、此の切腹と斬罪とあり、斬罪は刑務者の首を斬るのであり、切腹は自身腹を切り

所謂自決するのであるから、武士としては多少優遇せられた死刑と稱する事が出来る。併し江戸の中期以後、多くの場合、その被告が腹に刃を當てて自殺の形式をとれば、所謂介錯人が後方より首を斬り、切腹は單に形式に過ぎなかつた。

江戸時代に犯罪者があれば、必ずその犯人を當局が捕縛するのは勿論であるが、犯人が捕はれざる場合など、近親・町内の者などが責任を負はねばならぬ風習であつた。そのため他人の受く可き罪科責任をその人に代り引受くる者を設け、他の多くの人の責任を免れしめた。之が身替である。一種の自治制裁であるし、當事者よりいへば忠孝・博愛・任侠の犠牲的精神の發露とも稱し得るであらう。

文 献 上方文學と江戸文學(藤村 作) 近世生活と國文學(麻生磯次)

## 二六 江戸時代の小説に及ぼしたる支那文學の影響に

就きて述べてよ

江戸時代初期に於いて新に舶載せられたる支那小説は、最も日本の知識階級に歡迎せられた。所謂裁判小説の一なる「棠陰比事」、怪異小説なる「剪燈新話」「剪燈餘話」、又軍談たる「三國志」「漢楚軍談」などが先づ日本で翻譯或は翻譯せられ、「棠陰比事物語」「本朝櫻陰比事」以下の裁判小説となり、怪異小説の「伽婢子」は「剪燈新話」中の十八話、「剪燈餘話」の數話を翻譯せしものなる事が專

門家により發見せられ、又軍談の翻譯は「通俗三國志」(元年藏)「通俗漢楚軍談」(八年藏)となりて發表せられ、其の他の翻譯では、「通俗忠義水滸傳」(寶曆七年)「通俗西遊記」「通俗吳越軍談」「通俗醉菩提」(寶曆九年)「通俗醒世恆言」(寛政二年)等が後れて發表せられた。

其の他「閑卷一笑」「板橋雜記」等の支那洒落本類似の翻譯も出たのである。

斯かる支那文學の愛好は、當然その時代々々日本作家に影響しないわけではない。それが最も盛に文壇に現れたのは、寛延・寶曆頃より流行した讀本であつて、その初めに夥しい數の怪異小説が出たのも全く支那小説の影響に外ならぬ。

所謂讀本の祖と稱せらるる近路行者の「英草紙」(寛延二年)は材を「今古奇觀」等より採りしものと稱せられ、建部綾足には「水滸傳」の翻案なる「本朝水滸傳」(天和十一年)の作あり、上田秋成の「雨月物語」が弘く支那小説より材を取りしものなる事は多く知られてゐる。

所謂讀本の兩大家たる山東京傳・曲亭馬琴の作品が、多く支那小説より取材し又翻案せしものなる事も知られてゐる。例へば京傳の「本朝醉菩提」(文化六年)は題も内容も「醉菩提傳」より採りし事云ふ迄もなく、「櫻姫全傳曙草紙」(文化三年)は支那小説「金翹傳」「風箏誤傳奇」より取材せしもの、又「忠臣水滸傳」(寛政十年)が「水滸傳」の翻案なる事は、書名に依つても明かである。

馬琴の作、「椿説弓張月」「南總里見八犬傳」に「水滸傳」「三國志」の影響せる所多大なるは一般

の定説であり、「三七全傳南柯夢」は支那の「搜神記」「南柯記」等を探りしものである。

斯くの如く支那小説の構想の影響が大きい上に、その用語までも踏襲せられて今日に到つて居るのは注目す可き事であらう。例へば「説話す」「再説」「看一看」「閑話休憩」「這箇」「這回」「却説」「後の説話甚麼ぞや」「話表」「案下某生再説」などである。

是等の使用は從來の和文に何等か新奇な表現を與へたと共に、絢爛瑰麗な漢字の點綴が、一種の新鮮な刺戟を與へ讀者を喜ばせたのであらう。明治以後歐文翻譯體の混入と趣を同じうしてゐる。

それと從來の日本文學に無かつた支那小説中の複雑な構想趣向、怪奇な題材思想が特に喜ばれ、斯くの如く近世文學に影響を及ぼしたものであらう。

文獻 江戸文學研究(藤井乙男) 馬琴研究(藤村作 新潮社日本文學講座) 支那文學の馬琴の作品に

及せる影響 麻生磯次 日本文化叢考) 讀本集解題(山口剛 日本名著全集)

## 二七 浮世草紙の種類を擧げよ

浮世草紙は常識的に分類して四種とする。それは取材及び構想の方面に標準を置いてある。即ち一、好色物。二、町人物。三、武家物。四、説話物 是である。併し、更に説話物中に入れず特に獨立せしむれば、次の一種が成立するであらう。即ち 五、犯罪物これである。

一、好色物 井原西鶴作「好色一代男」を祖とし、人間の性生活を主題として描寫せる作品で、或は性慾のための性慾、或は箇人を中心としてその戀愛生活・性生活、或は場所即ち遊里を中心としての性生活、或は單に好色に關する説話集等に細別し得る。

之に屬する代表作は前記「好色一代男」「好色一代女」「好色五人女」「好色二代男」「傾城色三味線」「茶傾ひそり顔」等を擧げられよう。

二、町人物 主として町人の生活を描寫せる作品で、多くはその經濟生活を取材してある。或は貧しい町人が刻苦努力して富豪となりし立志談的説話、富豪或はその子弟が奢侈浪費に失して零落せし説話、富豪の富貴驕奢をそのまま描寫せしもの等がある。

その代表的作品は「日本永代藏」「世間胸算用」「日本新永代藏」「立身大福帳」「商人軍配團」「棠大門屋敷」等を擧げ得るであらう。

但し町人物には經濟現象を主としないで、町人實生活の種々相を描いた作品の一團がある。西鶴の「本朝甘不孝」「西鶴織留」の後半、更に氣質本かたがと稱する多數が是である。即ち「世間子息氣質」「世間娘容氣」「世間手代氣質」「世間母親容氣」などが之に屬するであらう。

三、武家物 武家生活を描寫せる作品で、武家が義理固い武士道的生活を營める説話、名譽を重んずるの餘り可なり殺伐なる行動をなすに至れる説話等が輯めてある。

代表作品としては「武道傳來記」「武家義理物語」「文武君が代さざれ石」「國花諸士鑑」等を挙げ得る。その他武家物の中には妻敵討めがたきを取材せる「京縫鎖帷子」「熊谷女編笠」「女敵高麗茶碗」等があるし、又武家物と好色物との中間に位し、武家生活の一面の色彩強く現れて居るものに、男色物がある。便宜上、武家物中に入れて置く。その代表作品には「男色大鑑」「男色子鑑」「男色木芽漬」等を挙げ得る。

**四、説話物** 既に假名草紙中にも存在する怪異短篇小説の一種であり、西鶴が此の流行に影響せられ「西鶴諸國咄」を發表、爾來此の種の怪異小説集が多く刊行せられた。

その代表作品としては、「狗張子」「御前伽婢子」「御伽百物語」等がある。

併し別に「懷視」があり、全篇廿五話の内怪異小説は僅に十話で、他は興味本位の説話集である。斯かる種に屬する書には、「千尋日本織」「當世誰が身の上」「諸藝袖日記」等がある。

此の種に屬する作品が、短篇より長篇となり、一は過去の傳説的人物を現代化し滑稽味を加へ、一は市井の人物・事件で評判になつたもの、或は有名になつた戯曲等を取材した作品も可なり多く發表せられた。(之を懷奇物として分類する人もある)

前者の代表作品としては「寛濶曾我物語」「風流誑あざむ平家」「兼好一代記」等、後者の代表作品としては「達髮五人男」「大内裏大友眞鳥」「國姓爺御前軍談」等が挙げられよう。

五、犯罪物 としては「本朝櫻陰比事」「鎌倉比事」「日本桃陰比事」等を挙げ得る。此等は所謂裁判物であつて、名判官が黑白を明瞭に裁斷する作品であり、別に「沖津しら波」の如く主として盜賊の兇惡を描いたもの、詐欺を主として描いた「晝夜用心記」「儼偶用心記」等のあるを知らねばならぬ。(之を裁判物・欺偽物と分つ人もある)

文 獻 列傳體小説史(水谷不倒) 日本文學講座江戸時代篇(新潮社) 浮世草子集解題(山口剛) 日本名著全集)

著全集) 怪談名作集解題(山口剛) 日本名著全集) 浮世草子の本質(片岡良一) 國語と國文學本質號)

浮世草子(山崎麓) 岩波講座日本文學)

## 二二八 雨月物語を評論せよ

浮世草紙中に説話物とも稱すべき一種類が存在し、諸國の怪奇説話を集輯してある。之は明かに今昔物語・宇治拾遺・古今著聞集等の系統を引けるもので、それが更に寶曆・安永頃に至り所謂怪奇小説となり、多數の作品となつて發表せられた。

雨月物語もその流行に誘はれ、上田秋成の手に依り綴られ、安永五年に刊行せられた怪奇短篇小説集の一つである。白峰・菊花の約・淺茅が宿・夢應の鯉魚・佛法僧・舌備津の釜・蛇性の淫・青頭巾・貧福論の九篇より成り、その大部分は支那の怪異小説より素材をとり、更に日本化したものである。中には日



本の古い説話文献をも巧に粉本として用ひてある。その明白なものを擧ぐれば次の如きものである。

白 峰——保元物語・撰集抄・松山天狗。

菊花の約——喻世明言・英草紙・武家義理物語。

淺茅が宿——剪燈新話愛卿傳・伽婢子・萬葉集・今昔物語。

夢應の鯉魚——魚服記・宇治拾遺。 佛法僧——剪燈新話龍堂靈會錄・伽婢子。

青備津の釜——剪燈新話牡丹燈記。 蛇性の淫——西洲佳話雷峰怪蹟。

青 頭 巾——宇治拾遺・怪談とのみ袋。 貧福論——錢神論。

當時までに發表せられた怪異小説は實に二百部餘にのぼつてゐる。その中で雨月物語のみが燦然として輝き、今猶愛讀せられ、不朽の價値を認められるのは何故であるか、その傑出せる點は凡そ三つありと考へられる。

一、前述の如く彼の作品の素材は、古今和漢の小説・説話より採り來つたに拘らず、よく消化し盡くされて何等その痕跡を残してゐない。各篇皆構想脚色に、又背景情調に獨創な新鮮さが盛られて、陳套な典型化が認められず、又國民思想・國民生活に不調和な支那臭味が發見せられない事である。伽婢子・狗張子の如きは流暢な擬古文であるが、漢譯の痕歴々たるものがあり、英草紙・繁々野話の如き雄健な筆致愛誦すべきものがあるが、支那小説の直譯に失し、我が國の風俗と相容れざるものを平

然踏襲しあるは、國民大衆の讀み物として生硬不消化を免れない、この點に於て雨月物語は全く日本の物語となり切つて居る點が、作者の手腕の偉大さを思はしめる。

二、他の怪異小説は、多く怪異な説話を單に紹介し説明するに過ぎない。其處に表現も描寫も缺乏してゐるのである。(勿論、中には傑出してゐる作品も存するが)

然るに、雨月物語は單に怪異を怪異として紹介せず、その人物・環境・背景・徑路を描寫し、怨靈も亡靈も精靈も又神秘境も實に生彩ある想像力で表現し、その迫眞力・實在感が讀者を魅了しつくさずんばやまざる程の筆力が其處に横溢してゐるのである。

青頭巾の狂僧が愛する稚兒に執着して遂に肉を喰ふに至り、更に人肉を嗜むに至る過程、吉備津の釜で怨靈が夫の愛人を屋内に潛入して呪ひ殺す凄慘な光景、惻々として讀者を感激昂奮せしめ、讀者をして斯かる神秘の世界を窺知せしめるに充分な描寫力を有して居るのである。その點は米國の有名な怪異小説家エドガー・アラン・ポーに比較す可き作家であらう。

三、斯かる描寫が國文の素養と、支那小説の讀書力に充分なる力量を有せる作者獨特の文章を以て描かれてゐるのである。從來の作品の文章が假名草紙以來雅文に失したり、俳諧味を帯びて俗に失したり、支那小説に影響せられて、漢文直譯體に失する中であつて、よく優雅雄健、しかも蒼古簡潔を失はず、それが讀本の典型的な文體となりし事を思へば、如何に當時の讀書界に適應せる文章なりし

か想像し得るであらう。

以上の三大特徴を以てし、しかも作者秋成の數奇狷介なる生活より人格的に滲み出る神秘妖氣が、彼の作品には生きてゐるのである。

文獻

雨月物語評釋(鈴木敏也)

雨月物語片影(山口 剛)

雨月物語評論(重友毅)

日本文學研究第

一輯)

二九 京傳と馬琴とを比較評論せよ

三〇 京傳と馬琴とに就きて記せ

各々の傳記的記述は省略して、茲には兩者の作品の比較を中心として述べる。

山東京傳と曲亭馬琴とを比較するには、同種の作品に於いてなすのが、最も便利であると共に、又最も明確であらう。

兩人の同種の作品といへば、前期に黄表紙、後期に讀本といふ所であらう。京傳には得意な洒落本の作品が多いが、馬琴には一部も無く、京傳には滑稽本の作品も存するが、馬琴には落語の本二部餘あるのみである。又合巻本は兩名ともに多いが、之は内容からいつて讀本と同一に併せ論じ得る性質のものである。

さて、兩者の黄表紙に就いて比較して見れば、黄表紙は元來軽い滑稽諧謔を主なる内容とし、同時に機智頓才を生命とせるものであるが、京傳の作品にはその要求が遺憾なく盛られ、才人たる彼の面目が充分に發揮せられて居るのである。然るに馬琴の作品は滑稽が重々しく一向笑止味を伴はず、趣向が理窟に墮して面白くない。口の重い人が強いて洒落を弄して人を笑はさんと努むるやうな感じを與へるに過ぎないのである。即ち京傳は黄表紙作家としても代表の一名に擧げ得るが、馬琴は全然失敗せる作家と云はざるを得ない。

讀本に於ては、京傳の緻密な構想、絢爛な筆致共にすぐれた點があるが、長篇となると、その構想組織が稍手に合はず亂れる點を看取し得る。馬琴の作はその作品の描寫など必ずしも京傳の上に出るを得ないが、大思想、大理想を盛つた長篇の整然亂れざる構想組織の雄大さに於いて遙に京傳を凌ぎ、而も健筆多作たる點に於いて、京傳は到底馬琴の敵ではないのである。

全體として見れば、京傳は富裕な純然たる江戸の町人、趣味の繊細多様な都會人、而も蒲柳の體軀をもてる神經質、一面には花柳界にも出入した通人肌の人物である。馬琴は同じ江戸生れながら、出舍武士の血統をついで居るらしく見え、少年時代から貧しく諸處を流轉し、餘り趣味生活など樂む餘裕もなかつたと思はれる。然し頑健巨大な體軀をもてる精力家、一面神經質な所も見えるが一面には太い神經の所有者で、傲岸不屈な鬪争家である。京傳は美に關する感覺が鋭敏であつたらしいが、馬

琴はその點疑はしい。理窟一點張りの理論家と見られる。唯任侠の精神は強く、作中の主人公に失意の英雄を取扱つたのはその故であらう。

要するに京傳は藝術家であり、その作品は藝術品である。唯繊細巧緻な象牙細工らしいところが見える。馬琴は健筆家であり達筆家ではあつたが、藝術家らしい素質には乏しかつた。作品も輪郭・構想の雄大な點ですぐれて居るだけである。しかしながら、その雄渾な點が傑出し、その大思想が國文學界に嶄然群を抜いて遂に崇嚴さを示してゐるのが、一偉觀として仰視せしむるだけの力をもつて居るのである。

文 献 列傳體小説史(水谷不倒) 近代小説史(藤岡作太郎) 國文學史講話(同上) 江戸時代戯曲小

説通志(堀 捨次郎) 山東京傳(宮武外骨) 山東京傳の研究(小池藤五郎) 馬琴日記(和田萬吉)

馬琴の讀本(重友毅 日本文學聯講近世下)

### 二三 國學の興隆に就いて述べよ

江戸時代の國學とは、如何なる性質のものだつたかを、先づ知る必要がある。

凡そ、江戸時代の國語國文の研究と云ふものを考へてみると、次表の様な諸性質の混合から成ると思はれる。

(甲) 知識的	(一) 書誌學的研究
	(二) 註釋
	(三) 語法語學
(乙) 思想的	(一) 個性(自我)の覺醒    人間解放
	(二) 原始性愛慕    尙古思想
	(三) 國家主義    日本尊重
(丙) 文學的	(一) 文學理論
	(二) 古典踏襲創作 <small>(萬葉的和歌、擬古文學の類)</small>

の歌作の如きは、古道を實踐的に把握する意味で國學的方法である。

扱、斯う云ふ性質の國學が、如何なる徑路で如何なる人によつて發展して行つたか？ それは所謂、

國學の四大人、春滿・眞淵・宣長・篤胤を考へる事によつて、略々把握出来る。併し之と同時に、春滿の先驅者として契沖、宣長——篤胤の對立者として橘守部及び富士谷御杖等が考へられねばならぬ。

契沖の、國學の産婆役としての位置は、甚だ重大である。彼の萬葉及び記紀の研究は、(甲)的方法の代表的なものであるが、之が國學の知的方面の基礎を置いた。春滿・眞淵・宣長・守部皆彼の著書の影響を受けた——と云ふ意味は、彼の業績の成果のおかげを蒙り、又その實證的方法から古學研究の方法論を示唆されたのである。故に、契沖に後の國學の様な日本主義的要素は無いが、猶國學を語る

此の内、(乙二)・(乙三)の如きが、直接的に國學の内容となる。次に、古代を知る爲には古代文献を読み解く事が先づ必要である。此の爲、(甲)殊に(甲二)が、國學の基礎的作業として先進した。次に(丙一)に於て、萬葉尊重の歌論の如きは、古代を論究對象とする點に於て國學に關聯する。(丙二)も、萬葉派

に第一に擧ぐべきは彼である。

次に春滿は、國學の思想的・精神的側面を第一着に高唱した先驅者として注目すべきである。彼が六十歳にして享保十三年幕府に提出した「創學校啓」は、古道究明の爲學校を創立されむ事を建白した書であるが、此の中で彼は、當代の時弊は、我が神皇の學の荒廢せるに在りとした。其の爲に古義を明らめ古語を講じ古典を解釋する學校を創建する要ありとした。彼の目的の學校は建てられなかつたが、之によつて、國學の向ふ進路が略々定められた。即ち、經世齊民の爲に古代の學が究めらるべき事、それには(甲)的な言語の學・解釋の學が興起さるべき事、と云ふ二つの進向である。特に前者に彼の歴史的位置の特色がある。

眞淵は、春滿の此の主張を身を以て實踐すると同時に、その内容を擴大した。春滿は古典の解釋を唱へたが、その解釋的業績としては、書紀の研究が數種あるが彼を代表すべきものは無く、萬葉に於て萬葉僻案抄、同童蒙抄の如きがあるきりで、彼の聲明が充分に實行されたとは云へぬ。然るに、眞淵では、上記(甲)(乙)の兩面が略々萬遍無く果されてゐる。(甲)的なものとして、古事記私記・同頭書・同訓考・同和歌略註・日本紀和歌略註・祝詞考・冠辭考・古今和歌集打聽・語意考の一部の類があり、(乙)的なものとして、國意考・歌意考・語意考の一部・にひまなび・歌體的言跋・國歌論臆說・國歌八論餘言拾遺・再奉答金吾君、等がある。

眞淵は此等に於て、古代は高く直き心を持ち、大丈夫オホサトヲぶりの生を生活した理想的時代だとして、古道とは、斯かる古代を人々に知らしめ、さる世を現代に實行する事によつて現世の弊害を救ふ所の最上の道だとした。而して、學究的に記・紀・祝詞・萬葉等を究める一方、(乙)的側面として右様の理論を唱へ、又、自ら萬葉語を以て歌作して、實踐的に古代の大丈夫ぶりの精神を生きようとした。彼に於て、國學の諸側面は統合一括された、と云へる。

次に宣長は、眞淵の足跡を更に深化した。即ち、(甲)的註釋の書として、萬葉集玉の小琴・出雲國造神壽詞後釋・大祓詞後釋・續紀歷朝詔詞解の如きを作り、(乙)的思想の書として、直毘靈・馭我慨言・葛花・眞曆校・鉗狂人・玉くしげ・呵刈葭・國號考・玉鉾百首・祕本玉くしげ・神代正語の如きを著して、國學を組織化し、その深度を深めた。

宣長の古代の根本概念は、甚だ神祕的である。古代は萬物神を中心とする神ながらの道によつて、人の心誠實に、國穩かに統一されてゐた。此の神ながらの道に歸する事によつて現代は救はれる。而して儒佛敎の如きは、此の固有日本の素朴・自然を破壊するものたるが故に斥くべしとし、こゝに國粹的・日本主義的色彩を鮮明にする。

古事記傳は、彼の此の思想・學識等の總てを一書に集結した書であつた。

次に宣長歿後の門人篤胤は、宣長の精神的・神祕的傾向を極度に受け繼いだ。同時に學術的註釋的



方向は全面的に放棄してつた所に彼の異色がある。彼の業績は國文學の徒と云ふより國史學者に近いが、記・紀・風土記・古語拾遺等を要抜して、古史成文を作り、その概論「古史微」、その註釋「古史傳」を著して古代史に對する己が意見を明かにした。此のほか、(乙二)と(乙三)とを兼ねた書として、靈能眞柱・古道大意・大道或問・入學問答・三大考辨々・天說辨々・玉禰の如きがあり、(乙三)の排佛・排佛の書として、赤縣太古傳・三五本國考・春秋歷序考・鬼神新論・孔子聖說考・呵妄書・西籍慨言等(以上排佛)、及び、印度藏志・出定笑語・悟道辨・古今妖魅考等(以上排佛)がある。

此等に現れた特色で前代に無いものは、宣長の神秘主義を深化して古代を哲學的に考察せんとする傾向と、著しい國家主義(釋しては國家思想)の傾向とである。更に、前代に見ない激しさで、儒・佛教はもとより、神道迄も排撃して國學の特色を強調してゐる。尙、自己の學說を樹つるに新興の洋學を採用して説く點に、時勢の姿を見る。之に併せて、上記の學術要素の放棄も、國學が純學的範圍にとゞまつてをれぬ程、時勢の急進展がそれを然らしめたと見えて、注視すべき傾向である。

以上、契沖——篤胤の解説で、大體は明かと思ふ。以下簡單に、富士谷御杖と橘守部とを述べる。富士谷御杖は、元來神道の家である。故に、宣長の古神道的解釋より一更の神秘化・宗教化を遂行した。彼の説の中心は、言靈説に在る。註釋の書に、古事記燈・萬葉集燈があり、歌論の書に、歌道非唯抄・眞言辨・北邊髓腦・哆南辨乃異則・調道學要・五級三差辨等がある。此等に於て、彼は、歌道は神

道の助となるものとし、又言靈説を唱へた。言靈説とは、言語には靈妙の活きがあり、古代の文や歌は之をよく理解し活用して作られた所に特色がある。故に之が解釋に當つても此の點を味解すべしとして、「表裏境」や「倒語」の説を立てて表の意味のほかに別に裏面の眞意を説き、神道の荒魂・和魂（二魂）に比したりしてゐる。尙、「現心」・四種の「爲」・「時宜」の説の如き哲學的心理的思索を説いた。

守部の數多き著書中、國學的なものは、註釋の書に、稜威道別・稜威言別・萬葉集檜楯手・同墨繩・神樂歌入文・催馬樂入文があり、精神的分子の書として、難古事記傳・神代直語・神道辨・神風問答・歷朝神異例・稜威雄詔（いづのをたけび）があり、道別・言別・雄詔が代表書と考へられる。又、古代歌風の研究書として(丙)的性質の、長歌撰格・短歌撰格・萬葉集緊要等がある。

彼は、宣長反對を標榜して立ち、神道の理論をまじへつゝ宣長の神秘主義に對し合理的解釋を主張し實行した。同時に、今日の目を以て不合理と見える古代の部分は「幼語」か「談辭」として解き、又記よりも紀の方を、史書としての價值を重視して尊んだ。又宇宙觀に於て、天に對する「黃泉」の世界を甚だ重視して詳説した。尙、古代の歌格・歌風の研究も永く後世を裨益した。

以上、國學の興起は、徳川幕府治下の封建社會が、爛熟しやがて崩壊する過程を原因とし、之に沿うて漸次に勃興發展したもので、原因は單に、國學と云ふ學問的領域に求めても探ね難い。初め、文學的要求から國學の起つた當時には、まだ封建制度が健康さを所有してゐた。それが精神的となり、

最後に平田篤胤のやうに、純精神的となり、排外的となるに及んで、こゝに國學は、幕府の一敵國となり、尊皇運動の一城壁と變つたのである。國學は徳川時代三百年の社會歴史との、深い相關に於いて觀察せらるべきである。

文 獻 國學全史(野村八良) 國學發達史(清原貞雄) 國學の精神(久松潜一) 日本文學聯講近世上)

賀茂眞淵と本居宣長(佐佐木信綱) 本居宣長(村岡典嗣) 日本精神發達史(河野省三) 國學の研究

(同上) 日本精神文化大系(藤田徳太郎・森本治吉)

一三三 徳川時代の主要なる歌論に就いて述べよ

一三四 江戸時代に於ける歌論の中著しき數説を挙げよ

一三五 江戸時代の歌論とその時代の歌との關係を述べよ

徳川時代の歌論としては、(一)初期の、中世歌學への反抗。(二)中期の荷田在滿。及び田安宗武・賀茂眞淵の説。(三)末期に近い、本居宣長・小澤蘆庵・香川景樹、及び富士谷成章・御杖父子の説。此等を主なるものとする。

此のうち、第一のは、唯破壊だけでそれ自身建設的な分子を含まないから論外として、在滿と宣長との立場は新古今尊重。宗武・眞淵は萬葉尊重。蘆庵・成章は古今集尊重と、それ／＼宗とする所を別

にしてゐる。縣居派・桂園派は次の一二五項に詳説したゆゑ、其の他を説いてみる。

第一の中世歌學の因習と傳統への反抗としては、木下長嘯の如きもあるが、尙近世の初頭京阪の地に出でた木瀬三之・下河邊長流、江戸の地に出でた戸田茂睡を擧ぐべきであらう。大阪の長流は、「林葉累塵集」、「萍水和歌集」を著し、共に從來の様に貴紳の和歌集と異つて平民のみの歌を集めて實作上の反抗を表した。京都の三之は、「諸説録」(著者不明。三之・長流等の説を集めしき。佐佐木篤士和歌史の研究二八二頁参照)に、

凡て古今に傳授などいへる事あるべからず。貫之心には、あまねく和歌の心を諸人に知らせまほしく思ひて書きたれば、ゆめく秘傳あるべからず。

と説く如く、古今傳授攻撃の殆ど第一聲を放つた。又茂睡は「百人一首雜談」に百人一首及び二條家の歌風を論難し、「ひがごとしらべ」に於て細川幽齋及び古今傳授を攻撃した。且つ「梨本集」に於て最も明瞭に、制の言葉を非難し、歌詞の自由を主張して、中世歌學攻撃の巨砲を放つた。

彼等に續いて、攻撃は全般的の聲となり、長流・契沖・春滿・その甥在滿等の論難で、中世に代る新和歌觀の出現が用意された。唯、彼等自身の作歌は、中世の因襲的歌風を殆ど出でず、二條家を攻撃しつゝ、二條家風の歌風に終始した事は、論と作との不一致であつた。

扱、以上の破壊的作業の後に、新興歌論として提出されたものが、荷田在滿の「國歌八論」であり、又、それを論難して興つた田安宗武・賀茂真淵の古代的萬葉的歌論であつた。而して此の轉廻の

背後に、時代の移りを認識せねばならぬ。中世の宗教的神秘的生活・思考法に對して、近世の現實的・科學的生活や思考が新興した。而して、生の喜び、個性の自由が自覺せられた。歌論の轉廻は此等の土壤に芽生えたものに他ならぬ。

在滿は寛保二年「國歌八論」を著した。之に上記の破壊的側面の他に彼獨自の建設的立場が見える。それは文學の本質論から出發したもので、元來歌は歌ふ事である。併し歌は、自然のまゝの聲ではなく、表現の技巧が加はつてゐる。故に「夫歌は言葉をを永うして心をやるもの也」と、特に言葉を飾つて心を露らすと見た。即ち、歌の本質は技巧的なものだと思つた。「わざ」のものだと見た。之を歴史的に見ても、本來は口に歌ふ古歌で自然のまゝである筈なのが、既に萬葉の頃から、歌ふ歌と歌はぬ歌との差別が出來た。「歌はぬ歌」と云ふのは、文學的な歌と見られるが、此の歌はぬ歌は歌の本質を失つたものであるから、せめて詞花言葉を翫ばうとする。こゝに、よく言へば藝術の爲の藝術、悪く言へば「わざ」を尊び、樂しみの爲に歌作する事となる。斯く心よりも言葉の綾を重んずる事となつて、歌は新古今時代に至つて、その發達の最上に達したと見る。彼の觀方が新古今の全面を捉へ得たかは疑問があり、特に定家に對する見解は偏憎に陥つてゐるが、和歌の發達上から新古今を見、之を賞讃した事は、確に一つの卓見である。

彼は又詞花言葉を翫ぶのが歌の本質だとし、技巧の「わざ」に生命があるとするのだから、いはゞ

純藝術的見解で、歌が經世教化の爲になる等の功利的立場に反對する。

彼の立場は、多くの非難をまき起した。唯宣長が獨り賛成したが、宣長に就いては後に述べる事とし、反對派を觀察してみる。

在滿に對して宗武は「國歌八論餘言」を著し、在滿は「國歌八論再論」を以て之を駁し、眞淵は「國歌臆說」を出した。此の眞淵論を宗武は評して「臆說剩言」を著し、眞淵は「再奉答金吾君書」を作り、宗武は又「歌論」を作つた。宗武・眞淵は共に萬葉を主としつゝ其處に小異がある。

宗武が、在滿の新古今に對し萬葉を提示したのは、歌は我が思を述べるのだから強ひて巧を求むべきでない。徒に技巧を求め表現を飾る時は難解となり下賤ともなる。此の點で萬葉の自然にして素朴なるを尊重した。又在滿が技巧の「わざ」を賞美するのに對し、「ことわり」を説いた。之は文學的には、表現より内容性を尊重する立場であるが、文學以外の要素をも含み、理知的内容や道義的色彩をも歌の中に要求しようとする立場である。彼は最近發見された「歌論」に於ては遂に、文學の勸善懲惡的性格の必要までも説いた。此等に於て、萬葉・古今二歌集を比較する時、萬葉が彼の心を捉へた事は勿論である。

而して眞淵は如何。眞淵の歌論は上記の他、後年のものに「歌意考」「にひまなび」があり、一書を成さぬものとして、萬葉考序・點評本金槐集がある。彼が、古を慕つて、萬葉を好んだ點は、宗武

と一致する。併し、宗武が「ことわり」を説いてあまりに道義的に走るに對し、彼は、感情を重んじ、又歌の聲調・リズムを尊んだといふ相違がある。宗武の薨後、彼の歌論はなほさまざまに發展した。その事は次の一二五項に詳説した。

而して、在滿・眞淵時代の歌界は、總じては古今集ばりの、と云ふより鎌倉中期以來の二條家風の歌を一般に作り、契沖・春滿・在滿の如き古代の歌風を學的に知つてゐた人々も、作は一般と同傾向であつた。然るに、宗武と眞淵とは、少くともその晩年には、智的に萬葉を尊ぶと同時に、創作家としても萬葉風の歌を詠じた。此處に、情智の統一を發見出来る。

眞淵の弟子は、作歌傾向に於て三派に別れた。楫取魚彦かとりなほこの様に、師にならつて論と作との合一に於て萬葉風を繼承するもの。春海・千蔭の様に古今風にとゞまるもの。宣長の様に、一體古今風だが新古今の風を望んでさる歌風をも詠んだもの。第二の風が數に於て最も多數を占めた。併し、後世の所謂「萬葉歌人」たる、元義・曙覽・言道・愚庵・子規・左千夫・節等たかしから、赤彦・茂吉に及ぶ眞淵の影響は彼の萬葉的歌作活動の効果が甚だ多大であつた事を意味しよう。

次に、在滿に賛成して、宗武・眞淵に反對した宣長に就いて述べる。宣長の歌論は「排蘆小船」「石上私淑言」「國歌八論斥非論」「國歌八論斥非再評の評」「紫文要領」に見える。

宣長は、在滿と同じく、歌は感情の表出である。同時に、その感情は文學的表現を伴はねばなら

ぬ。歌の意と詞の内容と表現との中では、寧ろ後者を先とすべしと説く。こゝに在滿との共鳴、宗武、眞淵との背反がある。斯く眞淵などの後に宣長の説の現れた事は、爲兼の内容主義―萬葉主義の後に「愚問賢註」(頓阿)の表現主義―非萬葉主義の現れた吉野朝の歌壇が想起される。唯、宣長には總ての先人達よりも進んだ考説がある。歌は感情の表出であるが、それが何故、詞の技巧と結びつき得るかといふ點を究めてゐる。即ち、感情が有りのまゝに表出される時、それは決して平談俗語的な表現を取らない。感情の高潮は、おのづから洗煉された表現を生む。故に之を歴史的に見ても、各時代の歌はおのづからその時代の巧の限を盡してゐると説く。

斯くて、此の表現尊重論は遂に創作心理にまで突進み、歌は己一人の心遣りに作るのではなく、他を意識した對他的表出である。故に此の點からも技巧を必要とする事となる。之はいはゞ、文學の純粹な藝術性を主張したものである。従つて彼が文學の獨立性を意識し、在滿と同じく功利主義を斥けたのは當然の歸結であつた。特に彼のは、平安文學から得た「もののあはれ」の見地と關聯した深い根據から出發してゐる點に興味がある。

何故「もののあはれ」と關聯するか、といふに、彼によれば、歌の中心は感情だが、その「情」とは、平安文學に於けると同じく、女々しく儂く痴愚な性質のものである。こゝに同じく、感情中心の歌論ながら、眞淵は雄勁な「ますらをぶり」的なものを本質と見、宣長は主情な「もののあはれ」に



近い所に根本を置く。斯くて彼は、戀歌の如きも決して否定すべからずとする。極めて非教化的な意見である。宗武・眞淵、特に宗武との對照が著しい。

かうして宣長の見地から和歌史を見る時、在滿と同じ新古今尊重となる。記紀の歌は、思ふがまゝを表したゞけで、「わざ」がない。萬葉で素朴な歌と技巧的な歌と相半し、新古今で歌の極致を得た。故に新古今を尊しとする。斯くて、上記の様に各時代毎に、出來る限りの綾を盡して後世の歌風に至つたのだから、之を眞淵の如く古代萬葉だけをよしとして言葉も萬葉語を使ふ様な必要はないと見る。

次に、京都の小澤蘆庵は、眞淵に些か後れて宣長や千蔭と同時代に出で、「ただ、こと歌」を説いた。

彼の歌論は、皆晩年の著で「蘆かびちりひぢ」「或問」「ふりわけ髪」「ふりわけ髪自注」がある。こゝに説く所は歌はあるがまゝの感情があるがまゝに表すべきものだとし、感動のまゝを自己の飾らぬ言葉で表すべきを説いた。之は、俳諧の鬼貫の態度、眞淵の感情を重んずる態度と一致する。唯、眞淵が萬葉を尊び、我が歌をも萬葉語を以て作るに對し、寧ろ現代の言葉を以て創作せん事を主張した。それは眞淵は感情を重んずるが、と同時に古代の純直な表現を愛し、故にそれに習はんとして古代語を使ふに對し、同じく直接感動に即しようとして我が言葉に據らうとするので、蘆庵の方が一元的である。斯くて彼は「ちりひぢ」に於て、歌に三義を立て、心のまゝに自己中心に詠む歌。此の至境に達せぬ間、記紀歌から八代集までの古典に依つて詠む歌。古典の中では古今集に據つて詠む歌。以上

三種の立場のある事を説き、第三をよしとする。故に彼は、新古今派・萬葉派に對して古今派の主張者である。但し、右様の限定的(三種の内の一)古今派であつた。彼のたゞこと歌及び古今尊重は、香川景樹によつて繼承され、より強烈に主張された。景樹については次項桂園派の歌論を参照されたい。

尙、蘆庵と景樹の作品は、勿論古今集風の體で、宗武・眞淵と同じく、論と作との一致を見る。景樹の詠風は、現在に到る迄所謂「舊派」の名で傳承されてゐる程多くの追隨者を得た。

最後に、富士谷成章、その子御杖の神秘的歌論がある。

成章の論は「歌袋」「五級三差」「六運圖略并辨」によつて知り得る。先づ、平安朝以來の宿題であり近世では在滿以來の問題である心と言葉とに關して、彼は心・聲・詞・姿・旨・趣の六項に分けて極めて精密な理論を發展させてゐる。又歌を作る創作心理の過程を「旨趣」「體かた」「上あは」「影」の順を立てて説く。更に此の立場から、歌に價值づけを施し、第一は歌の眞實の姿を得た最上のもの。第二は求めて其處に至つた場合で心と形との調和されたもの。第三は自然のまゝの姿のもの。第四は未だ歌を心得ぬ場合。第五は積極的に缺點のある歌。と區別し、尙ほ細い分類を加へてゐる。彼は更に、古今集序の六義に習つて「のばへ歌」「よせ歌」「むかへ歌」「まもらへ歌」「かさね歌」の種別を立てた。更に歌の發達史を六時期に分けて、上つ世・中昔・なかころ・近昔・おとつ代・今の世、とし、その各時代を更に細く區別してゐる。而して第二期の古今集時代を最も重んじたと見られる。總じて、斯かる細

密な分析的態度と、綜合的組織とが彼の學風の特徴である。

次に、御杖の歌論は「歌道非唯抄」「眞言辨」「北邊髓腦」「哆南辨乃異則」「誦道學要」「五級三差辨」に見える。彼は、學風の根本は父に負ふ事多く、全體として甚だ形而上的であり、寧ろ神秘的である。彼によれば、歌は教戒の一法であるとし、又神道と關聯させて宗教的和歌觀を説く。特に、古代の言靈を信じ、歌は言靈の發動だとする。斯くて、古の「神ながら言學せぬ國」の言葉に執著して、表に言はずして中に意を含ましむるが故に、歌は始原期に於ては「倒語」であつたとする。特にその晩年には、歌を解するに表面の意を解く言と、裏面の眞義を解く靈とに分けるまでに至つた。「萬葉集燈」の如きは此の説の實踐的註釋書である。

#### 文獻

和歌史の研究 佐佐木信綱

日本歌學史(同上)

近世和歌史(同上)

大日本歌學史(福井久

藏)

新講和歌史(兒山信一)

日本歌論史(土田杏村 全集第一三卷)

日本文學評論史(久松潜一)

### 二五 縣居派と桂園派との歌論を比較評論せよ

縣居派即ち賀茂眞淵の歌論と桂園派即ち香川景樹の歌論は、徳川時代の歌論として共に代表的なものと云へるが、兩者には共通點と相違點とが、混在してゐる。

縣居派 眞淵の歌論は「にひまなび」「歌體約言跋」「國歌論臆説」「國歌八論餘言拾遺」等に見

える。各種の複雑な内容を含むが、その論の出発點は、歌は元來は口に歌つたもので、感情を中心とすべきで、理ことわるものでない。自然のまゝを歌ふべし、とするにある。もつとも、之は荷田在滿の國歌八論に見える意見で、眞淵は其の後年に説いたものだから、在滿の影響と云へよう。彼は此の説と別に、歌が自然に人を教化する點を特徴として認めてゐるから、純粹に之で一貫したとは云へないが、根本に於てこの態度である。

此の感情中心主義が、さまざまの形を取つて表れた。その第一として、彼が調しちべを重んじた事を挙げられる。「古の歌は調を専らとせり。うたふものなればなり」と説いた。歌は口でうたふものとの説は、彼の反對派在滿の「國歌八論」と同一出發點であるから、或は在滿の説を彼が取入れたものかとも考へられる。その内容は、彼が理想的と見た古代の歌が、口誦歌であつた爲、古代は調を中心としたといふ見解で、彼が歌の内容と共に——或は内容以上に聲調・リズムを重視した事を語つてゐる。此處に歌の情趣的方面を重んじ、歌を直感的に受取つて理知的な詮索の如きを排する態度を見る。

その第二は、彼の所謂「ますらをぶり」尊重にうかゞへる。それは「高く直き心」を持つ古代への憧れと合一して表れてゐるが、根本に於ては、理ことわわりを避けて感情や調を重視するに基く。彼の「ますらをぶり」は、二種の内容を持つ。一つは、素朴で素直な粉飾のない姿である。二つには、雄勁で壯大な人麿の歌の様な姿である。之は、後世の「手弱たわやめ女ぶり」と對照するもので、此の素朴さと強さ

とは、彼によれば歌の根本であり、あらゆるよき歌は此の條件を備へてゐるとする。併し、歴史上にそれを求むる時、最も此の條件を満すものは古代の歌である。人麿及び實朝をますらをぶりの模範とみる極端な崇拜は、此の表れである。萬葉及び萬葉的なものへの崇拜は、彼の晩年に成熟したもので、彼の實作及び文學觀に新古今的な句を残してゐる點があるが、主調としての萬葉崇拜を疑へない。而して、此の文學觀の根本として、こゝに彼の全般的古代尊崇を觀察せねばならぬ。

斯く、古代は歌論に於ても理想的時代であつたが、根本的には彼の生活、彼の世界觀の理想郷であつたもので、歌の場合はその表れの一面に過ぎぬともいへる。彼は、古を知る事が、現代の濁れる世を救ふ根本で、その爲には古の言葉を知らねばならぬ。言葉を知る爲には萬葉を學ぶに如くはない、その爲萬葉を研究するといふ極端に便宜的な萬葉研究論まで唱へてゐる。彼の、古代は自然のまゝに「高く直き心」の時代だとするのは、老莊の影響と見得るものであるが、之が彼の學風の主流をなし、後世への影響の著しかつた事いふまでもない。

而して、斯かる論説が、倫理的色彩を帯び、或る時は政治的意識を含む事は當然であつた。此の一面は宣長・篤胤へと大きく發展して行くが、彼の對萬葉に表すものは即ち之である。唯、單純な歌論の場合には歌を經世の用具とする等の論にまでは至つてゐない。歌の自然のまゝの姿がおのづから人を教化すると説くに留まる。

以上、眞淵の歌論は、

(一)感情中心 (二)調の重視 (三)ますらをぶり (四)古代尊崇 (五)教化色彩  
とほど五點に分けて考へられる。

桂園派 景樹は、眞淵と異つて、その説の由來を先人に負ふものが甚だ多い。つまり根本的な獨創が少い。その説は、「新學異見」「古今集正義總論」「桂園遺文」等に見えるが、それを要約して、

(一)自然のまゝ主義 (二)調の説 (三)用語論 (四)秀歌論 (五)古今集尊重  
と分けることが出来る。

(一)彼は、小澤蘆庵の「ただ言歌」の説に影響されて、歌は自然のまゝの作歌衝動に従つて作り、ありのまゝに歌ふをよしとした。それが、實際歌作上には、歌は「實物實景に向ひてさら／＼とよめ」と云つた言説となり、内容論としては、歌は、自然・人事を通じてその底に在る眞なるものを現す。作者で言へば、その心の誠の自らの表れだと説かれ、表現的には調の説や、平俗語尊重論等へ發展して行く。而して之は、眞淵の感情説からの影響もあると思はれる。彼に於ても歌は理わるものでないとして情趣を重視した。唯彼に於ては、それが發展して、歌は教化等の爲にあるべきでなく、歌そのものゝ爲に存在すべしとして、教化主義を難じてゐる。此の文學第一主義の點が、眞淵よりもより純粹に感情尊重だといへる。

(三)調の説は、彼の歌論の中心であるが、之も上掲の眞淵の「古の歌は調を専らとせり」等からの影響で、根本的な獨創とは思はれない。然るに彼が、此の眞淵の言葉を目の敵にして悪口の限を盡してゐるのは卑怯である。彼の調の説は、内容的には上記の誠の論と通ずる。さう云ふ根本的な「眞」なるもの、「誠」なるものが外部へ現れたのが、歌の「調」だと説く。では、歌の形に現れた「調」とは、如何なるものか、と云ふに、「語勢は即ち調なり」「眞偽は語脈語勢に聞き知る事なり、これを調を知るといふ」「調と申すは音調の事にて云々」等の立言から、それは、歌の音調でありリズムである。こゝに眞淵の調論と根本の一致を見る。唯、彼は尙立場を進めて、歌の雅卑は、その言葉によらず調による、と力説してゐるのは、上記の内容的側面と併せて、調の説が彼の文學觀の統合的 highest 理念となつてゐたと見得る。

(三)用語論——自然的創作態度を尊べば、表現の言葉は特別なものを要せぬ事となる。又一方、上記の歌の佳俗は言葉によらない、と云ふ見地からも、言葉自體の雅俗が問題にならぬ事となる。斯くて彼は「平語」を用ゐる事、現代の人々の使ふ言葉を使ふ事、を主張した。以て、眞淵の古代尊重、萬葉語使用の攻撃に當てた。「今の世の歌は今の世の辭にして今の世の調にあるべし」「丈夫の風にならへといひ又萬葉に似ばやと思へなどいへるは、偽を教へて誠を亂すものなり」と説いた。

(四)秀歌論——彼の考へを、純粹に押しつむれば、調の佳なる作は何でもいい、と云つた事になる。

が、「何が調の佳なる作か？」と云ふ實際論になれば、ずつと限定されて來る。こゝに景樹の調の説は一種の破綻がある。彼は、實際の作としては、なだらかでうるはしく上品なるをよしと説く。「まづ歌は永言するにて、常よりもいとなだらかに、打聞くよりも心のどやかにこそ成行くべきものなれ」「しつとりと致すが所謂調べの整ひたるにて候」「調のうるはしきがよろしく候」「うづ高くうるはしきは即ち天地のこゝろにて、やがて天地の調なり。此のしらべを得たるをよき歌とす」などで彼の考へ明白である。併し、「歌は平語にしたがひてうるはしく上品にしらべ上るを第一とす」になると、平語俗言を用ゐて如何にして上品にうるはしい聲調となり得るか、そこに疑問があり、彼の調の説が一個の抽象論に墮した危險を感じる。

(五)古今集尊重——彼は模範的作品として、古今集を推し、貫之を尊崇した。彼の調の説が此の歌集で具現されてゐる、と見るのである。勿論、縣居派の萬葉尊重と對立するもので、上掲の萬葉排斥論と、「短歌は古今を學び足りぬべし」などの古今集論と對照すれば、その立場を知るに足る。

之を要するに、縣居派と桂園派とは、本質的には、一は母體であり、他はその發展した形と見得る。唯、景樹の周知の偏狭な性質が、母型との相違を力説するに専らである爲、外面的には後者は前者と別物なるかの感を與へる。その點、景樹の企圖は成功した、とも云へよう。

## 文獻

前項所掲のものゝほか、新講和歌史(兒山信一)

上代民族文學とその學史(久松潜一)



## 二六 俳諧の附合の變遷を述べよ

戰國時代に山崎宗鑑と荒木田守武が出て俳諧を創始した。宗鑑の附句は前句の縁語を附けたものと前句の謎を解くやうなものとあつた。前句の縁語を附けたもの、中には、古歌をもじつたものもあつたけれど、何れにしても滑稽が附合の目的で、此の點は中古以來の狂連歌の復活と見られる。但し宗鑑になると、取材の範圍も廣く、言語も通俗で、自由で、一層狂態を盡してゐる。守武の俳諧は其の著「獨吟千句」の跋に言つたやうに、俳諧は笑はせるばかりではどうか、花實を備へ、風流であつて、而も一句正しく、滑稽であつてほしい、といふのだから、宗鑑のやうに野卑な肉感的な句は無く、縁語の滑稽、古歌・物語に聯想を持つた洒落な風であつた。

其の後徳川の初期に松永貞徳が出て附合の風を改めた。貞徳は宗鑑の附句を批評して、その無俳言を指摘し、用附・同意を禁じ、更に正體なき句・理なき句・作物の句を斥けた。

貞徳は、俳諧は百韻ながら俳言(音韻する詞、俗語の類)で賦する連歌であるから、端作りも俳諧之連歌と書かなければいけない(年號定)と主張したほど、無俳言の句を嫌つた。此の意味は俳諧を連歌から全く獨立させて、立派な文學的地位を與へようとしたために外ならない。用附(前句の名詞に附屬す)、同意(同意に附屬す)の禁は既に連歌に見えてゐたが、連歌師の俳諧は連歌のための狂言であるから、強ち斯かる法式

に拘泥せず翫んだものであつた。貞徳が之を禁止したのは、一卷の變化に影響を及ぼすからで、此の點は連歌の制を守つてゐる。正體なき句、理なき句(意味の分らない句)なども、宗祇時代に於て既に咎められた例があつたので斥けたものらしい。次に貞徳は體附(前句の體言に體言を附ける事、或は前句の用言に體言を附ける場合もある。連歌の體用關係の體附)、取成附(外句を味に取成して附ける事、比喩附である。但し前句の詞の聲によつて取成し)、心附(前句の意味を附ける事であるが、貞門では詩歌・物語)、景氣(景色を附ける事、連歌に)等の附句を採用した。要するに貞徳の附合は詞附で、それに實質に於て純正連歌の優美な趣を繼承し、言語・表現に於て狂連歌の通俗滑稽趣味を復活させたものであつた。

次いで延寶頃西山宗因の談林俳諧が勃興して、貞徳の俳諧は當世のすたり物の一つに數へられるやうになつた。宗因の談林風は道化・輕口が主で、取材の範圍も小唄・淨瑠璃の文句や芝居・傾城の物真似・痴情に迄廣がつてゐた。貞門の中島隨流は宗因の蚊柱百韻を難じて、句毎の不埒、用附・同意・新俗異風、たゞ無法放しのめた的であると言つてゐるが、宗因の附合は滑稽も古い所があり、さう甚しく突飛でもないが、門人の井原西鶴・菅野谷高政・岡西惟中などに至ると、異體・放埒の句が多い。一體談林の附合は、語句の無理な叙法と、奇抜な比喩と、古事の道化た糺案とが眼に付いて、貞門の徒から痛罵されたのだらうが、それも一時の流行で、貞享のはじめ頃松尾芭蕉の所謂正風俳諧の成立と共に一掃されて了つた。

「花實集」によると、芭蕉は、附句は三變である、昔は附物を專とし、中頃は心附、今はうつり・響き・

句ひ・位を以て附けるのがよいと言つてゐた。うつり・響き・句ひとは二句の間の情趣の呼應である。うつりは俗にいふうつりがよい悪いのうつりで、反映といふ義であらう。例へば「赤人の名はつがれけり。初霞 史邦」。「鳥も轉る合點なるべし。去來」の附合に就いていふと、つがれけりといふ俗談的な氣持に、合點なるべしが反映するのであらうと思ふ。名は面白やと言つたら、轉る氣色なりけりとしなければならぬと其角は言つてゐるが、それでなければ相互に面白く映らないのだらう。響きは「打てば響くが如し」とあつて、格調の上から二句の情趣を呼應させたのであらう。例へば「樽縁に銀土器を打碎き」、「身細き太刀の反る事を見よ」といふ附合に就いていふと、附意は楠公の子別れのやうな場面で、我子に身細き太刀を形見として與へる所であらうが、打碎きと言つた表現に對し、太刀の反りを示した緊張した調子が、情趣を響かせるので、呼吸が合ふのである。句ひは支考説によると、百句が百句ながら二句の間に籠つてゐるといふ。蓋し風韻を言つたものであらう。「花實集」其の他にも例句を見ない。位は前句の人の品位とか場所の狀況を知つて附ける附方である。例へば「上置きの干菜刻むもうはの空」、「馬に出ぬ日は内で戀する」、此の前句は人の妻でもなければ、武家・町家の下女でもない、宿屋・問屋などの下女と見て附けたのである。去來説によると、うつり・ひびき・句ひは附けやうの鹽梅也とあつて、附方の程度と解してゐる。附方は前句によつて千變萬化で、必ずしも此の四種に限りはしない。

芭蕉歿後、其角・沾州の洒落俳諧があり、素丸・宗瑞等の五色墨の運動があり、寶曆以降谷口蕪村・加藤曉臺等の天和・貞享の蕉風に基いた復古運動が起つて、附合は典雅ではあるが、空想的な連歌的な華やかなものになつた。天保以降明治にかけて、附合は「炭俵」調の輕みの皮相的な模倣に墮ちて、無氣力に萎靡して了つた。

文 献

俳諧略史(大野洒竹)

芭蕉以前俳諧集上(俳諧文庫)

俳諧史の研究(頼原退藏)

俳諧史論考

(同上)

芭蕉の全貌(萩原蘿月)

俳文學研究(各務虎雄)

一三七 貞門・談林・蕉風の特色如何

一、貞 門 貞門の流祖松永貞徳の俳風は「やさしきを體とし、をかしきを用とす」(下くしげ)と言はれてゐた。即ち實質に純正連歌の優美な風を保存し、言語・表現に狂連歌の通俗・滑稽な趣を取入れてゐた。併し貞徳の主眼とする所は、俳言を用ひたり、掛詞や縁語による通俗化・滑稽化で、内容より形式に特長があつた。貞徳は山崎宗鑑の附句を批評して、用附・同意を禁じたり、正體なき句・理なき句を斥け、反對に體附・取成附・心附・景氣の句を採用した。此の點は連歌的であつたが、詞の通俗・滑稽といふ點が、彼の最も特色とする俳風であつた。従つて貞徳の流派は、斯かる師風を大體遵奉して居つた。尤も門人によると、例へば松江重頼の如く、歌意を專にし、「俳諧の縁なくして、思入の連歌な

る句」(毛吹)などを説いてゐる者もあるから、多少の相違はあるが、先づ大體詞の俳諧と見て差支へはない。

次に貞徳は連歌の式に倣つて、俳諧の式目を制定し、「俳諧御傘」を著した。之は連歌の式を緩和したもので、其の後野々口立圃の「はなび草」、北村季吟の「山之井」などの著によつて、式目・季題の知識が流布されるやうになり、ひとり貞門のみならず、各派の基準となつた。そして式目・季題の俳學者は、殆ど貞門の徒の獨占であるかの如き觀を呈して、後世に迄及んだ。

又貞門の中心勢力は上方で、漸次東西に普及し、その隆盛期は寛文頃迄で、元祿以降は蕉風に化せられつゝも、なほ業俳たる地位を京都地方に占めて、後世に至つた。

三、談林 貞徳流の俳諧の單調と、法式の煩瑣とに飽いて、斬新奇拔な俳風を樹立しようとしたのが、談林の流祖西山宗因の運動であつた。

宗因は元來連歌師であつたから、中でも穩かな點もあつたが、飛體とびていと言はれた江戸の田代松意、半傳はんでん運社うんせと號した京の菅野谷高政、阿蘭陀流あらんたと稱した井原西鶴などは、新奇・異體の風で、門人の方が却つて師より放埒・無慚であつた。即ち用語も漢語・俗語を用ひ、表現も十七音形式を墨守せず、用附・同意の禁を破り、比喩によつて古事をもぢり、道化・輕口に落して、ふざけた滑稽を表してゐる。貞門の中島隨流が談林派の岡西惟中の「皮肉百韻」を痛罵して、「大惡無道七句」、「餓鬼作り十句」など

と指摘してゐるのも尤な事であつた。

又一面速吟を尊ぶ傾向が生じ、短時間で、出来るだけ多くの句を作つて誇とした。古式では千句は三日が定法であつたが、談林では一日で作つてゐる。殊に井原西鶴の如きは、矢數俳諧と言つて、一日に四千句或は二萬三千五百句を作つて、世人を驚倒させた。

要するに談林の功績は、古風の千篇一律の弊を破り、用語も自由に、取材の範圍も擴張して滑稽趣味を豊かにしたけれど、道化・輕口と口拍子の速吟に墮ちて、ふざけたものにしてつた。破壊的な效果はあつたが、建設的でないから、過渡的な俳諧となつた。貞享以後蕉風が起つて、三都の談林は衰へて了つたが、それでも江戸談林だけは、江戸座の宗匠として、後世迄勢力を保つて居つたが、之も俗化した蕉風で、昔日の豪放な俳は無くなつた。

三、蕉風 蕉風俳諧の根本精神は、寂・葉・細みであつた。寂とは句の情調である。去來の説によると、老人が甲冑を着て戰場に働くとか、或は錦を飾つて御宴に侍しても、老の姿が見えるやうに、賑やかな句にも、靜かな句にもあつた。つまり作者の觀照氣分に靜寂な趣があれば、それが寂であつた(項參照)。葉は去來の説では、趣向・詞・器の哀憐なるを言ふのではなく、句の餘情にありとあつて、句の餘情的表現の整頓が葉であつたやうである。細みも亦去來説では、たよりなきではなく、句の心にありとあつて、感覺の鋭い句法の緊密した、よく物の焦點を捉へてゐる状態を言つたやうである。

又蕉風では法式に就いて必ずしも古式に従はなかつた。例へば所定の切字の有無に關しないで句作したり、賦物を取らなかつたり、意味が戀であれば、戀の詞を用ひなくとも、戀の句にしたり、或は戀を一句で捨てたりなどした。

蕉門に移・響・句といふ獨特の附方があつた。移とは反映といふ義から出た語で、二句間の情趣の反映的呼應であらうと思ふ。響とは打てば響く如く、語感の呼應、句とは風韻の呼應であらう。

又、芭蕉は文章に於ても一生面を開き、蕉門に於て所謂俳文の格が定まつた。

蕉風の變化は十一變・七變・三變などと論ぜられてゐたが、蕉風の確立は貞享の「冬の日」以後で、其の後「猿蓑」「炭俵」と變化したので、大體からいふと以上の三變が要を得た論かと考へる。併し芭蕉歿後の蕉風は、各自門人が門戸を構へ、勢力を張つて、漸次醇正な風を失つた。

安永・天明に於いて、谷口蕪村・加藤曉臺其の他によつて、蕉風復活が唱へられたけれど、その風は耽美的な空想的な新風で、未だ蕉風に醇ならざる延寶・天和の風に根ざしたものであつた。化政度はなほ清新な風も残つて居つたが、天保以降俳壇は俗化し、徒に「炭俵」風の輕みを模倣し、平凡陳腐所謂月並調に墮ちて了つた。

## 文 献

俳諧略史(大野酒竹)

芭蕉以前俳諧集上(俳諧文庫)

俳文學の考察(志田義秀)

俳諧史の研究

(頼原退藏)

俳 史論考(同上)

芭蕉の全貌(萩原蘿月)

## 二二八 芭蕉と蕪村とを比較評論せよ

芭蕉は門人の長所・短所によつて、種々の教を垂れた。例へば酒堂には、發句は汝が如く、物を二三つ取集めて作るものではない、黄金を打延べたやうにありたいとか、許六に向つては、發句は取合せものと知るべしなどといふ風に、それ／＼異つた教へ方をした。去來が「舟に病ふ西國の馬」といふ句を芭蕉に示したら、芭蕉は之は手帳である、こしらへ物であると言つた。蓋し芭蕉の眞意は、取合せものでなく、大膽に、眞率に、頭から言ひ下した作風を好んだやうである。くま／＼迄言ひ盡したり、言ひ終せたりした句は、餘韻・餘情を失ふから、情味が淺くなり、品が落ちる。そこを芭蕉が斥けたのである。一體蕉風の根本精神は寂・葉にあつた。之は芭蕉が性格的に閑寂を好み、山林に籠るやうな氣持を喜んだ結果である。従つて芭蕉の句は自然現象の詠歎が一般で、人事の句でも野趣があつた。芭蕉は實際經驗を尊んだ。東海道の一筋も知らぬ人は、風雅に覺束ないと、常に許六に物語つたさうである。此の意味は、居ながらにして名所・舊蹟を知るといふ歌人の傳統作法を打破した言で、實感を離れた空想や作意ある技巧は作り事に終つて、物の眞實性を失ふから、芭蕉の取らぬ所であつた。芭蕉の句風の簡素であり、自然であつたのは、それがためであつた。

蕪村の行き方はさうでない。元來安永・天明期の復古蕉風は、延寶・天和・貞享時代の蕉風に基いて



居つて、蕪村も貞享三年の「初懷紙」の調を喜んで居つたやうに、元祿の圓熟した寂・葉調の復活ではなかつた。「初懷紙」は其角の編で、句が技巧的で、空想的で、蕉風確立後の撰集としては、「冬の日」に次ぐべきものであるが、後の「猿蓑」のやうに、所謂蕉風の腸を見せる集ではなかつた。従つて蕪村の風は大體華やかで、寂に乏しい。用語も漢語や支那の成語や中古の雅語を用ひて、古典的な句を漂はし、實情を一層美化して表してゐる、例へば牡丹の句でも、取合せ風の表現によつて、花の艶麗さを實際以上に巧に表してゐる。蕪村には人事の句が多い。それも歴史的な古典的な趣味のものや、劇的な小説的な結構のものもあつて、明かに作意の妙を示してゐる。此の點は芭蕉の簡素な實情に即した風とは大に違ふ。蕪村に狐狸の怪を詠じた句の多いのも、その特異な一例である。尤も之は蕪村が斯かる怪異を信じたからでもあらうが、延寶・天和の幽玄調の共鳴と感化もあつた事と思はれる。後の芭蕉は之を捨てゝゐるが、蕪村は空想趣味の對象として、最後まで之を活かして居た。

芭蕉は徳望の人であつた。弟子三千と傳へられ、到る所翁と言つて尊敬されて居つた。生活は弟子より貢がれ、質素ではあるが、自由な高踏的な生活をした。その餘徳は歿後まで續いて、飛音明神とか桃青靈神とか言つて祭られた。

蕪村はその點徳望に乏しかつた。飄逸・洒落な性格で、大高源吾傳來の茶碗を咸陽宮の釘隠しと言つて、人にくれて了つたり、松島の天麟院の和尚から、名取川の埋木を貰つて、白石の驛まで持つて

來たが、うるさくなつて旅宿の縁の下へ捨て、來たなどといふ逸話もあるが、その尊崇は遠く芭蕉に及ばなかつた。終世貧乏で、門人も少なかつた。明治になつて正岡子規の推薦によつて世人の注目するところとなつたが、それまでは俳人としてよりも、畫家として認められてゐた位であつた。

文 献

芭蕉の研究(樋口 功)

芭蕉の全貌(萩原羅月)

俳人蕪村(正岡子規)

蕪村の新研究(乾 猷平)

一三九 左に表れたる連句の法式を述べ、特に各句の附合を説明せよ

春日 晚望

日は落て増かとぞ見ゆる春の水

几 董

梅おぼろなる野はづれの家

萬 客

田螺賣ル童が翁焼火して

白 砧

小瓶の酒の雫つれなき

龜 郷

北風に秋を催す夜半の月

九 湖

蚯蚓音を鳴く門のせゝらぎ

竹 裡

(續明鳥集)

法則 歌仙の表である。歌仙は三十六句より成り、法式は百韻の略で、懷紙も二枚を用ひ、専ら蕉門より行はれた。

發句	春	夏	秋	冬
脇	春	夏	秋	冬
第三	春	雜	月秋	雜
四句目	雜	雜	雜	雜
五句目	月秋	月秋	雜春・夏・ 冬の内	月秋
六句目	秋	秋	雜	秋

の餘韻・餘情を表し、發句の言ひ足らぬ所をこゝで補ふやうにするのが格であつた。發句は客の位、脇は亭主の位であるとか、或は脇の身柄持ちたるは脇の心でないとか言はれてゐる。又脇は韻字留めと言つて、名詞でしつかりと意味を結ぶ事が制であつた。第三は普通「て」留めであるが、「に」「らん」「もなし」などの留めもあつた。句の末を韻字で留めないのは、意味を言ひ切らないで、後に残すためである。又第三は轉句と言つて、前句の事柄を一轉化させる場所であるからであつた。四句目は輕く作る事が格であつた。一卷の變化は此の句から始まるとも言はれてゐる。五句目を月の定座と言つてこゝへ必ず秋の月を出す事になつてゐたが、蕉門では月・花に定座なしと見て、場合によつては其の

發句はたけ高く作る事が連歌以來の教であつた。即ち堂々と一卷を壓するやうな位が必要である。歌仙は略式であるが、此の心持で作る事になつてゐた。脇は發句の季に従はせるのが連歌以來の教であつた。春と秋が第三まで同季にした事は、春と秋は特に景物が多いからである。古來脇は發句

座を動かしてゐた。但し表に月の無い連句は素秋すあきと言つて嫌はれた。月・花は連歌では五景物の一つに數へられたほど尊重されたもので、初心者や身分の低い者には遠慮させて居つた。俳諧でも此の餘習を承けて、功者に譲らせたもので、素秋も斯かる關係上嫌はれたものであらう。總て表の内は神祇・釋教・戀・無常・述懷・名所等の句を嫌つた。之は一面此等の句は情緒的になり易く、句の氣分が重く、複雑して來る所から嫌つたものであらう。

古來思想進行の順序は、序・破・急といふ制に従はせた。之は連歌以來の説で、表はなるべく穩やかに、目立たぬ言語を用ひ、靜かに進ませ、裏へ入つて縦横に變化を見せ、名残はさら／＼と軽く卷き終へるのが法式であつた。

**附合** 發句は廣々とした田園の春の夕暮の光景である。かなり幅廣い川が流れてゐる。夕日は山の彼方に落ちて あたりは薄い靄が立ちこめてゐる。夕暮の川はゆるく流れてゐる。恰も水嵩が増したかと思はれる位にだぶ／＼と流れて行く。増すかとぞ見ゆる、が巧な表現である。いかにも春の夕暮の長閑な田園の光景を表してゐる。

脇は發句の餘景を拾つて、野の果に二三軒の百姓家が見える。梅が白くぼんやりと咲いてゐるといふ、發句の大きい景色に大きい景色を添へてゐる。

三句目は梅が白くぼんやりと咲いて見える野はづれに、田螺を賣る一軒の家があつて、子供は毎日

附近の村へ田螺を賣りに行くが、祖父は老人の事とて、春になつて暖くなつたと言つても、まだ餘寒が厳しいので、焼火にあたつてゐる、といふ意。田螺は水田に住む殻に入つた動物で、春食用に供するもの。

四句目は前句の老爺を酒好きと見て、小瓶の酒を取出して飲まうとしたら、酒は空で、雫が垂れるだけ、佗しく思ふ貧家の状である。

五句目は百姓爺と見ても、風流人と見てもよからうが、或酒好きの男があつて、夜半に北風が吹いて、急に秋の夜寒むを覺えたので、厨へ行つて小瓶の酒を取出さうとした所、柄杓から雫が垂れるだけ、酒は空なので、佗しく思ふ光景である。欄間から月が見えて、寒い北風が劇しく戸に當る夜半である。貞享の「冬の日」の炭賣の巻の表四句目・五句目に、

鶴見るまどの月かすかなり

野水

風吹きぬ秋の日瓶に酒なき日

芭蕉

此の二句の前後を違へて、焼直したやうな句で、作者の手柄はない。

六句目は或家の門の流れが浅く音を立て、流れてゐる附近の草の中に、蚯蚓がジイ〜と悲しげに鳴き、夜半の月が北風に冴え渡つて、秋らしい感じを示してゐる光景。

### 文獻

附合作法全集附録歌仙式圖解(伊藤松宇校訂)

芭蕉の俳論(萩原蘿月)

芭蕉の全貌)

一三〇 左に就きて「さび」の意義を説明せよ

野明曰 句のさびはいかなる物にや。

去來曰 さびは句の色也。閑寂なる句をいふにあらず。たとへば老人の甲冑を帶し戰場に働き、錦繡をかざり御宴に侍りても、老の姿あるが如し。賑なる句にも、靜なる句にもあるものなり。たとへば、

花守や白きかしらをつきあはせ

先師曰 さび色よくあらはれたり。(去來抄)

寂びとは蕉風俳諧の根本精神で、句意や材料が賑やかであり、靜かであつても、句の情調が寂びてゐなければ、さび色の表れた句とは言へない。内に根ざして、外に表れるものが寂びで、そこに人格的の意味がある。單なる閑寂趣味とは違ふ。従つてさびは寂しい境地を狙つても得られるものではない。自然の體得である。だから、老人が花々しく甲冑を身につけて戰場に活躍し、或は錦の繡を着て花やかに主君の宴席に侍しても、其の老いを消却することは出来ぬ。どことなしに老人の姿が附きま

とつてゐる。それと同様、さびは本質的人格的なものの表出であるから、賑な句にも静かな句にもあるもので、必ずしも閑寂な句のみにあるのではない。具體的に言へば、静かな、落着いた、艶の消された感情性が寂びで、大方青年より老人とか世間に苦勞した人などに見る所である。

「花守や……」の句に就いて考へてみる。宮中とか寺院とか神社とか、古來櫻の花の名所には花守が附いて居つた。こゝは花守の翁で、落花を掃き寄せては、浮世ばなれのした談話に、靜かにその日を送つてゐる。花守といふと古典的な聯想がある。櫻の下に打寄つて物語つて居ても、決して賑やかなげばくしい感じのものではない。櫻は爛漫と咲いて、いかにも華やかに見えるが、花守の老翁といふと、佗しい感じがする。併し全體の氣分は高雅で、寂しい不快な感じではない。花守の老翁を捻出した觀照氣分が既にさびてゐる。そこを芭蕉がほめたのである。

元來寂びといふ教は連歌にあつた。心敬は「ひえさびたる方を悟り知れ(ことめ)」とか、或は「ふけさびたる方最尊かるべし(心敬傳 和題訓)」などと言つて、ひえさぶ、ふけさぶの境地を連歌修行者の理想とした。心敬の寂びの境地は、彼が連歌論の「ひとへに餘情・幽女の心姿を旨として、言ひ殘し、ことわりなき所に、幽玄感情は侍るべしとなり(ことめ)」といふ主張に立脚したもので、言ひ殘し、理なき所を尊んだ所以は物をあらはに示したり、露骨に言つたりする氣持を嫌つたからで、そこに寂びといふ氣持と一脈通ずる點があつた。蓋し寂びとは一面から見ると言葉少なき態度である。靜かな奥ゆかし、

物の俳を示すやうな態度である。連歌師と俳諧師とはその心境に相違はあるが、芭蕉の寂びは心敬などの心境を進展せしめたものと言ふべきであらう。

文献 蕉風の俳諧(佐々醒雪 醒雪遺稿) 芭蕉の研究(樋口 功) 芭蕉の詩の持つ感情性(萩原蘿月)

藤村博士功績記念會編 近世文學の研究所收) 其の他一二七項參照

### 一三一 不易・流行の説に就いて述べよ

蕉門に不易・流行の教があつた。不易・流行とは千歳不易・一時流行の略稱で、芭蕉が奥羽行脚の年の冬、即ち元祿二年冬、去來に説いた教であつた。

去來の言によると、蕉門に不易・流行の句と言つて、一二つに分けて教へてゐるが、その元は一つである、人體に譬へて言へば、不易は無爲の時、流行は坐臥・行住・屈伸・伏仰の形同じからざるが如く、一時の變風であるが、無爲も有爲も元來は同じ人の上である、不易の句は未だ一つの物數奇なき句である、一時の物好きなき故に、古今に叶つてゐる、例へば「月に柄をさしたらばよき團扇哉 宗鑑」、

「是はく」とばかり花の芳野山 貞室」などの類は不易の句である、流行の句とは自分に一つの物好きがあつてはやるのである、形容・衣装・器物に至る迄時々のはやりがあるやうなものである、例へば、「むすやうに夏にしきの暑さかな」の類はその例で、或は掛言葉・取成を巧に工夫したり、或は歌書



の詞遣ひ、又は謡曲の詞取りなどを物好きした句は、一時は流行しても、今日は取上げる人もない、云々とある。

つまり不易の句は永續性ある句、一人の趣味でなく、萬人の等しく讚美する句、一時代の趣味・風調を超越した句などを指し、流行の句は時代の一時的趣味に叶つた句を言つたもので、それが根本に於て同一であるといふ事は、何れにしてもまめやかに思ひ入りたる體を備へてゐるといふ事であらうと思ふ。まめやかに思ひ入りたる體とは、感情が偽なく、深く表れてゐる體で、そこが蕉風俳諧の本質であつた。土芳も芭蕉の俳諧に萬代不易・一時變化があるが、その本は一で、即ち風雅の誠であると言つてゐるが、此の風雅の誠こそ、とりも直さずまめやかに思ひ入りたる感情で、之が不易・流行の句の基本たるべき特質であつた。

不易・流行論は去來の主唱で、同門間にかなり反響があつた。許六は之に就いて去來と論争し、互に陳辯があつた。支考も四格ノ辯を序とし、不易・流行は世の習慣に従つた名目で、何れも甲乙がなると軽く扱つてゐる。

文 献 去來抄(向井去來) 答許子問難辯(俳諧問答抄 去來) 再呈落柿舍書(俳諧問答抄 森川許六)

四格ノ辯(各務支考 東華集) 芭蕉の俳論(萩原蘿月 芭蕉の全貌) 俳文學研究(各務虎雄)

一三三 俳論に於ける虚實に就いて述べ、且左の句によ

りてその意義を説明せよ

糸切れて雲より落つる紙鳶

糸切れて雲となりけり紙鳶

糸切れて雲ともならず紙鳶

俳諧の虚實論は芭蕉にあつた。芭蕉は奥羽行脚の途次、加賀の山中温泉で、之を門人の北枝に説いた。芭蕉の説によると、虚實に文章あり、世智辨あり、仁義禮智がある、虚に實あるを文章といひ、禮智といふ。虚に虚あるものは稀で、あつたら正風傳授の人とすると言つて笑つたとある。

併し、此の説を詳しく解説し、宣傳した者は各務支考で、それは支考の「俳諧十論」や「廿五箇條解」に見えてゐる。

今、支考の解によると、萬物は虚に居て、實に働くものである。詩歌・連俳は上手にうそをつく事である。虚とは天である、天は音もなく、香もなく、虚靈不昧で、道の本源である。實は地である、萬物千山百海を載せて、變化するものである。之を神道に就いていふと、虚は鏡の體、實は鏡の用で

ある。儒教に就いていふと、虚は和、實は禮である。佛教に就いていふと、皆空が虚、實相が實である。文學でいふと、虚は文である、花である。實は質である、變化である。その天道に任せて順ふのを虚に居るといひ、虚を體として人道を律義に行ふ事を、實に働くといふのであると。要するに支考のいふ虚とは、靈妙不可思議なる宇宙の本體を指したものの、實とは變轉極まりなき現象を名けたもので、それが宗教・道德・文學に於て、各自特殊の形式を取つて表れるといふ意味らしい。之を俳諧に就いていへば、虚は事實の想像化、實は事實の感覺化といふ意味にならう。

さて、例句に就いて説明すると、

初めの雲より落つるの句は、紙薦が空から落ちた、といふ現實の事象を表しただけであるから、實の句であらう。

次の雲となりけりの句は、紙薦が糸目を切つて、雲井遙かに飛び行き、たゞ一片の白雲と見紛ふばかりになつたといふのだから、想像化がある。即ち虚の句である。

最後の雲ともならずの句は、虚の虚で、雲と想像して、現實を技巧してゐる點が、所謂上手にうそをついた所であらう。

文 献 俳諧十論(第四、虚實ノ論 各務支考) 廿五箇條(虚實の事 支考) 芭蕉翁廿五條解(支考)

續俳諧講座(俳諧語彙篇の中、萩原蘿月)

一三三 左の發句の修辭上の技巧を説明せよ

舟となり帆となる風の芭蕉かな

木枯に二日の月の吹き散るか

行く秋や手を擴げたる栗のいが

芭蕉が風に吹かれて、その廣い葉をひらめかせてゐる狀を言つたのである。舟のやうな形にもなり、帆のやうな形にもなつて、ゆれてゐる狀が、いかにも滑稽に見えるといふ意である。芭蕉の葉を舟や帆に喩へてゐる所に修辭上の技巧があるので、それが俗談的な興味を添へる。修辭學上譬喩といふ例に當るのだらう。

木枯の句は冬の風がすさまじく吹いて、寒氣凜烈、空に出てゐる二日月も吹きちぎられて了ひさうな勢で、わづかに糸のやうな姿を残してゐるといふ意で、夜の木枯の猛烈な吹き方を誇張的に述べたものだから、誇張法であらう。普通の月でなく、二日月と言つた所が、木枯のすさまじさを遺憾なく表して巧な技巧である。

行く秋は陰曆の九月で、秋もいよ／＼去つて冬の天地に入るといふ自然の變化に感慨の深い時候で

ある。紅葉も散り、菊も散り、栗も大方取り盡して、たま／＼人の手を擡げたやうな大い毬が落ちてゐるかと思ふと、なかみはからで、それも熟し切つて泥だらけになつてゐる。佗しい田園の光景。栗の毬がはせて、擡がつてゐる状を、人の手を擡げてゐる状に換喻した所が、此の句の妙味である。

文 献 俳諧美學(中川霞坡) 修辭法(佐々政一) 新文章講話(五十嵐 力)

### 一三四 俳句と川柳との區別如何

俳句と川柳とは、同じく十七音形式の短詩であり、俗語を用ひてゐるが、其の成立の歴史や性質に於て、全然相違してゐる。

俳句は俳諧の第一句即ち發句が獨立したもので、名稱は明治三十年頃所謂新派の俳句が流行するやうになつてから、一般に用ひられたもので、以前は發句と呼ばれてゐた。従つて傳統は古く、戰國時代の山崎宗鑑頃から作られて居つた。

之に反し川柳は徳川時代の後半明和頃から始まつたもので、當時淺草阿部川町の名主であつた柄井川柳(八右衛門)が前句附の點者をして居つて、明和二年「誹風柳樽」といふ書を編んでからの流行で、起原は俳句よりもずつと新しかつた。川柳といふ名も、川柳點の前句附といふ意味で、後に點の字を略し、川柳と言はれたのだ。前句附とは例へば「やすい事かな／＼」といふ十四音の前句に、「一

文で思ひのまゝに辛らがらせ」といふ句を附けたやうな類で、名は元祿以前に起つてゐるが、作品は既に宗鑑の「犬筑波」に見えて、謎を解くやうな附方であつた。併しそれを獨立させて、氣の利いた大衆的文藝に仕上げた功績は没すべからずである。

次に俗語であるが、之も俳句と川柳では用ひ方が違つてゐる。俳諧が俳言を用ひ、俗談平話であつた事は、如何にも大衆向きの文藝であつたやうではあるが、「俗にして俗にあらず。平話にして平話にあらず。其境を知るべし。」(山中)とか、或は「博識ならずとも、和漢の文字に乏しからぬ人」(俳諧問答)などと言つた芭蕉の態度を考へて見ると、或る理想を持つた俗談・平話であり、相當教養ある人の文藝でなければならぬ。芭蕉は又「俳諧の益は俗語を正すなり。」(三冊)とも言つてゐる。同じ俗談・平話を用ひるにしても、此の點景物を目當にする娛樂文藝とは意味が違ふ。

次に俳句には季題・切字を入れる制約があるが、川柳にはなかつた。俳句に季題・切字を入れる事は連歌の制の踏襲であつて、古い遺習であるが、川柳はもと前句附の前句が、季題や切字に拘束されないものが多かつた關係上、自由になつた結果だらうと考へる。尤もやといふ切字は川柳に往々見る所であるが、それは句の構成上用ひられたもので、必須條件として用ひたものではなかつた。

俳句と川柳の著しい相違は、俳句は多く自然現象を表してゐるのに、川柳は人事の方面に活躍してゐる事であつた。俳句に自然現象を歌つた事は之も連歌の遺習で、連歌より季語の範圍は擴大された。

如何なる人事でも俳句になると、四季の風物に連關させて歌はれた。是等の現象は季寄や古來の俳句を見ればよく分らう。俳句に季題・季語の必用であつた事は、雜の句の排斥された事でも知れよう。それほど自然現象は俳句に密接な關係があり、その價値に重大性を持つて居つた。川柳はさうではない。元來が前句附の獨立したものであつたためか、俗世間の義理・人情や風俗を捉へて巧に表現し、或は人間生活の矛盾や弱點を擱んで諷刺的に滑稽な場面を展開してゐる。川柳子の前には英雄も凡夫も大臣も小僧も何の差別はなかつた。此の點は川柳の獨壇場であつた。併し川柳にも盛衰があり、家柄があつて、俳句と同じ運命を繰返してゐる。明治三十五年頃阪井久良岐や井上劍花坊の新川柳が起つて、高尚な民衆詩としての創作や研究が發表された。此の點も俳句の新派運動と同一の歩調を取つたものと言へる。

文 獻 俳文學の考察(志田義秀)

俳文學研究(各務虎雄)

川柳の本質(田中辰二) 國語と國文學本質號)

古事類苑(俳諧の項)

### 一三五 和歌と俳諧との表現上の相違に就いて述べよ

こゝにある「俳諧」とは、室町期に「連歌」から獨立したもので、初めは連歌の中の滑稽的な詠風のもの指してゐたのが、後眞面目なものをも含め、芭蕉の時代には専ら後者が行はれた。それを指

すものと看做して答へる。極く廣い意味では、發句即ち五七五の詩形をも俳諧の一部と考へられ、従つてこの問題は和歌と發句との比較とも一應見られる様であるが、それは特殊な考へ方と思はれるから前者を採用してこゝに説く。

先づ、双方の詩形を比較するに、和歌はいふまでもなく、五七五七七の三十一音を一人の作者が作るものを指す。これに對し、俳諧は連歌と同じく、發句五七五を甲の作者が、第二句七七を乙の作者が、第三句五七五を丙の作者が、第四句七七は若し四人以上で作る場合なら、丁の作者。三人で作るのなら元へ戻つて甲の作者が作る。第五句五七五は、四人ならば甲。三人ならば乙の作者が作るといふ風に、循環的に作つてゆく。故に全體としては、五七五と七七との二種の詩形が繰返されて連続してゆく。一方、作者を中心としていへば、その人數の回數毎に、五七五又は七七の何れかの歌形を作つてゆくのである。故に、和歌に比べて詩形が複雑であり、又、詩形と作者との關係も複雑である。

次に、和歌には、その詩形が、五七五七七である事の外には、制作上の法式とか規則とかの束縛がない。之が特色である。尤も、平安朝から中世にかけて、歌病かへいとか、制の言葉とかの内容上や形式上の法則の類が唱へられたが、それは年代的に見て一時的な現象であり、歌の本質から見て根本的なものとはなつてゐない。

然るに、俳諧には、連歌ほどではないが、嚴格な法則が附きまつた。例へば、發句は「かな」「な



り」などの所謂切字か或は名詞を以て終結せねばならぬ。又、發句は必ず季を詠み入れねばならぬ。又、その季は第三句までは同じ季が各句に現れねばならぬ、といった類である。而して、句と句との接續仕方も、心附・句附などの相違があるが、大體附ける上に一定の附方が要求された。斯くてかういふ法則に圍まれ、寧ろその法則を樂むが如くして創作して行つたのが俳諧である。

次に、和歌は、一人で一首を詠むのが本來である。故に、その作品一個で意味も氣分も完成することを求められた。尤も、問答歌や贈答歌の如きは、兩者合せて一つの氣分を味はふことがあるが、それでも一首としての意味の獨立は守られる。又特別の場合として數首數十首を連作的に作ることもあるが、此の時も雲圍氣は別として、意味上には完結が求められる。

之に反し、俳諧では、發句は別として、脇句以後は、各句は獨立的であると同時に、前後の句との連絡が重視される。而して、その獨立と連絡との何れもを含む。全體として見る時は、此の兩様が微妙に混同してゐる所に俳諧の特色がある。尤も、上記の心附の如きでは前後句の意味が密接に連絡し、句附の如きは、附かず離れずの接し方をする、といった差別があるのであるが、その何れも、獨立で而も連絡するといふ二重性を主たる根幹とするといふ點は同一である。こゝに、連作の場合と雖も各一首を切離して意味をなす和歌の如きとの、大いなる相違が存するのである。

文獻 新講和歌史(兒山信一) 連俳史(樋口功) 俳文學の考察(志田義秀) 俳文學研究(各務虎雄)

一三六 誹諧歌と俳諧との別如何

誹諧歌は古今集卷十九に五十八首見えるが、その始めは萬葉集卷十六の滑稽歌から系統を引くとすべきであらう。古今集に於けるその實例は、

梅のはな見にこそ來つれうぐひすの人く人くといとひしもをる

山ぶきの花色ごろもぬしやたれ問へど答へずくちなしにして

の如きで、内容よりも寧ろ言語の上の滑稽を求めた和歌と見るべきである。それ以後誹諧といふ言葉は、滑稽諧諷の意に使はれて、後世に及んだ。而して近世に於ては、概ね俳諧の字を用ゐるやうになつたのである。

さて、連歌は、平安朝末期から數百句を連ねる所謂鎖連歌となつたが、鎌倉の末、此の連歌に「柿本集」「栗本集」の二派が生じた。前者は重厚、後者は滑稽の態を好んで所謂俳諧連歌の名を生じ、室町期に入つて名實共に獨立して俳諧と呼ばれる事になつた。此の名稱がいつ何人によつて使はれ始めたかは明瞭ではないが、既に宗祇の時に現れてゐた事は明かである。之が次第に世に行はれて、遂に江戸期以後連歌を壓倒し去つたのであるが、此の俳諧が流行しゆくうち、俳諧そのものゝ内部に格式を重んずる貞徳の如き派と、之を破らんとする自由滑稽の談林派の如き對立を生じた事は、もとの連

歌内部に於ける分裂と同趣であつて、甚だ興味が深い。で、此の場合、貞徳の如きは、俳諧本來の名義とは離れたものといふを得るわけである。尙、談林の後に起つた芭蕉の正風以下の眞に文藝的な俳諧の如きも、此の點からいへば、本來の俳諧精神とは背馳したものである。

尙、此の連歌の初句を發句といふが、それが近世の俳諧時代には全く獨立して發句のまゝで一文藝形態として行はれた。之は、當時の用例を見れば、俳諧とは別の文學形態と考へてゐた様である。現在に於ては、廣義の俳諧は、此の發句（俳句）と連句とを總稱する語であり、狹義の俳諧は、たゞ連句のみを指稱する。

文献 前項所掲に同じ

### 一三七 淨瑠璃詞章の變遷に就いて述べよ

淨瑠璃節で語られた詞章は、最初「淨瑠璃姫物語」（一名、十二段草子）が最も流行し最も弘く傳播した事は、その節の名稱を此の物語より採つて居る事から見ても明白であらう。

此の「淨瑠璃姫物語」の内容を見るに、牛若丸東下りに際し、三州矢矧宿にやどり、宿の長者の娘と契をこむる説話を綴つたもので、御伽草子中の「御曹子島わたり」などの系統を引けるものではないかと考へられてゐる。

同時に舞の本即幸若舞の詞章たる「高館」「八島」「大職冠」「和田酒盛」「堀河夜討」「百合若大臣」「烏帽子折」、又御伽草子の「鉢かつき」「文正の草子」「梵天國」「酒頭童子」「物臭太郎」なども語られたもののやうである。

されば、淨瑠璃初期の詞章は舞曲(舞の本)及び御伽草子である、と断定しても差支へないのである。其の他新作としては「阿彌陀胸割」「午玉姫」等がある。

然るに江戸で薩摩淨雲が隆盛を極め、所謂江戸淨瑠璃を語り始めると共に段淨瑠璃が創められた。従來は十二段草子の如きものも、一段一段を語るに過ぎなかつたが、彼に至り全篇を六段に分ちしものを典型として語つた。所謂段淨瑠璃で、作者は不明であるが、北條宮内が作者の一人で、淨雲亦文筆の才があつたと稱せられる。その語り物には、「安口」「むらまつ」「一の谷逆落」「弓繼」其の他の新作がある。

彼の門下中丹波太夫(後丹波少掾)は、多く岡清兵衛の作りし「金平物語」の數種を用ひ詞章とし、勇壯なる曲節で語り、殺伐なる關東武士の歡迎を受けた。「金平物語」は俗に金平本と稱し、主人公に坂田金時の子の金平(きんぺい)を有し、剛勇無双で或は賊黨を平け或は化物を退治する構想から成り、現存するものに次の數種がある。

「金平法問評」「金平天狗問答」「金平兜論」「金平黒熊」「金平千人切」「金平化粧問答」

「金平誕生記」「金平つるぎのりつくわ」等。

此の金平淨瑠璃は、流行が大阪にまで及び、井上播磨掾まで之を語つた。

其の他の詞章では昔物語を用ひ、忠臣義士を題材とせしものなど多くあり、所謂世話物は行はれなかつたと稱せられる。

上方では井上播磨掾が最も淨瑠璃語りとして傑出し、名聲高かつたが、その用ひたものは「頼義北國落中の掛物揃」「菅原親王の歌仙の段」「源氏筑紫合戦の宮島八景」「頼光跡目論の鹽釜の段」「屏八景」「五天竺」等であつたと云ふ。詞章多く拙劣、道行の名所方角に前後撞着などあつた。

當時一方では説經節が盛に行はれ、説經淨瑠璃生じ、その詞章は説經節より輸入せられしもの多きは注目に値する。

然るに宇治加賀掾、その門下竹本筑後掾(義太夫)出づるに及び、彼の演藝すぐれ、曲節卓越してゐた許りでなく、近松門左衛門といふ一世の戯曲家に依つて優秀の詞章を用ひるを得て、茲に淨瑠璃の詞章は大成したのである。

近松巢林子は和漢佛の學を兼ね、特に該博な知識を有し、その詞藻は絢爛多趣、時代物を多く作つたが、更に世話物に轉じ、上方の人物風俗を如實に活躍せしめ、對話は全く當時の口語を用ひ、入神の筆、單に獨立した詞章のみを採つても古今に獨歩し得る作品を提供したのである。

彼に刺戟せられ、紀海音・竹田出雲・近松半二等以下専門の作家輩出し、從來の詞章が拙劣幼稚なりし域を脱し、構想・詞章共に恥しからぬものが作られたのである。

淨瑠璃は各派に分れ、長唄・文彌・一中・半太夫・河東・外記・大薩摩・豊後・常磐津・富本・宮蘭・清元・新内等の節が行はれたが、その詞章は多く淨瑠璃の詞章を襲用するか、演劇より採り來るかして、他は斷篇的のもの多く、本格淨瑠璃以上に出たものは尠いのである。

文獻

聲曲類纂(齋藤月岑)

江戸時代戯曲小説通志(堀捨次郎)

淨瑠璃史(寺山星川)

歌舞音楽

略史(小中村清矩)

繪入淨瑠璃史(水谷不倒)

日本歌謠史(高野辰之)

日本音楽の研究(田邊尚雄)

近松研究の序篇(前島春三)

歌舞伎圖説(守隨憲治)

## 六 最近世（明治・大正・現代）

### 一三八 明治文學の特質を述べよ

明治文學は、古代より近世に至る日本文學の傳統の上に立ちながら、甚だしく特色を異にする所がある。それを列舉すると、

一、明治文學の背景をなす明治時代は僅々四十五年であり、之を近世以前の諸時代に比して最も短い。而もその四十五年間に於て、外國文學の啓蒙主義より浪漫主義を経て自然主義に至る二百年の變化を成し遂げたのであるから、その文化の諸相が錯雜してゐるやうに文學の現象も甚だ多岐で混亂してゐる。多數の優れた作家を出したが、作家や流派の興亡も早く短いのである。

二、明治文學に於いては西洋文學・藝術からの感化影響が著しい。明治文化が西洋文化に負うてゐる様に、明治文學は西洋文學に負ふ所が多い。表現の仕方如き、物の觀察の仕方まで西洋文學の影響により一變した。

三、之を内容からいへば、明治文學は個人主義の文學である。個人意識の成長、個人の自我自覺の

程度の深化發展を示したのが明治文學史であると云ひ得る。之は封建時代の類型文學と著しく特色を異にする點であつて、個人心理描寫の精細なる點に於ては、前代以前の比にあらず、西洋の近代文學と相通ずる所である。

**四**、それと關聯して、文學を單に戲作、慰藉なりと考へた前時代と異なり、新しい文學精神の確立に努力したのが此の時代の特色である。此の精神によつて、和歌・俳句の如き舊藝術も新しい藝術性を獲得し、眞の自我表現たる使命を果すに至つた。尙、此の事には資本主義時代に於けるジャーナリズムといふものが常に文藝及び作家を必要とし、作家は文學のみによつて衣食することを得、前の時代よりも眞劍に、自分の仕事について考へたことも、忘れることが出来ない。

**五**、最初に於ては猶、文章體の作品が多かつたが、中頃は雅俗折衷の文體が優越で、明治末期からは漸く此の種の文體による創作が跡を絶ち、口語文による言文一致の文體が確立し、引續いて大正時代に入つたことは、此の時代の特色であらう。

**六**、此の時代に入つて新しき文學の獨立したジャンルとしての位置を占め得たものに、新體詩と評論がある。そして文藝評論に於ては、前時代迄の如く、作家の體験、もしくは創作の批評のみにとどまらず、文明批評又は社會批評として、一世を指導せんとする傾向のあつたことも、瞠目に値するであらう。



七、最後に明治時代文學としては、自然主義の確立迄は過渡期としての特色が強く、その爲、様々な異種類の美を見得たともいふことが出来るが、各方面に於て十分に徹底しなかつた傾きは免れがたいと思ふ。

文 獻

明治文學序説(久松潜一)

文學史概説明治時代(片岡良一)

岩波講座日本文學

明治文學概説

(生田長江 新潮社日本文學講座)

明治文學史論(高須芳次郎)

近代日本文學論(鹽田良平)

### 一三九 明治初年より二十年迄の文學と當時の思想との

#### 交渉に就いて述べべし

明治の初期は、社會の經濟的基礎を固め、更に進んで政治的基礎を固める時代であつた。

明治新政府は先づ舊幕府の財政的破綻を整理し、その急激な政治的變革に動搖せる人心を歸服せしめ、更に國家並に人民の切實な要求である生産力の増大のため西洋式生産方法を採用し、政府自身の手により、或は政府の積極的保護獎勵の下に、農業は自給自足の經濟より市場を目的とする企業へ、工業は手工業・問屋工業等より近代的生産組織へ前進した。文化發展の上に於ても、斯かる變化に伴ひ所謂實學、即ち實用功利の思想が強力を極め、同時に明治維新により封建的制約より解放された人民の新政治生活への方向として、新經濟組織に適應する民主主義的思想が主流を占めるに至つた。

然しながら當時の指導的地位に立つ人々は、概して、新理論の紹介に忙しく、一般民衆は慌しく變化して行く環境の應接に暇なく、それを充分消化し切れず、茲に西歐文化の機械的移入、西洋文化崇拜主義的現象が各方面に現出した。明治文學に於ける最初の新しき文學は、生硬なる外國翻譯文學であり、その内容は概ね政治的興味を中心とせる所謂政治小説、科學的興味を盛り込んだ冒險譚であるが、やがて、我國の人々により政治小説が創作されるに至つた。

明治十年以前に於ける思想界・文學界の状態を見ると、加藤弘之の「立憲政體略」(明治七)を始め、福澤諭吉の所謂實學書の類、「明六雜誌」(明治七)に於ける各學者の新知識の紹介、ミル「自由之理」(明治七)その他、スペンサー、デアキン、ハックスレイ、マルサス、モンテスキュー、ルソオ等が九年から十年に續々と紹介されてゐるが、文學書は、「西國立志篇」(明治七)、「伊蘇普物語」(明治七)・「ジヨスコリデス」(明治七)「後世夢物語」(明治七)等で、その他は舊套依然たる草雙紙類か、或は多少新しさを加へた、然し内容はそれと五十歩百歩にある明治巷談であつた。尙、戯作中に於ても、假名垣魯文の如きは新時代の風潮に眼を向けたものであるが、それも「西洋道中膝栗毛」「胡瓜遣」等の作に見える如く、表面的に極く淺くしか觸れてゐるに過ぎない。

明治十年以後になると、外國文學の翻譯、或は政治小説と稱せらるゝ創作が續々と見え始める。十年から廿年にかけてジュール・ヴェルヌの科學空想小説が井上勤らにより盛に翻譯せられ、又高度な

西洋文化と政界の状態、政治家の生活を描いたりリットンの「花柳春話」(年一)が好評を博し、十四年自由黨の結成、翌年の改進黨及び東洋社會黨結成當時の自由思想の高潮と相關呼應して露國虛無黨を中心とする小説、フランス革命を取材とする小説が連續的に翻譯出版せられた。シルレルのウイルヘルム・テル」が「哲爾自由譚」として現れたのも十五年である。十八年には坪内逍遙の手によつて、シェークスピアの「ジュリアスシーザー」が「自由太刀餘波銳鋒」と題されて譯されてゐる。

自由平等民權の思想が翻譯の態度を決定するのみでなく、更に自由主義者は外國文學翻譯に飽き足らず自ら小説にも手を染め始めた。即ち「經國美談」(年一六)「佳人之奇遇」(年一八)等がこれである。末廣鐵腸の「雪中梅」(年一九)、その後篇「花間鶯」(年二〇)は當時の知識人の要望せる新女性を描いてゐる點で注意さるべしである。此の小説の女主人公は、政治に興味を持ち、男女の自由交際を實行し、戀愛の自由選擇をなし、男尊女卑的な屈從的結婚をせず、社會奉仕の念の強い事等の特徴をもつ。之は、當時歐米の女權思想の紹介、福澤諭吉の男女自由交際論、巖本善治の「歐米の女權と吾國從來の女徳とを合せて完全の模範を作り爲さんとす」主旨の下に發行せられた「女學雜誌」(年一八)の指導の下にあつた輿論と照合する時、意義深き問題であらう。

文 献 明治文學十二講(宮島新三郎) 日本文學聯講明治篇(藤村 作) 近代日本文學論(鹽田良平)

政治小説研究(柳田 泉) 其の他前項參照

1100 小説神髓の明治文學界に及ぼせる影響に就いて

述べよ

小説神髓は(一)如何なる目的の下に書かれ、(二)その目的はどの程度に達せられ、(三)その目的遂行によつて如何なる結果を招いたか、以上三點を述べることが、此の問題に對する解答となるであらう。(尙、一四二項の解答をも参照せられたい)

一、小説神髓の著作動機について、著者坪内逍遙は次の様に云つてゐる。

近來刊行の小説稗史はこれもかれも、馬琴、種彦の糟粕ならずば、一九、春水の賈物多かり。蓋しこのあひだの戯作者流はひたすら李笠の語を師として意を勸懲に發するをば、小説稗史の主腦と心得、道徳といふ模型を造りて力めて脚色を其内にて工夫なさまく欲するからに、強ち古人の糟粕をば嘗めむとするにはあらざめれど、もと其範圍廣からねば、覺えず同轍同趣向の稗史をものするなるべし。

斯くの如き弊を矯めることが、即ち勸懲主義及び功利主義を排して江戸文學の殘滓を洗ひ去り新しき近代的小説を創作することが、その目的であつた。近代的小説とは、逍遙によれば、(1)人情を曲盡し、(2)世態風俗を描寫するを以て目的とするものでなければならぬ。此の目的を遂行する爲の方法・手段は心理的觀察と、客觀的態度とである、と逍遙は主張した。

二、これ以前の明治文學界に盛んであつた政治文學・戯作小説以外に、新しき藝術的な純文學が起つたのは、小説神髓の力があづかつて大なりといはねばならぬ。小説神髓は此の方面最初で唯一の従つて多大の影響を與へることの出來た著作であつた。硯友社の人々ははじめ、文學に志ある者で、此の書によつて刺戟され、その向ふべき方向を明かに指示されたものは極めて多い。當來文學の方向を決定したものととして、高山樗牛が評してその功績を破天荒のものと言つたのも溢美の言ではない。

三、小説神髓の内容は、常識的な英國風の文學理論によつたもので、功利主義を否定しながら、その内容に於て文學の効能を説き、功利的・道徳的の影があるのは、已に森鷗外が批評した處である。逍遙が主張した文學創作の手段・眼目である心理的觀察と、客觀的態度とは、二十年代以後の文學主流の最も重んじた方法・態度であつて、それが以前にない清新の内容をもつに至つたことは特筆すべきだが、その結果は又その一面に偏して、廣い社會的觀察や背景の下に大文學を創造する精神を幾分弱めた弊も見遁すことは出來ない。

文 献 文藝論集(樗牛全集) 明治文學史(岩城準太郎) 日本文學評論史(久松潜一)

## 二四二 明治文學に現れたる浪漫的精神

明治文學に於て浪漫主義時代と呼ばれるのは、二十年前後より三十四五年邊までを指す。

明治二十年前に於ける所謂寫實派が没落した有力なる一因は、其の人生意識の低さにある。彼等は封建的思想を脱してゐなかつたし、個人的自覺も淺かつた。そしてその根本に彼等の哲學的教養の不足といふ事が擧げられる。斯かる缺陷を救ひ、新人生理想を文學上に如何に表現するかを企てたものが、浪漫主義運動である。

此の浪漫主義の特徴は生活理想を精神的世界に置いた事である。即ち「女學雜誌」(一八年發行)は、基督教精神を以て現實社會の缺陷を指摘し、或は文學上の寫實主義の缺點を指摘した。此の主張は「國民之友」(二〇年發行)によつて大體繼承された。森鷗外・宮崎湖處子・中西梅花等は、或は異國の憧憬、或は自然への愛着等を新しい要素として小説界或は新體詩界に活躍した。

以上のものが更に集團性を帯びて一系列の文學團體を作つたのは、明治二十六年頃からである。「女學雜誌」から文學評論面が獨立して雜誌「文學界」「評論」となつたが、殊に「文學界」は、天知・透谷・無聲(藤村)・禿木・秋骨等を中心として孤蝶・一葉・酒竹・敏・花袋等が加はり、或は寄稿した。彼等は一様に若く清新であつただけに、絶えず現實と自己とに深い溝渠を感じ、其の爲に憂鬱と孤獨感とを失はなかつた。そこに幼稚な感傷性と偏狭な人生觀も認められたのであるが、彼等こそ文學に初めて高い香氣と解放されたる人間性とを植ゑつけた先驅者と云つてもいい。

明治浪漫主義思潮の根柢は大體に於て獨逸觀念哲學である。カント以降新カント派の生ずる迄の浪

漫哲學が明治文學思潮の大勢を占めてゐた。斯かる種類の文學評論家としては石橋忍月・内田不知庵が優れてゐたが、後森鷗外の反没却理想論が評壇の視聽を集めるに及んで、此等を統一深化した。

雜誌「文學界」の運動は部分的であつたが、それが更に發展し、當時の社會批判と相伴つて、強烈となつたのは三十年以後であつた。即ち文學が不道德的傾向に陥つたと顰蹙され、一方倫理學が盛んになり、文學藝術が極端に壓迫された三十年代初期に、此等の風潮に反抗して人間の精神的獨立を叫び、國家對個人の關係を再吟味して個人性を唱道し、清熱を以て個性の建設的精神となし、それを文學者の生命としたものが、所謂ロマンティズムの運動と稱せられるものである。「帝國文學」が彼等の代表的評論雜誌であつた。

併しロマンティズムの大勢は何よりも、韻文界によつて代表される。特に詩歌に於ては感情の奔放が尊ばれ、戀愛至上主義が高唱された。即ち雜誌「明星」に於ける與謝野鐵幹・晶子などに於ける詩歌は、熱情的官能的戀愛・神秘空想の翼を馳せた絢爛たるものであつた。

以上のロマンティズムの一特性として、小島徳彌氏は個人主義・天才主義・本能主義を擧げたが、之より更に進んで、宮島新三郎氏は人生的意欲、ゲーテの所謂「より高い現實の幻影」を欲求する心熱を浪漫精神とし、それが爲に必要とする個人の解放及び舊套破壊をロマンティズムの根本意義とした。

要するに、明治に於て如何なるものを浪漫的精神と名づけ、如何なる文學を浪漫主義と名づけたかと云ふと、あらゆる既成のものに慊らず、飛躍的精神を以て向上の一路を追ひ、而も近代の特色たる自我認識を背後に有した文學集團、或は文學者群の思想を指して云ふ。明治浪漫主義者の合言葉は個人の確立、感情の高揚の二つに歸する事が出来る。

文 獻 一三八・一三九・一四〇項所掲に同じ

## 一四二 明治時代小説に於ける寫實主義の展開

### 一四三 明治文學に於ける自然主義作品の特質を述べよ

明治文學に於て寫實主義といふ言葉の根源は「小説神髓」(坪内逍遙著 明治一八年)に求められるが、更に遡ると「維氏美學」(中江篤介譯 明治一六年)のレアリズム、實跡派等である。「修辭及華文」(菊池大麓 二二年)では寫實といふ意味で模擬といふ言葉を用ゐてゐる。結局言葉としてはレアリズムが先に這入つて、それが二十年代に寫實派・主實派・主事派・實際派・排想派・寫眞派・極實派・自然派等各種の名稱に分れて三十年代に至り、更に三十四五年を境として自然主義といふ言葉が勢力を得て、それに置換へられた。

右の中寫實派といふ意味は寫實主義とは異り、人情小説ともいはるべきものであるが、併し主旨は



矢張り「小説神髓」の主張から發してゐる。即ち小説の主眼は人情世態であつて、人情のありのまゝを寫す點に模寫の本分があるといふ「神髓」の説は「源氏物語玉の小櫛」の中に於ける、物のあはれは人情の極致を描寫する事によつて發揮されるといふ論に接續するものであり、此の説を單に表面だけ履行したものは人情小説となる。硯友社其の他の寫實派は此の人情に十九世紀思潮の影響を認める事少く、作家としての態度なり感情なりにどうしても古い影が纏はるものであつた。

「維氏美學」「小説神髓」の出版當時歐洲では寫實主義が最盛を極めてゐたが、我國に於ては幼稚な政治小説が流行し始めた時であり、且科學的教養の乏しかつた時代だつたので、人々は理論として「小説神髓」を許容もし、その主張を利用して行つたが、それを態度として實踐したものは二葉亭其の他一部の作家に過ぎず、文壇の主流は硯友社其の他の人情派であつた。「小説神髓」の作者自身も理論としては先驅的なものを有してゐながらも、感情の件はなかつたために、結局舊來の人情模寫小説から一步も踏み出す事ができなかつた。

此等の寫實派の小説から轉じて、客觀の實に立脚しようとする所謂寫實主義の小説が生じたのは明治三十年前後である。こゝに至ると、多少の作家の新人生觀や新藝術觀が窺はれてくる。小杉天外は「寫實はつ姿」(三三)、「はやり唄」(三四)等で、たいした仕組もなしに人事現象を忠實に描寫しようと試みた。「はつ姿」はゾラの描寫を參考にしたと云はれてゐる。

所謂寫實小説と呼稱されるものは、此の天外や「戀慕流し」を書いた小栗風葉の作が代表的であつたが、併し此の寫實主義も、所謂寫實派の系統を引いて技巧的であり、人情派的な所があつた。

日露戦争後の經濟的逼迫、貧富の差の増大等の現實的諸條件は大衆をして、その眼を現實の缺陷に注がしめた。斯かる人々の心に訴へるものは、もはや技巧だけの寫實主義ではなかつた。こゝに二十年前概論として輸入された寫實主義・自然主義的精神が充分なる存在の意義を持つに至つた。之が明治四十年前後の自然主義文學である。

然らば此の自然主義とは如何なる特徴をもつてゐたか。即ち自然主義に於ては、

一、觀察の科學的統一がある。 二、徹底的寫實。 三、無解決或は無結果的構想。

四、文章上に於ては平明、素直な合理的描寫。

以上の如く、自然主義の小説はそのリアルを自然科學的・客觀的眞實の把握に求めた。之は當時の機械觀的思潮と相呼應するものである。併し、その客觀的眞實は當然感覺經驗を基礎とするが故に題材が狭小となり、その合理性が一平面の機械的合理にとゞまらざるを得なくなつた。そのため立體的な厚みが見られない、と云ふ憾みがあつたのである。

## 一四四 「五重塔」を評論せよ

作者は幸田露伴。従來の説では明治二十五年の二月發表になつてゐるが、實は二十四年の十一月から國會新聞に掲載されたものである。

「五重塔」を以て露伴の代表作の一とするのは今日の公論であるが、發表當時既に傑作の名が高かつた。坪内逍遙の如きは「本著の如きは所謂新聞紙の讀物として自然の必要より匆卒の際に物せられしにも拘はらず、首尾秩然と結構整ひ、已に他の人も評せし如く、主人公のつそり十兵衛が建立せし五重塔の巍然たる趣に通ひ、特に著しく作者の特質を表現」したと褒め、石橋忍月は「近來第一の小説は露伴の五重塔なり、蓋人物を先にし人事を後にし全篇一の死人物・駄分子なければ也。云々」と讚美した。その他露伴を論ずる人々で、此の作を彼の代表作とせぬ人はない。殊に第三十二回の飛天夜叉王が眷族を率ゐて虚空に荒れ廻る一段は痛快淋漓を極め、明治小説文章の模範として常に言及されるであらう。

五重塔は露伴の主觀的理想的作風がやゝ客觀的傾向をとり始めた時の作で、その分水嶺にあるものである。「辻淨瑠璃」「いさなとり」に於て漸く兆した客觀的傾向は、此の作に至つて渾一の致を來たしたとは史家の通論である。此の作中の中心人物、のつそり十兵衛は作者の理想、即ち、藝術家がそ

の藝術に對する無限の愛着と自信、人間の一念の籠つた精神的製作の、自然界・人間界に對してもつ權威を具體化した理想の人物であると共に、一個の大工十兵衛として動いてゐる。殊に十兵衛の性格には、幼稚ながら、一切が無かといふ近代的超人の面影があり、逍遙は之をイブセンのブランドに比してゐる。源太・お吉・お波・清吉・朗圓、何れも特殊な個性を具現し得てゐる。

「五重塔」製作の由來について露伴は語る。

「彼の中にあるのつそりといふ男は、本來のつぼりといふえらい大工があつたのを私はとつたのだが、必ずしも五重塔を拵へたわけでもないが、方々の堂塔をたててゐる。此の話を私は倉といふ大工から聞きましたかね……此の倉といふ男も極めて妙な人物で、(中略)その口のきゝやうなども極ごくのろく、一體の舉動が浮薄でない。餘程奥床しい所がある。(中略)私の五重塔には此の話をしてくれた倉といふ男を、全然ではないが幾分モデルに使ひ、それにはじめ話したのつぼりの純名を少し變へて用ひ、其の外聞いた話なども加味して直ぐ近所にあつた(谷中天王寺)五重塔へもつて行つて綜合したのです。

それから越後の人で源太といつた名工があつた、越後から江戸まで來る間に、此の男の拵へた堂塔なども實際今も残つてゐる。つまり才物な大工の話を聞いた。之れを十兵衛に對して源太の方の型につかつた。」

「或時馬鹿々々しい大暴風雨であつたことがあるんだ。丁度五重塔の原稿を書いて、半分までも尙まだゆかない頃だつたんです……(略)そんな事で暴風雨をとつて來たので、初めから考へて置いた着想ぢや決してなかつた

要するに、久しく谷中に住まつてゐた作者が、朝夕眺めた五重塔の印象によつて得た作品である。

露伴一流の男性的な意氣と意氣の相衝も相發する雄渾な題材を、ゆるみのない格好な構成に仕立てたもので、その間藝の神秘感と法悦境に對する作者の熱意が躍動してゐるものといふべきである。

文獻

幸田露伴(柳田泉 岩波講座日本文學)

幸田露伴(木下杢太郎 藝林問話)

明治文學史(岩城準

太郎)

一四五 「たけくらべ」を評論せよ

樋口一葉の作。明治二十八年一月より「文學界」に連載、二十九年四月全部を纏めて「文藝俱樂部」に掲げ、その時「めざまし草」の諸家、森鷗外・幸田露伴らによつて未曾有の激賞を受け、此の一作によつて、一葉は一躍一流の列に伍した。

一葉の主な作は概ね二十八年以降にかゝはる。而も彼の死は二十九年であるから、その製作の油の乗り切つた絶頂に於て、フツと死んだ慨がある。

此の作品は併しその主な作中でも最も傑れた作であつて、此の作なかりせば一葉は今日の名聲を獲保することはむづかしかつたらう。否彼の文學史上の存在は遙かに稀薄なものであつたらう。作者が

大音寺前(東京市下谷區龜泉寺町)に荒物屋を開いてゐた見聞がもとなつたことを思へば、半歳のその地の生活が如何に彼女に與ふるものがあつたかを思はせる。

此の作は思春期の少年少女を描いて、吉原といふ特殊な雰圍氣を背景としたものである。その雰圍氣が此の作に一種華やかさを添へ、ごく特殊な味をもたせた爲に、又描かれた對象が夢と現實の境にゐる少年少女の世界である故に、屢々人は此の作を浪漫的といふ。相馬御風氏の如きも、自然主義的見地から此の作を評論してしか云ひ、田山花袋も「にごりえ」の方が勝れてゐるとしたが、それらは都會生活を知らぬ偏見から來た批評である。描寫の態度も寫實的で、艱難な生活に現實を鋭く見抜くことを自然に學んだ一葉の人生に對する諦視も甘くはない。たゞその對象と雰圍氣の故に脈々たる抒情味の流れてゐることは見落し得ないが、それは此の作品を流れる詩となつて、寧ろ此の作を價值づけるものである。

要するに此の作品はそのやうな特殊な題材の故に、餘りにも渾然たる作品となりきつてゐて、作者の主觀があらはに出てゐない所が、後年自然主義の立場からの非難となつたものと思はれる。それは咎める者の誤りである。たゞさういふ作者の對人生・對社會態度が見とり易くない爲に、之は之で一種の完成した世界を示し、作者のモラルが問題となり得ないといふにとどまる。猶、此の作の細かい長所については、森鷗外・幸田露伴らの説があるから、次に引用する。

**露伴評** この作者の作にいつもおろかなるはなけれど、とりわけこの作は筆も美しく趣きも深く、(中略)第一章は單に大音寺前のありさまを敘し、つづきてそのあたりの兒等の學ぶ小學校のありさまを敘し、さてその小學校の生徒たる信如といへる兒を一寸敘し出せるばかりなれど、遊廓近き地の自然と他の地と違へるさま眼に見る如く(中略)、枝葉のことは措きて、篇中の人物、みどり、信如、正太郎、長吉、三五郎、龍華寺の和尚など、善くもそれぞれにそれその面貌風采を讀むものの眼前に在るが如く思はしむるまでに寫されしものかな。(中略)美登利が信如に對する心中の消息は、もとより年ゆかぬものことなり、あらはには寫しがたし、さりとして寫さでは濟まず。(中略)この作者が、最も自然に近き方法を以てその消息を傳へしは、感ずるに餘りあり。(略)

**隅外評** (前略)われはたとひ世の人に一葉崇拜の嘲を受けんまでも、この人にまことの詩人といふ稱をおくることを惜まざるなり。且つ個人的特色ある人物を寫すは、或る類型の人物を寫すより難く、或る境遇の *milieu* に於ける個人を寫すは、ひとり立ちて特色ある個人を寫すより更に難し。たけくらべ出でて又大音寺前無しともいふべきまで、かの地の「ロカアル、コロリツト」を描寫して何の窘迫せる筆痕をも止めざるこの作者は、まことに獲易からざる才女なるかな。(略)

尙、文章には露伴及び西鶴を模したあとが見える。

**文 献** 隅外全集「藝術論篇」第二卷 眞筆版「たけくらべ」 樋口一葉論(湯地孝) たけくらべ評釋(鈴木敏也)

## 一四六 「多情多恨」を評論せよ

作者尾崎紅葉は、明治二十八九年前後創作少く翻案に隠れ、紅葉衰へたりの聲が高かつた。そこで奮起一番、之こそ「我が家の米の飯」とばかり作つた作品であつて、二十九年二月以降讀賣新聞に連載し、三十年出版したものである。

紅葉の自負の通り、筋を主とせず、心理と性格を描かうと努力したものの。文章は言文一致で、此の時代の言文一致體の模範たるべきものである。「である」調に終始し、之は紅葉の創始といはれる。

出版當時「めざまし草」に載れる鷗外の評語は、

これ他人にありては短篇の資料とせんも、なほ足らざる所ある一小話なるべきに、滔々四百紙面に瀾りて、人をしてその煩を覺えざらしむ。作者の得意想ふべし。篇中人物の性格皆瑩然として明かなれど、獨り柳之助に至りては、われなほ世上眞個に這般の人あるべきや否やを疑ふ。

といつてゐる。

柳之助の性格がやゝ不自然なりとは、ほゞ定評の存する所であるが、紅葉傑作の一たるを失はず、柳之助が兄タイプの葉山誠也に甘える心理や、段々お種に好意を寄せて行く徑路やは、生彩を帯びて殆んど至れり盡せりの慨がある。篇中葉山誠也の言行・思想に、作者紅葉の面影があるとは、その門



下徳田秋聲の明言する所である。

此の小説は、作者の齡三十を越し、漸く絢爛の境を通り越して平淡の味を欲するに至つた紅葉の心境を覗ふに足るものとして、それ以前の多彩な「三人妻」「不言不語」などと全く變つた味の作風であり、それ以前の作に見られるストオリイ風の、若しくはロマンティックな色彩から脱して、日常生活を取扱つてゐる。江戸文學の繼承とも見られる前期の諸作とは趣きを異にして、當時の生活を直寫しようとし、人間を描くにも單にその輪廓や一般的人情を描くに止まらず、個性的なものゝ心理描寫を試みてゐる。之は紅葉の進歩であり、人生味の漸く滲み出て來た作といつてよい。併し紅葉の江戸人的な快活な浅い氣持は此の作にも反映して、折角の好題材を幾分洒落と諧謔によつて、底の浅い喜劇じみたものとしてゐる。それは一面紅葉の作品に特有なヒューモアを與へ、此の作品を讀み易いものにしてゐるが、一方それだけ淺薄なものにしてゐるのは否めない。

それと元來短篇に盛るべき結構を長篇に仕立てたのであるから、冗長の嫌ひがあることは致し方ないことである。とに角新しいテーマを、山氣のない平淡な筆で敍したものととして、紅葉作中の異色たるのみならず、「伽羅枕」「三人妻」と共に、紅葉の前・中・後期の各を代表する傑作たる資格を有し、又のちの「金色夜叉」のヤマに富み變化の多い長篇と相對して、好個の對照をなすものである。

文獻 明治大正文學研究(新潮社 徳田秋聲「尾崎紅葉」)

其の他一三八・一三九項參照

一四七 「虞美人草」を評論せよ

之は漱石が四十一歳、學究としての生活を一應清算して朝日新聞社へ入社し、作家を以て立とうとした最初の作品である。

又之は漱石の作品中初めて新聞の讀者を對象として書かれたもので、そこに制約があるし、又作者自身もそれをかなり意識して居る。小説らしい小説を書くこと云ふ事は漱石の様な多方面な才能・博識を備へたものにとつてさして困難なことではない。

此の作品には小説らしい筋が作られて居る。緩急自在に大團圓カタルシクに動いて行く爲に作者の強力な支配を以て構成されて居る。

「虞美人草」の前に位置する「草枕」では、漱石は自己の感懷を一人の畫家に假りて、何等リアクシヨンの無い世界に放下出來たのである。此の世界から引出されて、漱石の云ふ俗なる世界を環境とせねばならなくなつた時、所謂小説が成り立つのである。だからこゝには作中の人物がはつきりと描き分けられ、全體も亦云ひ切られて居る。そこに概念化の危険がある。

登場する主要な人物は、甲野・宗近・甲野の異腹の妹藤尾・小野である。

作者は努めて世界を書き分けようとして居る。序曲は甲野さんと宗近君の滞在する京都の世界から

始まる、次に甲野さんの繼母とその娘藤尾の世界が東京に展開される、それは小説の中程迄かなり順序正しく交互に現れて来る。そして問題は此の四人が二つの旗印によつて闘ぐのである。藤尾の戀人小野は、心理的には此の二傾向の間を動搖してゐる。そして遂に藤尾の破局に到つて小説筋書の大團圓に持ち來たすのである。此の間時間的には早春を以て始まり晩春に了ると云ふかなりの短時間に疊み込まれて居るなど、如何にも戯曲的な運びである。

作者が此の總花的な配役のうち味方して居るのは明瞭に甲野さん・宗近君の側で、之は宛も行動者を以て宗近を、意識をもつて甲野を表はす一人二役を思はせる程緊密である。そして甲野の饒舌る哲學が作者の斷案であると思ふ故に、作者の作品に向つて居る角度は甲野の所にあるのであらう。前述した様な二つの世界の接近と事件の進展につれて、藤尾に向つて甲野の放つ言葉が、次第に的確な豫言めいて來、最後に藤尾は甲野の宣言した通り死に至つて居る。

甲野、之は草枕等より發展して來た漱石の哲學を一應性格化して居る意味で、現實に對して非常に消極で逃避的なるにも拘らず、嚴めしい道義の哲學を持つて居る。此の非能動性は一つ作中に説明されて居る。彼が作中に置かれた切實な環境とは、即ち外國で客死した父、繼母とその娘、彼が二十七歳藤尾が二十四歳とすれば、已に三歳の幼年にして生母に別れて居り、後に來たものは繼母・繼子の關係である。従つて作者が此の對世間的に孤獨な地位をもつ此の人物を具體的に生かす爲に彼の偏

頗な性格を人間學的に追求して置いて欲しかつた。觀念的な企畫と云ふことは宜しい、併し作者は此の作られた世界に於て、各々の世界を餘りにも劃然と突き離して居る、作者の此のエゴイズムに易々と追従する以外になくなつて居る。人間個々の小世界論ミクロコスモスを第一義の發動、宗近の云ふ「眞面目」の共感による、小世界の連繫、此等は餘りにも露骨である、獨斷である。藤尾の世界は我即漱石の振假名に從へばブライドの世界である。此の様に定着しては行き詰りはすぐである。所謂新しい女としての藤尾に對する異つた角度からの解釋も行はれようし、小野の存在にも作者はもつと親切でなければならぬ。甲野・宗近にももつと人間的破綻がなければならぬ。

兎も角も漱石は彼の道義哲學を貫徹した。此の作品が當時の文明に對する彼の未だ目覺めざる批評であり、抱懷した趣味の恐らく遺憾なき發表であつたであらう。此の一應の斷案が作者をより深く用意した。漱石は幸にして續く作品「三四郎」に於て此の埒を乗り越えたのである。

文 献 夏目漱石研究(森田草平 新潮社日本文學講座) 夏目漱石(小宮豊隆 岩波講座日本文學) 夏目

漱石號(文學 特輯號) 漱石襟記(小宮豊隆)

## 一四八 「行人」を評論せよ

小説「行人」は大正元年六月より三年四月迄朝日新聞に連載された。長篇作品と云ふ意味では「彼

岸過迄」と、「心」の間に位置する。

「行人」はその中に「友人」「兄」「歸つてから」「塵勞」なる小見出しの四篇を含んで居て、外觀から云つても非常に整つて居り、起承轉結と云つた風な運びすら思はせる。

形式的に説話體の小説は漱石の小説作法によく見られる所であるが、「行人」などもその最も典型的なものゝ一つである。

作者は餘りに技巧を峻嚴に用ひ、作中の主人公である被説話者たる「兄」には一度も自から感動や感想を直接作中に漏らさず居ないのである。主人公は直接の動作によつて作中に行動して呉れない常に語られる人であり、主人公の弟である「自分」が一人稱を以て語つて居る。たゞ主人公である「兄」の神經が鋭く弟に働きかけ、説話者である弟の觀念、その説話に迄不思議な句を投げ掛けて居る點など、技巧的には大いに面白いものがある。

作者が此の作品に依つて追究した對象は紛れもなく主人公なる「兄」である。そして此の「兄」が漱石自身の意識を代表するものである、としても決して妥當を缺くものとは云へまい。従つて漱石は此の主人公に於て解決を見出した譯ではなく、漱石が苦惱し、問題とし、又問題の解答らしきものとして引き出されるものをそのまま提出したのである。

最も消極的に見て、作中の此の主人公の性格の基根は、その環境から餘りにもかけ離れた意識人で

あると云ふ點にある。此の意識と云ふ意味は決して主人公が充分なる思惟者であることを意味しない。思惟は現實を概念に依つて置き換へる、が意識は決してソフト・フォカスに置いて呉れない。意識は生活者である。唯一般の生活者との相違は常にそれが頭腦の中で行はれることである。併し一般の行動者と同じ様に意識は現實を情感出來ないのであらうか。主人公の、説話者である「弟」二郎に對する、自分の妻を通しての嫉妬は全く不自然であり、虚妄であらうか。説話者自身が兄の強力なる意識の前に惹きつけられ、兄の妻「お直」の方へ近接する此の神經的な過程は、唯單に一つの心理作用に過ぎぬのだらうか、弟の「現實」に與へられた兄の「現實」は漸次に弟の意識を支配し、説話者はその眞實の前に戦き始める。

自己の中に潜在意識的な誤魔化しを許容しないと同時に、他人の中に、その環境の中に、無意識と無自覺を許さぬ一つの精神が描かれて居る。無意識が習慣や道德の名で語る事は虚偽とされる。兄は妻の心が弟に傾いて居る事を「知つて居る」。之が主人公の現實なのである。そして又此の主人公は愛を求め、妻に惹きつけられ、そこに純粹の愛を見出し得ない。兩方への方向が激しいだけ矛盾の相剋はこゝにある。求める「愛」の苦惱をエピソードの形で作品の導入部である「友達」の中に作者は繰擴げて居る。或狂人の娘が説話者の友人に謔言の様に繰返す言葉は、單に作品の色彩を豊かにするために運ばれた挿話ではない。此の挿話に對する「兄」の解釋と斷案こそ、まことに主人公自身の憧

れである。

第四篇の「塵勞」に至つて説話者は兄の友人のHに換へられ、手紙の形式をとる。こゝで兄の本質的な性格なり欲望が、もつと客観的な説話者と、もつと制縛の少い自然の中で自由に語られる。妻を「所有する」ことの出来なかつた主人公が「一本の百合を所有する」ことが出来たことから出發する。自然の暴風雨の中にすら主人公の塵勞を洗ひ流すものがあつた。主人公は一應逃避した世界即ち自然に於て調和を見出したかに見受けられる。併し意識が他の意識に向つて悩む悩みは解決せられた譯ではない。こゝに問題があり、漱石の悩みと憧れがこゝにある。

文 献 前項所掲に同じ

### 一四九 「三四郎」を評論せよ

「三四郎」は明治四十一年九月から同年末迄朝日新聞に連載された。作品としては此の前に「虞美人草」「坑夫」があり、共に新聞小説として發表されて居たから、その方面に適した文體や手法としても漸く回熟して來たし、無理のないものとなつて來た。之は殊に「虞美人草」との對照に於て明かである。

嘗ての概念的な人物や筋も、こゝでは或種の自由を得て伸びくとして居る。之は單に技巧的な圓

熟にばかり歸せられない。

之は一人の田舎出の高校生が帝國大學に學ぶ爲に遙かに上京して來る、そこで此の臆病な青年が都會の新時代の女性に接し、確かに戀しながらも而も有耶無耶の内にそれを失つて了ふと云ふ戀愛の過程を描いたかに見える。併し此の作で、嘗て此の作者にあつた平面的描寫からかなり複雑な立體描寫に入つて來て居る。

漱石は此の主人公に年頃の青春の感傷を托さうとした。作品の隅々に洩らされる吐息の様な主人公の感傷は作者の知れる限りの青春であらう。孤獨・運命・死に就いて作者は主人公と共に歎息して居る。「虞美人草」の青年達には迷ひが無かつた。それは作者の老練の頭腦が若い血と肉を借りたに過ぎなかつたためであらう。こゝで三四郎は生のまゝの迷ひを迷つて居る、それは三四郎が歩く迷路の様な東京の露路の様に。

「虞美人草」では藤尾は酷く扱はれて居る。こゝの女主人公美禰子も亦新しい女である。作中の廣田先生や與次郎の言葉にも此の女を通してイブセンの女が語られて居る。自我の説教はこゝにもあるが、最早作者は此の女を輕薄に片づけない。勿論作者が此の女を教養ある婦人として一應特色づけて居る點に藤尾との相違はあるが、此の異質の中にやはり藤尾から美禰子への正統の發展を見たいのである。思ふに之は作者の新時代の女性に對する解釋の變化・發展であらう。



舊い生活形式から生れる古い趣味に捉はれ、女性を見る眼も舊い女性觀の趣味的な踏襲であつた上に、漱石の作品傾向は恐ろしく道義的である故に、藤尾は斷罪されて了つた。道德の制約に依つて、作品全體を、殊にその最も潑刺自由に表はるべき女性描寫を、足枷・手枷の身動きならぬ状態に置いて了つた。

日露戦争後に來た我國の近代的發展は、小説作品の主人公達をも、漱石自身の思想をも、前期的教養のまゝには置かなかつた。總てのものゝ激しく移り行くことに對する廣田先生の言葉は、漱石自身の感動である。變化するものに從つて社會人漱石は豊かな理解を示さなければならぬ。漱石的新女性の型が現れて來た所以である。

美禰子は遂に學者野々宮を乗越え、三四郎を越えて遂に彼女の理想的な男性とは型を異にした、均整のとれて居るであらう社會人と結婚して居る。耶穌教の教會の前で行はれる最後の別れの女の言葉「われは我が愆<sup>おやまち</sup>を知る、我が罪は常に我が前にあり」。作者はかうして女を自覺したまゝ、形式的な結婚に入れる。

漱石は此の小説中に何か戀愛と結婚の矛盾を指して居る様である。廣田先生や畫家の原口の物語りの中には、結婚に於ける男女の矛盾相剋が幽かに暗示されてゐる。又此の戀物語の成就されない愛も依然として未解決である。之はこれに續く作品の中に盛られなければならぬ問題である。

戀愛と云ふ面だけから見ても、此の作品は主人公の臆病に假托して餘りにも解決さるべき發展を避けて居る。

「それから」以後が此等を一應受繼いで居る。

文 獻 一四七項所掲に同じ

### 一五〇 明治文學に表れたる愛國精神に就いて述べよ

明治初期は歐米文化の移入時代であつた。之は我國當時の國內的國際的諸條件の然らしめたところであつたが、短時日のうちに先進文明諸國と同水準の國家形體を整へようとした結果は、そこに多分の無理が出来た。即ち歐米文化の恐るべき大量的移入は急激であつたために、我國民には充分消化し切れなかつた。こゝに外國文化の單なる模倣、西洋崇拜時代が生れた。鹿鳴館の假裝舞踏會の如き、その一例であるが、斯かる歐化に對立して生れたものは、落合直文・中村義象等の復古的態度である。三宅雪嶺・志賀重昂等は「日本人」を發行し、更に此の一派は「亞細亞」を發行、國粹的精神を鼓吹し、同派の機關紙「日本」及び「小日本」には正岡子規・福本日南等が據つた。此の派は民友社等の歐化主義に對抗して、政論に、史傳に、隨筆・小品に於て日本趣味を顯揚し、又落合直文は國文趣味の普及に努めた。之が文藝上には、鹽井羽江・大町桂月・武島羽衣等の擬古文となつて現れたが、此等

所謂國粹保存主義は思想的には必ずしも充實してゐなかつた。併し之は更に發展して三十年代の高山樗牛等の日本主義となり、更に岩野泡鳴等の唱ふる新日本主義と發展して行つたのである。

明治初期の新しい小説は所謂政治小説であり、此等は當時の自由平等民権思想を反映してゐたものであるが、「經國美談」(一六)、「佳人之奇遇」(一八)等には愛國的精神がその底流として脈々としてゐるのを見る。「經國美談」は紀元前三百年の希臘列國中齊武(イシキ)を中心とし須波多(スハラ)・阿善(アサ)との國際關係と愛國運動を描き、「佳人之奇遇」は西班牙・愛蘭等の愛國者群を描き、尙東海散士(トウカイサンシ)（本書の著者にして、且つ小説中の人物）の述懐として、我國當時に於ける歐米模倣の風潮を難じ、自由民権思想を批判し、「方今焦眉ノ急務ハ十尺ノ自由ヲ内ニ伸サンヨリ寧ロ一尺ノ國權ヲ外ニ暢ブルニ在リ」と當時に於ける國家主義的主張を述べてゐる。

明治二十七八年の日清戦争は國民大衆に強く國家意識を自覺せしめたが、更にその勝利によつて一層國家意識は高揚せしめられた。

戦争の直接的影響としては、戦争の實録が博文館・春陽堂等から續々出版され、その他所謂際物と稱せられる戦争小説が二流作家によつて書かれたが、硯友社一派では、江見水蔭が中央新聞に「夏服士官」(二〇)を載せ好評を博し、翌年軍事小説を「電光石火」の總題の下に連載し、愛國精神を煽つた。泉鏡花も二十七年讀賣新聞に匿名で戦争小説を發表した。此の小説は當時のお祭り騒ぎの似而非愛國心を批判し、眞の愛國精神を示したものである。高山樗牛は國運を賭す此の戦争に際し文壇人が愛國

義勇を唱ふるに、比較的冷淡であると慨歎した。

戦後樗牛は國民的特性に基く自主獨立の精神に據つて建國當初の抱負を發揮するといふ日本主義を提唱した。樗牛等の主張は井上哲次郎等の同じく國家主義の立場からの主張に氣勢を添へられて、戦勝に乗り、國民大衆を風靡した。文學界に於ては樗牛を始め、「國民之友」「日本人」「帝國文學」等の諸雜誌に於て國民的文學の出現を要望する聲が擧げられた。正岡子規は我國に於て初めての國家的統一を見た奈良朝時代の國家的歌集「萬葉集」を讚美し、復古的精神による國家的・民族的感情を強調し、土井晩翠・與謝野鐵幹等は國家主義觀念の溢れた詩歌を歌つてゐる。更に「國土創成賦」（蒲原有明）、「豐太閤」（岩野泡鳴）等の史詩・劇詩等が現れた。

日露戰爭中、江見水蔭・泉鏡花・廣津柳浪等戰爭小説に筆を執り愛國心を煽つたが、戦後長谷川天溪・岩野泡鳴等が、自然主義的態度は自我の發展から必然に擴大して國家主義と共通すると稱する「新自然主義」を唱へた。彼等は古代の神々を理想に置き、日本國家の發展は古代の神々の理想の顯現であると、之を「新日本主義」と稱した。

之を要するに、元來明治文學の最大特色は嘗ての封建主義的文學を世界主義的且個人主義的文學に變化せしめた處にあるのであるが、と同時に此の個人主義的意識を反國家主義的色彩に偏せしめなかつた所にその特色がある。即ち國家あつての個人なりといふ、國家と個人とを調和せしめる點に、そ

の文學思潮の特色があつたのである。

文献 一三八・一三九項所掲に同じ

## 一五一 明治文學に於ける西洋文學の影響に就いて述べよ

明治文學に於ける西洋文學の影響は甚だ著しい。明治以後の文化が西洋文化の攝取によつて成立したにひとしいものがある。之を時代に從つて述べると、

一、初期(元年二十年) 此の時期に於ける文學は、翻譯文學及び政治文學といはれるものである。前者は英(シェークスピア、リットン、ヂズレリー、スコット)・佛(ユーゴー、デューマ、ヴェルヌ)・獨(ゲーテ)及び露西亞虛無黨文學の翻譯などで、或は外國の政治社會を紹介し、或は文明科學の進歩發達せる状態を傳へて、啓蒙に便した。後者即ち政治小説は、板垣退助がユーゴーから助言を得て、その政治思想を文學に託して宣傳しようとしたものである。改進黨側の文人は専ら英國の立憲政治を模範とする政治小説を作り、自由黨側は佛蘭西或は露西亞の自由主義もしくは虛無主義の文學を換骨奪胎してその思想を宣傳しようとした。「經國美談」(矢野龍溪)の如きも、希臘史數種を按排してテーベの興隆史を編したものであるが、その中に改進黨の思想が織込んである。要するに此の時代は、西洋文學を模倣し紹介し翻譯した時代であつた。

二、中期(三十年一三) 此の時期は純文學の方面に大陸文學の勝れた翻譯が出て、深い感化を與へたが、その影響は寧ろ後期に至つて表面に現れ、此の時期自體に於ては、詩に於てのみその効果が現れたといふことが出来る。文學論には、英國流の文學論を咀嚼した坪内逍遙の「小説神髓」、獨逸のエドゥアルト・フォン、ハルトマンの美學を紹介した森鷗外の「審美綱領」がある。詩に於ては、バイロン、キイツ、ブラウニング、シェリイ等主として英國詩人の影響を受けて北村透谷・島崎藤村・薄田泣菫・蒲原有明等の詩人が出、又明星派の歌が出来た。劇に於ては西洋演劇に關する知識のある人々(未松譯)によつて、演劇改良運動が起され、歌舞伎の刷新を圖つた。小説に於ては、長谷川二葉亭の露西亞小説(ツルゲエネフ、ゴルキイ等)の翻譯及び森鷗外の大衆小説(特にアンデルゼンの即興詩人)の翻譯は深い感銘を與へた。創作の方面では二葉亭が「浮雲」をゴンチャロフなどの深い影響の下に書き、逍遙が「桐一葉」以下にシェイクスピア風の史劇を書いた外、一般に強い西洋文學の影響を見ることが出来る。尾崎紅葉には幾種かの翻譯があり、殊に小栗風葉・小杉天外にはゾラ或はツルゲエネフの技巧を模したものであるが、影響といふほど深いものではなかつた。

三、後期(三十八・九年) 此の時期に至つて、眞に西洋文學を體得して、わがものとした創作が出現するに至つた。即ち自然主義の文學運動がそれである。日本文學に於ける近代的自覺、個人主義的徹底は、實に此の運動と共に來た。自然主義運動のリーダーであつた田山花袋は、佛蘭西のフロオベール、

ゴングール、モオパッサン、ユイスマンス等を學ばんとした人である。又演劇方面にも、イブセン、マアテルリンク等の西洋近代劇の影響が著しく、その翻譯及び、小山内薫等によるその演出と共に、此の種の劇の創作が盛んに行はれた。詩歌に於ては英國頽唐派の文人殊に、アアサア、シモンズ等の影響を受けて、感覺的な詩歌が氾濫した。

之を要するに、西洋文學を考へることなくして、明治文學は語り得ないといふことが出来る。

文 献 明治初期の翻譯文學(柳田 泉) 西洋文學翻譯年表(木村毅・齋藤昌三 岩波講座世界文學の中)

明治文化全集第十四卷「翻譯文學篇」

## 一五二 明治時代の口語文の發達に就きて述べよ

一、萌芽時代 明治維新はたゞに政治上の大變革であつたばかりでなく、文化的方面に於ても、舊來のあらゆる封建的なもの、因襲的なものを打破して、近代國家らしき新日本の文化建設の氣運を招來した。その結果殆んど社會の全面に亘つて種々の改良運動が起つたが、それは明治十年から二十年頃までに至る歐化萬能の全盛期に於て最も盛んであつた。それら先覺者の中から早くも文字の本質を自覺した者があらはれ、それらの人々によつて漢字が批判せられることとなり、そこで假名專用論・ローマ字國字論・漢字節減論等の國字改良論が澎湃として起つた。それは初年には少數の先覺者によ

つて叫ばれたに過ぎなかつたが、十六年を過ぎた頃から假名・ローマ字主唱者は何れも會を組織し雜誌を刊行して忽ち集團的な運動と化した。やがて國字改良には文章の平易化といふことが必至であり、そのためには文章は口語文であることが要求されるに至つた。その頃から言文を一致させよといふ叫びが頻りに起り、こゝに所謂言文一致運動が具體化せんとする萌しが生じた。十九年に出た物集高見ものづみ たかみの「言文一致」、チャムバレンの言文一致會席上に於ける言文一致に就いての講演等に、それを最もよく窺ふことが出来るのである。

二、二葉亭と美妙の言文一致 併しその國字改良論者連の言文一致の提唱は理論に止まつて實行にまでは至らなかつたが、その頃文壇にあらはれた二人の先覺者二葉亭四迷と山田美妙とにより遂に實踐化せられることゝなつた。前者はロシア文學に、後者は英文學に親しんだ結果、外國の口語文に教へられることゝなり、そこに言文一致試作の最初の動機があるやうであるが、併し何れも明治の新文學を開拓せんとの意氣に燃え、新しき寫實主義の文藝を求めたためにその表現として言文一致體を必要とし、そのために率先して言文一致體の小説を試みるに至つたのである。

先づ二葉亭四迷は十九年四・五月頃ツルゲエツルゲエ・ネフの原作「父と子」を「ます」調の東京辯で抄譯し、それを「虚無黨形氣」と題した。それは翻譯ではあつたが、言文一致體小説の最初のものである。併し出版屋の都合で刊行に至らず、遂に世に出ずに終つた。次で同年十一月、美妙は硯友社の同人雜誌



「我樂多文庫」に「嘲戒小説天狗」といふ稚拙な言文一致體小説の處女作を發表した。翌二十年に入ると、五月に「小説神髓」の著者坪内逍遙が「此處やかしこ」といふ一種の言文一致體小説を書いた。以上三作の後、同年六月に現れたのが有名な二葉亭の「浮雲」である。此の小説は寫實主義の小説として評判が高かつたばかりでなく、その言文一致體の新文章は大いに世の注目を惹いた。

次に美妙は、二十年十一月「武藏野」を、翌二十一年には口語文の短篇小説集「夏木立」を發表し、その斬新な歐文脈を加味したバタ臭い新文章は極めて世評高く、一方二葉亭は同年に翻譯「あひびき」を發表したが、その細緻且新鮮な口語文は當時の若い作家達に異常な感銘を與へた。又紅葉を除く殆んど凡ての硯友社員も大いに言文一致の新文章を試作し、斯くて二十一・二の約二箇年は言文一致體の全盛期を現出した。

ところが、二十一年頃より歐化排斥を標榜して思想界に捲き起つた國粹主義の運動の餘波はやがて文壇にも波及し、二十二年の半頃より文壇には元祿文學の復活・摸倣の風潮が猛然と現れ、その結果文章界は紅葉・露伴の西鶴張りの文語文が風靡することとなり、そこで言文一致熱は忽ち下火となつて、暫く衰微の状態に陥ることゝなつた。

三、尾崎紅葉の言文一致 然るに、文壇の狀勢の變轉と文章界の推移するにつれて、俄然言文一致熱は意外な處から再燃し始めた。それは雅俗折衷文體を固守して肯じなかつた尾崎紅葉の言文一致體

への轉向であつた。尤も紅葉は言文一致體を以て一貫したのではなく、又その言文一致意識はかなり稀薄な程度のものであつたが、とにかく紅葉は前の二葉亭の「だ」調、美妙の「です」調とは別に「である」調の言文一致體を書き始めた。それは二十五年の事で、小説「二人女房」の文體に初めて用ひたのである。その後も紅葉は斷續的に二三の小説に口語體を試み、二十九年發表の「多情多恨」に至つて言文一致體の一の完成を見せた。一方「二人女房」から「多情多恨」に至るまでの四十五年の間に、他の硯友社員も再び言文一致に復歸し、又新進作家や、二葉亭・美妙の如き嘗ての言文一致體の大家連までも「である」調の新體の口語文を用ゐるに至つた。斯くて三十年を過ぎる頃には、當代の小説家の約七割は口語體の小説を書くやうになつた。

**四、文壇外の言文一致運動** 一方一般の文章界に於ける口語文の發達を見てみると、小説家達の間  
に於ける言文一致體の流行もまだ此の世界には波及せず、漢文直譯體・翻譯體・和文體等の各種の文語  
文が撩亂の美を競つてゐたのである。併しこゝにも國家の進運と社會の發展につれやがて文章界の革  
新が萌し始めた。即ち日清戰役の前後より國家意識が國民の間に高まり、その結果國語の統一、標準  
語の制定等が頻りに叫ばれ、國語問題が喧しく論ぜられることゝなつたが、やがてそれらの叫びの中  
に言文一致要望の聲が次第に高くなり、漸く國民一般の文章意識が目覺めてきた。そこでやがて集團  
的な言文一致運動となつてあらはれ、次で國家的事業として取上げられることゝなつた。

その中でまづ特記しなければならないのは、教育界に於ける言文一致の要望である。三十三年三月、帝國教育會内に「言文一致會」が設けられて、度々講演會を開き、或は文集を刊行する等、活潑に活躍して大いに言文一致の宣傳につとめたのである。又三十五年七月には文部省内に設けられた國語調査會に於て、文章に言文一致體を採用することが決議せられた。次で三十七年新撰の國語讀本には口語文を多く取入れ、中等學校の國語讀本も亦四十年頃から、口語文の教材を多く採用するに至つた。又それよりも早く、即ち三十二・三三年頃から、俳誌「ホト、ギス」を中心として正岡子規一派が唱へた寫生文も、次第に洗煉せられて口語文の模範を世に示し、世人に對し口語文の鼓吹に大いに役立つたのである。斯くして三十七八年頃になると、文壇・教育界呼應して口語文への一途を辿ることゝなつたが、併しまだ一般人の文章の半數以上は口語文でなく、殊に新聞に採用する文體は口語でないものが多かつた。

**五、言文一致確立時代** ところが日露戰役が終ると文壇に自然主義文學が勃興して數箇年の間非常な勢で榮えた。此の自然主義は社會或は人生のありのまゝなる相を描くことを目的とし、總ての虚偽虚飾を排することを強く主張する文學であつたので、さうした内容から當然の結果として口語文を採用し、舊來の文語文を極力排斥した。そこで文壇人の文章はこゝに全く口語文となり、それは又雑誌・新聞の文體にも波及し、ひいては又一般人の文章に非常な影響を與へたのである。口語文そのものと

しても、従来よりも更に自由な文體が生れるに至り、こゝに言文一致は確立した。近代の我國の文章は口語文でなければならぬ事が國民全體にやつとわかつたのである。尤もまだ文語文への未練も相當に強く、又口語文そのものがまた粗雑で洗煉味が足りなかつたので、それらの理由から人々はなほ實際に於ては躊躇逡巡したが、併しそれも大正に入る頃から次第に實行せられ徹底していつたのである。例の帝國教育會内の「言文一致會」がその使命を果したといふので解散したのが四十三年九月であつた事を想起するならば、大體の推測はつくのである。要するに明治の四十年間を我々の祖父達は新文體の模索の中に彷徨し、その間少數の先覺者達に覺醒されつゝ、漸く明治の末年に至つて各自が言文一致意識を獲得し、こゝに口語文はやつと成長發展し得る土臺を得たのである。だから明治時代は一言にして言へば、文章の口語化に費されたことになる。

**文 献**

言文一致の更生とその發達(市川寛 國語國文の研究昭和二年三月—九月) 明治時代の文章相(湯

地孝 國語と國文學昭和五年四月) 現代の文章(片岡良一 同上) 現代國語精説(日下部重太郎)

言文一致體小説の創始者に就いて(山本正秀 國語と國文學昭和八年九月) 尾崎紅葉と言文一致(山本正

秀 季刊明治文學昭和九年七月) 近代日本文章史(瀬古 確)

大正時代の文學は明治文學の延長發展とも見られるが、また明治文學にない特色をもつものでもあつた。その特色を列挙すれば、

一、明治文學は個人主義自我の發展史であつたが、大正時代に於ては漸く個人意識が徹底の度に達し、自我が十分に自覺され、更に分化し始めた時代であつた。従つて單純なるイズムに包含し切れない、多數の新作家が特殊の個性を發揮した時代である。

二、此の時代に於て資本主義文化は漸く極點に達しようとし、階級對立が激しくなつた。いはゆる有産者の文化と無産者の文化とが對立し始め、ブルジョア文學に對するプロレタリア文學の鬭争が見られ始めた。併し大正時代に於ては後者は前者に比して猶微力であつた。

三、西洋文學の影響は深く行きわたり、もはや明治時代に於ける如き淺薄な模倣は見られなくなつた。手法は著しく巧緻になり、殊に巧みに現實の一片をきりとる近代的短篇小説が隆盛を極めた。西洋文學に於ける新思潮・新作風は目を置かずして日本に傳へられ、いはば此の時期に至つて、ほどどりは西洋藝術に追いついた傾きがある。と同時に文學の教養としては主として西洋文學に仰ぎ、日本在來の古典は文學者の教養からは一般的には除外されようとした。

四、個人意識の分化は、個性尊重・特異性探求に向つたが、その結果多少とも病的なもの、頽廢的なものが重きを置かれる傾向があつた。尙、俳句や和歌の如き傳統藝術は、時代の自由主義にひきざら

れて自由律を採用し、在來の詩型・制約を打破せんとするものが生じた。劇の方面に於ても東西の近代劇の演出を旨とする小劇場運動が知識階級によびかけるに至り、西洋戯曲の翻譯と共に、戯曲創作も盛んに發表された。

文 献

大正文學十四講(宮島新三郎)

明治大正の國文學(岩城準太郎)

明治大正昭和文學講話(高須芳

次郎)

明治大正文學の諸傾向(湯地 孝)

孝)

現代作家論叢(片岡良一)

一五四 大正時代に於ける口語文の展開に就いて述べよ

一五五 現代口語文の特質に就きて述べよ

一五六 現代文(日露戰爭以後)の特徵に就いて述べよ

現代口語文の特徵を述べるには、前述の明治時代の口語文に續く大正以後の口語文の展開をまづ見ることが肝要である。そこに現代口語文の長所・短所を招來した原因があるからである。

明治初年から唱道された言文一致は幾多の起伏波瀾を経た後、明治末年に近く勃興した自然主義文學運動によりその副産物として、口語文は當代の文章として不可缺必須のものであることが、國民一般に自覺せられることゝなつた。そして口語文は確乎たる現代人の文章意識の上に立つて、その後は加工成長期に入つたのである。

一、大正時代以後に於ける口語文の展開 明治末年、自然主義に次いで文壇を風靡した一派は所謂「白樺」派であつたが、その人々は古臭い和文・漢文等の文章の素養には乏しく、寧ろ歐文に親しみ且育てられることが多かつた故に、その文章は眞に舊殻を脱した極めて自由自在な口語文となつて現れた。殊に武者小路實篤の文章は代表的なもので、その率直赤裸々な表出は眞に活々とした口語文を生み、前の自然主義小説家も猶ほ脱し難かつた舊套をすつぱりと脱ぎ捨てることが出来た。此の自由さは他の白樺派の作家も共にもつたものであり、且この一派の奔放自在な文體は、他の作家や世人の文章に教へたところも亦大きなものがあつた。この自由な個人の言語を重んずる傾向が、やがて大正以後の多様な個人的な口語文を次第に成長させたのである。

次に白樺派の人々の外國文學に對する深い教養は、當然の結果としてその文章への歐文脈の攝取となつて現れ、明治中期以後から次第に見えてゐた歐文脈の口語文への移入は、此の頃から特に目立つて多くなつたのである。中でも有島武郎の文章などには歐文脈の攝取が最も多く見られた。歐文脈はもと／＼外國語を直譯した翻譯語であつて非國語的要素を多分に含んだものであつたが、却つてそれが國語の表現上の缺陷を補ふことに役立つたのである。殊に委曲を盡した正確な敘法、譯語から生じた豊富な語彙等は口語の洗煉に役立ち、又口語文の表現を完璧に近からしめしたのであつた。

斯くて自然主義時代に於てはまだ蕪雜に見えた口語文も、次第に加工と洗煉が加へられて來た。殊

に白樺派に次で現れた新現實主義小説家達によつて、口語文は社會の複雑な出來事或は人間の細かい心理等をも簡潔に而も適確に描出し得るまでに完成した。その典型的なものは志賀直哉の文章に見るそれである。そこでは、もはや口語文の陥り易かつた冗漫性は無く、言葉の撰擇もほどよくなされ、又簡潔が生む餘韻もあつて、口語文として一先づ完成を遂げたのである。それは時期でいへば大正の中期であつた。

次に大正十年頃より文壇は純藝術派・大衆派・無産派の三派に分れ、その頃から口語文も亦分化の状態に入つた。一先づの完成の後を受繼いだ口語文の正統は純藝術派と大衆派であつたが、純藝術派の尖端を行つた新感覺派の如きは、總て舊來の常識的なるものを排して近代的な新感覺によつて事象の實體を把握せんとし、そのために特に表現に腐心し新文章の工夫に熱中した。その結果、その人々の文章には近代的な物質的構成が加味されて頗る立體的となり、又時代の感覺が取入れられたために文章の速度が早くなつて章句が短くなり、又斬新な譬喩や新味ある符號が用ひられなどもした。とにかくそれまで平面的であつた口語文を立體化し、又近代感覺を盛りうる器にまで至らしめた點では、口語文の發達史上に特筆されてよい。

次に大衆文學は大衆を目標とする故に、その文章は前者に比べると大衆的であり平明ではあつたが、之とても新しき新感覺派の手法の影響を免れなかつた。



次に無産派の文學は大衆派よりも更に低い讀者を對象とする故、又筆にのぼせる舞臺は農民・勞働者等の世界が多い故に、その文章には卑俗な語彙や方言なども盛んに用ひられ、民衆化の方面に向つて進み、口語文の新生面を開拓したが、併し此の陣營から起つた難解な翻譯文は、文壇のみならず一般の文章の上に、晦澁にして破格的な文章を横行させることとなり、その後の文章を混亂に導く主な原因を作つた。

昭和六年の滿洲事變勃發以後は、國家主義が擡頭した爲に、無産派の文學は影をひそめ、文章は概して傳統的色彩を帯びて來、珍奇又は蕪雜生硬なものは次第に退けられ統一せられて、國語の特質美點に留意してそれを口語文の上に生かさんとする試みがなされるやうになつた。たとへば谷崎潤一郎などは國語の美を極力生かさんと努力して來た人で、その文章は「蘆刈」「春琴抄」等にも見られるやうにかなり古典的にもなつてゐるのである。

併し現代文學の文章は極めて多様であつて、各人各様の独自の文體をもつてゐて決して一樣ではないので、簡單には言ひ難い。一方一般の文章についていへば、世上の普通の文章は大體に於て文學者の文章に追隨するのが定石であつたが、併し場合によつては極めて遅々たる場合もあつた。例へば新聞の全面の文體が口語化したのは大正の中期に至つてであつたことを思へば、他はほぼ推察が出來ようと思ふ。現代の新聞雜誌の文章は比較的敏感であつて、文壇の文章の轉移の相を直ちに反映し得る

に近い。併し一般人の文章に至つては書簡文體として今なほ候文がかなりの優勢を保持してゐる如くに、中年以上の人々の文章には新味が足らず古臭い修辭がつきまとつてゐるものが多いのである。又青少年の文體は冗漫蕪雜なものが多く、口語文の體をなさぬものが多いやうである。

**二、現代口語文の特徴** 之について茲に詳密には敘し難いので、以下に要約し、又便宜上明治時代の文章との比較に於て述べることにしよう。

- 一、新體文章の自覺の上に立つて、生活の眞實に即した文章となつたこと。
- 二、和文脈・漢文脈を克服し、現代語の上に立つてゐること。
- 三、歐文脈を移入して文脈に柔軟性と弾力性とを加へたこと。
- 四、翻譯語を採用し、語彙が豊富になつたこと。
- 五、個性ある文體となり、表出が生々とし、自由になつたこと。
- 六、近代感覺を表さんとするために、文章の速度が早くなり、章句は短く、且立體的になつたこと。
- 七、片假名その他種々の符號を用ひて視覺的効果を擧げ、又意味の強化を可能にしたこと。

**文 獻** 現代の文章(片岡良一 國語と國文學昭和五年四月) 現代文章概論(丸山林平)

口語文 現代文の標準文體であることはいふまでもないが、同じく口語文とはいふものゝ、嚴密に言へばそれには二種類ある。一は日常話す言葉通りに書いたものをいひ、他は洗煉せられた現代語を基礎にして發達したよりすぐれた一種の文體を指していふのである。一般の多くの人々は口語文を前者の意味に解し、話す通りに書いたやさしい文章位に極めて簡単に考へ勝ちであるが、眞の口語文は後者の謂である。

そのわけは、我々が聽者を前に置いて話す際には、たゞ言語の媒介だけによつて思想を對者に傳達するのではなく、實際には、我々の身振・眼色・聲音・音の抑揚 又は話し振り等の補助手段を用ひて初めてほど適確に思ふ事をあらはし、又對者に傳達し得るのである。それで再び口語文に就いて考へて見るに、口に話す通りの言葉だけを文字化しただけの口語文である時には、前の場合の他のすべての補助手段は除外されるわけであるから、それだけでは適確に思想を表すことは到底出来ないわけである。そこで思想を文字化して即ち文章によつて完全に近く表現せんとするには、會話の際の補助手段に代ふべきものが是非必要となつて來る。そこで話すまゝを文字に書き寫したのでは不充分となつて、適切な言葉の撰擇、字句の洗煉、譬喩その他の修辭的技巧、筋の構成等が必要になつてくるのである。故にすぐれたる口語文は決して口語そのまゝではなく、現代語を基礎として發達した言はゞ口語體の文語であるわけである。

さうした規準のもとに過去の明治以後の口語文が辿つて來た跡をふりかへつてみると、結局明治時代に於ては舊來の誤まれる封建的文章觀をほゞ克服して、明治年間に流行した言文一致といふ言葉がよく表してゐるやうに漸く文章の口語化への段階にまで進み、正しき文章に對する自覺を國民の心によび起すことが出來たまでである。いはゞ口語文が成長し得るための土臺の建設に明治の四十年間の歲月が費されたわけである。それも文學上の自然主義運動を待つてやつと確立したのであつた。だから文章の上では常に時代の尖端を行く作家の文章でさへ、まだ話す言葉そのまゝの記述の程度を出でなかつた。否動ともすれば、まだ舊文章の殻をかなりにくつつけてもゐた。併しやがて大正期に入り、武者小路實篤・有島武郎等の個性ある自由な文體を創始した白樺派の人々や、現實に立脚して簡素なすぐれた口語文を確立した志賀直哉・菊池寛等の所謂新現實派の人々の文章に至つて、初めて眞の意味の口語文が確立した。それ以後の文壇は純藝術派・大衆派・無産派の三派に分れ、文章も亦大體三様の特色を發揮し、前項の中で述べた如き特色を示すに至つた。そのやうに現代の作家は各がほゞ独自の文體をもち、その種類も多様であるが、そのために一般世人の文章は却つて惑亂せられ、一見混亂の様相をも呈してゐる。尤もそれには、口語文に對する一般人の無關心が招いたといふ理由もあらうが、一方に現代口語文には、此の項のはじめに於て述べた眞にすぐれた口語文の規準からいへば、まだ未完成の部分があり、且又缺點もかなりあるのである。それらをこゝに摘出すれば、口語文の將

來も亦豫想するに難くなからうと思ふので、その方法に據ることゝし、その大體を箇條書にして述べることゝしよう。

**一、全般的な注意** (1) これまでに口語文が攝取した種々の成分に就いてよく吟味し、蕪雜有害なるものは清算し、善き要素は更によく咀嚼消化して、よりよき口語文を建設すること。

(2) 國語の特質を辨へ、國語の美點を口語文の上に發揮せしむること。たとへば性別・階級別による國語の多様性、省略の多い文章法等は、我國の口語文を簡易化し立體化する上に於て大いに役立つのである。

(3) 明治時代の舊來の文章は、文章としての美の標準を形の上に置き、修辭的技巧のみを重んじて外形の整備に腐心したが、現代の口語文は形式美よりも内容を重んじ、個人の眞實に即した文章であつて、そのためには今少し言葉の選擇・配置が留意せられねばならぬこと。

**二、語法並びに文脈上の注意** (1) 現代の口語の語法にかなつた文體たるべきこと。その方法の一として中等學校の文法は口語を重要視し、一般に口語の文法を辨へさせること。

(2) 歐文脈の攝取は現代口語文を非口語的なものにしてゐる故、その甚だしくして國語の美を破壊するが如きものは取去り、なほ一般に今少し口語の語法にかなつたものに近づけること。

(3) 歐文脈の移入は之以上は食傷の恐れもあり、又それに伴つて起る過剰にして蕪雜なる新語の汜

濫は字面の美を損ひ、且口語文を難解晦澁に導く恐れが大いにある故、將來は歐文脈と新語の攝取は國語の美を助長するものゝみにとゞめ、慎重な態度をとること。

三、用語に就いて (1) 耳馴れぬ漢語及び珍奇なる新語は用ひざること。

(2) 翻譯語から來た觀念語は、表現を朦朧化する恐れあるにより、なるべく避けること。

(3) 方言の使用は潑刺味を加味して結構な場合もあるが、併し餘りに耳遠く又卑俗にして標準語の妨げをする種類の語は避けること。

四、國語の特質より觀て改善すべき點 (1) 現代の口語の缺陷の一つは敬語の過剩にある。又母音

が多いために冗漫になり易い故、口語文としては努めて冗長な敬語の使用を避けて簡易化をはかり、なるべく餘韻ある言葉を用ひること。

(2) 現代の口語文は文學物や雜文の文章としては絶對的に優勢であるが、勅語や法令、又官廳・會社等の文書類の文章にまで用ゐられるに至らないのは、現代の口語文に莊重味・重厚味が不足し、且簡便でないためである。それは口語文がまだ未完成であるからであるから、將來はさうした使用にも役立つ文體を創始すること。

(3) 口語は律語的要素に乏しい故、韻律を要する詩歌の用語としては未だ不充分である。口語に音樂的要素を加味すると共に、口語文もその點に留意し詩歌の用文としても堪へうるやうにすること。

一五八 現代創作家(劇・小説)の一作物に就いて評論せよ

島崎藤村氏の小説「嵐」に就いて評論する。

小説「嵐」が書かれたのは藤村氏の五十五歳の時である。此の作者が數年後に大作「夜明け前」をもつて再び人々の視聽を集める迄の低迷せる時代の一作品である。

此の作品は古い柱時計の書出しから、又その時計の點描によつて終つて居る程全體の調子トーンの低いものである。「子供等は古い時計のかゝつた茶の間に集まつて、そこにある柱の側へ各自の書文たひを比べに行つた。」此の書出しは二つの時計によつて結ばれて居る。「この新しい柱時計が四方木屋(註、長男の爲に建てた新しい農家)の爐邊に掛つて音のする目」が遂に來た譯だ、茶の間では「古い時計が九時を打つ」て居る。

此の時計の叙述が象徴に迄なつて居ると云ふ感じは、作者の「時」に托する思ひの深さを考へさせるものである。大正八年自ら作中に懺悔録と稱した「新生」二卷を纏め上げた人の上に、希望した新生は訪れなかつた。傷は癒えることを知らない。恐らくは唯「時」が新しい世界を開いて見せて呉れ

るのだらう。藤村氏の現實への愛着は形の無い時を手に觸つて見る様なものにして、了つてゐる。

「古い時計」之で作者は「私」の時が終つて居ることを、「私」は新しい時代に自然に受渡さるべき時間としてのみ身構へられることを、考へて居るのではなからうか。

「よりすぐれたものとなるためには、自分等から子供を叛かせたい。——それくらゐのことは考へない私でもない」

と考へる父にとつても、大正末期の時代の暗さを子供達の口を通して聞くとき、その感動は如何なものであつたらう。

「私は屋外からいろいろなことを聞いて来る三郎を見る度に、ちやうど強い雨にでも濡れながら歸つて来る自分の子供を見る氣がした。」

母の無い子供達、流離して居た子供達、「新生」二巻によつて我内心の悲劇は了せられた。内部へ内部へと、向けられた眼はやうやく自己のまはりを見廻はし初めた、そこに柔い生命の生長があつた。自我の充足の爲に冷徹な戦を續けた人の、思はぬ虚隙に惨めな戦に終つた人の、自からを葬り去る「時」の背後に新しく生ひ立つ生命へ參することの微かな喜び。生命、これが藤村文學の中軸である。「大都會は暮地です」「過ぐる七年のさびしい嵐」「それ程私の生活を行き詰つたものとした」。そこから起き上ることの出來た世界、「父は父、子は子」でなく、「自分は自分、子供は子供等」でもな



く、ほんとに「私達」への道を見出した心であつた。

長男の爲に川舎に農業の道を開いてやり、そこに新しい家を建設し、次に畫家を志望する次男を送り込まうとする父親の配慮、生きた生活を通しての「私達」は生きた時代を通しての「私達」を約束する。

此の作品は全體が線描によつて畫かれ、その遠近法、その緻密さは決して東洋的な技法ではない。そしてそこに畫き上げられた時間をも、抽象化された人間關係をも悉く眼に見えるものにしよとする欲望に感嘆せざるを得ないが、そのレアリズムの説得力の限界には、新文學として若干の疑問符が附せられるであらう。

文 獻

島崎藤村先生の足跡(水上瀧太郎

中央公論昭和四年十月號)

藤村氏の「嵐」に遊ぶ(湯地孝 明治

大正文學の諸傾向)

### 一五九 現代の主なる作家の文學觀を述べよ

現代といふ言葉を限定して、「現在生存し、且活動してゐる」といふ意味にとる。此の場合まづ大體に於て主義によつて分類するのが便利である。

一、自然主義の作家 正宗白鳥・徳田秋聲・上司小劍・島崎藤村等の人々を含む。現實をありのまま

に觀照し、現實の眞を隠す所なく描寫することを文學の目的と考へる。美と裝飾とは眞の散文精神から遠い。それは現實を見得ないものの假面にすぎない。愛憎の念を挾まず、人間精神の物質的・利己的醜惡な側面を憚りなく寫し出さう、それによつて人生の眞の姿が如何なるものであるかを知らうとするのである。

**二、理想主義の作家** 武者小路實篤・志賀直哉・長與善郎氏ら。前の人達ほど人生を暗いものと感ぜず、人類の未來に希望を感じ、つとめて人生を明るく見ようとする。自我の尊嚴を感じ、この生を暗くするもの、絶望的ならしめるものは自我の成長を害する不道德なものであるから、それらを驅逐し去つて、つとめて明るく、肯定的に人生を受取らしめるものが文學の使命であると觀するのである。

**三、唯美主義の作家** 泉鏡花・谷崎潤一郎・佐藤春夫・久保田万太郎・永井荷風氏ら。人生の醜惡から目を轉じ、詩美の世界を建立してその内に夢み、若しくは生きようとする。文學は此の意味に於て、人生及び世界の美化、若しくは詩化を目的とする。讀者も作者も此の世界に於て現實から離れて強く酔ひ得ることによつて淨化され慰藉を得る、といふのである。

**四、現實主義の作家** 菊池寛・里見弴・久米正雄氏ら。人生の斷片を切りとり、之によつて全人生を彷彿せしめる所に文學の理想を見出す。従つて自然主義の作家ほどに無技巧を尊重せず、技巧の加工によつて現實感を強からしめようとするのである。尙この派の中でも、里見氏の如き藝術を人生より

も上に置いて考へる作家と、人生第一、藝術第二と考へる菊池寛氏の如きとある。

以上は大體の區分であつて、尙嚴密にいへば、斯くの如く判然と區別出來ない點が多い。たとへば自然主義の作家中でも、正宗氏と島崎氏とは可成り相違し、後者には理想主義的色彩が濃い。唯美派の作家中、永井荷風氏を自然主義の作家と數へるものもあり、現實派の中でも里見弴氏には理想派の色彩が濃い。又自然主義の影響を強く受けながら、理想的たらんとつとめる廣津和郎氏の如き作家もゐれば、自然主義と唯美主義との中間を行く近松秋江・宇野浩二氏の如きもある。尙、横光利一・川端康成二氏の如き新進一流の作家もゐるが、後者は唯美主義を以て目されるであらうか。此の問題に就いては、尙次項の解説をも参照せられ度い。

#### 文 献

大正文學十四講(宮島新三郎)

現代文學評論(正宗白鳥)

文壇人物評論(同上)

現代作家論叢

(片岡良一)

現代作家の人及作風(川島益太郎)

## 1100 最近の文學思潮

### 1101 我が國現代の文學に現れたる思想上の傾向に就いて述べよ

歐洲大戰後滔々として流れ込んだ社會主義的思潮は、爾余の傾向を次第に壓倒しながら、昭和に入

ると愈々共產主義的傾向を明かにして來た。

文學思潮も此の一般的社會思潮に影響されないことはあり得ない。

明治末年に出發した自然主義は新現實主義新感覺派となつて發展して居つたが、此の文壇内の隆盛にも拘らず、一度此の廓外の思潮を迎へるや分裂して了つた。

此の政治思想の全盛に伴ひ、昭和に入ると既成文壇と關係なく多くのプロレタリア作家が輩出し、又新感覺派等既成文壇中からもそれに合流し、又思想的動搖から多くの同情者を出した。自然主義的若しくは新現實主義的作家等既成作家の大部分は影をひそめ、文壇の沈滞が頻りに叫ばれた。

此の沈滞の中に所謂ブルジョア文壇復興を目ざして新興藝術派なるものが起つたが、此の末期的頽廢的文學はプロレタリア文學の粗笨蕪雜なもの排撃を主唱したにも拘らず、モダーニズム文學と稱せられ、多く形式の末に流れ、自然主義以來成長し來たつた我國の文學的遺産に何等の加ふべきものを齎らさなかつた。一般に資本主義の爛熟解體期の文學として規定づけられた此の文學運動の内からは、文學に於けるエロチシズム、無意味なる洒落滑稽等で、遂にナンセンス文學を生み落したに過ぎなかつた。それ故、此の派の中からはその享樂主義的傾向に飽足らず、新社會派文學を旗印とするものが生れたが、單に社會觀照を事としたために、プロレタリア文學運動からは顧みられなかつた。

然るに共產主義運動は我國の國體と相容れないものがあり、その運動も數次の彈壓を被つた上、プ

ロレタリア文化運動のその非合法なる運動との相關關係も暴露され、有能なる作家の投獄を見るに到つて、著しく衰退し、昭和八―九年頃より轉向作家を出すに到つた。

併し、世界的不況のあほりから来る國民經濟生活の行き詰り等があり、茲に非常時が唱道され、と同時に一方此の期に入つて嘗ての自由主義の復活を見るに至つた。

併し國內のこの沈衰にも拘らず、西歐諸國からの影響を受けない譯には行かなかつた。フランスの知識人の運動である、知識人の能動性を主眼とした行動主義文學が唱へられ、之には嘗ての左翼作家等の一部の参加を見たが、作中行動的人物の登場、作品の視野の擴大と云ふ以外には、行動そのものの内容に至つてはかなり不明確で、源流であるフランスの運動とは大分趣を異にした。此の間、佛の巨匠アンドレ・ジードの共產主義への轉向問題も大きな刺戟となつたことは争はれない。

嘗ての左翼作家が中心となつて、左翼破壊後の衰頹期から立ち上つたものに、人民文庫派と日本浪漫派とがある。前者はプロレタリア的レアリズムの方向を、後者はプロレタリア的ロマンティズムを受繼いだものと云はれて居るが、後者の浪漫派には政治的傾向が失はれて、自國主義的文學の建設の爲に、時代的潮流と呼應して、我國の古典の回顧、血統の追求等が行はれて居るのは、注目に値する。

斯かる國民主義的傾向は時代的に用意されたもので、作品的には島崎藤村の「夜明け前」の完結等

もこの時代に符合するものである。たゞ全體としての色調は、此の期間、キェルケゴール、シェストフ等の虚無思想の輸入に見られる如く、かなり暗いものがあるのではなからうか。現今起りつゝあるネオ・ヒューマニズム運動も、行動主義の缺陷を補ひ、その目的に何物かを與へようとする努力である。

文献 文學評論(小林秀雄) 現代日本文學序説(唐木順三) 行動主義文學論(小松清)

## 一六二 現今國文學界の新傾向に就いて述べよ

現今の國文學界には、從來見ることを得なかつた新運動が擡頭してゐる。それを分類觀察してみる。

一、日本主義的主張 之はまだ一定の名目を持つてゐない。滿洲事變勃發以來、それ迄潜行してゐた祖國主義・愛國主義の意識が俄に昂まると共に、國文學界にも精神的日本主義が勃興した。國文學の日本的なるもの、が探求された。「日本文學の本質と國語教育(藤村作)」や、國民精神文化研究所發行のパンフレット・雜誌・著述の如きその代表的なものである。併し、それが稍々靜まつた後に、科學的とも云ふべき方法が起つた。日本文藝を、日本國民の精神的所産とし、従つて國文學史の如きも、日本國民の精神史だ、と見る立場で、久松潜一博士の如き、その代表者である。此の傾向は次第に深化され又精緻化されて今日に到り、最近の國際關係(主として對ソツ)の切迫の爲、益々強化されて、遂に、高等學校・專門學校及び中等學校の教授要目の改正と迄發展した。一方、昭和十一年の頃から、

文壇にも日本主義的傾向が唱道され、國文學の古典が現文壇の人々によつて再認識されて各種の論策が發表され、活潑な論争が現在(昭和十一年夏)猶、とり交されつつある。

二、日本文藝學の主張 主として、東北帝大教授岡崎義惠氏の主張する所である。之に就いては一六三項参照。

三、歴史的方法 今日の所謂歴史的方法とは、特殊の限定と意味をもつもので、寧ろ、社會的方法といつた方がよく分るのである。即ち對象たる作家・作品を、歴史的・社會的觀點に於て把握しようとするのである。言ひ換へれば、作品の世界を通じて、作家と、彼の創作を決定した階級や社會層の生活を認識することである。作品に於けるイデオロギイの内容を批判することを目的とする、とも約言出来る。従つて此の立場からは、或る作家の個々の作品よりは、此の作品を通じる作家の一般的性格殊にその社會性の認識が根本のものとなる。津田左右吉氏の「國文學にあらはれたる國民思想の研究」などは、此の種のものの先驅であつたが、今日では國文學の社會學の見解が種々の形で發表されてゐる。

従つて此の立場は作品の理解よりも説明をめがける。又、作品は歴史の必然なる進行の中に動いた一つの實踐であるから、作品の價值評價は、此の作品のもつ現實の歴史の進行に對する關係——歴史の進行を進める關係に在るか、退歩させ又は停滯させる關係に在るか、で定まり、前者をよき作品と

する。斯く此の研究態度はいはゞ唯物辯證法に立脚したものであり、従つて、此の方法の可否は、結局此の唯物辯證法が文藝を把握するに妥當な方法かどうか、と云ふ點で定まると云へる。

**四、民俗學的方法** 之は今日残つてゐる民間傳承、文化の殘存物を對象とし、之から類推して過去の民族生活を考へようとするのである。従つて、個々の作品よりも、その作品を産み出した生活に興味をもつ。又、作品の表現や修辭の美的性質は輕視され、素材が主として問題になる。だから、單語の解釋にも、その言葉の發生的な生活感情に迄さかのぼるといふ行き方をとる。

要するにその研究の仕方は、發生的であり、成立的であつて、生活及び生活感情の結果として文學を眺める點に長所がある。併し此のやうな態度を固執する爲に、作品の客觀的意味を明かにし得ない缺點がある。殊に文藝意識で統一された純文學的作品に對しては、適用出来ない場合が多い。柳田國男氏・折口信夫氏は此の派の總帥であるが、折口氏が源氏物語を「紫の物語」といふ巫女の唱道から始まつたといはれる如きは、十分に客觀的とは云へまいと思ふ。

**五、解釋學的方法** 解釋學を基礎理論とする方法である。解釋學といふ言葉には二義があり、作品の表現理解の方法學としての解釋學と、精神科學一般の方法に對する反省的方法學としての解釋學とがあるが、その根柢に於ては共通してゐる。而して、之を國文學に就いて云へば、具體的な表現の直觀的把握から出發し、その内的な本質構造を闡明するのを目的とする。が、その場合デイルタイなど



の現象學的方法を取入れることによつて、方法論上の嚴密性を得ようとする。特に今日迄の國文學界に於ける解釋學的業績の實踐としては、阿部次郎氏の「徳川時代の藝術と社會」の如きデルタイの影響を見ることが多い。九鬼周造氏の「いきの構造」の如きは、ハイデッガーの存在論的解釋學の優れた實踐である。まだ國文學者以外の人によつて示された業績が多く、國文學者の中にも此の學的立場に立つ人はあるが、その見るべきものは今後に期待される。

尙、前述五項のほか、本文批評を第一義とする主張や、實證主義の提唱も見られるが、それらは十年前よりの傾向であつたり、何等基礎理論をもたなかつたりして、特記するに足りないのである。

#### 文 献

日本文藝學(岡崎義恵)

國文學の哲學的研究(土田杏村)

古代研究國文學篇(折口信夫)

桃太

郎の誕生(柳田國男)

民間傳説論(同上)

上代民族文學とその學史(久松潜一)

國文學界の諸學派

(石山徹郎 國文國史二卷一號)

日本文學研究法批判(吉田精一 國文國史二卷一號)

### 一六三 日本文藝學の提唱を論ず

「日本文藝學」或は、「日本に於ける文藝學」が、問題として取上げられたのは、昭和六、七年頃に始まつてゐる。併し、近時それが國文學全般に問題となつたのは、岡崎義恵氏が、昭和十年日本文藝學を以て國文研究の主たる——或は唯一の方法とすべく提唱されて以來の事である。それで、ここに

は、岡崎氏の「日本文藝學」に就いて述べよう。併しそれにしても、その後、幾多の批判が之に向つて提出され、その大部分は氏に對する反對論の形で提出され、氏は、それに應じて、諸雜誌に次々に自己の立場を述べてゆかれた。その敘述の間に、氏の論述が漸次變化して現在(昭和十三年夏)に到つてゐる。従つて、問題は複雑であるのはもとより、未だ發展の途上にある爲、日本文藝學の實相を捉へ得ないと云ふ特別な困難が存する。その困難を犯して出来る限り要約してみると次のやうになる。

「文藝學」と云ふ學は獨逸に既に存するのであるが、岡崎氏によれば(以下同様、特(に斷らない))、日本文藝學と云ふのは、日本に於ける文藝學といふよりも、日本文藝の學であり、日本独自の文藝學である。而して、日本文藝學を國文學に採用する事によつて、研究對象としての國文學と、研究方法としての國文學が區別される。つまり、國文學の對象の方面即ち日本古典と、研究方法の側面即ち理論とが、判別されるのである。

では、日本文藝學の、實際の内容はどんなものか？ 此の點、氏の所説が、殆ど月々に變化してゆくので、眞に捉へにくいだが、先づ第一に此の方法によつて、從來の國文研究が、書誌學的或は狹義の文學的方法に偏つてゐるのを改めて、日本古典の文學性・文藝性を重視しようとする。その爲に、鑑賞と云ふ事が、重大な問題となり、一時は、鑑賞が日本文藝學の全體であり中心であるかの様な説の發表された事すらある。その後、それが是正された様な混亂があるが、兎も角之によつて、日本文藝

學が、實證主義的方法に對する、鑑賞的・主觀的・直觀的基礎に立つ事を知るべきである。

第二に、様式の理論を含む。様式、とは、一般的にも又氏自身の用法でも、實に曖昧であつて把へ所が無い概念であるが、氏自身の言葉に従ふと、様式は、(一)抽象概念と具體的事實との中間に存する類概念である事(これに伴つて當然、外部即ち異類のものに對しては個性として、内部即ち同類のものに對しては一般性として見られるものである事、と云ふ性質を持つに到る)。——(二)普遍的なるものが具體的現象の中に實現せんとする状態を意味する。以上二個の要素を持つ、と云ふのである。つまり、従来の「理念(上代文學の理念としてまこと。中世の理念として幽玄の如き)」よりも具體的个性的なものであり、個々作品の雰圍氣とか内容とか云つたものに比すれば一般的抽象的な中間物だ、と云ふ事になる。而して、個々の文藝作品の美的意義は、種々なる様式の複合として理解され、斯かる様式は更に上位の様式標徴即ち「風」或は「體」と云つたもの(物のあはれ・幽玄・さび等)の一環をなすものである。従つて、日本文藝學は、日本様式學と云つたものに外ならぬ事となる。

併し、それが實際にどう云ふものであるかは、氏自身、様々に變つた意味に用ゐられてゐるため、度々この語が頻出するにかかはらず、その意義が把握し難い。が、例へば氏が、平安朝文學を「爛熟・停滯・頹廢」の文藝と見られ、鎌倉文學を「素樸・生動・健康」の文藝と見られるのは、一つの様式論であらう。又、「あはれ」を、「ものあはれ」よりも、もつと本質的のものであり、その基礎をなすも

のであると見られ、平安文學のみならず、日本文藝の根本的特質である、とされる様なのは、「あれ」を、前記の様式標徴と見られたものかと思はれる。

第三に、此の様式の理論でも分る様に、氏の説には、抽象的な文藝理論、理論の爲に理論を唱へる様な立場——例へば、美學の立場から、美學の概念をふりまはして日本文學を論ずる様な立場——に對して反對する一面がある。それは、眞の歴史性を喪つてゐる。それに對しては、辯證法的な或は直觀的方法によつて、具象性を加へる要がある、とされる。

斯くて、第四に、氏の説は、歴史的性格を帯びる。それは、日本文藝學が、その對象は日本の古典であり、過去の作品である爲、當然歴史の問題に觸れる。又第三の、美學的抽象論に陥る事を避ける爲にも、歴史性を必要とする事になる。而して、氏の歴史理論は、これ亦一種の抽象性を帯びる。氏は一方に、文藝の自律性を認め、文藝は、文藝自身が時代によつて自身を轉生せしめんとする意志を持つ、ここに各時代の文藝様式が発生する、と見られる(この點抽象的である)。と同時に、併し實際に當つては、文藝意志は、時代様式を現さんが爲に、政治・經濟等の變動を待ち、その勢に乗らんとする志向をも持つ、とされる(此の點具體的である)。故に、その論は、抽象性を含み、又、抽象・具體の二元性に立つのである。

以上の外、各種の要素をも含むが、發展途上に在つて常に明瞭に見得るものは右の四點である。

## 文 献

日本文藝學(岡崎義恵)

文藝學と文藝鑑賞(同氏)

改造昭和十一年十一月)

文藝學と文藝史(同

氏 國語と國文學昭和十二年三月) 文藝學と日本文藝學(石山徹郎 國語と國文學昭和十一年十二月)

日本文藝學の根本問題(同氏 短歌研究昭和十二年三月) 日本文藝學の方法論(吉田精一 國語と國文學

昭和十一年四月)

## 一六四 明治・大正時代に於ける新詩の變遷を略述せよ

一、明治十年代 新體詩は讚美歌の翻譯などにより示唆されたが、明治十五年、外山正一・井上哲次郎・矢田部良吉等によつて「新體詩鈔」が生れ、之が第一聲となつた。併しその詞藻は幼稚で多く云ふに足らず、大部分はたゞ雅語を連ねて詩と稱するやうな時代が長く續いた。「孝女白菊の歌」(落合直文)は世に傳誦されたものである。

二、明治二十年代 「國民之友」に、森鷗外・落合直文等の西詩を譯した「於母影」出で、その典雅な措辭と清麗な詩想は大いに世を動かすものがあつた。當時韻文論・詩歌論は盛で、その形式・内容等について、山田美妙・森鷗外・大西操山等もよく論ずる所があつた。「湖上の美人」(鹽井雨江譯、スエット原作)と、武島羽衣の「小夜砧」は世に迎へられたものである。併し此等は所謂大學派の擬古詩と稱されたもので、形式を調へるに急で、詩情の躍動には不足があつた。

眞に若き青春の情感を注入して新しき抒情詩を創作したのは島崎藤村の「若菜集」(明治三十年)であり、正

に劃期的のものである。藤村は北村透谷らと共にはじめ劇詩を作つてゐたが、此の頃、浪漫的感情を自然の流露にまかせ、浪漫詩人の第一と稱された。

三、明治三十年代 藤村によつて開幕された新詩の第二期は、藤村に雁行する男性的詩人として土井晚翠の「天地有情」(三十一)を得、浪漫詩全盛を來たした。藤村は「落梅集」(三十一)を以て詩を去つたが、三十年代は詩集の出版相繼ぎ、正に詩歌の全盛時代であつた。

藤村・晚翠に次ぐ巨匠は、薄田泣菫と蒲原有明である。泣菫は古典的な雅語成句を驅使して莊麗典雅な古典詩を創め、その詩品は「白羊宮」(三十一)に於て極まつた。有明は「春鳥集」(三十一)・「有明集」(四十一)に於て絶頂に達し、泣菫に次いで象徴詩風を完成した。此の間上田敏が佛蘭西象徴派、高踏派の詩を主として翻譯移植せる「海潮音」(三十一)の名譯出で、象徴詩全盛に寄與する所多大であつた。

四、明治四十年代 然るに此の象徴詩風の全盛は自然主義思潮の詩壇への流入によつて一變し、口語詩・官能詩が唱へられるに至つた。併し口語詩に於ては勝れた業蹟が擧げられず、官能的な詩の方面では、北原白秋出て「邪宗門」(三十一)・「思ひ出」(四十一)に繊細な感覺を誇り、自在な詩語の驅使を示した。白秋と雁行して三木露風あり、「廢園」(三十一)以下の象徴詩風を以て白露の對立を稱された。

五、大正時代 大正初期に白秋門下から萩原朔太郎が出て「月に吠える」(六十一)以下病的な感覺を以て獨自の詩境を開拓し、口語を以て最も音樂的な詩を書いた。ほかに高踏詩風をとる日夏耿之介の

如きもあるが、おしなべて大正時代の前半は人道詩・民衆詩の全盛時代で、高村光太郎・千家元麿らの如き詩人が出た。白秋の門に出た室生犀星も「愛の詩集」以下に於て人道主義的な詩風を開いた。大正九年詩話會が結成され、詩人の大同團結が出来、月刊詩誌を發行し、又「年刊日本詩集」を出したが、いくばくもなく崩れ、プロレタリア文學運動と共に、詩壇には無政府主義的詩風が登場した。「死刑宣告」(萩原義次郎)(大正十四年)は此のやうな方面の代表詩集である。

#### 文 獻

明治大正詩史(江夏耿之介)

日本新詩史(福井久藏)

明治大正詩史概観(北原白秋)

改造社日

本文學講座「新詩文學篇」

新體詩變遷の展望(湯地孝)

日本文學聯講明治篇)

### 一六五 アララギ派の寫生の說に就いて述べよ

アララギ派はその源を正岡子規に發する。従つて、その寫生の說も子規から始まる。子規の首唱したのを長塚節が強化し、島木赤彦・齋藤茂吉氏によつて根本第一義として深化されたと云ふのが、アララギ寫生の說の發展である。

明治の三十年代の初頭は桂園派の所謂舊派の人々と、所謂新派、落合直文の流を波む一群(漱中、明星派)などが榮えてゐた。既に俳句の革新を遂行した子規は短歌の改革を志し、明治三十一年「歌よみに與ふる書」といふ十回に亘る歌論を發表し、同時にその議論の實行物たる百二十首を「百中十首」と名づ

けて發表した。その後の「墨汁一滴」その他の隨筆に言へる所を綜合するに、子規の本旨は、海上胤平等の舊派が陳腐な内容と型に笹まつた表現に甘んじてゐるに對し、萬葉等を模範として廣く素材を求め、新しい内容を取るべき事を言ひ、又明星派に對しては、その主觀的で柔軟な調に對し源實朝や平賀元義の強い調子を讚美した。而して此の目的を達する手段として客觀的手法をとり、之を寫生による表現と唱へた。それは「六たび歌よみに與ふる書」の最後に見えてゐる様に、「油畫師」即ち洋畫家から影響されたと見得る。それから、子規では寫生といふ事は必ずしもその歌論の中心命題ではなかつた。彼の唱道した客觀主義の一補論として提唱したと見える。而もその客觀主義は、必ずしも主觀を排して是非客觀でなければいけないといふのではないといふ事を幾度も説いてゐる。だから實際創作で客觀的手法を基本としてゐたのは事實だが、論としては「寫生」は彼の歌論の中心命題ではなかつたと思はれる。

然るにその弟子、長塚節になると、寫生は理論的にも實際作品上にも甚だ重要性を増して來る。彼は「寫生の歌に就いて(馬解本、明治三十八年二月號三)」に於てその寫生觀を述べる。歌は主觀を交へなければ到底成功するものでない。併し主觀的又は主觀を現す方便として客觀を使ふと云ふ從來のやり方には飽が來た。彼は説く「一つは客觀的の製作物が好きなのと、一つは在來の製作に飽が來た反動である」と。又、「歌は文學上の小部分である。寫生の歌が一體となることが出來たら歌の區域がいくらかでも擴大される



譯である」とも説いてゐる。此等が彼の寫生採用の動機である。之に附隨して、「俳句と違つて寫生の歌を作ることは非常にむづかしい。」と言ひ、その實際方法として「寫生といふ以上素より實況でなければ駄目である。現在に目に觸れないものでも、曾て見たことのあるものならば宜しい。空想は失敗し易い。」と説く。此等によつて節の「寫生」が、客觀をその要素とする事と、實地實境に則して作る事を念じた事、寫生によつて歌の範圍を擴大しようと企圖した事等が知れる。彼は之を根本方針として活用し、幾多の名作を残した。但、理論的には主觀の歌をも排斥してゐないから、其の主觀と寫生とは無關係におくのか、何等か關聯するののか、その點明かでない。此の點は子規も同様である。

次に、島木赤彦では「寫生」は歌作の唯一の道であつた。その主旨は、「私どもの心は、多く、具體的事象との接觸によつて感動を起します。感動の對象となつて心に觸れ來る事象は、その相觸るる状態が、事象の姿であると共に、感動の姿でもあるのであります。左様な接觸の状態を、そのままに歌に現すことは、同時に感動の状態をそのままに歌に現すことにもなるのであります、この表現の道を寫生と呼んで居ります。私の前に直接表現と言つたのも、多くこの寫生道と相伴ひます。(歌道小見)」と云ふ言葉に窺はれる。即ち、外物との接觸によつて起つた感動をそのまま歌に現すのが寫生であり、その寫生によつて表現の根本義たる感動の直接的表現が可能である。従つて、外物に關係なく起る主觀の言葉や感動の概念やを嫌ふ。概念は一般に通じて特殊な個物の個性を現し得ないから。而して、

此の寫生に當つて、寫生によつて歌の材料を廣め、歌の世界を擴張しようとする(現の態度である)と説く節(それは廻れば子)の名を擧げて、之に反對を表明する(短歌小觀比奈呂)。即ち、彼の意見は、「吾等は只事象より深く澄み入らん事を冀ふ。益々深く澄み入らん事を希ふがゆゑに、益々深く事象の微動に觸入せんとするなり。我等の寫生斯の如きのみ(アララギ大正四年十一月)」——かくて、寫生とは、子規の手段的段階と見る態度にとどまらず、歌作の根本義であり、子規・節の主觀・客觀の對立觀を止揚して、その總合的高次概念となつた。それは進んで倫理的色彩を帯びた。即ち寫生は、「吾人の趣味修養法である(アカサノ頭)」「思想修養の要諦である(阿)。」と説かれるに到つた。此の寫生の深化と、寫生の倫理化とが、赤彦の特徴である。

それが、齋藤茂吉氏になると、寫生は思索的理論的に組織化されて行つた。それは、子規が西洋畫論の援を借りたのと對照的に東洋畫論に依つて理論を築いた。即ち、支那の畫論で、「寫生」を、生を寫すと解する。その生とは、人生自然の最奥にある生命の如きを意味する。之が吾人の唱ふる寫生だとした。かうなると、寫生は文學論の中心たるのみならず、論者の世界觀に通ずる中心的命題といふ事になる。尤も、この東洋畫論の借用は、赤彦も寫生の語が支那畫論から發生した、と言つてゐるが、全體で四―五行の小論である。總じて、赤彦以前のアララギの寫生論は多く直觀的言説で、理論としては著しく非體系的であつけない。齋藤氏をまつて始めて理論化されたと見るべきである。而して此の場合の「生」が、現代小説の理論でいふ「眞實」(リアリティ)に當ると解される。齋藤氏における「寫生」

とは、その「眞實」を寫すといふ意味でのリアリズムだと解釋して差支へあるまい。尙、氏は、寫生による創作態度を、「實相觀入」と名づけられるのも、この根本的な「生」へ入りこんで創作すると云ふ意味であつて、東洋畫の寫生の論に西歐の感情移入説を加味した立論だと思はれる。

アララギ派寫生論は、明治以後の文學論の代表的なものの一つであるが、アララギ作品の優秀性が認められるのと伴隨して世の注目を惹くに到つたのである。その是非の論は、多年に亘つて論争され、現在も折に觸れて波瀾をあげてゐる。併し、事實としては、論の當否は實作で來い、と云ふアララギの強引な態度が反對派を壓伏してゐる、と見得るであらう。尙、その非難の中で、子規の言説を捕へて後のアララギを難したり、アララギの理論の現在迄の發展を前後矛盾か變説かのやうに見て攻撃したりする論者があるが、之は文學論の進展の必然性及び其の價値を知らざるものである。

文 獻 子規隨筆(子規全集)

寫生の歌に就いて(長塚節全集)

寫生雜記・歌道小見(島木赤彦全集)

短歌寫生の説(齋藤茂吉)

## 一六六 現代口語歌の成立及び將來に就いて意見を述べよ

「口語歌」とは、明治末期に口語(デアル・デアリマス)口調で明治の會話體(を以て作つた歌)のことである。その作品・作者・運動を指すのである。従つて、その内容がどんなに平明容易であつても、例へ

ば石川啄木の如くであつても、根本表現が文語體であるものは、口語歌に入れ難い。又、大正中期以後におこり現在も一派をなしてゐる非三十一音形の破調の歌は、この口語歌の運動とは一應別と見るべく、その後續者とするのが妥當である。

口語歌の主張は、言ふ迄もなく、現代の歌人は現代の話語を以て歌作すべし、と云ふにある。之に似た主張は、中世の藤原爲兼や近世の香川景樹・大隈言道にも見えるが、それを徹底的に説いたものである。次に、その實作を示さう。

たけの髪おろすつぼねも城にある花の散らない處ないゆふべ

青山霞村

さむい街しぐれた馬のたてがみのかはくまなうて日がくれてきた

これやさかいこれやさかい厭いややと女達さわぐやまみち蛇横はる

「死ぬ時に子供等の事は？」 「思はない。死んでく自分だけがいとしい。」

西出朝風

うつ向いて路ゆく癖をつけたのはそこいらへ來た秋か。で、ないか。

「南京蟲のぬないところはなない。」と言ふかなしい事を聞くではないか。

縫針を 土に落せば響くかと思はれる秋 人旅に立つ

鳴海要吉

夕焼 巢鴨橋の上 それほども感ぜずに見てゐた富士山

儲かる事をねつしんに語るこの人のあの輝いた瞳はどうだ

西村陽吉

富む人が金で買つてる夏の間の　その自由をば　みんなに與へろ

青山霞村は、明治七年六月深草の霞ヶ谷に生れた。明治三十四年關西學院で口語詩歌をはじめ、三十九年最初の口語歌集「池塘集」を出し、爾來最も古い且有力な口語歌人として活躍した。西出朝風は、明治十七年十月石川縣大聖寺町耳聞山に生れた。明治三十四年十八歳始めて口語歌を作つた山で、一時中絶し、四十二三年頃から再び口語歌にかへつた。鳴海要吉は明治十六年六月青森縣黒石町に生れた。四十一年二十六歳の頃から口語歌に進んだ。西村陽吉は、明治二十五年四月東京市本所區相生町に生れた。明治四十年の初から口語歌運動に入つた。第一歌集「都市居住者」は大正五年の發行である。——以上の諸歌人に共通の色彩から、次の事情が分る。口語歌が、明治四十年又はその後から一つの運動として擡頭した事である。及び、彼等が口語歌の以前又はそれと同時に口語詩或は自由詩を作つてゐて、その爲に新體詩の口語詩・自由詩への崩壞が口語歌運動の直接刺戟となつた事が分るのである。之は又、俳句の所謂「新傾向派」とも相通ずる同期の運動と見る事が出来よう。

口語歌の文學的價值に就いては、盛な論争が闘はされた。それは詮じつめる所、主張としては、現代人は現代語を以て作歌する、と云ふ事は一應正しく見える。併し、再按するに、三十一音の歌形は言ふ迄もなく文語的發想法を基礎として五七の歌形を組み上げたものである。従つて、それと語法、語彙を異にする現代語で歌作し且之を五七形にあてはめようとすると、必ず不都合が出来、それを埋

める爲には、第一例歌の結句や第四例歌の第三句の如き無理を犯さねばならなくなる。次に、口語歌はなるほど、形式的な新しさは獲得した。併し、内容的には案外古く、霞村のやうな本質的には明星派の歩いた跡を追うたり、根本的にはセンチメンタリストの範圍を出ない者が少くなかつた(例歌)。これでは、眞に新味ある詩歌としての意義が無い。此の意味からは、西村陽吉及び、口語歌運動の末期にこの内に入つて來た無産派的色彩は、外形の革新と内容的な新鮮さとを兼ね持つものと云へる。

併し、一體を通觀して、口語歌は既成の定型短歌に打勝つだけの實作品を提供し得なかつた。一人の晶子・子規・赤彦・茂吉を生まなかつた。この爲、議論としての當否は別に、實際運動として榮えなかつた。その内、大正中期の無産文藝の運動は口語歌へも影響し、無産派歌人はその一部は初は口語歌的形式をも採つたが、遂には一切の形式の束縛をいさぎよしとしないとして、無定型短歌へと走つた。この爲口語歌は、歌壇の最新鋭歌としての位置を他に奪はれた事となり、相對的に不利な衰運に見舞はれて現在に及んでゐる。將來とても、内容的必然性を持たぬ以上、口語歌がこれ以上躍進するなどは期待できない。

## 文 献

明治大正短歌史概観(齋藤茂吉 現代日本文學全集「現代短歌集」)

口語歌集(改造社現代短歌全集)

第三編 國文法

## 一 總 説

一六七 奈良時代と平安時代との語法を比較せよ

一六八 萬葉集に現れたる文法と古今集に現れたる文法

とに於ける主なる差異に就いて述べよ

之は兩者問題が相似てゐるから、一括して述べる。先づ、單語論からいへば、

代名詞 は奈良朝では吾<sup>ア</sup>・吾<sup>ウ</sup>・汝<sup>ナ</sup>・此<sup>コ</sup>・其<sup>ソ</sup>の様に一音のまゝ獨立して使はれたのが多いのに、平

安朝では一音が極く稀になり、此の下に接尾語<sup>レ</sup>や、助詞<sup>ノ</sup>・ガを伴つて現れるのが通例となつた。

又吾<sup>ア</sup>・己<sup>オレ</sup>・汝<sup>シ</sup>・其<sup>シ</sup>・此<sup>コ</sup>方<sup>ナ</sup>彼<sup>ゴ</sup>方<sup>ナ</sup>の様に平安朝には絶えた代名詞が奈良朝にあつた。又「吾<sup>ウ</sup>君<sup>キミ</sup>」の様に代名詞

から直接名詞に接したもの、「汝<sup>ナニモ</sup>妹<sup>イモ</sup>」「吾<sup>ウキモ</sup>妹<sup>イモ</sup>」の様に、代名詞と名詞の音とが融合して了つたものが、

奈良朝には多い。

動 詞 は活用形の後世と異なるものが多い。先づ、(一)古代四段活用で後世他の活用となつたのに

「生く」「恐る」「携ふ」等がある。(二)古代、四段活用と下二段活用の如き他の活用形と並び行はれ、



後世四段活用形を失つた動詞が甚だ多い。「隠る」「留む」「觸る」「流る」「忘る」等二十種ほどある。(三)右の如く並び行はれ、後世四段活用形の方が残つたもの「伴ふ」「潜く」「祓ふ」「羨しむ」等の如し。(四)古代上二段活用で、後世上一段活用となつた動詞「乾る」「荒ぶ」「居る」。(五)古代下二段活用で、後世下一段活用に轉じたものに「蹴える」がある。また、當時の「有り」「爲す」の二助詞は、特殊の意義・活用を持つが、活用形以外の事は今省略する。

### 形容詞

下の名詞・代名詞を形容するに語根又は終止形から接する。「荒床」「寒水」「早川」「賢し女」「愛し妹」「うまし國」「か黒し髪(萬葉卷十六、竹取翁の長歌)」は後世ならアラキ、サムキ、ハヤキ、サカシキ、カナシキ、ウマキ、クロキとある筈を、何れも下の語尾を省略したり、終止形から接したりしてゐる。後世の「父無し子」「うれし涙」のやうな熟語は、古代自由にいづれの語にでも終止形承接の表はれてゐた名残である。

又活用形をいへば、已然形は「——ケレ(戀しケレの如き)」といふ形がまだ無かつた。その代り屢々「——ケ(戀しケ)」で現される。ケレの形は平安朝に入つて發生した。別に「遠カ(國の遠カは汝がめ欲りせむ)(萬葉十四卷三四七三)」と云ふ形が存在した。終止形は上記の如くそのまゝで連體形の役目を果して下の名詞や代名詞に接してゐる。また形容詞の語根にミといふ接尾語? が接して「恐み」「遠み」「めづらしみ」「やさしみ」の如くなる。後世は之は「瀬を早み岩に塞かるゝ瀧川の」の如く歌言葉と

して習慣的に使はれるだけで、生きた日常語として使はれる事は絶えた。尤も右の江戸期以來の考説に對し、近年山田博士(萬葉集講義)をはじめ、動詞の連用形と見る説が、擡頭してゐる。

而して此等の用言に於て、古代には平安朝以後の様に、音便の存在しないといふ事は、一大差異である。所謂、イ音便・ウ音便・ツ音便の何れもが存在しない。

**助動詞** を古代と平安朝と比較してみるに、次頁の表の如くである。此の内には、マシの時(未來)と推量とに、ル・ラルの受身と尊敬とに、マジの推量と否定とに兩用される如きがあるが、それ等は總て一方にだけ出した。

次表の中、圈點を附したものは、それぞれ其の時代特有のものである。敬讓助動詞の部は、マス以下は動詞から轉じて助動詞になつたものである。此の類は數へ立てれば尙多い。時の助動詞の未來のナムは、普通文法書で獨立した單語と認めてないのを著者の一私見で今入れた。而して之を獨立語と見ると、之の古形ナモが古代には存在した。メリ(推量)とタシ(希望)とは、古代には一例づつきり無い(十四卷三四五〇及び六卷九六五)。之を異例と見れば、平安朝の發生と云ふ事になる。最後のフは、意義未詳の語で、「萬葉集古義」に動作の繼續をあらはすと説いてから、山田博士が之を繼承され、之に従ふ學者が増加しつつある。

尙、否定助動詞のズは、平安朝の、ズ・ズ・ズ・ヌ・ネの他に、古代ナ(未然形)・ニ(連用形)の二形が

〔種類〕

〔古代〕

〔平安朝〕

受身・可能  
・自然相

ユ・ラ・ユ・ル

ル・ラル

使役

シム

ス・サス・シム(シムは激減)

敬讓

ス・マス・メス・タブ・マツル・マラス・  
マウス・給フ(四段活)ル・ラル・ス・サス・シム・マス・メス・タブ・マツル・マウス・給  
フ(四段活)・給フ(下二活)・侍リ・サフ・ラフ・オハス・マキラス

時・完了

キ・ケリ・ム・ナム・ナモ・マシ・ツ・ス・  
タリ・リ

キ・ケリ・ム・ナム・マシ・ツ・メ・タリ・リ

推量

ラム・メリ・ラシ・ケム・ベシ・ベカリ

ラム・メリ・ラシ・ケム・ベシ・ベカリ・ベラ

希望

タシ

タシ・タカリ・マホシ

比況

ゴト・ゴトシ

ゴトシ

指定

ナリ・タリ

ナリ・タリ

否定

ズ・ナフ(東國訛)・ザリ・ジ・マシジ・

ズ・ザリ・ジ・マジ

未詳

フ・マジ

あつた。又、過去助動詞キは山田博士の「奈良朝文法史」には、未然形セを有したと説いてあり、木  
枝増一氏の「高等國文法新講」は之に反對して居られる。

助詞

各種の區分の方法があるが、今山田博士(日本文法論)の分類に従つて、格助詞・副助詞・係助

詞・接續助詞・終助詞・間投助詞に分つて考へて見る。此等の助詞の意義は夫々原典に就かれない。

格助詞には、ヨリが最も著しい。古代はユ・ユリ・ヨ・ヨリの四形を持つてゐたのが、平安朝で最後の形だけ残つた。又、國ツ神、天ツ水、浪ナ音、手ナ底テのツ・ナは、古代は自由に用ゐられたが、平安朝には熟語にだけ残つた。又カラは、古代にも現れてゐて、ヨリの優勢なのに遙かに及ばないが、平安朝では、カラ・ヨリ並立し、近世ではカラの方が壓倒した。

次に副助詞は副詞の様に述語の意味に關聯する助詞だが、兩期殆ど變らず、ダニ・サヘ・スラ・ノミ・マデ・バカリが兩期に通じて存在するが、ナドだけは平安朝の發生である。

係助詞は、述語の語勢や氣分に影響しその形に影響する助詞で、ハ・モ・ゾ・ヤ・カ・コソ・ナ(禁止)が兩期に用ゐられたが、古代のナモは平安朝にナムに變つた。又禁止のナは、「夜更けてナ行き」の様  
に古代は動詞の上に用ゐる方が多く、平安朝では「行くナ」の様に下に接する使用法が甚だ増加した。

接續助詞は、バが兩期に通じて使はれたが、古代は後に説く様にバのない接續が多い。又、古代では、ヲ・モノヲが感動の意と接續の意とを兼ねてよく使はれた。尙、古代所謂複文の接續に當つて使はれる、ナベ・ムタは接續助詞と見ていゝであらう。その他のト・トモ・ド・ドモは變りがない。

終助詞は、文章の最後に位置する助詞であるが、古代のカモ・ガモが平安朝にカナ・ガナに變つた。古代のユソ・エは消滅した。反對に、カシは平安朝に始めて發生した。ナ・カ・ガは兩期に用ゐられた。

間投助詞は、唯音調の爲に使はれ、意義に無關係な助詞であるが、古代、ロ・ラ・ヤ・エが盛に使はれ

たが、平安朝には消滅した。又、ヲは古代の流行語で平安朝には激減した。

尙、山田博士が、主格をあらはす格助詞と説かれるイがある。「否と云へど語れく」と告らせこそ志斐イは申せ強ひ語りと告る(萬葉 卷二)。之を伊波普猷氏は間投助詞と説かれる。後説がいゝかと思はれる。之は奈良朝迄で消滅した。

以上は専ら、山田博士の分類によつて説いた。他の學者の區分法ならばまた異つて来る。

例へば、橋本博士は、此等以外に、並立助詞・準體助詞の如きを設立される(國語科論講座 國語法要説)。前者は兎も角、後者は目下の問題に關係がある。即ち、並立助詞とは、對等の關係に在る語語に接して之を接續させる助詞であるから、「奈良朝文法史」に並立を現す特殊のノと云はれたものは、格助詞のノから離して之に入れられる。「風まじり、雪降る夜ノ、雨まじり、雪降る夜は(萬葉五卷 八九二)」。但此のノは平安朝にもあるゆゑ、古代特有と云へないが、古代は用法が遙に廣い。又、平安朝で並立の時にヤ・カを使ふのは、古代に無い用法で、兩期の相違を現す一例となる。(用例は「國語法要説」参照)

最後に、接尾語の類に古代クがあつた。「散らク」「過ぐらク」「嘆き給はク」「明かしつらクも長きこの夜を(萬葉四卷 四八五)」のやうに動詞・助動詞のア韻に接した。形容詞には、「憂けク痛けク」のやうに「け」の形に接した。之によつて、其の動詞・助動詞・形容詞を名詞の形にかへたのである。之は平安朝には消滅した。

以上の單語論の他、文章法的にも相違がある。

その著しいものだけを擧ぐれば、平安朝には主語の省略が甚しく、意味を不明瞭ならしめる程であるが、古代は主語を明記し、殊に第一人稱の「吾」は萬葉等では特に明示してゐる。一方、古代では、第三人稱で述べはじめた長歌が第一人稱に變つてしまふ様な(例へば古事記 八千矛神の歌)人稱の轉換が無反省に行はれてゐるが、平安朝では殆どその事がない。

次に、述語の點に於て、古代の散文では會話をあらはす場合

曰はく「……………」と言ふ。

と、二度言ふを繰返すのが通例である。之も平安朝に激減した。

次に、所謂複文・重文の接續に於て、古代は種々の異色がある。即ち平安朝では接續助詞のバを使ふ場合、用言の已然形の下にバが來て接續するが、古代は已然形だけで、バが無くて接續し得た。

又、ズハといふ特殊な形がある。「かくばかり戀ひつゝあらズハ高山の岩根し枕きて死なましものを

(萬葉 卷二)」の様な場合で、江戸時代には宣長の「戀ひつゝあらむよりは」といふ比較の意に解する説が行

はれたが、現代では橋本博士の説——ズは打消の助動詞ズの中止形、ハは係助詞で、接續には無關係。

従つて、バと濁らずハと清讀する。全體は「戀ひつゝあらずして而して」と解する説——が優勢であ

る。従つて、後説では複文でなく、重文となるわけである。

又、ネバの形がある。「泣く子なす、慕ひ來まして、息だにも、未だ休めず、年月も、未だ阿良禰アヲミ婆、心ゆも、思はぬ間に、打磨き、臥ふしぬれ……」(五九卷)。之はバの「……でないのに」の意を現す場合で、バの逆續と解されてゐるが、併し佐伯梅友氏(萬葉集講座)の様に、ネは否定助動詞ズの已然形、バは清讀して係助詞と解する説の方が妥當である。

又、格助詞のノは、「の如く」の意味に使はれる場合が甚だ多く、それが上が句又は文を成してゐる時は文章法の問題となる。又、何等の接續的言葉が無く、唯上の語又は文が切斷しただけで下の文に關聯して行く形——即ち、意味だけ關係して形は切れてゐる所謂獨立語の形が古代に多く、平安朝に少い。

最後に、之は語法でなく音韻の範圍であるが、平安朝を通じて邦人の發音の數は大體五十種あり、故に五十音圖が、平安朝初期に出來たと思はれるが、奈良朝前後には、五十音のうち、エ、キ、ケ、コ、ソ、ト、ヒ、ヘ、ミ、ヌ、メ、ヨ、ロの十三音は二種の用字法が使ひ分けて書かれてゐる事が、石塚龍麿(假名遣奥の山道)・橋本博士(國語と國文學昭和六年九月)によつて發見された。更に古事記ではチ・モの二音も書き分けられてゐる。而して、橋本博士は此の理由を尋ねて、此等の音は古代二種類の音韻を有してゐたらうと推定された。之によれば、平安朝初頭は五十音。奈良朝前後は六十二音。より古代なる古事記時代は六十四音が存在したと云ふ事になる。

その後此の研究は益々進み、二種類發音の音が十五音以上であつた事が證明されつつある。之は語法ではないが、古代・平安朝の國語の大相違である。

尙、音韻の範圍では、八行の音は平安朝には皆、fに發音されたが、奈良朝は大體f、奈良朝初期又は奈良朝に入る以前は、それが皆pに發音されてゐた。と云ふ問題もある。

文 獻 奈良朝文法史(山田孝雄) 平安朝文法史(同上) 日本文法史(小林好日) 萬葉集講座(春陽堂)

國語科學講座(明治書院)

## 一六九 中古文法と現代文法との間に於ける重なる差異に就いて略述せよ

現代文法には文語法と口語法とがあり、口語法が眞の現代語の文法であり、文語法は大體中古文法を繼承したものと思はれてゐる。従つて、文語法と口語法とを比較することが、結局中古文法と現代文法との差異を示すことになる。それ故、次に差異の重なるものを記述しよう。ところが、仔細に考察すると、中古文法と現代文語法との間にも、多少の相違があるのである。それ故、此の點を更に追記することとする。

一、中古文法と現代口語法 との間に於ける重なる差異は、用言の活用に關して見られる。活用形の



種類は、未然形・連用形・終止形・連體形・已然形・命令形(形容詞は命令形を缺く)の六つに分たれてゐるが、現代口語法に於ては、終止形と連體形とは同一の形態をとるに至つてゐるから、口語法だけを記述するならば終止連體形とでも名づけて一つとする事が出来るから、活用形は五種類と考へる事が出来る。尙ほ又、四段活用に於ては、複語尾「う」の接したものは、例へば「行かう」の如きは、實際の發音では「行こー」又は「行こ」となつてゐるから、「行かない」「行かん」の様に否定の複語尾をとつて明かにア韻に終るものとは區別せられるので、四段活用を新たに五段活用と認め(此の先例は既に賀茂眞、淵の語意考にあるが)、否定形・連用形・終止連體形・已然形・命令形・未然形とする事も出来るのである。

此の活用形の變化に伴つて、活用の種類にも大きな差異が起り、形容詞ではク活用とシク活用との區別が不必要となり、動詞ではラ行變格とナ行變格とは四段活用となり、二段活用は一段活用となつ

第	〔未然〕	〔連用〕	〔終止〕	〔連體〕	〔已然〕	〔命令〕
一	中古	せ	し	す	する	すれ
	關西	せ	し	する	する	すれ
	關東	し	し	する	する	すれ
						しろ

たので、中古文法では、四段・ラ行變格・ナ行變格・カ行變格・サ行變格・上二段・下二段・上一段・下一段の九種類あつたものが、現代口語法では、四段・カ行變格・サ行變格・上二段・下二段・上一段・下一段の九種類あつたものが、現代口語法では、四段・

カ行變格・サ行變格・上一段・下一段の五種類となつた。なほサ行變格は、現代口語では、關西系方言では三段活用であるが、關東系では二段活用となつてゐる。(第一表 参照)

又、形容詞の活用形は、中古文法にも既に音便が現れてゐるから、第二表の様に示すべきであらう。

第二表

	〔未然〕	〔連用〕	〔終止〕	〔連體〕	〔已然〕
中古	く	く	し	き	けれ
(音便)		う		い	
現代	く	く	い	い	けれ
(音便)		う			

マジなどもタイ・マイとなつてゐる。

助詞にも變遷が多いが、あまり細かくないので擧げない。たゞ、上に「ぞ」とあれば下を連體形で受け、「こそ」とあれば已然形で受けると言つた係結の呼應が中古文法では整然と行はれてゐたのに、現代口語法ではその三階段の係結法が全く失はれてしまつた點だけは特記して置かねばならない。

二、中古文法と現代文語法 との相違を見ると、先づ、代名詞では自稱のア・アレ、對稱のキンヂ、他稱のアシコ・イヅラの如きは、中古文法にのみ見えて、現代には見られない。

形容詞連體形のキをイ音便化する事も、中古文法には見えるが、現代文語法には見られない。

動詞のイ音便・ウ音便も中古文法では、現代文語法よりも廣く行はれ、その反對に、撥音便・促音便となると、現代文語法にのみ行はれて、中古文法には見えない。

複語尾では、ペラ・ペミ及びビンを受けたスなどが中古文法にのみ見えて、現代文語法に見えないのは著しい。例へば、

山たかみ見つゝ我が來し櫻花風は心にまかすべらなり(古今集 貫之)

出でていなば限なるべみ、ともしけち年へぬるかといふ聲をきけ(伊勢物語)

足の向きたる方へいなんず(竹取物語)

尙、複語尾では、打消のズテ・デ・ジ、豫想のマシ、回想のメリ・ラム等も、現代文語には無い。

助詞では、格助詞のツ、係助詞のナム、終助詞のナ・ネ・カシ、間投助詞のシ・ヲなどは、中古文法獨特のものである。禁止の「ナ……ソ」なども、現代文には見えない。

文献 中等教育國語沿革大要(山田孝雄 明治四十年 絶版) 平安朝文法史(山田孝雄 大正二年 絶版)

漢文の訓讀によりて傳へられたる語法(山田孝雄)

## 140 口語の文法と文語の文法との間に存する主なる

差異に就いて述べよ

口語と文語との相違は文法・修辭・語彙の各方面に存するが、文法を言語の構成形態に於ける通則的なものと理解して、その口語と文語とに認められる差異の主なものを考へると、次のやうになる。

一、體言 に関しては所謂副體詞の問題が口語で著しい。文語法でも「ある(或)」「さる(然)」「しはゆる」「あらゆる」等があるが、口語では「こな」「そんな」「あんな」「どんな」と共に、「こ

の「その」「あの」「かの」「どの」「わが」「なが」「たが」等既に獨立性を失つた代名詞に、格助詞「の」「が」の附屬したものが生じ、從來の品詞以外に別種の品詞の設定を要求してゐる。

體言が主格に立つ場合、「月出づ。」のやうに文語では單獨で用ゐられるが、口語では格助詞「が」を伴ふのが普通である。尙「水が飲みたい」「水が欲しい」等の口語の特殊の主格表現も注意される。

二、用言 に関しては活用の差異が著しい。

(1) 活用形

		動詞		形容詞		形容動詞	
	口語	文語	口語	文語	口語	文語	口語
	未然形	未然形	未然形	未然形	未然形	未然形	未然形
	連用形	連用形	連用形	連用形	連用形	連用形	連用形
	終止形	終止形	終止形	終止形	終止形	終止形	終止形
	連體形	連體形	連體形	連體形	連體形	連體形	連體形
	假定形	假定形	假定形	假定形	假定形	假定形	假定形
	命令形	命令形	命令形	命令形	命令形	命令形	命令形
	○	○	○	○	○	○	○
	(第二種)	(第一種)					

未然形に「ば」「とも」を附して假定を表はすことは口語にはない。

連用形の用法中、中止法は口語では文に書く以外は普通でなく、通常「て」に續いた形が用ゐられ

る。

終止形と連體形とは口語の動詞・形容詞では同形である。

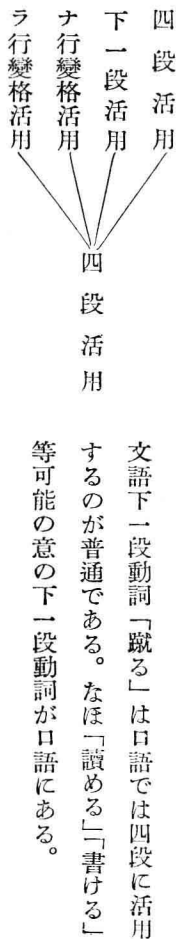
連體形は文語ではそのまま、體言の資格を得ることが出来るが、口語では助詞「の」を附する。

文語では已然形のみで條件を表はす用法は普通に認められない。口語でも一般にさうであるが、形容動詞第二種は假定形のみで「ば」を附したと同様に用ゐられる。(「静かなら」。尙、指定の助動詞「だ」の假定形「なら」、時の完了の助動詞「た」の假定形「たら」にも此の事がある。)

音便形は口語の動詞ではサ行以外の四段活用から「て」「た」に續く時は必ず音便形となるが、文語では四段、ナ變、ラ變の動詞が「て」に連る場合原形たる連用形を普通に用ゐ、時として音便形を用ゐる。

## (2) 活用の種類

〔動詞〕 文語 口語



上二段活用

上一段活用

上一段活用

下二段活用

下一段活用

カ行變格活用

カ行變格活用

サ行變格活用

サ行變格活用

〔形容詞〕 文語はク活用(ク・ク・シ・キ・ケレ)とシク活用(シク・シク・シ・シキ・シケレ)の二種があり、口語は唯一種(ク・イ・イ・ケレ)である。

補助用言としての形容詞は、口語では「ない」(時に「欲しい」も)があるが、文語ではかやうな用法の「なし」は稀である。

〔形容動詞〕 文語では第一種、カリ活用「早かり」。第二種、ナリ活用「靜かなり」。第三種、タリ活用「堂々たり」の三種がある。その活用は何れもラ行變格と同じである。たゞ第二種は連用形に

「靜かなり」「靜かに」、第三種は「堂々たり」「堂々と」の兩形を有する點がラ變と異なる。

之に對し口語は次の二種の活用に分れる。

第一種 早から(ウ) 早かつ(タ)

第二種 靜かだら(ウ) 靜かだつ(タ) 靜かだ 靜かな 靜かなら

文語の第三種形容動詞に相當する口語の形は「堂々としてゐる」といふ連語である。

**三、係 結** 用言、又は助動詞を以て終る活連語で文を終止する場合、終止形であるのが、普通であるが、文中に「ぞ」「なむ」「や」「か」の助詞があつて係る時は連體形、「こそ」に對しては已然形を以てする所謂係結は文語に於て行はれ、口語では一般に認められない。文の性質上の四種類中、平敘文・疑問文の係結の點に於ける特徴は、文語の文法にのみ存するのである。

**四、助動詞** 活用は用言の活用體系の差異に準ずるものがやはり此處にも存するのである。接続は口語では假定形に續くものが無い。

推量、時の完了と過去の助動詞は、文語に多く口語に少い。たゞ時の未來は接続する動詞の種類を異にして「う」「よう」の二語を口語は有してゐる。又口語には敬讓の助動詞に丁寧の「ます」がある。(文語にも「はべり」「候ふ」が補助用言としてある。)

**五、助 詞** 用言に接続する場合、文語では連體形に續くものがかなり多いが、口語では終止形に接するものが多く、連體形に續くものは少い。(口語の用言で終止形と連體形と形を異にしてゐるのは形容動詞第二種で、その他のものも之に依つて考へることが出来る。)

禁止の「な……そ」のやうな助詞は文語でも特殊なものであるが、口語では全く無い。

希望の意を表はす「ばや」「がな」「なむ」に相當する助詞は、口語には見ない。

一方、同趣のものを並列接續する「し」、用言に體言の資格を與へる「の」等、口語にあつて文語にそれに相當する助詞の無いものもある。

文獻 新文典別記 上級用(橋本進吉) 其の他一般の文法書

## 一七一 西洋文典の日本文法に及ぼしたる影響を略述せよ

遠く室町末期にジェスイット派の宣教師が日本語を研究し、有名なロドリゲスの日本文典などができたが、それらは日本の文法學に影響を與へなかつた。

江戸末期になつてから、長崎の通詞や醫者などがオランダ語を研究して、その文法書を著した。その主なるものをこゝに年代順に擧げると、

大槻馨水—蘭學階梯(天明八年) 中野柳圃—和蘭詞品考(享和の初) 馬場鞆里—訂正蘭語九品

集(文化十一年) 羽粟洋齋—教諭新法(文化十一年) 羽粟洋齋—六格前篇(文化十一年) 藤林

普山—和蘭語法解(文化九年成り、十二年刊) 大槻馨里—蘭學凡(文化十三年)

以上の諸書はオランダ文典の直譯で、大體、全篇を音韻・文字論・品詞論・文章論に分け、九品詞や六格、六時などを説いたもので、もとはラテン文典から出た組織である。



が、それらの和蘭語文典の影響により、今度はその組織をまねて、國文法を組織したものが出た。その内、有名なのが、

鶴峯戊申—語學究理九品九格總括圖(文化十三年)

同 —語學新書(天保四年) 前田利保—榛原あまがはら(嘉永七年)

戊申のいふ九品とは、實體言(形容詞に當る)・代名言(分詞に當る)・活用言(動詞に當る)・形容言(副詞に當る)・接續言・指示言・感動言をいふ。九格とは能主格(保格に當る)・所生格(所有格に當る)・所與格・所役格(目的格に當る)・所奪格・呼召格に現在過去・未來の三時を加へたもの。然るに此等の組織は國文法としては妥當でなく、而も國語の實際についての知識が豊富でない故、誤りも多い。併し西洋文典を基礎として、國文法を組織的・範疇的に説いたものとして、重要である。

一方、國學者は此等とは無關係に國文法を研究して明治時代に至つた。

明治時代になつて、西洋文典模倣の流れを汲むものに、

田中義廉—小學日本文典(明治七年) 中根 淑—日本文典(明治九年)

がある。田中氏のは英文典に據り、字學・詞學・文章學(文章學は十一年の日本小文典になつて初めて出來た)に分れるが、組織も整ひ、見方も新しいが、國語の本質にはあまり觸れてゐない。中根氏のは、文字論・言語論・文章論・音調論の四篇に分れ、無理なこぢつけはいくらか少ないが、之も未だし。

こんな状態の所へ、日本語についての科學的な研究をしたのが、チェンバレンで、彼の編んだ「日本小文典」(明治廿年)といふ教科書は、單語法と文章法とに分れ、上篇には働かざる辭として實名詞・代名詞・副詞・接續詞・數詞・間投詞・關繫詞の七品詞を説き、中篇には働く辭として形容詞・動詞を述べ、下篇には文章法と音韻とを説いてゐるが、品詞の分け方や名稱なども、之が後まで土臺となつた。

以上のやうな徑路を経て進んで來た西洋式日本文典や英文典の組織に加へるに、古來の國學者の研究を巧みに採り入れて、一つの纏まつた文典を作つたのが、大槻文彦の「廣日本文典」と「同別記」である。之こそ日本文法學の基礎を据ゑたもので、後のものは皆此のまねか、改良かである。

口語の文典としては、明治三十年にチェンバレンが日本口語文典を出した。之より先にも外人の口語研究や馬場辰猪の「日本文典初歩」(英文)もあつたが、直接、日本の學者に影響を與へなかつたに、チェンバレンのが出てから、之に刺戟されて色々日本口語文典が出るやうになつた。

要するに、日本文法學は、大體の組織や範疇や原理を西洋文法學から學び、個々の研究は多く國學者の研究に負ふもので、此の傾向は今に至るまで續き、山田孝雄博士の文法學の如きも英獨のそれに負ふ所が見えるが、近頃は更に根本的に日本文法學を樹立しようとする努力が一般に見える。

## 一七二 國語の文法と英語の文法との間における重なる

差異につきて説明せよ

國文法と英文法との差を、一般の文法學に所謂品詞論と文章論とに分けて並べ舉げてみると、

### 國 文 法

#### 〔品 詞 論〕

○名詞に文法學的數がない。

○分ける要がない。

○代名詞の特設を要しない。(但し、これは一般

には認められてゐない。國語では名詞と代名

詞は文構成上區別がない)

○ない。

○數詞に副詞的用法がある。「柿が三つある。」

○ない。但、特に口語には體言にだけ冠する連

### 英 文 法

○名詞に單數・複數の別がある。

○固有名詞と普通名詞、具體名詞と抽象名詞などを分ける要がある。

○代名詞は複數構成法や、格や、動詞・助動詞・

形容詞・冠詞などとの關係が名詞とも違ひ、又

代名詞自身の内でも違ふ。

○關係代名詞がある。

○ない。

○冠詞がある。

體詞がある。

「そんな人」「とんだこと」「この本」

○形容詞には活用があり、連體的用法(連體形)の外、それだけで述語となる。

○助動詞中、指定・比況を除きたいはゆる複語尾は常に動詞の次に來る。

○副詞は動詞の前に來るのが普通。

○助詞が色々な微妙な役を演ずる。前置詞の役は格助詞がする。

### 〔文章論〕

○主語・客語(補語なども含む)・述語の順が普通。

「私は學校へ行く」

○主語がないことも普通。

○敬語法が発達してゐる。

○いはゆる未來法を現在法でいふのも普通。

○形容詞は變化せず、それだけでは述語となれない。「She is beautiful」

○助動詞も動詞から離れ得る。

「Will you go ?」

○副詞は動詞の後に來るのが寧ろ普通。

○前置詞はあるが、もつと役目の廣い助詞といふやうな品詞はない。

○主語・述語・客語(補語なども含む)の順が普通。

「I go to school.」

○普通は主語がある。

○文法的な敬語法は殆どない。

○未來法は必ずそれを表す助動詞を伴ふ。

## 一七三 文典と辭書とに於ける單語の取扱法の相違を述

へよ

文典に於ては、單語は文構成の單位として取扱はれるが、辭書に於ては、意味概念を宿した思想の單位として扱はれる。

従つて、文典に於ける單語は、文を組立てる素材として、如何なる役割を果し、又如何に配置せられるかと言ふ事が問題になる。そこに品詞論といふ單語の部類分けも起り、文章論といふ單語の配置組立の研究も起るのである。古く、富士谷成章が我が國語の品詞分類として、名・装・挿頭・脚結の四分別を以てしたのも、よくその要求を満したものであつた。

之に反して、辭書に於ける單語は、意味概念を宿した思想の單位として認められるから、その外形たる個々の音聲が如何なる思想單位、即ち意味を宿してゐるかゞ問題となる。

従つて、辭書の取扱ふ單語は個別的であつて、思想の發展と共に累加重大してその止まる所を知らず、辭書は年月を経る毎に増大せざるを得ない。所が、文典の方は概括的・一般的であるから、僅かな簡単な箇條に歸着せしめる事が出来、たとひ時代的變遷があつても、それは極めて徐々であるし、

時によつては一層簡單な法則へと推移する。

文典の法則は、個々の單語の意味には顧慮せず、その多數を一括類別して各品詞に所屬せしめるのであるが、辭書にあつては、單語は個別的にその存在を主張し、その數は絶えず増大し、意味も形態も推移に推移を重ねるので、之を網羅する辭書は、「節用集」式の意味類別の範疇に従つて配列する方は破綻せざるを得ず、結局、いろは順、五十音順、乃至はアルファベット順の如く、表音文字の傳統的な順序に従つて配列するものとならざるを得ない。

文典に於ける單語、即ち各品詞は、文構成上如何なる職能を果すか、如何なる配置をとるか、又その職能配置に應じて如何なる形態變化をなすかを記述する。之に反し、辭書に於ける單語は、その外形たる音聲と内容たる意味とが如何に結合せられるかを記述するもので、その結合の仕方に推移がある場合には、成るべくその第一義的なものから、第二義・第三義的なもの、即ち派生的なものへと、順次記載して行く。その原義に遡つて調査するのが、語源研究として知られる所のものである。

文法的に見れば、品詞によつては、語尾變化、即ち活用變化があり、例へば、「行く」といふ動詞は、ユカ、ユキ、ユク、ユケ、ユケと變化する。辭書的に見れば、「父」といふ語は、チチ、トト、テテなどと形態變化をする。兩者の變化は、取扱ひ上どう違ふかと言へば、文典の方では、それが語の職能や配置上、例へば、文の終止に來る場合はどうか、用言の上に来る場合はどうか、體言に

接する場合はどうか、助詞の上に来る場合は如何、といふ方面から考察する。然るに、辭書の方では、個別的に或る他の單語との結合に際して起るのみで、例へば「様」といふ語に接しては、トトサマである、「親」といふ語に接しては、テテオヤである、といふ傳統的な態度があるだけであつて、文の構成、語の配置といふ事とは全く無關係であり、個別的な用例を探求するばかりである。

例へば、同じ音便、例へば促音便が、ユキテ（行きて）の場合に起つてイツテとなるが、之は四段活用の連用形が、複語尾テ・タに連接する場合と言つた風の一般的な言ひ表はし方で概括される現象の一つと理解されるのが文典の上での取扱ひであるが、辭書の上では、例へば、マシロがマッシロとなつても、それは單に個別的にさういふ場合が有り得るといふに過ぎない、若し意味内容にマシロとマッシロとの間に何等かの相違があるかと言へば、概念的には同じであるが、後者の方が感情的に強調されてゐるに止まるとより答へるの他はない。

單語を分析して、語幹・語根・語尾・接頭辭・接尾辭などとする事は、文典でも辭書でも行ふ事である。併し、文典の方では之をやはり文構成の要素として取扱はうとする。例へば、「赤ミ」と言へば、形容詞の語幹にミがついて、名詞に變つたものと解する。辭書の方では、アカがアカミとなる事によつてどんな意味變化が起つたかを明かにしようとする。例へば、アカミとアカサとは、どんな意味差別があるかといふ事が問題になる。文典上では、ミにしる、サにしる、それは名詞を形造る接尾辭

にすぎないといふ事になる。

結局、文典と辭書とは、共にそれ／＼の使命に従つて單語を取扱ふといふ事になる。前者は概括的であり、後者は個別的である。前者は外部的な配置(文中での)が問題であるが、後者は内部的な意義概念が問題である。

一七四 臨時國語調査會假名遣案に伴ふ口語法の整理に

就いて所見を述べよ

一七五 發音的假名遣と歴史的假名遣とによりて口語の

動詞の活用に及ぼす異同について説明せよ

表音的假名遣に伴ふ口語法の變化はつまり活用に關するものであるから、活用を説明する際の土臺となる五十音圖が調査會の表音的假名遣案ではどうなるかを見ると、私の考では、次表の如くで、特に注意すべきは、ダ行のイ列はジ、ウ列はズで、ヂ・ズは特殊な場合、例へば、鼻血ハナヂ、縮チヂミ、三日月ミカヅイなどに使ふと説けばよい。此の事は大切で、例へば「閉デル」が「閉ジル」になつても、何も無理にダ行上一段がザ行上一段になつたと解釋する必要は無いので、「閉ジル」はやはりダ行上一段と見て差支へない。特に文語の「撫ヅ」を、ナデ・ナヂ・ナズ・ナズル・ナズレ・ナデと書くとしても、それを何も活用



アイウエオ	
カキクケコ	ガギグゲゴ
サシスセソ	ザジズゼゾ
タチツテト	ダジズデド
	(ヂ) (ヅ)
ナニヌネノ	
ハヒフヘホ	バビブベボ
マミムメモ	
ヤイエエヨ	
ラリルレロ	
ワイウエオ	

がダ行・ザ行に跨ると見る必要はなく、ダ行下二段と見てよいのである。つまり、ジ・ズはダ・ザ兩行共通の假名とすること、ちやうど、五十音圖においてイ・エがア・ヤ兩行共通の假名であつた如くである。ワ行のイ・ウ・エ・オも之に準ずる。

以上の注意は筆者のやうに考へないで、活用が二行に互るとか、行が變つたとか、又三日月ズキと書けば月はスキとなるなどと説く人がゐるから、特に言ふのである。

(甲) 動詞 一、舊四段活用はすべて五段活用とする。

書か 未然 連用 終止 連體 假定 命令 推量  
カ カキ クケ コ(ウ)

(註) 連體形・命令形を特設するか否かは、暫く措き、舊「書カウ」を新「書コ(ウ)」とし、之を假りに推量形と名づける。此の「書コウ」のウを助動詞と見ず、コウを合せて語尾と見ることが出来る。

二、一般に舊ハ行動詞は新ワ行になると見る。

1、舊ハ行四段は新ワ行四段に

買か ワ イ ウ (ウ) エ エ オ(ウ)

(註) 「買<sup>ユ</sup>ウテ」「買<sup>ユ</sup>ウタ」は音便と見る。「言ウ」の活用はイワ、イイ、ユウ、イエのやうになる。

2、舊ハ行上一段は新ワ行上一段に。

強<sup>シ</sup> イ イ イル (イル) イレ イ イ(ヨウ)

3、舊ハ行下一段は新ワ行下一段に。

教<sup>オ</sup> エ エ エル エル エレ エ エ(ヨウ)

(註) 右の2・3に於て、例へば、上一段の「干<sup>ツ</sup>ル」、下一段の「經<sup>ル</sup>」等は、勿論元の儘のハ行である。

尙、舊ダ行上一段「閉<sup>ト</sup>ヂル」の類は「閉<sup>ト</sup>ジル」として、やはりダ行上一段と見、舊ワ行上一段「率<sup>ル</sup>」の類は「率<sup>ル</sup>イル」としてやはりワ行上一段に見、舊ワ行下一段「植<sup>ル</sup>エル」の類は「植<sup>ル</sup>エル」としてやはりワ行下一段と見る。つまり此の見方の方が便利である。之をわざ／＼ダ行はザ行に、ワ行はア行に變つたと見る必要はない。

(乙) 形容詞 一、ク活用の連用形がウ音便をとる場合、語幹がア列音で終る語は音便でオ列音に

なつたと見る。 深<sup>ホ</sup>ク——深<sup>ホ</sup>ウ 早<sup>ハ</sup>ク——早<sup>ハ</sup>ウ

二、シク活用の連用形がウ音便をとる時、シウはシユウと書くが、之はもとのやうにシウと書く

ことにきめた方が説明は樂になる。 新<sup>ニ</sup>シウ——新<sup>ニ</sup>シユウ

(註) 以上のウ音便といふ名がよいかどうかは問題である。

(丙) 助動詞 一、完了のタと指定のダの推量形はタロ(ウ)、ダロ(ウ)となること、四段活用の動

詞に準ずる。話シタラウ——話シタロウ 私ダラウ——私ダロウ

二、指定のデスと敬讓のマスの推量形はデシヨウ、マシヨウとなるが、此の場合など、デシヨ・マ

シヨを活用形と見て、ウを推量の助動詞と見ることは、特に考慮を要する。

君デセウ——君デンシヨウ 行キマセウ——行キマシヨウ

凡そ以上のようになるが、表音的假名遣によつて、之迄の歴史的假名遣によつたものと、文法が違つたやうに見え、而も表音的假名遣は文法を破壊でもするかのやうに説く人もある。併し之は従來の文法學と違つただけで、文法(言語の法則そのもの)自身は違つたわけでもなく、勿論破壊されたわけでもない。文法自身は何も文字に據つてゐるものではない。却つて、正しい意味の表音的假名遣によつて文法學も正しくなり、文法の説明も合理的になる。之までのやうに、現代の口語を一千年以前の假名遣で表してゐては、實は口語に即した文法即ち眞の口語法は説明できるものではない。尤も臨時國語調査會案の表音的假名遣が合理的であるかは別問題であるし、その用例として同會が発表したものの中には、説明が妥當でないものもあるが、山田孝雄博士が「文部省の假名遣改定案を論ず」(假名遣の歴史附歌)において非難されてゐる所は必ずしもさう見る必要のない部分もあらうと思ふ。

文獻 現代國語思潮續編(第七)(日下部重太郎) 假名遣の歴史(山田孝雄)

一七六 敬語の種類及用法を古今の國語につきて説明せよ

一七七 國語に於ける敬語法を説明せよ

敬語は待遇表現即ち社會の人的關係に伴ふ尊卑親疏の待遇感情の言語に於ける表現の中心をなすものであり、その發達は邦語の特色の一である。それには、(1)文法的なもの、(2)語彙的なもの、(3)修辭的なもの、更に文字及び音聲の方面も考へられるが、一般に言はれて居る「敬語」又は「敬語法」はその中(1)(2)殊に(1)を主とするものであり、又その點にこそ國語の敬語の特異性が存するのである。

一、敬語の種類(範疇)は次の通りである。

(1)尊敬表現——敬稱 尊敬の對象たる人(又は人格化)への尊敬待遇を直接に表現する形式である。即ち對象者(あなた、お母さま)と、その動作存在(す、いらつしやる、きこしめる)、性質状態(お美しい、お静かだ)、所有關係物(お寮、御意見)などに就いて、直接に表現するのである。自體(或は一般)敬稱と關係敬稱(他との關係に於ける尊敬の表示「くださる」「たまふ」)との別がある。

(2)謙讓表現——謙稱 尊敬の對象者と關係ある他の人の側から間接に表現する。「他の人の側から」と云ふのは、話者・對者・第三者の何れでもあり得るが、對者及び第三者の場合にでもその尊敬の對象者は話者にとつても尊敬の對象者であるのが普通である。自體謙稱と關係謙稱とを區別する。前者はそれ自身謙讓の意味をなすもの(いたす、存する)、後者は被尊敬者との關係に於て表現するもの(甲上げる、弁上、げる、登らす)。

(3) 鄭重表現——謹稱 話者から對者へ傳へる事柄の全部を鄭重に表現することによつて對者への尊敬を表はす。其の意味から對者待遇とも丁寧語とも言ふことがある。話者だけでなく、第三者及び對者に關して同様に用ゐられる。(ごさいます、ごすます)

二、敬語は人稱の問題とは根本的に異なる。従つて人稱によつて敬語の様式を區別しようとするのは困難である。敬稱は話者自身には用ゐないが(それは區別なく用ゐる)、他は自・對・他にわたつて用ゐるからである。(勿論或は自己の場合、或は對者の場合に局限されたものもある。候文に於て著しい。「拙著」「賢著」等)

三、敬語は時代によつて變化してゐる。舊い語や表現の廢止と新しいものの出現以外に、同じ語も(1)その語形(ゴザアル↓ゴザル、參ラス↓マラスル↓マッス↓マス)、(2)意義(「貴様」が敬意を消失して卑罵へ變つた如き)、(3)用法(「君」は名詞から一方代名詞へ)の各面に於て變化はかなり著しい。鄭重表現は最古代には見ることが出来ない。

四、敬意の程度には多くの階層がある。一方は最上の尊敬の方向へ、一方は無記感情を更に下つて卑罵の方向へ變つてゆく。一例として、室町時代に於ける命令の言ひ方を土井忠生博士の「近古の國語」(國語科 總講座)から引用させていたゞく(同書八、五頁)。

- 一、上げい・上げよ
- 二、上げさしめ
- 三、上げさい
- 四、上げさせませ
- 五、上げられい
- 六、お上げあれ
- 七、お上げあらう
- 八、上げさせられい
- 九、お上げなされい
- 十、お上げなされう

一、來り 二、いらり 三、おりやれ 四、おぢやれ 五、ござれ 六、ござらう 七、おいでなされ  
い 八、おいでなされう

五、文中の敬語は一致・相應せねばならない。(あなたは此の本をお読みになりましたか。君は此の本を讀んだか。)だから「あなたの息子は」といつた言ひ方は國語として不備である。尙それ／＼の人的關係に應じて適當な敬語が使用されねばならぬ。(敬語法に關聯して專屬表現、及び親疏の表現が自ら考慮されねばならないが、此處ではそこまで説く必要は無い。)

六、次に敬語が如何に言ひ表はされるか、その形態・用法を略述する。

(1)體言に關するもの (a)、特別の單語を用ゐる。名詞には修辭的なもの以外にも敬稱(仰せ)、謙稱(家納)何れもあるが、總じて少い。たゞ漢語にはかなり多く、特に候文に於て活潑に使用せられる。

〔敬稱〕 尊父・令妹・賢弟・貴國・芳札・玉稿・高名・海容・光來

〔謙稱〕 迂生・愚妻・弊地・拙宅・寸書・野吟・微意・粗糲・薄謝・消光・拜見・進呈・參堂・啓上

此等は語構成の問題である。そしてその敬讓の表現は本來修辭的なものである(現在もそれが全然)が、語全體として前者は對者に關して、後者は話者自身に關して用ゐられる。

代名詞は人代名詞に敬卑の示し方が幾重になつて居る。直接指示する代名詞の本質として自然であらう。對稱について言へば、現代の口語で「あなた」「あんた」「君」「おまへ」「貴様」等があり、それに接尾辭が附いてなほ複雑となる。古代からの對稱の代名詞はその主なものでも「みまし」「いま

し」「まし」「な」「なれ」「君」「きんぢ」「汝」「殿」「御身」「御邊」「御坊」「そち」「おのれ」「われ」「ぬし」「おぬし」「さま」「こなた」「そなた」「その方」「貴公」「てめへ」「うぬ」等があり、夫々敬卑の待遇感情を異にして居る上、その敬意も時代によつて變化して來た。

(b)、接頭辭を附けるもの 之は名詞に限られる。現代の口語では「お(お顔前)」、漢語には「ご(御注意)」

が主として用ゐられるが、なほ特殊なものとしては「おみ(おみ足、おみおつけ)」が使用され、接頭語として既に切離し得ない語構成には「み(みこ)」の姿も見える。「み」は古くは活潑な用法に立つたもので

(み法、み手)、更に之に「おほ(大宮)」の附加した「おほみ」なる形は最上の敬意をあらはすものであつた。

「おほみ(大御神)」「おみ(おみ酒)」から「おん(おん政、おん弟子)」となり、又漢語の「ご」以外に限られた語には

「ぎよ(御音、御感)」が用ひられた。現代の口語で用法上注意されるのは、「お一つ」「ご兩人」のやうに數詞

に附くこと、「お芋」「お醤油」等鄭重表現が行はれることである。

(c)、接尾辭を附けるもの 現代、「さま(神さま、御一人、あなたさま)」「さん(太郎さん、三人さん、おまへさん)」「どの(大尉)」「どん(竹ど)」「くん(田上)」「ちゃん(おばあちゃん)」等が口語として用ゐられるが、「さま」「さん」はかうした代名詞

にも附くけれども、其の他は人を表す名詞にのみ接する。候文には「うへ(父上)」「ご(母御)」も用ゐ

られる。古くから「(の)みこと」「(の)きみ」「(の)かた」「(の)まへ」が有り、又「公」「老」「御前」

等も行はれた。複數(或は多數)の意と共に敬卑の待遇を示す「がた」「たち」「ら」「ども」「しう」「しゆ(衆)」

第三編 國文法(總説)

「ばら」等も數へられる。助數詞として神の場合「柱」「前」「所」があり、口語には人を示す「かた」(お二)がある。

接頭辭・接尾辭は同一の語に同時に附くことがある。「お醫者さま」「ご隠居さん」等。

(d)、主格を示す助詞「が」「の」は、今ではその待遇的意味に相違は無いが、嘗ては「の」に尊敬、「が」に卑罵の別があつた。又敬避の心理から用ゐられる「に」の用法がある。(我が君には斯く仰せられた)

(2) 用言に關するもの (a)、形容詞 現代の口語には接頭辭「お」を附して「おなつかしい」「お美しい」などいふ言ひ方がある。之は近古以來次第に發達したものである。候文には「おん」「お」を附するほか、「なし」の謹稱「御座なく(候)」を有する。近古の末「ゴザアル」「ゴザル」に對して「ゴザナイ」の形を見る。「御裁可あり」「お許しがある」の「あり」「ある」の用法の否定の形は「御裁可なし」「お許しがない」である。鄭重表現は、口語「甚しいのです」「甚しいでせう」「甚しいのでございます」「甚しうございます」で、「甚しいのであります」も講演等に用ゐられる。又「甚しいです」は標準的ではないが、近來一般に用ゐられる。候文には「候」「御座候」を續ける。

(b)、形容動詞 「靜かに」「丁寧に」等普通に副詞(情態副詞)と扱はれて居るものは、種々の點から形容動詞「靜かなり」「靜かだ」「丁寧なり」「丁寧だ」の連用形の一形と見る方が正しいから、こゝではさう考へて論ずる。現代の口語では接頭辭「お」「ご」を附して「お靜かだ」「お靜かに」「ご



丁寧だ」「ご丁寧に」と言ふ(勿論此の場合は終止形。「だ」は餘り用ゐない)。又「お」「ご」の附いた語幹に接尾辭「さま」を續けて「お粗末さま」「ご親切さま」など用ゐるが、之は語に制限がある。古くは形容動詞のかうした敬語の用法は見當らない。

(c)、動詞 (イ)、特別の動詞を用ゐる。之は隨分と多いし、その語構成についても論ずべきであるが、今はたゞその主なものを列擧するに止める。

敬稱——ます、います、まします、おはす、おはします、わたらす、いますかり(いまそかり)、あそばす、おぼす、めす、おぼしめす、きこしめす、しろしめす、みそなはす、たぶ(興)、たまふ、のたまふ、おほす、御座ある、ござる、おぢやる、おりやる、いらつしやる、あがる(食)、おつしやる、くださる、なさる

謙稱——まうす(まをす)、まつる、たてまつる、つかまつる、まゐる、まかる、たぶ(食)、たばる、たまはる、うけたまはる、きこゆ、侍り、候ふ、まゐらす、まらす、あがる(訪)、あげる、さしあげる、申しあげる、いたす、いただく、うかがふ

活用は「いますかり」「侍り」がラ行變格、謙稱の「たぶ」「きこゆ」「まゐらす」「まらす」が下二段活用である以外は四段活用である(おはすは四段と下二段の兩形式)。漢語をサ變動詞化したものには「御覽す」「出御

す」「參ず」「拜觀す」「頂戴す」等。

謹稱——侍り、候ふ、そろ、さう、ござる、御座候、ございます

此等特殊の動詞は、語の意味と共に待遇の意味を有するものである。

(ロ)、敬讓の助動詞を用ゐる。敬稱には古く四段活用<sup>(一)</sup>の語尾變化を持つ「す」があり、主として四段活用<sup>(一)</sup>の動詞の未然形に附いた。平安朝以後未然形に接續する「る」「らる」「す」「さす」「しむ」があり、「る」「す」は四段・ナ變・ラ變の動詞に、「らる」「さす」は其の他の活用<sup>(二)</sup>の動詞に、「しむ」は總ての活用<sup>(二)</sup>の動詞に附いた、活用は何れも下二段の形式である。近古の末には「しも」「さしも」「しむ」「さしむ」の特殊な助動詞が行はれた。現代の口語には下二段活用形式の「れる」<sup>(四段活用<sup>(一)</sup>の末、未然形に附く)</sup>、「られる」<sup>(その他の活用<sup>(二)</sup>の末、未然形に附く)</sup>の他、謹稱の「ます」がある。活用は、ませ、まし、ます(まする)、ます(まする)、ますれ、ませ(まし)。

以上は待遇の意味のみを有するものであるが、口語には指定の助動詞に「です」、比況の助動詞に「やうです」があつて、それ／＼「だ」「やうだ」に對する。

敬語の助動詞、重ねて、又は敬語の補助動詞と共に用ゐられる。殊に「す」「さす」は普通「せらる」「させらる」など「らる」と共にか、或は「給ふ」などの補助動詞を續けて用ゐられ、單獨には使用されない。なほ「ご許されませ」「ご許されあれ」など、近古末の用例は特異に感ぜられる。

(ハ)、敬讓の補助動詞を用ゐる。助動詞は常に附屬的なものであるが、補助動詞は一方に本來の動

詞としての用法に立つことがその相違である。敬讓の補助動詞の主なものとは次の通りで、(イ)の敬讓の動詞の多くがさうである。

敬稱——ます、います、まします、いますかり、めす、おはす、おはします、たぶ、たまふ、御座ある、ござる、おぢやる、おりやる、あそぼす、なさる、いらつしやる、くださる

此等は動詞・形容詞の連用形、助詞「に」「にて」「で」等に續く。候文には「御座なされ候」「御座遊ばされ候」等がある。「行幸あり」「行幸がある」「行幸なる」「御許可(お許)しになる」の「あり」等の用法も注意される。

謙稱——まうす、まつる、たてまつる、たまふ(下三)、たまはる、侍り、候ふ、まゐらす、まらする、つかまつる、あげる、まうしあげる、いたす、いたゞく

候文には「まかり」「あひ」が動詞の上に附く言ひ方がある。(廻り出づ、罷り在り、相煩はしたく、相成候)

謹稱——侍り、候ふ、さう、そろ、まらす、御座候、ござる、ございます

補助動詞は他の補助動詞や助動詞と連接し、又敬語の動詞に接續する。用法に就いての説明は省く。

文 献 敬語法の研究(山田孝雄) 平家物語につきての研究 後編(同上) 國語史概説(吉澤義則) 近

古の國語(土井忠生) 國語科學講座) 室町時代の言語研究(湯澤幸吉郎) 徳川時代言語の研究(同上)

口語法別記(大槻文彦) 萬葉集の尊卑表現の研究(石坂正藏) 萬葉集講座) 其の他一般文法書

一七八 音便の性質と其の種類とに就いて述べよ

一、音便の性質 音便とは、語頭以外の音節が變化してイ・ウ・ン(撥音)及び促音の何れかになる音韻現象を言ふ。その音節の變化には、(1)子音脱落、(2)母音脱落、(3)それに同化の現象の加はつたもの、更に(4)子音の添入、子音又は母音の長音化、がある。國語の音節は開音節で、子音・母音の連結構成によるのを普通とするから、(1)は音節の頭音の脱落、(2)は音節の尾音の脱落、(4)の長音化もそれに從つて名づけてよい。該音節の音便が後續音節の頭音に變化を與へることがあり、又前行音節の尾音と後に相互同化するに至るものがある。

(1)の例 書きて→書<sup>ス</sup>て (k<sup>ak</sup>ite→k<sup>ai</sup>te) たむけ(手向)→たうげ(峠) (t<sup>am</sup>uke→t<sup>au</sup>ge) 更<sup>ニ</sup> t<sup>au</sup>ge→t<sup>o</sup>ge と<sup>な</sup>つた。

(2)の例 打ちて→打<sup>ッ</sup>て (u<sup>ti</sup>te→u<sup>tte</sup>) 死<sup>ニ</sup>て→死<sup>ン</sup>で (S<sup>i</sup>nite→S<sup>i</sup>n<sup>de</sup>)

(3)の例 知りて→知<sup>ッ</sup>つて (S<sup>i</sup>r<sup>i</sup>te→S<sup>i</sup>tte) 飛<sup>ビ</sup>て→飛<sup>ン</sup>で (t<sup>o</sup>bite→t<sup>o</sup>n<sup>de</sup>)

(4)の例 とび(鳶)→とんび(t<sup>o</sup>bi→t<sup>o</sup>n<sup>bi</sup>) あまり(餘)→あんまり(am<sup>a</sup>ri→am<sup>a</sup>n<sup>a</sup>ri)

ましろ(眞白)→ま<sup>ッ</sup>しろ(m<sup>a</sup>s<sup>i</sup>ro→m<sup>a</sup>s<sup>s</sup>i<sup>ro</sup>) しか(詩歌)→し<sup>カ</sup>か(S<sup>i</sup>ka→S<sup>i</sup>:ka)

ふし(夫子)→ふ<sup>ッ</sup>し(F<sup>u</sup>s<sup>i</sup>→F<sup>u</sup>:s<sup>i</sup>)

音便は發音の變化に従つてその表記法も改まつたもので、「あは(粟)」と書いて「アワ」と發音する所謂轉呼音とは現在區別せられる。

音便現象の結果、用言及び助動詞の活用に變化が生じ、特殊な活用形が現れた。之を音便形と稱し、一般にはその原形たる連用形や連體形の派生的なものと考へられてゐる。現在の口語法では、動詞はサ行以外の四段活用の動詞から助詞「て」・助動詞「た」に続く場合(「おつしやる」「いらつしやる」「なさる」「く」は、助動詞「ます」に続く場合も)に音便形となり、形容詞は「ございます」「存じます」に連る時に現れ、助動詞は形容詞的活用の「たい」「らしい」に生ずる。現行の文語法に於ては、四段・ナ變・ラ變の動詞が助詞「て」に連る場合その連用形から接すると共に時として音便形から続き、形容詞はその連用形が他の用言に連り、連體形が助詞「かな」に続く時に現れる。又助動詞は形容詞的活用の「べし」「まじ」「たし」「まほし」の連用形に起ることがある。

**二、音便の種類** 音韻變化の結果現れた音の相違によつて、イ音便・ウ音便・撥音便・促音便の四種類に分けるのが普通であり、便利である。

(1) **イ音便** キ・ギ・シ、稀にリが子音脱落のためイとなるもの。

すきがき(透垣) ↓ すいがり      繼ぎて ↓ 繼いで

まして(況) ↓ まいて      いらつしやります ↓ いらつしやいます

(2)ウ音便 ク・グ・ヒ・ビ・ミが子音脱落のため、或は更に同化の現象も如はつてウに變じたもの。

しろく(白)↓しろろ　　わらぐつ(藁沓)↓わらうづ(草鞋)　　問ひて↓問うて

呼びて↓呼うで　　讀みて↓讀うで

(3)撥音便 ニ・ビ・ミ・リ・ム、稀にルが母音脱落のため、或は更に同化の現象も加はつてン(音價は色々ある)に變じたもの。

逝にて↓逝んで　　運びて↓運んで　　安みす↓安んず　　くだりの(件)↓くだんの

ひむかし(東)↓ひんがし　　あるめり↓あんめり

(4)促音便 チ・ヒ・リ・キが母音脱落のため、或は更に同化の現象も加はつて、促音となつたもので

ある。(促音の性質に關しては金田一京助博士著「増補國語音韻論」七五頁其の他參照)

持ちて↓持つて　　戦ひて↓戦つて　　取りて↓取つて　　ひきかく(引搔)↓ひつかく

文獻 國語音韻論(金田一京助) 平家物語につきての研究後編(山田孝雄) 國語學概説(安藤正次)

日本文學大辭典「音便(橋本進吉)の項」「音便形(小林好日)」の項

## 二 單語法・文章法

一七九 「靜かに」「明かに」「つくづく」と「しみじみと」等の「に」「と」は語尾と見るべきか助詞と見るべきかに就いて論ぜよ

一八〇 文法上「靜かに」「釋然と」などの「に」とを形容動詞の活用語尾と觀る說並に「咲きて」「見て」などの「て」を完了助動詞「つ」の活用形と觀る說の可否を論ぜよ

「に」「と」に就いて 之迄の通說として、大槻文彦・山田孝雄兩博士の説を顧みると、大槻博士「廣日本文典」には、「靜かに」「つくづく」と「釋然と」等を副詞とし、そのニ・トは接尾語と見てゐる。

山田博士は「日本文法論」等において「靜か」「つくづく」「釋然」など、ニ・トを除いたものを副詞の本幹とし、ニ・トは格助詞であつて、「靜か」は常にニ、「つくづく」「釋然」は時に、格助詞ニ・トの





されてゐた「善く」はカリ活用 of 形容動詞の第七活用(中止法と副詞を司る)となり、これまで、副詞とされてゐた「靜かに」「釋然と」の二類は、それ／＼形容動詞のナリ活用とタリ活用 of 第七活用となる。

此の説では、カリ・ナリ・タリのラ變式活用の中に、ク・ニ・トが交つて、不揃ひのやうであるが、實際に此等の語が用ゐられる仕方を見ると、上表の如くなる。

	〔形容詞〕	〔第一種形容動詞〕	〔第二種形容動詞〕	〔第三種形容動詞〕
未然形	面白くバ	面白からム	靜ならバ	判然たらバ
連用形	面白くシテ 面白くナル	面白かりケム	靜ならム 靜なりケム	判然たらズ 判然たりケム
終止形	面白シ	(多かり)	靜なりトモ	判然たりトモ
連體形	面白きナリ	(多かる)	靜にシテ 靜にナル	判然とシテ 判然とナル
已然形	面白けれバ	面白かるベシ	靜なる事ナリ 靜なるラム	判然たる事ナリ 判然たるラム
命令形	面白かれ	(多かれバ)	靜なれバ	判然たれバ

上表で吉澤氏のカリ活用を形容詞と第一種形容動詞に二分した所に、橋本博士の意が存する。同博士によれば、「面白く」「靜に」「判然と」の三者は、役目は全く同様であるが、「面白く」はあくまで形容詞の連用形であり、第一種形容動詞即ちカリ活用の連用形ではないとされ、形容動詞に

ついでにの結論として次の主張をされた。

一、第一種の形容動詞は、形容詞の補助活用と認むべきものであり、その活用はラ行變格に收むべきである。

一、第二種 第三種の形容動詞は、形容動詞として、動詞・形容詞に對立する一種の用とすべきである。

一、右の形容動詞は、特殊の活用形式を有し、中止法及び副詞法を表はす特別の活用形(「に」及び「と」)がある。

一、「に」及び「と」で終る副詞中、「——なり」「——たり」の語尾をとつて活用し得べきものは、副詞から除外し、形容動詞の活用形として取扱ふべきである。

以上の説は、よほど言語心理に即した説であり、木枝増一氏なども、ほど之に従つてゐられる。此の説によれば、出題の「靜かに」「明かに」「釋然と」などのニ・トは接尾語でもなく、助詞でもなく、實に形容動詞の一活用形の語尾となる。「つくづく」と「しみじみと」などは「つくづくタリ」とはならないから、純粹に副詞であつて、そのトは副詞としての接尾辭又は接尾辭化した助詞と見るべきである。

但し、以上の形容動詞説、特にニ・トを形容動詞の活用語尾と見る説には、かなり反對もある。徳田淨氏はカリ活用・ナリ活用・タリ活用にはカリ・ナリ・タリといふ中止形語尾があることを例證し、カリ・ナリ・タリの語尾のある語は動詞で、ク・ニ・ト語尾のある語は副詞であるとされる。つまりほど山

田博士らの説に歸つた観がある。

思ふに、カリ・ナリ・タリ語尾とク・ニ・ト語尾とは、活用系統が違ふやうにも思はれ、カリ活用と形容詞とを分けるやうに、ナリ活用とニ型副詞(「ニ」で終るもの)、タリ活用とト型副詞(「ト」で終るもの)とを分けるのも、あながち不合理ではない。その際、「靜か」のやうに、それだけでは文中に用ゐられないものは、どうするかといふと、之も稀に「海は靜か」のやうにも用ゐられ、又「はるか向ふ」「僅か一錢」のやうにそれだけで連體的に用ゐられるから、「靜か」「はるか」「僅か」などを一語又は副詞の語幹と見て、「靜かナリ」は「靜か」とナリ(応はナリのナリと同じもの)に分け、「はるかのは」「はるかのは」「はるか」とノ(助詞)とに分け、「はるかに」はそれで副詞と見ることまでできる。

とにかく、以上の形容動詞と副詞との取扱ひは、尙慎重な研究を要すると、いふべきである。

文 献 廣日本文典(大槻文彦) 日本文法論(山田孝雄) 所謂形容動詞に就いて(吉澤義則) 國語・國文

昭和七年一月號) 國語の形容動詞について(橋本進吉) 藤岡博士功績記念言語學論文集)

「て」に就いて 「咲きて」「見て」などのテは助動詞ツの連用形と見るか、接續助詞と見るべきか。之を論ずるには、文語と口語とを區別して、先づ文語のテから論じよう。

一、文語の「て」 テは古來テニヲハと云つて、今いふ助詞の一種と見られてゐた。富士谷成章が

「あゆひ抄」にテを十二身(十二種の助動詞)の二に入れ、ツと關係はあるが、常にツの活用形ではないと見、宜長は「玉の緒」にテはツルの變化としながらも、なほ別に擧げて以來、テの所屬が問題となつた。大槻博士は助詞のテと助動詞ツの連用形のテとを分けた。テは皆ツの連用形たることを確認されたのは山田孝雄博士である(日本文法論 三九八頁以下)。その理由は色々あるが、テは要するにツの連用形の主なる用法として、他の連用形と同様、語を重ね句を重ねるために用ゐられるに過ぎないので、ツから特立させるべきものではなく、殊に接續上

ゆきてさへ

見てのみ

うゑてだに

のやうに、その下に副助詞が來得るが、一體、接續助詞(バ・ドなど)の下には副助詞は來ないのだから、テを接續助詞とするのは、誤であるとされる。

ところが、松尾捨治郎氏が山田博士の説を反駁して(國文法論叢 國語法論卷)、接續と意義との上から、テは本來はツの連用形から起つたが、ツとは別にテを助詞と見る説に賛成され、今はテを接續助詞とする人が多い。その理由の重なるものを擧げると、

- 一、接續の上から、1、テは完了の助動詞が附けない形容詞に附く。 高くて
- 2、テは完了の助動詞の附けない或る助動詞にも附く。 去らずて
- 3、テは格助詞トの下に付き得る。 おはしますとて

(以上の三類を「高くありて」「去らずして」「おはしますと思ひて」などの略とするのは當らず。)

(山田博士はテの下には副助詞が附くから、接續助詞ではないと云はれるが、一般に重文の上句の下には、副助詞は附かないのだから、テを重文の上句を作るものとするは誤り)

二、意義の上から 次のテなどはツの意(特に宛の意)とは離れすぎてゐる。

川を隔てて見る

貝の色は蘇枋にて

鯉はなくて

遣水もいといたう咽びて、池の氷もえもいはず凄きに

ことに恐れて(恐れたり)見えられたり

二、口語の「テ」 口語の「見て」「行つて」などのテがツの連用形でなくて、純然たる接續助詞であることは、第一、口語にはツといふ助動詞がないことで明かであるから、こゝにはそれ以上論じない。

文獻 前條と同じ

一八一

酒がすきだ

書物がほしい

創作がして見たい

右例文中の酒が、書物が、創作がは客語と見るべ

きかにつきて論ぜよ

普通にいふ客語とは英文法學にいふ object の譯で、即ち他動詞の目的格 (objective case) に立

語をいふ。

さて出題の酒が、書物が、創作がは、意味の上からは、すきだ、ほしい、して見たいといふ、意慾を表はす語の對象、即ち目的となつてゐるから、前例をほゞ同じやうな意に言ひかへた

酒を好む

書物を欲す

創作を試みたし

の酒を、書物を、創作をと同様に、客語と見るべきだとも、考へられるのである。

併し、すきだ、ほしい、して見たいは他動詞かといふと、すきだは好物だといふ意味であつて、好くを他動詞として使つたのではない。即ちすきは準體言、といふよりは寧ろ「すきだ」で形容動詞として使つたのであるから、酒がすきだとはいつても、酒をすきだとはいへない。だから、酒がは無論主語である。

次に、書物がほしいのほしいは無論形容詞であつて、他動詞でないから、普通には客語をとることのできないので、書物が美しいといふのと同じ形式である。書物がは斯くして主語である。

第三の「創作がして見たい。」において、して見たいのしはするといふ他動詞の活用形であるから、創作を客語として、創作をするとは、勿論いへるのであるが、創作がして見たいの時は、形式的にはたいといふ形容詞的形式を有する助動詞に歸着點をおく時には、そのたいに對しては、創作をといふわけにはいかないのである。そこで、書物がほしいと同様に、創作がは主語と見るべきである。

一體意味の上から、客語とも見られるもので、しかも客語たることを示すヲをとらず、主語たることを示すガをとる類は、

一、金が要る　二、勉強がきらひだ（酒がすきだ。）　三、罰が恐ろしい（書物がほしい。）

四、字が書けない。字が書きにくい。本が読めぬ。（創作がして見たい。）

などである。

此等を見ると、すきだ、ほしい、して見たいのやうに、意慾を表はす意味の語は、無理になくてもよい。つまりは、意味と形式の上から他動詞の目的格でない時には「――を」といふひ方は不穩當なのである。

もつと詳しく吟味すると、

一、「金が要る。」は決して「金を要る。」とはいへない。要るは自動詞であつて、「私が要る。」といへば、「私が……を必要とする。」意か、「私を必要とする。」意か、形式的には不明なのである。だから、金が主語であるといふのは、「――が」といふ文法形式を指していふのであつて、意味の上からは、要るといふ意慾を表はす語の對象となつてゐようとも、決して客語とするわけにはいかない。

二、「勉強がきらひだ」「勉強がいやだ。」は「酒がすきだ。」と同じ形式であるが、之も「僕がきらひだ。」といへば、「僕が――をきらふ」意か、「僕をきらふ」意か、形式的には不明で、たゞ文脈に頼

つて判断するのである。「酒がきらひだ。」は「酒が——をきらふ。」といふ意には普通はとれないだけである。「きらふ」といふ他動詞への聯想から、「——が」は客語のやうにも感じられるだけで、無論客語ではない。

三、「罰が恐ろしい。」の「恐ろしい」は形容詞であつて、しかも意慾を表す意はない。たゞ「恐れる」といふ他動詞への聯想から「罰を恐れる」意にとれる場合が多く、「罰が」が客語のやうにも考へられるのであるが、「罰が」は文法形式としては、あくまでも主語である。その證據には、同じやうな形式で「私が恐ろしい。」といへば、「私が——を恐れる。」意にもとれるのである。「書物がほしい」も亦同然である。

四、「字が書けない。」「字が書きにくい。」「本が読めぬ。」なども、たゞ「書く」「読む」といふ他動詞への聯想や、習慣や前後の關係から、その「——が」が客語的に感じられるだけで、「私が書けない。」「——が」などとなれば、「私が——を書くことができない。」意か、「私を書くことができない。」意か、形式的には不明なのである。形式としては「——が」は勿論主語と見るより外、仕方がない。たゞ、此の類に屬する「創作が見たい。」「飯が食ひたい。」などは、時には「創作をして見たい。」「飯を食ひたいと思ふ。」といふやうに云ふこともあるが、その時には、「——を」は「する」「食ふ」に對する客語として表現したのである。



尙「本が讀めぬ」に見る如く、「讀む」などの他動詞の下に来るものが、「なり」「にくい」「たい」などの形容詞的なものでなくても、その対象は「――が」と表現することが出来るのである。

以上に見るやうに、意味の上から客語のやうにも見える「――が」といふ言ひ方は、文法形式としては、あくまで主語と見るべきである。一體、文法學上の主語・客語などは、形式による名で、純論理上の問題ではないことを銘記すべきである。

### 文 獻

所謂「ヲ」に通ずる助詞「ガ」に就いて(古澤義則 金澤博士還曆記念「東洋語學の研究」) 高等國  
文法新講 品詞篇(木枝増一 六七三頁)

## 一八一 左の諸例によりて「滿つ」といふ語が如何に活用

するかを推定し、且推定の理由を述べよ

潮滿てば野島が崎の小百合葉に浪こす風の吹かぬ目ぞなき

古へを更にかげじと思へどもあやしく目にも滿つ涙かな

磯の浪耳に滿てり

年ごろの願ひの滿つ心地して

動詞「滿つ」は、自動では四段と上二段とあり、他動では下二段があるが、この「滿つ」は、自

動四段活用である。

先づ、第一例に於て助詞「ば」は、動詞の未然形を受ける時と、已然形を受ける時とあるが、こゝは「潮が満ちる」といふ一つの事實を條件としたもので、萬一何々したならば、といふ假定ではないのだから、一首の意味上、已然形でなくてはならぬ。然るに、動詞の已然形は、四段活用以外は皆「レ」といふ語尾をもつ。例へば、過グレ(段上二)・見レ(段上二)・植ウレ(段下二)の如くである。斯く考へて此の例歌を見るに、「潮満てば」となつてゐるから、明かに四段の例である。

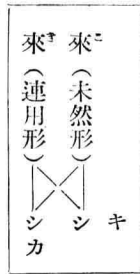
次に第二例と第四例とは共に連體形の場合であるから一括して考へる。動詞から或る體言に連る場合、四段活以外の動詞は、「ル」といふ語尾をもつ。恥ヅル(段下二)・蹴ル(段下二)・來ル(カ行變格)の如くである。然るに、此の二例は共に「滿つ」となつてゐる。故に之は四段活以外ではあり得ない。

最後に第三の例は、「滿つ」が時の助動詞「リ」に連る場合である。「リ」は、四段活用とサ行變格と以外には接しない助動詞である。然るに今「滿つ」に接してゐるのは、此の語が四段活用である證據である。

以上によつて、此の自動詞の「滿つ」が四段たる事明白である。之は、大體平安朝以前が四段、中世以後、下二段に變つてしまつたものである。

一八三 過去の助動詞「き」は動詞に如何に結びつくか

「き」は、未然形は奈良朝以前にセといふ形があつたといふ「奈良朝文法史」(山田孝ニホタカの説があるが、一般には終止形キ、連體形シ、已然形シカの三形があるとされてゐる。而して之と動詞との接続は動詞の連用形に接するのである。所が、動詞の中力行變格とサ行變格とにだけは、變則な接続をする。



先づ、カ變では未然形(來)と連用形(來)とにシ・シカだけが接する。故に「來シ・來シカ・來シ・來シカ」と四つの形が現れる。「昨日來し人、今日は亡し」、「吾は來しかど、元の家はなし」、「我が來し道は、今朝の洪水に壞れたりとぞ」「急ぎ來しかば、辛うじて間に合ひき。」之を表示すれば上掲の如くである。



次にサ變動詞に接する場合は、未然形(爲)と連用形(爲)とに接する。而して未然形からは、シとシカとに接するし、連用形からは、キに接する。故に「爲シ・爲シカ・爲シ・爲シカ」の三つの形が現れる。「全力を擧げて爲し事は、たとへ破るゝとも悔なし」「勉強せシカども失敗したり」「努力の

甲斐ありて成功しキ」。

尙、此のサ變との連続に關聯して考ふべきは、サ行四段活用とキとの接続である。この時、平安朝

以前の例では、四段活用からシ・シカに連る時は、その連用形から連るといふ普通の姿が行はれた。本居春庭が、詞八衢に集めた例を擧ぐれば、枕草子「まぎらはししかば」榮華物語「あかしくらしし」ほどに、狭衣物語「二の宮のことをほのめかししは」、同書「ひきつれてけふはかざししあふひさへ」の如くである。然るに、鎌倉以後、サ行變格で「爲シ」「爲シカ」の形があるのに影響されたものか。「セ」の音から連るやうに變つた。即ち「まぎらはせし」かば「くらせし」ほどに「ほのめかせしは」の如くいふやうになり、近世を経て現代に及んだ爲、今は文法上許容すべき事項の一つである。

一八四 左の諸例に於けるなの意義と文法上の性質とを説明せよ

(イ) 五十七代末の世まで書き置き給ひけむおそろしき  
ものなりかしな

(ロ) いざ櫻我も散りなむ一さかりありなば人にうきめ  
見えなむ

(ハ) 夏山になくほととぎす心あらば物思ふ我に聲なき  
かせそ

(ニ) これいたづらになし給ふな

(イ)の「な」は、山田孝雄博士の所謂終助詞であつて、常に文の最後に使はれて、意味を強め感動を表す用途をする。こゝは同じ用途の助詞「かし」と併用されて意味を強めてゐるのである。

(ロ)の「な」は、所謂完了の助動詞「ぬ」の未然形である。「ぬ」は、ナ(然未)・ニ(形連)・ヌ(止終)・ヌル(體連)・ヌレ(然)・ネ(命)と活くその未然形である。故に此の「な」を現代語に譯出するとせば「ひとさかりあつてシマツタならば」とでも言ひ表すべきである。

(ハ)の「な」は禁止の助詞である。禁止の助詞は奈良朝以前は禁止される用言の上に位置した。後世なら「聞かすな」「行くな」「爲ナな」といふ所を「な聞かせ」「な行き」「な爲ナ」と言つたのである。

此の時その用言は連用形の形を取る。而して此の場合意味を強める強意の助詞「そ」がその用言の下に使はれる。之は奈良朝以前では「そ」のない例が多數あるが、「そ」のある例が之と並行し、平安朝以後は、「そ」のある事が通例となつて了つた。尙、室町時代以後は、此の「な」を使はないで打消を表す用法も現れたが、それはこゝには關係がない。

(ニ)の「な」は問題の形が短い爲に、(イ)の例とも(ハ)の例とも考へられるが、尙、(ハ)の禁止の「な」と見るべきであらう。さうすると之は前項に説明した様に、禁止の「な」が禁止さるゝ對象たる述語の下に來た場合である。上にも述べた様に、文献以前の時代では、(ハ)の形が行はれたかと思はれるが、今日残る書物では既に古くから(ニ)の形も見え始め、平安朝以後は、この下に接する形

の方が常形となつて了つた。

一八五 左の場合に於ける品詞轉成の例を示せ

(イ) 名詞より動詞に

(ロ) 動詞より副詞に

(ハ) 名詞より形容詞に

(イ) 「枕まくら」 「影かげ」 「孕こむむ」 は、それごとく名詞「枕」 「影」 「腹」 に、語尾が接して出來たもの。

「サボル」 の如きも、サボターヂユの略サボを動詞化したもの。

「獨言ひとりごつ」 「裝束さうぞう」 「料理れうり」 「頑張がんばる」 「外交ぐわいごる (學生語)」 は、和語や漢語の最後の音を他音に變へて動詞を作つたもの。

(ロ) 「ますます」 「たえだえ」 「かさねがさね」 は、「益す」 「絶ゆ」 「重ぬ」 を重用して、副詞を作つたもの。

「みだりに」 「しきりに」 は、「亂る」 「頻る」 に、助詞「に」 の添つた場合。

(ハ) 「面白し」 「赤し」 「女め女めしい」 「圓まるい」 は名詞に語尾の添つたもの。

一八六 左の品詞轉成の實例、合せて五個を擧げよ

- (a) 動詞の形容詞に轉成したるもの。
- (b) 動詞の名詞に轉成したるもの。
- (c) 形容詞の名詞に轉成したるもの。

(a) 「嘆かはし」「恨めし」「懐かし」「望まし」「痛まし」と  
(b) 「働き」「嘆き」「驚き」「あの力士はうちやりが實にうまい」「將棊は先の讀みが第一だ」  
(c) 形容詞だけで、名詞に固定化して了つたものは、殆ど無い。その場その折に、自由に文章の中に現れる。

「長の別れ」「面白の世」「遠つ人」などは、語根だけが使はれた場合。

「良きを採り悪しきを捨つ」「交りは淡きをおそれ長きを望むべし」「事の易きに就くは小人の常なり」は、連用形から名詞を作つた場合。

此等と別に、形容詞に新に接尾語を添へて名詞を作る事が、甚だ多い。

「強み」「弱み」「寂しみ」「高み」は、みを添へた場合。

「長さ」「遠さ」「重さ」「苦しさ」は、さを添へた場合。

「苦しげ」「悲しげ」「嬉しげ」「心細げ」は、げを添へた場合。

文献 前項に同じ

一八七 次の文中より活用する語を摘出して其の活用を

表にて示せ

明るい静かな部屋に坐つて讀書していらつしやいます

(3)	(2)	(1)	〔摘出語〕	〔語幹〕	〔未然形〕	〔連用形〕	〔終止形〕	〔連體形〕	〔假定形〕	〔命令形〕
坐つ(て)	静かな	明るい	坐 <small>すわ</small>	明	○	う <small>ウ音便形</small>	い	い	けれ	○
			ら	静か	だ <small>だつ</small>	に <small>ウ音便形</small>	だ	な	なら	○
			ら		だ <small>だつ</small>	に <small>ウ音便形</small>	だ	な	なら	○
			つ <small>ウ音便形</small>		だ <small>だつ</small>	に <small>ウ音便形</small>	だ	な	なら	○
			る		だ <small>だつ</small>	に <small>ウ音便形</small>	だ	な	なら	○
			る		だ <small>だつ</small>	に <small>ウ音便形</small>	だ	な	なら	○
			れ		だ <small>だつ</small>	に <small>ウ音便形</small>	だ	な	なら	○
			れ		だ <small>だつ</small>	に <small>ウ音便形</small>	だ	な	なら	○



(4)	讀書し	讀書	しせ	し	する	する	すれ	しせよ
(5)	いらつしやい	いらつしや	ら	い 【イ音便形】	る	る	れ	い
(6)	ます	ま	せ	し 【促音便形】	する	する	すれ	しせ

【参考】(1)「明るい」は形容詞。「美しい」等語幹の末尾に「し」のあるものを「シク活用」、「明るい」等さうでないものを「ク」活用といふことがあるが、ク活用・シク活用の別は文語の形容詞では文法的意義があるけれども、口語では兩者の間に活用の相違は無く、たゞ文語との對應上考へられるものである。形容詞には文語・口語共に命令形の無いのは勿論であるが、口語には未然形も缺けてゐる。「明るくない」の「ない」は動詞未然形に附く否定の助動詞ではなく、形容詞「ない」の補助用言的用法であり(従つて「明るくない」の「明るく」は連用形)、又文語形容詞の未然形のやうに「ば」「とも」をも續けないから、未然形を認めないのが通説である。音便形はウ音便形、「ございます」が續く時に用ゐられる。

(2)「赤から(ウ)・赤かつ(タ)」「嬉しから(ウ)・嬉しかつ(タ)」等を口語の形容動詞第一種とすれば、此の活用は形容動詞第二種である。混合した複雑な活用であるが、現在此のまゝ一語の活用と見るのが事實に適してゐる。未然形「静かだら(ウ)」。連用形「静かだつ(タ)」はその接續に於て局限されてゐる(後者は音便形である)。普通には副詞と見

られてゐる「靜かに」、及び語幹から助詞「で」に續けた「靜かで」は、その用法から言つて連用形と見るのが正しいと思はれる。「靜かに」は「靜かに吹く」「靜かになる」の様に副詞的修飾法や補語としての用法に立ち、「靜かで」は「あたりが靜かで、氣持がよい」のやうに中止法に用ゐる。「靜かである」「靜かではない」の様に補助用言「ある」「ない」に連る場合に用ゐられる。此等を形容詞の連用形と對比すれば明瞭である。(橋本進吉博士「國語の形容詞論」)併し今の所一應は、さうした説のあることを知つて居て、從來の扱ひ方をしてもよいだらう。吉澤博士も形容詞詞に關する諸論文を發表せられてゐる。(四五四頁參照)

又「海も靜かなり、船も新しい」の「靜かなり」を終止形と見ることも適正ではなく、「まあ、靜かな」と終止することも既に標準的でない。「あゝ靜かだこと」「此の部屋の方が靜かだもの」等の「靜かだ」はかやうな「こと」「もの」が普通の名詞としての「こと」「もの」ではなく、感動をあらはす、或は接續の助詞となつて居る以上、連體形とすることは出来ない。假定形に就ても「靜かなれば」といふ形は標準的には特に「靜かなればこそ」といふ慣用句的表現に用ゐられるのみで、標準語としては「靜かなら(ば)」を正しいものとする。(前掲論、文參照)命令形を缺く。「平和なる村よ、永久に靜かなれと祈つた」等は文語的表現である。

(3)「坐つて」はラ行四段活用の動詞「坐る」から「て」に連るもの。「坐つ」は促音便形である。之は通常の連用形とは異なるもので、口語のサ行以外の四段活用の動詞が「て」「た」を續ける時は常に音便形を以てするから、「音便形」なる活用形を別に設けてもよいが、暫く連用形と關係づけて連用形の一特殊形と見てもよい。

(4)「讀書し」はサ行變格の動詞「讀書する」の連用形である。その未然形は「讀書せ」「讀書し」の二形があ

る。否定の助動詞「ぬ」は前者に、「ない」は後者に附く。標準語としては「讀書しよう」と言ひ、又關西方言的には「讀書せう」となり、時の未來の助動詞の付き方にも相違がある。命令形も二形ある。

(5) 「いらつしやる」はラ行四段が本來であるが、現今命令形に「いらつしやれ」でなく「いらつしやい」を用ゐるから、完全なラ行四段ではない。連用形は「いらつしやり」であるが、「て」「た」に續く時は促音便形であり、「ます」に連る時はイ音便形である。

(6) 「ます」は終止、連體に通常の「す」の他、古風慇懃莊重の効果と感情と効果を持つ「する」の形が有る。命令形は「ませ」「まし」の二形、「なさる」「下さる」「おつしやる」「いらつしやる」の四語にのみ附く。「ませ」は此等の連用形にも、イ音便形にも附き、「まし」は連用形には附かない。(楠木博士「新文典別記」上級用参照)

「ます」は他の活用ある諸語と異り助動詞であつて、語全體が獨立性の乏しい附屬的なものであるが、表に示す便宜上他の語と同様の取扱をした。

文 献 前記橋本博士の著書及び論文 高等口語法講義(木枝増一) 其の他口語法の諸書

一へへ 文語動詞「教ふ」「申す」「論ず」「有り」の下にそれ

ぞれ助動詞「べし」「る」「さす」「まじ」を附けたる

正しき語形を列記せよ

助動詞	〔べし〕	〔る〕	〔さす〕	〔まじ〕
動詞				
〔教ふ〕	教ふべし	○	教へさす	教ふまじ
〔申す〕	申すべし	申さる	○	申すまじ
〔論ず〕	論ずべし	○	論ぜさす	論ずまじ
〔有り〕	有るべし	有らる	○	有るまじ

論ず〓サ行變格活用

有り〓ラ行變格活用

べし〓動詞の終止形に附く。(但しラ行變格活用の動詞にはその連體形)

る 〓四段活用・ナ行變格活用・ラ行變格活用の動詞の未然形に附く。

さす 〓四段・ナ變・ラ變以外の活用、即ち上二段・下二段・上一段・下一段・カ變・サ變所屬の動詞の未然形に附く。

まじ 〓動詞の終止形に附く。(但しラ行變格活用の動詞にはその連體形に附く。)

文 献 日本文法論(山田孝雄) 新文典別記 上級用(橋本進吉) 高等國文法新講(木枝増一) 其の

他文語法に關する著書

【参考】 本問の答案としては、上表のみで宜いわけであるが、讀者諸氏の參考までに左記解説を附記しておく。以下〔参考〕とあるは皆此の趣旨に同じ。  
 教ふ〓ハ行下二段活用  
 申す〓サ行四段活用

一八九 左の文章を品詞に區分し、用言の活用表をつくれ

なんとも言へぬ美しいきれいな花が野原一面に咲いて

居りました

解一、品詞區分

副詞	動詞	助動詞	形容詞	形容動詞	名詞	助詞	名詞	名詞	助詞	動詞
なんとも	言へ	ぬ	美しい	きれいな	花	が	野原	一面	に	咲い
て	居り	まし	た							

解二、用言の活用表

〔摘出語〕	〔品詞名〕	〔未然〕	〔連用〕	〔終止〕	〔連體〕	〔假定〕	〔命令〕
言	へ	動詞四段	は	ひ	ふ	ふ	へ
ぬ		助動詞	〇	ず	ぬ(ん)	ぬ(ん)	ね
美しい		形容詞	〇	く	い	い	けれ
			〇				〇

きれいな	形容動詞	だ	だつ	だ	な	なら	○
咲	動詞四段	か	き	く	く	け	け
居	動詞四段	ら	り	る	る	れ	れ
ま	助動詞	ませ	まし	ます (まする)	ます (まする)	ますれ	ませ (まし)
た	助動詞	たら	たり	た (まする)	た (まする)	たら	○

一九〇 文語及び口語の動詞・形容詞の對照活用表を作り、

文語と口語の活用形に於ける異同を説明せよ

動詞

四	活	文	語	口	語	説	明
	用						
ハ	タ	サ	カ	幹	〔未然〕〔連用〕〔終止〕〔連體〕〔已然〕〔命令〕	〔未然〕〔連用〕〔終止〕〔連體〕〔假定〕〔命令〕	
笑	勝	増	書				
は	た	さ	か				
ひ	ち	し	き				
ふ	つ	す	く				
ふ	つ	す	く				
へ	て	せ	け				
へ	て	せ	け				
同上							
文語・口語共ニ同ジ							

	段 一 上	段 二 上	段
ア (得) え え う うる うれ えよ	ワヤマハナカ (居)(射)(見)(干)(煮)(着) ゐいみひにき ゐいみひにき ゐるゐるみるひるにるきる ゐるゐるみるひるにるきる ゐれいれみれひれにれきれ ゐよいよみよひよによきよ	バダガラヤマハタカ 延恥過懲老試用落生 びぢぎりいみひちき びぢぎりいみひちき ぶづぐるゆるむふつく ぶづぐるゆるむふるつくる ぶれづれぐれゆれむれふれつれくれ びよぢよぎよりよいよみよひよちよきよ	バガラマ 喜防取住 ばがらま びぎりみ ぶぐるむ ぶぐるむ べげれめ べげれめ
え え える える えれ えよ	同上	びぢぎりいみひちき びぢぎりいみひちき びるぢるぎるりるゐるみるひるちるきる びるぢるぎるりるゐるみるひるちるきる びれぢれぎれりれいれみれひれちれきれ びよぢよぎよりよいよみよひよちよきよ	
	文語・口語共ニ同ジ	文語ノ上二段ハ口語 デハ上一段トナル	

格 變		段 下 一	段 二 下												
ラ ナ	サ カ	カ	バ	ダ	ザ	ガ	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ
有 死	(爲) (來)	蹴	比	出	交	告	植	流	覺	責	與	尋	企	寄	掛
ら な	せ こ	け	べ	で	ぜ	げ	ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け
り に	し き	け	べ	で	ぜ	げ	ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け
りぬ	す く	ける	ぶ	づ	ず	ぐ	う	る	ゆ	む	ふ	ぬ	つ	す	く
るぬ	する	ける	ぶ	づ	ず	ぐる	うる	ゝ	ゆる	むる	ふる	ぬる	つる	する	くる
れぬ	くれ	けれ	ぶ	づ	ず	くれ	うれ	れ	ゆれ	むれ	ふれ	ぬれ	つれ	すれ	くれ
れね	せよ	けよ	べ	で	ぜ	げ	ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け
ら な	すせ こ	同	べ	で	ぜ	げ	ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け
り に	し き	上(口語ヲ行四段トモナル)	べ	で	ぜ	げ	ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け
るぬ	する		べる	でる	ぜる	げる	ゑる	れる	ゆる	むる	ふる	ぬる	つる	する	くる
るぬ	する		べる	でる	ぜる	げる	ゑる	れる	ゆる	むる	ふる	ぬる	つる	する	くる
れね	くれ		べれ	でれ	ぜれ	げれ	ゑれ	れれ	ゆれ	むれ	ふれ	ぬれ	つれ	すれ	くれ
れね	せよ		べよ	でよ	ぜよ	げよ	ゑよ	れよ	えよ	めよ	へよ	ねよ	てよ	せよ	けよ
同右	口語デハ四段ニ變ル 口語デハ來る(四段)ヲ代用 スルコトモ多イ 口語デハ未然形ガセ・スノ 二ツニナル	覽るハ口語デハ四段活用ニ 使フ事ガ多イ	文語ノ下二段ハ口語 デハ下一段トナル												



# 形容詞

文		語		口		語		説	明
活用名	語幹〔未然〕〔連用〕〔終止〕〔連體〕〔已然〕〔命令〕	ク	シ	ク	シ	ク	シ		
ク	活高	く	く	ク	ク	ク	ク	文語デハ二種類アル ガ、口語デハ無差別 ニナル	
シク	活美し	く	く	ク	ク	イ	イ		
		く	き	ク	ク	イ	イ		
		○	き	○	○	ケレ	ケレ		
		○	けれ	○	○	○	○		

## 一九一 文章解剖に就きて意見を述べよ

此の問題に就いては、文章解剖の一九二問より二〇〇問迄を解答された橋純一氏が特に高見を寄せられたので、氏の意見を掲記する。

通常、文章成分として、主語・述語・補語・客語・副詞的修飾語・形容詞的修飾語の六つが挙げられる。橋本進吉博士の文典では、補語・客語・副詞的修飾語(以下副修語)の三者を合せて連用修飾語と稱し、之に對し形容詞的修飾語(以下形修語)を連體修飾語と呼んで居られる。補語と副修語とは、絶対的の區別あるものではないから、之を總括することはよいと思ふが、連用修飾語とか、連體修飾語とかいふ名稱はどうかと思ふ。何となれば、體言とか用言とかいふのは單語についての名稱であるから、此の單語としての觀念を文章成分中に取り入れて、體言を修飾する語とか、用言を修飾する語とか考へることは、

單語法の分類觀念と文章法のそれとを混同するものであるからである。

文章法は文に適用さるべき法則である。然るに形修語なるものは文以外の連語に對しての適用を本體とするものである。主語にせよ、補語・客語にせよ、又各の成分を成す節の中のそれらにせよ、苟も體言が、或る解説的語句を戴いて居れば、その解説的語句は、皆形修語と稱せられる所から見ると、形修語は、他の文章成分を修飾する關係から名づけられたものでなく、單に體言を修飾する關係から識別命名されたものである。

白い花 涼しい風

といふ如き連語においても、「白い」「涼しい」は「花」「風」に對して形修語たるを失はないのであつて、従つて形修語は文章成分と言はんよりは、寧ろ連語成分といふべきものである。故に、文章成分としては、形修語は、之を識別する要はなく、

白い花が咲いた 涼しい風が吹き出した

の如き文に於いては、「白い花」「涼しい風」といふ連語を以て主語とするので十分である。

奇巖突兀として峙てる嶺

の如きも、これ亦全體として一連語であるから、文章法の對象となるべきものではない。併し、もし連語法(單語法・連語法・文章法の三篇對立するものとして)といふものがあつたならば、此の連語の

主體は「嶺」といふ體言であり、「奇巖突兀として峙てる」が、その修飾語だとして分解されることにならう。さうすると、その「奇巖突兀として峙てる」は、その終を「峙てり」と終止の形にすれば、一の文を成し得るものであるから、之に文章法を適用して、之を主語・述語等に解剖し得ることになる。斯く、連語にも文章成分を適用し得る場合があるからとて、連語としての認識と、文としての認識とを混同してはならない。右の例の如きは、あくまで連語たることが本體で、その連語の主體たる「嶺」に對する修飾語に對し、或種の假設的工作を施せば文になり得るといふに過ぎない。されば、理論上からすれば、單語法・連語法・文章法の三相を對立すべきもので、形修語は、連語法において、連語成分として認めらるべきものとすべきである。以上の見地から、私は文の成分中から形修語を除外した。

然らば副修語も用言を修飾するといふだけの相違で、連語組織の解剖について識別される成分たること、形修語と同様ではないかといふ人もあらう。之は或はさうかも知れぬ。併し、

湯がぐら／＼たぎつてゐる　　風が涼しく吹き出した

といふ文において、假に主語を絶対に抹殺してしまひ、「ぐら／＼たぎつてゐる」「涼しく吹き出した」だけで、連語としての意義を成すものであらうか。之だけ聞いた場合においても、「ぐら／＼たぎつてゐる」のは「湯」、「涼しく吹き出した」のは「風」であらうと想像し、主語を補つてこそ始めて意義

が生じ、理解が起るのではなからうか。とにかく、副修語の場合は、用言を修飾するといふ觀念でなく、述語を修飾するといふ文章法の立前から來る觀念であること、形修語とは大に差があると思ふ。故に副修語は、文の成分として存立し得る觀念である。併し、文の成分中から、形修語を除外したから、之と區別する必要がないので、副修語と言はず、單に修飾語とだけ呼ぶことにした。

○

文は、如何に長大で、且複雑らしいものであらうとも、之を解剖するに當つては、まづその文全體を主語・述語等の成分に分つべきである。而して、その各成分が、單語であるか、連語であるか、はた一文をなし得る節であるかは、全體の構成の上からは問ふ所ではない道理である。

主 語 述 語

彼が某を訪問したのは、風雨のはげしい夜であつた。

主 語 修 飾 語 述 語

歳月は、水が流れる如く、過ぎ去つた。

此等の文は、その成文中に、「彼が某を訪問した」「風雨がはげしい」「水が流れる」等、一文を成し得る節を含んでゐるが、それは、それ／＼の成分に、或る假設的の工作を施し、「訪問した」「はげしい」「流れる」等の連體形を終止形に改めて見た上での事で、實際に、此の文全體としては、單文組

織たるを失はぬのである。然るに普通の文典では、之を複文と稱してゐる。

試験の際などには、現在行はれてゐる通常の取扱に從はねばならぬから、文の構造上の名目を答へる場合、此等を複文と答へることはやむを得ないが、實は右に述べた考へ方が正しいことを領會しておいていたゞきたい。さうでないと、一文中に、主語や述語がいくつも目について、全體として構造、即ち文脈がわからなくなる。解釋の際の如き殊に此の心得が役に立つ。

複文と區別して合文といふ構成上の種類を立てる事は、山田孝雄博士の提唱で、保科孝一先生の昭和日本文典にも、合文といふ種目を立てゝ居られる。之は、條件節(理由・原因など多示すものをも含む)を有する文である。

月いと清かりければ、しばし庭におり立ちてそゞろ歩きせり。

水清ければ、魚すまず。

の如きが之で、此の「月いと清かりければ」「水清ければ」は、修飾語と見られぬこともないが、「月」「水」の下に、助詞「の」をとらないのを原則とする點で、修飾節とは形相上の相違があり、意義上から言つても、論理上の前提に當る重要さを持つてゐる。

重文は、普通の文法に從つて之を認める。

## 一五二 左の文章に就き單文及び複文を指摘し、且その

構造を説明せよ

野分の又の目こそいみじう哀に覺ゆれ立蒔透垣などの亂  
れたるに前裁ども心苦しげなり大なる木ども倒れ枝など  
吹き折られたるが萩女郎花などの上によるばひはひ伏せ  
るゝと思はずなり

主	語	修飾語	述語
主	語	修飾語	述語
主	語	修飾語	述語
主	語	修飾語	述語

（イ）野分の又の目こそ いみじう哀に 覺ゆれ （單文）

右は、極めて形式的な見方からの解剖であるが、實は左の如く解剖するのが、最も正鵠を得たものであらう。

主	語	修飾語	述語
主	語	修飾語	述語
主	語	修飾語	述語
主	語	修飾語	述語

〔吾〕野分の又の目こそ いみじう哀に 覺ゆれ （複文）

右の「いみじう哀に」の「哀に」は、「哀なり」（第二種形容動詞）の連用形の一形とも見られるし、又副

詞のまゝで、述語の格に立つものとも見られる。

修飾語(節) 主語 述語

(口) 立部・透垣などの 亂れたるに 前裁ども 心苦しげなり (複文)

(ハ) 文の構造が複雑であるから、次の如き様式で解説する。

一、全文の解剖

主語(節を) 大なる木ども倒れ、枝など吹き折られたるが、萩・女郎花などの上に、よろほひはひ伏せる、

修飾語 いと、 述語 思はずなり。

二、右の主語中の節の解剖

主語(節を) 大なる木ども倒れ、枝など吹き折られたるが、  
修飾語 萩・女郎花などの上に、 述語 よろほひはひ伏せる、

三、右の主語中の節(次のa bの對立節)の解剖

a 主語 大なる木ども 述語 倒れ  
b 主語 枝など 述語 吹き折られたる

故に(ハ)は、重文を含む複文である。

一九三 左の歌につきて文の構成を説明し、歌中に於ける

用言につきて文語・口語兩様の活用表を作れ

かたちこそみ山がくれのくちきなれ心は花になさばなりなむ  
ひさかたの月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしがな

「文の構成を説明し」とある題意を、「文章法上より解剖した上、單文・複文・重文等文の種類を指摘せよ」の意に理解して解く。

一、「かたちこそ……」の歌は、次の(イ)(ロ)二文より成る。

(イ) かたちこそ み山がくれのくちきなれ。(單文)

條件節 陳述節

主語	客語	補語	述語	主語	補語	述語
----	----	----	----	----	----	----

(ロ) 「吾」心「を」は 花に なさば 「心は」「花に」なりなむ (合文)

【注意】(イ)は意味上は「……朽木なれども」の意で、(ロ)に係つて居るが、文章法上より見れば、(イ)



(ロ)各別の文とすべきである。

## 二、「ひさかたの……」の歌。

主語 修飾 節 語 客語 述語

〔汝〕 ひさかたの月の桂〔を〕も折るばかり 家の風をも 吹かせてしがな (單文)

### 用言活用表

〔摘出語〕〔品詞〕〔活用種類〕〔語幹〕〔未然形〕〔連用形〕〔終止形〕〔連體形〕〔已然形〕〔命令形〕								
がくれ 動詞	文 口	ラ行二段 隠	れ	れ	る	るる	るれ	れヨ
な 動詞	文 口	サ行一段 爲 <sup>ナ</sup>	さ	し	す	す	せ	せ
なり 動詞	文 口	ラ行四段	な	り	る	る	れ	れ
折る 動詞	文 口	ラ行四段	折	り	る	る	れ	れ
吹かせ 動詞	文 口	サ行二段 吹か	せ	せ	す	する	すれ	せヨ
	文 口	サ行一段 吹か	せ	せ	せる	せる	せれ	せヨ

一九四 左の歌の係結の關係を説明し、歌中に於ける用言の活用表を作れ

淡路島通ふ千鳥のなく聲にいくよねざめぬ須磨の關守  
ふる雪のみのしろごろもうちまつゝ春來にけりと驚か  
れぬる

(イ)「淡路島……」の歌の「いくよねざめぬ」の「ぬ」は完了助動詞の終止形であつて、いはゆる徒たの係に對する結である。

上の「いく夜」は、本居宣長が「何の係」といひ、連體形で結ぶべき格と説いたものであるが、實は、「いく」「何」「誰れ」「いづく」「など」等の語も、「ぞ」「や」「か」の助詞の添はぬ限り、普通の終止形で結ぶのが定法である。序に此の係結の類歌を擧げておく。

宿りする岩屋の床の苔むしろいく夜になりぬ、いこそねられぬ (千載集 雜中)  
年へたる宇治の橋守こと問はむ、いく代になりぬ、水の水上 (新古今 賀)

(ロ)「ふる雪の……」の歌における「春來にけり」の「けり」は、過去の助動詞「けり」の終止で、「春」といふ主語が、之に對する係に相當する。即ち徒たの係である。又、結句の「驚かれぬる」の

ぬる」は、完了の助動詞「ぬ」の連體形であるが、上に「ぞ」「なむ」「や」「か」の係助詞がない。即ち、之は、詠歎的餘情を持たせるために、連體形を用ひたもので、古來、下に「ことよ」など補つて解する格とせられてをる。之は係結といふべきものでないかも知れぬが、紛らほしいから、解説を加へた。

用言活用表

〔摘出語〕	〔品詞〕	〔活用種類〕	〔語幹〕	〔未然形〕	〔連用形〕	〔終止形〕	〔連體形〕	〔已然形〕	〔命令形〕
通	動詞	ハ行四段	通	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
なく	動詞	カ行四段	鳴	か	き	く	く	け	け
ぬ	動詞	マ行下二段	寢	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	ぬれ	ぬ
ぬ	助動詞	(ナ行變格の如し)		な	に	ぬ	ぬ	ぬれ	ぬ
ふる	動詞	ラ行四段	降	ら	り	る	る	れ	れ
き	動詞	カ行上一段	(着)	き	き	きる	きる	きれ	き
來	動詞	カ行變格	(來)	こ	き	くる	くる	くれ	こ
に	助動詞	(前出「ぬ」に同じ)							
けり	助動詞	(ラ行變格の如し)		け		けり	ける	けれ	け
驚	動詞	カ行四段	驚	か	き	く	く	けれ	け
れ	助動詞	(ラ行下二段の如し)		れ	き	くる	くる	れ	れ
ぬる	助動詞	(前出「ぬ」に同じ)							

一九五 左の文中より主語を摘出してその性質を説明し、

又動詞・形容詞及び助動詞の活用表を作れ

萬のことは月見るにこそ慰むものなれ或人の月ばかり

面白きものはあらじと言ひしに又一人露こそ哀なれと

争ひしこそをかしけれ

一、先づ設問の「主語を摘出してその性質を説明し」の「主語の性質」を、「この主語は、如何なる述語に對する主語なるか」の意に理解して解く。

1、萬のことは——「慰むものなれ」に對する主語。

2、或人の——「言ひしに」に對する主語。

3、月ばかり面白きものは——「あらじ」に對する主語。

4、(又)一人——「争ひし」に對する主語。

5、露こそ——「哀なれ」に對する主語。

6、或人の月ばかり面白きものはあらじと言ひしに又一人露こそ哀なれと争ひしこそ——「をかし

「けれ」に對する主語。

二、動詞・形容詞・助動詞の活用表

	〔摘出語〕	〔品詞〕	〔活用種類〕 〔又は原形〕	〔語幹〕	〔未然形〕	〔連用形〕	〔終止形〕	〔連體形〕	〔已然形〕	〔命令形〕
見	見る	動詞	マ行上二段	(見)	み	み	みる	みる	みれ	み(ヨ)
慰	慰む	動詞	マ行四段	慰	ま	み	む	む	め	め
な	なれ	助動詞	ラ變動詞の如し		なら	なり	なり	なる	なれ	なれ
面	面白き	形容詞	ク活用	面白	く	く	し	き	けれ	なれ
あ	あら	動詞	ラ變	あ	ら	り	り	る	れ	れ
じ	じ	助動詞	特殊活用		○	○	じ	(じ)	(じ)	
言	言ひ	動詞	ハ行四段	言	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
し	し	助動詞	特殊活用				き	し	しか	
哀	哀なれ	形容詞	ラ變動詞の如し		なら	なり	なり	なる	なれ	なれ
争	争ひ	動詞	ハ行四段	争	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
し	し	助動詞	(前出)							
を	をかし	形容詞	シク活用	をかし	しく	しく	○	しき	しけれ	しけれ

一九六

左の文章に於ける主語と述語との成分を説明し  
文中の用言を抽出して活用表を作れ

文ことはなめき人こそいとどにくけれ世をなのめに書  
きなしたる詞のにくきこそさるまじき人のもとにあま  
りかしこまりたるもげにわろきことぞ、

一、全文解剖

(イ) 文ことはなめき人こそいとどにくけれ。  
主 語 修飾語 述語

(ロ) 世をなのめに書きなしたる詞のにくきこそ。  
主 語 述語

(ハ) さるまじき人のもとにあまりかしこまりたるもげにわろきことぞ。  
主 語 修飾語 述語

二、右の(イ)の中の節の解剖



一、全文解剖

(イ) 秋の月は かぎりなく めでたきものなり。

主

主語 修飾語 述語

語

修飾語

述

語

(ロ) 「いつとても月はかくこそあれ」とて思ひわかざらん人は 無下に 心うかるべきことなり  
 二、右の(ロ)の中に含まるゝ節の解剖

いつとても 月は かくこそあれ

いつとても 月は かくこそあれ

【注意】右の如く、此の文中には補足語(補語・客語)に當る成分はない。

動詞・形容詞・助動詞の活用表

〔抽出語〕	〔品詞〕	〔活用種類〕	〔又は原形〕	〔未然形〕	〔連用形〕	〔終止形〕	〔連體形〕	〔已然形〕	〔命令形〕
かぎりなく	形容詞	ク活用	かぎりな	く	く	し	き	けれ	
めでたき	形容詞	ク活用	めでた	く	く	し	き	けれ	
なり	助動詞	ラ變動詞 の如し	なり	なら	なり	なり	なる	なれ	なれ
あれ	動詞	ラ變	あ	ら	り	り	る	れ	れ



思ひわか	動詞	カ行四段	思ひわ	か	き	く	く	け	け
否定動詞		ラ變動詞	ざり	ざら	ざり	(ざり)	ざる	ざれ	ざれ
助動詞		の如し							
助動詞		特殊活用	原形ん(む)			ん(む)	ん(む)	め	
助動詞		ラ變動詞	心うか	ら	り	(り)	(る)	(れ)	れ
形容詞		の如し							
推量動詞		ク活形容詞の如し	原形べし	べく	べく	べし	べき	べけれ	○
助動詞		(前出)							
指示動詞									
なり									

一九八 君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る

古池やかはづとび込む水の音

右文章法上より解剖せよ

一、「君ならで……」の歌は、左の(イ)(ロ)の二文より成る。

主語 修飾語 補語 述語 客語

(イ) 「吾」 君ならで 誰にか 見せむ 梅の花「を」

主語 客語 述語

(ロ) 「梅の花の」色をも・香をも知る人ぞ 「梅の花の色をも・香をも」知る

【注意】二句切の短歌の第三句に、「梅の花」「櫻花」「時鳥」などの五音の體言が置かれて、その體言が、上の文に對しても、又下の文に對しても、或成分をなすことが屢々ある。短歌に特有の技巧であらう。一二類例を擧げておく。

折りつれば袖こそほへ梅の花ありとやここに鶯のなく(古今、春上)

右の第三句「梅の花」は、上文に對しては「折りつれば」の客語、下文に對しては「あり」に對する主語の資格である。

春霞なにかくすらむ櫻花ちるまをだにも見るべきものを(古今、春下)

右の第三句「櫻花」は、上文に對しては「かくすらむ」に對する客語、下文に對しては「ちる」に對する主語の資格である。

二、「古池や……」の句は、形式上からいへば、完全な文とはいへないが、詠歎的餘情を含ませるために、述語全部を省略したものとして、左の如く解する。

獨立語

主

語(節)

述

語

主語

述語

古池や かはづ とび込む水の音「……………」

【注意】いはゆる詠歎文は、密接な一團を成し、一單語の如き感を成す。「あらしすこの夕や」「あゝ降つたる雪かな」等に對し、敘述文におけると同様の文章解剖を施すことは、元來無理なのである。

一九九 左の文を文章法上より解剖せよ

此比あけくれ御らんずる長恨歌の御繪亭子院のかゝせ  
給ひて伊勢貫之によませ給へるやまと言の葉をももろ  
こしのうたをもただそのすぢをぞ枕ごとにせさせ給ふ

獨立語 1

解一 此比あけくれ御らんずる長恨歌の御繪

獨立語 2

亭子院のかゝせ給ひて伊勢貫之によませ給へる

獨立語 3 獨立語 4

やまと言の葉をも もろこしのうたをも

主語 客語 補語

〔主上〕 ただそのすぢをぞ 枕ごとに せさせ給ふ

獨立語 1

解二 此比あけくれ御らんずる長恨歌の御繪、

獨立語 2

亭子院のかゝせ給ひて伊勢貫之によませ給へる、

本客語 3

やまと言の葉をも、もろこしのうたをも

主語

副 客 語

補語

述 語

〔主上〕

ただそのすぢをぞ

枕ごとに

せさせ給ふ

右の二解、いづれに従ふもよからうと思ふ。

二〇〇 左の文を文章法上より解剖せよ

五月雨の短夜に寝さめをしていかで人よりさきに聞か  
んと待たれて夜深くうちいでたる時鳥の聲のらうく  
じうあいぎやうづきたるいみじう心あくがれせんかた  
なし

一、全文解剖

修飾語(飾を  
含む)

〔吾〕五月雨の短夜に寝さめをして、「いかで〔吾〕人よりさきに〔時鳥を〕聞かん」

と、待たれて、夜深くうちいでたる時鳥の聲の、らうくじう、あいぎやうづきたる〔聲に〕、  
いみじう、心、あくがれ〔て〕

主語 「吾」 述語 せんかたなし。

## 二、右の修飾語中の節の解剖

修飾語(節を) 「吾」 五月雨の短夜に寝ざめをして、「いかで〔吾〕人よりさきに〔時鳥を〕聞かん」

と、待たれて、夜深くうちいでたる時鳥の聲の、らうくじう、あいぎやうづきたる〔聲に〕、

修飾語 いみじう 主語 心 述語 あくがる。

## 三、右の第一の修飾語中の節の解剖

主語(節を) 「吾」 五月雨の短夜に寝ざめをして、「いかで〔吾〕人よりさきに〔時鳥を〕聞かん」

と、待たれて、夜深くうちいでたる時鳥の聲の、

修飾語 らうくじう 述語 あいぎやうづきたり。

## 四、右の主語中の節の解剖

主語 「吾」

修飾語(節を) 五月雨の短夜に寝ざめをして、「いかで〔吾〕人よりさきに〔時鳥〕を聞かん」と、

述語 待たる。

五、右の修飾語中の節の解剖

修飾語	いかで	主語	〔吾〕	修飾語	人よりさきに	客語	時鳥を
述語	聞かん。						

三〇二 左の文章につき主語と述語との成分を説明し、

動詞・形容詞・助動詞の文語・口語活用對照

表を作れ

イ、この人々の深きところざしはこの海にもおとらざるべし

ロ、牛のたくさんのおつてゐる車がいつかとほりました

解一

イ、

主部	形修	形修	形修	主
	この人々の	深き	ところざしは	

補部	形修	補
	この海にも	

述部	述
	おとらざるべし

故に此の文章の主語は「ころざしは」、述語は「おとらざるべし」である。

主語は、名詞「ころざし」(動詞「ころざす」の連用形より轉成せる名詞)に主語を表はす助詞の付きしもの。

述語は、動詞「おとる」の未然形に、打消の助動詞「ざり」の連體形と、推量の助動詞「べし」の終止形のつきしもの。

形容詞節

「主 副修 述」 「主 副修 述」  
口、牛の たくさんの つてゐる 車が いつか とほりました。

主 部 述 部

故に此の文の主語は「車が」であり、述語は「とほりました」である。

主語は、名詞「車」と主語につく助詞「が」の合體である。

述語は、動詞「とほる」の連用形に、敬讓の助動詞「ます」の連用形及び時の助動詞「た」の終止形がついたものである。

解二

深	き	(文)	・	形	く	く	い	し	い	き	け	れ
					口	く					口	け
												れ

〔摘出語〕 〔口語・文語の別と品詞名〕 〔未然〕 〔連用〕 〔終止〕 〔連體〕 〔已語假定〕 〔命令〕

た	ま	と	ゐ	の(のり)	べ	ざ	お
(口・助動・時)	し (口・助動・敬讓)	ほり (口・動・四)	る (口・動・上一)	(口・動・四)	し (文・助動・推量)	る (文・助動・打消)	とら (文・動・四)
口ナシ	口ませ	口ら	口ゐ	口ら	口ナシ	口ナシ	口ら
たり	まし	りり	ゐゐ	りり	べく	ざり	りり
た	ます (まする)	るる	ゐるゐる	るる	べし	(ざり) ざる	るる
た	ます (まする)	るる	ゐるゐる	るる	べき	ざる	るる
たら	ますれ	れれ	ゐれゐれ	れれ	べけれ	ざれ	れれ
○	ませ (ませ)	れれ	ゐよ (ゐよろ)	れれ		ざれ	れれ

二〇三 左の文章に就きて文の構成を説明し且つ用言の

活用表(口語の)を作れ



解一、文の構成

呉服屋の手代が大きなふろしきづつみを石地藏の前に  
 おろして休みましたがよほど疲れてゐたものと見えて  
 いつの間にかぐつすり寝込んでしまひました

形修	主	形修	補	形修	補	副詞句	形修	補	述
呉服屋の	手代が	大きな	ふろしきづつみを	石地藏の	前に	おろして	休みました	が	
主	部	補	部	副	詞	節	述	部	
副				詞					
		形容詞句							
主(略)	副	修	述	副	修	副	修	述	
(彼は)	よほど	疲れてゐたものと見えて	いつの間にか	ぐつすり	寝込んでしまひました				
副	詞	句	述	部					

解二、用言の活用表

おろし	動・四	さ	し	す	す	せ	せ
休み	動・四	ま	み	む	む	め	め
まし	助動詞	ませ	まし	ます <small>(まする)</small>	ます <small>(まする)</small>	ますれ	ませ <small>(まし)</small>
た	助動詞	たら	たり	た <small>(まする)</small>	た <small>(まする)</small>	たら	〇 <small>(まし)</small>
疲れ	動・下	れ	れ	れる	れる	れれ	れよ <small>(ろ)</small>
ゐ	動・上	ゐ	ゐ	ゐる	ゐる	ゐれ	ゐよ <small>(ろ)</small>
た	助動詞	(前出)					
見え	動・上	み	み	みる	みる	みれ	みよ <small>(ろ)</small>
寝込ん	動・四	ま	み	む	む	め	め
しまひ	動・四	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ
まし・た	助動詞	(前出)					

二〇三

左の二題を文法上

品詞法  
文章法

より解剖せよ

舟となり帆となる風の芭蕉かな  
上も御涙の隙なく流れおはします

解一、品詞法よりの解剖

名	助	動ラ四連用	名	助	動ラ四連體	名	助	名	助
舟	と	なり	帆	と	なる	風	の	芭蕉	かな
名	助	名	助	名	形ク活連用	動ラ下二連用	動サ四終止		
上	も	御涙	の	隙	なく	流れ	おはします		

解二、文章法よりの解剖

補	述	補	述	形修	主
舟と	なり	帆と	なる	風の	芭蕉
主部	述	主部	部	主部	部
					かな
					(感動體單文)

副詞節

主	補	述	述
上も	御涙の	隙なく	流れ
主部	述	部	部
			おはします
			(平敘體複文)

二〇四 神もうけよ酒過さじとせし御祓

前出の俳句につき、文法上左の各項に答へよ

(イ) 名詞を抽出し、文に於けるそれら名詞の格ケイスを説明せよ

(ロ) 文としての構成上注意すべき點を記せ

(イ) 名詞——神・酒・御祓 格——神(呼格) 酒・御祓(補格)

(ロ) 「神」は獨立語(呼格)だから、此の文の主語は現されてゐない。又此の文は倒序法である。

## 二五 文章法によつて解剖せよ

春の雨高野の山におん兒の得度の日かや鐘おほく鳴る

形・修	主	述(略)	形・修	補	主	形・修	補	述(略)	主	副・修	述
春の雨	(降る。)	高野の山に	おん兒の	得度の	日(なる)	かや、鐘	おほく	鳴る。			
主部	述部	—補部	主部	述部	部	—主部	述部				
副 詞 節											

右は平敘體重文である。

第四編 國語學

## 一 國語學概論

二〇六 國語學の近狀に就きて述べてよ

二〇七 我が國語學上最も進みたる部分と最も遅れたる部分とに就きて述べてよ

二〇八 國語學上今後研究すべき重要な問題に就いて説明せよ

國語學とは國語を科學的に研究する學問であるが、その研究範圍乃至體系は學者により異つてゐる。例へば安藤正次氏の國語學通考では、

一、記述國語學(國語事實の認識。共時的。靜的)

二、史的國語學(國語の歴史。通時的。動的)

三、一般國語學(國語の一般的本質。國語教育。國語政策)

と分れ、橋本進吉博士の國語學概論では、研究面を分けて、

一、國語の多様性から（口語と文語。方言と標準語。ナド）

二、國語の構造上から（音韻。語彙。文法）

三、國語の變遷性から（國語史）

とされる。

兩氏の見解は一見非常に違つてゐるが、その全體としての研究範圍はさう違つてはゐない。たゞ注意すべきは、安藤氏は國語教育・國語政策を一般國語學の範圍に入れられるに對し、橋本博士は國語問題は政策に屬するもの、國語教育は教育に屬するもので、國語の科學的研究である國語學とは本來性質が違ひ、それらは國語學の應用方面でさへないとされることである。

一般に言語の研究には音韻・語彙・文法の三面があることは、通説である。一方、言語には歴史的變遷と地理的・社會的相違があるから、國語學においても、日本語を歴史的・地理的・社會的に、音韻・語彙・文法の三方面から研究するのが當を得たもので、此の點は誰にも大體異存の無い所である。

ところが、國語問題や國語教育を國語學の一部又は應用とするか否かに就いては、前述のやうに異論がある。その内、特に國語問題は明治以後重要な文化的問題として、識者の注意を引き、國語學者も多かれ少かれ、此の問題に関心をもち、研究もしたのであるが、どちらかと云へば、國語學者以外に熱心な人がだん／＼出るやうになつた。國語學者の中でも上田萬年博士や保科孝一氏などが熱心で

特に保科氏は臨時國語調査會の幹事として盡力された。その他の國語學者も初めは國語問題に興味を持つたが、問題の解決が容易でないのと、いはゆる純粹の科學的研究に追はれてゐる内に、だん／＼と國語問題から離れて行き、近頃は大多數の國語學者は此の問題から手を引くやうになつた。

國語教育は教育の一部で、國語學の一部又はその單なる應用でないことは異論はない。問題は國語問題である。之を國語政策と呼んで、政策的方面ばかり研究するものとすれば、それは明らかに國語學の範圍ではない。併し筆者は、國語問題は國語觀に關することが多く、國語觀は眞に學問的な國語學の理論的・哲學的到達點、即ち、*is* は *sein* (あるがまゝ) に對して *sollen* (あるべし) を決定する性質のものと思へてゐるから、國語問題の多くは國語學上の現實的問題として、眞に學問的に調査・研究すべきものと思ふのである。

さてこゝに國語研究史の一般的傾向を顧みよう。明治以前の國語研究は主として註釋語學乃至は作歌作文語學であつた。その研究對象として取上げられた國語も、雅語即ち平安朝を中心とした古典語に殆ど限られてゐた。それが明治以後文献學的西洋言語學の方法を採ることになり、國語學においては、國語の歴史的研究がその主な目標となつた。といつても、國語の音韻・語彙・文法の三面の内、特に一つ／＼の語の意義を歴史的・文献的に調査して、辭書に纏める仕事と、文法の歴史的・理論的研究とが盛んであつた。



ところが最近十餘年間の傾向を見ると、先づ、音韻方面においては、西洋の音聲學の影響を受けて、國語の音聲の生理的・物理的研究が起り、而も内省的方法だけでなく、キモグラフ・人工口蓋・オシログラフ・トキーフィルムなどの機械による實驗的研究が行はれてゐる。が更に最近に至つて音聲の生理的・物理的研究を主とする音聲學 (Phonetics) に對して、音聲の言語的・心理的研究ともいふべき音韻學 (Phonology) が主に日本式ローマ字論者によつて輸入され、そのローマ字綴り方論の有力な一根據とされ、國語音聲の研究にも影響を與へてゐる。以上の音聲研究は主として現代の東京語に對して行はれてゐるが、尙各方言の音聲も研究され、一方古代からの國語音聲の歴史的研究も、橋本博士の上代特殊假名遣の發表以後、學者の興味を引き、國語音聲史もどうやら目鼻が附いて來た。

語彙方面においては、平安朝の雅語中心の時代から、漸く鎌倉時代以後の俗言 (口語) に及び、殊に近世の江戸・京阪語の研究が盛んで、近松語彙(上田萬年編 口語千代)・元祿文學辭典(監修)などが出た。が語義論・語彙論とも云ふべき體系的・理論的研究にまでは至つてゐない。

何といつても一番進んでゐるのは文法研究である。明治以後大槻文彦博士により一新紀元を劃し、山田博士によりほど大成した國文法學が、更に検討されて一段の進歩を遂げようとし、一方従來の文法學・修辭學を止揚したやうな美學的な文體論 (stylistics) が提唱されてゐる。一方文法史の研究においても、各時代の文献の精査による精密な調査が若い人々によつて、着實に進められてゐる。

尙、注意すべきは方言の研究である。明治時代の方言調査は國語問題解決のためであつたが、近頃の方言調査は各方言の語彙蒐集が主で、民俗學と關係することが多く、方言の音聲や文法の調査は少  
 5。

國語國字問題は漢字制限案・假名遣改定案などとなつて現れ、又西洋風の基本語の調査も試みられてゐるが、問題の解決は前途程遠く、第一まだ眞の國家的・國民的運動とはなつてゐない。

國語教育は垣内松三氏を中心とし、西洋風の解釋學的・表現學的理論が、實踐を導く原理として一部に行はれてゐるが、やゝもすれば理論倒れになる恐れがあり、更に着實な研究と實際的方法とが要求されてゐる。

要するに、國語學は明治以後西洋言語學の模倣の下に、以上のやうな現狀に進んで來たが、一口で云へば、國語の歴史的研究が主流で、音聲研究と方言研究とが兩翼に張り出して歴史的研究と關係し合ひ、國語問題と國語教育とが、國語のいはゆる科學的研究と出入しながら論議されてゐる状態である。

最後に將來の國語研究に就いての見透しや意見を略述すると、國語の歴史的研究は音韻・語彙・文法の三方面において今後益々精密になると共に、その歴史的展開の跡が學的に體系づけられ、變遷の理論が明らかにされなければならない。一方現代の各方言の諸様相を、而もできるだけ、耳で直接に聞

き、又機械に記録するなりして、之を觀察することも必要である。が、希望を云へば、以上の諸研究が、國語を國民から、社會から、人間から切り離して、それ自身生命のあるものゝやうに考へこみ、又一方學問が煩瑣主義に陥り、悪い意味でいふ「學問のための學問」に墮することなく、現實の國民的・社會的・人間的惱みから出發した社會的・歴史的・國語觀的研究も盛んになり、國民の國語生活を指導するまでになりたいと思ふのである。

文獻 國語學精義(保科孝一) 國語學通考(安藤正次) 國語學概論(橋本進吉) 岩波講座日本文學)

言語學通考(小林英夫) 國語觀—その歴史的概觀と本質(岡本千萬太郎) 「國文學と日本精神」の中)

二〇九 假名遣法の起りたる所以を問ふ

二一〇 契沖の假名遣意見について論評せよ

二一一 釋契沖の假名遣に關する意見を述べよ

二一二 假名遣の標準に就いて述べよ

二一三 今日迄に表れたる假名遣を論評せんとするに諸

子は如何なる標準を以てせんとするか

假名遣とは、廣義には假名で國語を寫す場合の規則をいふ。假名は表音文字であつて、もと國語の

音聲を表して、それで國語を寫すために發達したものである。音聲を表すといつても、著音機のレコードやトーカーのやうに、口から出た物理的音聲をそのまま記録するわけにはいかない。音聲記號(phonetic symbol)は口から出る音聲をできるだけ詳しく代表しようとすることもあるが、それでも細かい差異やニュアンスまで代表することはできない。普通の文字となると、ローマ字や假名のやうな表音文字でも、口から出る音聲を表すのが本來の目的ではなく、實は口から出る音聲に應ずる心理的な音聲表象(音聲觀念とらつてもよい)を代表するものである。

さて日本の假名は表音文字、而も音節文字であつて、初め漢字を用ゐた所謂萬葉假名として起り、後に片假名・平假名に發達したもので、本來國語の音節としての音聲表象を代表するものである。そこで音聲表象が變れば、それを代表する假名も變つて行くのが自然である。

實際の假名遣の歴史から見ても、凡そ奈良朝の終り頃まで、萬葉假名としてのエ・キ・ケ・コ・ソ・ト・ヌ(實は)・ヒ・ヘ・ミ・メ・ヨ・ロの十三の假名にそれ／＼甲乙二類があつたのは、甲乙二類の發音即ち音聲表象が違つてゐたとしか、考へられないのであつて、平安朝になつてから其の二類の音聲表象が同じになつて行つたからこそ、假名の上にも二類を區別する必要も習慣もなくなつたのである。

それが更に凡そ平安朝の中期以後イヒキ、ウフ、エヘエ、オホフ(一般に語頭以外のハ行音はワ行音になつて行つたので、ハとワとも混同した)の四類はそれ／＼同發音即ち同音聲表象を持つやうになつたので、假名遣の上にも區別し難いものとなり、

混亂したのである。

そこで或る語をその時代の音聲表象に應ずる假名で書き表すと、以前の假名遣とは異つてくるのがある。併し人々は以前にどう書いたかを覚えてゐるか、探すかして、その通り書かない以上、知らず／＼その當時の音聲表象に従つて書くことになる。本來表音文字である假名を表音的に用ひることは、一面當然なことであるが、それではそれ以前の假名遣と異つてくる。そして、或る人は昔風に書く、或る人は表音的に書く、その表音的といつても、或る規則を決めなければ、まち／＼になり易い。そこで、假名遣が文字通り亂れるのである。表音的なら表音的で一致してゐれば、問題は殆どないのであるが、さうは行きにくいから、假名遣にはどうしても、或る規則が必要になる。

此の必要に迫られて起つたのが、いはゆる定家假名遣である。定家假名遣とは藤原定家の説が基となり、それが増補された行阿の「假名文字遣」の俗稱である。「假名文字遣」では原本のイヒキ、オヲ、エヘエの上に更にホ、ワハ、ムウフを加へて、イヒキ、オホヲ、ムウフ、エヘエ、ワハの五類十四字の假名遣を規定してゐる。

さて定家乃至行阿の假名遣の標準は何に據つたかといふと、大部分は昔の文献に據つたものらしいが、その典據を、已に假名遣の亂れてゐた平安朝中期以後の文献に求めた爲、勢ひいはゆる歴史的假名遣とは違つたものができた。その上、何に據つて決めたか明らかでないものもある。

此の後、歌は勿論、物語・連歌・俳諧などに至るまで、此の假名遣に據つて、江戸時代に至つたのであるが、一方では以上の假名の外に次第にズとヅ、ジとヂの區別や、字音を主とするケウ・ケフ・キヤウ・キヨウなどの別も混同するやうになつて行つた。

江戸時代になつて、契沖が萬葉集研究の副産物として、平安朝中期以前の古典の假名遣を調査した結果、世間に行はれてゐる定家假名遣が、古典の假名遣と違つてゐることを發見し、「和字正濫鈔」などを著して、復古假名遣即ちいはゆる歴史的假名遣を主張した。正濫鈔の卷一は音韻・文字の一般論、卷二から卷五までは字音以外のまぎれ易い假名遣について、例證を擧げて説いてあるが、惜しいことには、音韻の理論を密教に附會し、又ア行のオとワ行のヲとの所屬を逆にした爲、



「かくの如くすみちがひにかよへり」などと云ひのがれた。又例證の無い語が約三割もあり、誤もあつた。

正濫鈔の主張によつて、大脅威を受けた定家假名遣遵奉者中、橋成員は「倭字古今通例全書」を著して、「假名の法は平上去入の四聲にしたがひてさだまりぬ。……なんぞ舊記になづまんや。只理の正道にしたがひて可なり」といつて、契沖説に反對した。そこで契沖は「和字正濫通妨鈔」とその補改

たる「和字正濫要略」とを著して、之を反駁し、又正濫鈔の誤を訂正した。斯くて契沖の説は主にその後の國學者などに採用され、だん／＼勢を得た。元來契沖の説は主に歌人を目標にしたのに、堂上派の歌人などは定家假名遣を用ひ、又上田秋成は「靈語通」を著して、勝手な假名遣を主張した。契沖の説は約七十年後に出た栞取魚彦の「古言梯」によつて、ほど大成した。字音の復古假名遣は宣長の「字音修正片楮」によつて論定された。

明治維新になつて、教育上、契沖以下の研究した復古假名遣を現代の文章にまで採用したが、教へる方も習ふ方も努力が足りない故もあり、とかく假名遣を誤る者が多く、當時の國語國字改良運動の影響下に、明治三十三年には小學校令で字音だけの表音式假名遣と長音の棒引假名遣(なご)を決めて翌年から小學校で實施したが、反對論もあり、四十三年になつて復古假名遣に復活した。併し一般人は復古假名遣を覺えないので、表音式假名遣は絶えず主張され、臨時國語調査委員會の表音式假名遣案が大正十三年に出たが、忽ち反對論が出て、多少改正された。併し此の案によつて物を書いてゐるのは、殆ど同會幹事であつた保科孝一氏とそれを支持する人々だけである。

次に假名遣の標準。之は二に分れる。(一)いはゆる歴史的假名遣。(二)表音的假名遣である。

第一の歴史的假名遣とは要するに昔の人が書いた通りに書くといふ主義である。その場合、昔の何時の時代の假名遣をまねるかといふことが問題であるが、日本で歴史的假名遣といへば、凡そ平安朝

初期の假名遣に據つてゐる。而もその前やそれ以後に世間に行はれた假名遣は無視してゐる。だから歴史的といつても、實は平安朝初期の表音的假名遣、即ち復古的・古典的であつてほんとうに言語や假名遣の歴史的變化に従つてゐるわけではない。それ故、平安朝初期の文章や擬古文をその時代の假名遣で表はすことは當然な事であるが、現代の文語を平安朝初期式假名遣で書くことは、必ずしも合理的でない。特に現代口語文をさへ平安朝初期の表音式假名遣で書くのは、寧ろ無茶である。そこで現代の發音とはかけはなれた假名遣を強要する結果、中々それが行はれず、而も假名遣を違へながらそれが一般人にはあまり問題とされず、不都合も少いといふ奇現象を呈してゐる。

之には理由がある。その主なものは、

一、文字遣が一定してゐない。一語々々を離して書かない。

二、一語を表はす假名の文字表家が確かでない。

國語の表記上、和語を或は漢字で書き、或は假名で書き、而も一語々々を一纏めに、語間を離して書かないため、語としての假名遣が視覚印象として記憶中に残りにくい。そこで文法的に類推できる假名遣の外は、どうも覺えにくい。特に字音假名遣に至つては覺えにくく、覺えたとして、殆ど實用にはならない。

之が改名遣改定論の起る所以である。少くとも義務教育では今の歴史的假名遣は覺え切れない現状



である。實際には大學卒業者もまちがへる。義務教育で覚え切れないものを一般に強要するのは、どうかと思はれる。而も平安朝初期中心の歴史的假名遣を強要する事は果して學問的根據があると言ひ得られるであらうか？

第二の表音的假名遣とは、正しい意味では、初めにも述べたやうに、語の音聲表象に應ずる假名遣で、その際文法を考慮に入れることは勿論、世間に皮相的に云はれてゐるやうに、たゞ言ふ通りに書くといふやうな、そんなのんきなものではない。どうせ標準語の假名遣のことだから、實際には標準語の發音を定め、それを習ひ、その音聲表象に従つて書くのである。そこを考へないと、時處位の別によつて、發音が違ふのをどうするか、文法が崩れるとか、的はづれの論が飛び出すのである。却つて各時代の發音を基とする假名遣により、各時代の發音通りに發音してこそ、各時代の眞の文法や語感も分るであらう。今のやうに千年以上の時代的變化を無視して、どの時代の國語も一律に平安朝初期的表音假名遣により、而も發音は現代式にしたのでは、極端に云へば、文法も語感もあつたものではない。

コトバの音聲は歴史的に變つてゆくのだから、それにつれて假名遣を變へてゆく方が、本來は合理的であらう。少くと日本のやうに、コトバの意義部(形態部に對し)は主として漢字で表はし、その假名遣は問題にならない場合が多く、一語々々を離し書きにもしないで、一語としての假名遣の視覚印

象をわざ／＼輕んずるやうな文字遣をしてゐる場合には、特に表音的假名遣の方が自然、且つ合理的である。

更に假名遣説を批判する時の立場として、考へなければならぬ事は、我々が嚴正な批判的國語觀を持つて解決に努力を傾注すべきことである。國語觀とは國語についての學的理想であつて、それは愛と批判との混一體でなければならぬ。そして國語觀は世界觀の一であつて、歴史觀・國家觀・社會觀・言語觀などに關することが多い。保守的・尙古的・神秘的・貴族的な世界觀を持つ人は、知らず／＼復古假名遣に傾く。進歩的・合理的・大衆的な世界觀を持つ人は、多くは、表音的假名遣に赴く。日本の國語の現實の混亂に就いての心からの愛と憂ひ、そして大衆の文化的向上についての飽くことなき熱望、さういふものがなければ、假名遣などは、つまりどうでもよいか、或は單に保守の爲の保守にとどまつてしまひ易い。

文 獻 假名遣の歴史(山田孝雄) 假名遣研究史(木枝増一) 國語觀—その歴史的概觀と本質(岡本千萬)

太郎 藤村博士功績記念會編「國文學と日本精神」の中)

二四 片假名の發達に就いて述べよ

二五 平假名の發達に就いて記せ

一、片假名の發達 片假名は國語を表記する爲に發生した一種の音節文字で、漢字を音字的に轉用した眞假名(萬葉假名)から生じたものである。

わが國に於ては、漢字の讀み方に音と訓の二種類がある。音は支那の原音を模倣した讀み方であり、訓は漢字の意味を國語の意味に翻譯して、その漢字に充てた一定の國語である。

従つて眞假名は漢字の音を假借したものばかりでなく、漢字の訓を假借したものもある。

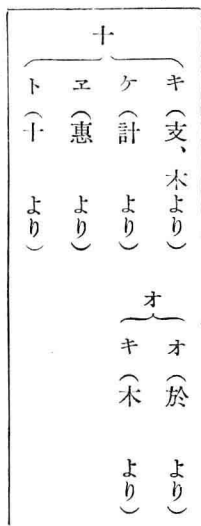
漢籍や佛典の漢文を國語に譯讀することが始まつて、國語を記す爲に用ひた眞假名は、小書と速記の爲に、字畫の少い漢字が選ばれ、或は略字が用ゐられ、單に備忘的に音符として使用され、始めて茲に片假名が成立したのである。

斯くの如くにして片假名は眞假名から發生したが、眞假名は漢字の一用法に過ぎず、あくまで表意文字としての本質を具備してゐるのに對し、片假名は母字たる漢字を離れて、所定の國語一音節を表はすのみである。形態上からも漢字の略形は、支那に於ても用ゐられる方法であるが、それはあくまで略字として意識されるものであるのに對して、片假名は母字と沒交渉に字形の獨立を保つてゐるのである。此の二點に於て眞假名と性質を異にしてゐる。

發生期の片假名の形態は極めて複雑不統一である。之は點本の傍訓用として發生し、乎<sup>フ</sup>古<sup>コ</sup>止<sup>ト</sup>點<sup>ト</sup>と併用せられてゐた爲に、秘密性を有し、筆者の備忘を目的としてゐたからである。同一音を表はすのに

數個の眞假名が用ひられた爲、片假名は數個の眞假名から發生し、従つて同音を表はす片假名が色々生じた。

又、漢字の省略法が一定せず、初畫・終畫・中畫・全畫の何れを取るかに依り、たとひ同一字から出て、その省略の仕方によつて、字形が異なるのである。



異つた音をあらはす眞假名が省略の結果同一となり、従つて同形の文字で二音以上に讀まれるものがある。例へば上表の如くである。

その上、字源の漢字に行草體のもの、又當時行はれてゐた異體・略字が混用されてゐたので、

益々形態は不統一を來たしたのである。

斯様に訓點に片假名が使用され、初は乎古止點と併用されてゐたが、後に單獨に用ゐられ、漢字に混じて、書き下し文を構成するに至り、初めて、一般通用文字となるに至つたのである。

形態の統一は點本にのみ使用されてゐる間は、極めて困難であつて、點本を離れ、一般通用文字として社會的に一般化されて、初めて統一を見るに至つたのである。片假名が文學に使用される事は、最も大きな統一を促す原因である。

片假名の最古の資料は正倉院聖語藏の「成實論」に附した天長五年の訓にあるもので、飯室切金光明最勝王經註釋古點も成實論天長點と同一のものであるから、天長前後には片假名交り文は存在してゐたと見られる。後には漸次片假名交り文が表れて院政時代以後鎌倉時代にかけての佛教文學・戰記文學には主として漢字と片假名とを交へた文が使用されてゐる。従つて字體も此等と共に統一され、院政期には近代風の傾向となり、鎌倉期には數種の異體が纔かに存在してゐる他、殆ど今日の標準字體に一致してゐる。

斯くして次第に統一されたのであるが、今日の標準字體の成立は明治三十三年の小學校令に依つて國定教科書に使用されてからであるから、結局平安朝初期から明治に至る極めて長い間に社會の影響を受けつゝ淘汰されて來たのである。

片假名の作者を吉備眞備に擬す説が古來行はれてゐるが、如上の點で完全に否定される。

**二、平假名の發達** 國語を表記する爲に用ゐられる音節文字として、片假名の他に平假名が存する。平假名は片假名と同様萬葉假名から發生したものであるが、之は漢字の草體書から生じ、初め草假名と稱した。漢字を離れ獨立して消息文・日記・物語等に用ひられ、主として女子の手に依つて成長したのである。漢字を男手といふに對して女手とも呼んだのは之による。その製作の功を、弘法大師に歸するのものとよりとるに足りない。

片假名は漢文訓讀用として生じた爲に、極めて獨立性が乏しく、漢字に隨伴してあらはれ、男子の手に使用されてゐた爲、音符的性質が強く、外來語の表記、特殊實用文に用ゐられ、今日、法令・公用文書等に用ゐられるのが常であるが、平假名は之に比して一般的に廣く用ゐられてゐる。

平假名と片假名とは、言語に對する價値は全く同等であり、用法上の區別は著しいものではないが、併し發生事情に起因する微妙な特質は、今日猶、殘存するものである。

**文 獻** 假字カナ・モトメ本末(伴 信友) 平安朝時代草假名の研究(尾上八郎) 片假名の研究(春日政治 明治書院)

國語科學講座) 假名發達史序說(春日政治 岩波講座日本文學)

### 二二六 假名國字論とローマ字國字論との得失に就いて論ぜよ

國字として假名を專用するか、ローマ字を用ゐるかの得失に就いてはこれまでよく比較論評されてゐる。その重なる比較については、目下部重太郎氏の「現代國語思潮續編」の附録に、假名文字とローマ字との比較として、載せてあるのを見られたい。筆者は茲に、(一)文字そのものの得失、(二)歴史的・社會的國語觀による得失、に分けて、簡單に意見を述べてみよう。

一、まづ文字そのものとしての得失は、更に、

- (1) 音節文字と單音文字との得失。
- (2) 字體上の讀み方と書き方との難易。

とに分ける。日本語を寫すには、音節文字たる假名が適當か、單音文字たるローマ字が適當か。日本人の音聲觀念や文字の歴史を顧みれば、假名の方が自然なことが分る。一般の日本人の音聲觀念には西洋流の單音觀念は無い。假名一字で表はす、いはゆる音節が日本人にとつては一つの音韻單位であつて、之を子音と母音との結合と見るのは、學的反省の產物である。實際に口から出る音聲には、例へば東京語のアリマスのス(S)のやうに、母音を伴はない子音もあるけれども、そのス(S)と母音を伴ふ普通のス(Su)との間には、國語の音韻單位としての區別は無いのである。日本語では促音さへも一單位・一音節と見るべきである。だからこそ、日本には音節を表はす假名は發達したが、西洋流の單音文字は發達しなかつた。

といつても、何も單音文字で日本語を寫してはいけないといふのではない。文化が進めば、自然に發展したものを棄てゝでも、合理的なものを採用する事は望ましいことであるが、ローマ字が果して日本語を寫すに假名よりも合理的であるかは、甚だ疑はしいと思ふ。五十音圖や活用を考へると、ローマ字の方が説明にも便利なこともあるが、一熟音を寫すのに、いつも子音と母音とを並べて書かねばならないのは、どうかと思ふ。日常文字としてはどうも不自然なやうに思はれる。

次に字體上から假名とローマ字との読み方と書き方との難易を比較してみると、全體としては兩字は一長一短である。假名の現在の字體では、一語としてのまとまりはよくない。カナモジカイ式の片

假名字體も印刷はとにかく書くには不便で、體裁はよくない。之では日本人の審美眼に適ふかどうか。といつても、あまり字體を變へたのでは、新字になつてしまふ。之に反しローマ字はそのまゝで役に立つ。タイプライターなどを用ゐる場合の長短は大したことはあるまい。

二、更に觀點を變へて歴史上、假名とローマ字とを比べてみると、假名もローマ字も問題がある。

假名はその名の示すやうに、漢字に對する補助的文字として發達した嫌ひがあつて、平安朝には假名専用の文章も現れたが、何時の間にか、漢字・假名併用のものが勝利を占めて、今日に及んでゐる。

山田孝雄博士などは此の點を力説して、假名専用論を排斥される。假名専用文の發展永續しなかつた原因には、文字としての優劣の外に、他の文化的原因があつたとも思はれるので、將來までも假名専用が不可能かどうかは疑はしいとも言へる。併し今の所、漢字交り文を捨てられさうにない。

之に反し、ローマ字は殆ど言ふに足りる歴史的背景が無く、全く外國的・革新的であるが、その點却つて漢字交り文廢止には都合がよいかも知れない。無論假名のやうな國民的親しみの無いのが大缺點で、先の見込みも附かない。

かうやつて國字としての假名とローマ字とを比べてみると、簡單には優劣を決めにくい。

文獻

國字國語問題文獻目錄(平岡伴一)

國字問題の研究(菊澤季生)

現代國語思潮

續編(日下部重



## 二七 我が國に於ける漢字の用法を分類し且説明せよ

我が國に於て用ゐられる漢字は支那本土に於て使用されるものが大部分であるが、更に我が國に於て支那の製字法(主と會意)に倣つて作つたいはゆる國字、例へば峠・糝・伸・榭の如きものがあり、近時は必要に應じて、多くの新字、例へば漚・哩・籽の如きものが作られてゐる。此等の中には支那の辭書に採用されたものと、然らざるものがあるが、凡て漢字と見做されてゐる。

漢字は表意文字であるから、一々の漢字に夫々個有の意義内容を供へてゐると共に、支那語としての發音がある。わが國に於ける漢字の用法は、漢字を意字として用ゐる方法と、音字として用ゐる方法の二種類がある。

一、意字としての用法 (1) 支那に於ける用法を其の儘用ゐるもので、之が正式の使用法である。

此の際漢字を音又は訓にて讀む。日・月・山・川を、ひ・つき・やま・かはの義に用ゐて、ジツ・ゲツ・サン・センと讀み、或は、ヒ・ツキ・ヤマ・カハと讀む類である。

(2) 我が國獨得の意味に用ゐられるもの。此の意味を和義とよび、此の讀み方を國訓・特訓・和訓など呼ぶことがある。主として次の如き場合である。

(イ) 意味變化による國語の意味が變化して、新しい意味が生じた際、原義に宛てた漢字をそのまゝ、

用ゐた。例へば「殿」は莊嚴な堂屋を意味したので「トノ」と訓じたが、後に「トノ」に莊嚴な堂屋に住む人、即ち貴人の意が生じ、貴人の尊稱に用ゐられることになつたが、その意味の「トノ」にも「殿」の字を用ゐた。「調」は律呂の「シラベ」の義であつたが「シラベ」に點檢の意味が生じて、調の字を用ゐた如きは此の例に屬する。

(□)誤用の正用化による。誤用が久しく續き、後世正用と見做されるに至り、全く支那本土に於ては使用例の見られぬ新意義が生じた。今日國訓の語源を辿り、文字の精査を行つたならば、相當多くの斯かる誤用例を見出し得よう。例へば「宛」の字は説文に屈艸自覆也と注され「カガム」の意であり、一轉して「アタカモ」の義が生じてゐるが、「當ツ」の意に用ゐられた例はない。之は「宛」の草體が「充」字と近似してゐる爲、誤用された結果である。

(ハ)類似語の代用による。國語を充當すべき漢字が無い場合、之に類似した意義を有する漢字を代用した。「モリ」に相當する漢字がない故、木多き貌の意たる「森」の字を代用した如き此の例である。

(ニ)國字と漢字の混雜による。日本製の文字が漢字と全く同形の場合、意味内容の異なるのは當然である。「偲」は「シノブ」と訓じ、人を思ふ心より作つた會意文字であるが、支那では強め力むる意である。我が國上代信仰で神が宿るのは樹木のある「モリ」であるから、「社」の「示」を「木」に更め、「杜」を「モリ」と訓じ、特に神社ある森の義に用ゐたが、「杜」は支那で甘棠といふ木の名である。

鮎は日本では「アユ」であるが、支那では「ナマヅ」を指すなど、國字と漢字の混雜した例である。

## 二、音字としての用法

わが國に於ては漢字の読み方に音と訓の二種類がある。音は支那の原音を模倣した読み方であり、訓は漢字の意味を國語の意味に翻譯して、その漢字に充てた一定の國語である。元來漢字は意字であるが、意義内容を顧みず、唯外形的な読み方(音文)を假りて、之と同じ發音の語を表はす爲に、漢字を使用する方法が音字的用法である。

此の用法に於て、漢字を全くの音符と見做し、同音であれば如何なる漢字を用ゐても差支へなく、一語としての字の宛方の定まらないものと、漢字の意味内容とは何ら關係無いが、習慣上用ゐる漢字の宛方が一定してゐるものとの二種類の用法がある。此の用法を橋本進吉博士は萬葉假名としての用法と宛字としての用法と名付けられてゐる。

萬葉假名としての用法は、橋本博士の分類によれば、次の如く細分される。

(甲) 漢字の音を用ゐたもの(音假名)。

(一) 一字で一音節を表はすもの。

(a) 漢字音の全部を用ゐたもの。

(b) 漢字音の一部分を用ゐたもの。

(二) 一字で二音節を表はすもの。

阿・伊・可・伎・乎の類

安・印・散・信・良・年の類

甘・君・散・薩・乞・塔の類

(乙)漢字の訓を用ゐたもの(訓假名)。

(一) 一字で一音節を表はすもの。

卯<sup>ウ</sup>・羽<sup>ハ</sup>・蚊<sup>カ</sup>・十<sup>ツ</sup>・三<sup>ミ</sup>・日<sup>ヒ</sup>の類

(二) 一字で二音節又は三音節を表すもの。

朝<sup>アサ</sup>・浦<sup>ウラ</sup>・欲<sup>ホシ</sup>・慍<sup>イカ</sup>の類

(三) 二字で一音節を表すもの。

嗚呼<sup>ア</sup>・五十<sup>イ</sup>・蜂音<sup>フ</sup>・石花<sup>セ</sup>の類

(四) 二字又は三字で二音節を表すもの。

水葱<sup>ナギ</sup>・二五<sup>トフ</sup>・小篠<sup>シヌ</sup>・八十一<sup>ク</sup>・神樂聲<sup>サ</sup>の類

宛字としての用法は、發生に於ては眞假名と同様に漢字の宛方は一定せず、様々な漢字が使用されたと思はれるが、次第に習慣上一定して來たもので、自由な音字的用法とは言へない。

宛字には鳥渡、兎角、屹度、丁度、目出度など音訓を借りてゐるものがある。

文 献 國語學概論(橋本進吉 岩波講座日本文學) 日本漢字學史(岡井慎吾) 國語史文字篇(山田孝雄)

二二八 左の四種の文は如何なる文献に用ゐられたるものなるかを示し且漢字使用の異同について述べよ

(イ) 御門能御巫能稱辭竟奉、皇神等能前爾白久、櫛磬間門

命、豐磬間門命登、御名者白氏、辭竟奉者、四方能御門爾

湯都磬村能如塞坐氏、朝者御門開奉、夕者御門閉奉氏、疎

夫留物能自下往者下乎守、自上往者上乎守、夜能守日乃守爾  
守奉故、皇御孫命能宇豆乃幣帛乎稱辭竟奉久登宣

(口) 天皇大命爾坐西奏賜久。掛母畏伎飛鳥淨御原宮爾大八

洲所知志聖乃天皇命、天下乎治賜比平賜比所思坐久、上下乎

齊倍和氣无動久靜加爾令有爾禮等樂等二都並且平久長久可有登

隨神母所思坐且、此乃舞乎始賜比造賜比聞食且與天地共爾

絕事無久彌繼爾受賜波利行牟物等之皇太子斯王爾學志、頂令荷

且我皇天皇大前爾貢事乎奏

(六) 沼名河之底奈流玉求而得之玉可毛拾而得之玉可毛安

多良志吉君之老落惜毛

(二) 四日壬子武衛著常陸國府給佐竹者權威及境外郎從滿

國中然者莫楚忽之義熟有計策可被加誅罰之由常胤廣常義

澄實平已下宿老之類凝群議先爲度彼輩之存案以緣者遣上

總權介廣常被案内之處太郎義政者申即可參之由

(イ) 延喜式祝詞「祈年祭」「月次祭」の一節である。

漢字を使用して綴られた文であるが、言葉の順序は國語風に書き下してある。

本文中の助詞、能・爾・久・登・氏・乎・乃は、凡て漢字の音を假借してゐる。但、御名者、朝者の如き「者」は「は」とよみ、訓借假名と考へられるが、然し正式の漢文句法に従つたものであるから、例外である。又、自下・自上の如き短い語句は漢文式の轉頭を用ひてゐるが、成句として使用したものである。

固有名詞は漢字の音訓を借用してゐる。例へば、クシイハマ榊間門命、トヨイハマ豊磐間門命(以上)、ヌツ湯都磐村(都のみ音借、他は訓借)の如くである。

漢語にないもの、又は漢字で表記し難いものは、萬葉假名を用ゐてゐる。即ち、ウツ宇豆、ウツ疎夫留物など。以上の他は凡て漢字の意味によつて訓讀するのである。

(ロ) は續日本紀所收の宣命で、歷朝詔詞解の第九詔に當る。漢字使用法は(イ)に等しい。

即ち助詞は、之・爾・母・乃・乎・豆・波・等・登・之・互

用言の活用語尾は 賜イハヘ比・齊イハヘ倍・和ウララゲ氣・无ウチクコトナ動・久・賜イハヘ和イハヘ波

などを小書變記し、此等は漢字の音を假借してゐる。所知・无動・令有・可有・隨神・所思・與天地の如き成句は、漢文式に轉倒して國語風に書き下された本文中に混入してゐる。

飛鳥淨御原宮・大八洲などの固有名詞は漢字の音訓交用してゐる事も(イ)の祝詞と同様である。

以上に依つて知られる如く、(イ)と(ロ)との漢字使用法は同一である。斯くの如く漢字を國文脈に従つて書き下し、助詞・助動詞及び用言の活用語尾などは漢字の音を假借して、而も之を小書雙記する方法は、主に宣命に使用される所から、宣命體と呼ばれるもので、わが國文體の一である。(イ)の如き祝詞も凡て此の體に屬してゐるが、高橋氏文・元興寺緣起（フツシゴウ）の一部も之である。平安朝に入り片假名發生後、小書の部分は片假名に變つたが、特殊な場合は猶、眞假名が使用された。片假名書で此の形式のものとして有名なのは、今昔物語・打聞集などの説話文學である。

(ハ) 萬葉集卷十三(二三四七)の短歌である。一體、萬葉集の用字法は複雑であるが、大體次の三種に分れる。

(1) 全部を假名書したのもの。 (2) 正訓を主とし、之に假名書を添へたもの。 (3) 全部正訓したもの。以上の如くであるが、本文は、(2)に相當し、最も普通の様式である。即ち語序は國文脈に従つて、書き下してある。助詞、用言の活用語尾は萬葉假名で送つてある(萬葉假名の用法に就いては五二九頁参照)。(イ)(ロ)の如き宣命體に近い形式であるが、前二文が虚辭を音借し、而も小書雙記體であるのに對し、本文は眞假名の部分に訓借を交へてゐる處が、少しく不純である。即ち

沼名河之、君之、の「之」は「の」「が」とよまれるが、總て訓借である。

併し全體として(イ)(ロ)(ハ)の三文は、漢字使用法が略ぼ一致してゐる。

(二)は東鑑(卷一、治承四年十一月大)の一節である。漢字で綴られ、漢文式に書かれたものであるが、國語として讀み下す様になつてゐる。國語を漢文で綴る場合、語序の相違と敬讓語の有無とは最も著しい差異點であるが、漢文學が衰へ、漢文に對する正しい知識の缺如から、漢文中に敬語を使用し、語句の顛倒に漢文に無い句法が混入して生じた變體の漢文が此の體である。例へば、著<sub>三</sub>常陸國府<sub>二</sub>給の「給」、遣<sub>三</sub>上總權介廣常<sub>二</sub>被の「被」の如きは、敬語として使用されたものである。又、可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>加<sub>三</sub>誅罰<sub>二</sub>之由の「由」の如きも特有の句法である。

之は既に漢字使用の初期に見られる文體であるが、東鑑が此の體で書かれてゐるので、特に東鑑體と云はれる。推古朝の佛像光背銘は有名であるが、其の他、上宮聖徳法王帝説・高橋氏文・古事記・萬葉集詞書・日本靈異記・將門記・明衡往來、その他日記・記錄・消息などに使用され、此等の間にも漢文味の多寡、假名使用の多少など相違があつて、書式が定まつてゐるのではない。此の形式は前の(イ)(ロ)(ハ)の三文とは漢字使用法が全然異つてゐる。

文獻 語脈より觀たる日本文學(吉澤義則 國語說鈴) 及び前項文獻參照



アクセントとは、語又は文節において音節間の音の高低・強弱關係が相對的にほど一定してゐること、をいふ。その特に高いか強いかの音節にアクセント（の山）があるといふ。

國語のアクセントは高低關係即ち高さのアクセントである。高さは音の調子、即ち振動數の多少による。強弱關係は東京語などに多少認められるが、重大ではない。

アクセントは方言によつて異なるが、今東京語についての佐久間鼎博士の説によると、高低關係は上中下の三段に分れ、上の音節には右に「|」を、中の音節には無記號、下の音節には左に「|」を附けて示すと、一音節の語はハ(葉)・エ(繪)などの上型と、ハ(齒)・エ(柄)などの下型とに分れる。此の一音節語が上型であるか、下型であるかは、「葉が」「齒が」のやうに、或る助詞を附けてみると、分る。二音節語は、アメ(雨)・アメ(飴)・ヤマ(山)のやうに、上中型・下中型・下上型の三型に分れる。今三音節以上の語の型も一括して示すと、

一音節語 || 上、下

二音節語 || 上中、下中、下上

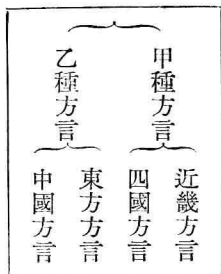
三音節語 || 上中中、下中中、下上中、下上上

四音節語 || 上中中中、下中中中、下上中中、下上上中、下上上上

五音節語 || 上中中中中、下中中中中、下上中中中、下上上中中、下上上上中、下上上上上

といふ様に、音節數に一つ多いだけの型が規則正しくあることを知る(但し、右の型について多少異説もある)。此の高低關係をアクセントの型といひ、それ〴〵上型・下型・上中型・下中型のやうに呼ぶ。二音節以上の語には下中型・下中中型・下中中……型のやうに、上の音節の無い型が一つづつあるが、此等の型は、下から中への差は、他型の場合の上から中への差よりも少く、うっかりすると氣が附かない程度であるので、此の種の型を總稱して平板式といふ。之に對し、他種、即ち上の音節のある型を總稱して起伏式といふ。

文法上の品詞の中、獨立詞(助詞・助動詞以外)はそれ〴〵一定のアクセントを持つが、それに助詞が附いた場合は、多くは元の型を保存し、助動詞が附くと、元の型を變へたり、變へなかつたりする。が、一般的に云つて、アクセントの型又は式は保存される傾きはある。そして獨立詞に附屬辭(助詞と)の附いた文節(橋本進吉博士の命名)としてのアクセントは、それと同數音節の語と同數な型を持つ。つまり單に音聲單位としてみるなら、語と文節とは同じに扱つてよい。



アクセントは方言により、高低の度合も型の種類も數も異なるが、どの方言も大體、平板式(文字通り高低の無い方言もある)と起伏式とを有し、高低關係も三段くらゝる區別すれば足りる。服部四郎氏は國語諸方言をアクセントによつて分けて、上表の如くされた。之と東條操氏などの主に文法による方言區劃(東部方言と西部方言とに大別する)とは、面白い對比をなす。

國語のアクセントは昔から支那語の平上去入の四聲の別に習つて、注意され、古事記にも「宇比地邇上神」「須比地邇去神」などと、上去などの文字によつて示されてゐる。その後にも經典や辭書や聲明に聲點などでアクセントを示したものがあり、アクセント辭書ともいふべきものさへ出來た。明治以後、西洋の語學特に音聲學の輸入以來、アクセント研究も盛んになり、近年は機械による實驗的研究に、見るべきものが多い。將來の國語教育は發音、それもアクセントやイントネーションにまで注意するやうにならなければならない。

文 獻 日本音聲學(佐久間 鼎) 國語音聲學概説(同上) 國語音聲學(神保 格) 國語發音アクセント

ト辭典(神保格・常深千里) アクセントと方言(服部四郎 明治書院國語科學講座) 日本文學大辭典(ア

クセントの項)

### 三〇 方言の性質を略述せよ

方言に關しては、從來種々の定義が施されてゐた。首都の言語に對して地方語の意味であると見たり、或は地方の言語の中で特に異様な語を指して云ふのであると見たりされた。併し一國の首府の言語も他の地方語と同様にやはりその地方の言語であるから、之とてもやはり方言である。たゞ首都は一國文化の中心地であるから自然に一段優秀な言語である如く見做されるに過ぎない。之が眞に標準

語であるためには十分の修正と彫琢とが加へられなければならない。

近時一般に承認されてゐる方言の定義としては、大體一國語内に於いてその使用區域を異にするために、それ／＼別の發達變化を遂げて、若干の言語團體に分裂した時、その言語團體全體を方言と云ふ。それ故に他に比較さるべき言語團體がなければ、言語の方言的關係は成立しないのである。かやうな關係から方言區劃の大小は全く標準の樹立如何によつて定まるもので、一縣若しくは數縣が一の方言區劃をなすこともあり、また一郡一村が一の方言區劃をなすこともある。

何故に方言が發達するかと云ふに、その原因としては自然的原因と人爲的原因とが考へられる。自然的原因の主要なものは地勢である。山脈或は湖沼河川が交通を阻害して方言を發生せしめた例は多い。わが國における日本アルプスが東部方言と西部方言との原因をなしたのは最も著しい例である。人爲的原因としては交通關係が考へられる。交通關係の頻繁な地方では案外遠隔な地域にまで同一系統の方言が行はれて居り、交通關係の稀薄な地方では近接した地域においてもその方言の系統を異にしてゐる場合がある。わが國では封建制度が永續したために方言の發達を促した點が多い。徳川時代においては、大小各藩がそれ／＼政治上・社會上の一單位をなしたので、各藩毎に獨特の方言を發達せしめた。九州における薩摩藩と肥後藩の如き、また東北における津輕藩と南部藩の如きは、その最も著しい例である。

明治以後は封建制度が廢止され、全國が行政的に統一されたので、舊藩内における方言的色彩は漸次稀薄となつて來た。加ふるに各藩の文化の發達、殊に鐵道通信その他の交通機關の發達は人々の來往を容易ならしめ、「言葉は國の手形」の如き意識を漸次失はしめつゝある。國家は標準語の普及、國語の統一を目的として國語教育を實施してゐるので、實際教育者は方言の矯正に多大の努力を傾けてゐる。またラヂオ機關の發達は標準語の普及を一層容易ならしめてゐる。かやうな關係からわが國における舊時代の方言は急激に變化しつゝある。遠い將來においては國語の統一が實現されると想像することもさして困難ではないが、さりとて方言が全く無くなるとは考へられない。人々の社會が異り、境遇が異なる以上、方言の新陳代謝は常に行はれるものと思はなければならぬ。たゞ現状を以て見れば、舊時代の方言は漸次その色彩を稀薄にするであらうと云ふことは想像し得るのである。

#### 文獻

國語學精義(保科孝一)

方言學概説(東條操 國語科學講座)

方言の本質(東條操 國語と國文

學本質號)

方言學概論(橋 正一)

### 三三 方言研究の必要に就いて述べよ

方言の研究は國語學上また國語教育上最も必要な事項である。一般に國語と稱してゐるのは全國の方言の總和と見ることが出来る。標準語とは或る特定の方言を基礎としてその上に樹立された規範語

に他ならない。わが國においては東京語がそれに該當するのである。かやうに見れば方言の研究は國語研究そのものとも云ひ得るので、國語學は方言の研究を重要な一部門としなければならぬ。之は方言の研究を絶體的のものとして、それ自身に十分の價値を認める立場である。近時方言學なる名稱が盛に用ゐられるに至つたのは、此の點に主な理由を認めただからである。單に方言採集の程度に止まることでなく、その採集の結果に比較研究を加へ、そこに一般的法則を發見し、知識の體系化を實現し得るならば、方言學の成立は疑ふことは出來ない。

方言の研究はかやうにそれ自身に十分の意義を有するのであるが、又その研究の結果を他の部門の研究に利用するためにも必要である。國語の歴史的研究に方言の知識を必要とする場合が相當に多い。國語の歴史的研究は過去の文献を主要な資料とするものであるが、方言の知識はそれ等の文献の内容を裏書し、またそれを補足する場合が屢々ある。國語史家は常に方言の知識を参照することを忘れてはならないのである。此の場合に現在の方言の知識と同様に過去の方言の知識も必要である。萬葉集卷十四所收の東歌が奈良朝の言語に對して、安原貞室著の「片言」、越谷吾山著の「物類稱呼」が徳川時代の言語に對して、その研究に寄與する點の多いことを見れば、その關係は明らかであらう。此の點については近世の學者も夙に注意したところで、「古語は方言に残る」と稱して國語の歴史的研究に方言の知識を利用することを忘れなかつた。白石・宣長の如きはその代表的な學者である。

方言の研究は民俗學の方面においても必要とされる。民俗學は過去の國民の生活、文獻に記載される機會も少くして、而も長き年代に亘つて營まれた國民の生活の諸相を研究する學問であるが、俗信・歌謡・傳説・俗諺・神佛事等言語に關係ある部門が少くない。従つてそれ等の事象を知り、その意義を明らかにするためには必然的に方言の知識が必要となる。近時民俗學界に方言の研究が盛に行はれてゐるのは、全く此の爲に他ならない。

方言の研究は國語教育の方面においても必要とされる。國語教育においては方言矯正の立場に立つべきであるが、そのためには方言的事實が明らかになつてゐなければならぬ。方言の矯正は進んで標準語の制定、國語の統一となるので、兩者は密接不離の關係を有するものである。明治三十八九年代に文部省の國語調査委員會で行つた方言調査(普通調査報告書)は、全國に亘つた大規模の調査であるが、その終極の目的は標準語の制定、國語の統一に資するにあつたのである。近時各般の文化の發達、殊に交通機關の完備とラヂオの普及は急激に標準語を流布せしめてゐるが、國語教育上此の傾向は一層強化されるべきである。その前提として方言の研究が最も要求されるのである。

文獻 國語學精義(保科孝一) 國語學通考(安藤正次) 國語教育を語る(保科孝一) 方言學概説(東

條 操 國語科學講座) 方言學概論(橋 正一) 國語學新講(東條 操)

### 二二三 方言研究の目的と方法とに就きて述べよ

一、目的 方言研究の目的の第一は國語方言の諸相を明らかにせんとするにある。即ち方言のための方言研究と云ふべきものである。國語には全國一様に行はれる標準語と各地方にのみ行はれる方言とがある。從來の國語學においては主として標準語のみが研究の對象として取扱はれて來て、方言は多く顧みられなかつた。然し方言は各地方における具體的な言語現象であつて、その總和をもつて初めて最も具體的な國語と云ふことが出来るのである。此の意味において首都の言語といへどもまた國語方言の一部をなすと見られるのである。かやうな譯で國語の研究は方言の研究を度外視しては完全には行はれない。昭和初期以來わが國に方言の研究が勃興したのは、學者が此の點に氣付いたがため、今日では方言の研究は國語學の最も重要な部門となつてゐるのである。わが國における各般の文化の發達は全國一様化の傾向を益々強からしめてゐるが、言語においても同様であつて、各地の方言は急速度とその姿を改めようとしつゝある。今日之を研究し記録して置かなければ、永久にその姿を失ふ恐れがある。これ今日方言研究の急務なることが叫ばれてゐる主な理由である。

方言研究の第二の目的は之によつて國語の歴史的研究に資しようとするにある。國語の變遷に伴つて昔時全國的に廣く行はれた標準語であつたものが、後世には僅かに一地方の方言として残つてゐる



場合が少からずある。それ故方言の研究によつて、昔時の言語事實を裏書し、又はその缺を補ふことが出来る。かやうな立場の方言研究はわが國では平安朝末より今日に及んでゐるものであるが、その最も盛に行はれたのは徳川時代であつた。ひとりわが國のみでなく、西洋においても古語研究を動機として方言研究が起つたのである。

方言研究の第三の目的は國語學の實際的部門に屬する事項であるが、その研究の結果を標準語の制定に資しようとするにある。標準語を制定して之によつて國語の統一を計るのは一國の文化政策として重要な事業であるが、その目的のためには先づ各地の方言を研究して國語の現状を明らかにする必要がある。その研究の結果に基いて初めて標準語の制定が可能となるのである。

二、方法 方言の研究には國語學・言語學の知識を基礎とすべきであるが、尙補助的學科として歴史學・心理學・地理學・民俗學等を必要とする。而して豫備的知識として最も必要なのは音聲學・文法學に關する事項であらう。

方言の研究の部門には音聲・文法・單語・言語形態が主要なものである。各部門の状態を明らかにする具體的方法としては方言資料の整理と實地採集との二種がある。或る方言の過去の状態を知るには、その方言の過去の調査資料を蒐集し、その内容を整理すれば、その方言の性質・系統を大體知ることが出来る。併し方言の研究において最も効果ある方法は實地採集である。實地採集には研究者が自

らその地に臨んで採集する所謂臨地採集と、研究者が特定の設問事項を作つて、その答案を目的の地に求める所謂通信採集とがある。理想的には臨地採集が最良の方法であるが、之を普く實行することは困難な場合が多いから、便法として通信採集も必要である。要するに、或る特定の土地の方言の諸相を明確ならしめるためには臨地採集を行ふべきであり、廣い地域に亘つてその方言の區劃或は系統を知らんとする場合には通信採集の方が有効であらう。明治三十八九年代に國語調査委員會において行はれた全國的な方言調査(音韻調査報告書、口語法調査報告書)の如きは通信採集によつたものである。現今の方言學界においても此の二種の方法が並び行はれてゐるやうである。採集された方言事實け之に比較研究を加へ、その間に存する異同を明らかにし、その性質・分布・系統を示さなければならぬ。斯くして最後には方言分布圖・方言區劃圖が作制されなければならないのである。

文獻 國語學精義(保科孝一) 大日本方言地圖・國語の方言區劃(東條 操) 方言採集手帖(同上)

方言學概説(東條 操 國語科學講座) 及び前項參照

### 二三三 日本帝國の領土内に存する各種の言語を列舉せよ

日本帝國の領土内に存する言語は、大約左の如きものである。

一、日本語 日本民族の使用する言語である。即ち同胞九千萬人によつて使用されてゐる國語で

ある。此の中には内地語に對して沖繩縣に行はれる琉球語も含まれてゐる。鹿兒島縣大島から南方の海上に連る沖繩諸島の住民約百三十萬人の言語は日本語の中に入れるべきか、また別の國語と見るべきかについて種々の見解があつたが、言語學上琉球語は日本語と祖先を同じくすることは疑のないところで、琉球語は日本語の中に含まるべきものである。

**二、朝鮮語** 朝鮮半島に居住する朝鮮民族約二千三百萬人の使用する言語である。朝鮮語はウラルタイ語族に屬する言語であると推定されてゐるが、日本語と同一系統なりや否やについては、種々の意見があつて未だ定論を得るに至らない。兩者の關係についてはアストン・金澤庄三郎博士の研究があつて、兩者の間に何等かの關係は認められ、語詞の順序の如き、ラ行音或は濁音を語頭に置くことを嫌ふが如き類似點はあるが、數詞の組織の如き根本的の相違もあつて、兩者の關係については未だ明確に斷定出来ない。

**三、臺灣語** 臺灣に居住する支那人約四百五十萬人の使用する支那語である。同島にあつては所謂本島語と呼ばれるものであるが、之は南方支那の廣東方言の系統に屬する支那語である。臺灣には此の他にアミ族その他の蕃人の使用する生蕃語がある。生蕃語は南洋系統の語で、言語學上オストロアジア語族の中でインドネジャ語と稱する語團に屬するものである。

**四、アイヌ語** 北海道本土及び屬島に居住するアイヌ族約一萬五千人の使用する言語である。今日

では極めて微々たる言語であるが、上代にはアイヌ族は内地の關東地方・東北地方に居住してゐた關係上、アイヌ語と日本語との交渉は相當密接なものがあつたと想像される。今日東北地方の地名にアイヌ語の多く残つてゐる點より見ても容易に判斷されることである。

**五、樺太** においては、日本語の他にアイヌ族のアイヌ語、ギリヤーク族のギリヤーク語などが各々小部分に行はれてゐる。

以上の他、日本帝國の領土ではないが、日本帝國と密接な關係を有する滿洲國には滿洲語が行はれてゐる(滿洲國の北部にはツングース族のツングース語がある)。又、日本帝國の委任統治の下にある南洋諸島、即ちカロリン群島・マーシャル群島にはそれ／＼カロリン語・マーシャル語が行はれてゐる。之はオストロアジャ語族の中でメラネシヤ語と呼ばれる語團に屬する言語である。

**文献** アイヌ語辭典(ジョン・バチエラー) 日鮮兩國語同系論(金澤庄三郎) 言語學概論(安藤正次)

言語學概論(新村 出) 言語研究(金田一 京助)

### 二三四 關東方言と關西方言との相違點を述べよ

國語の方言區劃については從來種々の説が現れてゐるが、最も大きく之を分てば關東方言と關西方言の兩方言になる。此の意見は古く徳川時代に越谷吾山の「物類稱呼」などに見えてゐるが、近くは明

治三十九年に公にされた文部省の國語調査委員會の口語法調査報告書の中に一層明瞭にその意見が示されてゐる。即ち全國の方言を最も大きく分類すれば、東部方言と西部方言との兩方言となる。而してその境界線は越中・飛騨・美濃・三河の東境に沿うて引かれる。北は越中と越後の國境の親不知の嶮、南は三河と遠江との國境の濱名湖、此の兩地點を結ぶ線が兩方言の境界線であるとすのである。此の境界線は北陸道方面では概して固定してゐるが、東海道方面では始終移動する傾向があつて三河・遠江の如きは屢々その所屬を變ずることがあり、また東山道方面においても多少の出入がある。

東部方言の中には關東方言と東北方言とを含み、西部方言の中には關西方言と九州方言及び四國方言とを含んでゐる。關東方言は東部方言の代表、關西方言は西部方言の代表、と見られるのであるが、兩者の主要な相違點は語法の上に見られるのである。

國語調査委員會の口語法分布圖に就いて見るに、

〔關 東〕 〔關 西〕

〔補 説〕

○打消の云方 ナイ ヌ

ナカツタ ナンダ

ナイデ イデ

ナケレバ ネバ

○例へば關東では「行カナイ」、「行カナカツタ」、「行カナイデ」、「行カナケレバ」と云ふのに對して關西では「行カヌ」、「行カナンダ」、「行カイデ」、「行カネバ」と云ふのである。

○指定の云方

ダ           ヂャ、ヤ  
ダツタ       ヂャツタ、ヤツタ  
ダラウ       ヂャラウ、ヤラウ

○未來の云方

受ケヨウ   受ケウ  
來ヨウ       來ウ

シヨウ       セウ

○命令の云方

ロ           イ、ヨ

○活用形

拂ツタ       拂ウタ  
寒ク           寒ウ

以上の諸點が關東方言と關西方言との語法上の主要な相違點である。之は國語調査委員會の口語法分布圖によつて初めて明らかにされたことで、東西二大方言の對立は學術的に證明されたものと云ふべきである。尙、之に類似した現象は、アクセントの分布においても現れてゐる。東京語を中心とする東部アクセントと京阪語を中心とする近畿アクセントとの境界線は、ほど埤斐川に沿うて引かれると云はれてゐる。

○例へば關東では「雨ダ」、「雨ダツタ」、「雨ダラウ」

と云ふのに對し關西では「雨ヂャ」、「雨ヤ」、「雨ヂャツタ」、「雨ヤツタ」、「雨ヂャラウ」、「雨ヤラウ」と云ふ。

○命令の云方で例へば關東では「見ロ」と云ふのに對し、關西では「見イ」または「見ヨ」と云ふ。

○活用形においては關東ではハ行四段動詞の連用形に促音便が使用されるに對して、關西ではウ音便が使用される。また關東では形容詞の連用形は原形で使用されるに對して關西ではウ音便が使用される。

文献

國語調査委員會編口語法調査報告書及び分布圖

大日本方言地圖・國語の方言區劃(東條 操)

## 二二三 國語史は何期に分つべきかを示し、且つその理

### 由を述べよ

國語の位相の相違が最も著しく感ぜられるのは文語と口語とであるが、文語は大體に於て古代國語を反映し、口語は近代國語の姿を見せてゐると認められるから、國語史は先づ古代と近代との兩期に分たれるものと思ふ。而も言文二途に分れた事の著しく感ぜられるのは室町時代である(例へば謡曲と狂言の詞章の對立の様に)から、古代と近代とは、ほゞ南北朝時代に於て區劃されるものかと思はれる。文語・口語の相違は文末に來る指定の助動詞で最も著しく感ぜられるが、文語形の「なり」が「である」「ぢや」「だ」等の口語形を取つて現れ初めるのも室町時代に見られる。

古代は、更に奈良朝(及びそれ以前)・平安朝(院政期以後を除く)・院政鎌倉時代の三期に分ち、近代は、室町・江戸・東京時代の三期に分つのが、國語そのものの變遷に照して適當であらうと思ふ。今、國語を音韻・文法・語彙の方面から觀察しながら、此の様に六時期に分ち得べき理由を述べて見よう。

平安朝時代は、我が國語の文法形式が古典的に最も整備した時期で、係結の呼應なども見事に行はれたのであるが、奈良朝時代は例へば形容詞の已然形語尾ケレが現れてゐないとか、下一段活用動詞が存在しなかつたとか、代名詞の他稱(カレ)が充分發達してゐなかつたとか言ふ事が指摘せられるが、

音韻方面は却つてよく固有國語の面目を發揮し、阿米都知歌が示す四十八成音(音節)をよく保持したばかりでなく、エキケコソトノヒヘミメヨロの十三類の假名が示す成音には二種類の區別が存した(恐らく直音と合拗音との相違であらう)のであつたが、平安朝には殆んど全くその區別が失はれ、普通の成音の種類も伊呂波が示す様な四十七成音となつた(ア行のエとヤ行のエの區別がなくなつた)ほかに、漢字音の模倣によるのか、イ音便・ウ音便・撥音便等が起り(撥音の成立と用言活用形への變調を意味する)、又、ハ行音のワ行音への轉訛(ㄨ)が語頭以外で始まつたのである。語彙の方面でも、奈良朝時代にはさほどでもなかつた支那文化の影響が平安朝には著しく現れ、漢語が假名文の物語の中にも浸潤し、春宮・女御・更衣・隨身・装束・格子・几帳等の名詞の他、「懸想す・對面す・案す・念す・具す・執念し・切に二なき」など、他の品詞にも及ぶやうになつた。

院政鎌倉時代は、武士が勃興して政治の實權を握る時代であるが、國語にもその武士氣質が反映し、音韻方面では音便現象が益々盛んとなつて、新たに促音便も起り、それと共に所謂半濁音Pも行はれ(例へばアハレはアツバレとなる)、平安朝期には寧ろ避けてゐた開拗音(ジャウヅクをサウジクといふ様に)が此の時期には盛行し、ハ行音の轉訛はワ行音から更にア行音にまで進み、従つて成音の種類は四十七音より更に減少する徵候を見せ(ワ行のキ、エ、ヲとア行のイ、エ、オとの區別がなくなり)、假名遣は甚だしく混亂して、定家假名遣の制定を必要とする様になつた。

文法方面でも、用言の連體形が往々終止に用ひられる事となつて、係結の呼應に動搖を見せ、形容詞のイ音便も次第に一般化し、二段動詞は一段動詞に移る傾向を示し、代名詞では御邊・御身・貴殿等の



尊稱と共に、シャツ・キャツ・アヤツなどの蔑稱も起り、頻りにワを冠して對稱をさすワ君・ワ主・ワ殿・ワ僧・ワ人・ワ男・ワ女等も行はれ、語彙方面にも武家語とも稱すべき見參・自害・成敗・下知・郎黨等の漢語の盛行と共に、撥音に富む南方支那音の行・行宮・行脚・看經・普請・行燈・鈴等が輸入された。

室町時代は、武家時代たる事に於て院政鎌倉時代の延長であり、音韻方面には大した變遷はない様に見えるが、口蓋化現象が次第に著しくなつた結果か、ジ・チとズ・ヅとの間に混亂を一部に惹き起し(吉利支丹本などではまだ  $\text{t}$  と  $\text{ts}$ 、 $\text{t}$  と  $\text{ts}$  と  $\text{nt}$  と  $\text{nts}$  として明に區別せられたが)、ハ行音は重唇音 (f) から輕唇音 (h) に移行する兆候を見せ、又末期に於ては西歐語の輸入に伴つて、語頭に半濁音 (p) の存する語も行はれ始めた。文法方面では、用言の終止形と連體形とは殆んどその區別を失ひ、従つてラ行變格、ナ行變格等の動詞も四段活用に歸し、係結も亂れ、形容詞の活用語尾も凡そク・イ・ケレに歸し(従つて、これも二種の活用が二種として取扱ひ得る事になり)、二段動詞の一段化も顯著となり、指定の助動詞にデアル・チャ・ダの現れ初めた事は、前に指摘した通りである。丁寧な言ひ方としては、マスの前驅形と見られるマラスル・マイルスも行はれた。代名詞では、自稱にワタクシ・コナタなどを用ひ初め、對稱にはワガミ・ワゴレウ・オマヘ・ソモジ等が現れ、他稱にはコッチ・ソッチ・アッチ・ドッチなど促音化したものも行はれ初めた。語彙方面では、代名詞ソモジが代表する様に御所詞に淵源を有する女房詞が発生したのは注目を要する。その背後には應仁の大亂や皇室の式微の存した事を窺はせる。

江戸時代は、又室町時代の延長で、文法や音韻の方面には、大きな變化はない様であるが、ジヂ・ズヅの混亂は殆んど一般化し、ハ行音もフ以外はほゞfからhへの移行を遂げ、長母韻オーの開合の兩別(室町時代にはoとoとを區別した)をも失ひ、合拗音クワも次第に直音化するに至つた。文法方面では、係結の呼應は全く失はれ、二段動詞の一段化もその移行を遂げ、指定の助動詞にはデスが現れ、丁寧な言ひ方にはマスを使ふ事も榮え、對稱の代名詞にはアナタが用ひられて、アントといふ轉訛形を生み出す事になつた。語彙方面では、その時代を反映して、西歐語として前期にはポルトガル語・スペイン語、中期にはオランダ語、後期にはイギリス語其の他からの輸入語があり、又町人語とも言ふべき相場・證文・印判・浮世・川柳・傾城・通人等が榮え、旗本武士の六方詞、通人連の通人語、遊女等の遊女語(その特徴をとつて、ア)等も出現した。

東京時代は、音韻や文法方面では江戸時代と區別する事は困難であるが、語彙が受けた重大變化によつて、之を江戸時代から分たねばならない。音韻方面では前期の傾向を強化して、ジヂ・ズヅ・クワカ等の區別は失はれ、ハ行音は悉くhに歸し、外國語音の表記としてヴ・テイ・ツェ・ファ等の表記法が普及する事になつた。代名詞として自稱に「僕」や「吾輩」などが行はれ、對稱の「貴様」や「お前」がその敬意を失つたのは、漢學書生層が擡頭し四民平等の時代となつた事を反映するものであらうが、歐米語(特に)の直接輸入語及び翻譯語が大量的に生産されたのは、前代に殆んどその比を見ない

(今一々此等を例示する)。最近、父母を呼ぶのにパパ・ママを以てし、他稱代名詞として彼女・彼氏などが一部に流行するのは、歐米模倣期とも稱へるべき東京時代の一特徴を物語るものであらう。

文獻 中等教育國語沿革大要(山田孝雄 絶版) 國語史概説(吉澤義則) 國語學概論下(橋本進吉 岩)

波講座日本文學) 國語音韻論(金田一 京助) 國語音韻論(菊澤季生) 日本文法史(小林好日)

日本文學大辭典(國語史)及び「國語」の項)

### 二二六 江戸時代における國語辭書の重なるものに就いて述べよ

### 二二七 徳川時代に現れたる國語上の辭書を舉げよ

江戸時代の國語辭書はやはり國語意識發達の系流に於て現れた。即ち和歌・連歌の學の方面から松永貞徳の「歌林樸櫟」、有賀長伯の「和歌八重垣」が早く現れたのであるが、貞享二年には父盛徴の遺志を繼いで荒木田盛員の「鸚鵡抄」が百卷、語數二萬二千餘、語の第二字までいろは順の排列で著された。國學の勃興と隆盛とは古語の研究を進め、寶永二年には日本書紀を初めとして詩經・文選の類に至る二十餘部の書から漢字の訓を集めいろは順に排列した海北若沖の「和訓類林」が出来、又、萬葉集を主として古事記から續詞花集頃までの言葉五十音順に集めて解釋した楫取魚彦の「楯の燻手」や中古語を五十音順に集めた清水濱臣の「語林類葉」等も作られたが、

(二) 一般辭書 として最も代表的な勝れたものは「和訓栞」「雅言集覽」「俚言集覽」である。

**和訓栞** 谷川士清の著、九十三卷八十二冊。前編・中編・後編に分ち、各編ア行からワ行まで(オの所屬を誤つてある)の語を収め、第二字まで五十音順に排列・解釋してゐる。凡例には編纂の用意を述べ、國語に關する種々の問題に就いて記してゐる。語彙の範圍が廣くて、名詞だけでなく其の他の品詞を含み、方言・俗語をも採録した上、その解釋が詳密である事は注意すべきである。國語辭書らしい體制の國語辭書として最初のものと言はれる。安永六年・文化二年・文政十三年・文久二年・明治十六年に順次全編が刊行せられた。明治三十一年井上頼閑・小杉楳邨が之に増補訂正を加へ排列を整理して「増補和訓栞」を著はした。

**雅言集覽** 石川雅望の著、五十卷二十一冊。歌文を作る際雅言を誤らずに使ふ爲に主として中古文學から正しい用語例を豊富に集めたもので、語釋は目的でないから簡單である。いろは順で、「い」「か」は文化九年、「よ」「な」は嘉永二年に刊行され、以下は寫本であるが、中島廣足が全體に亘つて増補訂正をしたものが明治二十年に「増補雅言集覽」(三冊)として刊行された。

**俚言集覽** 著者は村田了阿と言はれるが疑問があり、太田全齋かといふ説がある。「雅言集覽」に對し主として近世の俗語・方言を集めて用例を示し解釋したもので、口語は次第に顧みられては來つゝも猶ほ卑しいものとされた時代に、斯うした辭書の作られた事は特筆される。その組織・排列は五十音

の横列による特殊なものである。江戸時代には刊行されず寫本で傳つて居たが、明治三十三年井上頼  
園・近藤瓶城が「増補俚言集覽」(三冊)として刊行、語彙・出典・解釋に増補を加へ、普通の五十音順に  
改めた。

此等のほか當時の口語による註釋法と同じものが辭書にあつても行はれた。鈴木脈の「雅語譯解」、  
鹿持雅澄の「古言譯通」、足代弘訓の「言葉の敷波」等の雅俗語對譯辭書が之である。

(三) 特殊辭書 として、(1)語源辭書、(2)假名遣辭書、(3)方言辭書がある。

(1)は松永貞徳の「和句解」、貝原益軒の「日本釋名」を経て新井白石の「東雅」が著しい。

東 雅 享保二年成、明治三十六年大槻如電が諸寫本を校合して刊行したのが刊本の最初である。

日東爾雅として、特に國語の名詞に就いて語源研究をしたもの。二十卷中、第一卷は總論、第二卷以  
下は「天文附歲時」から「蟲豸」まで十五の部門に分つ。總論は語源研究に關する態度方法を述  
べ、頗る卓見に富んでゐる。具體的な一々の場合には未だしい所があるが、全體として勝れた語源研  
究書と言はねばならない。

(2)は定家假名遣の二つの發展方向として通則化と辭書化とがあり、江戸時代に入つて寛文六年に荒  
木田盛徴の「類字假名遣」、元祿四年に「初心假名遣」(著者未詳)、元祿十一年には青木鷺水の「萬葉假名遣」  
が刊行された。契沖は新しい研究と自覺に立つて「和字正濫鈔」「和字正濫通妨鈔」「和字正濫要略」

を著したが、その假名遣辭書の性質を進めて復古假名遣の足場を確實にしたのは「古言梯」である。

**古言梯**

楫取魚彦著(明和元年八月成、二年五月刊行)、總語數一八八三語の中、文献の明記の無いものは僅かに九八語、

資料としても「新撰字鏡」等の新資料が加へられた。次いで之に補訂を加へた種々の書——村田春海「假字拾遺」、村田春海・清水濱臣「増補標注古言梯」、市岡猛彦「雅言假字格」及び同拾遺、山田常典「増補古言梯標註」等が著はされたが、尙、寺田長興の「(嘉永三)天津可豆衛(年刊)」等も注意すべきものである。

(3)は越谷吾山の物類稱呼である。安永四年刊、五卷、天地以下言語の七門に分つて各門中の各標語の下に諸國の方言を蒐集列舉し、時には古書に徴して語源の考究を試みてゐる。その集録の範圍の廣さ、方言辭書の體制を持つことは注目に價する。又その方言に關する理論も非凡なものがある。

**文獻**

一般國語學史の辭書に關する章節

國語學通考(安藤正次)

國語學史要(山田孝雄)

日本文學

大辭典(「辭書」の項)

## 二 國語學史

### 三六 國語學は如何にして發達したか

國語學は、我が國語に對する自覺反省を基礎として發達し來つたものである。而して、國語に對する自覺反省が起るのは、他國語に接觸するとか、前代語を註解するとか、何等か相違をもつたものと比較する場合を契機としてゐる。實際、我々の祖先は、外國語たる漢文に接して、ヲコト點を附けて之を訓讀し、或は「和名抄」「新撰字鏡」「類聚名義抄」を編纂し、進んでは宣命書を以て國語を記載し、前代語を對象としては、「日本紀私記」「釋日本紀」「萬葉集註釋」を著はし、或は「古今集註」「拾遺集註」「詞華集註」「散木集註」等にも及び、國語に對する自覺を深めつゝあつたが、定家假名遣が現れて假名遣を論じ、五十音圖を組織して音韻法則に及び(勿論悉學の影響の下に)、或は漢字の反切を國語に及ぼして語源を説き(鎌倉時代に、既に名語記がある)和歌連歌作法書(手國説大概抄、其の抄之抄、小路式等)から文法的考察に入り、或は註釋的辭書ともいふべき「綺語抄」「仙源抄」「詞林三知抄」等を編み、國語學の萌芽期を形づくつてゐる。

江戸時代に入つても、その初期の頃は前の時代の繼承に過ぎず、因襲的・傳統的な色彩が濃厚であつ

たが、契沖が出づるに及んで、此の傾向を排し實證的・歸納的な方法を探り、國語學は學問としての成育期に入つたものと見られる。契沖は先づ「倭字正濫鈔」等により古典の記載を典據として假名遣の混亂を是正すべき事を主張し、本居宣長は更に「漢字三音考」「字音假字用格」等によつて字音假名遣を確立し、更に彼の所説を展開して石塚龍麿に「假名遣奥山路」「古言清濁考」等の研究が現れ、語源研究としては貝原益軒の「日本釋名」や新井白石の「東雅」があつて次第に比較考證的な着實な方向へ導き、てにをば研究は宣長の「てにをば紐鏡」「詞玉緒」によつて係結の法則の發見となり、富士谷成章は品詞分類を施し名・裝・挿頭・脚結として「裝抄」「挿頭抄」「脚結抄」等を著はし、活用研究は眞淵の「語意考」、宣長の「御國詞活用抄」等を経て、鈴木服の「活語斷續譜」、本居春庭の「詞八衢」によつて其の大綱を確立し、東條義門の「和語說略圖」によつて活用形の名稱を與へられる事になつた。又、和蘭文典の範疇によつて國語文法を説明する事は鶴峯戊申の「語學新書」(天保)に初まり、從來の研究は一應富樫廣蔭の「詞の玉橋」によつて綜合される。文字論としては新井白石に「同文通考」があり、平田篤胤の「神字日文傳」が現れるのであるが、神代文字説は邪道に陥つた觀があるのに引きかへ、辭書の方面では谷川士清の「和訓栞」、石川雅望の「雅言集覽」、村田了阿の「俚言集覽」等の大著が現れて、五十音順又は伊呂波順をとり、江戸時代に於ける綜合的記述の典型を見せてゐる。江戸時代の國語學は古典解釋を中心とする文獻學的研究の一分枝として認められるに過ぎないもの



であつたが、明治維新以後は、歐米の科學的研究の態度方針を取入れ、國語研究を他の研究の手段としてではなく、直接それ自身を旨指す言語學的方法を以て開拓する事となり、「國語學」の名稱も初めて成立し、獨立の學問としてその存在を主張する様になつた。従つて、明治以後の時期は國語學の確立期とも言ふべきであらう。而して、此の時期に於ては、大槻文彦博士の「廣日本文典」、岡澤鉦治氏の「新式日本文典原理」、山田孝雄博士の「日本文法論」等の著述もたゞ文法論といふ國語學の一面を開拓したに止まり、國語學の綜合的考察は、國語學概論及び國語學史によつて果されるものと考へられ、チャムバレン・パチェラー氏の如き外國人の参加もあつて、琉球語・朝鮮語・アイヌ語等をも研究し、之と比較考察する比較的方法も取入れられ、伊波普猷氏や金澤庄三郎・小倉進平・金田一京助諸博士等の研究があり、又大矢透博士の假名字體變遷の研究や、山田孝雄博士の「奈良朝文法史」「平安朝文法史」「平家物語の研究」、湯澤幸吉郎氏の「室町時代の言語研究」「江戸時代言語の研究」、吉澤義則博士の「國語史概説」、小林好日氏の「日本文法史」、菊澤季生氏の「國語音韻論」等の歴史的方法による研究業績も現れて、前期江戸時代には見られなかつた發展をなしつゝ進んでゐる。

辭書の方面でも、上田萬年・松井簡治兩博士の「大日本國語辭典」、大槻文彦博士の「大言海」等の如く、その出典を明示した歴史的辭典の編纂へと向つてゐる。更に、國內諸方言の研究も盛んに起り、所謂位相論、様式論の分野も開拓されつゝあり、國語學の研究は、最近の所謂國體明徴の主張に

呼應して、益々活氣を帯びるに至つたのである。

文献 國語學小史(保科孝一) 國語學史(同上) 國語學史(時枝誠記) 岩波講座日本文學) 國語學

史(重松信弘) 國語科學講座) 新體國語學史(保科孝一) 國語學史要(山田孝雄) 日本文學大辭典

(「國語學」の項目中「國語學研究略史」)

三二九 新井白石・富士谷成章・本居春庭の國語學に寄與

したる功績に就いて述べよ

三三〇 富士谷成章・本居宣長・本居春庭の國語研究上に

於ける事蹟を舉げよ

新井白石 の國語學への貢獻は、「東雅」(享保三)「東音譜」(享保四)「同文通考」(寶曆十)の三著によつて窺

はれる。中でも「東雅」は語源研究を科學的に確立したものととして、最も重要視されてゐる。當時語

源を説いたものには、松永貞徳の「和句解」(寛文三年)、貝原好古の「和爾雅」(元祿七年)、貝原益軒の「日本釋名」

(元祿十一年)などが行はれて居り、多くは謎を解く様な常識語源論を出でず、益軒の所説は八要訣を説いて

原則としては勝れてゐたにも拘らず、實際の業績は牽強附會に近かつた。白石の「東雅」は主として此の益軒の著作に對する論難を目標としたが、國語の歴史的變遷や地方的轉訛に注意し、語源研究に

は實證的な方法を閑却してはならない事を力説して、「東雅」三十卷の業績はその主張を具體化したものであつた。江戸時代に於ける語源説は、音義説の邪道に陥つたり、今日でさへも往々常識語源論が行はれたりするのに引きかへ、白石の著述は(今日から見れば、猶ほ缺點は多いが)當時に於いては誠に卓絶した學的業績であつたと言はねばならない。

「同文通考」四卷は、第一卷に漢字、第二卷に神代文字、第三卷に假名及び呂波、第四卷に國字等、當時に於ける文字に關する知識を綜合し得た努力は大に認めねばならぬ(神代文字説の虛妄を看破し得なかつた等の缺點はあるが)。又「東音譜」は東亞の諸國音を假名を以て表現しようとした企てであつて、聲音學の方面に於ける彼の造詣の程を窺はせるものであらう。

**富士谷成章**の名著は「挿頭抄」(明和四年成)「脚結抄」(安永七年刊)及び「裝抄」(未定稿)の三者で、國語の文法研究に一新機軸を開いた重要なものである。彼は品詞分類に於ても、之を名・裝・挿頭・脚結の四大別を文の職能及び配列の上から區別するといふ適切な方法を取つたばかりではなく、その細分に當つても「裝抄」「脚結抄」等に見られる様な見事な分類をなし、活用語尾の分析と他の語との承接も實證的な方法によりながら、明快な組織を立てたのであつた。彼の用言(裝)研究の結論を示すために、「あゆひ抄」に掲げた裝圖を舉げて見ると、次頁の表の通りである。

之によれば、裝を更に事(動詞)と狀(形容詞)とに分ち、その事を更に事(動詞)と孔(存在詞)

裝														
事														
在	孔	事												
遙	有	越	恨	落	捨	思	打	見	得	寢	爲	來	居	
はる かな	あ	こ	うら	お	す	おも	う	み	う	ぬ	す	く	う	本
り	り	ゆ	む	つ	つ	ふ	つ							末
る	る	ル	ル	ル	ル			ル	ル	ル	ル	ル		靡引
り	り	え	み	ち	て	ひ	ち	み	え	ね	し	き	る	往
れ	れ	え	み	ち	て	へ	て	み	え	ね	せ	こ	る	目
ら	ら	やえ	み	とち	て	ほは	た	み	え	なね	せ	こ	る	來
		レ	レ	レ	レ			レ	レ	レ	レ	レ		靡伏
														伏目
														立本
有末有引		有末有靡			有末無靡			無末有靡				無末無靡		

とに、また狀をば在(形容動詞)と芝・鋪しきま(ク活・シク活の形容詞)とに分けてある。又、横の列では語根(本・語幹末)及び活用形を示し、ル・レの附くか附かぬかをも巧みに靡なびき・靡伏なびきふし等の名稱を以て説明してゐる。又、此の靡なびきの有無などで活用形を區別してゐるのも興味があるが、その實例から見て、動詞も、四段・カ變・サ變・上二段・下二段・上一段・ラ變等を區別してゐた事が分り、裝抄によれば更

状		芝	早	はや	し	き	く			け	か	有末有靡
鋪	戀	こひ	し	キ	ク				ケ	カ		

私云鋪には靡といひ、孔在芝には引といふ。又云引靡なき装の末をわたりともいふ。

にナ變をも認めてゐた事が分るが、更に装の脚結ひを受くる圖も用意されて居り、「脚結抄」には、その分類、

連接の他に、係結の呼應にも論及してあつて、研究すればするほど、その卓絶した成果に驚かされる。たゞ副用語たる挿頭に就いては混亂して居り、その他の點でも今日の進んだ状態に比べれば指摘すべき缺點もあるが、確に江戸時代に於ける文法研究の高峰をなすものと言ふべきである。尙、彼が國語變遷の時期を六期(六運)に分つべく主張した點も注目に價する。

**本居宣長** の國語學上の功績も亦頗る偉大であつた。彼の業績は、文法論の上では、「てにをは紐鏡」(明和八)「詞玉緒」(安永八)「御國詞活用抄」(天明二)などがあり、音韻論の上では、「字音假字用格」(安永四)「漢字三音考」(天明四)「地名字音轉用例」(寛政十)などが主著で、隨筆的に書いたものには、「玉霰」(寛政四)「玉勝間」(寛政六)があり、註釋的なものでは彼の「古事記傳」その他數種ある。

さて、「てにをは紐鏡」は三段の係結の呼應を簡明に指摘したもので、係としては「は・も・徒」たの第一類、「ぞ・の・や・何」の第二類、「こそ」の第三類があり、結びとしては、(今日の術語によれば)用言の終止形・連體形・已然形が之に應ずる事を示したものである。「詞玉緒」では此等を實例を擧げて證明しつゝ、なほ他

の助詞にも論及し、古代(奈良)に於ける相違をも指摘した。又、「御國詞活用抄」には、動詞の類別を二十七會に分ち、カキクケの類(一―六、但しナ變、ラ變を別記)・ケククルの類(七―一五、二三)・キククルの類(一六―二二、サ變・ナ變をも含む)・シススルの類(二四、サ變・ナ變)・イイルの類(二五、ケケルを含む)・アヲシの類(二六)・アシの類(二七)の様にしてゐる。活用形や複語尾連接の考察は成章には及ばないが、此の類別には又下一段活用にも氣附いた様な長所も認められる。

音韻方面の考察の精緻な事も、宣長の國語學への貢獻の著しいもので、前掲諸著はそれ／＼其の特色を發揮してゐるが、中でも五十音圖に於けるオ・ヲの所屬を正し、音便現象に組織的考察を與へ字音假名遣を定めたなどは特に顯著なものであり、また石塚龍膺が「古言清濁考」や「假名遣奥山路」を著述する示唆をも與へた(古等)。

**本居春庭** 宣長の研究の不十分な所は、その子春庭により繼承されて、補足發展を見る事になつた。春庭の著述は、「詞八衢」(ことばのやちた)「文化三」と「詞通路」(ことばのかみち)「文政十一年序」とであつて、活用の研究を中心とするものである。而して、活用形の種類をば五十音圖に照して、四段の活・一段の活・中二段の活・下二段の活の名目を立て、變格として、カ行・サ行・ナ行を認め、ラ行變格は四段に組入れてはゐるが、變格たる事實は認めてゐる(下一段のケルを認めず)。また活用形は五段とし(命令形は)、各活用形に接續すべき助詞・複語尾との關係も整備され、ほど今日の文法書に説く所に近いものを作り上げた。その功績は高く評價

しなければならぬ。尙ほ、「詞通路」では、詞の自他・詞の兼用・詞の延約・詞てにをはのかゝる所などを考察した。

文献 二二八項所掲参照

### 三三 本居春庭の國語學に就きて論評せよ

本居春庭の國語學は、固より父宣長の學統を受けたものであるが、恐らく富士谷派の研究からも多少の影響を受けて、我が國語用言の活用に就いての研究を大成したものと思はれる。彼の國語學上の著述は、「詞八衢」(文化三)(年成)と「詞通路」(文政十)(一年序)との二つであるが、特に「詞八衢」の貢獻は著しいものとして認められてゐる。

「詞八衢」は、國語の用言の活用の種類をば、宣長の「御國詞活用抄」が二十七會に纏めたものを、五十音圖に照して、四大別して之に名稱をも與へ、四段の活・一段の活・中二段の活・下二段の活とし、別に變格をも認め、詳説に就いて見ると、その變格には、カ行變格・サ行變格・ナ行變格を出してゐる。又特に項目として出してはゐないが(従つて態度はや、不徹底であるが)、ラ行變格や形容詞の兩活用にも言及してある。たゞ下一段活用「蹴る」を俗語と認めたのが、鈴木脈の「活語斷續譜」や宣長の「御國詞活用抄」にも示してあるのを省き去つたのは、缺點であらう。下二段活用の例として、例へば「得る」に就いて

「え う ろる<sup>エ</sup> ろれ」として、「うる」が俗語でエルとなる事に氣付きながら、「うれ」もエレとなる事にまでは及ばなかつたのも不徹底で、下二段活用の下一段活用化の現象も明瞭には覺れなかつたらしい。「詞八衢」の功績は斯様に動詞を分類したばかりでなく、次に述べる様に動詞とてにをはとの接続を明かにし、その結果を利用して動詞の所屬を明かにすべく、古書にその用例を求めたことである。活用段に就いては、鈴木脰は成章の影響を受けて、之を八段とし、後七段としたが、春庭は命令形を別として、五段にしたのであつた。

今三者の所説を比べて見ると、

成章	來 <small>あらし</small>	往 <small>きみた</small>	本・末 <small>もと へ</small>	引・靡 <small>ひき びびき</small>	靡 <small>なびき</small>	伏 <small>ふし</small>	目 <small>めをへ</small>
七・八等	未來ニテば	四等	一・三等	二 等	五 等		六 等
む・まし ず・ぬ・なく オホスル意ノ 古語ノな ネガフ意ノな	下ノ詞ニ並ベ 連ヌ て・つ・ぬ き・し・けり あり オホスル意ノ	本語ニテキレ スワル と ナゲキノヤ・ な かし べし	下ノ詞ニツマ ク は・も・が よ・か・かも・ かな ぞ・こそ	現在ニテば 古文ば文字ナ クテ其心トナ ル と こそヲムスビ テキレスワル	オホスルコト バ オホスル意ノ よ		



<p>春 庭</p>	
<p>まし ん ぬ じ で ず</p>	<p>む しむ シムノ意ノす</p>
<p>し し ぬ る つる なば けん けり・き て・つゝ</p>	<p>ね ナカレノ意ノ なヲ結ビテキ レスワル、又 そニツゞク</p>
<p>しか し ぬ る つる なば けん けり・き て・つゝ</p>	<p>らん 一種ノなり らし めり ナカレノ意ノ な</p>
<p>より を に まで かな</p>	<p>を・に なり ぞ・の・や・何 ヲムスビテキ レスワル</p>
<p>ども ども ば</p>	<p>こそその結詞</p>
<p>も じ を そ へ る</p>	<p>下知の詞 四段の活にて はそのまゝ、 は二段・一段の 活にては「よ」 も じ を そ へ る</p>

となつてゐて、斷續の關係の説明は脹の方が寧ろ詳しいが、脹の一・三等を一つに纏め、又五十音圖のアイウエオ順に並べて一般に理解され易いものとしたのであつた。成章の命名や、斷續の説明を見れば、各活用段にも適當な名稱を與へてもよささうであるが、それも後人を待たねばならなかつた。「詞・衢」の功績は、宣長の活用研究を發展させて、一方では典據によつて確證しつゝ、他方には一般に分り易い形式を與へた所にある。

尙、「詞通路」では、詞の自他、詞の兼用・詞の延約・詞てにをはのかゝる所などを説いたが、その所説には今日反駁され得るものを存するとしても、その實例を着實に集めた努力は、敬服しなければならぬ。

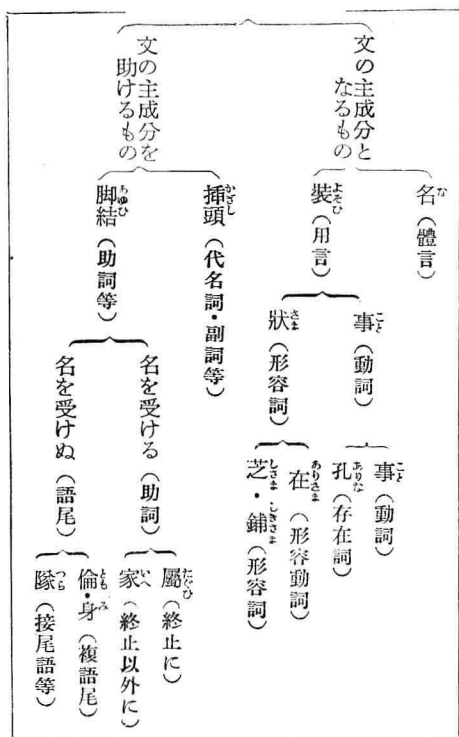
文 獻 二二八項参照

二二三 富士谷成章と鈴木脹との品詞分類を比較論評せよ

富士谷成章の品詞分類の概念は、その著「挿頭抄」(明和四年)「脚結抄」(安永七年)「裝抄」によつて窺ふ事が出来る。それは、品詞を大別して、名・裝・挿頭・脚結の四種とするものであつて、彼自身の言葉によれば、「名をもて物をことわり、裝をもて事をさだめ、挿頭・脚結をもてことばをたすく」とあり、之は文を組立てる役目に就いて言つたもので、今日の術語で言へば、體言は文の題目となり、用言はそれを陳述

し、副詞・助詞はそれらを助けるといふ事になるのであらう。又「頭にかざしあり、身によそひあり、下つ方にあゆひある」と説いたのは、文中に於ける配置に就いて述べたので、かざしは他の語の上に来、よそひは名を受け、あゆひは他の語の下に来る事を言つたものであらう。

更に、装を二大別して、事と状とし、その事を更に事と孔とに分け、また、その状をば在・芝・鋪・かへしさま(返状)と四つに分け、都合装を六大別すると説いてゐる。但、かへしさまは、装の圖



にも見えず、「装抄」の説明も不明瞭で、理解するのに苦しむが、事は今日の動詞に當り、孔は存在詞(普通の文行變格の動詞)に、在は形容動詞(或は存)芝はク活用の形容詞、鋪はシク活用の形容詞に相當する。

挿頭は、副詞の他に代名詞その他をも含み分類も明

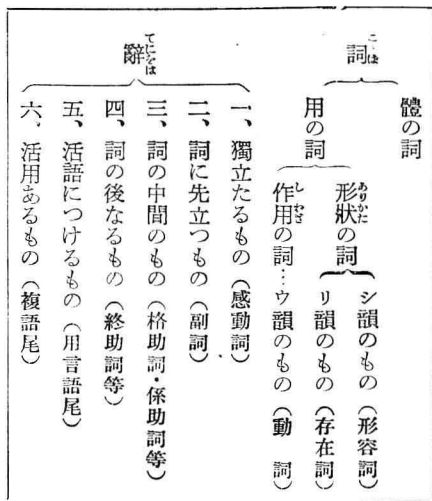
かではないが、脚結の方はよく分類されて、先づ直ちに名を受くるものと受けないものとに二大別し、更に前者をば文の終止に用ひられるもの(屬たぐひ)とそれ以外のもの(家いえ)とに分け、又後者を活用するもの(倫・身とらみ)と活用せぬもの(隊つら)とに分けてある。前者は大體今日の助詞に當り、後者は複語尾(助動詞)・接尾語などに當るやうである。

斯くして、富士谷成章の品詞分類は、大體前頁の表の如く表示出来る。

之に對して、鈴木服の品詞分類は、その著「言語四種論」(七文政年に論じてあるが、之もその題名の通り、四種に分類するのである。かれは、先づ活用の有無によつて二大別し、動かぬ詞を體の詞、はたらく詞を用ひの詞とするが、用ひの詞は更に形狀の詞・作用の詞しわざに分たれる。此の他にテニヲハを立てるが、

前の三種の詞と此のテニヲハとを對へてみるに、三種の詞はさす所あり、テニヲハは指す所なし。三種は詞にしてテニヲハは聲なり。三種は物事をさしあらはして詞となり、テニヲハは其の詞につける心の聲なり。詞は玉の如く、テニヲハは緒の如し。

と説明してゐる。又彼は「雅語音聲考」の著述もある通り、音韻方面からの考察に長じ、用言の分類に際しては、イの韻に終るもの(形カタ詞)とウの韻に終るもの(作サク詞)とに分け、またイの韻に終るものを、更にシに終るもの(詞コト形容)とりに終るもの(詞コト存在)とに分けてゐる。又テニヲハは詳しく六類に分けて、(一)獨



もあるが、大體に於ては、文中に於ける配置や職能に應じて、四大別を試みたのは、よく我が國語の特徴を捕へたものであり、装(用言)や脚結(助詞・複語尾等)の分類の方法も、その着眼点といひ、考證の確かさといひ、大體に於ては勝れたものと言はねばならない。現今、山田孝雄博士のとつてゐる分類法は、此の系統のものと言ふべきであらう。

鈴木服の分類は、まづ詞と辭との對立を見、更に詞を體の詞と用の詞に分ち、用の詞を更に形状の

立して詞を離れたるもの、(二)詞に先立つもの、(三)詞の中間にあるもの、(四)詞の跡を承けてとむるもの、(五)活語の終りにつきたるもの、(六)附くにはあらで跡を承け又中間にもありて切れも續きもして働くもの、としてある。

それ故、鈴木服の所説を圖表に示すと、大體上表の様になるのではあるまいか。

鈴木服は既に宣長及び成章の影響を受けてゐるが、成章は全く未曾有の品詞分類を行つたものであり、その副詞の部には多少缺點と思はれるもの

詞・作用の詞に分ち、結局、體の詞・形狀の詞・作用の詞・てにをはと四大別したのであるが、之も亦適當な方法である。たゞ、詞に於ける體・用の差が活用の有無であつた様に、てにをはの方面でも活用の有無によつて二分したならば(國語鑑始教授の如く、動辭・靜辭ともすれば)、一層論理的に勝れたものとなつたであらうが、彼の語源的考察に災されてか、又は成章の挿頭の説にも多少引きつけられたのであらうか、てにをはを六分した手際は、餘り勝れてゐると思はれない。尙、ラ行變格(存在詞)を、成章は事(こと)(動詞)に編入したのを、脛は形狀の詞の方に持つて來た。成章は活用變化に重きを置き、脛は終止形の末韻に重きを置いたからであらう。成章は、裝や脚結が他の詞と連接する研究を精細にしたが、脛は此の成章の業績と宣長のそれとを綜合して「活語斷續譜」を作つて、かなり好い成績を擧げてゐる。成章は獨創の才に富み、脛は綜合の才に富んだと言ふべきであらうか。併し、脛も語源論の方面では可成り獨創的なものを見せてゐるが、それは此處の問題ではない。

文獻 前掲の諸書。尙、從來知られなかつた成章の「裝抄」は最近發見された。

### 二三三 東條義門の國語研究上の事蹟を述べよ

義門の國語學上に於ける貢獻は、江戸末期に於て、從來の國語學上の業績(主として木居派の)を綜合大成した所にある。獨創的とは言ひ得ないまでも、その綜合途上氣附いた從來の研究の缺陷を訂正増補した所

に、その價值を認める事が出来る。彼は殆んど専門に國語を研究しただけに、その著書も數多く、その主なものには、

言葉の八衢疑問(文化十三年成) 指出の磯(文化十二年成、天保十四年刊) 磯の洲崎(文政三年成、天保十四年刊) 活語指南(文政元年・天保十一年成、天保十二年刊)

山口葉二卷(文政元年成、後の同名の書とは別) 友鏡(文政六年成、天保十三年刊) 玉の緒線分(天保六年成、文政十一年成、天保七年刊) 於乎輕重義(文政十一年成、天保十三年刊) 三部經和

語説(天保三十四年講説) 活語雜誌(天保十三年刊) 山口葉三卷(天保四年成、天保七年刊) 和語説略圖(天保四年成、天保十三年刊) 奈萬之奈

(天保六年成、天保十三年刊) 和語説略圖聞書(天保十三年成) 活語餘論(天保十三年成、第一卷成) 友鏡底の影(天保十二年成)

などがあり、文法論と音韻論とに亘つてゐるが、特に活用研究に意を用ひた様である。

彼は、先づ鈴木服の「言語四種論」の考察を受けて、品詞分類を試み、一切の言語を體言・用言に二大別し、體言は有形體言・無形體言とし、用言は形狀と作用とに各二分したのである。而して語辭(ことば)も體・

用に分ち、體辭は無形體言の中に、用辭はその活用に従つてそれ／＼形狀と作用の兩者に分屬させた事は、「和語説略圖」によつて知られる。(玉鏡總分卷末・活語指南卷頭參照)

さて、その用言に關する総合的な考察は、「友鏡」・「和語説略圖」・「活語指南」によつて窺はれるのであるが、彼は「詞八衢」の擧げ洩らした形容詞及びラ行變格をも組み入れ(ラ行變格は鈴木服の言語四種論に従つて形狀の用言と見る)、又

助動詞(複語尾)の活用をも表示したのである。又、各活用形にも適切な名稱を與へて、將然言・連用言・截斷言・連體言・已然言・希求言としたが、此等は略々今日の文法學者も襲用してゐる所である。義

門が認めて活用ある〔此は〕辭としたものには、多少如何はしいものがあり、此等を普通の用言(形容詞・動詞)と同列に論ずる點に就いては非難もあるであらうが、我が國語に於ける活用ある言葉を網羅し、而も何れにも一々實證を擧げた功績は見逃す譯には行かない。なほ、問題のあるものに就いては、隨筆的な諸著に於て、それ〴〵深い研究の跡を示してゐる。たゞ「友鏡」に於て、宣長の「てにをは紐鏡」を増補するつもりで、係結の解釋を誤つた所がある等の缺點もない譯ではない。

又、音韻論の方面では、「於乎輕重義」に於て、宣長のオ・ヲ所屬論の論證の不備を補ひ、「奈萬之奈」に於ては、宣長が撥ねる音を「ン」一つとした點を正して、む(m)・ん(n)の別ある事を論證したもので、その功績は頗る大きいものがある。その要點は、記紀萬葉等に於て、韻鏡臻山所攝の文字はナ行・ラ行・ガ行等に轉用し、深成所攝の文字はマ行・バ行等に轉用し、その差別は確然として居り、前者がン(n)、後者がム(m)である事は明であるといふのである。之によつて、宣長・秋成の論争に確乎たる判定が下された譯である。義門の長所は、先入見に捉はれず、客觀的な考察を下したといふ學術的な態度に存在する。

文獻 二二八項に同じ

二三四 言靈派とは如何。又其の學術上の價值如何



言靈派とは、國語の語源をその語の有する音聲の本然的性質から當然導かれるものとして解釋しようとする音義説を主張する者の中の一派をさす。保科孝一氏の「國語學史」によれば、江戸時代の末に起つた音義説は、(一)寫聲派(鈴木服)、(二)一行一義派(井面守訓・清原道舊・平田篤胤・鈴木重胤)、(三)一音一義派(大村光枝・橋守部・鬼島廣蔭・堀秀成)、(四)言靈派(富士谷成章・同御杖・高橋殘夢)、(五)神道その他に附會したもの(林國雄・平田篤胤・大國隆正)と五分されてゐたが、「新體國語學史」では言靈派に富士谷成章・黒澤翁滿・富樫(鬼島)廣蔭・高橋殘夢・林國雄等が挙げられてゐる。

富士谷成章は「脚結抄」の大旨の中に「名をもて物をことわり、装をもて事を定め、挿頭・脚結をもて言葉を助く、この四つの位は始め一つの言靈なり」と論及し、林國雄には「皇國の言靈」(文政八)の著書があり、黒澤翁滿は「言靈のしるべ」(天保四年上巻成)を表はし、國語の音韻語法の靈妙な事を稱へたのであるが、之を語源解釋に應用しようとする音義説にまでは深入りしてゐない様である。従つて、此等の人々は、嚴密な意味では言靈派に屬しないものと思はれる。

言靈派に屬する人々としては、高橋殘夢・中村孝道・鍋島誠・富樫廣蔭等を指すべく、その著書には、高橋殘夢に「國語言靈辨明」(七年)、「靈の宿」(天保七年)、「國語本義」、「言靈古言考」(弘化二年)、「言靈名義考」、「言靈東歌考」等があり、中村孝道に「言靈或問」(五年)が、鍋島誠に「眞洲美の鏡」(問成)、富樫廣蔭に「言靈幽顯論」(明治元年)があり、何れも著者不明の「言靈眞洲鏡」(或は中村孝道著述か、菊澤季生氏藏寫本には、「中村主計孝道授與、門人不休亭自譚道人」の奥書がある)の所説を祖述

したものである。高橋殘夢の「靈の宿」に説く所によれば、

「このころ世の中に言靈となふる人、こゝかしこに出来にけり、そは人のもの云聲にたましひ有、其こゑを合せて名とし詞とするが故に、言靈とは云なりけり、夫詞は神のいひはじめ賜ひ、名は神の付賜ひしもの也、あたる處、匂ふ處、響く所もなく、天とも、地とも、人とも、悲しとも、嬉しとも、たゞにいひたまはむやは、名付たまはむやは、皆聲の靈によりていひそめ、號そめし成べし」「詞は合聲の如し、一種一品の能也。五品あひては五種一能也、七種十品皆然、故に言靈とは云也けり、其言葉の道やちまたなり、八千またなれど、其源を尋れば、只言靈の一筋にて、その聲を縫目とも結とも冠辭とも助辭とも遣ひ分るが故に、八千またには成ゆけど、靈をだに聞しりて、かゝるは何と辨ふれば、又たどるべき道もなかりけり」といふ根本觀念から出發してゐるのであつて、その所謂「言靈眞洲鏡」の表なるものは、次の通りである。

初柱	内	牙音	舌音	齒音	唇音	喉音	未言
内柱		輕中重	輕中重	輕中重	輕中重	輕中重	喉韻
中柱	天中道	くぐづ	つるぬ	ふすず	ぶぶむ	ゆうり	齒韻 今言
		かがだ	たらな	はざざ	ばばま	やわあ	唇韻 自言
		こごど	とろの	ほそぞ	ほほも	よをお	

この各言を解釋して、

あ あらはれいつる

靈○ 生名なき印也

お ほかにおこる 靈陽也

う うごきうごく 靈得也

わ しめよする 靈輪也

や とびはしる又安鎮

留柱	外柱	外	
高天	天棚	中津	地棚
きぎぢ	ちりに	ひしじ	びびみ
けげで	てれね	へせぜ	べべめ
ええゑ	ええゑ	いゐい	いゐい
他言	舌韻	既言	牙韻

靈矢也、屋也  
 靈代也、夜也  
 靈真也、間也  
 よよりよる  
 ままはりかこむ  
 などとなし、

如此七十五聲に各の靈をそなへて活用をなすなり、抑も七十五の本敷を按するに、天地物の三つを以て數の根元とす、仰て天を數るに又三つあり、日月星是なり、俯て地をみるに又三つあり、金玉石是なり、物に又三つあり、荒魂ぬる魂くし魂是なり(言靈眞洲鏡)

云々と、天地萬物の解釋に進むので、一種の哲學觀に入つて行くのである。

言語の音聲に象徴的な意義は全然ないとは言はれないけれども、少數の事實から一般的な結論を引き出さうとする態度は非科學的であり、言語を單なる思想媒介の手段と考へず、言語をれ自身が思想(靈)を本有するといふ考へ方は、言語學の領域からは逸脱する所のものである。従つて、此の様な所説には學術的な價値を認める譯には行かない。

文獻 國語學書目解題(赤堀又次郎) 其の他前掲國語學史諸書

### 二三五 通略・延約の説を述べて、其の價値を評論せよ

通略延約の説は、賀茂眞淵が之をその著書「語意考」(明和三年)に唱へてから頓にひろまり、江戸時代に於て語源解釋の際、據り所とした音韻法則は、ほゞ之に歸着したかの觀がある。語源解釋に際しては、之より先、貝原益軒に「日本釋名」(元禄十三年)があつて、自語・轉語・略語・借語・義語・反語・子語・音語の八要訣の存する事を説いてゐたし、古來相通論や反切論は相當に行はれてゐたが、それらの他に新たに延言の一項を加へ、通・略・延・約の四法則に統一したのは、簡單で而も要領がよいので、當時世の耳目を驚かしたらしい。新井白石は「東雅」(享保二年)の序論で、益軒の語源説が言語の歴史的變遷や地方的轉訛を考察に入れない淺薄なものであると批評したが、その際、例へばシグレの説明に「シケといふ語を呼ぶ事の緩くして、ケといふ音を閉きぬれば、クレとはなりしなり」と言ひ、各論で雪の語源を説明した際にも「古語にユキといひしは、即今キヨシといふ詞なり、ユの音を閉きて呼ぶ時は、キヨといひ、キといふ音は轉じてシとなるが故なり」と論じてゐるから、延言の思想は必ずしも眞淵に始まつたものとは言はれないが、「延言」といふ語を使ふと共に、四法則に統括した手際は勝れたものと言はねばならない。その後、或は之を祖述し、或は之を補正したものは少くないが、その著しいものを挙げると、次の如きものがある。

村田春海 五十音辨誤(寛政五年成) 林 國雄 皇國の言靈(文政八年成) 如是觀 和訓考二卷(文政九年序)

本居春庭 詞の通路(文政十二年序) 黒澤翁滿 言靈の指南(天保四年上卷成) 大國隆正 通略延約辨(天保四年成)

鹿持雅澄 雅言成法(天保六年成) 鹿持雅澄 舒言三轉例(天保年中) 平田篤胤 古史本辭經(天保十年成)

さて、通略延約説を、まづ眞淵が擧げた例を取つて説明して見ると、

**通言** には、ア行とワ行とで通ふものが多く、例へば、アの同行で通ふのは、ウツツとヲツツ(現)、ヲソとウソ(嘘)、イヌとエヌ(犬)。ア行とワ行と相通ふのは、アレとワレ(吾)、アタリとワタリ(邊)。ア行とワ行と隔違ひに通ふのは、アモとオモ(母)、アタゴとオタギ、トヲヲとタワワなどがある(眞淵は五十音圖でオ・ヲの所屬を誤つてみたので、少し變な所もあるか)。又、「冠辭考」では「ヒナはタキナカなり、そのタキナカの上下を略き、且キとヒを通はせてヒナと言へり」などの様な説明をしてゐる。

**略言** には種々あつて、高脚(タカアシ)をタカシといふは、カの中にアの音が籠つてゐるからであり、家(イ)をへ、道(ミチ)をチといふ類は、たゞ略いたのである。天(アメ)をア、足(アシ)をアといふ様に、下を略く事もある。サガミの國はムサガミのムを略き、ムサシの國はムサシモのモを略いたのである。

**延言** は、約言の反對で、チルをチラフ、ウツルをウツロフなどといふ類である。ノルをノラへと延べ、更にノラサネと二度延べる事もある。

**約言** としては、アハウミからアフミ(淡海)となり、ユクトイフがユクチフとなる様に簡單なのもあれば、シカシナガラを約めてシカスガと云ひ、二度約めてサスガといふ様な事もある。彼はそ

の理由らしい説明として「右の約言は、其の言長くして云ひ続け難き時に約め云ひ、此の延言は言短

くして其言次<sup>ツ</sup>いで悪ろき時延べて云ふ」と論及してあるので、彼自身は「古書を善く見て」あまり濫用はしなかつたのであるが、その末輩に至つてはかなり僻説に陥つて、ツバクラ(燕)は約せばタカ(鷹)になるとか、「いぬはワンと鳴くものなり、ワンをつぐむればウとなるを、再びのべてイヌといふなり」(通略延約<sup>辨に引用</sup>)の様にも言ひ兼ねまじき有様となつた。併し、言語學者の方面では、さすがにそれを警戒して、本居春庭の「詞の通路」の如きは、よく文献に徴して歸納し、大國隆正の「通略延約辨」の如きも沿革<sup>歴史的變遷</sup>と正訛とに留意する事を怠らぬ様にと注意してゐる。

それ故、此の所謂沿革と正訛とに注意しつゝ、正確な資料を根據として、イヅコからイドコに遷り(通言)、イドコからドコとなり(略言)、ドコがドツコとなり(延言)、ドコヘがドケ(約言)となつたといふ様に、慎重な態度を以てするならば、此の通略延約説も、必ずしも不當ではない。併し、約言の例は實際には甚だ少數であり、又、從來延言と見られて來たものは、實は意味ある複語尾の附く事を無意味な音調上の添加と見て來たものであつた。従つて、從來の音韻説は、新しい音聲學の理論によつて組み立て直す必要がある。その新組織の例としては、金田一京助博士の「國語音韻論」、菊澤季生氏の「國語音韻論」がある。

第五編  
言 語  
學

## 二二六 言語學上、調節作用とは如何なる意味か

## 二二七 言語學上、人の言語と鳥獸の聲との相違點を述べよ

人の言語と鳥獸の聲との違ひは、一言でいへば、調節作用 (articulation) の有無にある。即ち人の言語には音聲と意義との兩方面に此の作用が認められる。

先づ音聲を見ると、例へばハナシといふ語は、ハ・ナ・シといふ三音に分解することができる。そして此のハ・ナ・シといふ三音をばら／＼にして、再びそれを綜合して他の語を作ると、例へばハナ(花)・ナシ(梨)・ハシ(橋)などとなる。かういふやうに我々の言語の音聲といふものは、分析と綜合との融通の利くもので、此の性質を調節作用があるといふ。此の事はトキーフィルムによつて實驗することもできる。之を一般的に云ふと、或る言語には或る數の單位音が認められ、その單位音が一つ或は二つ以上連結して、一かたまりをなし、それが或る意義を表はしてゐるのである。その一かたまりは多くの場合は語であつて、此の語が一つ以上集つて、文をなし、それが實際のハナシとして、用ひられるのである。

鳥獸の聲でも、例へばコケコーローと聞こえをやうに、或る曲節を認めることができるではないかと、いふかも知れないが、一般に鶏といふものは、コ・ケ・ロなどといふ音單位を意識してゐるとは考



へられず、人の言語の場合のやうな分析と綜合を認めることはできない。

而も大切な事は、人の言語には單に音聲の側だけでなく、意義の方面にも調節作用があることである。即ち或る音連結に或る意義が聯合して、意義單位をなす。接辭とか語とかは之であつて、此の意義單位が一つ或は二つ以上連つて、文をなすのである。その連り方は、或る法則内では自由であつて、そこに理性的な分析と綜合との作用が認められる。人の話を聞く場合にも、音聲と意義との聯合した單位を認めながら、一方ではそれらを綜合して、或る文の意義を了解するのである。

鳥獸の聲は、たとへ音的には多少、節があり、或る音連結に或る漠然たる意義を結びつけて、發音することもあらうが、或る單位音の結合に或る意義が聯合し、それを或る法則に従つて、更に連ねて、或る意義を表はすといふやうな、理性的な分析・綜合の作用は認められないと思ふ。近頃でも或る學者が或る鳥の言語を何十語聞きわけたとかいふが、それも恐らくは、まだ言語の發達しない小兒のたはごとの類で、分析と綜合との作用は認められまい。單に音だけのことなら、鸚鵡だつて、殆ど人聲にまがふ發音をすることができるとは、その發音と意義との聯合はルーズで、よくとんでもない時にとんでもないことを口まねるものである。

だが人間の言語にも、鳥獸の叫びに類した叫び聲などがあるが、之が言語として認められたものは、いはゆる感動詞である。

文獻 言語學概論(安藤正次)

言語學通論(小林英夫)

二三八 言語と文字との關係を説明せよ

二三九 形象文字と音標文字とに就いて説明せよ

言語には音聲と意義との二面があり、人間の精神中に、音聲表象と意義表象の聯合として蓄へられてゐる。音聲表象とは實際に口から發せられるその場々の具體的音聲から、細かい變異やニュアンスを除いたもの。意義表象の方も實際の文中に於ける、その場々の具體的な意義から抽象された、觀念又は概念の表象である。

實際のハナシに於いては、話し手は此の抽象的言語を具體的言語として、表現する。即ち或る意義を負ふ音聲表象の實現を意圖して、生理的に音聲器關が活動して、物理的音聲が發生し、と同時にそれに伴ふ抽象的意義が文として具體化する。聞き手はその物理的音聲を耳で聞いて、精神中の音聲表象を呼び起こし、それに伴ふ意義表象に頼りつゝ、その場の具體的意義を了解するのである。

一方、文字には表意文字(ideograph)之を形象文字といふなら不當)と表音文字(phonograph)音標文字とは寧ろ phonetic sign の譯。)に二大別する。前者はエジプトの象形文字(hieroglyph)や漢字などで、後者はローマ字や假名や梵字や朝鮮の諺文おんもんのやうな文字である。ヒエログリフは象形

的要素が濃く、繪文字とも云へるが、漢字には六書の別があつて、純表意的要素ばかりからは出來てゐない。

表意文字は發生的には本來、意義表象を現はして、それと聯合してゐる音聲表象を暗示し、以て言語を表はすものである。だから、或る語の發音は時代によつて變つても、文字は變へなくても不都合は少い。漢字の六書の中、象形・指事・會意の三種の文字は表意的要素から成るが、諧聲文字はその上に音聲表象を示す部分をも持つてゐる(諧聲文字は全漢字の六割)。轉注は意を通はしたものの、假借は全く表音文字化したものである。

表音文字は上述の音聲表象を代表して、それに伴ふ意義表象を暗示するもの。日本の假名は漢字から發達したものであるが、全く表音文字に化し、ローマ字も元を正せば、象形文字から發達して、表音文字となつたものである。同じ表音文字でも、假名は音節文字、ローマ字は單音文字である。

表音文字は本來は一つ一つの音聲單位(單音文は音節)を表はして、それによつて語を示したものであるが、時が經つにつれ、或る語の音聲表象が變つた後も、その語を示す文字遣(假名遣やローマ字の綴り方)は元のまゝにして置く傾きがあり、こゝに文字と發音との食ひ違ひができる。その場合、假名は字體の關係や各語を離して書かない關係などから、一語としての文字のまとまりが悪く、従つて文字表象としての一語の印象が、精神中に残りにくいために、いはゆる假名遣の誤りが生じ易いのである。

さて表意文字は勿論、表音文字でも、ハナシの際の具體的音聲を詳しく表はし得ないもので、特にアクセントなどは表はさない場合が多い。そこで必要がある時には、此の不備を補はうとして學者が工夫したのが音聲記號(phonetic sign, phonetic symbol, phonetic alphabet。發音符號・音標文字とも譯す。)である。但し、音聲記號は文字としては、却つて不適當なものである。「。」「、」「?」「!」などの補助記號も亦文字を助けて、言語の理解を容易ならしめるものである。

文 獻 言語學概論(安藤正次) 國語教育の基礎としての言語學(石黑魯平) 言語學概論(新村出)

言語學原論(ソツシユール著・小林英夫譯)